魔法少女リリカルなのは ties

ハルハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　ｔｉｅｓ

【Ｎコード】
Ｎ８３７１Ｏ

【作者名】
ハルハル

【あらすじ】
私は、一人ぼっちです。
私には、家族がいます。
――でも、私は一人ぼっちです。

俺は、一人ぼっちです。
俺には、家族がいません。
――だから、俺は一人ぼっちです。

小学三年生の女の子、高町なのはは、ある日一人の少年と出会った。
父親のように頼れて、兄のように優しく、弟のように放っておけない……そんな、不思議な人と。
彼は、言った。

「俺の、『家族』にならないか？」

第一話（前書き）

魔法少女リリカルなのはの二次創作です。
キャラ崩壊が前提ですので、そういうのが苦手な人はUターンしてください。
「それでもいいよ！」という方、どうかお付き合い下さい。

第一話

――ピピピピッ、ピピピピッ

部屋に響く電子音。私は、自分の体温でぬくぬくした掛け布団の中から、それを聞いた。

「眠い……」

できることなら、いつまでも心地よくまどろんでいたかったが。

――ピピピピッ、ピピピピッ

「うる、さい……」

布団の中から、携帯電話を置いてあるはずのサイドテーブルへ手を伸ばす。とりあえず、うるさい目覚まし機能を止めよう。外気に手が触れる。季節は六月。暖かくなり、春というよりは夏に近い季節とはいえ、朝はまだ寒い。

「あれ、無い……」

がさがさとしばらくテーブルの上をまさぐる。そうしている間にも、眠気は徐々に抜けていってしまう。

ようやく手が触れた、と思ったら、ごんっ、と鈍い音を立てて落ちてしまった。もういいや。放っておこう。

……眠。

――ピピピピッ、ピピピピッ

「……はいはい、起きればいいんでしょ？」

諦めて、布団から出る。憎き携帯電話は、律儀に健気に電子音を……私を惰眠から引き剥がさんと労働を続けていた。

――ピピ、

電源ボタンを押し、アラームを切る。ついでに時間を見る。午前七時ちょっと。いつもどおりだ。

「あ～～……」

姿見が、そこに映る私の姿が見える。ぼさぼさの栗色の髪の毛。

眠気にしょぼしょぼする目。だらしなく半開きの唇。
「……顔、洗おっと」
面倒だけど……

洗顔し、肩に掛かるくらいの髪の毛に櫛を通す。前髪だけを適当にクリップで留め、朝の準備は終了……ではない。

――かちゃかちゃ
卵をボウルに割り入れ、かき混ぜる。最初は卵の殻が入ったり、飛び散ったり、ロクなことにならなかったけど、今では手馴れたものだ。二年もやっていれば、自然と上達する。
フライパンに流し、形を整える。フライ返しでひっくり返し、オムレツのような、卵焼きのようなものが出来上がる。皿に載せ、ご飯と共にからっぽの食卓の上に運ぶ。
「いただきます」
返事は無い。会話も無い。ただ一人、黙々と箸を動かし、口に入れる。食事というよりは、栄養補給と言ったほうがふさわしいかもしれない。いつものことだけど。
「ごちそうさま」
流しで皿を洗う。一人分の食器なんて、洗うのに二分も掛からない。
「行ってきます」
ランドセルを背負い、鍵をかけてから家を出る。返事は無い。これもいつものことだ。
一人で起き、一人で身支度を整え、一人で食事をし、一人で学校へ行く。

全く持って、いつもどおりの私……高町なのはの朝だった。

『　私の家族　三年二組　高町なのは　』

私のシャープペンシルは、四百字詰めの原稿用紙にそれだけを書き、机の上に転がっていた。

静まり返った教室からは、鉛筆やシャープペンシルが原稿用紙のマスを埋める音がひっきりなしに聞こえてくる。

はぁ……

ため息をつき、頬杖を突く。もう作文なんて書いている気分では無かった。なにせ、タイトルがタイトルだ。私の、最も触れられたくない、自分でも考えたくも無い話題。

『将来の夢』とかだったら、適当に書いてさっさと終わらせるのになぁ……

「高町さん、授業中よ」

担任の女性教師に注意された。

「……はい、すみません」

面倒くさいが、書いているポーズだけは取っておかないとな……

大学を出たばかりの青い志に燃える教師は、私の原稿用紙を手に取り、驚いたような顔をした。

「あら……何も書いていないの？　ダメよ、ちゃんと半分は書かないと」

「……はい、すみません」

書きたくないんです、とは言わない。あくまで私は作文が苦手なんです、とアピールする。だが教師は、いらぬアドバイスをしてきた。

「例えば、お父さんの仕事のこととか」

数年前に大怪我をして、今も病院に入院しています。

「お母さんのご飯が美味しい、とか」

父さんのお世話と経営する喫茶店が忙しいので、私が自分で作っ

ています。

「兄妹とどんなことをして遊んだ、とか」

兄さんも姉さんも店の手伝いが忙しくて、数日に一度しか顔を合わせていません。

「家族で遊園地に行ったとか……そういうの、あるでしょう？」

『あるでしょう？』

まるで、あって当然、無いのはおかしいとでも言いたそうな言い草。頭に、カッと血が上っていき……

ぶちっ、と、何かが私の中で切れた。

「うるさいっ！！！」

教室中の視線が、私に集まった。

「た、たかまち、さん？」

呆けたような顔で、私を見る。

「……ッ！」

机の中の教科書を、ノートを、筆箱を、投げつけるようにランドセルの中に放り込む。椅子を蹴立てて立ち上がり……机の上の原稿用紙を、びりびりに破り捨て、教室を飛び出した。後ろから、誰かが私を呼び止めるような声が聞こえたが、聞こえないフリをした。

はぁ……。怒りを消費して残ったのは、虚しさと、面倒くささだけだった。教室を飛び出し、教師を撒いたまではいいが、どうせ月曜日にはまた顔を合わせるのだ。今のうちに、言い訳を考えておこう。

「はぁ……」

携帯電話で時間を確認する。三時間目の授業を脱走したので、まだお昼前だった。

（家、帰りたくないなぁ……）

広い家。父さんと母さんが、家族みんなで住むために買った家。でも、誰もいない家。

家に向かっていた足は動くのをやめ……くるっと反転した。

何度も通った道を通り、目的の場所に向かう。

『海鳴市立図書館』。それなりに新しく、小奇麗な外観の図書館だ。

入り口で、カウンターのお姉さんに怪訝そうな顔をされた。ほぼ毎日通っていれば、顔も名前も覚える。柳瀬美穂さん、だった気がする。

「あら、高町さん」

「こんにちは、美穂さん」

「こんな時間に来て……学校は？」

柔和な笑みで聞かれた。先生を怒鳴りつけて飛び出してきました……なんて、言える筈も無く。

「……体調が悪くて早退したんですが、歩いていたら治ったので」

我ながら、ひどい言い訳だ。明らかに嘘だと見抜かれる。

「あら、そうなの」

だが、美穂さんは何も言わなかった。何かを見透かされているようで、少しムッとしたが、何とかそれを顔に出さずに済んだ。適当な数冊の手に取り、閲覧スペースに向かう。

名探偵が事件を解決し、全裸のマラソン男が親友と抱擁し、一人称が我輩の猫が浴槽に水没した頃。

「高町さん、閉館よ」

美穂さんが私の肩を叩いた。

壁の時計を見れば、午後の五時を回っていた。席を立ち、本を書架に戻す。美穂さんに見送られ、夕焼けの中に足を踏み出した。公園の近くを通る。丁度、そういう時間帯なのか、親が子供を迎えに来ていた。

――あ、お母さん
――そろそろご飯よ。帰りましょう？
――うんっ！
聞こえてくるのは、楽しげな家族の会話。
「……っく」
鼻の奥がツンとする。考えるな。考えたらダメだ。
あんな小さい子供に嫉妬するなんて、みっともないにも程がある。
でも、駄目だった。
――何で私には、御飯を作ってくれるお母さんがいないんだろう。
――何で私には、キャッチボールをしてくれるお父さんがいないんだろう。
――何で私には、一緒に遊んでくれるお兄ちゃんとお姉ちゃんがいないんだろう。
「……」
ぎゅっと目を瞑り、駆け出した。あれ以上、見ていたくなかった。
妬ましさでごっちゃになった頭のまま、走り出した。目を瞑りながら走ったら危ない。そんな当たり前のことさえ、考えていられなかった。
どんっ。
そして案の定、誰かにぶつかった。べた、と尻餅をついてしまう。
「お、悪い。大丈夫か？」
ぶつかった――多分、高校生くらいのお兄さん――は、私の両脇に手を差し入れて立ち上がらせた。
「……すみません。ぼうっとしていました」
できるだけ目を合わせないようにしながら、頭を下げる。服についた土ぼこりを払い、頭を下げる。
「そうか。気をつけてな」
「はい、すみませんでした」
これは、ほんの偶然。私と、この見知らぬお兄さんとの、互いの長い人生で唯一の邂逅……だったはず。

『誰か、僕の声が聞こえますか？』

――でも、違ったんだ。

「……何、今の？」

「……君も聞こえたか？」

辺りを見回すが、他の人達は何も聞こえていなかったらしく、すたすたと歩いていく。

『誰か、僕の声が聞こえますか？』

「まただ」

お兄さんが言ったとおり、また聞こえた。

「あっちの雑木林から、みたい」

最初は普通に歩き、次第に早足になり、とうとう全力疾走した。

何がこんなに私を駆り立てるのかは分からない。分からないが……何かが私を待っている。そんな気がした。

「……あそこ！」

そして、見つけた。雑木林の、割と開けた場所。

「ん？　……何だこれ」

お兄さんが抱き上げたのは、黄色と茶色の毛並みの……

「フェレットですよ」

そう、フェレットだった。

「怪我はしてないけど……弱ってるな」

このあたりの地図を頭に思い描く。たしか、少し先に四階建ての大きな動物病院があったはず。

私は、お兄さんを先導して歩き出した。

「衰弱していますが、命に別状はありませんよ」

優しそうなお爺さんは、聴診器を外し、そう言った。それはよかった。確かによかったのだが……別の問題が発生した。

私は、小学生だ。お小遣いは年相応の金額しか貰っていない。こんな立派な病院の診察料を払えるのだろうか……。私はお財布を取り出し、金額を確認した。千五百円。ペットの診察料がいくらなのかは知らないが、きっと足りないだろう。

ぽんぽん、と肩を叩かれ、身体をびくっと跳ねさせてしまった。

「な、なんですか？」

「待合室にいろってさ」

「……はい」

お財布をポケットに仕舞い、お兄さんの後についていく。

待合室のソファはふかふかで、とてもすわり心地がいい。

「飲みなよ」

お兄さんが、そこの自動販売機で買ってきたらしいジュースをくれた。

「お金、払います」

「子供は気にしないでいい」

「……では、ありがたく」

こくこく。ミルクティーの甘さが口いっぱいに広がる。お兄さんはブラックコーヒーを買ったらしい。よくあんな苦いの飲めるなぁ……以前、冒険して飲んでみたことがあるがのだが……あれは、ありえない。

早々に飲み終えたらしいお兄さんは、がきょっ、とスチール缶をひねり潰した。

「そういえば」

「はい？」

お兄さんは手持ち無沙汰になったのか、私に話しかけてきた。

「君、名前は？」

……あー、全然気にしてなかった。

「高町なのは、です」

お兄さんは、にっこりと笑った。どこか子供っぽい、無邪気な笑顔だった。

「俺は吾妻秀人。よろしく、高町さん」

その笑顔は、最近ではめっきり見なくなった父親の笑顔に、どこか似ていて。

「なのは、です」

だから、だろうか。

「え？」

父親に似た男の人に、名前を呼んで欲しい。そんな、馬鹿げた我侭を考えてしまった。

断ってくれるなら、それでもよかった。でも。

「なのは、って、呼んで、下さい……」

声は期待に震え、途切れ途切れになってしまう。いつもの癖で、下を向いてしまう。

呆れているだろうか。馴れ馴れしいと思われているだろうか。鬱陶しく感じているだろうか。ごちゃごちゃとネガティブな予想で頭が埋め尽くされる。

「あのっ、嫌なら、別に高町でも……！」

ぽん、と軽く頭に手を載せられた。顔を上げる。秀人さんは、にっこりと微笑んでいた。

「よろしく――なのは」

「あ……」

じわっ。視界が、水滴を垂らされたように滲んだ。

なのは。

確かに、そう呼んでくれた。名前で、呼んでくれた。

「うっ……うぅ……！」

唇をかみ締めても、駄目だった。

「え！？　何で泣くの！？」

秀人さんは、あたふたと慌てている。泣き止まないと。涙を止めないと。そんな気持ちとは裏腹に、涙腺が壊れてしまったようにぼ

たぼたと涙が溢れてくる。
しゃくりあげ、鼻まで垂らして……
「な、泣くな……ほら、よしよし」
それは、泣いている子供を落ち着かせるための行動だったのだろう。意外に大きな手で……優しく、頭を撫でられた。
ああ、暖かい。人の体温は、何でこんなにも温かくて、心が落ち着くんだろう。

「落ち着いたか？」
「……はい」
……恥ずかしい。とてつもなく、恥ずかしい。すっきりしたにはした。だが、今は恥ずかしさが多分を絞めている。穴があったら入りたい！
「いや……まさか泣くとは思わなかった」
秀人さんの上着には、紺色の生地のおかげで目立たないが……明らかに、私の鼻水がついていた。
「はいティッシュ」
「ありがとうございます」
ちーん、と鼻をかみ、屑籠に捨てる。
「……理由、聞かないんですか？」
名前を呼んで、頭を撫でたらいきなり泣き出したのだ。訳が分からないだろう。
だというのに、秀人さんは何も聞いてこない。
「言いたくないだろ？」
「……ええ、できれば」
「なら聞かないよ」
優しい人だ。
「吾妻さん、窓口までお越しください」
その時、職員らしき女性が秀人さんの苗字を呼んだ。
「おっと、」

ひょいっと軽い動作で立ち上がり、同時に、私の頭の上から温かさが消えた。
「あ……」
温もりが消えてしまった。じわじわと喪失感が胸を締め付ける。もっと、撫でて欲しかったな……と、自分があまりにも子供っぽいことを考えていることが猛烈に恥ずかしくなり、首をぶんぶん振った。
「それじゃあ、吾妻さん。診察料金、栄養剤注射、二日間の入院費、合わせて四千五百円を頂きます」
……高ッ！　え、嘘、そんなにかかるの!?　どうしよう、全然足りないよぅ……
「はい」
と思っておろおろしていたら、秀人さんが極めて自然な動作で、お財布から五千円札を取り出した。
「それでは、五千円をお預かりします。お釣り、五百円です」
「それじゃ、よろしくお願いします」
秀人さんが十分の一になったお金をお財布に入れたのと同時、わたしは冷静さを取り戻した。
「そんな、悪いですよ！」
「気にするな」
「しますよ！」
だけど、秀人さんは取り合ってくれなかった。……まぁ、助かったんだけど。

「すみません、秀人さん。何から何まで」
外はもう暗く、満月と街灯が灯っている。もう子供一人で帰るには遅すぎるということで、秀人さんが送ってくれていた。どうせ予定も無いし、とのことだが、明らかに迷惑をかけている。申し訳なくて、いつもより俯き加減が気持ち十パーセント増しだ。……私は何を考えているんだろう。
ぶつくさ考えながら歩いていたら、道路の段差に躓いた。

「わっ、きゃっ」
転ぶ！　ぎゅっと目を瞑り、咄嗟に顔を庇う。だが、いつまで経っても衝撃も痛みもやってこない。不思議に思い目を開けると、私の胴体に回された腕が目に入った。
秀人さんが、私を支えていた。
「す、すみません！」
ぺこぺこと頭を下げる。ああ、もう。私は。高町なのはは、もっとしっかりした子じゃなかったの！？
「ほら」
秀人さんが、開いた手を差し出してきた。掌を見るが、何も乗っていない。
「……？」
よく意味が分からなくて、首をかしげる。
秀人さんは、『しょうがないなあ』とでも言いたげに、私の手をそのまま握った。私の手をそのまま握った！
「え、あう……」
じわ～っと温もりが伝わってくる。
「転ぶと危ないから」
「……はい」
うわぁ……多分、私ものすごく顔真っ赤になってる……
少し寒いくらいの気温なのに、私の周りだけ春になったように温かい。憧れていた。実は、父さんか兄さんに手を引いてもらうの、すっごく憧れていた。
ああ、幸せ。

だが、幸せな時間というのは、経過するのが非常に早く感じるもので。
「……ここ、です」
私は、豆電球一つとして灯っていない、真っ暗な家の前に着いてしまった。表札に並べて書かれた家族の名前が空々しい。

ぽかぽかしていた身体が、一気に冷たくなっていく。さび付いたロボットのように、間接がぎしぎし軋む錯覚。

「ここか？　でも、誰もいない……あ」

秀人さんは、申し訳無さそうに目を逸らした。

あ～あ、気付かれちゃった。勘のいい人だなぁ。

「そうですよ。ここが、私の家です。私と父さんと母さんと兄さんと姉さんが暮らすはずだった、広～いおうちです。……真っ暗でしょう？　ふふっ」

……言うな。もうそれ以上、言うな。

「別に、死んじゃったわけじゃないですよ。みんな生きてます。でも、父さんは数年前から病院で、目を覚ましません。母さんは喫茶店の経営で、毎日朝早くから夜遅くまで働いています。兄さんと姉さんはそのお手伝いです。私が起きる頃にはお店で仕込みをしていて、私が寝てしばらくしてからヘトヘトになって帰ってきます」

口が心と直結してしまったように、べらべらと情報を垂れ流しにする。

「おかげで、翠屋はあの大通りで一番人気のお店になったんです。すごいでしょう？

テレビの取材まで来たんですよ。美人の店主に、その子供達。あはは、話題性抜群ですよね！」

「もういい」

そうだ。もう、話さなくていい。秀人さんが困ってる。

「リポーターのお姉さんが、母さんの作ったサンドイッチとケーキを食べて、『美味しい、美味しい』って、馬鹿みたいに繰り返すんです。わ、私は……それ、それを……それを」

「もういい」

そんな言葉も、耳に入らない。

「だ、だれもいないおうちで、自分で作ったご飯を食べながら……テレビで見ていたんです。母さん、お母さんが、知らない人に……！　なのは、お母さんが作った食べ物、なんて、何年も食べてない

のに、テレビのお姉さんが、それ、食べてて……！」
「もう、いい」
「なのはだって、お母さんのご飯が食べたいのに、家族みんなで、食べたいのに、でも、そうしたら、お母さん、困っちゃうから、なのはは、『いい子』じゃないと、『手のかからない子』じゃないと、いけないからぁぁ……！！」
「もう、いい」
全身が、温かい。秀人さんが。力いっぱい、私を抱きしめてくれている。
「寂しいなら、そう訴えればいい。我侭を言って、泣けばいい。それは、子供の特権だ。そんなこと、求めて当然なんだ。無理に自分の心を殺してまで、我慢しなくてもいい」
今度こそ、心の堰は崩壊した。
「もう、嫌だ！」
封印していた我侭が、本音が、叫び声になって喉を枯らす。私の心を覆っていた外殻が、破壊された瞬間だった。
「もう、寂しいのは嫌だ！　一人ぼっちは嫌だ！
『行ってきます』って言ったら、『いってらっしゃい』って言ってほしい！
『ただいま』って言ったら、『お帰りなさい』って言ってほしい！
一人でご飯を食べるのは嫌だ！　もっとお話がしたい！　テストで百点取ったら褒めてよ！　誕生日にお祝いしてよ！　もっとなのはに構ってよ！」
人目も憚らず、泣き叫ぶ、何年分も泣いて、泣いて、泣き疲れて……秀人さんはその間、ずっと私を抱きしめてくれていた。

「……ん」
目を覚ましたとき、私は、見知らぬ天井を仰いでいた。
身体を起こし、部屋の全体を眺める。広さは、大体八畳くらい。オートバイが表紙を飾る雑誌や漫画が、その辺に無造作に放ってある。

「ああ、起きた？」
秀人さんだった。私の鼻水が付いてしまった上着を脱ぎ、青いエプロンを着けている。
その手には、暖かな湯気を上げる土鍋があった。
「……ここは？」
まだ少しぼうっとする。あの後、散々泣いてからの記憶が無い。
「俺んち」
「えっ……」
秀人さんの家！？
秀人さんは、雑誌を適当に積み上げ、座卓を空けた。
何で、私が秀人さんの部屋に？　だが、そのことを考えるよりも先に。
ぐうううううぅ～～。
お腹が、盛大に鳴った。そういえば、今日は朝から何も食べてない。給食も食べていない……というか、脱走したのだから当然だ。
「まずは、飯にしよう」
私は、顔を真っ赤にして、首を縦に振った。

はふはふ。
「美味いか？」
秀人さんが、春菊を小鉢に入れて卵を絡めながら聞いてくる。
「美味しいです！」
お腹ペコペコ。それに加え、誰かと囲む鍋だ。美味しくないわけがない。お肉が、豆腐が、白滝が、つくねが、見る見るうちに減っていく。
「ごちそうさまでした」
いつもだったら、独り言になるその言葉。でも、今日は。
「お粗末様でした」
ちゃんと、返事をしてくれる人がいる。それが、泣きたくなるほど幸せだった。でも、帰らないと。ここは、他人の家なんだ。いつ

までもいたら、邪魔になる。
「そうだ、なのは」
「は、はい？」
不意に秀人さんに呼ばれ、無意識のうちに下を向いていた顔を上げた。
「携帯電話、持ってるか？」
持っている。薄いピンク色の、去年出たばかりの機種。朝起きたら、食卓の上にぽつんと箱ごと置いてあったものだ。……その日は、私の誕生日だった。
アドレス帳には、家族全員のアドレスと電話番号が登録されていた。……着信履歴も、発信履歴もゼロ以外の数字を刻んではいないが。もしかしたら、と、淡い希望とともに持ち歩いている。のろのろと取り出したそれを、秀人さんはぱっと素早く取り上げた。かちかち、と微妙に慣れていない動きでボタンを操作し出す。
「ほれ」
突っ返された携帯電話の画面には、『吾妻秀人』の名前と、十一桁の数字。
「これ……」
「俺の番号。ついでにメアドも入れといた」
わたしは、恐る恐る、通話ボタンを押した。
――ピリリリリリッ！
秀人さんのポケットから、恐らくデフォルト設定のままの電子音が響いた。
「はいはいっと……」
ポケットから取り出したのは、シンプルな形の携帯電話。それを、耳に当てた。
「『もしもし』」
目の前と耳元から、二重に聞こえる声。――繋がった。
「……あはっ」
電話が繋がる。そんな当たり前の事が、何故か嬉しくて、可笑し

くて。何度も切って、何度も掛けて。電池が切れるまで。何度も。何度も。

「あはははははっ！」

誰かとの繋がりが、嬉しくて仕方なかった。

「それで」

秀人さんが表情を引き締めた。……ついに、この瞬間が来た。いくら秀人さんが優しいとはいっても、居座られては迷惑だろう。鞄に手を伸ばす。

だが、出てきた言葉は、あまりにも予想を外れたものだった。

「布団とベッド、どっちで寝たい？」

……へ？

「……いや、今日は帰りたくないだろうと思って」

ぽりぽり、と頬を掻きながら。

「もちろん、嫌だったらいいんだ。また、家まで送るから」

……真っ暗で。冷たくて。寒くて。

そんな家に帰り、また一人ぼっちで寝る？

「……や、です」

昨日までなら、いつも通り、諦めの溜息と共に受け入れていただろう。でも。

「？」

目の前にある、優しい笑顔を、手放したくなかった。

「泊まっていきます」

どもることなく、あっさりとそんな言葉が出た。

「よし、そうと決まれば……」

秀人さんが、『待っていました』とばかりに布団を取り出そうとしていて。

「……なのは？」

不思議そうに、私の顔と……自分の袖を引く私の手を、見た。

「いっしょが、いいです」

言葉の続きを待つように、じっと私の目を見る。
「秀人さん、言ってくれました。『わがままを言うのは、子供の特権だ』って。だから、」
きゅ、と。秀人さんの手を握る。
「だから、わがままを言います」
にっこりと。多分、上手に笑えた。
「秀人さんと、一緒の布団で、寝たいです」
少しだけびっくりしたような秀人さんは、くす、と苦笑し、言った。
「……しょうがないなぁ」

夢を、見た。たわいも無い、日常の夢を。
家には家族がいて。お母さんが朝ごはんを作ってくれて。お父さんは新聞を読みながらそれを待っていて。お兄ちゃんとお姉ちゃんが朝の稽古を終えて、食卓にやってきて。
――みんなで、『いただきます』をする。
そんな、たわいも無く、退屈で、だけど、掛け替えの無い、夢を。

◆◆◆◆

「すー……すー……」
俺……吾妻秀人は、いわゆる腕枕の枕ポジションで、寝入ったなのはの顔を見ていた。
「よし……寝たな。……ふぅ～～～～！」
大きく深呼吸をする。いや……それにしても。
「き……緊張、したぁ……」
いつも通り、素の態度だったとはいえ、こんなに長く他人と話をしたのは久しぶりだ。
俺にしがみ付くようにして眠っているなのは。

この少女を、どうにも放っておけなかった。目……だろうか。本人が気付いているのかどうかは知らないが、常に下向きで、誰とも合わせようとしない。それが、かつての自分を見ているようで、つい、構ってしまった。ああ、分かっている。これが代償行為であるということも。この少女に愛情を注ぐことで、自分の過去を――

「……おとうさん」

引き戻される。腕に感じる僅かな重みに。しがみ付いてくる手の感触に。

「……どうした？　なのは」

ぼんやりとした寝ぼけ眼。どうやら、寝ぼけて俺を父親と間違えているらしい。

「……呼んでみただけ」

そして、また眠る。

今夜だけでも、この子が安心して眠れますように。

俺の意識もまた、心地よいまどろみに溶けていった。

第一話（後書き）

序盤は速めに上げていきます。

第二話（前書き）

三件のお気に入り登録、ありがとうございます。

第二話

「ん……」
朝、かな。
「んん～……」
いつもより少しだけ硬い布団の中で、伸びをする。
「……ん？」
はた、と目が覚めた。がばっ、と布団を跳ね上げ、起き上がる。
（お……思い出した！）
昨日、秀人さんの家に泊めてもらって、そのまま、そのまま……
『一緒の布団で、寝たいです』
「うわぁ……！」
カーッ、と、顔面にが熱くなる。体中の血が集まっているみたいに。
（でも、腕枕……気持ちよかったなぁ……）
「……えへ」
頬が、緩む。
「あ、おはよう」
台所から、秀人さんが顔をひょいっと覗かせた。不意打ちだった。
「ひゃい！？」
裏返った声で返事をする。
「ちょうど朝ごはんが出来たところだから」
身体には青いエプロン。右手には甘い香りを漂わせるフライパン。
左手にはフライ返し。
……やたらとサマになっている。主夫？
「あっ……言ってくれたら、手伝ったのに」
家主を働かせて、客分である自分が惰眠を貪る。明らかに礼を失している。
「いいからいいから。子供は気にしない」

「むー……」
子供って……まあ、確かに否定する要素は無いんだけど。
ちゃぶ台の上に並べられたのは、オムレツ。マカロニサラダ。白米。味噌汁。
和風洋風ごちゃまぜだ。でも、どれも美味しそう。
いそいそと正座する。よく考えてみれば、ちゃぶ台なんて使うの、初めてだ。
「それじゃ」
秀人さんが、神妙な顔で両手を合わせた。私も真似る。そして。
「「いただきます」」
わ、タイミングぴったりだ！　へへ、嬉しいなあ。
「なのは」
「はい？」
もぐもぐ。食べながら喋る。お行儀が悪いとは思うけど、折角お話ができるのに黙っているのは勿体無い。
「どこか行く予定とかある？」
「いえ、特には」
予定なんて、せいぜい図書館にでも行こうかな、という程度のものだ。
「この後、本でも買いに行こうかと思うんだけど、一緒に来るか？」
私は、少し意外に思った。
「秀人さん、本読むんですか？」
部屋を見た感じ、数冊の雑誌と漫画と新聞くらいしか置いていない。
「んー、まぁな。買って読んだらすぐ売っちまうけど」
買って、読んで、すぐ売る？
「いや、本って結構スペース取るんだよ。大して広くない部屋だから」
「あの、それでしたら……図書館で借りればいいんじゃないでしょうか」

どんな分厚い本でも、貸し出し期限の一週間もあれば読める。しかもタダだ。

「……その発想は無かった」

……えー。

「あら、高町さん。いらっしゃい」

日曜日のお昼。行きつけの図書館に行くと、カウンターで美穂さんが顔を上げて、挨拶をしてきた。白いサマーセーターに、金色のネックレス。深窓の令嬢……なんて、何かで読んだ呼称がふっと沸いてきた。

「あら……そちらは？」

秀人さんを見て、首をかしげる。私が誰かと一緒にいるところなんて、全く無かったから。意外に思われているんだろう。どうせ、友達いないもん……

「ああ、えーと、今日は図書カードを作りに」

秀人さんは、どことなく上ずった声を出す。案外、人に接するのが苦手なのか……それとも、魅力的な女性相手に緊張しているのか……いらっ。

「……決まりごととかは、私が教えますので。カードだけちゃちゃっと作ってください」

……なんか、面白くない。

秀人さんの手を、目一杯の力を込めて握り締める。

その日の晩。秀人さんはベッドを背もたれにするようにエッセイのページを捲って、私はその隣で借りてきた長編ＳＦ小説を読んでいた。かち、かち。時計の針が時間を刻む音と。ぱら、ぱら。ページを捲る音。その二つだけが、部屋の空気を支配する。

そこに、ぱたん。という音が加わった。秀人さんが一冊を読み終え、本を閉じた音だ。

「さて、夕飯の準備でもするか」

「あ、私、手伝います！」
数年間、ダテに家事をこなしていない。『子供』発言を撤回させてやろう。

『誰か、僕の声が聞こえますか！？』

その時だった。
昨日聞いた時よりも切羽詰まった声色で、あの声が聞こえた。
「あ、ああ、聞こえてる！」
秀人さんが、初めてその声に返事をした。
『昨日の人！　よ……よかった！　お願いです、今すぐ、僕の所……病院に来て下さい！』
ぱっとイメージが直接、頭の中に浮かんだ。四階建ての、立派な建物。昨日、フェレットを預けた動物病院だ。
「どういうことなの？」
私は、声の主に聞いた。事情が全くわからないのだ。
『あれ、二人も！？』
あ、驚いてる。
『はい、実は……って、う、わあああぁ！？』
悲鳴。そして、声がしなくなった。秀人さんがすぐさま立ち上がった。
「……ちょっと行ってくる。なのは、ここで待ってろ」
壁際に置いてあったヘルメットを引っ付かみ、玄関へと走る。
その後ろ姿を見ていたら、何故か不安になった。その後ろ姿が、大怪我をした日の父と重なって見えてしまい……
「私も行きます！連れていって下さい！」
だから、思わずそう頼んでいた。秀人さんは、何秒か思い悩み……もう一つ、ヘルメットを手にした。

耳元で風が轟々と唸る。自動車とは違い、時速百キロ近い風が直に

体にたたき付けられているのだ。サイズが大きく、顎紐で無理やり頭に装着したヘルメットが風を孕み、ばたばたと揺れる。
秀人さんのバイクが、住宅街を疾走していた。
「……ふううぅっ！」
振り落とされないように、秀人さんの大きな背中に全力でしがみつく。運動は得意ではない。むしろ、大の苦手だ。腕がぷるぷると痙攣するが、弱音を吐いてはいられない。
直角に近い急カーブが目の前に迫る。だけど、秀人さんは全く速度を落とさない。
「きゃあああぁぁ～！」
有り得ないほど倒し込まれた車体が、横滑りするように直角カーブを通過した。
ギャギャギャッ！　……後輪が地面を掴み損ね、滑る音を聞いた。心臓がばくばく跳ねている。肝が冷える、とはよく言ったものだ。とはいえ、この先は直線一本。今のようなアクロバティックな動きはしないだろう……
「飛ばすぞ！　掴まれ！」
「へ？」
条件反射的に掴まっておいて、本当に良かった。一直線。それは、最もスピードを出し易い道ということで、少なくとも、このバイクのエンジンには、まだまだ余裕があるわけで……！
――ヴァアアオオオオオン！！
エンジンが、残ったパワーを全て搾り出すような高音を立て……未知の速度へと突き進んでいく！
「ひ、ひいいいいいいいいっ！！」
今度は、真正面からの強烈な風圧に上体が仰け反る。それでもバイクは止まらず、ぐんぐんと。ぐんぐんと空気の壁を押し開いていく。バイクどころか、乗用車にも乗った事が無い（いや、本当に）私にも分かる。この速度は、異常だ！

とりあえず……あの『声』の主、会ったら、絶対に一言文句言ってやるぅー！！

ようやく動物病院に到着したときには、全身の力が抜けかけていた。メーターの横に付いていたデジタル時計を見る。出発してから、数分しか経っていない。これまでの短い人生の中で、最も密度の濃い数分だった。

それにしても……

「……おかしいな」

秀人さんがつぶやいた。そう、おかしい。ここに到着するまで、猫一匹すら見かけなかったのだ。夜とはいえ、午後十時。多少の人通りくらい、あって当然だというのに。

数分という所要時間は、通りに一台も車が走っていなかったからたたき出せたタイムだ。でなければ、街中を時速百キロ以上で飛ばせるはずがない。

夜空は少し紫がかっていて、圧迫感がある。息苦しい。

――がっしゃあああああん！！

唐突に、頭上で大きな音が聞こえた。

見上げ……無数のガラス片が、きらきらと、スローモーションのように降り注いできた。

（……あ）

――動け、ない。

竦んでしまっている。頭からの命令が、手足に伝わらない。スローモーションのように迫っていたはずのガラス片は、いつの間にかもう目の前にあって。

――温かい何かに、抱き締められた。

「あ、が、あああぁぁッッ！！」

秀人さんが、私に覆いかぶさるようにして……降り注ぐガラス片

をその身に受けていた。
「ひ」
口が、最初に動いた。
「ひでと、さん……？」
「うっ……ぐ、ぅ」
呻き声を上げる秀人さんが、私の横にどうっと倒れた。背中には、出来損ないのサボテンように、ガラス片が顔を出している。
「ちょっと、ドジっちゃったな……」
血だらけで、はは、と薄く笑う。
「とにかく……急ごう」
「で、でも、せなか、ささってるよ！？」
「大丈夫、大丈夫……、俺は、そういう風に『できてる』から」
笑う膝を叱咤し、階段を秀人さんに続いて駆け上がる。
秀人さんは、最初は辛そうに。でも、十段を登ったあたりから徐々に顔色に赤みが戻り。二階分を走破する頃には、背中に刺さっていたガラス片は抜け落ち、出血も、抉れた肉も、すっかり元通りになっている。さすがに、その異常さは自分でも理解できた。
そして四階。あの声の主はどこに……
――ゴゴン！！
廊下の曲がり角。そこから、飛び出してきたのは……昼間のフェレットと、

「グウウオオオオオオオオオオ！！！」

……形容しづらい、あえて言うなら、巨大な黒い毬藻みたいな化け物が飛び出してきた。
毬藻が、その巨体からは考えられないほど俊敏にゴムボールのように跳ね、モルタルだかコンクリートだかの床に、クレーターを作り出した。
――ボゴォッ！！

衝撃で、フェレットが胸元に飛んできた。間一髪でキャッチすることに成功した。毬藻は、床に半分めり込んで身動きが取れないようだ。

「イマイチ状況が理解できんが……逃げるぞ！」

「はいっ！」

とりあえず、あの毬藻が友好的な存在でないことは確かだった。

秀人さんが殿をつとめ、私はフェレットを胸に抱いて走る。

「ギュルアアアアアアアア！！！」

バゴッ、と、硬いものが砕ける音がした。多分、あの毬藻がその身体を床から無理やり引っこ抜いたんだろう。

「振り向くな！　走れ！」

し、心臓が……破れそう！

「ったく、なんなんだあの毛玉は！？」

「あれは、ジュエルシードの、暴走体です」

……

……

……ん？

今の、誰の声？

秀人さんもきょろきょろと辺りを見回している。

「……僕です、僕」

その声は、私の胸元から聞こえてきた。ぎ、ぎ、ぎ。胸元に視線を落とす。

「驚かせてしまって済みません。でも、どうしてもあなたたちの力が必要だったんです」

フェレットが、理知的な瞳で私を見ていた。ぴこぴこ、と短い手を振っている。こんな状況でなければ、思わず顔が緩んでしまいそうな愛らしい仕草だった。

「フェレットが……」「しゃべった……」
……うっそお。
「いきなりこんなことを頼むなんて、無茶苦茶だということは分かっています。でも、こうでもしないと、あの暴走体を止める手立てが……」
ブオッ！！
「伏せろォッ！」
怒鳴られ、言われたとおりに床に身体を投げ出す。
「ギュフッ！！」
あ、フェレット潰しちゃった。
倒れた私の頭上を、凄い勢いで毬藻が飛んでいった。
ドゴォン！！
その先にあった障害物を吹き飛ばし、壁に大穴を開け、毬藻は私達を正面から見据えた。そのらんらんと輝く目が、『逃がさない』と明確に語っていた。
「どうすればいいの……」
こんな怪物から、どうやって逃げれば……
「ゲホッ、方法が、一つだけあります」
フェレットが、少し咳き込みながら、首輪のように括り付けていた『ソレ』を私に差し出してきた。引き込まれそうなほど鮮やかな、真っ赤な宝石。
「これは……？」
「それを、手に持ってください」
心臓が、運動とは別の理由で鼓動する。視界がクリアになっていく。
これは。この感覚は。あの時、このフェレットの元へ向かった時に感じた焦燥感。
ゆっくりと、赤い宝石に手を伸ばし……
「ゴアアアアアアアッ！！」

だが、それをいつまでも許すほど毬藻は甘くなかったらしい。無防備になった私に突進してきた。
「し、しまっ……！！」
大きな背中が、私の前に立ちふさがった。
「……空気読みやがれこの毛玉がああああッ！！」
――ズズンッ！！
秀人さんが、毬藻を、『受け止めて』いた。踵が床に半ばめり込み、沈み……耐えた。
「な、生身で……！？」
フェレットが、驚愕に目を見開いた。
「おい、フェレット！」
その状態で。秀人さんが言う。
「はいっ！」
「こいつをどうにかするには、俺達の力が必要って言ってたな！？」
ぎり、ぎり、と拮抗が徐々に傾いていく。やはり、化け物たる所以か。徐々に秀人さんを押し切っていく。
「はい、そうです。僕の念話をキャッチできる……魔力を持った人になら、」
秀人さんは、毬藻を抱えたまま、後ろに『跳んだ』。
「グウッ！？」
「おおりゃあああああ！！」
不意に抵抗が無くなり、体勢を崩す毬藻。その胴体（一頭身）に足を突っ張り……投げた。オリンピックで見たことがある。巴投げという技だった。
バゴオオン！！
また別の壁を突き破り、勢いのままに吹き飛んでいった。

「今のうちに、早く！」
私は、今度こそしっかりと、赤い宝石を手に取る。
「僕の言うことを、繰り返して！」
「え、えーと、はい」

「我、使命を受けし者なり」
「我、使命を受けし者なり」

赤い宝石が、どくん、と胎動した。

「契約のもと、その力を解き放て」
「契約のもと、その力を解き放て」

――どくん、どくん……胸が、熱い。

「「風は空に、星は天に」」

心に、言葉が浮かんでくる。

「グオアアア！！」
恐ろしい咆哮が、叩きつけられる。でも、怖くない。
「だりゃあああ！！」
あの大きくて優しい背中が、私を護ってくれている。

それだけで。

「「そして」」

それだけで。

「「不屈の心はこの胸に！」」

勇気が、心に満ちてくる！

「どわあああああっ！？」

秀人さんが、壁に空いた穴から、外に放り出された。

だんっ！

飛び出すことに、何の躊躇も覚えない。

「秀人さん！」

空中で、秀人さんを抱きとめる。

「一緒に！」

秀人さんは、最初は虚を突かれたように。でも。

「……ああっ！」

笑って、答えた。

「「この手に魔法（チカラ）を！」」

赤い宝石から、眩い光が溢れる。そう、この子の、名は……！

「「レイジングハート、セットアップ！」」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ.　Ｓｅｔ　ｕｐ』

瞬間……世界が、光で満ち溢れた。

私の身体からは、薄いピンク色の光が。秀人さんの身体からは、空色の光が。

紫色の濁った空を、明るく照らし出す。

「ふ、二人とも、なんて魔力量……！」

『マスター認証を行います』
赤い宝石……レイジングハートが、涼やかな女性の声で話し出した。
『まずは名前を』
「えと……高町なのは、です」
『バリアジャケットの生成を行います』
「ど、どうやって？」
『思い描いてください』
思い描く。バリアジャケット……言葉の響きからして、戦闘服みたいなものだろう。だとしたら、制服？　頭の中に、それを思い浮かべる。今はもう着ることが無い、その制服。
『確認しました』
「へ？」
今のでいいの？　えらくあっさり決めちゃったけど……
『魔法の杖である、私の姿を決定して下さい』
杖……白柄に、金の台座。その中心に、赤い宝石。
『確認しました』
桜色の光が解け、地上にゆっくりと降下した私は……『変身』していた。
「え、え、えええええええええええっ！？」
腕を振り、腰をひねって背中を見て……唖然。先ほど、私がイメージした通りの服を纏っていた。

ザシャッ！
地面に着地した秀人さんが目を剥いている。
「……いつ着替えたんだ？」
「さ、さあ……？」
『アカウントを作成します』
まだ続きがあるようだ。
『使用者、名前を』

「……俺か？」
秀人さんが、不思議そうにレイジングハートを見た。
「マスターはなのはだろ？」
『はい。ですが、起動詠唱の一部を共有し、魔力のパーソナルデータの登録も完了しています。サブ使用者として、機能の一部を使用可能です』
あー、あれね、はいはい、と極めて軽い調子で相槌を打つ。
『名前を』
「、吾妻秀人」
『認証します。プログラムの一部が使用可能になりました。使用可能プログラムを提示します』
ぱっ、ぱっ。象形文字のような、英語の筆記体のような文字が表示される。
その視界の隅。黒い何かが、もぞ、と蠢いた。
「グオオオオオオオオオ！！」
秀人さん！
杖を、前に突き出す。同時。
『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　！』
レイジングハートから障壁のようなものが展開され、
バチィィッ！！
『ルギャアアアアアアッ！？』
毬藻の突進を止めた！
「え……？」
障壁は、ふっと空気に溶けるようにして消えた。
今の、私が？
『グルルルル……』
警戒のうなり声を上げ、じりじりとゆっくり距離を詰めてくる。
近づいてきたら、また今の障壁で防げる。だけど、それではいたちごっこだ。こっちからも、なにか攻撃しないと。
「よっし、分かった！」

後ろでモニターと睨めっこしていた秀人さんが、そんな声を上げた。へ？　と振り向く。考えてみればそれは、戦闘中に注意を外すという、自殺行為だった。

『グゴオオオオオオオオ！！』

「あっ……！？」

『Ｉｍｐａｃｔ　！』

レイジングハートが、今度は私が予期しないタイミングで単語を口にした。衝撃、と。

――ドパァン！！

毬藻が、その単語の通り、破裂音を上げた。

秀人さんの突き出した拳の先に、一つの『〇』と二つの『□』を組み合わせたような、幾何学的な図形が浮かんでいた。色は、空色。

「これが、魔法ってヤツか？」

秀人さんが、ぷらぷらと手首をスナップさせながら聞いた。

『初歩攻撃魔法・インパクト』

「さっきの、バリアみたいなのも？」

『そうです。初歩防御魔法・プロテクション』

「……すごい威力」

毬藻の身体は、大部分が砕けてあちこちに散らばっている。たったの一撃で、分厚いコンクリートをも砕いた、あの毬藻の身体が。

『いいえ、マスター。魔法の威力そのものは、Ｃ～Ｂランクです。ですが、ヒデトによって込められた魔力はＡＡ相当。それが、威力を底上げしたのです』

わざわざ分かりやすく説明してくれた。

「今です、封印を！」

階段から降りてきたらしいフェレットが、そんなことを言った。

「封印……？」

その言葉が引き金だったのか。
『Ｓｅａｌｉｎｇ　Ｍｏｄｅ　ｓｅｔ　ｕｐ』
レイジングハートに、光り輝く桜色の翼が発生した。
「え、えっと？」
『発動呪文を』
「そんなの知らないよ」
『構いません。あなたの言葉で』
成り行きを見守っていた秀人さんが、ぽん、と私の肩を叩いた。
「つまり、即興でいいってことらしい」
そういうことなら。
「……」
って、そうだった。私、こういう創作が、苦手なんだった。何でもいいと言われたが、だからといっていい加減な呪文はレイジングハートに失礼だし……
「発動呪文の設定・アカウント『吾妻秀人』」
『アカウント確認しました。入力して下さい』
えっ！？
「なのは……生真面目なのはいいが、状況を考えなさい」
怒られた。ううぅ……
「発動呪文は『不屈の心はこの胸に』」
それは、あの起動呪文のワンフレーズ。私も、密かに気に入っていた一文だった。
「これでいけるか？」
『問題ありません』
……よし！
「『不屈の心はこの胸に』！」
桜色の光の帯が、毬藻を縛り上げていく。そして毬藻の額に、ローマ数字が浮かび上がる。その数字は、２１。
「ジュエルシード、シリアル２１！　……封印！」

『グアアアアアアアアアアア……！』
恐ろしい咆哮を上げ、抵抗する。だが、巻きついた光の帯は全く揺るがない。毛糸玉のように、暴走体を包み込み……
『Ｃｏｍｐｌｅｔｅ』
黒い毬藻は消え……目も覚めるような、青い菱形の宝石が浮かんでいた。その宝石が、レイジングハートに引き寄せられ、すぽん、と呆気無く吸い込まれた。
「えっと……」
これで、終わったの？
「やった！　成功だ！」
フェレットが、全身で喜びを表す。そっか。成功、したんだ。
「「ふぅ～……」」
気が抜けて、その場に座り込む。全く同じタイミングで、秀人さんもそうした。
「「ぷっ……」」
そんな些細なことなのに、ひどく可笑しくて。
「あはははは！！」
顔を見合わせて、気が済むまで。笑い続けた。
――遠くから、サイレンが聞こえてくるまで。
「げえっ！？」
秀人さんが、慌てて周囲を見る。
穴が空いた壁に、あちこちに散らばるコンクリート。そして、そこにいる私達。どう考えても、怪しい。
「に……逃げるぞ！」
「はいいっ！」
この年で警察のご厄介になるのは……勘弁！　母さん達に、迷惑がかかっちゃう！
秀人さんが私にヘルメットを被せ、自分も被り、フェレットの首根っこを掴まえた。
「ぎゅー！？」

上着のポケットにねじ込まれたフェレットが、変な声を上げたが……逃げることが先決だった。

「なるほどな……」

秀人さんのアパート。私と秀人さんの前で、フェレットがちょこんとこちらの顔を見上げている。

「つまり、『危険物を運んでいたら事故って落としちゃいました』ってことか」

「仰るとおりです……」

項垂れる。多分、責任感とか、使命感とか、そういうのがとても強い子なんだろう。

「回収しようにも、今は力を使い果たしてしまいまして……」

そして、がばっと頭を下げた。人間で言えば、土下座でもしているような感じだろうか。必死さが、伝わってきた。

「お礼は、必ずします！　貯えはありますから、金銭でも、宝石でも……！」

「馬鹿か、お前」

「……え？」

今の、秀人さん？　横を見る。秀人さんが、とても怖い顔で、フェレットを睨んでいた。

「……はは、確かに、勝手な話でしたね」

フェレットが諦観したように呟く。けど、私も、秀人さんと同じように、怒っていた。

なぜなら……

「俺がムカついてんのは、お前が、金を条件に出したことだ」

そう。真剣にお願いされれば、力を貸すつもりでいた。なのに。

「あのね、ユーノ……くん？」

怒りが、徐々に悲しさに変わっていく。

「あ……なんですか？」
「もう関わっちゃったから、今更投げ出すことなんてしないよ？」
「ごめん、なさい……」
うな垂れるユーノくんに、秀人さんが続けた。
「手伝うのはいい。最初からそのつもりだしな。ただ、条件が一つだけ」
「なん……でしょうか？」
「敬語禁止」
「へ？」
「なのはもだぞ」
「うん、わかった」
願ったり叶ったりだ。敬語で話すのは、距離があるみたいで寂しいと思っていたところだ。
「というわけだ。わかったな？」
ユーノくんは、少しだけ呆けた様子で黙り……
「……うん、それじゃあ、改めて。名前はユーノ・スクライア。ユーノって呼んで」
私たちの、仲間になった。

二日連続での外泊は流石にまずいだろう、ということで、私は一度家に戻ることにした。
でも、足取りは軽い。
ポケットに手を入れる。かちゃり、という感触を探り、取り出す。
真新しい鍵だ。
『また、いつでもおいで』
そう。帰り際に持たせてくれた、秀人さんのアパートの合い鍵だ。
「なのは？」
肩に乗っているユーノくんが、人がいないことを見計らって声をかけてきた。レイジングハートの細かい調整をするため、しばらくは一緒に行動したい、と彼から申し出てきたのだ。

「なぁに？」
「頼んでおいて言うのもなんだけど、本当にいいの？」
……ふふ。
「大丈夫。だって、一人じゃないもん。ユーノくんもレイジングハートもいる」
『光栄です』
それに何より……
「秀人さんが一緒だもん♪」

家に着いて、まず最初に覚えたのは、違和感。いつもは真っ暗なのに、玄関に明かりが点いている。もしかして。知らず知らずのうちに、早足になる。
誰かが帰ってきている！　おに……ごほん、兄さんかな？　姉さんかな？　それとも、母さんかな？
家の敷地に入る。玄関先にいたのは、黒いＴシャツにジーパン姿の、兄さんだった。
「兄さん！　ただい……」

「こんな遅くまで、どこに行っていた」

――足が、止まった。
久しぶりに見る……大体一週間ぶりの兄さんの顔は、静かな、しかし確かな怒りを浮かべていた。
つかつかと歩いてきて。――ぱしん。……頭を、叩かれた。
『おかえり』と暖かく撫でてくれるのではなく。
冷たく、叩かれた。
「……はは」
不思議、だなぁ……何も、感じないよ。痛さも、哀しさも、何も……

「どれだけ心配したと思ってるんだ」

――この人は何を言っているんだろう。

無遠慮に私の二の腕を掴む手。

その手が、得体の知れないものに思えて。秀人さんの温もりが消されていくようで。堪らなく、気持ち悪かった。

虚無の心に、一片の火花が散る。

そして、それは……溜め込んで溜め込んで、膨大な量になっていた『怒り』に、引火した。

「ふざけないでよ!!」

自分でも驚くほど、大きな声が出た。気持ち悪い手を振り払う。

「『心配してた』!? いつもいつも放ったらかしの癖に! こんな時にだけ調子のいい事言わないで!」

さあ、言ってやったぞ。どんな顔をするのだろう。バツの悪そうな顔だろうか。それとも、顔を真っ赤にして怒るのだろうか。涙ながらに謝るのだろうか。

けれど、そのどれでもなかった。兄さんは。

――何で私が怒るのかわからない。そんな顔をしていた。

(……もういいや)

怒りと、失望と、諦観が渦巻く。ああ、本当に、もういいや。

「……レイジングハート」

『Ｙｅｓ，ｍｙ ｍａｓｔｅｒ』

察してくれたらしく、レイジングハートが起動する。本当、いい子だなぁ……

――リンカーコア起動。

私が今、一番やりたいことを……

――術式構築。

誰よりも早く判断して……

――魔力循環。
手伝いまで、してくれるんだから……！
呼吸をするように、『魔法』を組み立てていく。
『ちょ、なのは!?』
ユーノくん、悪いけど静かにしてて。
自分の体から、桜色の魔力光が漏れだす。
『高町恭也』が、驚愕に目を見開いている。
クリアな視界の中……玄関から、『高町桃子』と『高町美由紀』が出て来た。
あぁ、都合がいい。こいつらも、纏めてやっちゃおう。
「なの、は……？」
『高町恭也』が、呆然と私を見ている。
「五月蝿い。名前で呼ぶな。馴れ馴れしい」
術式『インパクト』に、拡散効果を付加。
「あんた達なんて……」
『Ｉｍｐａｃｔ　＃２　…　［ｌａｒｇｅ］』
「あんた達なんて！」
掲げた手に、バレーボール大の光が生まれる。それを――
「大ッッッ嫌い！！」
思いっきり、地面に叩き付けた――！
――ズドオォォォン！
地面に目掛けて炸裂させた衝撃波は、爆風に変わり、辺り一面に撒き散らされた。
私と同じ、高町という苗字を持つ三人の『他人』が、無様に、呆気

なく、吹き飛ばされる。忌ま忌ましい家のドアが外れ、ガラスが割れ、瓦の何割かが無くなっていた。

「……う」

三人の誰かが、呻いた。何の感慨も沸かない。達成感も。高揚感も。罪悪感も。

「秀人さん……」

ただ、無性に、秀人さんの顔が見たくなった。

くるっと振り返り、転がった三人を見下す。そして、告げる。

「さようなら」

決別を。

「お世話には……なってないよね」

レイジングハートが、便利な魔法を教えてくれた。『念話』という、テレパシーみたいなものだ。携帯電話の電池が底をついていた私には、まさにもってこいな魔法だ。

『秀人さん、聞こえてる？』

少し間を置いて、繋がった。

『なのはか？　どうした？　っていうか、これ（念話）、ユーノが使ってた……』

『会いたい』

単刀直入に、切り出した。

『……今、どこにいる？』

ユーノくんがそうしたように、イメージを念話に載せて送る。

『わかった。ちょっと待ってろ』

ぷつん、と切れる感覚。

「……ありがと、レイジングハート」

『問題ありません』

掌に乗せた赤い宝石が、キラリと輝いた。今度、ちゃんとした飾り紐でも買ってあげよう。

「……なのは」

肩に乗ったまま、ずっと黙っていたユーノくんが口を開いた。言われることは、大体想像がつく。
「今回だけだからね」
――魔法を、あんなことに使うのは。
「……ん。わかった」
電柱を背に、夜空を見上げる。
ヴォオン、と、すっかり馴染んだ音が聞こえてきた。
「待ったか？」
ヘルメットから、くぐもった声が聞こえる。
「ううん」
横に引っ掛けてあったもう一つのヘルメットを被る。
「ん」
秀人さんが手を差し出してくる。それを掴み、バイクによじ登った。
「それじゃ、行くか？」
「はいっ♪」
私の居場所は、あんな、冷たくて暗い牢獄なんかじゃない。
お日様のように暖かい秀人さんの傍が、私の居場所なんだ。
私はもう、振り返らない。

――これは、小さな出会いの物語。

――平凡とは言い難い小学三年生の私、高町なのはに訪れた、大きな転機。

――渡されたのは、赤い宝石。

――手にしたのは、魔法の力。そして、優しい居場所。

――出会いは偶然か、必然か。

――けれど確かに言えるのは、出会いをくれた小さな友人と、赤い宝石への、ありがとう。

――繋がる絆。そして、ここから始まる物語。

――それは、魔法と日常が並行する日々のスタート。

――開幕。

第二話（後書き）

というわけで二話でした。
なんというか、原作のなのはは、ちょっと『いい子』すぎるような気がしたんですよ。
だからこうなりました。

第三話（前書き）

序盤はハイペース。
温泉編まではすでに書けているので、推敲ができ次第投稿して行きます。

第三話

バイクが、夜の街中を駆ける。
夜風が冷たいから、秀人さんの背中に、ぎゅっと抱きつく。ぽかぽかと暖かくて、安心する。
『なあ、なのは』
秀人さんが、念話で声を掛けてきた。風が吹いているのと、ヘルメットを被っているおかげで、肉声は届かないから。
『なぁに？』
『あの、さ……』
言葉を選ぶように、少しだけ黙る。そして、意を決したように、口に出した。
『俺、家族がいないんだ』
……それは、何となく気付いていた。
秀人さんのアパートは、六畳の２ＤＫ。
食器も、調理器具も、必要最小限。どう見たって、よくある一人暮らしの男性の部屋だった。
よくある……とはいっても、事情は違うだろう。
だって秀人さんは、よほど見た目と実年齢が乖離しているわけじゃなければ、高校生くらい……十代の半ば程度の年齢にしか見えない。
『あんまり詳しくは話せないけど』
気恥ずかしそうに言葉を濁す。
『正直、帰ったときに誰かがいたら嬉しいっつーか……』
真っ暗な家。その辛さは、誰よりも知っている。
『おかえり』と、一言かけてくれる人がいてくれたら、どんなに嬉しいだろう。
私がずっと切望していたことを、秀人さんも感じていたんだ。
きっと……わたしよりも長い時間を、一人で生きてきたんだから。
『だから……』

そう、前置きし……

『俺の家族にならないか？』

「……」

嬉しい。すごく嬉しい。でも……

『イヤか？』

イヤなわけ、無いよ。でも……

『私で、いいの？　泣き虫だし、いじけ虫だし……』

バイクが、止まった。秀人さんのアパートの前に着いていたらしい。バイクを降り、ヘルメットを取る。秀人さんもヘルメットを取った。

秀人さんは、私の目をまっすぐに見て……

「泣き虫でも、いじけ虫でも、……なのは『が』いいんだよ」

優しく、微笑んだ。

「う……ふぇ」

嬉しい。すごく嬉しい。でも、何で……？

「う、えええええん……！」

嬉しいのに、涙が止まらない。それなのに、不思議と悲しくない。

「なのは」

ぎゅっと、抱きしめられる。

「頼むよ。俺の、家族になってくれ」

「……はい」

私達は、家族になった。

それから、数日が過ぎた。
とっても悪いことだけど、学校をズル休みして、買い物に出かけた。主に、私の食器とか、衣服とかの生活用品だ。
最初は遠慮しようと思ったけど、秀人さんの『着たきり雀は駄目！』との鶴の一声だった。一番の問題だったお金は、秀人さんが負担してくれるそうだ。いくらなんでもそこまで、とは思ったが、秀人さんは聞いてくれなかった。ちょっと、お人よしが過ぎるんじゃないだろうか、この人。
というわけで、私は大通りから一本外れた通りの、こぢんまりとした食器店にいる。一つ一つがすごく丁寧に作られていて、素人目で見てもいい物だということがわかる。その分、値段も市販品に比べて数段上だけど……あ、でも、このマグカップ、星が散りばめられていてすごく綺麗。
「これか？」
横から伸びてきた手に、ひょいっと取られた。
「あ！」
「すみません、これ下さい。あと、これと、これと、これ」
私が目に付けていたマグカップを、お皿を、フォークとスプーンのセットを、レジにいた女性に渡す。ちょ、それ、値段が四桁後半なんですけど！？
「私、そんな高い物じゃなくても……！」
「あ、名前入れてもらえます？　ひらがな三文字で『なのは』」
女性の店主は、笑顔で頷いた。
「秀人さ～ん！？」
「いいからいいから」
「よくな～い！」
「さて、次は服か……」
「あ、こっち！　こっちに服屋あるよ」
右に注意を引き付け、手を引く。確か、この近くに安い衣料品の

チェーン店があったはず。絶対に、右側のデパートなんて見せてはいけない！

第一、私はそんなにおしゃれに興味は無い。気にするのは、せいぜい色と、丈が長いか短いかの違いくらいだ。今着ている服だって、上下共に無地の服だ。

「ごめんね、秀人さん……お金、いっぱい使わせちゃって」

安いとはいっても、十着以上買い込めば、かなりの値段になる。秀人さんが右腕に提げるぱんぱんの袋が、私の罪悪感を否応無しに刺激する。

「いいって。他に使い道も無いし」

秀人さんに手を引かれ、街中を歩く。

そして、大通りに差し掛かり……私は、足を止めた。

「……」

この先には、『あの店』がある。大通りで一番人気の喫茶店で、毎日たくさん人がいて、店主は美人で、店員は……

「なのは」

ハッ、と我に帰る。知らず知らずのうちに、足が止まっていた。

「な、なんでもない、大丈夫……」

でも、動けない。足が地面とくっついてしまったように、この先へ行くことを拒否している。イヤだ。この先に行きたくない。『あいつら』の顔を見たくない。じめじめと気分が悪くなっていく。ダメだ。ダメだ。折角の楽しいお買い物なのに。秀人さんに迷惑をかけてしまう。

「よいしょっと」

そして、次の瞬間、両足が地面から離れた。

「……ふぇっ！？」

突然のことに驚く。

肩車されたことで、視界が一気に高くなった。道行く人たちの何割かが、私に注目する。
「ひ、秀人さん、恥ずかしいよ！」
顔が熱い。きっと、真っ赤になっている。
「うんうん、わかったわかった。じゃ、行くか」
「分かってない～！？」
あああ、見ないで、見ないで～！！
五分ほど肩車のまま歩き……ある場所で、すとんと下ろされた。
「もうっ、ひどいよ～！」
本気で怒っているわけじゃないけど……恥ずかしかったんだもん。

そこは、アクセサリーショップのようだった。店内には、髪留め、ブレスレット、ピアスにネックレスと、アクセサリーが所狭しと並んでいる。
その中に売っていた、シンプルな飾り紐が目に留まる。値段は、手頃。私のお財布の中身とぴったりだ。
「あの、これください」
「らっしゃい！　おおっ、かわいいお客さんだねぇ！」
すこし派手な格好をしていた女性は、ネックレスをじゃらじゃら鳴らしながら陽気に応じた。
「欲しいのか？　それ」
秀人さんが財布を出そうとするのを、抑える。こればっかりは、ね。
「これ、レイジングハートに丁度いいかなって思って。大事なパートナーだし、自分のお金で買ってあげたいの」
「そうか」
ポケットから、レイジングハートを取り出す。飾り紐のアタッチメントとは、大きさもピッタリ。
「ほら。ぴったりだよレイジングハート」
『ありがとうございます』

首に下げてみる。レイジングハートは相変わらずクールだけど、どことなく喜んでいるようにも見えた。
「似合う似合う」
秀人さんが、頭を撫でてくれた。

――どくん

『Ｃａｕｔｉｏｎ　！』
「うっ……！」「……何だ？」
突然、空気が変わった。この近くから、凄まじい圧迫感が押し寄せてくる。この気配は、そう。あの晩の……！
レイジングハートも、危険を促すように点滅している。
『二人とも！』
ユーノくんから、念話による通信が入った。
「ユーノくん！？　まさか……」
『そう、ジュエルシード暴走体だ！』
予感は、的中した。
「場所は！？」
秀人さんが、道の隅に荷物を置き、聞く。
『そこからまっすぐ！　２００メートル！』
「よっし！　行くぞ、なのは！」
「はいっ！」
秀人さんの後を追い、走り出す。

着いたのは、寂れた神社。
数十段の石段を登り終えた途端、
『グガアアアアアアアアッッ！！』
暴走体に、襲い掛かられた。だけど、いつまでも、怯えている私じゃない！
即座に手をかざし、障壁を発生させる。
『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　！』

――バチイッ！
『ギャンッ！』
この障壁には、ぶつかった物を弾き飛ばす効果がある。だから、
「秀人さん！　いくよ！」
暴走体を、秀人さんの目の前に放り出した。
「いっ、せー、のー……！」
既に構えていた秀人さんが、左足を軸に、腰を回転。コマのように腕を振り、身体を大きく捻る。そして、
「せいっ！！」
十二分に威力を高めた回し蹴りを、暴走体に叩き込んだ！
――ズドンッ！！
『ガウウウウウッ！？』
ドガンッ！　と吹き飛ばされた暴走体が、賽銭箱を粉砕した。
「くうっ……硬って～……！！」
秀人さんが足をぷらぷらと振る。
確かに、この前の毬藻と比べて、ぶつかってきた時の衝撃が強かった。
『まずい』
ユーノくんが焦っている。
『まずいって、何が！？』
『今回の暴走体は、実体のある物に取り憑いて暴走している。
だから、この前の……ジュエルシードが単独で暴走しているときよりも、数段』
「厄介ってことだね」
見据える先。賽銭箱の残骸の山から、暴走体が立ち上がっていた。
『グルルルル……』
ジュエルシードが取り憑いているのは多分、犬か何かなんだろう。
四足歩行の獣の姿をしている。
でも、回復し切ってはいない。今のうちだ。
飾り紐からレイジングハートを取り出し、天に掲げる。

『それじゃあ、なのは。この前と同じように……』
それを無視し、告げる。
「レイジングハート！　セットアップ！」
『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ，　ｓｅｔ　ｕｐ』
湧き上がる。桜色と、空色の光が。起動したレイジングハートを掴み、戦闘服……バリアジャケットを装着する。
『詠唱抜きって……』
「ん、まあ、変身するたびに長々と唱えてたら隙だらけだからな。レイジングハートに頼んでみたんだ」
空色の魔力光を立ち上らせる秀人さんが、軽い調子で言う。
『ガアアッ！』
「よ、っと」
暴走体の突進を回避する。
「……なんか、大した事無いな」
確かに。動きは直線的だし、突進はバリアを張れば余裕で弾き飛ばせる。
「せいやっ！」
――ドンッ！
『ギャアッ！』
秀人さんの攻撃は、問題なくダメージを与えられている。
けれどそれは、安易な慢心だった。
「おい、なんか……！　速くなってないか！？」
身を屈めて、時に後ろに跳んで攻撃をやり過ごす。でも、段々とその頻度が増してきている。暴走体の動くスピードが、明らかに上がってきているんだ！
「秀人さん、こっちへ！」
『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　！』
全方位をドーム状に囲うバリアを展開し、退避する。
「まずいな……」
「うん……」

バリアに時折接触するものの、もう殆ど目で追えないスピードになっている。私は元より、秀人さんでも捕まえられないだろう。

――ガリッ！

「くうっ！」

バリアに鋭い爪が食い込み、一部を削り取る。その度に、術者である私自身にダメージが伝わる。

動きを止めることさえ出来れば……

「ん？」

動きを、止める？

はたと気付く。そうだ、何もわざわざあのスピードに付き合ってやらなくてもいいんじゃないか。頭の中で作戦を、戦術を組む。

「レイジングハート」

以心伝心の頼もしいパートナーは、すぐに答えた。

『確かに可能ですが、マスターの今の力量では、防御との同時展開は難しいでしょう。それに、術式を構築するのに時間が掛かります』

「具体的には？」

『五十二秒』

「うっ……」

長い……！　そんな長時間バリアを解除していたら、術式が完成する前にやられちゃう！

『方法はあります。マスターが術式を構築している間……』

「俺が足止めする、ってとこか」

切り傷が塞がった秀人さんが言う。

「なのは」

私をまっすぐに見据える。

「上手くいくかどうかは、なのはに賭かってる。しくじるなよ」

「はい！」

そうだ。いくら秀人さんが時間を稼いでくれたって、私が失敗したら元も子もない。一回で、必ず成功させるんだ！

「こっちだ、犬コロ！」
秀人さんがバリアから駆け出し、暴走体の注意を引き付ける。
『ガアッ！』
バリアに掛かる負荷が消える。それと同時に、バリアを解除。
「はあっ……」
深呼吸し、目を瞑る。思考の邪魔になる情報は、可能な限りシャットアウトする。この五十二秒に……秀人さんが作ってくれる五十二秒に集中するんだ！

「くっ、この！」
『グルルルル！』
ドスッ、という鈍い音。ざしゅっ、という鋭い音が断続的に聞こえる。
……二十五、二十六、二十七
『ガアアアアアアッ！！』
気付かれた！
咆哮が間近に迫る。それでも、目を開けない。集中を、絶対に乱さない！
「でえええいっ！！」
『ギャアアッ！』
横に逸れ、雑木林をめきめきなぎ倒していく音。
……四十五、四十六、四十七

……五十一、五十二！
『お見事です』
「……よし、やるよ、レイジングハート！」
『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ』
足元に、魔法陣を展開。術式選択。

暴走体は、私の背後、上空から飛び掛ってきた。

「……読み通り！」
見えない壁に激突したかのように、暴走体が、空中に静止した！
『グオオオッ！？』
その四肢は、がっちりと、桜色のリングで拘束されている。
『Ｒｉｎｇ　ｂｉｎｄ』
初歩拘束魔法、リングバインド。名の通り、魔力の輪で四肢を締め上げる魔法だ。例によって例のごとく、大目の魔力を注いだ分、従来のものより頑丈になっている。
『ガアッ！　グガアアッ！！』
暴走体が足掻くが、拘束は硬く、全く抜け出せないでいる。
封印魔法を使うには、このバインドを解除する必要がある。でも、恐れる必要は無い。
この暴走体の加速には、『地面を蹴る』行為がどうしても必要だ。足場が無い空中に放
り出してしまえば、あの速度は出せない！
「『不屈の心はこの胸に！』」
暴走体の額に、ローマ数字が浮かび上がる。数は……
「ジュエルシード、シリアル１６！」
『オオオッ！』
暴走体の爪が迫る。レイジングハートの変形は、多分、間に合わない。だから。
「秀人さん！」
「っしゃあ！　レイジングハート！　封印だ！」
『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．』
五十二秒のうち四十七秒はこのために！　封印術式を、初歩攻撃魔法『インパクト』に追加！
『Ｓｅａｌｉｎｇ　ｉｍｐａｃｔ！』
「封……印ッッ！！」

――ズドオオオン！
暴走体のどてっ腹に、封印攻撃魔法と……それを纏った拳が、深々と突き刺さった！
『グ……ガハッ』
長い一瞬。そして、
――バシュウウッ……
暴走体の身体が霧散し、痩せた野良犬と、ジュエルシードが転がった。
「くぅ～ん……」
素体にされていた犬も、怪我は無さそう。
「やった……」
レイジングハートに、ジュエルシードが吸い込まれた。
へたり込みそうになるが、気合で耐える。そんなことより！
「秀人さん！　怪我は！？」
駆け寄り……ひ、っと変な息が漏れた。
「秀人さん……その、腕」
震える手で、指差す。
裂傷と表現するのも生温い、深い、無数の切り傷。皮膚をめくり上げ、肉を抉り……一番深い左肩の傷なんて、恐らく骨にまで達しているだろう。今も、どぼどぼと壊れた蛇口のように真っ赤な液体を流している。卒倒しそうになる自分を叱咤し、上着を傷口に押し当てる。黄色の生地が、見る見るうちに赤く染まっていく。抑え切れるはずも無く、ぼたぼたと赤い雫が垂れてくる。
（どうしよう……どうしよう……！！）
病院。救急車。
「……放っておけば治る。俺は……そういう風にできてるから」
いつか聞いた言葉を繰り返し、秀人さんは目を閉じた。
道端に放置していた荷物を回収し家に戻る途中、ユーノくんが合流した。今更な感じがする。まあ、魔力が回復するまでは念話くら

いしか使えないらしいし、仕方無いんだけど。
「秀人、なのは！　怪我は無い！？」
「おー、見ての通りだ」
ひらひらと手を振る秀人さん。何でなのかは知らないが、あれだけの傷が短時間で回復してしまったから、確かに無傷だ。私も無傷だが……これは、秀人さんが守ってくれたから。あんな、普通の人なら、一生傷跡や後遺症が残りそうな傷を負いながら。いくら治るとは言っても、痛みが無いわけじゃあないんだろう。ついさっきまで、まるで蝋人形のような顔色をしていた。きっと、私に心配を掛けまいと無理をしていたんだ。
事前に準備できていたら。二つ以上の魔法が同時に使えていたら。……私が、もっと強かったら。秀人さんは、痛い思いをしなくて済んだ。
「レイジングハート」
『はい、マスター』
「私……強くなりたい」
レイジングハートは、はっきりと答えてくれた。
『なれます。あなたなら、誰よりも』
決意を新たに。レイジングハートを、ぎゅっと握り締めた。

「なのは、俺、少し出かけてくる」
食後、使い終わった食器を洗っているときの事だった。秀人さんがヘルメットを手に、出かけていってしまった。どうせなら、一緒に練習したかったなぁ……
まあ、無い物をねだっても仕方が無い。
私は正座し、ちゃぶ台の上に鎮座するレイジングハートと、ユーノくんと向き合った。
「なのは、最初に言っておくね」
ユーノくんが、張り詰めた声で言う。私は、背筋を伸ばしてそれを聞く。

「魔法は、怖い力だ」
それは……ジュエルシードを見れば分かる。あんな化け物が、もし街中に現れたら。どんな被害が出てしまうのかなんて、想像すら出来ない。
「使い方によっては術者の身を滅ぼして……いや、それならまだしも、周囲の人を巻き込む可能性だってある。だから、魔法の指導に、一切の馴れ合いは無しだ。それを……肝に命じておいて」
ごくり、とのどが鳴る。私がやろうとしていることは、危険と隣り合わせの技術なのだ。下手をしたら、ジュエルシードを集め終える前に自滅することだってあるんだ。少し……ううん、すごく怖い。でも……秀人さんの血が、頭にこびりついて離れない。あんな光景を見るのは、もうまっぴらだ。
「ユーノくん、レイジングハート、魔法の練習……いや、特訓、お願いします！」
『お任せ下さい、マスター』
私は、強くなる！

◆　◆　◆　◆

俺は、通りの一角にバイクを停め、ヘルメットを脱いだ。昼間は人でにぎわう大通りも、夜九時を過ぎ、商店がシャッターを閉めると途端に人通りが少なくなる。
「……ここか」
携帯電話のナビは、『目的地に到着しました』と無愛想に沈黙している。
『大通りで一番人気の店』……たったこれだけでヒットするなんてなぁ。
目の前には、一軒の喫茶店。看板には『翠屋』とある。ドアノブには、準備中の看板が掛かっている。最低限の照明を残すのみの店内からは、まだ人の気配がした。

（……居てもらわないと、困るんだけどな）
悩んだ末、俺はノックの代わりに……
――ガンッ！
ドアを蹴りつけることを選んだ。壊れない程度に、思いっきり手加減して。
ノブを捻り、店内にずかずかと足を踏み入れる。
「……申し訳ありませんが、」
モップ片手に近づいてきた男。切れ長の瞳に、長身。こいつは兄貴か。奥でテーブルを雑巾がけしている三つ編み眼鏡は姉だろう。カウンター内を掃いている女、こいつはなのはにソックリだ。多分、母親。
こいつらが……この三人が、あの子をあそこまで追い込んだ元凶。
「お前たちがなのはの肉親か」
「なっ……！」
なのはの兄が、モップを取り落とした。
「……そうみたいだな」
「貴様ッ！」
胸倉を掴み上げられ、壁に押し付けられた。暑っ苦しい……
「きょうちゃん、ストップ！」「恭也！」
姉と母が、兄……恭也と俺を引き剥がす。荒い息をついていた恭也は、二度三度息を整え、『すまない』と頭を下げた。
「今、なのはがどこにいるかご存知なんでしょうか？」
なのはと同じ、栗色の髪の毛をした女が質問してきた。平静を装っているが、焦りのようなものが浮いて見える。
「ご存知も何も。一緒に暮らしてる」
ぞわっ……
エレベーターが停止した時のように、毛が逆立つ。これは、殺気。
そして発生源は恭也だ。
「……なのはをどうするつもりだ」
「俺と一緒に暮らす。これからもずっと、だ」

「ふざけるな……！」
大した殺気だ。気を抜けば、膝が笑い出してしまうかもしれない。だけど、こんな野郎相手にそんな無様な姿は見せられない。なのはのためにも。
「なら、返してどうする？」
あえて、とぼけて返す。
「……決まっている。家に連れて帰って……」
「飼い殺しにするのか」
――恭也の目が、見開かれた。取り繕うように、厳しい表情を作る。が、殺気はすっかり霧散してしまっている。
「なのはは、泣いていたぞ。『もう寂しいのは嫌だ』ってな」
女二人が辛そうに目を逸らした。
「聞き分けのいい子。しっかりした子。我侭を言わない子……いい子。だから、放っておいても大丈夫、か？」
とうとう恭也までが、俺から目を逸らしてしまった。
「おい、なのはの母親」
「……はい」
「ここ数年、なのはに飯を作ってやったことが無いんだって？」
「……」
……答えられないか。なのはは、『母の料理が食べたい』なんて当たり前のことを涙ながらに訴えたのに。
「テレビの取材で忙しかったか？　店の人気がそんなに大事か。なのはより、店の売り上げか」
「違う！　私は、なのはを愛して……！」
「なのはは、自分で作った料理を一人で食べながら、テレビに映る母親を見ていた」
「っ！！」
……何、ショックを受けた顔してるんだ？　全て、自分のせいな

のに。

――なのはだって、お母さんが作ったご飯、食べたいのに！

「おい、姉」

「……なん、ですか」

「なのはが何才になったか、言ってみろ」

「……九才」

「なのはは、誕生日を三回、一人ぼっちで過ごした」

三つ編みの女は、俯き、唇をかみ締めている。

――誕生日にお祝いしてよ！

「おい、兄」

「……何だ」

「お前、なのはを叩いたんだってな」

それが、何よりも許せない。叩かれる理由なんて、欠片も無かったのに！

「……夜遅くまで出歩いていたからだ」

なるほどな。そういう言い訳をするのか。

「その前日は俺の家に泊まっていたんだが？　気付かなかったのか、家族の不在に？」

「！？」

心底驚いた、みたいな顔。

「普段は見向きもしない癖に、都合のいいときだけ兄貴面か」

――家に帰ったら、お帰りなさいって言ってよ！

こいつらは、そんな、ごく当たり前の愛情すら注いでこなかった。

なのはは、あんなにも泣いていたのに。あんなにも、家族の愛情を

求めていたのに。
怒りが、ふつふつと湧き上がってくる。
「もうお前達に、なのはの家族を名乗る資格は無い」
弱弱しく睨み付けてくる、なのはと同じ苗字の男。
「謝る権利すら無い」
拳を握り締め俯く、なのはと遺伝子的には近い筈の女。
「二度となのはの前に姿を見せるな」
膝を折り、嗚咽するなのはを出産した女。
「あの子は俺と暮らす。これからも、ずっと」
「お願いします、なのはに、なのはに会わせて下さい！」
なのはを出産した女が、縋り付いてきた。
その顔は、『私は悲しんでいます』と言わんばかりで……！

――切れた。

「ふざけてんじゃねぇぞっ！！」
俺は、怒りを抑え込んでいたタガを外し、激情のままに叩きつける。
縋り付いてきた女を、床に蹴倒す。
「被害者面してんじゃねぇ加害者共！　なのはがどれだけ寂しかったか、辛かったのか、どうせ理解しちゃいないんだろう！　会ってどうする!?　その場凌ぎで許してもらって、また繰り返すのか！
あの暗い家に、なのはを一人ぼっちで取り残すのか！」
呆けた顔で立ち尽くす三人に、最後の一言をかけてやる。

「お前達は、気付くのが遅すぎた」

ドアを開け、店を出る。背後からは、しくしくという泣き声が聞こえていたが、ドアを閉めると聞こえなくなった。

「ただいま」

家に帰った俺が見たのは……

「……んあ～」

……不必要に大人びた子というイメージを爆砕する、なのはの痴態だった。床に大の字で倒れ、口の端から涎が垂れている。

……これはひどい。

「……おい、ユーノ、レイジングハート」

「……はい」

『何でしょうか』

目がぐるぐると回り、ここではないどこかを見ている。

「何をした」

「マルチタスク……並列同時思考の訓練を」

『手始めに五つほど』

「んな過剰な脳トレを九才の女の子にやらせんなあああああ！！」

ユーノの首根っこを掴み、胴体を掴み……雑巾絞り！

「んぎょえええええええええええ！！」

『憐れです、かつての我が主……』

「お前もだ！　何考えてやがる！」

ボロ雑巾ユーノをぺいっと放り捨て、レイジングハートに指を突きつける。だが、レイジングハートはクールに電子音声で返した。

『マスターが望んだのです』

「……は？」

こんな、吐くような過剰なトレーニングを？　一体、何でそこまで……

『あなたのためです、ヒデト』

「……何だよ、それ」

俺のため？

『暴走体との戦いで、あなたはマスターを守り、幾度と無く傷ついた』

まあ、確かにガラスの雨を浴びたり猛獣の爪で切り裂かれたりはしたが……

「俺の身体なんて……放っておけば勝手に治るんだ。そんなに気に病む必要なんて無いだろ」

そうだ。俺の身体は特別製なんだ。いくら傷付こうが、砕かれようが、すぐに回復する。痛みを我慢していればいいだけの話だ。俺の怪我なんて瑣末なことで、なのはが悩む必要なんて……

「……違う、よ。それは、違う」

なのはが、ふらふらと立ち上がった。まだ寝起きのようにふらふらしているが、目は、まっすぐに俺を見ていた。ふらふらと数歩進み……俺の身体に、手を回した。至近距離から俺の顔を見上げ、言う。

「治るから、傷ついていいなんて、絶対に違う……！」

真っ直ぐな瞳に気圧される。

「秀人さんが私を守って傷つくなら……」

決意を込めた目が、言葉が、心地よく耳に届く。

「私は、『私を守る秀人さん』を、守る」

それだけ言って、電池が切れたように、ぱたっと倒れた。それを、受け止める。

腕の中で寝息を立てるなのは。思わず、苦笑が漏れてしまう。

「……傲慢だったな。『俺が守ってやらないと』だなんて」

弱い子だと決め付けて。でも、それは間違いだった。

『私を守る秀人さん』を守る。

あれは、本気の目と言葉だった。なのはという女の子は、俺が考えていたよりも、ずっと強い子だったらしい。

手櫛で髪の毛を梳いてやり、ベッドに横たえる。

「……レイジングハート、ユーノ」

『はい』「あいたたた……何だい？」

「俺にも、魔法の訓練を頼む。いつまでも『インパクト』一辺倒じゃあ……」

なのはの、綺麗な栗色の髪の毛を撫でる。
「この先、なのはを守れない」

◆　◆　◆　◆

「ふああ～……」
朝日が眩しくて目が覚めた。頭に、まるで錘が乗っかっているように重い。
そう、昨日は［今朝のご飯は何にしようか］［先生に何て言い訳しよう］レイジングハートと［新しい食器を使うのが楽しみ］マルチタスクの［あーあ、髪の毛ぼさぼさ］れんしゅ、う！！
「うぐううっ！！」
頭が……痛い！
「ふうっ……あ、あぐっ！」
痛い……痛いッ！

「はあっ、はあっ……！！」
これは多分、昨日の訓練の後遺症みたいなものだろう。

並列同時思考（マルチタスク）。

高度な演算を必要とする魔法を、いくつも同時に展開するためには必須の技能……らしいのだが。
「頭、痛いよぉ……」
ずきずきと疼痛が頭に住み着いてしまっている。
「だから、言ったじゃないか。いきなり五つは多すぎるって！」
ユーノ君が、小さな手で私の頭をぽむ、と抑えた。
「あう～……」
じわじわ～、っと痛みが引いていく。
「とりあえず、痛み止めしておくから」

「ありがと～……」
……ようやく、痛みが引いた。まだ少し、頭が重いような気もするけど。
「レイジングハート……今日の訓練メニューはどうしよっか？」
「なっ……なのは！？」
ユーノ君が、飛び上がるように驚いた。まあ、言いたいことはわかるんだけど。
「駄目だ！　今日は、魔法使用もマルチタスクの使用も厳禁だ！」
「あっ！？」
必死……いや、怒気さえ滲ませて、レイジングハートを取り上げられた。
「権限行使。二十四時間の、マスター『高町なのは』による一切の機能の使用を……」
ユーノくんには、今のところ、私より上位の権限がある。それは、もし魔法が暴走しそうになったとき、即座に停止させるためのものだ。これを行使されたら、いくらマスター登録されていても魔法は使えない。それだけは……絶対に駄目だ！
「ユーノくん！！」
ダンッ！と床を強く叩き、ユーノくんの声を遮る。
「……もう、嫌なの。私に力が無くて、秀人さんが傷つくのは」
一日の遅れが、また、『あれ』を繰り返すかもしれない。切り裂かれた身体。あふれる血液。蒼白になった顔色。私を安心させるために、無理やり作った歪な笑み。もう……あんなのは沢山だ。
「だから、お願い。練習させて、ください……もう、あんな無茶はしないから。ちゃんと言うこと聞くから……！　お願い、お願いします……！」
涙で滲む目を目蓋で隠し、土下座するように頭を深く、深く下げる。嗚咽が漏れないよう、唇を噛み締め。

ふう、と。諦めたような吐息が、耳朶に響いた。
「内容変更。これより十二時間、マルチタスク二つのみの使用を許可」
「あっ……ありがとう！」
顔を上げる。ああ、良かった……本当に。
「僕が『いい』って言うまで、基礎以外の事に手を出したら駄目だからね！」
「……はい」
とにかく、起きよう。
のそのそと身体を起こし、台所に向かう。冷水で顔を洗うと、いくらか気分がしゃっきりした。痛みというレベルではないが、頭が重い。
「う～……」
冷蔵庫を物色。アジの開きと、豆腐があった。コンロに火をつけ、鍋を乗せ、水を入れる。湯気が出る程度に温まったら、削り節を入れ、一煮立ち。出し殻を取り出し、お味噌を溶いて入れる。もう片方のコンロに火を点け、網に載せたアジの開きを乗せる。味噌汁に豆腐を一センチ角に切って入れる。味噌汁の火を落とし、蓋をする。さて、あとは、アジが焼けたら朝食の準備は完了っと。
「随分と手馴れてるんだね」
「ん……まぁね」
伊達に数年、半一人暮らしをしていない。この程度の作業なら、寝ぼけた頭でも勝手に身体が動いてくれる。さてと。秀人さんを起こそう。
「秀人さん、おはよう」
ベッドに膝立ちし、秀人さんの寝顔を覗き見る。しばらくすると、
「ううん……」と呻き、むくっと上半身を起こした。
「……おはよう、なのは」
ふわあ、と大あくび。
「朝ごはん、できてるよ」

寝癖が付いた髪の毛を梳いてあげる。
「ありがとな」
そして、もそもそと起きだしてきた秀人さんが顔を洗い、食卓についた。

あ、いけない。鞄の中身、この前のままだ。
がさがさと鞄の中身を入れ替える。すると、見慣れないプリントが出てきた。わら半紙のそれには、こう書いてあった。
『授業参観のお知らせ』
「……」
配布された日付は、大体一週間前。適当に鞄の中に突っ込んでいたっきり、忘れていたようだ。
台所で、食器を洗っている秀人さんを見る。
「……あ、」
声が、出せない。ただこのプリントを見せて、『来てください』と言えばそれでいいのに。
「ん？」
秀人さんが、視線を感じたのかこちらを振り返った。
「どうした？」
――今日、授業参観があるのでも。私の口からその言葉が出ることはなかった。
「……ううん、何でも無いよ」
無理矢理、笑顔を作る。プリントをぐしゃっと丸め、屑籠に放り込んだ。

◆　◆　◆　◆

なのはが出掛けて行った直後……ばたん。俺は、笑顔で手を上げた姿勢のまま、少し色あせた畳に倒れこんだ。
「ぐおおお……頭が割れるううううう……！！」

なのはの前では格好付けていたが、もう限界だ。頭の中を金槌でせわしなく叩かれているような激痛。

「……大した根性……いや、意地っ張りだね、君も」

ふう～、とため息をつくユーノが恨めしい。

「うっせー……こんな情けない姿、なのはに見せられないだろ」

一歩も動けない。だらだらと脂汗を垂らしながら、畳と見詰め合う。あら、少しカビているわ。いやだもう、ウフフフフ……

「秀人！　気を確かに！」

ハッ！　あ、危ない……危うくアッチの世界に飛んでいくところだった。

「全くもう……なのはもそうだけど、何でそんな無茶するんだよ。最初は、二つ同時から始めて、徐々に慣らしていくのが普通なのに」

「えっ……？」

その発想は無かった！

「『その発想は無かった』みたいな顔するなーーー！！」

はぁ……今日はもう駄目だ。ずるずると這い、ベッドから毛布を引っ張り下ろし、床で寝る。そうして、何時間寝ていただろうか。目を覚ますと、日は真上近くに昇っていた。

横に傾いた視界の中、屑籠に見慣れない色の紙が捨てられていた。腕を伸ばそうとして……断念。無理。動けない。

「ユーノ……それ、取ってくれ」

「はぁ、やれやれ」

ぱさっと目の前に置かれる紙。

「読んでくれ」「自分で読め！」

ちっ。

えーと、なになに？

「三年三組、授業参観のお知らせ……？」

「ジュギョウサンカン？　何だい、それは？」

「ああ、学校行事の一つでな。授業風景を保護者が見に来る……って、えええええ！？」

頭を支配する痛みを気合で無視し、立ち上がる。プリントに目を通す。

「うわっ……！」

――日程は、今日！

「あンの、馬鹿！」こんな時にまで！

『授業参観に来て欲しい』と一言言えば済むものを、あの子は、また変に遠慮して……！

一張羅のスーツの袖に腕を通し、ネクタイを締める。

「どうしたのそんなに慌ぶぎゅる！」

ユーノの首根っこを掴み、窓の外に停めてあるバイクのリアボックスにスローイング！

「あああああ！？」

説明は後だ！

「行きながら念話で説明する！　とにかく行くぞおおおお！！」

窓を跨ぎ、バイクにキーをぶっ挿す！　ヘルメットを被り、発進！

「ぎゃあああああああああ」

◆　◆　◆　◆

……やっぱり、こうなったか。

職員室で担任に頭を下げながら、ひたすらそんな事を考えていた。

金曜日のエスケープに続き、月曜日のズル休みだ。そりゃあ、いくら温厚な先生でも怒る。

「高町さん、ちゃんと聞いてるの！？」

「……はい、済みませんでした」

惰性で優等生の真似事をしていたが、前回のエスケープと、昨日のサボタージュの二件で、完全に信用を失ってしまったようだ。

職員室を、一礼してから出る。詰まっていた息を、はあ、と吐き出

し、教室へと向かった。クラスメイトたちは、皆どこか浮き足立っている。まぁ、それは仕方ない。何せ、年に二回の授業参観なのだ。勉強が出来る子も、そうでない子も、親にいい所を見せようと張り切っている。私はというと……頬杖を突いて、窓の外をぼうっと見ていた。机の上には、申し訳程度に教科書とノートを広げている。が、これを今日使うかどうかは不明だ。

「ね、ね、高町さん」

クラスメイトの誰かに、声を掛けられた。無視しても良かったが、波風を立ててもメリットは無い。顔を上げ、作り笑顔の仮面を被る。

「あ、……なに？」

しまった……この子の名前知らない。

「高町さんの家族って、どんな人が来るの？　お父さん？　お母さん？」

――ぴき

作り笑顔の仮面に、一瞬ヒビが入った。

「え」

怒るな。誤魔化せ。無視しろ。

「えっと……」

あんな奴らのこと、思い出すな！　すう～、はあ～……よ、し。落ち着いた。落ち着いた。私は落ち着いた。私は落ち着いた。怒ってなんかいない。

「……もしかしたら、今日は都合が悪くて来れないかもしれないって」

「そっかー、残念だなぁ」

何が残念なんだ！　ぎりぎりと、机の下に隠した手を硬く硬く握り締める。

「あ、おい八代！　先生来たぞ！」

その時、扉から外を見ていた男子が、私に話しかけてくる女子――八代というらしい――に大声を浴びせた。

「うっさいアホ葉山！」

男子は、葉山というらしい。八代さんは舌打ちをして、葉山君を睨み付けた。

「ンな大声出さなくても聞こえてるっつうの！」

「お前と一緒に高町さんまで怒られたらどうするんだよ！　さーちゃん先生、怒るとマジ怖いんだぞ！」

ついさっき実体験したばかりだけど。ふぅ……とりあえず、この葉山君には感謝だ。八代さんの話を強引にでも断ち切ってくれたことだし。

「またね」と席に戻っていく八代さん。葉山君は、何故かまだ私の席の近くにいた。

「……なに？」

声を掛けると、びくっと身体を硬直させ、目がきょろきょろとせわしなく教室内を泳ぐ。

どうしたんだろう？

「あっ、た、高町……その、あいつ、五月蝿いだろ？　昔からそうなんだよ。許してやってくれ、な？」

「うん」

どうやら、八代さんのフォローをしたかっただけらしい。もういいから、さっさと席に戻ればいいのに。あ、ほら。

「葉山君！　席に戻りなさい！」

先生に見つかっちゃった。私は目を背けていたから、目を付けられる事は無かった。

三時間目と四時間目が授業参観だ。二時間目が終わる頃になると、教室の雰囲気がそわそわし出し、廊下側の窓を気にしだす子が増えてきた。

『マスター、集中力が乱れています』

シャツの中に隠したレイジングハートからの注意に、ハッと気付く。

（ごめん）

登校してから、ずっと発動していたマルチタスクに意識を戻す。

家に帰ってからでは、練習時間が足りない。私には、休んでいる暇は無いのだから。

数は二つ。一つは、黒板の文字をノートに書き写すもの。もう一つは、基礎魔法を頭の中でシミュレーションするもの。

『順調です。段々と構築速度が上がってきています』

二つの魔法が同時に使えるようになれば、戦い方の幅も広がる。秀人さんに守ってもらってばかりの私を、変えられる。

『初歩攻撃魔法・インパクト。初歩防御魔法・プロテクション。初歩拘束魔法・リングバインド。封印魔法・シーリング。以上の四つは、個別に発動する分にはもう問題無いでしょう。あとは、発動時間の短縮に努めて下さい』

レイジングハートから及第点を貰う。とはいえ。

『では、新しい魔法を教えます』

鍛錬に休みは無い。教わってわかったことだが、魔法というのは基礎魔法だけでも膨大な数がある。もちろん、全てを習得する必要はまだ無いが、私の魔導師としての『適性』を計るためには、浅く広く覚える必要があった。

『今日だけで、最低でも五つ、習得して頂きます』

（うん、任せて！）

私は、へこたれない。私のために。そして、秀人さんのためにも。

『マスターの魔力量ならば、基礎のプロテクション・リングバインドでも強度は十分。ですので、新たな攻撃魔法を覚えていただきます』

（……うん）

攻撃魔法。その言葉の重みで、おへその下がずん、と下がる。

『気が進みませんか？』

（……ううん、大丈夫）

私は、私を守る秀人さんを守る。そう決めたんだ。

『恐らく、マスターの敵性は中・遠距離型。まず、攻撃の柱となる、直射型砲撃魔法を……』

ががやと廊下と教室が騒がしくなってきている。休み時間に入り、化粧でめかしこんだクラスメイト達の母親や、スーツを着た父親がぞろぞろとやってきていた。

思わず……無意識で。私は、来る筈の無い人物を探してしまった。

(そうだ。来るはずが無い。頼んですらいない。プリントだって、屑籠に捨ててしまった)

『魔力を、一直線に射出するのです。簡単に聞こえるでしょうが、束ねた魔力が拡散しないよう、砲撃の先端にまで気を配る必要があります』

授業が始まる。先生が問題を出すと、普段は全く手を上げないような生徒までが、我先にと手を上げる。当てられた生徒は、嬉しそうに、教室の後ろの壁際を、そこにいる親にアピールするように答える。

休み時間に入ってすぐ、親の元へ行くクラスメイト達。一様に笑顔だ。その『親子』というものの姿が、ちくちく胸を刺す。

その中から、八代さんと葉山君が席にやってきた。

「高町さ、ムグ!?」

何かを言おうとした八代さん。まあ、大体想像がつく。残念だったね、とか、そんな話だろう。それを、口を塞ぐことで阻止したのは葉山君だった。八代さんは、乱暴に葉山君の手を振りほどいた。

「何すんのよアホ健太!」

……健太?

「誰がアホだバカ望! 少しは空気読め!」

……望?

下の名前(多分)で呼び合っている。不思議に思って夫婦漫才を見ていたら、二人揃ってバッ!と振り返った。

「違っ、高町さん、誤解しないでね!? 単に、家が近い幼なじみってだけだから!」

「そうそう！　第一、俺は……！」
顔を真っ赤にして俯き、もじもじと指をいじり出した。何なんだろう。用が無いなら、さっさとどこかへ行って欲しい。マルチタスクを維持するのって結構大変なんだよ？
あ、チャイム鳴った。やれやれ……

授業参観もそろそろ終了。
（……いつものことじゃないか。今までだって、一人でやってきたじゃないか）
そんな時だった。
――から
教室のスライド式のドアが、ゆっくりと開けられる音。本人としては気付かれないように開けたつもりなのかもしれないが、バレバレだったりする。……遅刻してもすぐバレてしまう、魔のドアだ。
そんなドアを開けて、時間ギリギリにやって来たのは。

秀人さん。

「え？」（え？）
マルチタスクが、驚きのあまりぽんっと解除される。クラスの視線は、また黒板に、先生に戻る。でも。私は、秀人さんから目を離せない。
秀人さんが私に気付き、ひらひら、と控えめに手を振った。
でも……何で？　プリントは捨てたのに……
がさ、と秀人さんがポケットから取り出したのは、くしゃくしゃになった、授業参観のお知らせだった。……そっか、見つけちゃったんだ。
ああ、どうしよう。顔がにやけてしまう。気を抜いたら、くすくすと笑い出してしまいそうだ。

「秀人さんっ！」
授業が終わってすぐ、秀人さんのところに駆け寄った。
「悪い。もう少し早く来ればよかった」
「ううんっ、嬉しい！」
ぎゅー、っと、抱きつく。
「ぎゅー！？」
……あれ。なんか、ポケットから変な声が。
「あ、忘れてた」
無造作にポケットから引っ張り出したのは、栗色の毛並みをぼさぼさに逆立てた、ユーノくんだった。
『……やぁ、なのは』
「どうしたの？　なんかボロボロだね」
秀人さんに聞いてみた。ユーノくんは疲労困憊で、ぐったりとしている。秀人さんは気まずそうにそっぽを向いた。
「バイクで来たんだけど……途中でユーノ落っことしちゃって」
はっはっは。参った参った。……と、明らかに笑って誤魔化そうとする秀人さん。
『咄嗟にプロテクション張ったから助かったものの……普通に死ぬわあああああ！！』
机の上に立ち、がーっ、と怒る。
「きゃー！　かわいいー！」
……しまった、見つかっちゃった！
「かわいいー！」「これ高町さんのペット？」「名前なんていうの？」
クラスメイト達が、ユーノくんに殺到する。見た目はフェレットだし、小動物が好きな子にはたまらないだろう。地の性格は……まあ、不幸体質のうっかり者だけど。
私が避けたいのは、クラスメイトの質問攻めではなく……
「高町さんっ！」
「……うわっ」

この、情熱が空回り気味の先生に見つかってしまうことだったのに。

だがしかし、先生は私ではなく、秀人さんに詰め寄った。……ああ、そうか。秀人さんを私と同じ『高町』だと勘違いしたのか。

「ペットの連れ込みなんて非常識です！」

「あ、済みませんでした」「済みませんでした」

ぺこ、と素直に謝る。

「もう、今回だけですよ？　……もう」

ちら、ちら、と、女子にもみくちゃにされているユーノくんに視線を投げよこしている。

「……触ってみますか？」

提案を口にしてみた。

「いいのッ！？」

目を輝かせて食いついてきた！

「え、ええ……ユーノくん、こっちおいで」

『りょーかい』

女子の手をするっと抜け出し、とたたた、と寄ってきた。抱え上げ、先生に手渡す。

「か……かーわいぃー！！」

……先生が、壊れた。

「あはははは……（ユーノくん、モテモテだね）」

「ぎゅ、ぎゅ～～うう……！！（なのは……助けて、苦しい！　出ちゃう！　中身出ちゃううううう！！）」

「（頑張って。私の平穏な学校生活のために）」

「……！　……！」

多分だけど、この先生、猫には嫌われるタイプだろうなぁ……

ソレを見て、秀人さんと顔を見合わせて笑った。

第三話（後書き）

ユーノェ、、、

第四話（前書き）

ちょっと短めです。キリがいいので。

第四話

学校の校舎というものは、昼こそ生徒でごった返し活気に満ちているが、夜になると途端に不気味な異界と化す。上履きの底が床板を擦るキュッキュッという音がいやに大きく響き、より一層の不安感を煽り立てる。

さて、何故私がこんな夜の校舎に居るのかと言うと。

「……き、肝試しらしくなってきたよね、うん！」

「そうそう！これくらい迫力が無いとな！」

そう。肝試しである。私と、八代さんと、葉山君の三人で。もちろん許可は下りていない。前に通っていた私立校ならともかく、公立校だ。多くの監視カメラも、ガードマンもいない。せいぜい、宿直の先生がいるくらいだ。鍵が壊れている裏口からこっそり侵入するなんて、たやすい事。

「お、おい望。怖いなら、帰ってもいいぞ……？」

「ふ、ふん！　そんなに高町さんと二人きりになりたいわけ！？」

「なっ……ンな事言ってないだろ！」

「そういうことでしょ？　馬鹿健太！」

気丈に振る舞っているが、かたかたと笑っている膝を見れば、それが虚勢だと明らかに分かる。

「二人とも、静かに。見つかっちゃうよ？」

こうも五月蝿かったら、宿直の先生が目を覚ましてしまう可能性がある。

「あ、悪い……」「ごめんなさい……」

（はぁ……なんでこうなっちゃったんだっけ？）

私は何も、本気で肝試しをしに来た訳じゃないというのに……

話は、ほんの数十分前にまで遡る。

・・・

ああ、終わった……私の平穏な日々……
「へー、楽しそうじゃん！　俺も混ぜてくれよ！」
「ちょっと、健太！？」
へ？　あれ？　なにこの展開……
『マスター、どうされますか？』
『いやぁ……どうしよっか……？』
もしここで断ったら、余計に怪しまれてしまうかもしれない。それなら。
「いいよ。三人で行こう」
「よっしゃ！」「ええっ！？　私も！？」
手元に置いて、監視していた方がマシ。そう決めた。
『大丈夫だよ。この二人には、適当なところで消えてもらうから』

・・・

「じゃ、私は最後になった。
私は最後だね」

へっぴり腰の八代さん、おっかなびっくりの葉山君が出発し、スタート地点に一人残される私。さてと、行くか。懐中電灯片手に、階段を上る。

今日は、ユーノくんも秀人さんもいない。ユーノくんは放出してしまった魔力の回復のため。秀人さんはお仕事らしい。

暗闇の中、胸元でキラリと輝くレイジングハートだけが、今日の相棒だ。

二階を制覇し、三階へ。その時、事件は起きた。

ずくん、という、お馴染みの感覚。そう、これは……

「ジュエルシード……！」

かなり近い。ほんの、数十メートル先だ！

「きゃあああああああああ！！」「ぎゃあああああああああ！！」

「八代さん！　葉山君！」

最悪だ！　ああ、もう！　だから一人で来たかったのに！

「レイジングハート、セットアップ！」

『Ｓｔａｎｄｂｙ，ｒｅａｄｙ，ｓｅｔ　ｕｐ！』

弾ける桜色。ジャケットの裾を翻し、理科準備室に急ぐ。

角を曲がる。そこで見たのは、床にぱったりと倒れる二人のクラスメイト。そして。

人体模型。

身体の正中線の沿って、筋肉組織が半分だけ露出した、理科の教材だ。残り半分の『普通の身体』は、不気味な無表情。直立しているところしか見たことが無いソレは、腕を曲げ、足を曲げ……まるで、生きているように動いている。

「き、」

夜の校舎に、動く人体模型。それが、ジュエルシードによって動

いていることも分かっている。分かってはいても……怖いものは怖い！

『マーーー！！』

動いたあああああこっち来たあああああああああ！！

「きゃあああああああああああああああああああああああああ！！！」

『ｉｍｐａｃｔ　！』

どっごおおおおん！！

『マーーーーーーー！？』

漫画ちっくな動きで廊下の端まで吹き飛んでいく人体模型。

しゃかしゃかしゃか……！

ひいいいいいいいいいいい壁を這って近づいてきたあああああああああ気持ち悪い怖いいいいいいいいい！！

「来ないで！　来ないでえええええええええええ！！」

『マスター、落ち着いて下さい！』

「いやあああああああああ！！」

目に涙が浮かんでくるのを感じつつも、それを拭うことも忘れて攻撃魔法を乱射する。

『マ、ママッ、ママママー！！』

悔しいことに、ほぼ全部避けられてるけど！

『落ち着いてきましたか、マスター？』

「はあ、はあ……！　うん、ごめんね……！」

『練習どおりに。やってみましょう』

そうだ。集中集中。

――術式選択。射撃魔法・シューター。

――魔力循環。

よし……練習どおり。レイジングハートの先端に、桜色の魔力スフィアが形成されていく。行くぞー！

「シュー、」

『ヒョオオオオオオオオオオオオッ！！』

「、きゃあ！？」

完全に、不意打ちだった。

攻撃魔法を発動しようとした瞬間、物陰から飛び出してきた『何か』に、体当たりを喰らわされた。軽い攻撃だったことが幸いし、ダメージらしいダメージは無い。でも、攻撃魔法がキャンセルされてしまった。

「このっ、何が！？」

闖入者の姿を確かめる。

窓から差し込む月明かりに照らされる、骨ばった……というか、

「……骨格標本？」

だった。

すかすかの身体をくねらせ、月明かりを浴びて謎のポーズを決め……

『ヒョーゥ！』『マーー！』

びしいっ！

人体模型も釣られて、左右対称のポーズを取った。

「……ねえ、レイジングハート」

『なんでしょうか、マスター』

「……もう帰る」

『マスター！？』

果てしなく脱力を誘う二体の暴走体に……なんというか、萎えた。

主に闘志とか、そんな類のものが。

「うん……もういいや。害は無いみたいだし、放っておこうよ」

さーて、八代さんと葉山君を回収して帰ろうっと……

『マスター、気を確かに！』

ぽんぽん、と気安く肩を叩かれた。気だるく振り向くと、人体模型と骨格標本が、私の両肩を掴み、『うんうん』とでも言いたげに

しきりに頷いていた。
　元はといえば……元はと言えばあああああああああ……！！
――ぶちん。
「お前たちのせいだろおおおおおおおおおおおおおおおっ！！」
『ｉｍｐａｃｔ　！』
ドパァン！
『マー！？』『ヒョー！？』
衝撃波を叩きつけた。
今更だが、無様に怯えていたついさっきの自分の姿を思い出す。
ああ、みっともない。超みっともない！　たかが理科の教材ごときに！
萎えていた闘志が、モリモリと鎌首をもたげてきた！
『魔力値、最大まで回復……』
レイジングハートの、若干呆れたような声は聞き流しておく。
「そう……そんなに遊びたいんだ？」
じゃきっ。レイジングハートを突きつける。
『マッ……』『ヒョッ……』
じり……
人体模型と骨格標本が、無表情のまま後ずさった。
ふふ、ふふふふふ。何をそんなに怯えてるのかな？
「遊んであげるよ……！」
『Ｓｈｏｏｔｅｒ』
術式選択・シューター！
魔力スフィア、形成。数は、六！　フル回転！
「シューーーーーート！！」
ドドドド！
連射された魔力弾は、正確に二体の獲物に肉薄し……
『マッ！』『ヒョッ！』
避けられた。
だけど、それは予想済み。

私が今の段階で行使できるのは、一つのタスクにつき三つが限度。
そして、私のタスクは最大三つ。三発～九発を発射できる計算だ。

足元を狙った一発を、それぞれ飛び上がって避ける。飛び上がり、天井に張り付こうとした所を、さらに一撃！

――ドンッ！

天井で魔力弾が弾け、二体を宙に躍らせる。そこに、残り二発のシューターを打ち込んだ！

「シューーーーート！！」

――ガンッ、ガンッ！！

『マーーーーー！！』『ヒョーーーーーーーーーーー！』

人体模型の心臓部分と、骨格標本の頭蓋骨に着弾！

封印されてたまるか、と動き出す二体の暴走体。

『ｒｉｎｇ　ｂｉｎｄ』

シューターの行使に割り振っていたタスクの一つを、拘束魔法に切り替え。リングバインドで四肢を拘束。もう一つのタスクで、封印魔法を発動！

「『不屈の心は』」

二体が、逃げようともがく。

「『この胸に』！」

浮かび上がる、シリアル２０とシリアル１７。

「ジュエルシード、シリアル２０、シリアル１７……封印！！」

桜色の光が、三階の廊下を一杯に満たし……

がしゃん、と床に投げ出される二体。意外に重いそれを、何とか理

科準備室に押し戻す。
「何か……掴めたかも」
今日のこの戦闘で、確かな手応えを感じた。がむしゃらで、行き当たりばったりだった今までの戦い方に、確固たる『芯』が通ったような、そんな感じだ。まだそれが何なのかはっきりはしないが、一歩進んだことは間違いない。
「八代さん、葉山君」
さて、後片付けだ。
八代さんと葉山君を揺り起こす。二人とも、単にショックで気絶していただけだったらしい。
「二人とも、立てる？」
「は、半分こ怪人が！」「無機質な坊ちゃん刈りが！」
……あー。これは、トラウマになるな。抱き合って、がたがたと震えている。
「何のこと？　そんなの、見てないよ？」
すっとぼけた顔を作り、首を傾げてみせる。
二人は納得しかねているようだったが……あんな、非常識極まりない現象、受け入れられるはずが無く。
「夢……だったんだよな」
「そうだよね。いくらなんでも……」
よし。
「そろそろ帰ろう？　もう時間も時間だし……」
薄暗い廊下の向こう、くたびれたスーツ姿の先生が見えた。寝起きなのか、少し目がぼんやりしている。多分、騒ぎを聞きつけて起き出してきたのだろう。私達を呼び止めるように手をこちらに差し出し、緩慢な動きで近づいてきた。やばっ！
「行くよ、二人とも！」
「お、おう！」「急げ急げ！」
顔を見られないように、斜め下を見ながら疾駆する。

――あんな先生、この学校にいたかなぁ……？

◆　◆　◆　◆

「……ってことがあってね」

夕食の席。俺は、なのはの話を聞いていた。それによると、胆試しの最中、なんと、なのはの通う小学校に潜伏していたジュエルシードが発動し、それを封印したらしい。

「それでね、戦い方がわかったんだ！」

嬉しそうに笑顔を振りまく。やっぱり、なのはには笑顔が一番似合う。

掴んだ答え。それは……

「まずは『小さいの』で敵の逃げ場を塞ぐ！」

手を横に凪ぐ仕草をする。

「追い詰めてから、『大きいの』でとどめの一撃！」

ぐっ、と拳を握り、前に突き出す。

『マスターの適正は、砲撃魔導師です』

机の上に乗ったレイジングハートが、全員に聞こえるように言った。

「遠距離型ってこと？」

『平たく言えば。ただ、マスターの防御力にはまだまだ伸びしろがあります。近接特化型の攻撃にも耐えられるようになるでしょう』

よくわからんが……とにかくなのはは、方向性が定まったらしい。

「なあ、俺は？　やっぱり……その、近接特化型とかいうのになるのか？」

一応、シミュレーションではバレットという射撃魔法を使ってみた。だが、命中率は散々なものだった。四発に一発、的の端っこにでも掠ればいい方で、あとは見当違いの方向へ飛んでいきレイジングハートに呆れられた。

とはいえ、散弾銃のようにばら撒くことで的を粉砕できたのだが。

あと、魔法という程でもないが、身体の表面や内部に魔力を循環させることに関しては、なのはの数倍は緻密に行えているらしい。
要は、スクルトとバイキルトは出来るが、メラ一発も打てない……ということだ。どう見てもスタンドアロンの前衛タイプだろう。
『一応は、それを目指しましょう』
「一応……？」
気になる言い方をする。俺に、それ以外に適正なんてあるのだろうか？
『まだ、ヒデトの正確な適正は判明していません。ですので、一応です』

◆　◆　◆　◆

翌日。
珍しいことに、担任が学年主任に怒られていた。学年主任は年配の人で、締めるところはしっかり締める、真面目な人だ。
「あなたは！　いつまで学生気分でいるつもりなんですか！」
「すみません、すみません！」
八代さんを見つけたので、聞いてみた。
「先生、昨日の宿直だったらしいんだけど、朝まで居眠りしちゃったんだって」
宿直の意味無いよね、それ。
はたと気付く。
「……じゃあ、昨日のスーツの先生は……？」
「……」
返事は無い。ただ、顔がさーっと青くなっていく。あはは……まさか、ね。

金曜日のことだった。
「高町さん。明日、サッカー見に行かない？」

八代さんだ。最近、話をするようになった。……二人で話していると、結構な頻度で葉山君が割り込んでくるのが面倒くさいが。今は、サッカー部の朝練でいない。

「健太のいるクラブが、近くの学校のクラブと練習試合するの。それで、みんなで応援に行かないかって話になって」

一応、クラスメイトの私にも声を掛けた、ってことかな。それなら別に、行かなくてもいい。今はジュエルシードの探索と、魔法の練習に忙しい。今こうしている間も、マルチタスクで模擬戦を行っているのだ。

「悪いけど……」

私は行けない。そう言い掛けたのだが、何やら汗臭い葉山君が席に駆け寄ってきたせいで言いそびれてしまった。

「あ、あのさっ、俺の試合、見に来てくれるよな!?　な!?」

う……暑苦しい。何でそんなに私に来て欲しいんだろう、この人。もう、さっさと断ってしまおう。

「悪いけど、用事があるから行けない」

笑顔は作らず、真顔でスッパリと言う。葉山君は一瞬凍りつき、

「な……何で?」と追いすがってきた。

「私も、その、練習しないといけないから」

魔法の、とは言えないが。まあ、スポーツなんて答えたら「一緒に練習しようぜ」とか、更に面倒くさいことになる未来が見えるので、適当に何か答えておこう。料理とか、裁縫とか……

「何の練習なんだ?」

ああ、やっぱり。えーと、女の子が習っていても変じゃなくて、尚且つ男子は絶対にやりそうもない習い事は、と……。

「……お料理」

これで行こう。

「料理?　自分で?」

普通の家庭なら、母親がやってくれることだろう。でも、私の場合は……って、違う違う。あんなの、もう思い出す必要は無いんだ。

私は、新しい二人の家族のためにお料理を作ってあげるんだから。
「ふうん……」
我ながら、言い訳が下手だ。こんなの、気付かれてしまうに決まって……
「そっかぁ……じゃあ、頑張ってな」
……あれ？
ああ、忘れてた。葉山君は、幼なじみの八代さんが全面的に認めるほどの……おバカさんだった。
「来ないんだ、高町さん」
八代さんのその時の表情は……何かおかしかった。残念そうな表情の影に、どこか……暗い喜びが見え隠れしていた。
「……？」
けど、それがどういう意味なのかは、分からなかった。

◆　◆　◆　◆

目の前に現れる、マネキンのように無機質な人影。出現箇所は全くのランダムだ。
「はっ！」
目の前に現れた一体を殴り壊すと同時、背後に現れたもう一体に後ろ回し蹴りを浴びせる。反撃してくることは無いが、なにぶんペースが速い。
「このっ！」
今度は、少し離れた場所に現れた。一歩間合いを詰め、前蹴りで胴体を捕らえる。
ただの格闘訓練ではない。このマネキンは、魔力を込めた攻撃以外は通らないように設定されている。筋力だけでは破壊できない。一発一発に、一定の魔力を込めて攻撃しなければならないのだ。簡単に聞こえるかもしれないが、これが結構難しい。
ひょこっ、とマネキンが起き上がる。今のは、魔力を纏わせるこ

とに失敗してしまった。

「これで……二百！」

最後の一体を、正拳突きで破壊。

「はあっ、はあっ……タイムは！？」

傍らのユーノに聞く。没頭する余り、時間を計っていたマルチタスクを解除してしまった。

「四分二十秒……点数で言えば、七十点」

「あー……くそっ！　厳しいなぁ……」

どうっ、と地面に背を預ける。場所は、町を一望できる展望台。週末にでもなれば、カップルだの夫婦だの親子連れだの人が絶えない。だが、平日の真昼間ともなれば、人通りは極端に少なくなる。そこにユーノが結界を張れば、広々とした練習スペースが出来上がるって寸法だ。ユーノ曰く、『本調子だったら、あのアパートの中を五十倍くらいの空間にもできるんだけどね』とのことだ。便利だな、魔法って。

「それに、マルチタスクの維持が出来てないよ」

うーん……それなんだよなぁ。六つ同時に展開した時は、一瞬で意識が飛んでしまった。それで今は、最低ラインの二つで練習している。しているのだが……どうにも、うまくいかない。まあ、練習あるのみだ。

「悪い。もう一回頼む」

起き上がりかけ……ユーノのちっこい手に止められた。

「少し休もう。適度に休憩を挟まないと、逆に効率が落ちる」

空気が変わった。薄く周囲を覆っていた膜のようなものが、ふっと消えうせた。ユーノが結界を解除したのだろう。近くのベンチに腰を下ろし、水筒に入れてきたスポーツドリンクを飲む。

――ｐｒｒｒ

ベンチの上に丸めて置いてあった上着から、軽快な電子音が響いた。携帯電話だ。取り出し、通話ボタンを押して耳に当てる。発信

者は、見ないでも分かる。
『あ、秀人さん。今どこにいます？』
なのはが、少し弾んだ声で聞いてくる。
「高台で練習してる。もう少しで帰るよ」

「ねえ、秀人」
「んん、何だ？」
「念話があるのに、どうしてわざわざ『電話』を使うんだい？」
あー、そうだよな。普通、そう思うよなぁ。電池残量は気にしないといけないし、圏外になることもあるし、金掛かるし。
「ああ……そういや、お前にはまだ教えてなかったな」
ユーノになら、話してもいいだろう。なのはと、初めて会ったときの話を。

◆　◆　◆　◆

「秀人さ～ん！」
丘の階段を登り終える。頂上の展望台。そのベンチに腰掛けた秀人さんと、その横にちょこんと座ったユーノくんが見えた。はっ、はっ、と少し息切れしてしまう。
「大丈夫か？」
苦笑し、スポーツドリンクの入ったカップをくれた。
「はっ、だい、大丈夫。ありがと……」
ぐいっと一気飲み。ああ、生き返る……
「ずっとここで練習してたの？」
秀人さんの隣に腰掛け、町並みを見渡す。丁度夕焼けの時間らしく、町がオレンジ色に染まっていた。
「いや、練習は結構前に終わった。ユーノと話してたらこんな時間になっちまった」
「どんな話？」

「なのはと初めて会った時の話」
ああ、あのことか。確かに、ユーノくんには話しておいてもいい。
「なのは……」
ユーノくんが、少し同情交じりに何かを言おうとして、すぐに押し黙った。
「別に、遠慮しなくてもいいよ？　もうあんなの、何とも感じないから」
これは、本当に本音。私は今、間違いなく幸せなんだから。

順風満帆とは言えないけど、魔法も、日常も、それなりに上手く行っていた。

けれど……それは、ただの錯覚だった。入っていたのは、小さな亀裂。それが、徐々に広がりつつあることに、私はまだ、気付いていなかった。

第四話（後書き）

原作のなのはが好きな人ごめんなさい。

次回は、ちょっと辛いお話になります。

第五話

――なんで、こんなことになっちゃったんだろう。

「シューター！」

覚えたての射撃魔法を駆使し、うねうねと迫り来る植物の根を破壊する。だが、

しゅるるるる……！

まるで、ビデオの逆再生か早送りを見ているようだ。打ち砕かれた植物の根。それが、まるで数十年分を一気に成長するように再生し、変わらぬ勢いで迫ってくる！

「はっ、はっ……！　もう一発！」

――ドォン！

轟音と共に、魔力弾が残る根を一掃する。だが、

駄目だ、キリが無い……！

「このおおっ！！」

――ギュキキキキッ！

タイヤが限界ギリギリで、波打つアスファルトの路面をグリップする。私の顔面めがけて伸びてきた根は、ギリギリのところで外れた。

「秀人さん！　一旦距離を置こう！　あの、高台まで！」

後部座席に立って乗った姿勢のまま、ハンドルを巧みに操る秀人さんに、半ば怒鳴るようにして立案する。

「了解だ！」

瞬間、強烈な遠心力が私の体を振り回した。必死に秀人さんの首に片腕を回し、落下を防ぐ。視界が百八十度回転し、それを認識する前に強烈な加速。

――ヴァアアアアアアッ！！

バイクのエンジンが悲鳴を上げ、時速百キロオーバーの世界に突入する。

『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　！』

――バキバキバキッ！　バチイイン！

進行方向にバリアを張り、目の前に迫っていた根の集合体を弾き飛ばす。だが、攻撃は止まない。二度、三度と、バリアに巨木のような根がぶつかり、私の体を揺さぶる。

「ねえ、どうして！？　どうしてなの！？」

後ろを振り返る。

町中を覆い尽くした樹木。ビルの外壁を突き破り、舗装された道路を掘り起こし、駐車してあった車を貫いている。

その、どこかにいるであろうジュエルシードの宿主に対して、声を張り上げる。

「聞こえてるんでしょ！？　……八代さん！」

異常な成長を続ける樹木はただ沈黙し、ひたすら私に攻撃を仕掛ける。

――明らかな憎悪を宿して。

話は、数時間前に遡る。

◆　◆　◆　◆

自動ドアを潜ると、そろそろ梅雨入りを予感させる湿った空気が吹き付けてきた。

「これで全部だな」

横で、肉や魚や野菜で、ぱんぱんに膨らんだエコバッグを持った秀人さんが確認する。

「うん、これでだいたい一週間分だよ」

これだけあれば、一週間は余裕で食べていけるだろう。
秀人さんの冷蔵庫は、元々一人暮らしをしていただけあって、本当に小さかった。つまり、中身もそれに準じた量しか入っていなかったわけだ。家族が二人も増えれば、あっという間に底を突いてしまうのは自明の理。
近所のスーパーまで徒歩十分。アパートが割と便利な立地にあって助かった。
秀人さんの両手が塞がっているのに対して、私は手ぶらだ。気が引けて、それとなく一袋奪おうとしたが、のらりくらりとかわされてしまう。
「今夜のおかず、どうしようかなぁ……」
せめて、美味しい手料理で恩返しをしよう。あまり贅沢はできないが、できる範囲で。
そして、家まであと数分といった所で、サッカーのユニフォームを着た少年と、私服姿の少女の集団とすれ違った。
「あ、高町!?」
……ん？　誰だろう。
振り返ると、集団の中に二人、見知った顔を見つけた。
「……あ、八代さん、葉山君」
ああ、そういえば、今日だったっけ。サッカー部の練習試合。すっかり忘れてた。
「偶然だな！　どこ行くんだ?」
集団の中から出てきて、こっちに来た。ああ、嫌な予感しかしない……
「今から帰るところ」
先手を打っておかないと。このままじゃ、なし崩し的に付き合わされる。
「そういうわけだから。じゃあ、試合頑張ってね」
愛想笑いでそう言い、踵を返す。特に嫌いな人というわけではないけど、サッカーには興味が無い。興味が無いものを見て、時間を

浪費したくはない。
「あ、あのさ、折角だし、来てくれよ！」
「ひゅー！」「ハヤマ、大胆！」「おお、直球で行ったぞ！」
他の男子がざわめき、女子はきゃーきゃー言いながらこっちを見ている。
……はぁ。何て言って断ろう。
『今からお昼ご飯だから』。よし、これで行こう。秀人さんと一日中過ごせる貴重な週末なんだ。他の用事は、後回しにしよう。
「あ、もしかしてお昼まだ？」
まさかの援護射撃。八代さんに先制された。
「あ、うん。だから……」行けない。
「私たち、こいつらの分までお昼ご飯持ってきてるから、一緒に食べない？　女の子一人分くらいなら何とかなるし」
「……えーと」
どうしよう……今度こそ、断る理由が無くなっちゃった。
こういうの、ありがた迷惑って言うんだっけ……昔の人は、うまいことを言ったものだ。
『秀人さん……どうしよう』
念話で、秀人さんに助けを求めた。
『さすがにこれで断ったら、月曜日から気まずいんじゃないか？休みは明日もあるんだし、ちょっとだけ見て、昼飯だけ食べたらすぐ帰ってくればいいよ』
逡巡すること数秒。
「……わかった、行く」
私は、同行することにした。はぁ……せっかくの休日が……

「ねえねえ、今日は誰の応援する？　佐々木君？　それとも、堀川君？」
……何で、チームプレイのサッカーで、特定の誰かを応援するんだろう。チームを応援するんじゃなかったの？

「……」「……」「……」

なぜかユニフォームを着た数人が聞き耳を立てている。

「えーと……チーム全員かな。ははは……」

愛想笑いの仮面を被り、意味不明な話にも相槌を打つ。ああ、早く帰りたい……

「そっかぁ……私はね、佐々木君の応援するの！　お弁当も作ってきたんだ！」

耳元に顔を寄せられ、こしょこしょと喋られる。こそばゆい。

八代さんは、数人の女子に囲まれていた。

「ノゾミ、アンタはやっぱり葉山？」

「……うん」

すこしはにかみ、控えめな笑顔を見せる。手には、やけに大きい包み。話からすると、あれは葉山君に作ってきたお弁当だろう。幼馴染だけあって甲斐甲斐しいなぁ。

そして、市民運動場に到着した。反対側のコートには、赤いユニフォームを着た少年が集まっている。あれが対戦相手かな。キャプテンらしき人と、葉山君が挨拶をする。

葉山君がキャプテンなんだ、このチーム。大丈夫かな？

そんな、ちょっと失礼なことを考えてしまう。いや、だって……葉山君だよ？　誰かに指示を出すなんて、出来るの？

審判のおじさんがホイッスルを鳴らし、試合が始まった。

ボールが蹴りだされた途端、女子が爆発したように大声を張り上げ始めた。

「堀川くーーーーん！！　いけーーーーー！！」「佐々木―！　負けたら承知しないぞー！」「小俣―！　走れー！」「アホ葉山―――！！　抜かれたら昼飯抜きだからねーーーーー！！」

み、耳がキンキンする……！　私も、申し訳程度に腕を振り、応援する。

「が、頑張れ～……負けるな～」

――ぴたっ。

あれ？　なんか、数人の男子の動きが止まって……

「うおおおおおおおおおおおおっ！」

「ボールをよこせえええええええっ！」

「負けるかあああああああああああっ！」

なんか、いきなり動きが良くなった。どうしたんだろう。

あ、葉山君がボール取った。こうして見ると、なかなか上手だ。キャプテンは伊達じゃないってことかな。赤ユニフォームが葉山君に接近し、ボールを奪おうとする。それを、時々足を蹴られながらも回避し……

――ばすっ！

試合開始から五分。葉山君の蹴ったボールが、相手のゴールネットに吸い込まれた。

「「「「「きゃーーーーーーーーーー！！」」」」」

黄色い声援の大合唱。だが、それをかき消す大音声が向こうのベンチから響き渡った。

「くぉらあああああ！！　負けたら承知しないわよ！？　シャキッとせんかーーーー！！」

相手側の応援をしていたのは、気の強そうな、金髪の女の子だった。

それにしても、すごい。あんな遠くから、こっちにハッキリ聞こえてくるような声が出せるなんて。

「……あれ？」

何故か既視感を感じる。もしかして、どこかで会ったことがあるのかな？　あんな派手な髪の毛、一度会ったら忘れそうに無いけど……って、私が言っても説得力無いか。未だにクラスメイトの顔と名前が一致していないんだし。

金髪の子に気合を注入されたのか、赤ユニフォームが巻き返してくる。そこから先は、本当に白熱した試合だった。これ、本当に練

習試合？と聞きたくなるくらいだった。最後のほうでは、私が、無意識のうちに立ち上がって応援していたのだ。

一点入れ、一点返され、ゴール前でフェイントの応酬。シュートを転がりながら止めるキーパー。貪欲にボールを狙うフォワード。

手に汗握るという言葉を実感したのは初めてだった。そして、試合は三対三のまま延長戦にもつれこみ……

――ピピィーーーーーーー！！

審判の吹いたホイッスルによって、唐突に終わりを告げた。公式戦なら、ロスタイムとか、ＰＫで決着を付けるんだろうけど、あくまでも練習試合。引き分けで終了みたいだ。

「……はあ」

気が抜けて、ストンとベンチに座り込んでしまう。引き分けだったけど、見に来た価値は十二分にあったかもしれない。うん、サッカーを少し見直した。

葉山君たちは、向かい合い「ありがとうございました！」と礼をし、ベンチに戻ってきた。汗まみれ泥まみれだが、妙に爽やかな印象がある。なるほど。これなら、他の女の子達が夢中になるはずだ。

「おつかれー！」「惜しかったね！」

女の子たちは、口々に賞賛の言葉を口にしながら、タオルや飲み物を渡す。

葉山君は、八代さんからタオルを受け取り、顔をガシガシ乱暴に拭いていた。遠巻きに眺める私を見つけ、歩いてきた。

「あ、健太……」

八代さんが下の名前で呼び止めたが、葉山君は片手を挙げただけでこっちに来てしまった。うーん……ちょっといただけない。

「なあ、見ててくれた！？　俺、二点入れたぞ！」

興奮冷めやらぬといった様子で詰め寄ってくる。汗臭いのは、頑張った証みたいなものだ。嫌悪感は特に無い。

「うん、見てたよ。すごかったね」

「だろ！？」

嬉しそうだ。多分、滅多に話すことができないクラスメイトとの会話が新鮮なんだろう。

「あ、八代さんがお弁当作ってくれたんだって。食べてきなよ」

さっき、葉山君が離れてしまったとき、すごく寂しそうな顔をしていたから。柄にも無く、お節介を焼いてしまった。

「……ッ！！」

それは、ほんの一瞬のことだった。瞬きもすれば見逃してしまうような、ほんの一瞬。

八代さんが憎しみに満ちた目で私を睨んだのと同時。

そのポケットから、あの、禍々しい波動を感じた。

「……え？」

だが、その気配はすでに無い。……勘違い、なのかな？

レイジングハートに頼もうにも、ユーノ君に機能を制限されているため細かい探査ができない。とにかく、ユーノくんと連絡を取ろう。不自然に思われないように、念話で。

『ユーノくん、ちょっといい？』

『なのは？』

『あのね……』

さっきの出来事を話す。

『……だから、制限を解除してほしいの』

『わかった。それじゃ、あの交差点まで来てくれる？　直接接触すれば、解除できるから』

次は、秀人さんだ。

『秀人さん、私の電話を……』『了解だ』

聞いていたんだろう。言い切る前に、私のポケットから、軽快なメロディが流れた。ポケットをまさぐるような動作を繰り返し、周囲の目が十分に集まったところで、電話に出る。

「はい、もしもし」
『それっぽいこと言って、抜け出してくれ』
急用が出来たフリをしてこの場から離れる。そうして、ユーノくんと落ち合ってレイジングハートの機能制限を解除。ユーノくんの結界で、八代さんごと一帯を隔離。封印魔法でジュエルシードを封印。
「うん……うん、そう、わかった」
ぱたん、と携帯電話を折りたたむ。
「ごめん、急用ができちゃった。お昼ごはん、一緒に食べられそうに無い」
それだけ言い、立ち上がる。まだ状況がのみこめていないようだった。好都合。
「それじゃあ、また月曜日にね」
踵を返し、駆け出した。
八代さんが持っているであろうジュエルシード発動の鍵は、葉山君の行動が、八代さん以外に向けられることらしい。嫉妬を増幅しているんだろうか？　仲のいい幼なじみが、自分以外の誰かと仲良くしているのが嫌でたまらないとか……でも、他の女の子と話していても、発動の兆候は無い。
（あれ？）
じゃあ、何で私の時だけ……
（ああ、もう！）
グダグダ考えていても面倒くさいし埒があかない！　さっさと封印して、終わらせちゃおう！

『ユーノくん、今どこ？』
『今、秀人と一緒にそっちに向かってる！』
『あと二分もあれば到着だ。その場で待機しててくれ』
『わかった』
見通しのいい交差点で立ち止まる。

えっと、家は向こうだから……ここにいれば、すぐに見つけてもらえるはず。うん、順調だ。この調子なら、本格的に暴走する前に封印できるかもしれない。とにかく、あと一分か二分あれば……

「ちょっと、待ってくれよ高町！」

「……はい？」

……あの、葉山君……何で、ここにいるの？

呆然と立ちすくむ私の前で立ち止まる。

「なあ、何で帰っちまうんだよ？　急用って……いきなりすぎるだろ？」

……えーと、つまり、急用の内容を聞きに、わざわざ走って追いかけてきたと？

「……いきなり入る用事。人はそれを急用って言うんだよ。それで、何か用？　急いでるんだけどなぁ……」

計画をぶち壊しにされたせいで、ついイライラとした口調になってしまう。

葉山君は、捨てられた子犬のような目で私を見る。

「……なあ、高町は……俺のこと嫌いなのか？」

何で、こんな脈絡の無いことを言うのだろう。好きか嫌いかで言えば、今、間違いなく嫌いだよ。

「そんなことより、戻りなよ。八代さん、きみのためにお弁当を一生懸命……」

「お、俺はッ！」

――神様というものがいるのなら、それは、間違いなく底意地が悪くて、根性が腐っているに違いない。

「健太……！　みつけ、」

八代さんが、葉山君を追いかけてやってきて。

『なのは、お待たせ……！』
秀人さんとユーノくんが、バイクで駆けつけてきて。
「高町のことが、好きなんだっ！」
葉山君が、その一言を口にした。
――どさっ。
――きゅいいいっ。
葉山君が言い終わるのと同時。
追いついてきた八代さんが、お弁当を地面に散らかし。
秀人さんとユーノくんが乗ったバイクが、路肩に停まった。
……えーと、今、『好き』って言われちゃったの？　えっと、『好き』……友達としてとか、家族としてとか、いろいろあるけど……この場合は、アレだよね。ライクじゃなくて、ラブの方。……ちょっと待て。ヤバい！
「……」
八代さんは、無言だ。無言で、俯いている。ただ、そのポケットからは、青白い光が段々と……！
それはそうだ。自分の好きな人が、自分以外を好きでいることを、目の前で宣言されてしまったのだから――！
「なのは！」
レイジングハートをユーノくんに渡す。
『制限を解除しました。全機能の使用が可能です』
「早速でごめん！　レイジングハート、セットアップ！」
『Ｙｅｓ，ｍａｓｔｅｒ．　Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ，ｓｅｔ　ｕｐ!』
バリアジャケットを纏い、秀人さんが私に並び立つ。そして、ユーノくんが結界魔法を使う……その、数秒前。

――八代さんのポケットからあふれ出した光が、周囲を覆い尽くした。

カッ！！

周囲が、まるで花火を爆発させたかのように白く染まる。

直前にバリアを張っていなかったら、目を焼かれるところだった。

「……間に合わなかったか」

秀人さんがヘルメットを脱ぎ捨て、グローブに魔力を流し、補強する。

「二人とも、気をつけて！　今回ばかりは、シャレにならない！」

こんなに切羽詰ったユーノくん、初めて見た。だけど、そうなってしまうのも仕方が無い。ジュエルシードは、持ち主の願いが強ければ強いほど、強大な力を発揮する。

八代さんという、人間の依代を得たジュエルシードは、きっと……！

「離れろッ！」

秀人さんの一喝と共に、全力で後ろに飛び退く。

――ズガンッ！！！

数秒前まで私が立っていた場所を、何かが抉った。もし飛び退いていなかったら、砕かれていたのはコンクリートの道路ではなく、私の身体だった。

煙が晴れ、目の前に見えたのは……

「……木？」

だった。だが、もちろん街路樹なんかじゃない。数秒ごとに枝を伸ばし、根を伸ばし、葉を茂らせる、巨大な樹木だ。その幹には、半透明の液体に、まるで琥珀のように封じ込められた……

「八代さん！　葉山君！」

ぼごっ、ぼごっ……！

地面を貫いていた根が抜け、その尖った先端を私たちに向け……

『ｂａｒｒｅｔｔ　！』
――ガガガガン！
無数の弾丸に、粉砕された。
「なのは、気をしっかり持て！」
手元にピンポン玉サイズの光弾を数個同時に出現させ、発射した。
今のは、秀人さんの新しい魔法なんだろうか。
「あの二人を助けたいなら、これ以上成長する前に止めるんだ！」
「……は、はいっ！」
そうだ。ボケッと突っ立っている暇は無い！
「レイジングハート！　シューター！」「こっちはもう一回、バレットだ！」
『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ．　Ｓｈｏｏｔｅｒ　ａｎｄ　ｂａｒｒｅｔｔ』
レイジングハートの先端に、合計五つの桜色の光弾。秀人さんは、四つの空色の光弾。
「シューーート！」
「ファイア！」
合計九つの射撃魔法が帯を引いて発射され、
――ドガガガガガガガッ！
全てクリーンヒット！
巻き上げてしまった粉塵のせいで、状況が分からない。けど、多分……
「……」
レイジングハートを握る手に、力をこめる。秀人さんも、構えを解かない。
――グオンッ！
やっぱり、まだだ！
横凪ぎに繰り出された枝の一撃を、バリアで逸らす。
「はあああああっ！」『ｉｍｐａｃｔ　！』

――バガァンッ！
秀人さんの回し蹴りが命中し、枝を真っ二つに割った。。
「よし、通った！」
……いけない！
「秀人さん、まだ！」
折れた枝の先から、繊維がしゅるしゅると集まり、
「回復しやがった……」
これまでの暴走体にも、ある程度の再生能力はあった。けど、こんなに早く、あれだけの損傷を回復できるなんて……
そうこうしている間に、琥珀のように固められた二人の姿は、幹の中に隠れてしまった。
「あっ、待って！」
静止も虚しく、ズブズブと地中に潜行してしまう。
「ユーノ！　あの暴走体、どこに行ったんだ！？」
「わ、わからない……！」
「えぇ！？」
わからないって……見つからないの！？
ユーノくんは焦り、苛立ったように声を荒げた。
「この周囲十キロ全域から、ジュエルシード反応が出てるんだよ！」
「なっ……んな、馬鹿な話が！」
同時。
――メキメキメキ……ベキッ、ボコッ……バキッバキッ！！
近くから。遠くから。アスファルトを捲り上げる音が。コンクリートを貫通する音が。ガラスを砕く音が。不協和音のように、耳に入ってきた。
「何……何なの！？」
そして、見た。ビルが立ち並び、大小さまざまな商店が軒を連ねる繁華街が……枝に、根に貫かれ、葉を茂らせ……『森』に、覆われていくのを。
ズズン、と一際重い音がして、『森』は成長を止めた。

「……」
「……」
あまりの光景に、言葉を失ってしまう。コンクリートの町並みが、いきなり大自然に埋もれてしまった。
もう、どこに本体があるのかすら分からない。ただ呆然と、『森』を見つめる。
『ずるい……』
「え？」「何だ、今の？」
ドーム状の『森』に、声が反響する。その声は……
『なんで……健太は……』
「八代さん！？」
もしかして、まだ意識が残っているのでは。そんな私をあざ笑うように、ざわざわと『森』が揺れる。季節はずれの森林浴。だけど、感じるのは息苦しい圧迫感と、突き刺さるような敵意！
「なのは！　こっちだ！」
秀人さんが、停めていたバイクのキーを回した。
キュボッ、と小気味のいい音を立て、エンジンが再び火を点す。
「乗れ！」「はい！」
乗るというより、半ばしがみ付くようにしてシートに飛びついた。
『アンタを選ぶのよおおおおおおッッッッ！！！！！』
枝が。根が。葉が。『森』を構成する全てが、狂ったように殺到してきた！
「このおおおおおおおおっ！！」
秀人さんがヤケクソ気味に放ったバレットが、進行方向の敵のみを吹っ飛ばす。

――ああ、本当に。なんでこんなことになってしまったんだろう。

◆　◆　◆　◆

ついこの間来た丘で、バイクを止めた。

見下ろす町は。海鳴市は。『森』に覆われてしまっていた。

「ユーノくん、町の人たちは……？」

それが一番の気がかりだった。

「それは、一応大丈夫。位相をずらして、半径十キロの一般人は隔離したから」

よかった……せめてもの救いだ。

「でも、ごめん。建造物は間に合わなかった……もし暴走体を封印しても、建造物は元には戻らない」

「私の所為だ……」

ぐしゃっと前髪を掴む。

ユーノくんに制限をかけられてしまうような無茶をしなければ、未然に防げた筈なのに。

「「違う」」

だけど、秀人さんとユーノくんは、それを否定した。

「僕が、遠隔操作で制限を解除できるようにしておけば」

「俺があと少し早く到着していれば」

「「「……」」」

こんなところで、責任の所在を確かめても仕方無い。今は、とにかく暴走体を封印しないと。また成長を始めたら、今度は人が巻き込まれちゃう。でも、どうすれば……？　あの広大な『森』の中に潜んでいるジュエルシードを、ピンポイントで見つけ出す方法なんて……方法？

「あ」

閃いた。

「レイジングハート、『これ』、出来る？」
頭の中にイメージを浮かべる。それを、念話の要領で秀人さん、ユーノくんにも見せる。

『可能です』
レイジングハートは、簡潔に答え、
「駄目だ。危険すぎる！」
ユーノくんは反対だった。確かに、分の悪い賭けだから……これで、秀人さんにまで反対されたら、この案は没だ。
「よし、やってみろ」
「秀人さん……！」
よかった！
「秀人、わかってるの？　下手したら、怪我じゃ済まないんだよ」
ユーノくんは、静かに聞く。秀人さんの真意を確かめるように。
秀人さんは、つかつかと歩いてきて……ぽん。私とユーノくんの頭に手を置いた。
「ちょ、何！？　何！？」
私は単純に嬉しいけど、ユーノくんは戸惑っている。
そして、秀人さんは私たちの目をまっすぐに見据えて、言った。

「ユーノもなのはも、俺が守る」

「……」
「だから、大丈夫だ」
さすがに、ここまで言われたらユーノくんとて飲むしかない。
渋々といった様子で、ユーノくんはトランクボックスに入った。
「行くぞ！」
秀人さんがバイクに跨り、エンジンを吹かす。
（もう、これ以上被害は広げさせない！）
バリアジャケットのまま後部座席に座るのと同時。頼もしい排気

音を轟かせ、バイクが走り出した。

◆　◆　◆　◆

がつん、がつんと、リアタイヤがコンクリート片を踏んで振動が響く。俺もなのはもノーヘルだが、それを見咎める者はいない。

目の前に、茶色と緑色で構成された壁が見えてきた。言わずもがな、暴走体である。

最初に比べたら成長速度は亀の歩みだが、それでも確実に広がっている。

「……防壁、展開」『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

目の前に、薄い空色のバリアを張る。バイクを直接ぶつけるわけには行かない。

ズボッ！　と沈み込むような音を立て、バリアの先端が壁に突き刺さる。一瞬の停滞。そして、すぐに抵抗がなくなる。何せ、俺のバリアの強度はレイジングハートのお墨付きだ。たかが樹木如きで阻めるほどヤワじゃない。

『高町いいいいっ！！』

当たり前だが察知され、すぐに枝やら根やら葉やら、無数の攻撃が襲い掛かってきた。

タイヤのグリップ力限界まで車体を倒し、横滑りするように攻撃を潜り抜ける。カウルが地面と接触し、ガリガリと削れた。

一つ目の問題は、この広がり続ける『森』をどうするか。ユーノの全力の結界は、直径十キロ前後。それを上回ってしまったら、今度こそ最悪の事態になる。それに対して、なのははこういった策を練った。

『八代さんの狙いは、私みたいなの。だから、あの中にいれば、あれ以上『森』が成長することは無いと思う』

確かに、あの暴走体に取り込まれた女の子は、やけになのはに固執しているようだった。標的が体内にいるとなれば、わざわざ狩場を広げる理由は無い筈だ。

二つめの問題は、ジュエルシード本体の場所をどうやって特定するか。この問題に関しては、なのはが新たに魔法を組むことになった。

『レーダーってあるでしょ？　あれは、音波を発信して、反射のパターンから敵の所在を割り出す機械なんだけど……それを、魔力でやってみる』

俺には魔力はあるが、それを形にする才能が無い。だから、なのはに任せるしかない。適材適所だ。

そして三つ目の問題は、どうやって問題その一とその二を両立させるか。敵陣のど真ん中で、全神経を集中して魔法を組むなんて、一人では不可能だ。そう、一人では。

『でも、今からその術式を組むと大体五分くらいかかっちゃうの。だから、私を乗せたまま、『森』の中を逃げ回って』

なのはが魔法を組み上げている間、俺がバイクで逃げ回り、ユーノが防御魔法で攻撃を防ぐ。これが可能だというのだから驚きだ。

ごん！　がん！　と衝撃が走るたび、サスペンションが軋む。そもそも、オフロードバイクでないどころか、スポーツ走行には不向きなツアラーにこんな無茶な走りは想定されていないのだ。帰ったら、あちこちガタがくるだろうな……

『いなくなれえええええええええっ！！』

「ざっけんなあああああああああ！！」

ギャッ、ギャッ、ギャッ！！

スラロームの要領で、地面から突き出してきた根を連続で避ける。その度に、俺の首に腕を回し、背中にしがみ付いたなのはが大きく

揺さぶられる。だが、その目はずっと閉じられたままだ。転倒する恐怖も、不安も、微塵も感じさせない。静かに見えて、その頭の中では高度な演算によって魔法が構築されつつあるのだろう。額には玉の汗が浮かび、流れる風にきらきらと雫を振りまいている。

「でやあああああああっ！！」

ユーノも奮闘している。進路を妨害する枝を、無防備なのはを狙う根を、一つ残らず打ち落とし、逸らし、防ぎきっている。お陰で、バイクの操縦に集中できている。避ける。跳ぶ。踏み越える。一瞬たりとも集中を途切れさせることは出来ない。

そして、永遠に続くかと思われた時間は、唐突に終わりを告げた。

「できたぁっ！！」

なのはが、魔法を完成させた。

デバイスモードに変形させたレイジングハートを横凪ぎに振る。

『ｗｉｄｅ　ａｒｅａ　ｓａｒｃｈ』

「災厄の根源、姿を現せ！」

広範囲探知。探り当てることに特化された魔法が、解き放たれる。

レイジングハートの赤い宝石部分が脈打ち……

――ズバババババババッ！！

無数の光が、解き放たれた。

光は波紋のように広がり、『森』全域に広がっていく。思わず、見とれてしまいそうなほど幻想的な光景。だが、ボケッと見ている暇なんてありはしない。その間も続く攻撃は、まるで、弱点を探られることを恐れているように数を増す。

『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　！』

空色。桜色。緑色。三色のバリアが重なり合い、攻撃を受け止める。全方位を覆うバリアは、既に底が見えている攻撃なんて通さない。

『何で、何で、何でえええええッ！？』

子供の癇癪のように、精彩を欠いた攻撃が降り注ぐ。とはいえ、棍棒のようにぶっとい樹木だ。油断するわけには行かない。

「八代さん……」

ぽつりと、なのはが依代にされた少女の名を呟いた。

◆　◆　◆　◆

広大な『森』の中にいる、一人の少女を探す。砂漠に落ちた一本の針……ってほどでもないが、見つからない。

「……くっ」

探査魔法によって頭に入ってくるイメージは、膨大だ。数千枚の写真のスライドショーを、休まず見せられているような状態だ。車酔いのように、風邪を引いたときのように、頭が重く、目が回る。

立体駐車場。オフィスビル。銀行。ホテル。廃ビル。個人商店。屋台。コンビニ。

「違う……！　どこに！？」

『高町いいいっ！』

ぶおんっ、と風を切る音と共に、目の前に枝の一撃が迫る。

『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　！』

それは、目の前に展開された空色のシールドに阻まれる。

「フッ！」『ｉｍｐａｃｔ　！』

パァンッ！

秀人さんに蹴散らされた、枝。今の一撃は、自動ではなく、八代さんの声を反映するように動いていた。なら！

「ユーノくん！」

「何！？」

「私が選んだ枝か根っこ、捕まえて！」

バインドの同時発動も、出来なくはない。だけど、より確実にするために……

「わかった！」

同時、探査魔法を一旦カットする。そして、大きく息を吸い……

「私は、葉山君なんて、大っ嫌い！」

恥ずかしさを我慢して、目一杯の大声を、張り上げた。

「な……なのは？」

秀人さんと、ユーノくんが目をぱちくりさせている。ううう、お願いだから今は突っ込まないで！

「無神経だし、図々しいし、馴れ馴れしいし！　何より馬鹿だし！」

『高町ぃ……！　アンタ、何様のつもりよおおおっ！！　アンタに、健太の何がわかるってのよおおおおおおおお！』

ざわざわと、八代さんの怒りに鳴動する。そうだ。怒れ。もっと怒れ！

「あんなのにご執心だなんて、八代さんも悪趣味だね！　私はあんなのいらないから、八代さんに熨しつけて譲ってあげるよ！」

『高町いいいいいいいいっ！！！　絶対に許さないいいいいいいいっ！』

金切り声と共に、一際太い枝が一本、迫ってきた。これだ！

「ユーノくん、これ！」「了解！」

――ジャリイイイイイイイイン！

枝に、緑色の鎖が幾重にも絡みついた。ユーノくんが今の状態で発動できる拘束魔法、チェーンバインドだ。細いながらも強靭な鎖が幾重にも絡みつき、枝の動きを封じる。

「えええええいっ！」

そして、無防備になった枝に、レイジングハートを突き立てた。

『きゃあああああああっ！！』

八代さんが、今まで上げてこなかった悲鳴を上げる。その悲鳴は、私の仮説が正しかったことの証明であり……同時に、クラスメイトの少女を傷付けた証明だった。

（……ごめん）

レイジングハートの先端を枝の中に固定する。そして、枝の中に直接、探査魔法を流し込んだ。

『ああ、あああああああっ！　痛い、痛い痛い痛いいいいいいっ！』

その悲鳴が泣き声にシフトしても、止めない。

この枝は、他の自動攻撃タイプではなく、八代さんが直接操っている枝だ。だから、この枝の根元を探っていけば、必ずそこに八代さんがいる。

『目標を確認しました』

「……うん、見えた」

核……八代さんは、ここから数キロ先のマンションの屋上に根を張っている。

『森』が、収縮していく。ただの一箇所へ……八代さんを守るように。

『来ないで……来ないでよ……』

弱弱しい声が、その中から漏れる。

あの殻に阻まれて、封印魔法は届かない。攻撃魔法で傷つけても、すぐに再生してしまう。……なら。防御も、再生も無視して、一撃で中心まで撃ち抜けば良い。

「レイジングハート、モードチェンジ」

『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ　ｍａｓｔｅｒ．　Ｃａｎｎｏｎ　ｍｏｄｅ』

レイジングハートが、変形する。仮想空間では何度も繰り返した手順だが、実際にやるのは今日が初めてだ。

丸みを帯びていた先端は、鋭い、槍のような形に。柄の部分の半ばには、拳銃のようなグリップとトリガーが。石突には、余剰魔力を排出するコッキングカバーが増設される。

――レイジングハート・キャノンモード。

私に合わせ、砲撃能力に特化した新形態。
「秀人さん、ユーノくん」
「ああ、行くぞ」「任せて」
短いやりとり。そして、添えられる手。消耗戦を強いられてきた私たち三人の魔力は、もうほとんど残っていない。この一発を撃ち漏らせば、もう、封印する手段は無い。残った三人分の魔力を全部注いで……
「一気に、カタを付ける！」

『Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ』

私の切り札。直射型砲撃魔法・ディバインバスター（神聖なる砲撃）。
インパクト、バレット、シューターより、格段に強力な魔法。これなら、分厚い壁もぶち抜ける！
『チャージ完了』
二人と目が合い……頷きあう。
「ディバイン……！」
――キュイイイイイイイイ……！！
魔力スフィアが甲高い音を立て、一瞬だけ収縮する。それに抗うように、内圧を高め、高め、高め……！
――トリガーを、引き絞る！

「バスターーーーーーーーー！！」

――ズドオオオォォォオオン！！
魔力によって『筒』を形成し、その爆発のエネルギーを内部に通すことで指向性を与える。これが、直射型砲撃魔法。

真っ直ぐに突き進んだ砲撃は、植物の壁を呆気無く貫通し、八代さんが握っていたジュエルシードに直撃。

「ジュエルシード、シリアル１０。……封印」

『ｓｅａｌｉｎｇ』

ぶち抜いた穴から、ジュエルシードがゆっくりと出てくる。それがレイジングハートに吸い込まれた途端、町を覆いつくしていた『森』が、まるで霧のように消滅した。

……痛々しい傷跡だけを残して。

「ユーノ、行くぞ」「え、でも……」「いいから」

秀人さんが、ユーノくんを肩に乗せ、屋上の入り口に歩いていく。気を利かせてくれたんだろう。本当なら、私の口から言わないといけないんだろうなぁ……

「ごめんね」

床に寝転がり、意識がはっきりしていない八代さんに話しかける。

「八代さんは、葉山君が好きなんだよね」

こくん。八代さんの首が、縦に振られる。

「葉山君が私にばかり気をかけるのが、気に入らなかったんだよね」

こくん。再び、肯定。

「……でも、私は、葉山君の気持ちには答えられない。だからといって、葉山君の気持ちが変わるのは、ずっと先のことだと思うの。だから……」

胸が、痛む。自分がこれから言う言葉に、足がすくむ。でも……私が、言わなくちゃ。それが、二人の気持ちをかき乱した私に与えられる罰だから。

「絶交、しよう」

交わりを絶ち、お互いを空気のように無視し、一切の関わりを排

除する。それは一見、とても悲しいことかもしれないけど。彼女には、私の代わりはたくさんいる。私は、前と同じく一人に戻るだけ。私にとっても、彼女にとっても、傷を最小限に抑えることが出来る……たった一つの、冴えたやり方。

「……それじゃあ、バイバイ。私の話し相手になってくれて、本当にありがとう」

精一杯の感謝を込めて、その頭を撫でる。明日からは、他人だ。

外に出ると、町は喧騒に包まれていた。

地震による被害だと勘違いされているらしい。とはいえ、抉れた地面や、どてっぱらに穴が空いた自動車など、不自然な点はいくらでもあるのだが。それをどこか現実感の無いものとして見ながら、のろのろと歩く。

どるん、と、目の前にバイクが止まる。言わずもがな、秀人さんだ。回収してきたらしいヘルメットを、無言で差し出してくる。それを被り、後部座席に座る。

少し速めのスピードで、街を離れた。風が冷たくて、涙が浮かんできた。きっと、風が目に染みた所為だ。目を瞑っても、まだ流れてくる。

ああ、本当に……風が冷たい。

◆　◆　◆　◆

ここは、とあるビルの屋上。海鳴市でも指折りの高層建築であり、最新の技術が惜しみなくつぎ込まれている。

その屋上で、一人の少女と、一頭の獣が佇んでいた。

「くふふふっ」

長い金髪を二つに結い、黒を基調とした装束に身を包む、整った容貌の幼い少女。その手には、容姿とは不釣合いなほど無骨な、一振りの斧が握られていた。斧とはいっても、手斧ではない。長い柄に半月状の刃の、どちらかといえば薙刀のような得物だ。その斧を、重量を感じさせない動作で手元でくるくる回している。

「くふふふっ……！　ねぇ、見た？　見た？　あの白い子、泣いてたよ？」

だが、その整った顔に浮かぶのは、子供が昆虫の足を引きちぎるような、残忍な嘲笑。

「ああ、見てたよ」

対して、答えるのは傍らに佇む狼。大型犬より、一回りも二回りも大きな体躯を包むのは、見事な緋色の毛並み。首元には鬣まであり、明らかに通常の種ではない。

「……よかったのかい？　あの子にみすみす渡しちゃって」

流暢な言葉で言語を話す。その声色は、女性のそれだ。

金髪の少女は、けらけらと軽い調子で笑いながら、斧を振り回す。

「いいのいいの。今日は、アレが見られただけで満足だよ。それに……」

――ガヅンッ！

唐突に、硬いものが砕ける音が響く。屋上の床に、斧が深々とめり込んだ音だ。

「どうせ、後で横取りしてやるんだし」

にっこりと、天使のような笑顔で言う。

「くふふふっ。それじゃ、帰ろうか。アルフ、バルディッシュ？」

ぽんぽん、と狼……アルフの頭を撫で、踵を返す。
「ああ、フェイト」
『Ｙｅｓ　ｓｉｒ　．』
斧に据えられた、金色の瞳が明滅し、電子音声で答える。
そして、少女……フェイトは、笑顔のまま屋上から姿を消した。

第五話（後書き）

というわけで辛いお話&フェイトちゃん登場でした。
キャラ変わりすぎですね。優しいフェイトちゃんが好きな人、ごめんなさい。

なのはは、意外と男子に人気があります。

詳しい設定とかは、ＰＶが一万を超えたら公開しようと思っています。
感想も受け付けていますので、よろしくお願いします。

第六話（前書き）

じわじわとＰＶが増えてきています。
ありがとうございます。

第六話

「……」

目を閉じ、意識を集中。リンカーコア、起動。術式選択。誘導弾・アクセルシューター。

『Ａｃｃｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ』

魔力循環。展開数、五つ。

――ヒュン

目の前に、五つの魔力スフィアが出現する。よし、問題ない。

五つ全てに意識を配り……発射！

「シュート！」

――ドドドドン！

五つの誘導弾はそれぞれ個別の軌道を描き、結界内を飛び回る一つの的に向かって突き進む。

「くうっ……！」

さすがに、的が速い。なにせ、二体目の暴走体のデータを参考にしているのだ。遅い筈が無い。頭の中で、五つのルートをそれぞれイメージし、それをレイジングハートに伝える。軌道は問題ない。正確に標的の動きをトレースしている。だが、

（駄目だ）

的のスピードが速く、誘導弾が徐々に引き離されていく。このままじゃ、追いつかない。

（それなら！）

「アクセル！」

（加速せよ）。命令に従い、誘導弾のスピードが上がる。

「このっ、このっ……！」

だが、それは同時に操作の難易度をグンと上げ……暴走。

――ボンッ！

「きゃあっ！」

――ボンッ！　ボボボンッ！
「あっ、あっ……！？　駄目ぇっ！」
一つが破裂。そこで集中が途切れ、残り四つの誘導弾も破裂してしまった。
「あ～……失敗しちゃった」
『三十点です』
レイジングハートの採点も容赦が無い。的だけが変わらず飛び回り、挫折感を後押しする。ああ、上手くいかないなぁ……
『ではマスター。例の魔法を実践してみましょう』
「うん、そうだね」
兼ねてから問題だった、私自身の機動力の低さを補う魔法。術式自体は、ユーノくんに相談したり、レイジングハートといくつか試作してみた。だが、それを実際に行使するのは初めてだ。
「……上手くいくといいけど」
まあ、とにかく試してみよう。
術式選択。飛行魔法・アクセルフィン。
『Ａｃｃｅｌ　ｆｉｎ』
――フォンッ……
くるぶしに、光の羽が出現する。うまく動作すれば、飛行を補助してくれるはずだ。恐る恐る魔力を注ぎ込む。エレベーターが止まったときに感じる、あの違和感。それを数倍に引き伸ばしたような感覚の後……
「う……浮いた！　やったぁ！」
私の体は、地上五メートル程まで浮かんでいた。よっし！
「やったよ！　レイジングハート！」
『マスター、今は集中して……』
――がくんっ。
「へ？」
一瞬、軌道がブレ、上下が逆さまになる。それを皮切りに、
――ががががががががががっ！！

「きゃあああああああああっ！？」
上下左右に、揺すら、れ、えええええええぇぇ！！
「なのはっ！」
ぼふんっ。柔らかい感触と共に、視界の回転が止まった。ううっ、気持ち悪い……
「大丈夫か？」
「……い、一応は」
秀人さんが受け止めてくれたおかげで、怪我はしていない。地上五メートル。あんな勢いで地面にぶつかっていたらと思うと、ぞっとする……って、あれ？　まだ、浮かんでる？　もう魔法はキャンセルしたはずなのに。
「あっ」
目を凝らすと、秀人さんの両足首に、環状魔方陣が展開していた。
「秀人さんも飛べるようになったんだ！」
「ああ。とはいっても……」
ひゅんっ。軽い音と共に、環状魔方陣が消失。秀人さんが両足で地面に着地する。
「まだ数分も維持できないけどな」
『理想としては、飛行魔法・攻撃魔法・防御魔法を併用することです』
はぁ……まだまだ先は長いか。
『マスター。ヒデト。飛行魔法は、最低でも一週間で使いこなしてもらいます』
「うん、頑張る！」「練習あるのみだ」
そして、一週間が過ぎた。
私と秀人さんは、問題も無く飛行魔法を行使できるようになっていた。
「待て～！」

だけど、まだ複雑な動きは出来ない。直進、上昇、下降、浅い角度での旋回ができるだけだ。それらを上手に組み合わせ、更には他の魔法も併用しなければならない。

「タッチ！」

「おっと」　ひらり。

その練習として、ユーノくんが提案したのが、この『空中鬼ごっこ』だ。

円柱状のフィールド内で、飛びながら鬼ごっこをするだけ。それだけだが、実に練習になる。それというのも……！

「秀人さぁん！　そろそろタッチされてくださいよぉ！」

「駄目駄目。練習なんだから」

ぶんっ。またしても空振り。空しく虚空を掻く手。

「むーっ！」

そう、秀人さんがなかなか捕まらないのだ。ユーノくん曰く、私は射出したり、展開したりするのに向いていて、秀人さんは、体を覆ったり、強化したりするのに向いているらしい。

「そこまで！」

ユーノくんの声と共に、円柱状のフィールドが消える。

結局、勝敗は五対一で私の惨敗だった。

バッグに入れてきたスポーツドリンクを飲み、一息つく。

「うん。二人とも、中々いい感じだよ」

『七十点といったところでしょうか』

七十点。厳しいような、上々のような、曖昧な点数だ。けど、最初が二十点だったことを考えるとかなりの進歩だ。

「ってことで、明日は久しぶりに休みにしよう」

休み？

「別に疲れてないけど」

それに、今は魔法の練習時間が一分でもあった方が良いんじゃないか。いつまた暴走体が現れるかも分からないんだし……

「ま、いいんじゃないか？　たまには」

秀人さんが、あっけらかんとした調子であっさり言う。
「でも……」
少しでも力を付けないと。一つでも多くの魔法を身に付けないと。
また誰かが……
知らず知らずのうちに俯いていた私の頭に、ぽん、と手が乗せられる。
「あう……」
じわ～っと広がっていく、手の暖かさ。うう……コレ、卑怯だよ……
「明日、ちょっと隣町に用があるんだ。ちょっと付き合ってくれ」
うう～ん……まぁ、秀人さんがそう言うなら。
「行きます」
明日は、お休みを取ろう。

◆　◆　◆　◆

「行きます」
なのはがようやく頷いた。顔には出さず、ほっと一息。ユーノもどこか安心しているようだった。
あの、街を半壊させた暴走体を封印した日から、なのはは明らかに無理をしていた。学校から帰ってくるや否や、すぐにユーノに結界を張ってもらい、夜まで魔法の練習に没頭する。しかも、明らかに自分を追い詰めるような練習を、だ。すぐに気が付いて、一緒に練習することでやんわりと抑えていたが、あくまでそれは対症療法にしかならない。
それはまるで、何かを必死に振り払うかのようで……いや。まるで、というか、事実そうなのだろう。本人は頑なに否定するが、友達との辛い喧嘩別れは、相当堪えたらしい。
さて、明日はどこに連れて行くかな……町に用事があるなんて、大嘘だし。適当に買い物にでも連れ回して、強引に気分転換させて

やろう。
「それじゃ、明日に備えて今日はもう休もう」
「……はい」
まだ釈然としないらしく、少し表情が硬い。はぁ……この子、将来はワーカーホリック気味になりそうだ。その辺は、『あの親』の子供なんだろうな。
『ユーノ、お前も来いよ？』
念話と共にユーノに目配せをする。
『そうだね。万が一ってこともあるし』
こいつはこいつで、前回のことを引きずっている。自分が、レイジングハートに制限を掛けなければ、もっと早期に鎮圧できた筈だ、と。
実際には、なのはの無茶な訓練を諌めるという目的があったのだから、仕方ないと言えば仕方ないことだ。全く。うっかり屋の癖に責任感が強いんだから。
『うっかり屋って何さ、うっかり屋って！？』
やべ、念話してるの忘れてた。
「じゃ、帰ろうか」
ユーノの抗議を念話の回線ごとカットし、ヘルメットを被る。
「よいしょっと」
慣れたもので、なのははもう俺の手を借りずにタンデムシートに座れる。ユーノも文句を言いながらも、トランクボックスに収まった。
『なのは、どこか行きたい所は？』
念話のお陰で、インカム要らず。ああ、魔法って便利。
少し、サスからのショックが大きい。この頃無茶な使い方ばっかりしてたからな……。
明日、隣町で部品買うか。
『……特には』
そりゃそうだ。ん～っと……

『それじゃ、たまには外食でもしてみるか』
俺の用事なんて、ちょっとバイク屋に寄って部品をいくつか買うだけだし。ハンバーガーチェーンで人数分買って、どこか眺めのいい場所でのんびりしよう。
『そういえば、私、ハンバーガー食べるの久しぶり』
なのはがぽつりと呟いた。
『へぇ、意外だな。俺なんか、食事の用意が面倒な時はよく買ってたもんだけど』
流石に、食べ盛り育ち盛りの小学生にジャンクフードばっかり食べさせるわけにはいかないし、最近ではご無沙汰だ。
『大人の人ばっかりで、ちょっと怖かったから』
ああ、確かに……十代後半の若者がメインだもんな。小学三年生からすれば、十分に大人だ。
『はんばーがーって、どんな食べ物？』
ユーノが混ざってきた。よし、俺がハンバーガーの真実を教えてやらなければ。
『丸いパンを横に切り開いて、間に肉とか野菜とかを挟む食べ物。要はサンドイッチの変形だ』
『ああ、アレの亜種か』
こちらの食べ物にも慣れてきた異世界人。案外理解が早くて助かる。
『そうそう。フェレットバーガーとか絶品だぞ』
がつんっ！
リアボックスの中で、何かが跳ねる音がした。
『ふぇ、ふぇ、フェレットバーガー！？』
『ああ。内臓と骨を取ったフェレットをミンチにして、練り合わせた肉を挟むんだ。結構、人気商品でさ、早く並ばないと売り切れちまうんだ』
――がたがたがた……！
リアボックスが大フィーバーだ。少し間をおいて、言う。

『そういえば、『材料』の『持ち込み』もオーケーだったな……？』

『下ろせえええええええええええっ！！！　すぐに下ろせえええええええっ！！』

『おい、静かにしろよ具……じゃなくてユーノ』

『今、具って言った！？』

「……ふふっ」

お、やっと笑った。バカな話をした甲斐があった。

『な、何だ……冗談だったんだね』

『……』

『何か言えよおおおおおおおおお！？』

夜は更けていく……

◆　◆　◆　◆

土曜日。天気は快晴。テレビの中の気象予報士は、今日は半そで一枚で過ごせる気温であることを告げていた。つまり、絶好のお出かけ日和だ。最初は乗り気ではなかった私でも、うきうきしてくる。

姿見の前で、服装をチェック。

デニム生地のベスト。七分丈のオレンジ色のTシャツ。ホットパンツ。縞模様のオーバーニーソックス。スニーカー。よし、大丈夫。

ぴったりのタイミングで、アパートの前に秀人さんのバイクが戻ってきた。遠出するということで、ガソリンを補給してきたらしい。

部屋を出て、戸締り。さて、出発しよう。

ファーストフード店に入り、二人分のセットを注文した。秀人さんは、お肉が二重になっている、何だか大きなハンバーガーと、コーラ。それと同じものはとても食べ切れそうになかったから、私は

普通のハンバーガーとオレンジジュース。ユーノくんは、鞄の中でフライドポテトとアップルパイを一生懸命食べている。

「「「いただきまーす」」」

ぱくり、と齧り付く。少し油っぽいお肉と、パサパサしたパンが、何故か妙にマッチしていた。個別に食べたらそんなに美味しくないのに……不思議だ。

ポテトをつまんだり、ジュースをちびちび飲みながら、ハンバーガーを食べ進めて行く。

結局、私の小さな口では、一個を食べきるのに十分を要した。

「あうう……苦しい」

さすがに、脂分が多すぎた……美味しかったけど。

「はは、やっぱりなぁ」

秀人さんが、コーラの容器に入っていた氷をガリガリ噛み砕きながら笑った。

「ほら、食べカス付いてるぞ」

「え、うそ!?」

ひゃー！　かっこ悪い！

「ちょっと動くなよ?」

手元にあった紙ナプキンを取り、私の口元を拭った。目を閉じてされるがままになる私。

「ううう、ごめん、秀人さん」

ああ、もう。私ってば、いつも秀人さんに迷惑ばっかり……

ぽふ、と頭を撫でられた。あ……もしかして私、また下向いてた?

「気にするなよ、家族なんだから」

「……うん」

店を出た次に向かったのは、一軒のバイク屋だった。どうやら、バイクの消耗部品を買うらしい。最近、無茶な使い方してたからね。

店内には、所狭しと色々なバイクが並んでいる。色も形も様々で、見ていて楽しい。

『へぇ……全部、ガソリンエンジンかぁ』
ユーノくんが、興味深そうにバイクを見ている。
「エンジンって、ガソリンで動かすものじゃないの？」
『僕のいた世界では、水素エンジンが実用化されてたから。クリーンなエネルギーだけど、爆発的なパワーは出ないんだ』
秀人さんが、伝票らしき紙切れを持って戻ってきた。
「無公害にも、それなりにデメリットがあるってことか」
『初めて秀人のバイクに乗ったときはびっくりしたよ』
「……私も」
何せ、初めて乗ったバイクで、時速２００ｋｍだもん。怖かった……

バイク屋を出ると、丁度お昼だった。
「ねえ、ちょっといい？」
お昼ごはんはどうしよう。さっきのハンバーガーはちょっと重かったから、軽く済ませたい。
「ちょっと、ねえってば」
でも、それだと秀人さんがお腹空いちゃうかも。う～ん……あ、そうだ！　回転寿司なんてどうだろう。安く済むし、量も自分で決められるし……
「高町さん！」
「はいっ！？」
え、何！？　慌てて振り向くと、気の強そうな外国人の女の子が立っていた。えっと、えっと、外国人に話しかけられた場合は……
「そ、そーりー！　あいきゃんのっとすぴーくいんぐりっしゅ！」
逃げる！！
踵を返して駆け出す。
「日本語で喋ってるでしょうがあああ！！」
が、上着の袖を思いっきり掴まれてしまった。結構な勢いだったせいか。

――びりっ
「「あ」」
……破れちゃった。縫製が甘かったのか、袖が肩口でぷらぷらと揺れている。
「ご、ごめん、やりすぎた……」
「……別に」
嘘。本当は、秀人さんに買ってもらった上着を台無しにされて、怒鳴りつけてやりたい気分。でも、初対面の人にそんなことするわけにもいかないから、我慢だ。
「アリサちゃん？」
人ごみを掻き分けるようにして、もう一人、女の子がやってきた。今度は、長い黒髪の女の子。目の前にいる外国人の子――名前は、アリサさんというらしい――の知り合いみたい。どちらにせよ、見知らぬ相手だ。服は、家に帰ったら繕えばいい。
「じゃ……」
「ちょっと待って、高町さん」
見つかっちゃった。面倒くさい……
「あの……どこかでお会いしたこと、ありましたか？」
二人とも、私の苗字を知っているみたいだ。
「「……」」
二人は、ジト目で私を見た。そして、金髪の子が、はぁ～、とため息をついた。
「あのねぇ……元クラスメイトの顔、忘れたの？」
……元クラスメイト？　ということは、二人は聖祥大附属小学校の時の同級生？
確かに見覚えが……無い。忘れる忘れない以前に、最初から覚えていなかったらしい。
「とにかく、じゃあね。服のことは気にしないでいいよ」
再三、逃亡を図る。
「ウチなら、その服直せるから一緒に来てくれない？」

が、またしても。今度は黒髪の子に手をやんわりと掴まれてしまった。目が合いそうになり、慌てて逸らす。どうにも、他人は苦手だ。

「人、待たせてるから」

「お願い」

「放してよ……いいって言ってるんだから」

「お願い」

う……何この人。大人しそうに見えて、結構強引だ。

『秀人さん……ごめん、ちょっと』

念話で秀人さんを呼ぶ。

「どうした？」

バイク屋から秀人さんが駆け出してきた。掴まれた私の手と、破れた袖に目をやり……

「……なのはに、何か用でも？」

低い声で、聞いた。

しかし、黒髪の子は臆するでもなく、秀人さんに頭を下げた。

「私は、月村すずかと言います。彼女の服を破ってしまったので、お詫びを兼ねて我が家にお招きさせてもらえないでしょうか？」

礼儀正しく、申し出る。秀人さんも毒気を抜かれたようで、困ったように私を見た。

「……どうする、なのは？」『僕としては、別にどちらでもいいよ』

私次第か。わざわざ自分で繕う手間が省けるなら……でも、一人で行くのはやだ。

「秀人さんとユーノくんが、一緒なら」

「勿論、歓迎します」

月村さんは、そういってにっこりと微笑んだ。

「んじゃあ、俺、バイク取ってくるから」

「うん」

秀人さんのバイクで、月村さんとバニングスさんが乗る車に着いていくことになった。

さて、秀人さんが来るまで手持ち無沙汰だな……
「あのさ、秀人ってのは、あの人のこと？」
「そうだよ」
「じゃあ、ユーノって誰？」
……あ。
「……ええと」
どう説明したものか。うーん……あ、そうだ。
『ユーノくん、ちょっとこっち来て』
『いいよー』
秀人さんの鞄から、ユーノくんが出てくる。
足元まで走り寄ってきたユーノくんを抱き上げ、二人に見せる。
「この子が、ユーノくん」
口で説明するより、見せたほうが早い。
「うわぁ……可愛い！」
「綺麗な毛並み……」
どうやら、気に入ってくれたらしい。でも、ごめんねユーノくん。
ペット扱いして。
『はは、もう慣れたよ……』
バニングスさんと月村さんにもみくちゃにされながら言う。
と、路肩に秀人さんのバイクが止まった。
「なのは、お待たせ」
「うん」
ヘルメットを被り、あご紐を締め、バイクによじ登る。
それを、二人はぽかん、とした顔で見ていた。
……もしかして、私も一緒に車に乗ると思っていたのだろうか。自慢じゃないが、私の人見知りは筋金入りだ。ほぼ初対面の相手と、密室に入る勇気は無い。
「ユーノくんは、そっちに預けておくね」
「え、ええ……」「わかった……」

妙に長い車に先導され、着いた先は……
「でか……」
そう、大きな洋館だった。一体何坪あるのか、聞くだけ馬鹿馬鹿しくなるくらい大きい。
漫画みたいなお金持ちだ。
「それでは、二輪車はこちらでお預かりします」
燕尾服を着た初老の男性が、秀人さんを車庫へ先導していった。

破れてパンクな雰囲気になった上着をメイドさんに預け、多少身軽な格好でテーブルについた。月村さんは微笑、バニングスさんは苦虫を噛み潰したような顔で、私を出迎える。
「高町さん、好きな紅茶は？」
紅茶の葉っぱに種類なんてあるの？　リ〇トンしか飲んだこと無いんだけど……
「匂いがキツくなくて、砂糖とミルクが入ってれば何でもいい」
月村さんが、またくすりと笑った。被害妄想なのだろうが、馬鹿にされたみたいで少し腹が立った。月村さんが何かを伝えると、メイドさんは頷き、引っ込んで行った。さてと、そろそろ、理由を聞くとしよう。
「それで、どういうつもり？」
「え、何が？」
月村さんは、飄々と受け流す。
「さほど面識の無い私を、わざわざ家に上がらせて、どういうつもりなのかって聞いてるの」
多少、強い口調になってしまった。
「ちょっとアンタ、言い方ってモンがあるんじゃないの？」
それに噛み付いてきたのは、バニングスさん。
あぁ……元はと言えば、この人のせいなんだよね。
「私は『アンタ』じゃなくて『高町』だよ、バニングスさん」
多少の威圧を兼ねて、ジロリと睨む。

「あなたみたいに呼びづらい苗字じゃないんだから」
「何ですって!?」
「何、文句あるの!?」
がたん、とバニングスさんが椅子を蹴立てて立ち上がる。私も席を立ち、真正面から睨む。
「はいはい、そこまでですよ～」
緊迫した雰囲気を一瞬にして弛緩させる、ユルい声がかかった。紅茶やらお菓子を載せたカートを押してきたメイドさんだ。
「もう、仲良くしないといけませんよ～？」
「「……ふん」」
席につき、配膳された紅茶を一口飲んでみる。
……美味しい。
「高町さん、どう？」
月村さんが感想を聞いてきた。……意固地になる必要は無いか。
「うん、美味しいよ」
「そう。よかった」
そして、会話が途切れた。
バニングスさんがカップを置く音が、やけに大きく聞こえる。
「……ねぇ、『高町』は、何で転校したの」
バニングスさんが、恐る恐るといった感じで聞いてきた。普通聞くかな、そんなこと。
さらっと適当にでっち上げて済ませよう。
「ああ、家計が厳しくてね。学費が払えなくなったんだよ」
大半は真実だからか、するりと言葉が出た。
「……」
「……」
二人は、神妙な顔つきで沈黙していた。不幸自慢なんて、したくなかったんだけど。紅茶の最後の一口を飲み干し、カップを置いた。
「ちょっと外すね」
席を立つ。さてと、秀人さんはどこかなー。

・・・・・・・・・・・・

バイクから下り、俺の住むアパートがそのままスッポリ入りそうな車庫の中を見渡した。

（……長いロールスロイスとか初めて見た）

「どうかされましたか？」

俺を先導する執事が振り返る。

「……いや、金持ちっているんだなぁ、と」

「左様でございますか」

実にアウェー感漂う。

なのはとは別行動だ。小学生とはいえ、女の輪に入る勇気は無い。

『……僕も、あの中に入るのはもう無理』

肩の上でユーノがぐったりとしている。車の中で、あの二人に徹底的に可愛がられまくったらしい。それに、これがきっかけになって、なのはに友達が出来れば、というセコい思惑もある。

と、車庫の一角に目が、足が止まる。恐らく、ここにある車を整備するためだろう。

まるで、車検場のように整然と工具が並んでいる。このまま店が開けそうな規模だ。

「あの、」

「何でございましょうか」

「バイクの整備したいんですけど、アレ、借りられます？」

執事さんは少し思案し、笑顔で頷いた。

「勿論、構いません」

よし、やるか。

レンチ、スパナ、ドライバー……各種工具を手元に揃え、作業を始めた。

バイクと格闘して油まみれになること数十分。ようやく作業が終わ

り、洗剤で手の油汚れを落とした頃。
「秀人さ～ん」
なのはが車庫にやってきた。
「どうしたんだ？」
まだあの二人とお喋りしてるかと思ったのに。
「ちょっと様子が気になって……」
目線を外し気味に言う。……嘘だな。大方、何を話せばいいのかわからなくなって逃げたんだろう。まぁ、いいか。
なのはを案内してきたのは、俺とほぼ同年代らしいメイドさんだ。
「ふふ、仲がよろしいですね」

――ドクン

「やっぱり出たな」「そだね」
ジュエルシードって、いつも実に面倒臭いタイミングで現れるよなぁ……
『ユーノ、結界頼む』
『了解』
ユーノも慣れたものだ。
目の前にいたメイドさんの姿が、曇りガラスを挟んだように徐々に輪郭をぼかし……消えた。

暴走体の気配は、そこまで強くない。戦闘力でいえば、一体目の毬藻モドキにも劣るだろう。とはいえ、放置は出来ない。なのははバリアジャケットを纏い、デバイスモードのレイジングハートを携えている。準備万端、っと。
車庫を飛び出し、気配の源へと向かう。俺はユーノを肩に地上を走り、なのはは飛行魔法で空を走る。楽勝……の、筈だ。けど、何でだ？　妙に、嫌な予感がする。

・・・・・・・・・・・・・・・

その、数分前。

「へー、大きい家だね」

少し痩せ気味の体躯に黒装束。無骨な斧を携えた少女が、月村邸を俯瞰していた。少女の足場は、電信柱の頂上。直径にして４０センチ程度の円の上だ。だが少女は、慄くでもなく、まるで地面に立っているかのように平然としていた。

「くふふっ……折角、お膳立てしてあげたんだから……」

天使のように可憐な、悪魔のように無慈悲な笑みを浮かべる。

『Ｇｅｔ　ｓｅｔ』

行使するのは、魔力の共震波。

目的は、そう……ジュエルシードの、意図的な暴走。月村邸の中庭。ジュエルシードと、素体にはお誂え向きの、飼い猫。

「いい声で啼いてよ？」

『ｆｉｒｅ』

そして、魔法は寸分違わずジュエルシードに命中。狙い通りジュエルシードは発動し、子猫を取り込んだ。

・・・・・・・・・・・・・・・

「……」「……」「……」

開いた口が塞がらない。いや、だって、これは……

『みゃ～～～～ご』

野太い鳴き声が鼓膜を震わせる。

「……猫、だよね」

見れば分かることを、わざわざ口に出して確認する。

「ああ、うん、多分……」

秀人さんも困惑しているのだろうか、自信なさ気だ。

『みゃ～～～～ご』

……うん、猫だ。
ただし全高約１０メートル。ふさふさな毛並みと、つぶらな目、ぴんと尖った耳。ご丁寧に、首輪まで付いている。
「多分だけど……これは、素体になった子猫の『明確な願望』がカタチになったんだと……思うよ？」
……まさかとは思うけど。
「……『大きくなりたい』」
秀人さんが、私の代わりに口にしてくれた。
「多分」
ジュエルシード、融通が利かないにも程があるでしょ……首輪が付いてるってことは、多分この家の飼い猫だろう。さっきの部屋にも何匹かいたし。見たところ、大きい以外に害はない。サクッと終わらせて引き上げよう。
『Ｓｅａｌｉｎｇ　ｍｏｄｅ』
猫の額に、ローマ数字が浮かぶ。
「ジュエルシード、シリアル１４、封いッ……！？」
『Ｃａｕｔｉｏｎ！』
レイジングハートの警告と同時に、その場から全力で飛びのいた。

――ドガッ！！

私たちと暴走体を隔てるように、ソレは地面に突き刺さった。
「攻撃魔法だ！　僕たち以外に、魔導師がいる！」
その言葉を皮切りに、右から、左から、上から、文字通り縦横無尽に、『光の槍』が飛来する！
『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ！』
――キュガガガガガガガガガガッ！！！！！
三人分の魔力を注いだ防御魔法を展開し、爆撃のような攻撃魔法の雨に耐える。
「くううぅぅッ……！！」

何秒か、何分か、何時間か。一体どれだけ耐えていただろう。攻撃魔法の雨が止み、粉塵がようやく収まった。

「二人とも、大丈夫……？」

「なんとか」「僕も」

そうだ、子猫……！

晴れた粉塵の向こう。暴走体は、地面に倒れ伏していた。身体の至るところに、光の槍がいくつも突き刺さり、血を滲ませている。満身創痍どころか、瀕死の重傷だ。

『ミャ、ア、、』

苦しげに鳴く暴走体。早く、ジュエルシードと切り離さなきゃ……！封印魔法を暴走体に放つが……

――ガンッ！ガゴンッ！

その片っ端から、あの光の槍に打ち落とされる。

秀人さんが近付こうとすると、それをまた光の槍が阻む

「……誰なの！？」

封印を取りやめ、周囲を見渡す。だけど見えるのは、曇り空と、鬱蒼とした雑木林。あの攻撃魔法がある間は、エリアサーチは行えない。

「出てこい！」

無作為にばらまいた射撃が、雑木林の枝を落としていく。

――あはははははは！

耳障りな嘲笑が、雑木林に反響する。

「こっ……このおぉぉぉ！」

こうなったら、砲撃であたり一面を更地にして……！！

「落ち着け！」
ぐいっと腕を掴まれる。
「無駄に消耗するな！」
「は……はい」
秀人さんに叱責され、いくらか冷静さを取り戻せた。そうだ。機会を伺うんだ。少しでも姿が見えるまで。その時は……！　レイジングハートを握る手に力が入る。
「近くにいる」
ユーノくんが忠告する。
ちらりと後ろを振り返る。暴走体の子猫は、もう弱々しい吐息を漏らすだけになっている。
『ニャアァ……』
助けを求めるように首をもたげる。
でも、近づけない。あの光の槍の一つ一つは、私一人の防御で十分防ぐことができる。けど、それが何十も叩き込まれるなら、話は別だ。一瞬で意識を刈り取られてしまう。目の前で助けを求めているのに、助けられない。それがひどくもどかしく、苛立たしい。
「出てこい、卑怯者！」

「うん、いいよ？」

それは、唐突だった。
「なっ！？」
耳に息がかかるような距離から、いきなり聞こえた声に驚き飛びのく。慌ててレイジングハートを向けるが、既にそこには誰もいない。
『ギャアッ！』
目を逸らした暴走体が、悲鳴を上げた。

「くふふふふ」

暴走体の頭に腰を下ろし、紅い瞳が悠然と私たちを見下ろしている。
ようやく、姿が見えた。
二つに束ねた、バニングスさんとはまた違った質感の金髪。細身を黒いバリアジャケットで包み、手にはデバイスであろう斧を持っている。とても、綺麗な子だった。
「そこをどけ」
秀人さんが、少し緊張した面持ちで告げる。
「早く切り離さないと、素体の猫が死んじまう」
「それが？」
鈴を転がすような、ハスキーでよく通る声。
「それが、って……！」
綺麗な子。だけど、間違いない。こいつは、敵だ！
『Ａｃｃｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ』
誘導弾を五つ出現させる。喰らえ！
「シュート……！？」
「遅いよ」
『Ｔｈｕｎｄｅｒ』

――バチィッ！！

「……ッぐ！！」
「なのは！」
……え？
何で私、秀人さんに抱えられてるの……？
「あ……う」
口が、動かない。いや、口だけじゃない。身体の自由が、効かない。からん、と手からレイジングハートが転がり落ちてしまった。拾い上げないと。早く、早く……でも、思いとは裏腹に、力が抜けていく。視界にモヤがかかったように霞んでいき……

――意識が、途絶えた。

第六話（後書き）

なのは敗北。
次回は、秀人ＶＳフェイトになる予定です。
フェイトは、虐待の影響で人格が歪んでいます。

第七話（前書き）

温泉編です。

第七話

「天候操作……！？　こんな高度な魔法を、ノーモーションで！？」
気絶したなのはをゆっくり横たえる。なのはに怪我は無い。バリアジャケットが、代わりにボロボロに黒焦げていた。落雷の直撃を受けて、この程度で済んだのは幸運なのかもしれない。けれど。
「……てめぇ」
ふつふつと、怒りが沸いてくる。
「タダで済むと思うなよ！」
なのはを傷付けるなら、どんな奴だろうと俺の敵だ！
「レイジングハート、モードリリース！」
『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ』
デバイス形態を解除し、スタンバイモードに。俺が使う機能なら、この状態のままで十分だ。
「へぇ、デバイスを共有してるんだ。効率悪ッ！」
小馬鹿にされるが、知ったことか。
「ユーノ、お前はなのはと子猫の治療を頼む」
黒衣の少女の手には、ジュエルシードが握られていた。なのはを攻撃するのと同時に、封印したらしい。
「わかった。でも、相手が子供だからって油断しないで……かなりの使い手だ」
「ああ」
あの攻撃、あの速さ。油断なんて、最初からしていない。
「次はお兄さんが相手？」
少女が黒塗りの斧を向けてくる。
「くふふっ、いいよ。どうせ、ボクには勝てないけど」
やってみろよ！
「バレット！」
ピンポン玉サイズの青い魔力スフィアを数個、拳に纏わせる。

『Ｂａｌｌｅｔｔｅ』
「ファイア！」
――ドガガガガッ！！
だが、やはりと言うべきだろうか。
「ひょいひょいっ、と」
わざわざ擬音を口にして、余裕で回避してみせる。やはり、速い……！
密集した木々の隙間を飛び回り、跳ね回り……
――ヒュンッ！
唐突に、斧が死角から迫る。
「うおっ！？」
――ガンッ！
慌てて腕でガード。
魔力で強化した腕を、衝撃が突き抜ける。なんて威力だ！
「くふふっ。よく防いだね、お兄さん」
ひゅんひゅん、と、鉛筆回しでもするように軽快に斧を振り回す。
「じゃあ、これはどうかな！？」
『ｐｈｏｔｏｎ　ｌａｎｃｅｒ』
バチッ、と、薄暗い森の中に光が散る。これは、さっきの……！
「ファイア！」
――キュドドドドド！
光の槍の、一斉掃射！
『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ！』
間に合え……！！
「ぐ……あああ！」
弾き飛ばす度に、衝撃が突き抜ける。
――ガガガガガガガガガガガ……！！
なんつー連射だよ！
――ピシッ……ピキッ……
バリアに亀裂が入ってきた。そこを修復し、全体を補強し……よ

うやく、攻撃魔法が収まった。何とか……耐えきったか。
「大した硬さだね」
少しだけ感心したように、太い枝の上で立ち止まる。
「ボクの攻撃を防ぎ切ったのなんて、リニス以来だよ」
「そいつぁ、光栄だね……」

対してこちらは……？
『残存魔力４８％です』
「そうか。まだ余裕だな」
多少はダメージを喰らったが、戦闘の続行は可能だ。あのクリーンヒットが堪えたけど、倒されるほどじゃない。

「……あ、もういいや」
唐突に、少女から戦意が消えた。
「どういうつもりだ？」
バレットを構えながら尋ねる。くふふっ、と笑い、告げる。
「もう、目的は果たしたから。バイバイ、お兄さん」
ひゅんっ、と消える。周囲をサーチしてみたが、反応は無い。どうやら、本当に離脱したらしい。

それにしても、目的って何だ……？

・・・・・・・・・・

まず感じたのは、固い地面の感触。
そして、身体を包む暖かさ。
「……う」
けだるさを無視し、目を開ける。半球状の膜が、私と、さっきの子猫を覆っていた。
「気が付いた？」

「ユーノ、くん？」
そうだ、私は子猫を助けようとして……！
がばっと身体を起こす。
「あ、まだ無理しちゃ駄目だよ！」
「あ、あいつは！？」
きょろきょろと辺りを見回す。私はバリアジャケットではなく普段着で、レイジングハートは手元には無かった。
「今、秀人が追ってる」
そっか……
「私、負けちゃったんだ」
「……うん」
ユーノくんは、否定しなかった。
「そっ、か……」
強くなったつもりだった。練習は実を結んでいると思っていた。
……でも。
「何にも、出来なかった……」
悔しくて、悔しくて。ただ、拳を握ることしか出来ない。

「本当にこっち？」
「うん、あそこがお気に入りだから」

不意に、人の声が聞こえてきた。
「え！？　結界を張ってるのに……！」
ユーノくんが慌てる。
「綻んでる……！？そんな！」
魔法を見られるのを防ぐためか、治療魔法が中断される。ほぼ同時に、バニングスさんと月村さんが姿を見せた。
「あれ、高町さん。こんな所で何を……あ！」
その視線が、倒れている子猫に向いた。
「マルス！」

子猫を抱き上げると、白い服にじわりと赤い染みが広がった。月村さんが携帯電話で、誰かを呼ぶ。よかった。これで、少なくともあの子猫は助かる。
けど、何でだろう。
――何で、バニングスさんは私を睨んでいるんだろう。

「高町、何でアンタはここにいるの」
血の気が引く。それを実感したのは、初めてのことだった。
「アンタの連れは、ガレージにいるんでしょ？　なんで、アンタはここに、マルスのそばにいるの？」
どうしよう……どうしよう！
「……アンタがやったの？」
静かな問い。けれど、その中には……確信が少なからず含まれていた。
「ち、違……」
「じゃあ、何でこんな所に一人でいるのよ！」
言えない。言えるわけがない。
ただ黙る私を見て、バニングスさんは確信したらしい。私が子猫を傷付けたと。
「……て行け」
「違う、違うの、バニングスさ、」

「出て行け！」

「……あ」
言葉が、出ない。視界が滲み、まともに物が見れなくなる。鼻頭がツンとして、のどの奥が引き攣り……
「うあああ……！」
嗚咽が、漏れだした。

ただひたすら走って、走って、走って……気付いたら、屋敷の外を歩いていた。涙は涸れたのか、もう流れない。

――ぽたっ、ぽたっ

頭に水滴が落ちる。それが合図であるかのように、

――ざあああ

本格的な、雨になった。傘も無く、ぐしょ濡れになる。生暖かい雨に打たれながら、ひたすら屋敷から逃げるように遠ざかる。

「なのは！」

エンジン音に負けない大きな声で、後ろから呼び止められる。

「……秀人さん、ユーノくん」

そっか。置いて来ちゃったんだ。傍らにバイクを止め、駆け寄ってくる。

「ユーノに聞いた」

「……そう」

俯き黙り込む私を、抱き寄せる。秀人さんも、ユーノくんも、雨でぐしょ濡れだった。

「……違うのに」

不意に、口をつく言葉。私の意思とは無関係に、激情をぶちまける。

「私じゃない！　私は何もしてない！　何もしてないのに！　何で、何で……！」

涸れたはずの涙が、また溢れてくる。雨と涙が混ざり、地面に落ちていく。

「うあああぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」

・・・・・・・・・・・・・

「あはははははは！！」

黒衣の少女……フェイトは、大笑いしていた。目の端に涙まで浮かべ、腹を抱えて身をよじり……、喜悦を、全身で表現していた。

望遠モニターの中には、先ほどまで相対していた二人と一匹が映っている。

「あはっ、あはははは……！　はぁ、はぁ……、」

笑い疲れたのか、肩で息をする。

「フェイト、」

そこに赤い狼……アルフが戻ってきた。

「ああ、アルフ、お帰り。ちゃんとやってくれたんだね」

「……ああ」

隔離結界の一部を解除し、民間人の少女二人を誘い込んだのはアルフだった。

「あぁ、こんなに上手く行くなんて……くふふっ、可笑しっ！」

あの子猫に重傷を負わせるのも、その罪をあの少女になすり付けるのも、全てフェイトの描いた通りだ。

「さぁて……楽しくなってきた」

そして一人と一匹は、雨の帳に姿を消した。

「ただいま」

アパートの鍵を開け、自分で言いながら部屋に入る。

「……」

なのはは、無言で靴を脱ぎ、部屋に上がった。俺の服を、がっちりと掴んでいる。仕方ないから、そのまま風呂場に連れていった。ユーノは黙って、後ろをついて来る。バスタオルで頭を拭いてやるが、雨粒を吸い込んだ服は、拭いたくらいではどうにもならない。

「ほら、風呂入ってこい」

棒立ちになるなのはを残し、風呂場を後にする。だが、
「嫌ッ！！」
背中に抱き着いてきた。
「お、おい……」
「嫌だ……」
かたかたと震えている。寒さだけが、原因じゃないのだろう。あんな理不尽な出来事、子供が経験していいものじゃない。
「……一緒に入るか？」
半ば、冗談のつもりだった。小学三年生とはいえ、女の子だ。
「……うん」
断るかと思っていたのだが、帰ってきたのは、肯定の頷き。ユーノも捕まえ、三人で入ることになった。

小さな背中にシャワーをかけてやり、冷たくなった身体を温める。なのはの表情は、髪の毛が覆っているせいで読めない。
「髪、洗うぞ」
シャンプーを手に取り、背中に掛かるくらいの長さがある髪の毛を丁寧に洗う。しばらく洗い、洗面器に張ったお湯で泡を流す。髪の毛を洗い終えたら、今度は身体だ。小さな背中を、ボディソープを染み込ませたスポンジで擦る。
「……負けちゃった」
ぼそり、と呟く。
「……ああ、そうだな」
泡を洗い流す。
「私、何もできなかった。頑張って……頑張ってたのに、ちっとも敵わなかった」
その小さな身体を、後ろから、そっと抱きしめる。
「なのはは、よくやったよ。なのはの頑張りは、俺が一番よく知ってる。だから……そんなに気に病むな」
「……うん」

なのはは、また少しだけ泣いた。

「うーん……」

湯舟に浸かりながら考え事をする。

ユーノに頼んでなのはを先に上がらせ、ベッドに入らせた。今日のところは、もう眠らせてやった方がいいだろう。

あの黒い子は何者なんだとか、そんな些細なことはどうでもいい。

（どうすれば、元気になるかな……）

元気が無くて当然だ。ただでさえ友達（本人は否定するが）を失ったばかりだというのに、今回の件。しっかりしているように見えて、その実傷つきやすいなのはには、相当堪えたに違いない。

『ユーノ、なのはは？』

『まだ起きてるけど……元気ない』

だろうな。さーて、どうすっかなぁ……

「おい、ヒデ」

「あ、ハイ。何すかカントク？」

その翌日。工事現場のプレハブ小屋で休憩中、上司に呼び止められた。

俺の収入源は、主にこういった肉体労働だ。鉄骨や土のうを運んだりといった単純作業は、気楽でいい。短時間で高収入。何より、自分の体質を隠さなくていいというのが最高だ。人付き合いも最小限で済むし……って、駄目人間の思考だなこりゃ。

そんな俺を特に目に掛けてくれているのが、目の前のオッサン……現場責任者、通称『カントク』。

俺の雇い主であり、色々とお世話になっている人だ。

そのカントクが、俺にチケットをくれた。最近オープンしたばかりの温泉宿のペアチケットだった。
「最近、シフト増やしてもらったからな。小遣いに取っとけ」
俺がシフト増やしたのは、あくまで生活費のためなんだが……
「まぁ、カノジョでも誘ってシッポリ休んでこいよ。ヒヒヒッ！」
親しみの篭った下ネタに苦笑しつつ、それを受けとった。ペアというのはありがたい。
「んじゃ、ありがたく頂きます……っていうかカントク」
「あぁ、何だ？」
タオルで汗と泥を拭き取りながら。
「なんでペアチケットなんですか？」
それが不思議でならない。ペアチケットというのは、二人でないと使えないものが殆どだ。下手したら無駄になる可能性だってあるのに。だがカントクは、ニカッと歯を見せて笑い、言った。
「男が汗流して働くのはな、大抵オンナのためって相場が決まってんだよ」
俺はもう一度、頭を深く下げた。
「ありがとうございます！！」

・・・・・・・・・・・・・・

「……はぁ」
遊歩道のベンチに座り、読みかけの本から顔を上げる。夕日が上って、空が赤く染まっていた。どう見ても、夕方だった。
（……また、サボッちゃった）
あの日以来、私は学校へは行っていない。この前までは、空気のように、クラスの中に溶け込んできたつもりだ。でも、八代さんとの一件で、それが出来なくなってしまった。
教室に顔を出して、いつも通りに過ごせる自信が無かった。それに。
（他人が、怖い）

誤解を受けるかもしれない。ひどいことを言われるかもしれない。傷付けられるかもしれない。そんな恐怖が心に根付き、人がいる場所から足が勝手に遠ざかった。

『戦闘終了』

レイジングハートと行っていた模擬戦を終える。

「十七連敗、か……」

仮想敵は、あの黒衣の少女。秀人さんが戦った時に収集した戦闘データを基に作り上げたアバターだ。それを相手に、私は不様に黒星を更新し続けていた。攻撃は避けられ、防御は破られ、逃げられたら追いつけず、追い掛けられたら逃げきれない。まざまざと、実力の差を見せ付けられた。

『なのは、今日はここまでだ』

膝に乗ったユーノくんが、訓練の終わりを告げた。確かに、頭を使いすぎてちょっと熱っぽい。

「……私、こんなに弱かったんだ」

今日、何度目になるかも分からないため息。

「帰ろうか」

ランドセルを背負い、公園を後にする。

夕食を終えた後、秀人さんが細長い紙をちゃぶ台の上に置いた。

「温泉？」

「ああ。仕事場の人から貰ったんだ」

日付は、明日と明後日。一泊二日だ。平日だけど、どうせ学校へは行っていないし、構わないだろう。

「何も起きなければいいんだけど……」

「ちょ……不吉な事言うなって！」

秀人さんが、割と本気で慌てている。でも、思い返してみれば、ジュエルシードと遭遇するのは、いつも出かけた先だ。出たら出たでなんとかしよう。

「わかりました。学校には連絡しておきます」
「ついでに無断欠席のこと、謝っておけよ？」
「――はい」
バレバレだったらしい。じろりとユーノくんを睨むと、そそくさと目を逸らした。犯人はユーノくんか。

アパートの外に出て、担任の電話番号を押す。留守電だったら楽でいいんだけどなぁ。
しかし、数回の呼び出し音の後、がちゃりと電話が繋がった。
『もしもし？』
まだ私だとは知らないようだ。携帯電話だからだろう。
「夜分遅くに済みません。高町です」
がたんっ、と何かが落ちる音が、受話器の向こうから聞こえてきた。
『た、高町さん！？』
「はい。こんばんは」
『五日も休んでどうしたの！？心配したのよ！？』
「済みません、面倒臭かったんです」
私は嘘が下手だ。どうせバレるなら、最初から正直に開き直って話してしまった方がいいだろう。
『め、面倒臭いって、あなた……』
「人付き合いが面倒なんです。だから、誰とも会いたくありません」
『本気なの！？』
「はい。なので、しばらく学校へは行きません。じゃ」
『待って！』
電話を切ろうとしたが、まだ話があるようだ。
『そこにご両親はいらっしゃるの！？すぐに替わって！』
ご両親、ねぇ。思わず苦笑が漏れる。
「喫茶店にでもいるんじゃないですか？」
ぶちっ、と電源を切り、着信拒否リストに放り込んだ。

「秀人さん、オッケーだよ」
「ん。それじゃ、着替えの準備しようか」
「はいっ」

翌日の朝。バイクに乗り、温泉宿に向けて出発した。市街地を走り、高速道路に乗る。メーターを覗いてみると、現在の速度は時速１２０キロ前後。散々アクロバティックな走行で慣らされた私たちには、どうってこと無い速度だった。
温泉宿に着いたのは、お昼過ぎだった。寄り道してたら、遅くなってしまった。
「吾妻さまですね。ご予約、承っております」
通されたのは、十畳ほどの和室。私たちには丁度いい広さ。温泉は、共用の大浴場の他に、各個室ごとに用意されているらしい。障子を開けたそこには、柵に囲まれた石風呂があった。
「せっかくだから」と、まずは大浴場に行くことにした。当然、男湯と女湯は別になっている。ペットの連れ込みは厳禁だから、ユーノくんは部屋でお留守番。何だか、悪い。

脱衣所で服を脱ぎ、かごに入れる。
と、私のすぐ横に、女の人がずいっと現れた。
……こんなに広いんだから、別の場所を使えばいいのに。
視界の隅に揺れる、真っ赤な毛髪。
（え？）
思わず、横を向いてしまった。うん、見間違いなんかじゃない。お姉さんの髪の毛は、鮮やかな茜色だった。
「珍しいかい？」
不意に、お姉さんに声をかけられた。まじまじと見すぎた。
「ご、ごめんなさい」
「いいさ」
外見とは不釣り合いな、無邪気で子供っぽい笑みを見せる。

「綺麗だと思いますよ？」
「ありがとうよ」
そして、豪快に服を脱ぎ捨てた。羞恥心が薄いのだろうか。引き締まった肉体が、いやに眩しい。
「なぁ、アンタ……」
「はい？」
浴場に入ろうとしたところで、また話し掛けられた。
「あたし、こういう場所に来るの初めてなんだ。ちょっと教えてくれよ」
えっと、つまり、温泉でのマナーを教えてあげればいいの？
「わかりました」
「よーし！じゃ、行こうか！」
「……え？」
がっしりと手を取られた。
「あの、口頭じゃ……」
「ダメだ。あたしは体験主義者なんだ」
ずりずり……
「あ～……」

「まずは身体を洗います」
身体を洗うスペースへ行き、椅子に座る。
「身体を洗う時は、かならず椅子に座って、シャワーは通路側ではなく、壁際に向けて」
桶にお湯を張り、手足など、体の末端から徐々に掛け湯をして温めていく。お姉さんも見よう見真似で、掛け湯をする。
石鹸をタオルで包み、泡立てる。身体を洗い、汚れを丁寧に落として行く。
「うー……あたしゃ、このシャンプーってのが苦手でねぇ」
「ああ、目に入ったら痛いですよね」
目をぎゅっと瞑り、わしわしと乱暴に髪の毛を洗っている。

そして、湯船に入る。
「……」
う……なんか、お姉さんがじっと私を見てるんだけど……
「あの……何か？」
「なんか、悩んでる匂いが……」
「に、匂い……？」
腕に鼻を近づけ、嗅ぐ。石鹸と温泉の匂いしかしない。臭く……ないよね？
「じゃなかった。悩んでる顔してるからさ」
見ず知らずの他人に話すような内容じゃないことは、わかってる。こんな話、されるほうが迷惑だろうし、気分も悪いはずだ。
「勝負に、負けちゃったんです」
それなのに、話さずにはいられなかった。
「負けられない……負けちゃいけない勝負に。ほんの数秒で」
それっきり、黙り込む。お姉さんも、何も言わない。
（やっちゃった……）
いきなりこんな話されてドン引きしてるんだ。ああ、もう。私の馬鹿！
「じゃあ、次は負けないように頑張るしかないね」
「え？」
お姉さんは、笑って……それでいて、真剣な表情で、そう言った。
「そうだろ？　足を止めたら、今度こそ、本当に届かなくなっちゃうよ」
照れくさくなったのか、そっぽを向く。
「頑張ったのに報われないなんて、そんなこと、あっちゃいけないんだ……」

その最後の言葉だけは、私に向けられたものではないようだった。
「あの、ありがとうございます……あれ？」
私の隣にいたはずのお姉さんは、忽然と姿を消してしまっていた。
『じゃあ、次は負けないように頑張るしかないね』
お姉さんの言葉を、反芻する。
「全く、気軽に言ってくれちゃって……」
くすり、と笑う。
そうだ。一回負けたくらいで、何をうじうじ悩んでいたんだろう。
今の私がするべきことは、負けないように頑張る、ただそれだけじゃないか。今度こそ、勝つために！

熱意が、沸き上がる。
「よーし！」
ぱんぱんっ、と両頬を叩き、板張りの廊下を駆け抜ける。

――私は、まだ頑張れる！

・・・・・・・・・・・・

――がつんっ。

薄暗い裏庭に、不穏な音が響いた。
「うぐっ……」
茜色の頭髪をもつ女性……アルフが、頭を押さえてうずくまる。それを、絶対零度の視線で見下ろすのは、彼女の主であるフェイトだ。
「……ねぇ、どうして？」
華奢な手には、血を滴らせる黒い斧。これで、アルフの頭を打ち据えたのだろう。
「ボク、言ったよね？　『あの子の心をへし折る』って」

「……ああ」
抑え切れず、赤い血がアルフの額を伝い、地面に染み込んでいく。
「だったら！」
「あうっ……！」
長い髪の毛を掴み上げ、顔の高さを合わせる。
「なんで、元気付けるような真似をした！！　ええっ！？」
真っ赤な双眸は怒りに見開かれ、使い魔たるアルフを睨みつける。
そして、再び斧を振り上げ……

――ガンッ！

「言うことを聞けない、悪い子には！　お仕置き、だっ！！」

――ガンッ！　ガツンッ！

二回。三回。打ち据えられる度に、アルフの身体に衝撃が走り、血が飛び散る。
「はあっ、はあっ……！！」
肩で息をして、血を流して倒れるアルフを見下ろす。
「ねぇ……アルフは、ボクのことがキライなの？　ボクのことなんてどうだっていい？
ボクを困らせるのが楽しい？」
次の瞬間には、怒りは消え失せ、深い哀しみを浮かべた。あきらかに、情緒が不安定だ。錯乱している、と言ってもいい。
「キライなはず、無いだろ？」
アルフは、フェイトの華奢な身体を抱きしめる。フェイトは機嫌を良くしたのか、アルフを柔らかく抱き返した。
「じゃあ、もうボクの言うことに逆らわない？　ちゃんと言うこと聞く？」
深い、深い、深淵のような瞳で、アルフを真っ直ぐに見据える。

「……あぁ、約束するよ」
「絶対だよ……悪い子は、いらないからね」
そして、慈しむように、アルフの血まみれの頭を撫でる。
びちゃ……とフェイトの手が赤く染まるが、意に介さず、アルフを愛撫する。
「……今夜、この辺りにあるジュエルシードが発動するよ」
それに身を任せながら、アルフが言う。
「そうみたいだね」
その気になれば、発動前のジュエルシードを確保できるだろう。だが、そうしない。
「あの子が出て来たら……くふふっ！」
迫る、『お楽しみ』の時間に思いを馳せ、笑いを漏らすフェイト。
「奪ってやる……！」
獰猛な笑みを浮かべる。その感情の猛りに呼応するように、周囲の空気がバチバチと帯電していた。
「あの弱っちい子が必死に集めたジュエルシードを、全部奪ってやる！
くふふっ、くふふふふっ！！　あーっはっはっは！！！」

・・・・・・・・・・・・・・

一体何があったんだ……
俺は、少し離れた場所でそれを見ていた。
「……ここで旋回。振り下ろしてきた斧を、」大浴場から戻るや否や、レイジングハートの前に正座し、イメージトレーニングを始めてしまった。さっきまでは沈み濁っていた瞳が、星を散らしたように明るく輝いていた。
元気になったのはいいことだが、少し、極端すぎる気が……
「バインドは回避……回避した先に、誘導弾で先回り……」

もうかれこれ、二時間近くああしている。
「……すごいよ、なのは」
ユーノも驚いている。
「アバターとはいえ、互角に渡り合ってる」
今まで黒星続きだったというのに、格段に進歩している。

「……よし！」

そして、訓練開始から二時間半。なのはが、汗びっしょりのまま、会心の笑みを見せた。
「勝った！」
『お見事です、マスター』
「やったな、なのは……！？」
お馴染みの、あの感覚。あーあ、やっぱりなぁ。嫌な予感だけは、よく当たる。
「行けるか、なのは」
訓練で消耗しているんじゃないか？だが、杞憂だったようだ。
「全然平気。むしろ、いつもより調子いいかも」
身体が温まっているらしい。窓から飛び出し、裏庭へ飛ぶ。
多分……いるだろうな。あの子が。

・・・・・・・・・・・・

暴走体は、さほど強力な個体ではなかった。いつも通り、バインドし、射撃魔法で弱らせ、封印。還元されたジュエルシードをレイジングハートに納める。
そして、やはり。
『来ました』
月明かりを受けて、金色の髪が輝く。紅い瞳は、猛禽のように私を

捉えていた。
睨み返し、レイジングハートを握る手に、強く、強く力を入れる。
「今日は、勝つ！」

飛翔の勢いのまま、あの子が真っ直ぐに突っ込んできた！
――ッガギィィィン！
プロテクションを展開。勿論、これだけで防げるとは思っていない。
あくまでこれは、衝撃を受け流すため。
（……ここ！）
身を翻し、力点をずらし、いなす。即座に方向を換え、斧が迫る。
プロテクションを解除。レイジングハートの柄で、斧の一撃を受け止める。
――ギィン！
「うっ！」
受け止められた。だけど、衝撃で手がビリビリ痺れる。
『ａｃｃｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ』
鍔ぜり合いのまま、誘導弾を発動。
『ｐｈｏｔｏｎ　ｌａｎｃｅｒ』
あの子も、光の槍を出現させた。
「シュート！」
「ファイア！」
発射は、同時。
――ズガガガガガッ！
攻撃魔法は、ぶつかり合い、互いを食い合う。そして、最後の一発が爆ぜ、その場から離れる。
「ふぅん、腕を上げたね」
どうでもよさ気に呟く。バリアジャケットの腰の部分が、擦り切れたみたいになっていた。
「でも、まだ届かない」
ぱきん、と音を立て、私の手甲が砕ける。

「すぐに届かせるよ」
不敵に笑い返す。それがカンに障ったのか。
「調子に……！」
ぐぐっ、と。獲物に飛び掛かる猛獣のように身体をたわませる。そして……
「乗るなアァァァッ！」

視認できる限界の速度で突っ込んで来た！

・・・・・・・・・・・・・

少し離れた場所で、衝突音と光が瞬く。
（なのは、負けるなよ）

俺とユーノは、結界の上空を飛んでいた。

月村邸での一件。明らかに不自然なタイミングで結界に穴が空き、彼女達がなのはと接触した。最初は、あの黒衣が空けたのかと思っていたが、俺と戦っていた場所からでは遠すぎる。なら、残る可能性は。
「協力者がいる」
ということ。

伏兵として、結界の中に潜んでいる筈だ。エリアサーチは、レイジングハート無しでは発動できない。だからこうして、肉眼で探している。そして。
「「いた！」」
茂みに身を隠すようにして、茜色の毛並みが揺れている。
「ガアアッ！」
――ドンッ！

見つかったと分かるや否や、攻撃魔法を仕掛けてきた。照準は甘い。牽制目的だとアタリをつける。

「だぁりゃあああああああ！」

足元にインパクトを纏わせ、急降下！

――バゴオオォォン！

地面をクレーター状にえぐり取る。だが、手応えは無い。回避したか。

周囲は鬱蒼とした雑木林。奇しくも、月村邸と似通った雰囲気だ。獣にとって、これほど有利なフィールドは無い。

「なら……」

手の平に、魔力スフィアを出現させる。インパクトに、拡散効果を付与。広範囲を、纏めて！

「吹ッ飛べぇ！！」

――ドゴオォォン！

ばきばき……と、衝撃波を浴びて樹木が薙ぎ倒され、効果範囲が更地になる。

「まだまだぁっ！」

二発、三発と連射する、その度に、更地の面積が広がる。

「ちょっとちょっと！　いくら直せるとはいっても、限度があるからね！？　主に僕の魔力とか体力とか！」

「頑張れ！」

「ちょっとおおおおお！？」

「ガアッ！」

獣とて、逃げるばかりではない。大振りになった隙を突き、鋭い爪と牙を剥き、飛び掛ってくる。
「どりゃあっ！！」
それを、強化したブーツの底で迎撃する。
（やっぱりな。リーチが短い）
それに。
（二体目の暴走体と、戦い方がソックリだ）
そう。俺には、その分だけアドバンテージがある。
「ガアアッ！！」「よっ！」
爪の一撃を回避する。目も慣れてきた。
「おりゃあああああ！！」
――ドスッ！　ガコッ！！
腹部にミドルキックを浴びせ、下顎へアッパーを叩き込み、
「ガ、グッ……！」
「沈めぇっ！！」
ふらついた頭部に、踵落とし！
「ギャアッ！」
茂みに落ちて行く。上がってくる気配は……無い。

「やった！」
「いや、仕留めそこなった」
直前に、橙色のプロテクションで威力を殺された。そして、この場にはもういない。
「行くぞ。多分、なのはの所だ」
この距離なら、飛んだ方が速いな。
「……フロート！」
意識を集中し、足首に環状魔法陣を展開。そして、なのは達の元に飛んだ。

◆　◆　◆　◆

首筋に、鎌をぴたりと突き付けられた。魔力で形成された光の刃が、肌をチリチリと焦がす。……まさか、こんな隠し玉を持ってるなんて。

「またボクの勝ちだね？」

笑顔で勝ち誇る。

『……』

レイジングハートが明滅する。そして、ジュエルシードを一つ、吐き出した。

「舐めてるの？」

彼女は笑顔を消し、冷えきった声を出す。と、首筋に当てられていた鎌が離れ、そして。

――ガギュン！

「……な」

レイジングハートの柄が……真っ二つに、切断された。

「お前……！」

「一つで見逃す訳無いでしょ？　全部だ。全部よこせ！」

鎌が、再び押し付けられる。

「頭と胴体、永遠にお別れさせたい？」

「こ、この……！」

拳を固める。だけど、動けない。

「あはは、何？」

レイジングハートが、ジュエルシードを排出しようとしたその時……

――ガコンッ！

青い魔力弾が、彼女を弾き飛ばした。

「うぐっ！！　だ、誰が……！」

隙あり！　今だ！

『Ｉｍｐａｃｔ　！』

至近距離から……！
「喰らえ！」
――ドォン！
「がぁっ……！」
腹部に衝撃波をまともに喰らい、悶絶している。
「よくも……！　げほっ、げほっ……！」
距離を取り、レイジングハートを向ける。幸にも、破壊されたのは外装部分だけ。魔法の行使する分には、何の問題も無い！
「ディバイン……！」
もう一回、喰らえ！
「バスター！！」
――ドカアァアン！！
発射された砲撃は二十メートル程度の距離を一瞬でゼロにし、着弾した。
『直撃です』
「あははははっ、ざまあみろ！」
気分爽快！
向こうから、秀人さんが飛んできた。
「秀人さん、ありがと。助かった」
あの最初の一発が無ければ、ジュエルシードを全部奪われるところだった。
「レイジングハート、大丈夫か？」
私の握る、真っ二つになったレイジングハートを見て心配する。
『問題ありません。魔力さえあれば、再構成が可能です』
「秀人かなのはが魔力を注げばくっつくよ」

言われた通り、魔力を切断面に集中する。切断面が僅かに輝き……
『Ｒｅｃｏｖｅｒｙ　ｃｏｍｐｌｅｔｅｄ』
元に戻った。よかった……
「プラナリアみたいだな」
「ちょ、秀人さん！？」
秀人さんが、言ってはいけない一言を言ってしまった！　確かに、私もちょっと連想したけど！
『ブチ殺しますよ？』
「レイジングハートも何言ってるの！？」
まあ漫才はさておき。
煙が晴れたそこには、意外なほど無傷なあの子がいた。傍らには、真っ赤な毛並みの狼。あれが、彼女の仲間なんだろう。
「あ、アルフ！」
「ぐ……」
だが、狼の方は肩が上下していて、無事には見えない。
『あの使い魔が、彼女の盾になったようです』
ディバインバスターの直撃を受けたのは彼女ではなかったらしい。
「チッ、しぶといなぁ……」
悪態をつき、再びレイジングハートを向ける。
「で、どうするの？　三対一で、足手まといを連れて、まだやる？」
形勢逆転。彼女は憎悪を滲ませ、私たちを睨む。
「お前たち……！絶対に、許さない！」
――ぷちん、と。私の頭の中で、何かが切れた。
「……許さない、だって？」
自分のものでは無いような、底冷えした声色。
「そんなの、こっちの台詞だ！　よくも、私のレイジングハートを傷付けたな！
そんな犬コロごときの命程度で、許すもんか！」
「お前えぇぇ……！」
ぎらぎらとした瞳。きっと、今の私も同じような目をしているだ

ろう。
「私は、高町なのは」
「フェイト・テスタロッサだ」
レイジングハートを、黒塗りの斧を、お互いに突き付け、宣言する。
「絶対に！」
「必ず！」

私は、こいつを！

「「叩き潰してやる！！」」

黄金色の魔力光と共に、彼女……フェイトは消えた。

・・・・・・・・・・・・

なのはとフェイトと名乗る魔導師がタンカを切り合い、数分が経った。なのはは、フェイトがいた虚空をじっと睨み続けている。
……そろそろ、だな。
「なのは」
頭に、ポンッと手を載せる。
「もういいだろ。戻ろう」
「……うん」
漲っていた殺気が霧散し、同時に、セットされていた複数の攻撃魔法がキャンセルされる。よっぽど、頭に来ていたんだろう。

地上に着地し、レイジングハートを待機状態にする。
「私、負けてないよ」
俺に手を引かれながら、なのはが一人ごちる。
「引き分けだもん」
……正直に言えば、今回はなのはの負けだ。

俺の援護が無ければ、あのまま全てのジュエルシードを奪われていた。ユーノもそれがわかっているのか、何も言わない。
「……そうだな。引き分けだ」
わしわしと少し乱暴に頭を撫でてやる。
「あは、くすぐったい」
洗ったばかりの髪の毛は、土埃を着けてしまい、ごわごわしていた。
「宿に戻って、入り直そうか」

・・・・・・・・・・・・

「アルフ、大丈夫？　痛まない？」
ある高級マンションの一室。そこは、フェイト達の活動拠点に与えられた部屋だった。
「大丈夫さ、この、くらい……」
備え付けのベッドに横たわる、紅髪の女性……アルフは、呻きながらも健気に返事をする。包帯があちこちに巻かれてあり、砲撃の威力が窺い知れる。その無数の傷の中には、フェイトの折檻によるものもいくらか含まれているのだが……フェイトは気にするそぶりを見せない。
「ボク、『庭園』に戻らないといけないの。一人で大丈夫？」
「それって……」
「うん」
フェイトは、僅かに嬉しそうな仕草を見せた。
「おかーさんからの、呼び出し」

「……待って、あたしも行くよ」
アルフは、よろけながらも立ち上がり、言った。あの女と、一人きりで引き合わせることなど、到底出来ない。
（あの女は、いつもフェイトを……）
「そう？　無理しちゃ駄目だよ」

アルフの手を引き、屋上へと向かう。とは言え、フェイトの部屋は屋上の真下なので、短い階段を上るだけだ。
屋上の扉を開けると、冷たい空気が流れ込んできて、フェイトは僅かに身をすくませた。
「う～、寒っ。早く行こうっと」
言うや否や、足元にミッドチルダ式魔法陣が浮かび上がる。選択されたのは、転移魔法。
「座標入力、っと」
フェイトの手の中で、封印済みのジュエルシードが三つ輝く。
「おかーさん、喜んでくれるかな」
アルフは何も言わない。
「褒めてくれるかな」
ただ悔しそうに、顔を歪めている。

・・・・・・・・・・・・

泥や落ち葉があちこちにこびりついて、気持ちが悪い。宿の入口で、仲居さんに驚いた顔をされてしまった。
「お客様、どうされたんですか！？」
「いえ、足を滑らせまして……ははは」
掻いた頭から、ジャリッ、と嫌な手応えがした。現場帰りよりはマシだが、だからといって放っておく理由は無い。

大浴場に比べたら遥かに小さいものの、手頃な広さの浴室は、二人と一匹で入るには丁度いい。二人して適当に服を脱ぎ、シャワーを浴びる。
「……本当は、分かってるよ」
気持ちよさそうにシャワーを浴びながら、なのはがさっぱりとした口調で言う。演技でもやせ我慢でもなく、素直に自分の敗北を受

け入れているらしい。
「今日のは、私の負け。でも、」
くるっと振り返り、にっこりと笑う。
「今度は、負けない」
「ああ、頑張ろうな」
そして俺達は翌朝、温泉宿を後にした。

・・・・・・・・・・・・・

――ぱんっ！

乾いた音が、高い天井に反響した。
「……たったの三つ」
不機嫌を隠そうともしない、低い声。それが、フェイトの母親、プレシア・テスタロッタの、出迎えの言葉だった。
「ひどいわ……あなたは、私の研究なんて、どうだっていいのね？」
――ぱんっ。ぱんっ。
二度三度と、フェイトの頬を張る。
「ごめんね、おかーさん」
だがフェイトは、赤く腫れた頬を気にするでもなく、笑顔を浮かべる。
――ぱぁんっ！
「あうっ……」
一際強く、プレシアがフェイトを叩いた。フェイトは床に倒れる。
「何を笑っているの……？　この役立たずが！」
――どずっ！
プレシアのつま先が、フェイトの腹に突き刺さる。母親が娘に与える体罰……そのレベルを遥かに超えた、暴力だった。
「げッ……！」

胃液を吐き、悶絶するフェイト。その両腕が、プレシアのバインドにより空中に吊り上げられ、磔にされる。
「言うことを聞かない悪い子には、お仕置きが必要ね」
プレシアの手にするデバイスが、鞭のようにしなる。明らかに、対象に痛みを与えるための形状。だが、それでも……、フェイトは、笑顔を絶やさない。
「はは、あははははは……」
ただ空虚に、けたけたと笑う。プレシアは顔をしかめ、鞭を振り上げた。

――バチイィンッ！

「うあああああああああああああッ！」

痛ましい悲鳴。白い肌に、真っ赤なみみず腫れが刻まれる。
「い、たい……痛い、よぉ……あはは、あははははは……！」
そして、空虚な笑い。
「ッ！　その、耳障りな笑いを止めなさい！」
――バチンッ、バチイイインッ！！
「あああああっ！！」
皮膚が裂け、真っ赤な血がたらたらと滴る。
「はあ、はあ……」
フェイトの顔から、歪な笑顔が消える。そのように、命令されたから。

「フェイト……あなたは、私のことが嫌いなのかしら？」
――バチンッ！
「フェイト……あなたは、私のことなんてどうだっていいの？」
――バチンッ！
「フェイト……あなたは、私を困らせるのが、そんなに楽しいの？」

――バチンッ！

プレシアがそう問いかける度に、フェイトの身体に傷が刻まれる。

（そうだ。ボクが悪いんだ。ボクが愚図だから。
おかーさんの力になれないから。おかーさんはこんなに怒ってるんだ。
だから、おかーさんは、ボクの悪いところを、直そうとしてくれているんだ）

鞭で嬲られながら、フェイトは……決定的に間違った思考にたどり着く。

（喜ばないと。おかーさんがボクのためにしてくれているんだ。
笑わないと。もっと、笑わないと……）

「違う、よ……ボクは、おかーさんが大好きだよ……一番、大事だよ。困らせたくなんて、ないよ……」

息も絶え絶えに、言葉を搾り出す。

「もう、私の言うことに逆らわないわね？」

「……はい。おかーさん」

「言ったとおりにするわね？」

「……はい。おかーさん」

「悪い子は、いらないわ」

そう言い残し、プレシアは広間を後にした。

気を失ったフェイトは、果たして気づいているのだろうか。

その光景は……自分と、アルフのやりとりと、全く同じだということに。

第七話（後書き）

書き忘れていたんですが、なのはは、髪を結っていません。
そして、フェイトはボクっ娘です。

虐待の連鎖って、怖いですよね。

もう少しだけ、辛いお話が続きます。
書き貯めていた分は出し切ったので、少しペースを落とします。

第八話（前書き）

３万ＰＶオーバー、ありがとうございます。

？？？？？　今回は何でこんな話を書いたのか、さっぱりわかりません。

プロットにもありません。

ひたすら眠いです。

第八話

ユーノくんが張った結界の中。バリアジャケットを纏い、秀人さんと対峙する。

「……行くよ」

「よし……来い！」

そして秀人さんは、１．５メートル程の木の棒を魔力で強化し、構える。その構えは、あの子……フェイトと同じ構え。

『ａｃｃｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ』

まずは、誘導弾！

「シュート！」

数は、正面から二つ、背後から一つ、左右それぞれ一つの、五つ！

「はあああああっ！」

棒を剣のように、槍のように操り、振り回し……全ての誘導弾を撃墜。

やはり、五つ程度では牽制にしかならない。

「足を止めるな！」

踏み込み、攻め込んできた。

『ａｃｃｅｌ　ｆｉｎ』

飛行魔法、行使！

「せりゃあっ！」

――ガンッ！

一秒前まで私がいた場所を、秀人さんの一撃が抉った。無意識のうちに、喉がごくりと鳴る。

「縛れ！」

『ｒｉｎｇ　ｂｉｎｄ』

拘束魔法！

「フローター！」

秀人さんもまた、飛行魔法を行使。バインドの照準から逃れる。

「バレット！」
――ドドドドン！！
ばら撒かれる、魔力の散弾。一個一個相手にしてたら、キリが無い。
（なら！）
『ｉｍｐａｃｔ　！』
まとめて掻き消す！
――ドパァン！
掻き消された散弾の残骸を突破し、秀人さんが突っ込んでくる。
棒を真っ直ぐに突き出した、突撃だ。避けるのは無理！
『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　！』
――ガァンッ！！
シールドがびりびり震える。
「う……くっ！」
でも、新魔法を試すチャンス！
『Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｂｕｒｓｔ』
バリアバースト。防御魔法を爆発させ、ダメージを与えるのと同時に、『必要な』距離を取る。
「ぐっ……！」
秀人さんが、クロスレンジから離れる。
（行くよ、レイジングハート！）
そして……ここからは、私の間合い！
「ディバイン……！」
チャージ完了！　照準よし！
「バスターーーーーーーーー！！」
桜色の砲撃が、秀人さんを完全に捕らえた！
秀人さんは防御魔法で耐えてはいるけど……軋み始めている。このまま、押し切れ！

「……リアクティブ・アーマー」
え？
秀人さんがぼそりと呟いたのと同時――
――ドゴオオオオン！！
凄まじい轟音を伴い、防御魔法が炸裂。砲撃が、見当違いの方向に逸れる。
「レイジングハート、砲撃キャンセル！」
『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ』
砲撃を消すのと同時、背後に防御魔法を……！
「はい、撃墜」
――間に合わなかった
頭に、こんっ、と軽く棒が当たる。
「二人とも。模擬戦は終了だよ。戻ってきて」

◆　◆　◆　◆

「あ～～～～～！！　悔しい！！」
例の高台のベンチに座り、おにぎりをほお張るなのは。
「にしても、偶然ってのはあるものなんだなぁ……」
なのはのバリアバーストと、俺のリアクティブアーマー。なのは は、砲撃に必要な距離を取るため。俺は、相手の死角を取るため。用途は違えど、効果そのものは殆ど同じものだった。
「結構いい模擬戦だったよ」
ユーノがビスケットを齧りながら言う。
「秀人が、まさかあそこまでフェイトの動きをトレースできるなん

て思ってなかった」
「あんなもん、ただの猿真似だよ。本物は、もっと速い」
「私は、それでも勝てなかったんだね……」
ずんずんと暗くなっていくなのは。やばっ。
「い、いや、結構危ない場面もあったんだぞ！？」
慌ててフォローする。ユーノも援護に回った。
「そうそう！　秀人に砲撃が直撃した時なんて、なのはの勝ちだと思ったし！」
……確かに、死ぬかと思った。非殺傷設定とわかっていても、あの圧倒的な威力に晒されたら、誰だって恐怖を覚えるだろう。
「それじゃあ、戦い方の基本方針は、これで大丈夫？」
『問題ないでしょう』
なのはの問いに即答するレイジングハート。
「フェイトのバリア出力は、なのはや秀人よりもずっと低い」
月村邸での俺との戦い、温泉宿でなのはとの戦い。二つの話を総合するに、フェイトは速度に重点を置いた戦法を取っているらしい。
「そんじゃあ、バインドの精度を上げればどうだ？　捕まえれば、いくら速く動こうと関係ないだろ」
「それができれば苦労はしないよー……あいつ、バインドが決まる寸前でも回避しちゃうし」
『では、精度ではなく、発動速度を上げましょう』
「それなら、防御魔法も同じようにしよう。さっき、間に合わなかったし……」
ああでもない、こうでもないと、フェイト攻略戦のアイディアを練る俺達。

「私は……あの子に、勝ちたい」

あの日の晩、なのはは、確かにそう言った。なら、俺達は仲間として……そして、家族として、最大限の『サポート』をするつもり

だ。そう。あくまで、サポートを。
「あの狼は、俺に任せろ」
俺とユーノは、あの狼に勝負の邪魔をさせないことにだけ集中すればいい。
「いいけど……大丈夫？」
「いざとなったら、ユーノを餌にして逃げるから大丈夫だ」
「ああ、それなら大丈夫だね」
『最良の策です』
はっはっは。
「……泣いていいかな、僕」

◆　◆　◆　◆

私は玄関先で、愛用のスニーカーに足を入れた。
「行ってきます」
教科書を入れた背中の鞄が、重量以上に重く感じられる。
「いってらっしゃい」「頑張れよー」
玄関先まで見送りに来てくれた秀人さん、ユーノくんが、揃って手を振る。
（……よし、行くぞ！）
そして、戦場に赴く気持ちで、ドアを開けた。

私は、学校へ行くことにした。
人付き合いが怖いからといって逃げていたら、いつまでも強くはなれない。絶交した同級生の敵意であろうと、口うるさい担任の小言だろうと、真正面から受け止めてやる！

そんな私の内心にも気づかず、通学路では、私と同年代や、ちょっと上くらいの子供達が、学校の方向へ歩いていく。
その中に、見つけてしまう。サッカーボールを入れた袋を提げた

葉山君と……それに寄り添う、八代さんを。胃のあたりが、きゅっとすぼまるような感覚をかみ殺す。

「あーあ、あのグラウンド、地震のせいで使用禁止になっちまったんだよなぁ……」

「仕方ないでしょ。それとも、ぼこぼこに荒れたグラウンドで練習したいの？」

その横を、無言で、視線を向けず、追い抜く。

「いや、だってよぉ。野球部と一緒だと、思いっきり練習が……あ」

「どうしたの……あ」

私達は、絶交しているんだから。私は早足で、学校への距離を消化していった。

「おはようございます。富山先生はいらっしゃいますか？」

職員室のドアを開け、声を掛ける。一時間目の授業の準備を控え、コーヒーを飲んでいたりしていた教師達の視線が集まる。その中に、担任の富山先生がいた。

「たっ……高町さん！？」

だだだっ、と駆け寄ってくる。これから始まるお説教のことを考えると、少しだけ憂鬱だ。

「この一週間、どこへ行っていたの！？　家にはいないし、ご家族とは連絡が取れないし！」

「ちょっと、自分探しの旅を」

あながち間違ってはいない。

「……それは、学校よりも大切な用事だったのかしら？」

低い声で詰問してくる。

「ええ、間違いなく」

それに、即答。周囲の教師の声が止み、緊迫した空気が流れる。

じーーーーーーーー……っとにらみ合う。さて、教室に戻るかな。これ以上は平行線の水掛け論になるだろうし。

「あなた達、ちょっとこっちに来なさい」

そして口火を切ったのは、私でも、富山先生でもなく、学年主任だった。

「立ち話も何ですから……他の先生の目もありますしね」

そして案内されたのは、六畳くらいの小会議室。四角いテーブルに、四つの椅子。私の向かい……学年主任の隣に座ろうとした富山先生だったが、何故か私の隣に座らせられてしまった。微妙に気まずい沈黙。

「あのう……長谷川先生。なぜ、私まで」

どうにも、富山先生は学年主任……長谷川先生に苦手意識を持っているようだった。長谷川先生は曖昧に笑い、話し始めた。

「まず、高町さん。あなたは、正当な理由も届出も無く、長い間欠席しました。これは、悪いことです」

「……はい」

「本当に、何を考えているの！？」

隣に座った富山先生が、ぷりぷりと怒り出す。

「富山さん。少し静かになさい」「は、はいッ！」

だが、長谷川先生に静かに一喝されてしまう。

「一応、富山さんから聞いています。『人付き合いが面倒』『誰とも会いたくない』……でしたね」

「……はい」

確かに、そう言った。

「それに関して、親御さんは何か？」

ここで秀人さんの名前を出してしまったら、きっと、悪いことが起きる。だから私は仕方なく、『あいつら』のことを、話した。

「母親と兄と姉は、仕事で家に殆どいないので何も言われません。きっと、私が休んでいたことも知らないと思います」

――ガタンッ

大きな音にびっくりして、横を見る。

「……そんな」
富山先生が、呆然とした顔で、私を見ていた。
「あ、す、すみません……」
慌てて座りなおし……しかし、私のことを凝視する。何だと言うのだろう。
それを見ていた長谷川先生も、真剣な表情だ。
「高町さん。私に、欠席の理由を教えてもらえませんか？」
怒るでもなく、淡々とでもなく……真摯な問いかけだった。『大人』という生き物への警戒心が、解けていく。
「……昔の知り合いに、会ったんです」
そして、魔法に関する事柄を省き、話した。

「何で、相談してくれなかったの！？」
第一声が、それか。かちんときた。
「あなたに相談したら、どうにかしてくれたんですか？　他校の小学生を呼び出して、仲直りの握手でもさせてくれたって言うんですか！？」
「私は、あなたのことが心配で……！」
ぶちんっ、と。タダでさえ短い堪忍袋の尾が、切れた。
「心配！？　大きなお世話だ！　放っておいて！　どうせ心の中では、私のこと、面倒な子供だって思ってる癖に！　いい人ぶるな！」
「ッッ！！」
右手が、振り上げられる。叩きたければ叩けばいい。
振り上げられた手が、視界一杯に広がる。反射的に目を閉じ、やってくるであろう痛みを覚悟する。だが、痛みは、いつまで経ってもやってこなかった。
うっすらと目を開けると、富山先生の腕を、長谷川先生がしっかりと掴んで止めていた。
「富山さん……高町さんも。少し、頭を冷やしなさい」

目の前には、湯気を立てる湯呑み。中身は緑茶だ。
「落ち着きましたか？」
「……はい」「……すみませんでした」
「高町さん」
長谷川先生が湯呑みを置いた。
「富山さんは、あなたのことを『面倒な子供』だなんて、決して思ってはいません。富山さんは、口調や態度こそ少し乱暴ですが……決して、悪い子ではないのですよ？」
悪い『子』って……何故に子ども扱い？
「富山さんがあなたくらいの頃なんて、それはそれは大変でしてねぇ……」
「は、長谷川先生！　何の話をしているんですか！」
富山先生は、長谷川先生の元・教え子ということだろうか。なら、子ども扱いも頷ける。
「授業妨害、授業放棄の常習犯でした」

……強烈な問題児であったらしい。

「やめてー！」
己の黒歴史を暴露され、真っ赤になる。力ずくで長谷川先生の口を塞ごうとするも、逆にあしらわれ、羽交い絞めにされてしまった。
「教師や上級生への暴力沙汰もありましてねぇ。何度もこうして止めたんですよ。六年生の男子数名をたこ殴りにしていたこともあって……」
「放してー！　それ以上言わないでー！」
じたばたと暴れる富山先生は、子供のように足だけでばたばたと暴れる。
「果ては深夜徘徊ですよ。夜遊びをしては補導され、盗んだ自転車で走り出しては補導され、タバコを吸っては補導され……警察署に何度頭を下げに行ったやら。両手の指では足りませんね」

「ごめんなさいごめんなさい！　先生ごめんなさい！」

――五分後。

「ううううう……ひどいよ、長谷川先生」

長谷川先生は、富山先生の過去をひとしきり暴露した後、小会議室を出て行った。「あとは、二人で話をつけなさい」とのことだ。

「先生……『棚に上げる』って言葉、知ってます？」

自分は散々暴れていたくせに、何で私のことをあんなに怒るんだろう。

「うっ……もう時効よ！　ちゃんと更正したもん！　タバコも吸わないし、午後十一時にはベッドに入るもん！」

「それは普通です」

「……」「……」

なんだか、教師というよりは、面倒くさいＯＧというイメージが強くなってしまった。

「あの頃、私の両親が離婚調停の真っ最中でねぇ」

――離婚。

永遠の愛を誓い合ったはずの夫婦の、断絶。

「だから、なんて、正当化はしないけど、理由の一つだったのは間違い無いわ」

微苦笑する、富山先生。

そして、どこかで聞いたような話を、始めた。

「家の中は真っ暗で、帰っても誰もいなくて……それが、すごく怖くて」

――　一人で寝るのが怖くて……でも、家には私しかいなくて。家

中の電気を付けて、ぬいぐるみを抱きしめて、眠った。

「机の上に、千円札だけがポンって置いてあって、それでご飯を買ったり、作ったり」

――『これで、夕食を買って食べてください』
それが母から私への、初めての手紙だった。

「お鍋一杯に両親の好きだったカレーを作って……結局、何日も食べられずに捨てちゃったり」

――私が始めてまともに作れた、野菜炒め。大きなお皿一杯に作って、「食べてね」という手紙を添えて……翌朝、手付かずのまま残ったソレを見つけて……泣いた。

「お話がしたくて、仕事場に電話をかけたら……『仕事の邪魔だ！』って怒鳴られた」

――『今忙しいんだ。後で掛け直すから……』
『後』は、いつまでも訪れなかった。

「暴れて、大騒ぎすれば……パパとママが止めに来てくれる、なんて夢想して」

――私が『いい子』で我慢していれば、帰ってきてくれると信じて。

「警察のご厄介になっても、迎えに来るのは、面倒くさそうな顔をした教師だけだった」

――『いい子』にしていたのに、私は、いつまで経っても一人ぼっ

ちだった。

「いつしか、迎えに来る教師は減っていって……でもね」

前置きし、うれしそうな、恥ずかしそうな……笑顔を浮かべた。

「長谷川先生だけは、何度も何度も、迎えに来てくれた」

――秀人さんが、繋がりをくれた。

「担任じゃないのに……それどころか、担当する学年さえ違うのに」

大人と子供。

教師と生徒。

その隔たりを越えて、私は、この人を身近に感じる。

「面倒くさそうな顔じゃなくて、おじいちゃんが孫娘の悪戯でも見るような顔で、『仕方ないなぁ』……って。その時、まだ三十路前だったのよ？」

面白そうに、くすくすと笑う。

「万引きをしたときは……殴られたわ。グーで」

痛い思いをしたはずなのに。笑顔は崩れない。

「痛くって、痛くって……『何しやがる、このジジイ！』って思ったわ。でも、心のどこかで、喜んでいる自分がいて」

私も、もしかしたら。何かが違っていれば、この人のようになっていたのだろうか。暴力で誰かを振り向かせようとして、それが原因でそっぽを向かれ、さらに暴力で振り向かせようとして……悪循環に陥って、抜け出せなくなっていたのではないだろうか。

「それでね。何回目か、警察署から私を引き取った時、聞いてみたの。『こんなことして、アンタに何の得があるんだ。給料も出ないくせに』って」

さっき、私が言ってしまった言葉と、ほぼ同じ。

「その時の長谷川先生の言葉は……一言一句、覚えているわ」

目を閉じる富山先生。今、彼女の目蓋の裏に映っているのだろう。
決して色あせない、大事な思い出が。

「『あなたのことが、心配だからですよ。
あなたは、自分の未来を、自分の手で閉ざそうとしている。教師である私には、それが我慢できない。あなたの未来は、きっと素晴らしいものになるのです。だからどうか、あなたを、あなたの未来を助けさせてください』」

そっと目を開ける。
「嬉しくて泣いたのなんて、初めてだったわ」
私は、知っている。人は、辛いときや、悲しいときじゃなくても、涙を流すときがあるということを。
「長谷川先生がいなかったら、今の私はいない」
きっぱりと、断言した。
「だから長谷川先生は、恩師であり……私の、生涯の目標なの」
彼女の笑顔は、眩しくて、温かくて。
「あんな大人になりたくて、困っている子供を助けられるようになりたくて、私は、教師になったの……って、高町さん!?　ど、どうしたの!?」
「何が、ですか?」
「あなた、泣いているじゃない!」

――私の目からは、大量の涙が流れていた。

「な、なんでも、ない……」
「何でも無いなんて、えっと、どうしよう、どうしよう」
あたふたと慌てた富山先生は、どうしたことか、私を抱きしめた。
「ほら、落ち着いて。落ち着いて、言いたいこと、全部吐き出しちゃいなさい」

ぼろぼろと涙を流しながら。秀人さんへの想いを、打ち明ける。
「私も、助けてもらったんです」
思い出せる。秀人さんと会った時から、今日までの全てを。
「見ず知らずの私に、『家族になろう』って……言ってくれて。居場所をくれて。名前を、呼んでくれて。一緒にご飯を食べてくれて、一緒に寝てくれて、一緒に遊んでくれて。授業参観にまで、来てくれて」
「それは……あの時の？」
こくん。素直に、頷いた。
「そうだったの……似てない兄妹だと思っていたけど、そういうことだったのね」
とんとん、と私の背中を叩きながら、頷く。
「私、人付き合い下手だし、誰と、どんな話をすればいいのか、わからないし。友達だって、全然いないし」
「八代さんと葉山君は？」
「絶交、しちゃった」
「……原因は何？」
ひっく、としゃくりあげ、吐露する。
「八代さんは葉山君のことが好きで、でも、葉山君は私のことが好きで……八代さんは、それがすごく嫌だったみたいで、喧嘩になっちゃった」
「そう、友達との喧嘩は、辛いわね」
「違う。友達じゃ、無い」
そこだけは、譲れない。私は、彼女とは絶交したのだ。今更、友達面なんて出来ない。
「頑固な子ねぇ……ま、今はそれでもいいわ。いつかは……ちゃんと、話をつけなさい。前の学校のクラスメイトの誤解も、話せばきっと、分かってくれるわ」
脳裏に浮かぶのは、怒りに染まった、バニングスさんの顔。そして。

――出て行け！

ぎゅうっ。先生の服を、皺になるほど握り締める。

「でも、バニングスさん、すごく怒ってたんです。それに、もし話せたとしても、私は口下手だし、人見知りだし、怒りっぽいし」

先生は胸を張って、自信満々に、言った。

「自慢じゃないけど私だって、まだまだヒヨッ子新米教師で、指導力不足で、怒られてばっかりよ」

「本当に自慢になりませんね」

ああ、馬鹿な会話だ。でも、楽しい。

「でもね」

すっと引き離される。両肩に手を置き、私と目線を合わせた。

「少しずつでも、成長しているのよ。あなたみたいな、問題児に揉まれながらね」

大学を出たばかりの、情熱が空回り気味の先生。

「だからあなたも、少しずつ、頑張っていきなさい。ヒヨッ子でよければ、いつでも力になるわ」

ヒヨッ子で、指導力不足で、怒られてばかりで。

「……ありがとう、先生」

でも、この時ばかりは……世界一の教師に見えた。

教室に入ると、一旦喧騒が止み、またざわめきを取り戻す。視線を感じ、振り向く。

「……」

八代さんは、すぐに目を逸らしてしまう。かたかたと震える膝を叱咤し、歩く。ほんの数メートルの距離を、牛歩で歩き……八代さんの正面に立つ。

「おはよう、八代さん」

――ちょっとずつでも、確実に……進んでいこう。

第八話（後書き）

人見知りでトゲトゲしい態度で取り繕ってはいますが、なのはは基本、チキンハートです。

序盤を除き、魔法が殆ど関係ない話になってしまいましたが……感想を下さい。

この先の参考にします。

第九話（前書き）

遅くなりましたが、第九話です。
Ｍｉｃｒｏｓｏｆｔ　Ｗｏｒｄで、１０ページ書ける毎に投稿していきます。

第九話

「フェイト……フェイトぉっ！」
アルフが、倒れ伏すフェイトに駆け寄り、抱き上げる。白い肌には、無数の痛々しい傷が刻まれ、今もまだ血を流している。
「あ、あいつ……！　またフェイトをいじめやがったな！」
ぎりっ、と歯を食いしばる。怒りのままにプレシアを追おうとしたアルフだったが、フェイトが手を掴み、止めた。
「アルフ……おかーさんのこと、悪く言ったらだめ」
「でも！」
ぎゅっと力を込めた瞬間、フェイトが痛みに顔をしかめ、アルフはハッと冷静になった。
今は怒るより……フェイトの傷を治すことが先だ。
「傷跡一つ、残してやるもんか……」
アルフの足元に、橙色のミッドチルダ式魔法陣が展開する。暖かな光と共に、魔法が発動された。即効性はあまり無いが、じっくりと、人体の治癒能力を活性化させる治癒魔法だ。外傷ならば、一日ほどで塞がる。
「ほら、帰ろう」
そして、消耗したフェイトのかわりに転移魔法を行使し、活動拠点へと戻った。

「すぅ……すぅ……」
ベッドで横たわるフェイトを、アルフが膝枕で休ませていた。
「……よく寝てる」
しばらくは起きないだろう。そして、起きたときには魔力も体力も完全に回復しているはずだ。
目にかかっていた前髪をのけてやる。

「ん、ん〜……」
ぎゅっ。
寝ぼけて、その手にじゃれ付いてきた。アルフはさせるがまま、慈愛に満ちた笑みを浮かべる。
「おかーさん……」
――ずきん、と。胸に痛みが走った。
フェイトが真に求めているのは、アルフではなく、プレシアの愛情。わかってはいても、そう簡単に受け入れることはできない。それでも。たとえ、フェイトにとって自分の優先順位が二番目以下であろうとも。
「フェイトに救われたこの命は……全部、フェイトのために使うよ」
フェイトが望むなら、暴力も甘んじて受け入れよう。ストレスのはけ口にでもなろう。
そう考え、アルフは苦笑を漏らした。
「あたしはやっぱり、イヌ科なんだろうねぇ……」

そして、ほぼ半日が過ぎ、太陽が頂上に昇った頃。
「んー……朝?」
フェイトが目を覚ました。アルフの治癒魔法がよく効いたのか、鞭の傷は殆ど見えなくなっていた。眠そうに目元を擦り、枕もとの時計を覗き込む。
「お昼だ……」
そしてまた、ごろんと横になる。寝すぎて、まだ頭がぼんやりとしているようだ。
「フェイト、起きた?」
キッチンから、アルフが声を掛ける。
「朝……じゃなくて、昼ごはんできたよ」
ご飯と聞き、フェイトの胃が空腹を訴えた。よくよく思い出してみれば、この24時間、まともな食事を摂っていない。最後に口に入れたのは、スティック状の栄養食だったか。

テーブルの上には、皿に載せられた料理が並んでいた。殆どは出来合いのものを買ってきて、電子レンジで温めたものだ。豚の角煮。ローストビーフ。ハム。ベーコン。メンチカツ。フライドチキン。ハンバーグ。フランクフルト。肉料理で埋め尽くされていた。

「いただきます」

そして、猛然と口に詰め込み始める。

取り皿には、半分だけ食いちぎったメンチカツや、まだ肉が付いているフライドチキンが乗っているというのに、ベーコンに手を伸ばし、二つ目のフライドチキンにかぶりつく。

「はぐっ、はぐっ……ん」

口元はソースや油でべたべたに汚れ、食べかすをぼろぼろと落としている。

食事のマナーというものが、およそ感じられない……まるで、幼児の食事だった。

「ごちそーさま」

そして、取り皿にかなりの量の食べ物を残したまま、食事を終えた。皿を片付けるでもなく、口元を袖で乱暴に拭い、ソファに身を沈める。

アルフは自分の食事を終えると、フェイトが食い散らかした料理や食べかすを片付ける。

（リニスが見たら、なんて言われるだろうね）

なにも、フェイトは元々こんな食べ方をしていたわけではない。フェイトが一連の行動を取り出したのは、リニスがいなくなってからのことだった。それまでは、きちんと綺麗に食事をして、片付けもしていた。それが、今ではごらんの有様だ。

最初は、注意もした。だが、フェイトはそうすると決まってヒステリックに怒り、テーブルの上のものを投げつけ、ひっくり返し、

部屋に閉じこもってしまうのだ。いつしかアルフは、それを注意しなくなった。

「フェイト、歯磨きしよう？　虫歯になったら大変だよ」

「えー……」

最初は面倒くさそうにしていたフェイトだったが、口の中に残る食べかすが不快なのだろうか、割と素直に身を起こした。

うがいをして、水を吐く。そして歯ブラシを……アルフに手渡した。

「あいよ」

受け取ったアルフは、歯ブラシにイチゴ味の歯磨き粉を適量乗せ、フェイトの口に入れた。かしかしかしかし……と、丁寧に丁寧に歯垢をこそげ落としていく。それが終わると、フェイトはまたうがいをして、泡の混じった水を吐き出す。最後に、アルフは口元をタオルで拭いてやった。

「……寝る」

感謝するでもなく、すたすたと洗面所を後にし、自室へと戻って行った。

「……」

ごろんとベッドに寝るフェイトは、ポケットに手を突っ込み、金色をしたアクセサリーを取り出した。

「バルディッシュ、まだ反応は無いよね」

『Ｙｅｓ　ｓｉｒ　．』

反応とはもちろん、ジュエルシードのことだ。

「……早く、来ないかなぁ」

暴走体を叩きのめし、ジュエルシードを奪い取り……

「高町なのは……だったっけ」

時には、別の敵と奪い合い、それすらも叩き潰し……

「ふふふふっ……楽しいなぁ」

背筋が、高揚でゾクゾクと震える。

戦いは、いい。ただ、目の前の目標を破壊することだけを考えていればいいのだから。余計なことなど。母親が、本当に自分のことを○してくれているのかなど……

――がんっ！

フェイトは、『その思考』を断ち切るように、ベッドのパイプに額を叩き付けた。

「う……うあぁ……」

顔に生暖かい感触を覚え、ベッドのシーツに突っ伏す。じわじわと、紅い斑点が広がっていく。

「おかーさんは、ボクのこと、ちゃんと好きだもん……」

音を聞きつけ、アルフが部屋に飛び込んでくる。

「フェイト、今の音は何……フェイトッ！！」

顔を血で濡らすフェイトをみて、蒼白になる。頭突きの影響で意識が朦朧としているフェイトは、それをぼんやりと眺めていた。

「何でこんな馬鹿な真似を……！」

顔を拭い、傷口を抑える。そしてまた、治癒魔法を掛けられる。

（ご飯を作ってくれた）

科学者だった母親。毎日が戦場のように忙しく……それでも、顔を見ない日は、言葉を交わさない日は無かった。

（同じベッドで寝てくれた）

どんなに研究が切羽詰っていようとも、必ず家に帰り、娘を抱きしめ、一緒に眠り、「おはよう」と、朝を迎えた。

（誕生日には、ピクニックに行った）

苦言を呈されようとも、丸一日の完全休養を取り、通信端末まで家に置き去りに、娘と

の時間を作った。

シアワセな記憶に、フェイトは、年頃の少女らしい笑みを浮かべた。

（不安になることなんて、何も無いんだ）

プレシア・テスタロッサは間違いなく、心から娘を愛していたのだから。

今は変わってしまった母親。だが、フェイトは信じる。母親の望みを叶えてあげることができれば……いつか必ず、昔の母親に戻ってくれると。

「おかーさん……また、ピクニックに行きたいなぁ……」

一面の花畑。そこにシートを広げ、風を感じ、緩やかな時を過ごす。そこには、自分がいて、母親がいて、アルフがいて、リニスがいて。

「ママ、『私』、ママのこと大好き！」

そう言う娘に、母親は微笑みかけてくれるのだ。そう、あの日のように。

「私も……〇〇〇〇のことが、大好きよ」

その四文字だけは……思い出せなかった。

◆　◆　◆　◆

とんとんとん……

朝の台所に、包丁が規則正しくまな板を叩く音が響く。見る見るうちに一口大に切り分けられていくキャベツ。

「サラダはこれでよし、と」

それを皿に盛り、プチトマトで彩りを加える。

「お、やばいやばい」
味噌汁が煮立ってしまう前に、コンロの火を止める。
その拍子に、肘が包丁が当たり落としてしまう。包丁は、万有引力の法則に従い、切っ先を下に向けたまま落下し……
「ぎゃっ！！」
……俺の足に、刺さった。あいにくと、こんな狭い家でスリッパなんぞ履いていられない俺は素足だ。その足の甲に包丁が突き立っている光景は、どことなくシュールだった。
とにかく、抜こう。柄に手を掛け……よい、しょっと！
「んぐっ！」
ずるっと抜けた。切っ先は、俺の血でぬらぬらと光っている。今日の昼もこれで料理をするのかと憂鬱になりながら……俺は、包丁をそっと流し台に置いた。
足の傷は問題ない。見れば、もう既に血が止まり、薄皮が張ってきている。

「……前から気になってはいたんだけど、どうなってるの？　秀人の身体は」
それを見ていたユーノが、一言。
「知らねぇよ。物心付いた時からこうなんだから」
刺々しい口調に、ユーノが身を竦めた。
「ご、ごめん……」「あ、いや、俺こそ……」
あー、くそ。何ユーノに当たってるんだよ俺は！

「おはよー……って、あああああ！」

びっくりした。なのはが、起きたと思ったら大声を上げ、詰め寄ってくる。
「秀人さん、今日の朝ごはん当番は私だよ！？」
「あ、いや、悪い。気持ちよさそうに寝てたから……」

もやもやとした気分は、一瞬で吹き飛んだ。

昨日、随分と晴れやかな顔で帰ってきたから、きっと何かに踏ん切りが着いたのだろう。ぐっすりと安眠していたものだから、つい起こすのを躊躇ってしまい……

「もう……それじゃあ、夕食当番は私に交代してね？」

「ああ、わかったよ。……ほら、顔洗ってきな」

そして、訪れる静寂。

「いつか、話すから」

「え？」

ユーノが、きょとんと見上げてくる。

「俺の身体のこと、いつかはちゃんと話すから」

俺の方は……まだ、踏ん切りは着いていない。

◆　◆　◆　◆

「……はぁ」

くるくると手元で鉛筆を回しながら、物思いにふける。今は、国語の授業中。いつかと同じように、作文の授業だ。『将来の夢』という、願ったり叶ったりのタイトル。十分で４００文字を埋め、残り時間が過ぎるのを待つだけになっていた。

かりかりとノートに線を書いていき……ひし形になる。ジュエルシード。

さらに、かりかり。今度は三角形……何これ？

（三角形、三角形……）

記憶の中を検索する。最近、見たような……あ！

「思い出した！」

あの、フェイトの手の甲に付いてたやつだ！

思い出した途端。

いらいらいらいら……
『あはは、何？』
人を小ばかにしたような嘲笑とか。
『叩き潰してやる！』
身勝手な敵意が篭った目とか。

「ああ、ムカつく！」

二回も負けた。一回目は瞬殺。二回目はＫ．Ｏ．。今度は……今度こそは！
「……あれ？」
あの子は……どうして、ジュエルシードを集めているんだろう。
以前なら気にも留めなかったけど……妙に、気になる。
ジュエルシードなんて爆弾みたいな物を集めて、何をするつもりなんだろう。
「今度……ちゃんと聞いてみよう」
また喧嘩腰になって、まともに会話なんて出来ないかもしれないけど……

「ええ、私も是非、高町さんに聞いてみたいわね」
……げ。
顔を上げると……富山先生が、すごく怖い笑顔で、私を見下ろしていた。
「……何を『思い出して』、何に『ムカついて』いるのか……ちょっと教えてくれるかしら？」
ヤバい。これは、放課後居残りコースだ……！
「え、ええと、その」
しどろもどろに答えに窮する。と、その時。
――キーン、コーン、カーン、コーン……
いいタイミングでチャイムが鳴った！

「さよなら！」
鞄の中に筆箱、ノートを放り込み、ドアにダッシュ！
「こらあああああ！　待ちなさい！！」
あとは帰りのホームルームだけだし……いいよね、別に。
「はっ、はっ、はっ……」
ふぅ……鈍足を克服しておいてよかった。きゅきゅっと廊下を駆け抜け、階段を二段飛ばしで駆け下りる。
「ま、待～ち～な～さ～い～！！」
スリッパ履きの足で、ゴム底の上履きに勝てると思ってるの、先生？
悠々とスニーカーに履き替え、校門を飛び出した。
「さ～よなら～！　また明日ねー、先生！」
私は私なりに……学校生活を楽しんでいるのだった。

さてと、夕食の材料でも買い足しに行こうっと。

◆　◆　◆　◆

フェイトは、街中を一人でぶらついていた。なぜアルフを伴っていないのかと言えば。
「魔力……というか、体力の使いすぎだよ」
治癒魔法を全力で、しかも立て続けに使い、アルフはすっかりバテてしまっていた。今は、狼モードで休んでいる。
「別に、いいんだけどなぁ。たかが傷跡くらい」
それは、本音だった。自分がどれだけ整った容姿を持っていようと……それがたとえ、道行く人が幾人も振り返る程のものであろうとも。フェイトには、全く興味の無いことだ。それが別に、母親の役に立つわけではない。
「はぁ……つまんない。帰ろうっかなぁ」
と、一軒の店が目に入ってきた。

「確か、『てれび』でやってた」
この大通りで一番人気の喫茶店。ケーキのメニューは、かなり豊富。
「お財布は……よし！」
１００００ナントカという額の紙幣を、百枚単位で持ってきてある。
多分、足りるだろう。
「ケーキ、ケーキ～♪」
足取り軽く、その店に歩いていく。

「……はぁ？」

が、店の前に来て、途端に顔をしかめた。
何と書いてあるのかは不明だが、何やら貼紙がしてあり、店の中には誰もいない。
どうやら、営業していないようだった。
「ちくしょう！」
ガンッ、と扉を蹴り壊す。通行人が、ぎょっとして注目するが、我関せず、面倒事は御免、と歩き去っていく。
ずかずかと店内に押し入ったフェイトは、陳列棚を、バックヤードを物色。そして冷蔵庫を開け、にんまりと笑った。
「みーつけた！」
プリンと、ケーキ。
「へぇ、美味しい。人気なだけあるなぁ……」
ケーキの土台のスポンジをも、ガツガツと食い荒らしていく。全くもって、強盗そのものであった。

「お、おい、何をしている！」
この店と契約していた警備会社の一団が数名、乗り込んできた。
だが、侵入者がどう見ても子供であり……顔や服をべたべたに汚しながらケーキを貪る異様な光景に、一瞬だけ立ち尽くした。
だがフェイトは、彼らをちらりと一瞥し、またガツガツとケーキ

にがっつき始める。
「おい、キミ……」
一人が、フェイトの肩を掴む。子供だと分かり、警戒心を緩めてしまった彼らは……不用意であったとしか、言い様が無い。
「……五月蝿いなぁッ！」
『Ｔｈｕｎｄｅｒ』
待機状態のバルディッシュが、主の命に従い、魔法を発動する。稲妻、と。
――バチバチバチバチッ！！
「ぎゃあっ！！」
身体を痙攣させ、どさっと倒れる。警備員達が、ざわめいた。
「お前たち……」
フェイトが、ゆらりと立ち上がる。警備員達は、各々警棒を、盾を構える。
「ボクの楽しみの邪魔して、タダで済むと思うなあああああああっ！！」
――五分後。
「はぁ、おなか一杯」
一団を全滅させ、フェイトは満腹になって店を悠々と出てきた。財布の中身の紙幣を全てカウンターにばらまいて……ご丁寧に、紙箱にアルフへの土産を持って。
「アルフ、これ食べて元気になってくれるといいな」
そして足取り軽く、郊外の住宅地へと歩き去って行った。
◆　◆　◆　◆

「ふふふ、ラッキー」
腕に下げるスーパーのビニール袋。中には、大量の生肉が入っている。豚や鳥ではなく、国産の牛肉だ。お肉売場を物色していたら、丁度タイムセールが始まり、ダンプカーのように押し寄せる主婦より先に確保できた。
「秀人さんにユーノくん、喜ぶだろうなぁ」
特に、秀人さん。肉体労働の後だから、かなりお腹が空いているはずだ。
すき焼きにしようか、焼肉にしようか。
ふんふ～ん、と、柄にも無く鼻歌なんかを歌いながら、夕暮れの中を歩いていく。

「レイジングハート、どう？」
『アクセルシューター。操作も威力も問題ありません』
いつもの如く、マルチタスクで模擬戦。前回の戦闘での敗因になった、鎌の攻略法を模索しているところだ。バリアの強度を上げるだけでは、ダメだ。もっと、搦め手を覚えないと。
アクセルシューター。発射後に軌道をコントトールできる。この魔法を取っ掛かりに……砲撃を、ブチ込む！
「首を洗って待ってろよ……」
今度こそ、三度目の正直だ！

角を曲がって……ばったりと、件の人物に出くわした。

「な……」

「え……」

黒いワンピース（何故か、薄汚れてはいるが）を着て、紙箱を手にしたフェイトが、そこにいた。

こち、こち、こち……
状況を理解するのに、数秒を要した。
えーっと……フェイトは敵。敵と遭遇した。お互いに無防備。つまり、これは。
殺られる前に……見敵必殺！

「きゃあああああああ喰らえええええ！！」
『Ｄｉｖｉｎｅ　Ｓｈｏｏｔｅｒ』

「うわあああああああ墜ちろおおおおお！！」
『Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ』

――ドッゴオォン！！

夕暮れの住宅街に、爆音が轟いた。

第九話（後書き）

フェイトは、食べ方がとても汚いという設定にしてみました。

次回は、クロノが出るかもしれません。

第十話（前書き）

ちょっとグダグダかもしれませんが、、、

第十話

「はぁっ、はぁっ、」
息を切らしながら、住宅街を駆け抜ける。
「な、なんで、ボクまで……！」
なぜか隣に、フェイトと並走しながら。一体何から逃げているのかと言うと……

「待ちなさい！　さっきの爆発は何だ！　説明しなさい！」
紺色の制服。同色の帽子。そして、腰に収まる拳銃。どこから見ても、おまわりさん。
どうやら、さっきの現場に偶然居合わせていたらしい。
「あ、あなた、結界、張れないの!?」
人が見ている前で、飛行魔法なんて使えない。
「いつもアルフがやってくれるんだもん！　キミが張れよ！」
「ユーノくんがいないから無理！」
戦闘用の魔法以外なんて、覚えてる暇が無かった。
「このネズミ以下！」
「うるさい犬以下！」
ぎゃんぎゃんと言い争いながら、ひた走る。
どうやらフェイトも、魔法無しではその辺の子供と同レベルか、それを少し上回る程度らしい。このままじゃ、追いつかれる！
前方にT字路！　ここでお別れだ！
右に曲がる。が。
「な、何でついて来てるの!?」
ここで二手に分かれれば、半々の確立でおまわりさんを撒けたのに！

「ボクの台詞だ！！　どっか行け！」
こ、こいつううううぅ……！！
「止まりなさい！　今なら事情を聞くから！」
太ってるのに、無駄にタフなおまわりさんが追る！
「それが一番困るんですーーー！」
「もうヤダあああ！　アルフー！　アルフー！」
フェイトの目が、見る見るうちに正気を失っていく。擬音で表現するなら、『ぐるぐる』してる！
「こ、こうなったら……！」
バチバチとフェイトの手元が帯電している……って、まさか！
「黒焦げにして……！」
「やめろ馬鹿！」
――ごちんっ
「いったぁ！？」
あ、思わず手が出てしまった……ま、いいや。
「な、何すんだよ！　キミから先に焦がすぞ！？」
涙目で頭をさすりながら、私を睨む。
「そんなことしたら、まともに出歩けなくなるよ！」
国家権力を敵に回して、今後、まともな生活ができるとは思えない。
「ボクは別に構わないんだけど……」
「私には、この町での生活があるの！　今度やろうとしたら、頭じゃなくて腎臓を殴るからね！？」
背骨の横から、抉りこむように！
「怖！？　じゃあ、どうしろっていうんだよ～！」
「黙って走れ！」

『一応聞くけど……何やってんの？』

す、救いの神現る！

「おまわりさんに追われてるの！　隔離結界張って！　早く！」
『わかったわかった……』
――ヴンッ……
そんな音と共に、周囲の景色が色褪せ、人の気配が消えた。その場に崩れ落ち、肺に酸素を取り込むことに集中する。
「ぜぇー、ぜぇー……」
「ひゅー、ひゅー……」
フェイトも、ワンピース姿だというのに大の字に寝転んでいる。つ、疲れた……しばらく、起きられそうに、無い、かも……

◆　◆　◆　◆

「んじゃカントク、お先でっす」
シャワーを浴びた後、作業服を鞄に詰め込み、ヘルメットを手に事務所のプレハブを後にする。さて、帰るか。
『秀人、ちょっといいかい？』
ん？　ユーノか。
「どうしかしたのか？」
ジュエルシードの反応があったにしては、随分と落ち着いた口調だけど……
『ああ、それがね……』

「へぇ、そんなことが」
事情を聞き終えた頃には、俺はバイクを走らせ現地へ……臨海公園へと到着していた。
お、いたいた。二人してへばってる。
「なのは、起きられるか？」
地面に突っ伏すなのはの頭を、ぽんぽん、と軽く叩く。
「まだ、無理……」
「そうか」

よい、しょっと。
「ふぇっ!?」
膝の裏と、背中に手をやり、抱え上げる。
「……あぅ」
なのは、よっぽど疲れたんだな。こんなに顔を真っ赤にして。
「ちょっと休んどけ」
ベンチに寝かせてやり……さてと。
パンツ丸出しで寝転んでるフェイト。あいつは……どうしようか。
抱え上げた途端に電気ショックなんて、勘弁してほしい。
――パリン……
と、結界に穴が開いた。あー、これは、アイツだな。
「ガウッ」
鮮やかな茜色の毛並み。額に輝く宝石。
「アルフー……ちょっと遅いよー……」
アルフが、フェイトのそばに駆け寄る。
「フェイト、どうしたんだい!?」
喋った。ハスキーな女性の声で。まぁ、ユーノも喋るし、驚くことでもないだろう。
「……んっ!」
力むような素振りを見せるのと同時、その体が茜色の魔力光に包まれ……
「……えええええっ!?」
今度ばかりは、驚いた……
光が収まったそこには、長身の女性が立っていた。狼との共通点なんて、茜色の髪の毛と、額の宝石くらいしか無い。
「さ、帰るよ」
妙に、不自然なくらいこちらを見ようとしない。
「あ……れ? あのときの、お姉さん?」
なのはが、顔だけをそちらに向け、そう言った。アルフはその言葉に、思いっきりビクッとして固まった。

え……知り合い？
「温泉宿で……」
そっか、あの時。妙に元気になっていたけど、そういう理由か。
礼を言うべきか？　でも、敵だしなぁ……

――ドクンッ……
おなじみの、あの感覚。どうやら、この公園内で発動したらしい。
タイミングが悪いことこの上ない……
アルフがフェイトと目配せしている。
「そんな状態じゃ、ジュエルシードの封印は無理だ。ここにいろ」
なのはの砲撃の直撃を喰らって、ここまで全力で走ってきて、万全とは思えない。今も肩が上下している。
「ンなこと、アンタに指図される筋合いは無い！　あれは、アタシたちが貰う……！」
やはりというか、意見を聞いてくれるような雰囲気じゃない。
俺は……
――ズンッ！
アルフの腹部に、インパクトを叩き込んだ。
「か……はっ」
「……寝てろ」
不意打ちだったとはいえ、アルフの反射神経なら、これくらいは回避なり防御ができる。二度も戦った俺が判断したんだから、間違いない。
ドサっと倒れこんでくるアルフを受け止める。腕の中で、アルフは狼の姿になっていた。
多分、こっちの姿が本性なんだろう。
「お、お前……！　アルフに何を！」
体力が回復したらしいフェイトが起き上がり、詰め寄ってきた。
手には、しっかりと斧が握られている。

「仕方ないだろ……こんな状態で暴走体と戦うのは自殺行為だ」
フェイトに、アルフを渡す。
「んじゃ、行ってくる」「あ、私も！」
なのはが付いてこようとするのを止める。
「いい機会だし、ちゃんと話しとけ」
なのはは、俺を見て、フェイトを見て。
「……うん」
こくりと、頷いた。
「よし」

さて、行くか！

◆◆◆◆◆

そこは、吹き抜けのホールのような場所だった。
雰囲気としては、証券取引所に近い。

一人の女性が、最も高い位置にある仰々しいシートに腰を掛け、モニターを眺めていた。
そこには、何らかのグラフがリアルタイムで更新され続けている。
そして、その中の一つが、極端に跳ね上がった。
――ビーッ！　ビーッ！
途端に鳴り響く警報。
「魔力反応！　ランク、ニアＡＡランク！　こちらはジュエルシードと思われます！」
「隔離結界が張られています！　現地への被害、まだありません！」
「ですが、魔力パターンが局のデータベースにありません！」
「他にも、ＡＡＡランク、ＡＡランクの反応が多数！」
「と、ＡＡＡランクが多数！？」
「ＡＡＡランク級の反応、ジュエルシードと思しきものと戦闘に入

りました！」
「艦長！　指示を！」
「現地には、クロノを向かわせます」
指示は、一言。だが、それを耳にした局員達は、指示通りに行動を始める。
「現地への転送魔法使用許可、下りました！」
「転送ポートの準備、ＯＫです！」
「艦長」
彼女の隣に控えていた一人の少年が、彼女に声を掛けた。十代中ごろの、黒髪の少年だ。目には、確固とした自信と、使命感が見える。
「出ます」
「ええ、頼みます」
会話は、最低限。だが、そこにあるのは、絶対の信頼。
彼は目礼し、その喧騒に包まれるブリッジを後にした。
◆　◆　◆　◆
『グゴゴゴ……！！』
「今日は亀か！」
そう、今回の暴走体は、亀だった。いつもながら巨大で、全長１０メートルはあるだろう。
「ウミガメでもいたのか……っと！」
――ヒュンッ！
全体的には亀そのものといった風体だが、特徴的なのはその尾だ。幾重にも枝分かれした鞭状になっていて、先端には鋭い刃が付いている。

これの回避にばかり気を取られていると……！
『グゴオオォォ……！！』
その巨体を揺らし、突進を仕掛けてくる！
「フローター！」
飛行魔法を行使。とりあえず、上空に逃げる。移動する敵としては、質量がこれまでの中でも桁違いだ。まともに正面からぶつかったら、押し切られる。
――ヒュンヒュンヒュンッ！
「って、うおおおお！？　あっぶねぇ！」
鞭が伸び、上空にいた俺に連続して襲い掛かってきた！
――ガキィン！！
「痛って！」
うち一本が、腕を掠めた。魔力で補強し、擬似的なバリアジャケットとして機能してはいるとはいえ、衝撃までは完全に殺せない。
「バレット！」
射撃魔法を撃っては見るものの、そこは亀の面目約如。手足と頭を引っ込め、強靭な甲羅に篭ってしまう。だが、上空に居れば、脅威はあの尻尾だけだ。……そう思っていたのだが。
――シュゴオオオオッ！
そんな、『ジェット噴射のような』音を立て始め、ふわりと地面から離れ……
「って、マジかよおおおぉ！？」
亀が、円盤のように回転しながら飛んできた！
「ガメラかっつーの！」
方向転換して、回避！　ギュゴオオッ！と凄まじい音を立て、ギリギリを飛んでいく！
小回りはこちらの方が上だが、トップスピードでは暴走体の方が早い！

「防壁！」
とにかく、逃げているだけじゃ埒が明かない。目の前にプロテクションを展開し、突進に備える。そして……
――ガゴオオオオオオオオオオン！！！！
「っぐあああああ！！」
とてつもない衝撃と共に、景色がすっ飛んでいく……！
――ギャリギャリギャリギャリ……！！
ベルトサンダーのように、俺の防御を削り取っていく。びきっ、と腕が嫌な音を立てた。
「ぐうっ！」
多分、折れた。全く、骨折は何度目か自分でも知らないが……すぐに治り、痛みは引くとはいえ、いつまでも慣れない。
亀と距離を開ける。痛かったけど……もう、間合いは掴んだ！
――ギュルルルル……！
空中で方向転換し、再び突進の構えを取る。
「もういっちょ、防壁！」
――ガッギイイイイン！！
再び、衝突。今度は後ろに飛んでいたため、腕は折れなかった。
即興の魔法は、なのはだけの専売特許じゃない！
「……パーテーション！」
プロテクションを上下に分割する。その隙間に、亀の甲羅が入り込む。今だ！
「閉じろ！」
――バクンッ
プロテクションが閉じ、亀の甲羅を上下から押さえ込んだ。
「ホールディングシールド……ってとこか？」

『グゴッ、グゴオオオッ！』
あがく亀だったが、俺の魔法がガッチリと拘束していて、逃げられない。
「うおりゃあああ！！」
――ドムッ
頭を引っ込めたそこに、腕を突っ込む。この距離なら、コントロールが下手でも関係ない！！　喰らえ！
「ディバイン……バスター！！」
――ズドオオオンッ！
頭から抜けた空色の砲撃は、そのまま体内を突き抜けた！
『グゴアアアアア！！！』
「ジュエルシード、シリアル7！　封印！」
はぁ……思ったよりも手間取った。なのはは……どうしてるかな。

◆　◆　◆　◆

「あなたは、何でジュエルシードを集めているの？」
フェイトは、目の前にいる少女に困惑していた。
あれだけの悪意をぶつけ、あれだけ痛めつけたというのに、なぜ彼女は、自分と『戦い』以外のコミュニケーションを取ろうとしてくるのだろう。
「……そんなの、どうだっていいだろ」
自分は彼女の敵。彼女の敵は自分。それだけでいいのに。
「どうでもよくない。大事な、ことだよ」
「ボクは、キミの敵だよ」
「それは、わかってる……」
なぜ、彼女はそんなに、物悲しい顔をするのだろう。

「じゃあ、さっさと戦えよ！」
バルディッシュがアスファルトを砕く。もういい加減、我慢の限界だった。戦いたいのに。早く、戦ってスッキリしたいのに。
「くだらないおしゃべりはここまでだ！　さぁ、構えろ！」
彼女は、ようやくデバイスを起動した。
「別に、戦うのはいいよ」
「ははははっ……！！」
そうだ。それでいい。だが。
「でも、何もわからないまま、ただ力をぶつけ合うのは嫌だ。お願い、理由を教えて」
そして、彼女は……
「フェイト」
フェイトの名を、はっきりと呼んだ。
「う」
その瞬間、フェイトは理由のわからない衝動に襲われ……
「うわあああああぁぁぁ！！」
キレた。

三度目の、勝負が始まる。

◆　◆　◆

「うわあああああぁぁぁ！！」
フェイトが癇癪を起こしたように叫び、斧を振り上げ突っ込んでくる。私は、レイジングハートを構える。
『ａｃｃｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ』
アクセルシューター、数は８！
「シューーート！」

フェイトに迫る、６つの誘導弾。
――バシュッ！
フェイトが斧を鎌に変形させた。
「あああああっ！」
――ザンッ、ザンッ！
誘導弾を切り裂き、迫る。
『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』
目の前にバリアを展開。
――ガギィンッ！
「くっ……」
やはり、鋭い。ユーノくんお墨付きの私のバリアに、鎌が中ほどまで突き刺さっている。でも！
『Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｂｕｒｓｔ』
――ドゴォンッ！
「うわぁッ！」
フェイトを弾き飛ばす。しかも、今回は轟音のオマケ付き。不意打ちは大成功！　チャンスだ！
「キャノンモード！」
『Ｃａｎｏｎ　ｍｏｄｅ』
照準よし、チャージよし！
「ディバイン……バスターーーーーー！！」
（捕らえた！）
完全な、直撃コース！
「……舐めるなあああああ！！」
が、フェイトは咄嗟に防御魔法を、砲撃に対して斜め向きに展開。砲撃の照準がずらされ、見当違いの方へ飛んでいく。
「それも、読んでる！」
ディバインバスターは、私の主砲。直撃しなかったとしても、無傷で済むはずが無い！

「っく……！」
思ったとおり、ふらついている。
アクセルシューター残り二発、行けッ！
「……このっ！」
――ザンッ
一つは切り裂かれ……
――パァンッ！
「がっ！！」
残る一つは、フェイトの後頭部に直撃した！　クリーンヒットだ！
「こ……のヤロオォォ！！」
一気に距離を詰め、鎌を振り上げる。多分、もう一度同じことをしても通じない。なら！
「レイジングハート、強化！」
『ｓｏｌｉｄ』
レイジングハートの柄を、魔力で強化する。これでもう、前みたいに断ち切られることは無い。
「でえええええい！」「はあああああっ！」

そして、お互いの獲物がぶつかろうとした瞬間。

――ガシィンッ！

「え」「な」
私達は、図らずも同時に驚愕の声を漏らした。
レイジングハートは柄を掴まれ、フェイトの斧はデバイスで受け止められている。
秀人さんではない。ユーノくんでもない。アルフでもない。

「双方、そこまでだ！　武器を収めろ！」

見知らぬ少年が、私達の間に割って入っていた。

第十話（後書き）

書くのを忘れていたのですが、秀人のバイクはｋａｗａｓａｋｉ・ＺＺＲ４００にＺＺＲ６００のエンジンを積んだスペシャル仕様です。

車検の度に苦労しているとか、していないとか。

ＰＶ４５０００&ユニーク３０００突破、ありがとうございます。

他の方が書いていらっしゃる人気作に比べると見劣りするかもしれませんが、せめて一期が終わるまではお付き合い下さい。

第十一話（前書き）

クロノ君登場です。
なのは、警戒心バリバリです。

第十一話

突如として現れた少年は、私達の勝負を邪魔し、冷たい声で告げる。
「武装を解除しろ」
「……何、あなた」
怒りを抑え、聞く。
「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ」
……はい？
ジクウ……何だって？
「管理局……！？」
フェイトは知っているらしい。斧を引っ込め、明らかに逃げようとしている。
「あ、待って！」
まだ勝負の途中なのに！

『Ｓｎｉｐｅ』
少年のデバイスが、女性の声で発声する。狙撃、と。

――バシュッ！

発射された魔力弾は、逃げようとしたフェイトの足元に正確に着弾した。
「きゃっ！」
バランスを崩し、地面を滑るフェイト。そして、更に……
『Ｓｎｉｐｅ』
デバイスの先端に、青白い魔力スフィアが発生する。向ける先は、地面に倒れ、まだ体勢を立て直せないフェイト。
まさか……！

「やめろおぉぉ！」

――ドパァン！

衝撃波が、少年の魔力スフィアを掻き消した。

「くっ……もう一人いたな」

秀人さんナイス！

「離せ！」

『Ｉｍｐａｃｔ　！』

――ドゴンッ！

衝撃波を放つ寸前、少年はあっさりとレイジングハートから手を離し、回避した。

『Ｂｉｎｄ』

縛り上げようとしたけど、あっさり回避される。

『Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｓｎｉｐｅ』

射撃魔法、今度は複数！

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

――ギギギギン！

私達と、フェイトを襲う攻撃を防ぐ。

「逃げて！」

誘導弾で少年を牽制しつつ、目を覚ましたアルフに声を張り上げる。

「すまない……！」

フラフラしながらも、しっかりとフェイトを抱え、結界から出ていくのを確認した。

「ユーノくん！　結界解除して！」

「何ッ！？」

私の言葉にぎょっとする。

勘だけど……コイツも、魔法をおおっぴらに使うことは出来ない筈だ。

「わかった！」

――ブゥンッ……

私も飛行魔法を解除。バリアジャケットも解除し、地面に降り立つ。

「なのは、誰だこいつ」

同じように着地した秀人さんが、隣に立つ。

強化魔法は、まだ解除していない。

「ジクウカンリキョクだって」

「何だそりゃ」

「さぁ……？」

少年は、デバイスを待機状態に戻したとはいえ、未だにバリアジャケットを展開している。

「悪いが、君達の身柄を拘束する」

発色を抑え、普通の縄のように偽装したバインドが、私達を縛った。

「ざっけんな！」

――ブチンッ！

秀人さんが、力ずくでバインドを引き千切る。

「あまり、舐めないでよね」

私は、バインドの魔力を分解し、消滅させる。

僅かに驚いたように目を開き、再びバインドを……

『やめなさい、クロノ』

それを、彼のデバイスと同じ声が押し止めた。

これは……念話か。

『そちらの三人を、丁重にお迎えなさい』

「艦長、ですが！」

『これは命令です。クロノ執務官』

その念話の主は、私達に向けて言う。

『我々は、時空管理局の者です。どうか、事情を説明させて貰えないでしょうか？』

くいくいっ、と服の端を引く。
「……秀人さん、どうしよう？」
なんだか、胡散臭い。
「……」
秀人さんは、警戒を解かない。なら、私も同意見だ。
「二人とも、行こう」
「ユーノ？」
「管理局には話を通しておいた方がいい」
まさかとは思うけど。
「お前、こいつらのこと知ってるのか？」
秀人さんの問いに、ユーノくんは首を縦に振った。

◆　◆　◆　◆

かつん、かつん、と、俺達の足音が響く。
と、クロノが立ち止まり、俺達を……正確には、なのはの肩に乗るユーノを振り返った。
「ここでなら、『変身魔法』を解除して大丈夫な筈だ」
ユーノは、今気付いたように答える。
「あぁ、確かに。これだけ魔力素があれば」
……何の話をしてるんだ？
「？」
なのはも、首を傾げている。
「よししょっと」
ユーノの身体が光に包まれ、その光は大きくなり……
「ふぅ、やっと戻れた」
薄黄色のショートカットの、なのはと同い年くらいの子供になった。
「え、えええぇ～！？」
なのはも大いに驚いている。
「お、お前……！？」

何となく、予想はしてた。アルフだってそうだったんだ。
「黙っててごめん。実は……」
でも、まさか、まさか！

「お前、女だったのか！」

まさか女だったなんて！
「……え？」
「えっと、ユーノ……ちゃん？」
なのはも、頭が追いついていないようだ。
「女の子なのに、『くん』付けで呼ばれて嫌だったよね。ごめんね。これからは、ちゃんと『ユーノちゃん』って呼ぶからね？」
そうか。俺も、態度を改めないとな。相手は女の子なんだから。
「ん？どうしたユーノ？　ぷるぷる震えて。寒いのか？」
「駄目だよ、ユーノちゃん。女の子はお腹を冷やしちゃいけないって、先生も言ってたよ」
ユーノは、がばっと顔を上げ、叫んだ。

「ボクは、男だあああ！」

怒り狂うユーノをなんとか宥めすかし、クロノに呆れられながら、ある一室の前に来た。
文字は読めないが、多分、責任者が待っているに違いない。
「艦長、クロノです」
『入って』
ばしゅっ、とエアロックが外れ、扉がスライドする。
そして室内は……エセ和風インテリアで、飾り立てられていた。峠の茶屋にあるような、大きな和傘。ゴザを敷いて正座し、湯呑みで

緑茶を飲んでいる。ＳＦチックな白い内壁に、これっぽっちもマッチしていない。

「いらっしゃい」

俺達に、にっこりと笑顔を向けてくる、『艦長』と呼ばれる女性。

二十代後半程度に見える、えらい美人だった。

――どすっ

うおっ、びっくりした。

俺の脇腹に、なのはが軽く肘打ちを入れてきた。

「ど、どうした？」

なんだか、妙に機嫌が悪い。

「……何でもない」

「……そうか」

突っ込まないでおこう。

「……ふん」

痛いくらいに俺の手を握り締め、そっぽを向いてしまう。

ゴザに座り、艦長……リンディさんと、クロノと向かい合う。

……ところで、あのシュガーポッドにしか見えない物体は何だろう。

まさか、な。ははは。

「さ、お茶が入りましたよ」

差し出される湯呑み。

「……どうも」

匂いを嗅ぎ、一口。

……ごく普通のお茶だった。

「お砂糖は？」

……は？

と、例の物体を開ける。中身は、白い顆粒。まごうことなき、砂糖だった。

リンディさんは、匙で砂糖を取ると……ばさっ。

入れた。緑茶に。砂糖を。

「……」

なのはが、怯えるように手を握る力を強めた。

――ばさっ。

もう一杯。

――ばさっ。

更に一杯。

そして、砂糖入り緑茶という、日本人としてはおおよそ認め難いシロモノを、美味しそうに飲みはじめた。

（……オェッ）

見ているだけで、口の中が甘ったるくなる。

「それで、話って何ですか？」

切り出す。

「まず、そちらの……ユーノさんが、発掘したジュエルシード」

ぴくん、とユーノが身じろぎする。

「輸送船のエンジントラブルによって、この地球、日本に散逸してしまいました」

エンジントラブル？　じゃあ、ユーノの過失じゃなかったのか。

「三週間前、時空管理局にジュエルシードの探索許可願いが提出され、受理されています」
三週間前……丁度、なのはと一緒にユーノを拾った日に近い。
「その責任感は、立派です。ですが……民間人を巻き込むのは、感心できません」
段々……雲行きが怪しくなってきた。
そして、予想通り、リンディさんの視線は、ユーノから、俺達へと移された。
「これは、我々の領分です。民間人の貴方がたは、今後関わることを禁じます」
「やなこった」
即答。当たり前だ。ここまで関わっておいて、今更放り出せるかっての。
「……忠告を聞く気は無い。そういうことか」
クロノが重々しく口を開く。
「あのな、それは『忠告』じゃなくて『命令』って言うんだよ」
何となく、分かった。
『時空管理局』。こいつらは、上から目線で物を言っている。
「僕達管理局の手を借りずとも、ジュエルシードを全て封印することができると？」
「俺達が倒した暴走体は八体。『同業者』も、それなりに収集している」
俺達の手元に六個。同業者……フェイトの手元には、最低でも二個。
「残りは多くても十三個。今までどおり、俺達だけで十分だ」
ぽっと出の胡散臭い連中なんぞに任せられるか。
「キミは、随分と自分の力に自信があるようだな」
「少なくとも、お前よりは強い」
にらみ合う。
「あの、一つ、よろしいでしょうか？」

なのはが、不自然なくらい平静な口調で挙手した
「何でしょうか？」
リンディさんが、促す。そして、
「何様のつもりですか？」
――空気が、凍り付く。
「……そもそも、三週間も遅れてやってきて、大事な勝負に横槍を入れて、犯罪者扱いした挙げ句、『手を引け』？　本当に……何様のつもりですか？」
なのはの怒りも最もだ。ようやくフェイトとある程度の話し合いが出来て、伯仲した実力での勝負が出来ると思った矢先、どうでもいい邪魔が入ってしまった。
だが、クロノはそれが堪えた様子は無い。
「キミ達は、何か勘違いしてないか？　キミ達がやったことは、立派な公務執行妨害だ。犯罪者『扱い』じゃなく、本当に犯罪者として拘束されても……」
……いい加減、俺もキレた。
――ダンッ！
正座の姿勢から一気に立ち上がり、クロノの喉元に手刀を添える。魔力を鋭く固定し、刃にしてある。フェイトの真似事を即興でやってみたが、上手くいった。
「……あんまり調子に乗るなよ」
「……キミもな」
ごりっ、と脇腹に硬い感触。クロノのデバイスが、押し付けられていた。
だが俺は、内心でほくそ笑む。クロノは、俺の体質のことを知らない。『相打ち』に持ち込めるなら、俺が圧倒的に有利だ。
「二人とも、そこまでにしないさい」
リンディさんがぴしゃりと言う。

「……了解」
　クロノが渋々とデバイスを待機状態に戻す。俺も、魔力を霧散させた。なのはの隣に座り、すっかり温くなったお茶を一気飲みする。
「ジュエルシードの所有権は、我々にあります。ですが、我々だけでは全てのジュエルシードに対応し切れません。ですから……我々に、力を貸していただけませんか？」
　一拍置いて、リンディさんは頭を下げた。
「この事件……仮に、『ジュエルシード事件』とでもしましょうか。この件が解決するまでは、あなた方が所持していて下さって構いません」
　なるほど。所有権は自分達にあるのだから、それを預けている間の……いわば、レンタル料ってことか。
「条件は、二つ」
だからといって、何でもかんでも言うことを聞くわけにはいかない。
「一つ目」
人差し指を立てる。
「ジュエルシードの封印は、全て俺達が行い、俺達が所持すること」
　戦力の増員も、サポートも必要ない。全て、俺達で間に合っている。
「二つ目」
中指を立てる。むしろ、こちらがメインだ。
「なのはと、『彼女』との戦闘には、一切手を出さないこと」
　クロノを睨むが、相変わらずしかめっ面。
「この二つ……特に、二つ目を徹底してくれるなら、協力してやってもいい」
「約束しましょう」
「んなっ……！」
　リンディさんは、あっさりと承諾した。クロノの奴は、ちょっと愕然としている。
まぁ、もしも約束を破って邪魔をしてきたら……ぶちのめしてやれ

ばいい。

俺はそんなクロノを尻目に、その場所……アースラとかいう宇宙戦艦を後にした。

◆　◆　◆　◆

「艦長、何故あんな条件を呑んだのですか！」

クロノは、噛み付かんばかりにリンディに詰め寄る。

「あんな条件、こちらには何の得もありません」

ことん、と湯呑みを置き、リンディが言う。

「ここは、管理外世界よ」

その言葉に、クロノの言葉は勢いを失う。

「……ですが」

魔法という技術が知られていないこの世界で、自分達はおおっぴらに動けない。

ならば、現地の常識を知る者に協力を頼むのが最善のやり方。

しかも今回、その協力者は、飛び抜けて強力な魔法の力を持っている。

ＡＡＡクラスの砲撃を連発する砲戦魔導師。

単独の白兵戦で暴走体を圧倒する近接戦魔導師。

そして、魔力量こそ平凡なものの、卓越した技量を持つ結界魔導師。

多少、不利な条件を呑んででも、味方に抱き込んでおいて損は無い。

そして、何より。

「彼女達は、既に八体もの暴走体を撃破しています。対ジュエルシード戦において、彼女達以上の経験を持つ者はいません」

ロストロギアを相手にする事件は稀だ。そのため、アースラ所属の武装局員は、明らかに経験値不足。その点、彼女達は短期間に複数のロストロギアを相手にし、確実に封印してきている。

「私達アースラは、全力で彼女達のサポートに回ります」

「……了解」

クロノは、苦虫を噛み潰したような顔で頷いた。

第十一話（後書き）

５１０００ｐｖ、３５００ユニーク、お気に入り件数６０件。
どうもありがとうございます。
まさかここまで読んでいただけるとは思いませんでした。

第十二話（前書き）

ええと、、、すみません。またしてもプロットに無い話になってしまいました。

第十二話

「そういえば、吾妻さん、高町さん」
転送ポート……とかいう、妙にＳＦ的な装置を準備している間、ここまで案内してくれていたリンディさんが話しかけてきた。
「何ですか？」
そんなに深刻そうな話ではなさそうだ。多分、時間つぶしの世間話程度だろう。
「ユーノさんとの関係はわかるのだけれど、お二人はどういうご関係？」
恋人にしては年が離れているし、親子にしては年が近いし、友達のわりには接点が無い。俺達を傍から見たら、何とも不可解な関係に見えることだろう。でも、俺の答えは決まっている。
「家族ですよ。何よりも大事な」
ぎゅっ、とリンディを警戒していたなのはを抱き寄せる。
「……ん」
気持ち良さそうに身を預けてくる。その手の中には、またしてもフェレットになったユーノが収まっている。曰く、『こっちの姿のほうが馴染んでるだろうし、燃費もいいからね』とのことだ。
「家族……？　血の繋がりは無いのに？」
「別に、血の繋がりだけが家族の繋がりじゃないでしょう」
こくこく。なのはが、言葉無く同意する。
「艦長、転送ポートの準備、できました」
そこに、妙に明るい女性の声が入ってきた。
「ありがとう、エイミィ。　……それじゃ、自宅までお送りします」
「ええ、頼みます」
世間話はそこそこに、仕切りの向こうへ、なのはの手を引いて入る。そして、機械の作動音と共に、景色が暗転した。

◆　◆　◆　◆

「フェイト、もうやめよう！」
アルフはとうとう、そう懇願した。
「管理局まで出てきちまったら、もう自由に動くのは無理だよ！」
時空管理局。数多の世界を股に掛け、平和を守るという看板を掲げる組織。当然、武力は桁外れ。巨大な犯罪組織ですら、まともにぶつかるような愚行は犯さない。アルフ達は最悪の事態に陥ってしまった。もう、自由に動き回ってジュエルシード集めをするのは不可能だろう。
だが、ベッドに腰掛けるフェイトは、薄ら笑いを浮かべるだけだった。
「あはは、何言ってるの？　管理局が邪魔するなら、潰してやればいい」
「……無理だ」
アルフが漏らした呟きに、フェイトが眉をひそめる。
「無理だよ！　フェイトは分かってない！　管理局は、そんなに甘っちょろい組織じゃないんだ！」
フェイトの表情が、どんどん不快な物を見るようなものへと変わっていっている。それに気付かず、アルフは言い募る。
「なぁ、もうやめよう？　プレシアの言いなりになって、こんな危険なことをして……捕まったら、二度と出てこられないかもしれないんだよ！　フェイト、」

「うるさあああああぁぁぁい！！」

――バキンッ！
バルディッシュで、アルフの頭を打ち据えた。
「うるさいうるさいうるさい！　ボクに意見するな！　アルフはボクの言うことを聞いていればいいんだあぁぁ！」

再びバルディッシュを振り下ろし……アルフは、それを掴んで止めた。

「言うことは、聞く、けど……！　フェイトをむざむざ危険に晒すような真似は、出来ない……！」

それは、アルフにとって初めての、主への反抗だった。

「うーっ！！」

子供のように唸り、がすっ、とアルフを蹴りつける。流石に、アルフ相手に攻撃魔法を仕掛けることには躊躇いがあるようだ。

「じゃあアルフはもう付いてくるな！　ボク一人でやる！」

アルフの手からバルディッシュを奪い返し、玄関から飛び出していってしまう。

「フェイト、待って！　フェイト！」

ぶちんっ、とリンクが切断され、居場所が特定できなくなってしまう。それに、今追いかけても……手負いのアルフには、追いかける体力は残されていない。

アルフは力無く、床に座り込むことしか出来なかった。

◆　◆　◆　◆

彼女は、優秀な科学者だった。

十代後半にして、ミッドチルダの誰もが知る巨大企業の開発部長に抜擢され、同年代どころか、その巨大企業の中でも最高額の収入を得る程であった。

彼女には魔導の才能があった。

魔力量は膨大。魔力運用は精緻にして大胆。才能に溺れる事無く修練を重ね、幻と思われていた次元跳躍魔法までも使いこなすまでに

なり、ミッドチルダ初の『大魔導師』の称号を得た。

『才女』　『天才』　『ミッドの財産』

誰もが彼女を賞賛したし、それには何一つ間違いは無かった。魔法と化学技術の世界、ミッドチルダにおいて、彼女は間違いなく、成功者だったのだから。

しかし、『そんなこと』は、彼女にとっては大して重要ではなかった。

彼女には、娘がいた。

別れた夫と同じ、金色の髪の毛に赤い瞳。勉強はあまり得意では無く、魔力もほぼゼロ。自分とは似ても似つかない、実の娘。

だが彼女は、そんな娘を心から愛していた。

長い時間構ってやれない分、惜しみない愛情を注いだ。

一緒に朝食を食べた。仕事に行く前にキスをした。寝顔を見れば、仕事の疲れを忘れさせてくれた。娘の誕生日には、どんなに仕事が詰まっていようとも休みを取り、ピクニックに行った。

その時にくれたちっぽけな花の冠は、彼女にとって、社会的地位よりも、大魔導師の称号よりも……何よりも大事な、宝物だった。

娘の笑顔こそが、彼女の全てだった。

そして、その日はやってきた。

新型動力炉の試験稼働日。実際には、稼動させるにあたって、まだ安全上の不安がいくつも残っていた。彼女はそれを全てクリアす

るまでは、稼動させるべきではないと主張していたが、経営陣はそれを却下した。

彼女の勤める企業に次ぐナンバー2の企業が、同じ理論に基づいた、ほぼ同型の動力炉の開発を着々と進めていたためだった。

最大の利益を上げるのは、いつの時代も最初に始めた者。それを熟知しているが故に、現場を急かすのだ。てこ入れとして、現場を知らぬ名ばかりの監督役を配属し、彼女や、仲間の技術者達を追い立て……強引に、稼動を決定してしまった。

その結果が……暴走だった。

動力炉はメルトダウンを起こし、不安定なエネルギーと毒素を半径数十キロに渡って撒き散らし、最後には自身をも崩壊させていった。

彼女は全開でシールドを張り、ごく狭い範囲ではあったが、全ての破壊エネルギーを遮ることができた。彼女と、仲間の技術者達は無事だった。だが……研究所から数キロ離れた彼女の自宅までは、そのシールドが届く訳も無く……

彼女の『全て』は、永遠に失われてしまった。

「うあぁぁあぁ！！！」

彼女の意識は、自らの悲鳴と共に現実に帰還した。

「はぁっ、はぁっ、」

額には汗がびっしりと浮かび、頬には涙の跡がある。

「うっ……ゲホッ！」

咳込み、口に手を当てる。手の平には大量の血液が付着していた。

「……もう、時間が無い」

動力炉の暴走の際、大量の有害物質を吸入してしまった。その毒素は、呼吸器系はおろか血液にまで入り込み、彼女の身体を蝕んでいた。

とはいえ、適正な治療を受ければ、かなりの延命は可能だ。

だが彼女は、それをしなかった。そんなことに費やす時間は、一秒たりともありはしなかったのだから。

ずり、ずり、と重い体を引きずりながら、『そこ』に足を踏み入れる。

そこにあるのは、円筒状の巨大なカプセル。彼女は、そのカプセル……正確には、その中に眠る者に、手を触れる。

ここは、彼女の『全て』が眠る場所だった。

「待っていて……もうすぐ、もうすぐだから」

優しい『母』の顔で、ゆっくりと語りかける。

「もう一度……あなたの笑顔を見せて頂戴……」

そして、彼女は娘の名前を呟き、部屋を出て行った。

◆◆◆◆

フェイトがマンションを飛び出し、三日が過ぎていた。アルフとのリンクは切断してあり、念話は繋がらない。

「ボクは、強いんだ。アルフなんかいなくても、ボク一人でやれるんだ」

街中をさ迷い、ぶつぶつと呟く。通行人は、そんな彼女を振り返るものの、声をかけることはしない。

だがそれも、仕方の無いことだろう。着たきりの服は薄汚れ、髪はばさつき、表情は虚ろ。

フェイトもまた、助けなど求めてはいない。食料は強奪すれば良かったし、寝るなら適当なビルの屋上で足りた。

そして、何度目かの空腹。

街中をひたすら徘徊していれば、腹も減る。
「甘いもの……食べたい」
脳裏に浮かぶのは、先日襲撃した店。本人は気付いていないが、疲労がかなり蓄積し、思考能力が低下している。一度荒らした店が、対策を立てないことなどありえない。そんな単純な事さえ、考えられなくなっていた。

歩いて数十分で、例の店に到着した。やはり、開いていない。
だが今回は、ドアノブを捻ると、あっさりと開いた。一直線に冷蔵庫を目指し、手を触れ……視界がひっくり返った。
「……え？」
床に這いつくばったまま、首だけを動かし、確認する。

「……捕まえたよ」

三つ編みの、眼鏡を掛けた少女が、フェイトを押さえ付けていた。
「……！」
ようやく、フェイトの思考が追いついた。
「何すんだよ！離せ！」
暴れようとするも、起き上がれない。
「質問に、答えなさい。この前、ウチの店を荒らしたのは、あなた？」
フェイトは、いつものように……
「は、な、せえぇぇぇ！」
――バチバチバチッ！
電撃をお見舞いする。だが、フェイトを拘束する手は緩まない。
「やっぱり、あなたなんだね」
その手には、黒いゴム手袋が嵌まっていた。
『スタンガンのようなもので気絶させられた』という、警備会社の証言から対策していたようだ。

そして、今の一撃で限界だったのだろう。
「あううぅ……」
フェイトは、ぺしゃっと床にノビた。
「え！？　ちょっと、大丈夫！？」
少女は慌てて拘束を解き、フェイトを抱き起こした。
「……おなか、すいた」
――ぎゅるるー……
フェイトの腹が、間抜けな音を鳴らした。

そして。
「ただいまー」
「あぁ美由紀、お帰りなさ……い？」
彼女……高町美由紀は数時間ぶりに帰宅した。
「お母さん、事情は後で説明するから。ご飯作って」
「ううぅ～、ごはん～～……」
何故かその背中に、フェイトを背負って。
「あらあら……」
桃子は、ぱたぱたと台所に駆けて行った。
美由紀がフェイトを食卓に座らせる。
「食べたら、ちゃんと説明してもらうからね」
――ぐぅぅ……
美由紀の言葉に、フェイトは腹の虫で返事を返した。そこに、桃子が大量のお握りを大皿に載せてやってきた。
「はい、お待たせ。間に合わせの物だけど……」
「ごはんっ！」
フェイトがバネ仕掛けの人形のように跳ね起きた。そして、猛然とがっついた。
「がつがつがつがつもぐもぐもぐもぐ……」
「ちょっと、少し落ち着いて食べなよ！」
少なくとも十個はあったお握りが、見る見るうちに消えていく。当

然、そんな食べ方をしていれば。
「う、ムグッ！？」
喉を詰まらせるというものだ。
「うわっ、言わんこっちゃない！　ほら、お茶！」
差し出された湯呑みを引ったくり、喉に流し込んだ。
そして、全てのお握りを食べ尽くしたと思った途端。
――ばたんっ
「うわっ！」
食卓に突っ伏した。
「くー……」
安らかな寝息を立てている。
その外見的特徴を見て、ようやく思い至ったのか、桃子が口を開いた。
「美由紀。この子、まさか……」
「そ。例の空き巣」
「あら、まぁ……」
この、頬に海苔と飯粒をくっつけて寝ている少女が？
「それにね……」
そして、話の続きを聞き……次第に、桃子の顔が強張っていく。

フェイトは、夢を見ていた。あの、ピクニックの続きだ。
母に花の冠をプレゼントしたら、嬉しそうに笑ってくれた。
「ありがとう、〇〇〇。母さん、とても嬉しいわ」
また、名前は聞き取れなかった。
「お礼に、母さんも〇〇〇〇にプレゼントをしないとね」
何度この夢を見ても、その四文字だけは聞き取れない。
「何か、欲しいものはある？　誕生日だから、何でもいいのよ」
「え、いいの！？」
ぱっ、と顔を輝かせる、当時の自分。うんうんと唸り、散々悩み

……

「それじゃあ私、『　』が欲しい！」

「え？　……ええと、それは、」

娘のリクエストに、プレシアは顔を赤らめた。

「今はまだ無理かもしれないけれど……約束するわ」

そして、フェイトの頭を優しく撫でてくれる。

（ボクは……何をねだったんだっけ？）

そして、夢から醒めた。

「ん……」

「あ、起きた？」

ベッド脇に、桃子と美由紀が座っていた。

「……うわぁっ！？」

慌てて飛び起き、壁を背に睨みつける。

「おはよう」

桃子がにっこりと笑いかけると、フェイトは調子を崩され、「あ、ああ」と返事なのかも不明な声を出した。

「じゃ、美由紀、よろしくね」

「うん」

そして、桃子が部屋を出て行く。残った美由紀は、フェイトの手を掴んだ。

「それじゃ、行こうか？」

「は？　どこに？」

「お風呂」

「はぁ……」

あまりにも平然と言われ、最初は意味が分からなかった。されるがままに手を引かれ……リビングを通過したところで、ようやく思い至った。

「い・や・だ～！」

力一杯抵抗するが、そこは体格の差。
「ほら行くよー」
「うわあぁぁぁん！　助けてアルフー！　やだやだやだ～！！」
往生際悪く柱にしがみついて抵抗するフェイトを引っぺがし、犬猫のようにずるずると引きずっていった。

しばらくして、恭也が帰宅した。手には、紙袋。
「おかえりなさい、恭也」
「ただいま、母さん」
紙袋の中身は、男物の衣類だった。
「お父さんの様子は？」
そう、彼の父親……昏睡中の、高町士郎の物だ。
「相変わらず、寝てたよ」
恭也の意識は、先ほどからずっと、風呂場へと向かっていた。それというのも……

「熱い、熱いってば！」
「我慢我慢ー」
「ぎゃあっ、シャンプーが目に入ったー！」
「気にしなーい気にしなーい」
「このッ……黒焦げにしてやる！」
「こんな場所で使ったら共倒れだよー」
「しまったー！？」

「……誰か来てるのか？」
「ええ、例の空き巣さんが～」
「な、何ッ！？」
のほほんと答える桃子に、恭也が目を剥く。飛び出していこうとする恭也を、襟を掴んで止めた。

「まぁまぁ……そんなに悪い子じゃなさそうだし」
「店を荒らして食料を食い散らして警備員を全滅させる『いい子』がいてたまるかッ！」
「そうねぇ……なら、人の形をした犬か猫だと思えばいいのよ♪」
桃子は、無自覚に毒舌だった。

「誰が犬猫だッ！！」
そこに、風呂上りのフェイトと美由紀がやってきた。
「あら、まぁ」
何故か桃子は、驚いた顔をしている。
美由紀のやったことといえば、薄汚れた服を脱がし、ぼさぼさの髪の毛を洗い、身体を洗っただけだ。だというのに。
「お人形さんみたいねぇ……」
桃子の言うとおり、大変可愛らしい姿になっていた。
「あっはっは。可愛いってさ……って、ぎゃあ！」
ぽんぽん、とフェイトの頭を気安く叩いていた美由紀だったが、その手に思いっきり噛み付かれ、悲鳴を上げた。
「むぐぐぐぐ……」
「あいだだだだ！！」
「こら、離しなさい！」「おい何してる！　そんなもん食うな！」
「そんなもんとは何よいたたたた！」
……犬猫という表現も、あながち間違いではなかったようだ。

「……で？」
むすっとしたフェイトが、机を挟んで高町家の三人と向き合う。
「何だよ。聞きたいことって」
「……あなたが使っていた電気、あれは？」
美由紀は、感づいていた。フェイトが使った魔法が、あの日、なのはが使ったものと同質の力だということに。
「……さぁ、何のこと？」

フェイトも、そう簡単には口を割らない。『魔法』というものが公になれば、この世界での活動に支障をきたす。そのくらいは……多分、フェイトにもわかっている……筈だ。

「それじゃ、もう一つ」

こちらの方が、高町家にとっては本題だった。

「高町なのは、って女の子、知ってる？」

第十二話（後書き）

思いつきで、高町家とフェイトを会わせてみました。
ご感想、お待ちしております。

第十三話（前書き）

ハルハルは今日で２１歳です。
老けたもんだなぁ、、、

第十三話

高町なのは。

腰まである長い栗色の髪。白いバリアジャケット。何度も衝突した、自分の宿敵。

「……知ってるよ。嫌になるくらい」

そう答えた途端、三人がはっきりと動揺した。

「なのはが今どこにいるか、知らない？」

どこに……？　フェイトは首をかしげた。いつだって、相対するのはジュエルシード絡みで、日常の中で遭遇することなど……

「あ」

あった。つい最近。

「知ってるの！？」

ずいっ、と美由紀が身を乗り出し、フェイトに顔を近づける。

「ああもう暑っ苦しい！　離れろ！」

ぐいっと押し返す。

「確か……」

そして、あの時なのはが持っていたビニール袋のことを教える。この国の言語を、話せるが読めないフェイトには、ロゴの形を口頭で伝えるしか無かったが、桃子達にはそれで伝わったらしい。

「じゃあ、ボクからも質問いい？」

フェイトには、気がかりなことがあった。

「タカマチって、ファミリーネームだよね」

桃子が、無言で頷いた。

「じゃあ、何でアイツはアンタたちとは一緒にいないの？」

あの少年と、フェレットとワンセットでしか見たことが無い。

辛そうに顔を伏せる桃子。目を逸らす美由紀。きつく腕を組む恭也。三者三様に、何かを悔やんでいる様子だった。

「ま、別にどうでもいいけど」
ただの興味本位だ。無理に聞き出そうとは思っていない。用は済んだとばかりに、早々に玄関へ向かう。
「それじゃーね」
「待って！」
呼び止められ、面倒くさそうにフェイトが振り向く。
「もし、なのはと会うことがあったら、伝えてほしいの」
何でボクが……と思うフェイトだったが、食事の恩もあり、黙って続きを促した。桃子は言葉を選び、悩み……
「……ごめんなさい。やっぱり、いいわ」
結局、止めた。
「ふーん」
靴に足を入れる。
「あのさ！」
今度は、美由紀がフェイトを呼び止めた。ため息をつき、フェイトが振り返る。その顔は、『面倒臭い』と言わんばかりであり……実際、面倒くさかった。言いたいことがあるなら、さっさと言えばいいのに。
「お腹空いたら……また、おいでよ」
「……気が向いたらね」

そして、フェイトは高町家を後にした。

◆　◆　◆

『キュエエエエッ！！』
目の前で、鳥を素体にした暴走体が吼える。とはいえ、大して強力な個体ではない。精々、二体目の獣と同格の戦闘力だ。
「アクセルシューター」
魔力スフィアを展開。数は６。

「シュート！」
――ドドドドン！
四発を発射。誘導弾は、暴走体へと迫る。
『クエエエエッ！』
だが、暴走体はその羽根を羽ばたかせ、アクセルシューターを回避する。案外速い。アクセルシューターの速度をいくらか上回っている。
「無駄」
二つで追い掛け回し、それに気を取られている間に、逆方向から挟み撃ち。
――ゴゴンッ！
二発、命中。完全に回避されてしまった二発は、魔力に還元。
『Ｒｅｓｔｒｉｃｔ　Ｌｏｃｋ』
動きが鈍くなったその身体を、新たに覚えた魔法で縛り上げる。
レストリクトロック。私の得意な、『収束』系の上位魔法……らしい。殆ど思いつきで組んだ魔法だから、そこまで意識していなかった。まぁ、要は強力なバインドだ。
「ディバイン……！」
そして、バインドを維持しつつ、すかさずキャノンモードへ変形。
「バスターーーー！」
――ドゴオオォォン！
「ジュエルシード、シリアル１２、封印」
ふぅ……終わった終わった。
『なのはちゃん、お疲れ様！』
ぽん、とモニターが表示され、アースラのオペレーター……エイミィがサムズアップしてくる。この人……悪い人じゃないんだけど、テンションが高いから苦手だ。
『高町なのは、戻ります』

あとは、アースラに戻って報告だ。

「お帰りー」

アースラのロビーで、秀人さんとユーノくんがコーヒーを飲んでいた。

「ただいま！　そっちはどうだった？」

ぎゅっと秀人さんの腕にしがみつく。落ち着く……

秀人さんは、ポケットからプラスチックのような質感のケースを取り出す。その中には、すっかり光を失ったジュエルシードが一つ、収まっていた。

「とりあえず一個」

かぽん、とケースを開け、中のジュエルシードを摘み出す。

「レイジングハート、ほい」

それを、待機状態のレイジングハートに近づける。すると、すぽん、と吸い込まれた。

「あと四つか……」

いよいよ、ジュエルシード集めも大詰めに入ってきている。

最初の頃に比べると、ジュエルシードの出現頻度は格段に増えてきている。このアースラに関わって十日が過ぎて、既に四つ。二つは私達が。もう二つは、フェイトが掠め取っていった。

「クロノは？」

「まだ、周辺に魔力反応があるから、念のために調べていくって」

クロノが苦手な私としては、大助かりだ。クロノは、妙にお堅いというか……意識的に、壁を作っているような気がする。

「あー……そろそろ、のんびりしたいなぁ。学校も休んじゃってるし」

今回の長期欠席は、ちゃんと富山先生に伝えてある。条件として、毎日ちゃんと電話連絡することを命じられた。とはいえ、殆どは雑談……というか、先生の愚痴だ。

『高町さんが休んでから、テストのクラス平均点が下がった』だの、

『葉山君が居眠りばっかりして自信無くしそう』だの、『長谷川先生にまた叱られた』だの……あなた本当に教職課程を修了してきたんですかと問いただしたくなるような内容だった。

――ビーッ、ビーッ！

再び、警報がけたたましく鳴った。

「やれやれ……」

コーヒーの残りを一気に飲み干し、秀人さんが立ち上がる。

どうせなら、全部いっぺんに出てくればいいのに……

『市街地に、魔力反応！　ジュエルシードです！　……え！？』

そして、底意地の悪くて偏屈野郎な神様は、私の願いをバッチリ叶えてくれた。

『反応、四つ！　しかも……隔離結界が張られていません！！』

「「「……はぁ！？」」」

私達三人の声が重なる。結界が張られていないことは、被害がモロに発生してしまうし……何より、人が傷ついてしまう。

「どういうつもりなんだ、フェイトは……」

駆け出し、転送ポートに向かいながら、秀人さんが誰にでも無く呟く。

「そういえば……」

以前、お巡りさんに追いかけられていた時……

「前に言ってた。結界は、いつもアルフに張ってもらってる、って」

もし何らかの理由で、アルフとフェイトが別行動を取っていたら……まずい！

「エイミィ、ルート開け！」

『ちょっと待って！　……よし、いいよ！』

もつれ込むように転送ポートに駆け込む。

◆◆◆◆

「くそ……！」

フェイトは悪態をつきながら、四つのジュエルシードと相対していた。

暴走体ではない。それよりも遥かに危険な、純粋なエネルギーの塊だ。四つのジュエルシードが共鳴し、単独のものとは比べ物にならない程の量に膨れ上がったエネルギーは、貪欲に膨張を続け……間もなく、弾ける。

「止まれ～……！」

フェイトは、ただでさえ苦手な防御魔法を応用し、ジュエルシードを押さえ込もうとしていた。狭い範囲に持てる限りの魔力を注ぎ、強固なシールドを展開している。

――ピキッ

「あうっ……！」

シールドに皹が入り、フェイトが唸る。

（せめて、アルフがいてくれたら……！）

リンクを回復させておかなかったことを、今更になって後悔した。

――ビキッ、ビキキッ……！

亀裂が、広がっていく。フェイトの予想を遥かに上回る密度だった。人がまばらな地域で発動していたのが、せめてもの救いだ。とはいえ、もし爆発すれば、この町全体に被害が及ぶだろう。そして何より。

（こんなとこで、ジュエルシードを失うわけにはいかない！）

もし一つでも欠けてしまったら、プレシアの願いが叶わないかもしれない。

（おかーさんが、ボクに笑ってくれなくなる……！）

それが、フェイトには何よりも恐ろしかった。

「フェイト！」

フェイトの耳に、聞きなれた声が届く。視界の隅で、茜色の毛並

みが揺れる。
「アルフ！　結界張って！　終わったらシールドで押さえ込んで！」
「ああ、わかった！」
多少仲がこじれていたとしても、そこは主と使い魔。
――キィンッ！
アルフは即座に結界を張り、周囲を遮断。更に、フェイトが使用していたシールドの維持制御を受け持った。
「よくも手こずらせてくれたな！　でも、これで！」
封印魔法を放つ。だが。
――ボシュッ……
「えぇッ！？」
猛烈なエネルギーの中に飲み込まれ、消えてしまう。
「この！　このっ！」
――ボシュッ！　ボシュッ！
だが、何発撃っても届かない。あまりにもエネルギーの密度が高く、ジュエルシードに到達する前にかき消されてしまうのだ。
「ふぇ、フェイト……！　こっちが、ヤバい……！」
見れば、アルフが維持しているシールドが破られかけている。
「うー！　何でだよ、もー！」
二人掛かりでシールドを維持する。今はまだ押さえ込めてはいるが、このままでは魔力と体力を削られジリ貧だ。
「ああ、もう……！　どうすれば！」
――バキンッ！
とうとう、『亀裂』は『穴』になってしまう。
「どうすればいいんだよー！！」
フェイトが叫ぶ、その声に。
「エイミィ！　ジュエルシードを囲め！」
力強い声が、答えた。

なのはが、秀人が、ユーノ（人間体）が、揃ってこちらに向かってきていた。
『了解！』
――ヴゥンッ！
壊れかけていたシールドの代わりに、新しくアースラの出力でシールドを張らせる。ひとまずは、すぐに爆発、ということは無くなった。
だが、もしもジュエルシードが爆発すれば、呆気なく破られてしまうだろう。それでも、そのシールドを張る理由は、一つ。
「お前らも手伝え！」
一人でも多くの魔導師で、封印するため。アルフがやってきて、輪に加わる。今は、敵
味方に分かれている場合ではない。４人で、ジュエルシードを囲む。
「フェイト」
なのはが、フェイトの目をまっすぐに見据えながら……
「色々とお話ししたいけど……今は、全部後回し」
決意を込め、言った。

「手伝って。フェイトの力が必要なの」

フェイトは、ツンとそっぽを向きながら、答える。
「……ふん！　足引っ張ったら、承知しないからな！」
フェイトもまた、輪に加わった。
秀人が、なのはを、ユーノを、アルフを……そして、フェイトを順番に見回す。

「『俺達』で、押さえ込むぞ！」

『俺達』の中に自分がいることに気づき、フェイトは、くすぐったいような、背中がむずがゆいような……だが、不思議と心が温まる、

そんな気分を感じた。
「言われなくても！」
桜色。空色。緑色。黄色。茜色。
各々の魔力光を輝かせる魔法陣が展開する。

――そして、奇妙な現象が起きた。
秀人の、空色の魔法陣。一つの大円の中で、二つの正方形が八角形を描き出す、オーソドックスなミッドチルダ式魔法陣。

それが、変形を始めた。

大円を飛び出すように、四本の直線が伸びて行く。
「え！？」
「な、何これ！？」
二本は、それぞれなのは、フェイトの魔法陣を貫通。
「うわっ！」
「何だい、一体！」
残る二本は、ユーノ、アルフの魔法陣を貫く。
更に、展開。なのは達の魔法陣からは三本のラインが伸び……
ジュエルシードを取り囲む五つの魔法陣が……秀人を天辺に、五芒星を描いた。

――ヒュイイイィィィィン……！！
一つに繋がった五つの魔法陣が、回転速度を上げていく。それに比例し、処理能力が加速度的に上昇する。
『稼働率、７６％、８４％、８９％、９４％……』
そして、五人の身体にも、異変。
「う、わ……！」「すご……！」
体中を、かつて無いほど濃密な魔力が駆け巡っていく。
「……よし、やるぞ！」

秀人の号令と共に五人は、示し合わせたように両の目を閉じる。
リンカーコアに、身体を循環する濃密な魔力に、意識を集中する。
――どくん
五人はその時……確かに、繋がっていた。
――どくん
心臓のように、伸縮するリンカーコア。バラバラだったそのリズムが。
――どくん、どくん……
徐々に、合わさっていく。重なっていく。
――どくんっ！
そして、五人全員のリンカーコアが同時に、力強く鳴動した。瞬間。
『稼働率１００％』
五人は一斉に目を開き……！

「「「「「せーーーーーの！」」」」」

――――――

「……そう」

リンディも安心し、シートに腰を下ろす。災害を未然に防ぐことが出来て喜ぶ反面、どうしても気になることがあった。

（秀人くん達が使った魔法……）

浮かれているエイミィの端末から、情報を引き出す。いくつかの波形グラフと、棒グラフが表示された。

五本五色の棒グラフを繋げ、一本の長い棒にする。既に隣にあった棒グラフとの長さは、ぴったり同じに見える。

次に、五つの波形グラフを並べる。あの、五芒星魔法陣が出現してから、封印魔法が発動されるまでの時間分だけを切り出し、重ねる。その箇所だけが、ピッタリと一致した。

「誤差、ほぼゼロ」

五人がかりで発動された、あの封印魔法に使われた魔力総量は、五人全員分の瞬間最大放出量の和と全く同じだった。

――まるで、リンカーコアを直結させたかのように。

（……まさか、ね）

リンディは、自分の荒唐無稽な考えに呆れ、苦笑した。

（ありえないわ。そんな理論には、何年も前に『不可能』という結論が出ている）

偶然だろう。そう結論付け……リンディは、そのデータを閉じた。

◆　◆　◆　◆

「……」

「……」

四つのジュエルシードが私とフェイトの間にぷかぷかと浮かんでいる。取ろうと思えば、いつでも取れる距離。でも、私もフェイト

も、手を伸ばそうとはしない。今がきっと、『その時』なんだろう。
「フェイト」
「……何？」
眉根を寄せながらだけど、敵意はそんなに感じられない。いや、むしろ……勝手な勘違いかもしれないけど、親近感というか、連帯感のようなものを、感じている……？
「どうして、ジュエルシードを集めているの？」
「……」
斧を握る手に力を込め……
「うっ！」
辛そうに、顔をゆがめた。
一歩、歩み寄り、フェイトの手をとる。
「……ひどい」
フェイトの手のひらは、ボロボロだった。深い裂傷がいくつも刻まれ、白い肌は火傷で爛れて……恐らく、私達が駆けつけてくるまで一人でジュエルシードを押さえつけていた所為だ。
「こんな痛い思いをしてまで……何で？」
フェイトは、私の手を振り払うでもなく、しばし迷い……口を、開いた。
「おかーさんが、必要だって言ってるんだ」
「お母さん？　その人に命令されたの？」
私の問いに、こくん、と首を縦に振る。
「おかーさんの望みが、ボクの望みだから……」
その目から、ぼろぼろと涙が流れ出す。
「おかーさんの望みが叶ったら、きっとまた、ボクに笑いかけてくれる！　優しくしてくれる！」
それは、自分に信じ込ませるように。
「だから……だから集めるんだ！　全部集めて、おかーさんに褒めてもらうんだ！」
残酷な真実から、目を逸らすように。

私達は、よく似ている。
言うことを聞いて『いい子』でいれば、きっと、振り向いてもらえる信じて。
……いつしか、目が見えなくなっていて。

（ああ、そうか……）
ようやく、気づいた。
虚勢を張るような態度が、気に入らなかったのも。けらけらと浮かべる、空虚な笑いが嫌いだったのも。きっと、全部同じ理由。

それが真実なら、ぶつける気持ちは、敵意でいい。

それが本音なら、交わす言葉は、罵詈雑言でいい。

本当の気持ちで、とことんぶつかりたい。

……繋がりたい。

私は、フェイトと……この、ひねくれ者な、寂しがり屋と。

「友達に、なりたいんだ」

第十三話（後書き）

ようやく、二番目に書きたかった話を書くことが出来ました。
いよいよ第一期も佳境です。
ラストスパート頑張ります。

第十四話（前書き）

今回は、いろいろな仲直りフラグです。

第十四話

フェイトは、経験したことの無い衝撃を受けていた。
「……とも、だち？」
確かめるように。自分の語彙にありその言葉と、照らし合わせる。
「ボクと、ともだち……？」
それは、母からの愛だけを求め、がむしゃらに戦ってきたフェイトにとって、最も縁遠い物であるはずだった。
『どうせ、誰もボクを好きになってくれない』
第一に、諦観があった。
まともに親の愛情を受けられなかったことへの、コンプレックス。
『好きになっても、すぐにボクのことなんて嫌いになる』
第二に、恐怖があった。
中途半端に母がまだ優しかった頃の記憶があるだけに。手のひらを返されることが、怖かった。
……だから、遠ざけた。
最初から敵として接すれば、下手な勘違いなどしないで済むと。
敵意をぶつけて痛めつければ、最初から最後まで、嫌われたままで終わると。
なのに、フェイトの前に居る少女は……ありったけの敵意をぶつけ、痛めつけ……明確に、『敵』としてフェイトを認識していた少女は、確かに言った。

『友達になりたい』、と。

「馬鹿じゃ……ないの？」
心のどこかには、それを喜んでいる自分がいる。
「ボクは、キミのことなんて嫌いだ」
でも、出てくる言葉は、憎まれ口。

「うん、私もフェイトが嫌い」
では何故、そんなに穏やかな笑顔で言うのか。
「だったら……友達になんて、なれるわけ無いだろ」
「なれるよ」
ぎゅっと、握られた手から温もりが伝わってくる。
「本当の言葉をぶつけあって……正直な気持ちを全部伝えあった私達は……きっと、友達になれる」
意味が分からない。嫌いなのに、友達？
「フェイト」
なのはは、フェイトの手を胸元に引き寄せ……もう一度、言った。
「私と、友達になろう」
そして、優しい笑顔を浮かべる。
その笑顔の、なんと眩しいことか。まるで、光を纏っているように。
そして、その光は確かに……フェイトの心に、届いた。

「ボクは……ボクは……」
――誰かを好きになっていいの？

ぐらりと、フェイトを縛り付けていた妄念が、揺らいだ。

◆　◆　◆　◆

――バキンッ！
憤怒の形相でモニターを見ていたプレシアが、デバイスを力任せに机に叩き付けた。
「お人形の、分際で！」
真っ二つになった机が、プレシアが解放した魔力の余波で消し飛ぶ。
「お人形は、私の手の中で踊っていればいいのよ！！」

――ヴォン！
プレシアの脳がフル回転し、複雑極まりない数式を描いていく。
次元跳躍魔法。
プレシアを大魔導師たらしめる、神域の技法である。
――バチバチバチッ……！
「はあああああぁぁぁ……！」
魔法陣が、帯電する。行使される術式は、次元跳躍……攻撃魔法。
「あああああっ！！」
デバイスを、振り下ろす――！

◆　◆　◆　◆

状況を見守っていたアースラ……そのモニターが、画面いっぱいに表示する。
『ＥＭＡＲＧＥＮＣＹ』
それを確認し、原因を探る、それより早く。
――ズガガガァン！！
アースラが、攻撃を受けた。
「きゃあああっ！？」
船体が、まるで何かに衝突したかのように激しく揺れる。クルーの何人かがシートから放り出され、床を転がった。
「原因は！？」
シートにふんばり、転倒を回避したリンディが声を張り上げる。
「艦載兵器？　それともまさか……質量兵器？」

落ちたメガネを掛けなおした男性クルーは、モニターに表示されたことを読み上げる。
「いえ、極めて強力な、攻撃魔法……え!?　魔法!?」
そう。ここは、次元航行船をもってして。ようやく立ち入ることが出来る、準虚数空間。装置を解さない純粋な魔法は、発動すら出来ない。なら、なぜ攻撃が通ったのか。
リンディは、あらゆる可能性を思考し、一つの結論を得る。

「次元……跳躍魔法」

シン……と、あれだけ喧騒に包まれていたブリッジが、静まり返った。
それは、誰もが知っている事柄だった。
ミッド唯一の大魔導師にして、大科学者。富と名声を手にし……ある日忽然と姿を消した女性の、代名詞。
「あなただったのね」
魔力の固有パターンを解析し、データベースと照合。そして、リンディの予想通り、女性の写真が表示される。彼女の名は。

「プレシア・テスタロッサ!」

◆　◆　◆　◆

何だ、これは……!!
さっきまで快晴だった空が、暗雲蠢く曇天へと変わっていく。
明らかに自然現象ではない。そして、その暗雲には、途方も無い密度の魔力が込められている!
「ユーノ!　アルフ!」
俺一人では、到底防げない。何より……
「おかーさん……?」

フェイトが、茫然自失と空を見上げ、動こうとしない。
「なのは！　フェイトを！」
「あ……うん！」
『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　！』
桜色のドームが、二人を覆う。そこへ更に、俺と、ユーノと、アルフのバリアを展開する。だが、薄い。四人分のバリアを張って尚、あの暗雲に込められた魔力には届かない。
そして、暗雲が一際強く鳴動し、膨大な魔力が解放される！
（間に合えええええええええええっ！！）
俺は、フェイトとなのはの上空に身を投げ出した。

――――――――ズガシャアアアン！！

「……！！」
声も出なかった。出せなかった。そこいらの暴走体なんかとは、桁が違った。体中に火箸を突っ込まれたみたいに、感覚が遠い。そのくせ、痛覚だけは通常の何倍にも鋭敏になっている。
「あ……」
そんな一瞬にして永遠のような地獄の苦痛が、ようやく終わった。目を開けると、何故か視界が赤い。どうやら、眼球内の血管が破裂したらしい。全身も同様に、血が噴出し、焼け焦げている。
「……！　……さん！！」
なのはが、俺を呼んでいる。
なのは、と言おうとして、出てきたのはそんな意味の無い吐息。
どうやら、本格的に失神しかけているらしい。
そんなに、焦らなくて大丈夫……どうせ、目が覚めたら、治っているんだから。
――俺は、そういうふうに出来ている……『〇〇』なんだから。

◆　◆　◆　◆

「秀人さん！」
私の腕の中で、秀人さんが目を閉じた。全身は黒焦げ。血が滲んでいない箇所なんて、一つもない。
「秀人！」
ユーノくんが駆け寄ってきて、すぐに痛み止めの魔法を使う。怪我はいつも通り、見る見るうちに塞がっていく。でも……目の前で傷つく姿なんて見たくもない。
「う……」
よほどのダメージだったのに違いない。痛み止めをしていても、時折苦痛で顔が歪む。
「高町なのは！」
転移魔法の気配と共に、クロノが駆けてくる。そして、血まみれの秀人さんを見て、息を呑んだ。
「エイミィ！　救護班を用意！　嘱託魔導師が重症だ！」
『了解！』
えっと……
（ユーノくん、話すべきかな？）
秀人さんは、もう殆ど無傷。ダメージが抜けたら、すぐ復帰できる。
（いや、いいよ。話しても混乱するだろうし、秀人は、その……）
――自分の身体のこと、あまり好きじゃないから
私は、無言で頷いた。

「そうだ、フェイトは！？」
周囲をぐるりと見回す、が、姿は見えない。
「あの雷撃が収まってすぐ、アルフが転移魔法で……僕は止めたんだけど」
ユーノくんがうな垂れる。

「フェイト、『おかーさん』って言ってた」
母親からの命令で、ジュエルシードを集めていたフェイト。最初は……というか、今もあまり好きじゃない。でも、ジュエルシード集めに必死だったことは確かだ。
さっきの雷撃が、もしフェイトに直撃していたら……血まみれになっていたのは、フェイトだった。下手をすれば、死んでいた。
そんな攻撃を、明らかにフェイトを巻き込むと分かっていて撃つなんて……！
「許せない……！」
ぎりっと拳を固める。
「なのは、戻ろう」
「……うん」
今は、帰って休もう。

そして、今度こそ……フェイトと友達になるんだ。

◆　◆　◆　◆

「このッ！　役立たずがァッ！！」
――バチイイイィィィンッ！！
「あああああっ！！」
磔にされ、激しく鞭打たれるフェイト。
「あれほどのッ！」
――バチンッ！！
プレシアの振るう鞭が、帯電している。怒気を越え、殺気にも達する剣幕と共に、フェイトの身体を痛めつける。
「あれほどの好機を前にしてェッ！！」
そして、また鞭を振り上げる。
「やめろおぉッ！！」
その鞭を、乱入したアルフが受け止める。狙いを逸れた鞭は、床

を抉るに留まった。
「くっ……この、犬畜生が！」
『Ｂａｒｒｅｔｔ』
射撃魔法を行使。だが、それはアルフのシールドに呆気なく弾かれる。プレシアは、自分の身体が予想以上に言うことを聞かない事実に苛立つ。本来の威力であれば、シールドごと貫くはずだった。
「いい加減にしろよ！　お前は、フェイトの母親だろ！」
「母親……？」
プレシアは最初、きょとんとした顔を。そして次の瞬間には、嘲笑を浮かべた。
「ははっ、あはははははっ……！！　母親！　そう、母親！」
愉快な喜劇をみたかのように、心底可笑しそうに笑う。
「何がおかしい……！　フェイトを離せ！」
アルフが飛び掛かり、フェイトを拘束するバインドを破壊する。
それを、特に阻止することはしなかった。
「くっくっく……ああ、可笑しい」
邪悪な笑みと共に、今度は本気で攻撃魔法を放つ。
『Ｐｈｏｔｏｎ　Ｂｕｌｌｅｔ』
何の変哲も無い、初歩の攻撃魔法。だが単純故に、使用者の力がダイレクトに現れる。大魔導師の称号は、伊達や酔狂で授けられるほど軽くは無い。
――ズバァンッ！！
「あぐっ……！！」
今度こそ、アルフのシールドを粉々に叩き割り、その背中に突き刺さる。
「フェイト……！」
覆いかぶさるように、フェイトの身体をかばうアルフ。その背中に、容赦なく攻撃魔法が叩き込まれる。
『Ｂｕｌｌｅｔ』
『Ｂｕｌｌｅｔ』

『Ｂｕｌｌｅｔ』
『Ｂｕｌｌｅｔ』
『Ｂｕｌｌｅｔ』
『Ｂｕｌｌｅｔ』
執拗に。何度も。いたぶる為だけに威力を落とし、じわじわとアルフの魔力値を削っていく。
シールドを破られては再構成し、また破られては再構成し……苦痛に耐えるアルフの頬に、フェイトが手を添えた。
「駄目だよ、おかーさんは、ボクのために……」
しどろもどろに、希望的観測を口にする。
――ごんっ！
アルフはたまらず、フェイトに頭突きをかます。
「……アルフ？」
半ば呆然と、フェイトは呟く。
「目を覚ませ！　あのババァは、フェイトを殺そうとしたんだ！」
フェイトは、目を伏せる。かつてのフェイトであれば、それを聞こうともしなかっただろう。だが、なのはとの出会いは、少しだが……確実に、フェイトの心に変化をもたらしていた。
そう。
『Ｐｈｏｔｏｎ　Ｂｕｒｓｔ』
本当に自分を愛している母親が……
「消えなさい」
殺傷設定の魔法を娘に躊躇無く放つことなど、ありえないと気付く位には……！
「アルフッ！！」
高速機動魔法を発動し、アルフと共に間一髪の所で射線上から退避する。
アルフは、残り少ない気力を振り絞り、次元転移魔法を発動する。
座標をいちいち指定しているヒマは無い。目の前では、プレシアが再び魔力のチャージを行っている。かつて使用した座標をランダム

に指定し……

――ギュンッ！

プレシアの魔法が着弾する寸前に、転移に成功した。

ただし、フェイトだけ。

「チッ……まぁいい」

忌々しげに舌打ちしたプレシアは、デバイスを待機させる。

「ジュエルシードの撒き餌にでもなればいいわ」

プレシアは、既にフェイトに大した利用価値を見出してはいなかった。

せいぜい、あの白いバリアジャケットの少女と戦わせて、ジュエルシードを一箇所に集中させて……自分の手で奪えばいい。

凍てついた視線が、目の前に転がるアルフへ向けられる。

「せいぜい、利用させてもらうわよ」

首根っこを荷物のように掴み、引きずっていった。

――ドサッ

「うっ……」

フェイトは、身体を投げ出されたショックで目を覚ました。

「アルフ……？　どこ……？」

一緒に脱出したはずのアルフの姿が見えない。まさか、転移途中ではぐれてしまったのか。リンクは、復帰するのを忘れていた。今度こそ本当に、一人きりだった。

「おかーさん……」

疑念は、強まっている。

『目を覚ませ！　あのババァは、フェイトを殺そうとしたんだ！』

アルフが言ったとおりだと認める自分もいて。

『〇〇〇〇、お誕生日のプレゼントは、何がいい？』

でも、まだ母を信じている自分も居て。

ごちゃごちゃと、頭の中を渦巻く。

「……面倒、くさい」

考えるのは、苦手だ。
フェイトは、まずは現在位置を確認する。四方を壁に覆われているから、恐らくはどこかの庭だろう。民家と、古風な造りの道場があり……
「あれ？」
フェイトにとっては、一度だけ目にした光景だった。
「……ここ、確か」
ガラッ、と縁側の窓が開き……
「……あれ、あんた」
三つ編みの少女……高町美由紀が、顔をのぞかせた。
そして、庭先に横たわるフェイトの、惨い傷を目にした。
「どうしたの、その怪我！」
素足のまま庭に駆け出し、フェイトを抱え上げる。
「お母さん！　恭ちゃん！　ちょっと来て！」
そして、フェイトは奇妙な縁により、再び高町家へと身を寄せることとなった。

その一方。

「アリサちゃん」
ウェーブした黒髪の少女、月村すずかは、隣に座る金髪の少女…
…アリサ・バニングスに話しかけた。
「何、すずか」
「マルスね、もう歩けるようになったよ」
「……そう」
マルス。あの、大怪我をした子猫。
「……」
アリサは、難しい顔をして黙り込む。きっと、考えていることは……
「高町さんのこと？」

「うえっ！？　ち、違うわよ！」
図星を言い当てられ、慌てふためくアリサ。
「アリサちゃん、本当はもう気付いてるんじゃない？」
アリサは、また下を向いてしまう。
「あの状況じゃあ、確かに高町さんがやったって考えてもおかしくないけど……」
アリサは、流れる窓の外の風景を見ながら、搾り出すように言った。
「アイツは……そんなことするヤツじゃない」
「そうだよね」
すずかは、トレードマークのヘアバンドを外す。
「ね、憶えてる？」
「……わざと聞いてる？」
「うん♪」
実に清々しい笑顔だった。
「……」
アリサは、げっそりとした顔になる。
「憶えてるわよ」

それは、今から二年前のことだった。
当時のアリサとすずかの関係は、今のように仲の良い友達同士ではなく……いじめっ子と、いじめられっ子だった。
我の強かったアリサと、引っ込み思案だったすずか。相性は、まさに最悪だった。そしてある日、昼休みの屋上で、アリサはすずかのヘアバンドを奪い、いじめていた。
『返して』と追いすがるすずかを面白がり、ヘアバンドを放ったり、高く掲げてみたりと……傍から見れば、ただの子供の悪戯だが、やられる側は堪ったものではない。
そして、とうとうすずかの涙腺が涙でいっぱいになった時……屋上に居合わせていた高町なのはがベンチから腰を上げ……

――ばきっ

アリサの頬を、グーで殴った。

『痛い？　……痛いよね』

そして、尻餅をついたアリサの手からヘアバンドをむしり取る。

『あなたは楽しいのかもしれないけど……やられた子は、今のあなたみたいに、痛い思いをしているんだよ』

諭すように、非難するように言い、すずかにヘアバンドを返して去っていった。

『う……』

アリサはようやく、頬の痛みを知覚し……

『うえええええぇぇぇん……！』

号泣した。そもそもがお嬢様育ち。誰かに暴力を振るわれることになど、慣れてはいなかった。おろおろとアリサを泣き止ませるすずかと、泣き続けるアリサ。騒ぎはあっという間に広まり……数日後。高町なのはは、転校していった。

最初は、父親が手を回したのかと思った。だが、聞いてもきょとんとするばかりで、そんなことをした憶えは無いと言い……それどころか、すずかに対して行っていた娘の所業に、大いに怒った。すずかに謝罪するまでは帰ってくるなとアリサを放り出し、門扉を閉めた程だ。そしてその日が、アリサとすずかが友達になった日になるのだが……どこか、胸にしこりを残す日でもあった。

「謝らないと、ね？」

すずかの言葉に、アリサはうん、と頷いた。

第十五話（前書き）

なかなか伸びないです。
秀人に派手な必殺技とか習得させた方がいいのでしょうか……

第十五話

「やめろ……」

夢を見ていた。今現在、自分が夢の中に居ることをはっきりと認識している……いわゆる、明晰夢というやつだ。意識ははっきりとしているのに、身体の自由が利かない。

「やめろ……！」

目の前で展開される光景を、ただ眺めて続けていることしか出来ない。

『痛い……痛いよぉ……おとうさん、おかあさん……』

病室にいる幼い子供。その四肢にはギプスがはめられており、痛々しいことこの上ない。

彼の求める両親は、廊下で醜く言い争いをしていた。

『これで何度目だと思っている！』

『私に言わないでよ！』

『治療費だってタダじゃないんだぞ！』

『だから、私に言わないでって言ってるでしょ！？　あの子に聞いてよ！』

苛立ちを隠そうともしない。

だがそれも、仕方が無いのかもしれない。この少年が入院するのは、この年だけで四回目。ここ数年の治療費だけで、新車が買えるほどだ。

最初のうちは、心配もされた。だが、二回目、三回目ともなると、徐々に態度は硬化していき……今では、この少年は両親にとって厄介者以外の何者でもなかった。

『こんなことなら、子供なんて……』

『あなたが欲しいって言ったんじゃない！　そうよ、あんな子供なんて……！』

――××××××！！

「やめろおおおおおおおおおっ！！」

――ガシャアアアアン！！

自分の叫び声と、破砕音で目が覚めた。

「……あ？」

腕に僅かな痺れ。目を開けると、真っ白な天井が目に入ってきた。

視界が、涙で滲んでいる。くそ……ガキじゃあるまいし。

ところで、今の音は……？

「キミは……僕を殺す気か？」

クロノが、ベッド脇に立っていた。そして、その向こうの壁には、医療機器の残骸が。金属製らしきその側面が、ベッコリと陥没している。

「……悪い、寝ぼけてた」

「高価な機材を……」

ぶつぶつ呟く。

「ツケておいてくれ」

腹筋に力を入れ、身体を起こす。……うん、異常無し。あの凄まじい魔法を喰らった割には、回復が早くて助かった。

「そのままでいい。少し、話をしよう」

そして、ベッド横の椅子に腰を下ろした。

「話？」

何か話すようなこと、あったっけ？

正直、俺達の間には友情なんてこれっぽっちも無いし、クロノも性格的にそういう馴れ合いはしない。

「君の身体はどうなっているんだ？」

「――――」

……その話か。

「魔法攻撃とはいえ、落雷の直撃だ。事実、君の身体はボロボロだった。第三度の火傷に、血管の破裂と、それに伴う臓器の損傷。普通なら死んでいる」

ああ、確かに痛かった。

17年の人生で、一番痛かったかもしれない。さっさと気絶できていて、本当によかった。

「治癒魔法を使った形跡はあったが、それはあのフェレットもどきが使った痛み止め程度のものだった」

つまり、俺の身体のことを詳しく聞きたいってだけか……

「お前には関係ない」

別に、俺の身体がどうなっていようが……一時的に、仕方なく協力関係を結んでいるだけのこいつらには、関係ない。

「いや、ある」

クロノは、俺の不愉快そうな表情に躊躇うでもなく、踏み込んできた。

「協力関係にある以上、戦闘に関する情報は共有すべきだ」

「……わかったよ」

なら、半分だけ教えるか。戦闘に関する情報なのだから、それで十分の筈だ。

「昔から、傷の治りが異常に早いんだ」

「……明らかにそのレベルを大きく逸脱していると思うんだが」

「理由はわからない。これは本当だ」

そうか、と一拍置く。

「あの筋力は？」

俺が寝ぼけて殴り壊した機材を顎で指す。

「そっちは純粋に、鍛錬の賜物」

……これは、嘘。

「……」

今度こそ訝しげに目を眇めるクロノ。

「秀人さん、いる？」
と、医務室のドアが開き、なのはがユーノを肩に乗せて入ってきた。
「具合どう……って、クロノ？」
「ああ、邪魔している」
「そう」
素っ気無く返し、ぴょんっ、とベッドに飛び乗ってくる。そしてそのまま、べたっと身体をくっつけてきた。口調こそ大人びてはいるが、こういうところは子供っぽくて可愛い。
「秀人さん、歩けるなら帰ろう。ご飯作ってあげる」
「そうだな。味気ない病院食は勘弁だ」
そうと決まれば。
「よっし、帰るか」
なのはを抱えながら、ベッドを降りる。
「そうだ、二人とも」
と、ユーノが口を開いた。……どうでもいいが、何でまたフェレットの姿なんだ？
「ん？」「何？」
「艦長からの伝言で、『少しだけ病室で待ってて』とのことだよ」
「えー……」
なのはが不満げに口を尖らせる。
「ユーノ、コーヒーか何か、持ってきてくれ」
そこに、クロノが割り込んできた。
「治療室内は水と、君の言う『味気ない病院食』以外の飲食は厳禁だ」
「ちぇっ……」
そこのところは、普通の病院と同じか。
ユーノが給水機からコップに水を汲み、ベッド脇に置く。
そして、味気の無い水を一口飲み、数分。艦長とエイミィが、治

療室に入ってきた。
「艦長。エイミィまで……何かあったのか？」
艦長はそれに答えず、まっすぐになのはの前までやってくる。
「なのはさん」
そのただならぬ様子に怯え、一層強く俺にしがみ付く。
「……何ですか」
まさか、今になってジュエルシードを渡せとか、そういう物騒な話じゃないだろうな。

「家庭訪問を行います」

「かてい……」「訪問？」
最初はきょとんとしていたなのはの身体が、ハッキリと強張った。
「……私の家族は、秀人さんとユーノくんとレイジングハートだけです」
ぎゅううっ……と、力が篭る。
「父親は高町士郎。現在入院中。母親・高町桃子、兄・高町恭也、姉・高町美由紀は、家業である喫茶店を経営ちゅ――ッ」

――バシャッ！

資料を読み上げていたエイミィの顔面に、コップから放たれた水が直撃した。
「……調べたな」
地の底から響くような、低い声。
ぎろっ、とエイミィを睨みつける。その手には、ぽたぽたと雫を垂らすコップ。
「……ごめん」
しおらしく謝るエイミィだったが、なのはの怒りは収まらない。
「よくも……ッ！！」

今度は、そのコップそのものが投げつけられた。
――パリンッ！
だが、それはクロノによって叩き落とされる。
「落ち着け。　……艦長、まずは説明を」
「……ええ、そうね」
ふぅ……とため息一つ。
「なのはさん、これは未確認の情報ですが……海鳴市に、つい最近使われたと思しき転移魔法の形跡があります」
「転移魔法なんて、アースラからでもしょっちゅう使ってるだろ」
なのはを落ち着かせるために抱き寄せ、頭を撫でる。
「ええ、そうね。でも、その魔力のパターンが……アルフと呼ばれていた、あの使い魔の物と一致しているの」
アルフが……？　今までは神経質に形跡を消していたのに、なぜ今になって。
「場所は、ここ」
表示されたのは、それなりに広い家。一度だけ、行った事がある。
そう、確かここは……
「高町の、家」
なのはが、辛そうに顔を背ける。楽しい思い出なんて一つもない。
ここは、なのはにとって安息の場所などではなかった。ただ無為に拘束され続ける、薄暗い牢獄だった。
「結界を張ればいいじゃないですか」
隔離結界を細かく設定して、フェイトだけを残す事だってできるはずだ。
わざわざなのはの血縁者と顔を合わせる意味が分からない。
「なのはさん、ご家族のこと……」
『家族』という言葉に過剰に反応し、癇癪を起こして暴れだす。
「家族じゃない！　あんな奴ら……！」
腕の中で暴れるなのはをどうにか押さえる。放したら、艦長に掴みかかっていきそうな勢いだ。

「よしよし……ほら、落ち着けって」
ふー、ふー、と荒い息をつくなのはの頭を、しばらくの間、ゆっくりと撫でる。
艦長やクロノを目で牽制し、なのはを刺激しないように。

「なのは、行ってみないか？」
びくっとなのはが弾かれたように顔を上げる。
「あの馬鹿共も、そろそろ反省した頃だろうし……」
「でも……でも！」
自分がいなくなっても、あいつらが変わっていなかったら……いつもと変わらず、家にいなかったら。なのはの気持ちなんて、ちっとも考えていないということになってしまう。
「大丈夫。俺も、ユーノも付いて行く」
過剰な嫌悪は、『愛されたかった』という願望の裏返し。なのはは元々、愛情深い女の子なのだから。
「安心していい。もし、のうのうと商売なんてしていやがったら……」
――ヒュンッ
空中に正拳突きを放つ。
「俺が、あの店をブッ壊してやるよ」
クロノが、ぎょっとした顔で俺を見た。
「……秀人さんが、そう言うなら」
ポケットから、ピンク色の携帯電話を取り出す。
「もう一人、呼んでいい？」
「ああ、もちろん」
そして、携帯電話のアドレス帳を開き……呼び出した。

そして、翌日の土曜日。
「高町さん、吾妻さん、お久しぶりね」

なのはの担任が、パリッとしたスーツ姿で待ち合わせ場所にやってきた。
「あの、俺のことは……」
今、はっきりと『吾妻』と呼んだ。ってことは、もうバレているのか。
「ええ、高町さんから聞いています」
微笑……というより、苦笑する先生。大人なのに、少し子供っぽくて、アンバランスな魅力が……なのは痛い痛い足を踏むな脇腹をつねるな。
「先生、来てくれてありがとう」
にこっと笑い、素直に礼を言うなのはが少し新鮮だ。この先生には、かなり気を許しているみたいだ。何があったかは知らないが……なのはに親しい人が増えるなら、素直に嬉しい。
「そちらの方達は？」
そして、俺の後ろに控えていた二人……リンディとクロノに話題を移す。
「初めまして。なのはさんと親しくして頂いております、リンディ・ハラオウンです」
「息子の、クロノ・ハラオウンです」
設定的には、偶然知り合った留学生のクロノと、その母親ということになっている。無茶苦茶だ。
「息子がお世話になっているなのはさんのご家族に、是非ご挨拶をと思いまして」
よくもまぁスラスラと嘘が言えるものだ。
「ええと、その……」
先生が、ちらちらとなのはを見やる。この反応を見るに、なのはの事情を知っているのだろう。なのはは、先生に強張った笑みを返した。
「……だから、彼らの経営する喫茶店に行こうという話になりました」

なのはが、努めて他人行儀に言う。

そして、大通りに差し掛かり、例の店の前まで来たのだが……

「「臨時休業……」」

俺、なのは、先生の声がハモった。

「高町さん」

先生が、なのはの肩を抱く。

「……」

なのはは無表情で、店を眺めていた。

「思ったよりは、マトモな神経してたんだな」

――バシュッ……

手元に集中させていた魔力を霧散させた。

「本気だったのか……」

クロノが呆れたように言う。当然だろ。

「ここ、です」

そして、牛歩のように歩き、高町の家までやってきた。電気は点いていない。

昼間だからか……もしくは、またどこかへ行っているのか。呼び鈴を鳴らせば、分かる。

「……」

なのはは、かたかたと震える人差し指を呼び鈴に伸ばし……

「……！」

反射的に、手を引っ込めた。

やっぱり、怖いか。

「なのは……」

ユーノが声を掛けるものの、なのはは俯き、首を横に振っている。

「高町さん」

「先生……？」

先生が、なのはの手をぎゅっと握る。

「もう一度だけ……信じてみましょう」
俺を見て、ユーノを見て……
「……うん」
弱弱しく、だが確かに、頷いた。
先生が、なのはの手を握ったまま呼び鈴まで持っていき……
――――ピン……ポ～ン
一緒に、押した。

――一秒。二秒。三秒。四秒。五秒……
反応、無しか……
「ふえぇ……」
なのはの目尻に、じわりと涙が浮かび……
「さて、ブッ壊すか」
俺が、ディバインバスターのチャージを始め……
「させないぞ」
クロノが俺を拘束しようとデバイスに手を伸ばした、その時。

「はい、どちらさま？」

ドアから、なのはソックリの女が顔を出した。

「あ……う……」
なのはが何かを言おうとしてパクパクと口を開き、結局何も言えずに黙り込んでしまう。
そして、なのはソックリの女は、俺を見て顔を強張らせ……その腰にしっかりとしがみつく、なのはを見て。

「なのは！」

素足のまま、駆け寄って来た。

「……」
なのはが片手を伸ばし、すぐに引っ込めてしまう。
「ほら、行って来い」
俺は、なのはの背中を、軽く押し出した。
「……あ」
たたらを踏み、不安げに俺を見上げる。
「……」
そして、立ち尽くすなのはを……なのはの母親が、しっかりと抱きしめた。
「ごめんなさい、ごめんなさい……」
泣きじゃくり、なのはに縋りつく。なのははは、そんな彼女を振り払うでも無く、ただ困惑した表情を浮かべ……両腕を、回した。
「なのは!?」「……!」
そして、聞きつけたのか、残る二人も顔を覗かせた。

「……」
こち、こち、と。時計の秒針の音。
「ぐすっ……ぐすっ」
なのはの母親……桃子の鼻をすする音。
その二つだけが、リビングに聞こえる。

今現在、俺、先生、クロノ、艦長の四人は、ソファに横並びに座っていた。
目の前には、なのはの兄、恭也と、姉の美由紀。ユーノは、美由紀の腕の中だ。
なのははといえば……
『秀人さぁん……何とかしてよー……』
ちょこん、と、桃子の膝の上に収まっていた。顔が真っ赤だ。もぞもぞと、それとなく下りようとすると、桃子はぎゅっと腕に力を

入れ、抱き寄せる。そんなことを続けていた。
なのはも、口では嫌がっているが、本心はまんざらでもない……というか多分、超喜んでいる。というわけで、しばらく放っておこう。

『秀人、やっぱり、いるみたいだ』
敷地内をサーチしていたユーノが、そう報告する。
『フェイトか？　それとも、アルフか？』
『多分、フェイトで間違いない』

「……で、お前ら」
今は、桃子とは話が出来る状況ではないし、恭也と美由紀に目をやる。
「はい……」
美由紀が、おずおずと返事をした。
「もう一人、この家にいるはずだ。俺達は、そいつに会いに来た」
ソファから立ち上がり、ユーノを床に下ろす。
「こっち、です」
なのは……は、後でいいや。今は、思う存分母親とくっつかせてやろう。

艦長とクロノは、リビングにいてもらうことにした。ぞろぞろと人数が来たら、怯えて逃げ出すかもしれないし。
そして、フェイトがいる部屋まで来た。ドアプレートには、『なのは』と書かれている。
「入るぞ」
ドアを開ける。オレンジ色の壁紙と、白を基調とした家具。それ以外は何も無い、殺風景な部屋だった。そして、ベッドの上には……
「……やっぱり、キミ達か」
薄桃色のパジャマを着た、フェイトが横たわっていた。

手に、足に……捲れたパジャマの裾から覗く腹部に、真っ白な包帯が巻かれている。
「おい……その怪我、何だ」
あの時、雷撃のダメージは受けていないはずだ。なのに何故、フェイトはこんなにボロボロになっているんだ。
「くふふ……おかーさんに、怒られちゃった」
自嘲し、空虚に笑う。
「いっ……た」
傷に障ったのか、顔をしかめる。
「ユーノ」
……とにかく、治療だ。
『この二人、追い出すから治療を』
『多分もう、魔法についてはある程度知ってると思う』
そして、レイジングハートの映像記録を再生する。そこには、あの日の晩……なのはが、攻撃魔法でこいつらをぶっ飛ばす姿が映っていた。
「今から見ることは、他言無用だ。いいな」
二人は、静かに頷いた。
「それじゃ、はじめるね」
そして、ユーノが人間の姿に戻る。
「「……」」
二人は、あんぐりと口を開けて呆けている。
それを無視し、ユーノが魔法陣を展開。そして、発動。
緑色の光のドームが、フェイトの横たわるベッドを覆った。
「この中にいれば、外傷は一日くらいで治るから」
「……」
何を言うでも無く、もそもそと身体を起こした。
とんとん、と階段を軽い足音が上ってくる。
「……お邪魔します」

なのはだった。妙に緊張した面持ちで、部屋に入ってくる。
別に、フェイト相手に緊張するようなことも無いだろうに……と、そこまで考え、鈍い俺にも思い至った。部屋には、恭也と美由紀がいる。まだまだ溝は深い。
「美由紀、戻るぞ」「そうだね」
二人は、ふっと苦笑し、頷きあった。
なのはの両肩を、それぞれぽんっと軽く叩き、部屋から出て行く。

残されたのは、アルフを除くいつものメンツ。
「フェイト」
「……なに？」
フェイトとなのはが、見詰め合う。
「私は、ジュエルシードを譲れない」
「これは、ユーノくんのものだし……何より、」
なのはは、フェイトの手を取る。
「フェイトをこんな目に遭わせるような奴には、渡せない」
「……でも、ボクは」
フェイトは、まだ納得できないようだ。
「ボクは……おかーさんの願いを、叶えてあげたい」
どんなに酷い仕打ちを受けたとしても、フェイトにとってはただ一人の母親。
「うん、わかってる」
だが、なのはとてそんなこと百も承知している。
だから。

「だから、勝負しよう」

「え？」
フェイトが、なのはの顔を見返す。
「傷が治って、魔力と体力も満タンにして……そうしたら、ジュエ

ルシードを全部賭けて、勝負しよう」
「でも、ボクのは……全部おかーさんに渡しちゃった」
「それじゃあ、私が勝ったら、私のお願いを一つ聞いて」
「……でも」
「ふぅん、負けるのが怖いんだ？」
なのはが、あからさまな挑発をする。
途端、しおらしかったフェイトの瞳に、炎が灯った。
「誰が！　ボクがキミに負けるなんて、万に一つもあるもんか！」
「じゃあ、いいよね？　私が勝ったら、何でもお願い聞いてもらうよ」
「いいよ！　ボクが負けたら、何でも聞いてやるよ！」
がばっとベッドから起き上がり、なのはと額をぶつけ合うような距離でにらみ合う。

――きゅぅ～……

と、フェイトの腹が、可愛らしい音を鳴らした。
「あう」
真っ赤になり、腹を押さえる。
「「ぷっ……」」
思わず吹き出してしまった俺達を、フェイトが睨む。
「……おなか空いたんだもん」
ふて腐れるように言い、そっぽを向く。
と、ドアがコンコン、とノックされた。そして、美由紀が顔を覗かせる。
「みんな、ご飯出来たよ」

「丁度よかったな。んじゃ、行くぞ」
そして、フェイトを抱え上げる。
「あああああっ！？」

なのはが、愕然とフェイトを見上げる。
「ど……どうした？」
いきなりの大声に驚き、落としそうになってしまった。
「……ううう」
何故か涙目だ。
「ふ～ん……」
フェイトが意地悪く笑い、俺の首に両腕を回し、より一層密着する。
「くっ……！　こいつ！」
「くふふふふっ。どうかしたのー？」
……何か知らんが、水面下では何かの応酬が続いているらしかった。何だろうな、一体。
「ユーノ、魔法陣から離れても効果は続くか？」
「んー、ちょっと待って」
再び詠唱し、魔法陣から一筋のラインがフェイトに繋がった。
「とりあえず、この家の敷地はカバーしたから大丈夫」
さっすが。こういう器用な真似は、俺もなのはも出来ない。俺達が習得しているのは、全て戦闘絡みの魔法だけだ。こういったサポート系の魔法も、習っておいて損は無いかもな……適性の無い射出系を無理して覚えるより、満遍なく覚えた方がいいかもしれない。
『ヒデト、それはお勧めしません』
と、レイジングハートが割り込んできた。
「え、何で？　満遍なく色々と使えたほうが便利そうだけど」
『まずは、あなたの最も得意な分野を見つけ、徹底的に鍛えなければなりません』
「……俺、近接型じゃなかったっけ？」
殴って蹴って、しか能が無いぞ。操作の利かない砲撃はゼロ距離でしか使えないし、射撃もばら撒くことしかできない。
『いいえ、違います。確かに、そういう一面もあるでしょう。ですが、あなたの魔力運用は、あまりにも繊細に行われている』

「いや、それは前に聞いたけどさ。殆ど無意識にやってるんだよ」
『それが『資質』というものです』
俺の魔力制御とやらが、もう少し雑であれば、レイジングハートも迷うことなく俺を近接型として鍛えていたらしい。
『資質を無視しての成長は、いずれ致命的な歪みを生じさせます』
なのはには、砲撃を主軸に据えた今の戦い方があるように、俺にもあるのだろう。今はまだ分からないが、それを見つけるためには……
「とにかく、場数をこなす必要がある」
『そのとおりです』
そうか。それじゃあ、今度アースラ武装隊の連中かクロノあたりと模擬戦でもしてみるかな。
俺はそんなことを考えながら、フェイトを抱え、なのはの手を引きながら、食欲をそそる匂いが漂うリビングへと下りていった。

第十五話（後書き）

というわけで、ようやく彼らは『家族』に戻るきっかけを得ました。

次回あたり、秀人を強化してみようかと思います。

クロノあたりなら、相手に丁度いいかな？

ご意見ご感想、お待ちしております。

第十六話（前書き）

遅くなりまして申し訳ありません。

１０万ＰＶ突破しました。まさかここまで伸びるとは思わなかったので、正直ビックリです。

第十六話

なのはが、フェイトと勝負の約束を取り決めていた頃、リビングにて。

「お母様、よろしいでしょうか？」

なのはの担任教師、富山咲（さき）が、桃子に硬い声をかけた。

「はい……なんでしょう」

咲は、張り詰めた表情で言う。

「あなたは、本当に申し訳ないと思っているのですか？」

そこには、押し殺されてはいるが……確かな、怒りがあった。

「たか……なのはさん、は、とても優しい子です。今、母親であるあなたに、涙ながらに謝られれば、今までのネグレクトを許すでしょう」

ネグレクト（育児放棄）、という言葉に、びくっと肩を震わせる。だが、それは事実だ。

たった九歳の子供を、最も親が恋しい年頃の子供を、しっかりした子だからと放ったらかし、孤独に過ごさせたその罪は、重い。

「そして、許されたあなたは、あなた方は……また、繰り返すのではないですか？」

『その場凌ぎで許してもらって、また繰り返すのか！　あの暗い家に、なのはを一人ぼっちで取り残すのか！』

奇しくもそれは、あの日の晩、秀人が言い捨てていった言葉と同じだった。

「そんなっ……私は、これからは、ちゃんとなのはの傍にいてあげます！　もう、放ったらかしになんかしません！」

身を乗り出し、全身で否定する桃子。

「そうしないという保障は、どこにもありません」

だが咲は、それを切り捨てた。

そして、滔々と語り出す。

「知っていますか？　なのはさんは、教室でも一人ぼっちだったんですよ」

この三ヶ月間、なのはの担任になってから、彼女を見ていた。

「自分から壁を作って、誰とも関わりを持とうとせず……ずっと、ずっと一人だったんですよ」

いつも一人で、本を読んでいた。

「私でも読まないような、活字の本を読んで……それを盾にして、誰からも話しかけられないようにして」

受け持つ生徒の、1、2年次のことについては、以前の担任教師から聞いていた。そして、その誰もが……ある生徒について、言及していた。

『成績優秀だが、何故か早退が多い』

『家に電話をしたが、誰も取り次がない』

『誰かと一緒にいる場面を見たことが無い』

そして、始業式の日。咲の前に現れた彼女……高町なのはは、咲が危惧した通りの少女だった。

「でも、なのはさんは変わりました」

あの授業参観の日、なのはが、葉山健太と八代望という二人と雑談に興じている姿を見て……そして、着慣れていなさそうなスーツ姿の少年に見せた、心からの笑顔を見て、ようやく安心した。

「吾妻さんのおかげです」

一目で、信用に足る少年だと分かった。

「吾妻さんが、血のつながりも無いなのはさんのために、何をしてあげたのか、ご存知ですか？」

それは、なのはとようやく心を通わせたあの日、話してくれたことだ。

話をして、暖かい食事を振舞ってやり、一緒に眠った……ただ、それだけのことだ。その程度のことを、なのはは、本当に嬉しそうに話してくれた。だが、それをするべきだった桃子達は、その程度のことすらしてやらなかった。

「知らないんですか？」
びくっ、と桃子が身を縮こまらせる。
「知らないでしょうね」
咲は、務めて無感情に、言葉のナイフを突き刺す。
「知ろうとしなかったんですから」
咲も、なのはと同じだった故に。『放っておかれた』子供だったが故に……許すことなど、出来るはずも無かった。
「う、うぅ……！」
桃子の目から、大粒の涙が零れる。
「……泣けば、許されるとでもっ」

「はい、そこまで」

「むぐっ！？」
さりげなく距離を詰めていたリンディが、咲の口を塞いだ。
「もう……言い過ぎですよ、先生」
そして、やんわりとそソファに押さえつけた。

少しして、桃子が事情を説明し出した。
「あの店は、私達家族の、夢だったんです」
「！　もがっ！」
咲の顔が、また怒りに染まり……またしてもリンディに押さえ込まれた。
だが、その後に続いた言葉は、咲にとって、全くの予想外だった。
「夫が入院する前は、幼稚園帰りのなのはを、よく店に連れてきていました」
「……え？」
咲が、呆けた声を出す。
最初から、なのはを放ったらかしにしていたわけではなかった……？
「客の入りがまばらで、誰か一人は、必ず一緒にいてあげることが

できていたんです」

可愛い末っ子が店にやってくるだけで、疲れが取れる思いだった。

「小さかったなのはが、『ケーキ売れたね！』と、『よかったね！』と、喜んでくれるのが嬉しくて……私達は、がむしゃらに頑張りました」

今は人気の翠屋とて、最初から人気店だったわけではない。オープンしてすぐの頃は、赤字が当たり前だった。それが、口コミで客が増えていき、徐々に、徐々に軌道に乗り始めた頃……あの、事故が起こった。

「夫が入院し、店が忙しくなり……とても、小さいなのはを店に置いておける状況では無かったんです」

その結果がどうであれ……きっかけは、なのはの喜ぶ顔が見たい、ただそれだけだった。

「……こんなはずじゃ、なかったんです」

咲は、毒気を抜かれたかのように黙り込む。

「私はただ、なのはに喜んで貰えれば、それで良かったのに……」

いつの間にか、目的と手段が入れ替わってしまった。

「なのはが、自分で料理を作れるようになって……理由も考えずに、『ああ、器用な子だなぁ』なんて暢気に感じて……馬鹿ですよね、私」

きっとなのはは、家族の団欒を取り戻したかったのだろう。

母親が忙しくて料理を作れないのなら、自分が作ればいい。そう考え、実行した。だがそれは、家族をより食卓から遠ざける結果になってしまった。

もっと美味しければ。もっと品数を増やせば。もっと早く作れれば。もっと……

そうして、不必要なまでになのはが料理の腕を上げ、桃子たちがその真意に気がつかなかった結果が、今の状況だった。

「家族皆でご飯が食べたいって、ちゃんとＳＯＳを出していたのに……」

自分たちはなのはに甘え、食事を一緒に摂らないどころか、顔を合わせないことすら、『普通』になっていった。
「……今からでも、間に合うんじゃありませんか？」
自責に沈んでいく桃子を、リンディが引っ張りあげた。
「え……？」
顔を上げる桃子に、リンディが微笑みかける。
「そろそろ、お昼ですし……なのはさんに、ご飯を作ってあげませんか？」
その言葉に、ハッとする。
「きっと……いえ、絶対、喜んでくれますよ」
「は、はい……！」
そして、どこか嬉しそうに台所へ走っていった。
「……」
ぶすっとした顔で、ソファに座る咲。どうにも、納得できていないようだ。俯き、手をもぞもぞと動かしている。
「先生」
と、いきなりリンディの顔がどアップで視界を埋めた。
「ひゃっ！」
飛び上がり驚く咲に、マイペースに話しかける。
「先生、名前は何と仰るの？」
「富山、咲ですけど……」
「それじゃあ、咲ちゃん。桃子さんをお手伝いしましょう」
ぽむぽむ、と咲の頭を撫でるリンディ。咲はその手を、真っ赤になって払いのける。
「こ、子ども扱いしないで下さい！」
「あら、ごめんなさいね」
子持ちのリンディからしてみれば、大学を出たばかりの咲など、子供も同然だ。それに、咲はどうしても放っておけない雰囲気が…
…具体的には、無理して背伸びをしているような、肩肘を張っているような印象を受ける。

借り物のエプロンを着け、台所に並ぶリンディと咲。
「咲ちゃん、お料理のレパートリーは？」
「家庭料理なら、一通り」
一見、手先が不器用そうだが、料理を始めとした家事は得意だった。
「すごいわね。誰に教わったの？」
全て、自分ひとりで生活するしかなかったから。
「……別に、誰だっていいじゃないですか」
ぷいっとそっぽを向いてしまう。その態度で、リンディは勘付いた。
先ほど、桃子に対して過剰なまでに怒りを露にしたのも、生徒として以上になのはを気にかけているのも、恐らく……
「それじゃあ、一緒に作りましょう」
「何で私が……」
「なのはさん、喜ぶわよ」
「……わかりました」
なのはに弱い咲だった。

とんとん、とまな板を包丁が叩く音。しゅるしゅる、とじゃがいもの皮が剥かれる音。ことこと、と鍋の煮える音。
この家では、随分と久しく聞こえなかった音をＢＧＭに、三人が料理を続ける。なにせ、人数が人数だ。作りすぎるということは無い。マカロニサラダ、スパゲッティミートソース、シチュー、肉じゃが、南蛮揚げ、フライドポテト、ちらし寿司が、続々と出来上がっていく。
慣れた手つきで大根を桂剥きにする咲に、同じくキャベツを千切りにするリンディが話しかける。
「私、息子はいるけど娘はいないの」

とはいえ、それもいつまでかは分からない。近い将来、クロノの相棒であるエイミィが、きっと……

「夢だったのよ。娘と一緒に台所に立つの」

ぴくっ、と肩を震わせる咲。

「ありがとうね、咲ちゃん。夢が叶ったわ」

しばらく動きを止めた咲は、唐突にタマネギをみじん切りにし始める。ざくざくと。皮ごと。そして、目元を拭う。

「……タマネギが目に沁みました」

「そう？　大変ねぇ」

ざっしゅざっしゅと、親の敵のようにタマネギを刻む。一体何に使うのかサッパリ不明なみじん切りの山が出来上がっていく。

「ええ、タマネギのせいなんですからね……！　勘違いしないでくださいよ！」

咲は、どこまでも強情だった。

◆　◆　◆　◆

食事が終わって。

「……」「……」「……」

何故か、私と、母さんと、姉さんの三人は、客間にいた。

秀人さんのところに行こうかと思っていたところを、無言で連れてこられた。何だろうか……？　まさか、今になって攻撃魔法をぶっ放したことを怒るのだろうか。

「なのは」

「……何？」

姉さんが、後ろ手に持っていた何かを、取り出した。

「……リボン？」

それは、白いリボンだった。ただ白いのではなく、白地に、同色の糸で刺繍が施されていて、かなり凝った造りになっている。

「私たちが作ったの」

そして、母さんが私を手招きする。
「……」
おっかなびっくり、膝で歩いていくと、くるりと体の向きを反転させられた。
髪の毛を持ち上げられる感触。
「できたよ」
手鏡を差し出され、受け取る。ポニーテイルになっていた。いつも面倒で、ストレート以外の髪型にするなんて久しぶりだ。
「……そういえば、昔はよく髪の毛、やってもらってたっけ」
ぼそりと、何の気なしに呟いた。私がまだ幼稚園に通っていた頃、毎朝のように姉さんとおそろいの三つ編みや、ツインテールに結んでもらっていた。
あ、やばっ！
母さんと姉さんの顔が、もそもそと暗くなっていく。
――ぎゅうっ
母さんと姉さんが、私に抱きついてきた。
「ごめんね、なのは……ごめんね……！」
「なのは。本当に、本当に……ごめんなさい」

「別に、責めてるわけじゃないよ」
まだ許せないのは確かだけど。
今でも、思い出すと腹が立つ。
でも……私の無意識では、もう心の整理がつき始めているのだろう。
腹が立つとは言っても、激怒ではなく、ちょっとむかつく、くらいのレベル。
そのくらいなら……よくある仲違いくらいなら、いつかきっと、許せる日が来るだろう。
どんなに否定しようと、私たちは……家族、なんだろうから。
「それでも、謝りたくて……！」
はぁ……もう、姉さんってば、鼻水垂れてるよ。

「うっぷ……」
ティッシュを取り、姉さんの顔に押し付ける。
ほんと、どっちが年上だか……

「別に、無理して私に構おうとしなくてもいいよ」
いろいろと、思い出したことがある。
まだ、父さんが健在だった頃。私は、よく翠屋に連れて行ってもらっていた。今思い出せば、まだまだ繁盛していたとは言えなかった頃の話だ。
忙しそうに働く家族たちを眺めながら、いつの間にか眠りこけ、父に背負われて帰ったこともあった。
試作品のケーキを、母さんにこっそり食べさせてもらったこともあった。
姉さんに、レジ打ちの真似事をさせてもらったこともあった。
兄さんと一緒に皿洗いをしたこともあった。
ただ、そのバランスが崩れてしまっただけ。
きっと母さんたちは、守りたかったのだろう。いつか目を覚ます父さんが、安心して戻ってこられるように。
「納得は、まだできないけど……理解はしたから」
不満はある。だけど、母さんたちにだって事情があるんだ。それに……私には、秀人さんとユーノくん、それにレイジングハートがいる。
寂しさを感じる必要なんて、これっぽっちも無いんだから。

それでも、母さんと姉さんは負い目を感じているらしい。
「何か、してほしいことは無い？」
と、そんなことを聞いてきた。
ここで、『店を閉めてずっと一緒にいて』とかわがままを言うこともできるけど……今は、そんなことより大事なことがある。
「お願いは、二つ」

順々に二人の顔を見ながら、言う。
「私は今、秀人さんと一緒に暮らしてるの」
もう、今となってはあのアパートの一室が私の家だ。
「だから、こっちに帰ってくることは、殆ど無い」
秀人さん達と一緒に居たいし。
「まず、それを許して」
家出ではなく、ちゃんと許可をもらっておかなければ。これは、私なりのケジメのようなものだ。
「二つ目。
しばらく、フェイトをこの家に置いてやって」
拠点に戻らせるのは危険すぎる。いつまた、フェイトの母親がちょっかいを出してくるかも分からない。それに、そこにはクロノたちが立ち入り調査を始めるだろうから、とても前と同じように暮らせるとは思えない。
その点、ここなら安心だ。いつでもすぐに駆けつけて来られる場所にあって、部屋も余っている。
何より、アルフが行方不明らしい。どっからどう見ても生活能力皆無のあの子には、世話係が必要だ。だからといってアースラで預かると、フェイトが緊張してストレスを感じてしまうから、多少なりとも落ち着ける環境で……って、まるで猫じゃないか。
母さんと姉さんは、少し悩み……
「わかった、わ」
母さんは名残惜しそうに。
「フェイトのことは任せて！」
姉さんはやる気満々に。
しっかりと、頷いた。

◆　◆　◆　◆

その夜。俺達は、高町の家に泊まっていくよう奨められた。まぁ、メインはなのはで、他の連中はおまけなんだろうけど。

縁側に腰を下ろし、二人で横に並ぶ。

「食べ過ぎちゃった」

少し膨れたお腹を擦りながら、なのはが照れくさそうに笑った。確かに、割と少食のなのはにしてみれば、かなり食べた。久しぶりに口にする、母親の料理だ。そりゃあ、無理してでも味わいたいに決まっている。リスのように頬張るフェイトに負けじと、ハムスターのように口に詰め込み、『行儀が悪い』と二人そろって先生に怒られていた。

今は、桃子さん、美由紀、先生の三人が、大量の洗物と格闘している筈だ。一体、何皿平らげたやら……

「ちょっと、お腹が重いかも」

頭を撫でてやると、じゃれるように頭を振った。

「似合うよ、それ」

少しだけ伸び、ギリギリ背中までかかっていたストレートの髪の毛は、白いリボンでポニーテイルに結ばれていた。

「ありがと」

このリボンは、美由紀と桃子が用意し、結んであげたものらしい。ただのプレゼント以上の嬉しさがあるに違いなかった。

フェイトは、元なのはの自室にて、事情聴取を受けている。ユーノに監視を頼んでおいたものの、完全に遮断されているせいで念話も通じない。誘導尋問のようなことが行われていなければいいが……

「吾妻」

と、引き戸が開き、恭也が出てきた。

「何だ？」

「少し、いいか」

そして、ちょいちょい、と離れの道場を指差す。

「悪い、ちょっと借りていく」
そして、すれ違いざま……ぽん、となのはの頭を撫でていった。
「……ああ、うん。いってらっしゃい」
なのはは頭を擦り、ほけー……っと俺たちを見送った。

恭也が扉をしっかりと閉め、同情の中央に正座した。何となく、その向かいに座る。
「で、何の話だ？」
多分、他には聞かれたくない話だろう。
「吾妻、」「秀人でいい」
「秀人。俺は……俺たちは、何をしていたんだろうな」
悔恨を口に出す。
「父さんの店を潰さないように……目を覚ましたとき、家族皆でちゃんと迎えてやれるように、頑張っていたつもりだった。新しいメニューやレシピを夜なべして考えて、どれだけの値段で出すかを吟味して……」
そこで、ふっと自虐的に笑う。
「確かに、店は繁盛したよ。あの通りで、一番だと胸を張れる」
いくら一等地に店を構えているとはいっても、店の質が良くなければ、繁盛はしない。だから、きっとこいつらは本当に努力したのだろう。
――実の妹を、おざなりにするまでに。
「その影で、大事な末の妹を泣かせていたなんて、な」
確かに、とんだお笑い草だ。目的と手段の逆転。家族皆でいられる場所を守るために、家族そのものを蔑ろにしていた、なんて。
「俺は、どうすればいい。どうすれば、償える」
そんなもん、自分で考えろ……と言いたいが。
「……週に一回だ」
なのはのためだ。

「定休日でも何でもいい。週に一回、必ずなのはと一緒に食事をしろ」

家族と一緒に食事がしたい。そう言っていたなのはの願いを、叶えてやろう。

「……感謝する」

そして、恭也は深々と俺に頭を下げた。

約束、ちゃんと守れよ？

◆　◆　◆　◆

秀人さんを見送って、少し経った。

「……」

兄さんに頭を撫でられた。あの日の晩は嫌だったのに……今は、そんなに嫌じゃない。

「やっぱり私、甘いのかなぁ……」

『それがあなたの美徳です』

レイジングハートが、すかさず返事をくれた。

「でも、良かった」

何だかんだで、高町家の面々と和解ができた。リンディさんがきっかけをくれ、秀人さんが背中を押してくれたから、実現できた。

「あー……リンディさんにも、お礼しないと」

満月を見上げる。まん丸なシルエットに、人影が重なり……とさっ、と軽い音を立てて、私の目の前に着地した。

「普通に降りてきなよ」

「そんなの、ボクの勝手だろ」

フェイトだった。ユーノくんのお陰で、かなり回復したらしい。

ふてぶてしく腕を組み、呆れる私を見下ろしている。

とんとん、と自分の隣を叩き、フェイトを促す。フェイトはすとん、と素直に座った。
「日取り、決まったよ」
私たちの、勝負。
アースラ監修の、結界内の仮想空間。そこで、決着を着けるんだ。
今度こそ、誰の邪魔も入らない。
「いつ？」
「三日後、だって。それまでに、体調を整えておけってさ」
怪我の方は、ユーノくんがそれまでに何とかできるそうだ。だから後は、よく食べて、よく眠って、体力と魔力を回復させるだけだ。
「負けないよ」
私のためにも。そして、フェイトのためにも。

「ボクだって」

そして、こつん、と拳と拳を軽くぶつけ合った。

第十六話（後書き）

というわけで、ようやくなのはと高町家の面々は和解できました。

秀人の強化は、次回に持ち越しです。

ご意見ご感想、お待ちしております

第十七話（前書き）

今回は、なのはとフェイトは蚊帳の外です。
あしからず。

第十七話

それは、ほんの小さな不注意だった。

三歳のある日、俺はいつものように公園でボール遊びをしていて、壁にバウンドしたボールが道路に飛び出し、それを追いかけ……トラックに跳ね飛ばされた。

まぁ、幸いにも死ぬことは無かったんだけど。

救急車に運ばれ、病院に担ぎ込まれ、緊急手術を受け……何ヶ月かして、ようやく退院できた。

頭を打って背骨を折って腕や脚が変な方向に曲がって、何の後遺症も無いんだから、本当に運が良かった……と思っていた。

退院して数日。

俺は、まだ馴染まないベッドで身体を起こし、手すりを掴んだ。

――ゴギュッ……

そんな音を立てて、それなりに頑丈な材質だったベッドの手すり、抉り取られていた。丁度……俺の手の大きさに。

意味が分からず、ただそれを眺めること数瞬。

――ビギィッ……！！

『あ、あああああああ！！』

理解が追いつくより早く、自分の腕から、味わったことが無い（あの事故の時は、痛みを感じるより早く意識が飛んでいた）レベル

の痛みが襲ってきて、俺は叫んだ。
『秀人、どうしたの!?』
すぐに母親が部屋に飛んできた。そして、俺を……正確には、俺の腕を見て悲鳴を上げた。
『どうしたの、その腕!?』
『う、で……?』
ずきずきと激痛を発し続ける腕。視界に入る自分の腕が、ありえない方向にねじくれてしまっていた。
『痛いよ……痛いよぉ……!』
幼かった俺は、ただ母親に助けを求めるしか出来なかった。
『あなた! 秀人が! あなた!』
そして、すぐさま救急車の乗せられた。

その、車中にて。

『ううっ……』
いまだにずきずきと痛む腕。痛くて、いつまで経っても収まらなくて。段々と、腹が立ってきて……
『うあああああああっ!!』
癇癪を起こし、無茶苦茶に身体を動かした。
『大丈夫だから、落ちつい……げっ!』
――まず、一人が飛んだ。
狭い車内を、救急隊員の男性がゴムボールのようにバウンドする。
――次に、モニターのような機材がひしゃげた。
散乱したガラス片金属片が、撒き散らされる。
『ひで、と……?』
母親が、得体の知れないものを見るような目で……化け物を見るような目で、俺を見ていた。

その後、何か注射を打たれ……多分、鎮静剤か何かだったのだろ

う。俺は意識を失った。

次に目を覚ましたとき、俺は全身が妙に窮屈に感じた。それもその筈。俺の身体は、硬いゴムのようなバンドで拘束されていたのだから。

――びきっ

『ぎっ……！』

身体をよじった途端、また身体のどこかが痛んだ。

『彼の全身の骨格に、微細な輝が入っています』

母親がカーテンの向こうで、医者の話しに神妙に聞き入っている。

『簡単に言えば、筋力に骨格が耐えられないんです』

当時は、難しくて理解できなかった。

『人間には、先天的に身体能力のリミッターが備わっている……という話を、聞いたことはありますか？』

漫画とかでよくあるアレだ。『火事場の馬鹿力』。どうやら、俺は常にその状態になってしまっているらしい。

『おそらく、例の交通事故で、脳のどこかを損傷してしまったのでしょう』

結果、俺の身体は、抑えを失って暴走してしまったそうだ。

治療は無理だった。

何せ、今の医学では、『脳のどの部分が』『どのようにして』身体能力にリミッターをかけているのかさえ解明されていないのだ。そこを更に、『もう一度リミッターを掛けなおす』なんて真似が出来るはずも無い。

少し身体を動かすだけで、間接がギシギシと軋みを上げ、激痛が襲い掛かる。

特に、成長期に入ってからは、地獄だった。

動かなくてもバキバキと骨が折れ、靭帯が千切れ、自身の張力に耐え切れなくなった筋肉が断裂する。

眠ることもできず、鎮痛剤を常時投与され、今が昼なのか夜なの

かさえ分からず、ただ痛みだけが意識を繋ぎ止めていた。

際限無く増えていく医療費に生活を圧迫され、最初は努めて明るくいつも通りに振舞っていた父親と母親からは、徐々に笑顔が消えていった。この頃からだろうか。病院の廊下で、醜く言い争う両親の声を聞いていたのは。

口論の末、激昂して思わず口にした言葉なのだろう。だが、多分に本音が含まれていることも、また事実。俺はただ、黙ってそれを聞いていることしかできなかった。

二年が過ぎた頃、ようやく『奇跡』が起きた。俺の身体の治癒力が、細胞が自壊する速度を上回ったのだ。

そこからは、超回復に次ぐ超回復。積年の恨みとばかりに、骨格が急成長を遂げた。

その結果得たものは、奇跡のような肉体。

異常に頑丈な骨格。

異常に密度の高い筋肉。

異常に早い新陳代謝。

――『超人病』

それが、当時の俺の主治医が付けた名称だ。俺の身体を、実に的確に表現している。

だが、そんな医学的価値の無い奇病になど、誰も見向きすることは無く、自力で歩けるようになると、すぐ俺は放り出された。

そして、奇跡の肉体を得た代償は……家族の愛情だった。

『あなたは今日からここで暮らすの』
車に乗せられ、一言も喋らないまま数時間。俺は、冷たい鉄の門の前に居た。
事務的に俺の手を引く母親が、冷めた声で言う。その声に、かつての優しさや、愛情は感じられなかった。
『だから、これでお別れよ』
むしろ、ようやくこれで開放されるという、安心感さえあった。
そして、目の前の門が開き、一人の男性が俺を出迎えた。
『やぁ、初めまして。私はここの園長だ。これからは、ここを自分の家だと思ってくれ』
善人の笑顔……そして、欲にぎらつく瞳。
孤児を一人引き取れば、決して少なくない額の補助金が出る。それを目当てに、俺を引き取ったことが丸分かりだ。この門の向こうには、俺と同じような境遇の子供がたくさんいるのだろうと、なんとなく分かった。
この分厚い門は……侵入者を阻むのではなく、中に居る者を逃がさないための、檻。
『さぁ、みんなに自己紹介だ』
そして、園長を名乗る男は、俺の腕を強く引いた。
『お母さん……』
ぐいぐいと引っ張られる。やろうと思えば、いつでも抜け出せる。でも、俺はしなかった。出来なかった。母親が、俺のせいでどれだけの迷惑を被ったのかを知っていたから。
父親は残業を重ね、とうとう身体を壊してしまった。母親は、度重なるストレスから鬱病を患った。全て、俺の所為で。
ただ、母親が一度でも振り返ってくれれば。何か言葉をかけてくれれば。
『お母さん……！』
しかし、その願いは叶わなかった。

一度も足を止めることなく歩き去っていく背中が、俺が見た母親の最後の姿だった。

そして、頑丈で背の高い門が――がしゃん、と閉まった。

「秀人、どうした？」

先を歩くクロノが振り返り、訝しげに俺を見た。

「何でもねーよ」

肩をすくめ、回想から現実に戻った。

「そうか」

現在、なのはとフェイトが『試合』に使うフィールドの最終調整が行われている。

俺とクロノが模擬戦を行い、結界の強度や、レイヤーの出来具合を確認する……という名目だ。実際には、来るべき決戦に向け、少しでも力を着けておきたいという俺の申し出に、リンディさんとクロノが答えてくれたんだけど。

なのはは、フェイトとの試合のため体力を温存し、イメージトレーニングだけに留めている。ユーノは直接的な戦闘には不向きだ。アースラ武装隊の面々は、フェイトの拠点だったマンションを調べていたり、警戒任務に当たっていたりで暇が無い。

消去法プラス、俺とタメを張れる実力の持ち主ということで、クロノに白羽の矢が立ったというわけだ。

「本当に、デバイスは必要無いのか？　ストレージでよければ、貸し出せるぞ」

ストレージデバイスとは、レイジングハートやバルディッシュと違い、ＡＩが備わっていない、本当の意味での『デバイス』だ。クロノが言うには、主流はむしろストレージらしい。かく言うクロノのデバイスも、このストレージだ。

「俺、マルチタスクが苦手でさ。魔法を同時発動するのは二つか三つが限界なんだよ。だから、デバイスがあっても無くてもそんなに変わらない」

というより、魔法という数式を頭の中でごちゃごちゃこねくり回すより、『魔力そのもの』を操作する『魔力操作』の方が……魔導師らしくない戦い方の方が性に合っている。

「それに……」

「それに？」

むしろ、こっちが問題だ。

「レイジングハートが怒るんだよ」

以前、同じようにリンディさんからストレージを貸そうか、という話になったことがあった。俺は結構乗り気だったのだが……

『ヒデトはマスターではないとはいえ、私のアカウントを持っているのですよ？

私にはヒデトの資質を見極め、伸ばしていく義務があり、それが私たちの契約の筈です。

契約を破棄する気ですか？

それとも、私では力不足であると……そう言うつもりですか？』

あそこまで饒舌に喋るレイジングハートは初めてだった。

「お、怒る……？　インテリジェントデバイスが？」

クロノは、どこか愕然とした面持ちだ。

「え？　結構怒るぞ、あいつ」

射撃訓練で的を外せば

『眼窩に収まっている二つの球体はガラス玉ですか？』

とか。

マルチタスクの維持に失敗すれば

『脳みそまで筋肉で出来ているのですか？』

とか。

ディバインバスターを暴発させれば
『自殺したいのでしたら余所でやってください』
等々。スパルタ教官だ。
「どこまでも非常識だな、君たちは」
はぁ、とため息ひとつ。
「いいか。いくら人格ＡＩを搭載されているとはいえ、それはあくまで思考能力に『似せて』作られたプログラムだ。感情の揺らぎなんて、発生するわけがない」
プラナリア呼ばわりした時、カチンと来ていた気がするけど……
「ああ……そういえば、レイジングハートは出自不明なんだった」
ユーノがジュエルシードを発掘するより前、別の遺跡で偶然発見したらしい。
本来ならばジュエルシードと同じく、ロストロギア扱いになるのだが、危険性は皆無だったため、そのままユーノがデバイスとして使っていたらしい。
「……マリエルが聞いたら大喜びするだろうな」
マリエル？　聞いたことが無い名前だ。
「誰だそれ？」
「技術者だ。のめり込むと暴走しがちになる」
げんなりとした様子。嫌いではないが、苦手らしい。
「ただ、腕は確かだ。もし君たちのデバイスが破損した時には、頼りにするといい」
「覚えておく」

話しているうちに、転送ポートに到着した。ここから、仮想空間に直接飛ぶらしい。
「準備はいいか？」
クロノは、バリアジャケットを纏い、手にはデバイス。臨戦態勢だ。
「いつでも」

対して俺は、ヘルメットを被ればツーリングに行けるような装備。
破れてもいいように、以前着ていたジャケットとパンツ、グローブにブーツ。動きやすさと、魔力で補強した時の強度のバランスを考えたらこうなった。
『それじゃ、飛ばすよ～！』
スピーカーから、エイミィの能天気な声がして……
――バシュッ！
俺たちは、仮想空間に移動した。

（さて、と……）
周囲をぐるっと確認。
（大部分は海、着地できそうな足場は、水没した廃ビルだけか）
基本は、空戦がメインになりそうだ。やはり、なのはとフェイトに合わせた調整がされている。
「ルールの再確認だ。魔法は全て非殺傷設定。先に気絶するか、ギブアップを宣言した時点で敗北。以上だ」
シンプルな実力勝負。いいね。
「了解だ」
強化魔法……ソリッドを発動し、装備の強度を上げる。いつでも始められる。
『じゃあ、行くよ。レディ……』
クロノのデバイスが、青白い輝きを放つ。
俺は、右拳を腰だめに構え……

『ゴー！』

――キュボッ！！
足元をインパクトで弾き、突っ込む！
「うおりゃあああっ！！」
拳を、打ち下ろす！

――バゴオオンッ！！
クロノが立っていた足場を吹き飛ばす。クロノは空中に逃げ、
「スナイプ！」
誘導弾を発射した。
『Ｓｎｉｐｅ　ｓｈｏｏｔ』
アクセルシューターに比べたら、威力はそこそこ……だが、操作性能は段違い！
――キュキュキュキュキュンッ！！
複雑な軌道を描き迫りくるそれを、飛びながら回避し、迎撃し……って、
――バチンッ！
「あっぶね！」
追い込まれた先に、設置型のバインドが仕掛けてあった。
やっぱり、クロノの方が一枚も二枚も上手か……でも。
「いい実戦訓練になるっ！」
猪突猛進な暴走体に比べて、何て手強いことか！

『Ｂｒｅａｋ　Ｉｎｐｕｌｓｅ』
クロノのデバイス……Ｓ２Ｕが発声する。
クロノが一変、Ｓ２Ｕを構え、突っ込んできた。中距離戦闘が得意そうなクロノにしては、随分と……
――チュィィィイイイィィイイン……！！
Ｓ２Ｕが、妙な振動音を発している。
と、俺の踏み込みで舞い上がった瓦礫の欠片が、Ｓ２Ｕに触れ……
――バシッ……！
粉々に、粉砕された！　そういう魔法か！
受け止めるつもりだった予定を変更。直前まで引き付けて……！
「くっ！」
ギリギリのところで、回避！
――ズバァァァ……！

俺が足場にしていた廃ビルの屋根部分が、さらさらと砂のように崩れていった。
「おまっ……そんなもん人に向けて使うな！」
下手すりゃミンチになるぞ！
――ガキンッ！
「げっ！」
逃げた先に、またしても設置型バインド。今回は、しっかりと捕まった！　やべっ！
「くそっ！　このっ！」
バインドをどうにか解除しようと悪戦苦闘している間に、クロノはしっかりとチャージを終えていた。
「まずは一発だ」
『Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ』
――ドンッ！
打ち出されるのは、巨大な青白い魔力弾！
「おおおおっ！」
プロテクションを展開し、砲撃を防御する。
――ドゴオオオンッ！
受け止めた魔力弾が、大爆発を起こした。威力もさることながら、副次効果でここまでのダメージを受けるとは思わなかった。
『Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｓｎｉｐｅ』
更に、追撃の誘導弾！
「インパクトォ！」
――バシュンッ！
広域版インパクトで、纏めて吹き散らす。
『Ｂｒｅａｋ　Ｉｎｐｕｌｓｅ』
背後から、Ｓ２Ｕの音声が……くそっ、バック取られた！
――……ッチュイイイイイィィィン！

「ぐあぁっ……！」
必死に身体を反らし回避するが、僅かに掠った部分から、ダメージが全身に伝播する。
「こンのォッ！」
振り向きざまに、貫き手を一閃！
その一発は、僅かにクロノのバリアジャケットを切り裂いた。
『Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ』
――ガゴオォン！
が、接近戦を不利と悟ったクロノが砲撃を発射し、俺を射程外に吹き飛ばす。

「ジリ貧だなぁ……クソッ」
認めたくは無いが、クロノは強い。正直、甘く見ていた。
なのはのような圧倒的な攻撃力も、フェイトのような見失いそうなスピードも無いが、とことん理詰めの数式のような戦法には隙が無い。戦っているうちに、知らず知らず罠に追い込まれている。
何か、決定的な一打というか……クロノの『理詰め』を崩せるような一手があれば……
と、ごちゃごちゃ考えていたら、再び……
『Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ』
砲撃！
一々避けたり、シールドを張っている暇は……無さそうだ。そんなことをしている隙を見逃すような奴じゃない。
利き腕じゃない方の左手、その掌に、全魔力を集中して……
――パァンッッ！！
ビンタするように、砲撃を弾き飛ばした。
「む……」
クロノがぴくりと眉を動かす。
見当違いの方向に飛んで行った魔力弾は、どこかの水面に派手な水柱を立てた。

「お？」

思いつきでやってみたが……結構使えるんじゃないか？　コレ。

『使用』する魔力は大きいけど、『消費』する魔力はほんの少し…

…バレット3発分程度だ。

それでいて、防御性能は格段に高い。

もしかしたら、跳ね返すことも、出来るんじゃ……

お。

おお。

おおお。

閃いた！

――ザッ……

廃ビルに着地する。

「はあああああっ……！」

深呼吸。半身に構え、左手を緩く突き出し、右手を腰溜めに。この構えが、一番やりやすい。

『Ｂｒｅａｋ　Ｉｎｐｕｌｓｅ』

例の振動波！

槍のようにデバイスを繰り出してくる。避けるのは容易い。だが恐らく、どこに避けてもバインドか誘導弾が待ち構えている。それなら！

――バキイィインッ！

真正面から、受け止める！

「なっ……！？」

驚愕するクロノ。まぁ、普通ならそうだろう。触れただけで石材を粉々に粉砕する振動波に、真正面から来るなんて考えもしなかったはずだ。

とはいえ、俺も素手のままぶつかったわけではない。拳の前面に、

局所的にインパクトを発動し、振動波と相殺させている。
「おおおっ！」
押し……切れッ！
「くっ！」
とうとう、拮抗が崩れた。
クロノの顔が、焦りに歪む。
『Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ』
回避は無理と悟ったクロノが、ほぼゼロ距離から容赦の無い砲撃を発射する。

――今だ！

「フッ！！」
振りぬいた右腕に代わり、左手の掌に強化魔法を集中し……！
――バチイイィィンッ！
掌打で、砲撃を跳ね返す！
「う、うあああああっ！？」
インパクトと、自らの砲撃をまともに喰らい、吹き飛ぶ。直前にプロテクションを張ったのは正解だが、二発分のダメージを受け、呆気無く砕け散った。
そして、完全に体制を崩し、隙だらけになったそのボディに……！
「ディバイン……！　バスターーーーーー！」

――ズゴオオオオンッ！

砲撃がクリーンヒット！

遠くのほうで、ざぶん、と何かが水面に落ちる音を聞いた。
『クロノくん、戦闘不能……』
魔導師の戦い方は、対処法のルーチンの積み重ねだ。

射撃魔法はこうして防御する。誘導弾はこうして回避する。砲撃魔法はこうして耐える。

相手の一動作につき、一つの対処。

マルチタスクがあるとはいえ、それはあくまで連続する一つ一つの動作に過ぎない。

なら、一つの動作に複数回の行動を込めることができたら？

まず、初見の相手は必ず倒せる。けど、

「っぐ……！」

弱点もある。

まず、全魔力を集中させた掌打。相手に気取られることが無いように、一瞬で魔力を集中させなければならない。そのために、リンカーコアをレッドゾーンまで回転させる必要がある。

そして、集中させた魔力一瞬で全身に戻し、再びリンカーコアを回転させ、必殺級の攻撃魔法を発動させる。

結果、リンカーコアが急激に収縮し……つまりは、不整脈を起こす。

「う……がはっ！」

リンカーコアを無理やり機能停止させる。

反動、結構キツいなぁ……

と、その瞬間。

――ズパアアァァンッ！

「ぎゃっ！？」

後頭部に、何かが命中した。

――あ、ヤバ。

意識にモヤが掛かってきた。脳震盪か、何か……とにかく、戦闘不能になりそう……

視界の隅に、クロノが事前に発射していた誘導弾が、役目を終えて散るのを見た。

（引き分け、か……）

「……負けたよ」

医務室で目を覚ました俺に、クロノは開口一番そう言った。

魔力ダメージしか与えていないので、外傷は皆無だ。

ただ、ダメージはそれなりに残っているらしく、エイミィに支えてもらってようやく立っている。

「引き分けじゃないのか？　結局、俺もＫＯされたわけだし」

「ルールにあっただろう。『先に気絶するか、ギブアップを宣言するか』……僕の方が、先に気絶していた」

う～ん……あんまし、勝った気にならない。

「ところで……」

んで、俺はというと……

「何で、勝ったはずの君が寝込んでるんだ？」

うるせー……

『リンカーコア出力、２３パーセントに低下しています。無理な稼働と、強制停止の影響です』

「秀人さぁん……」

なのはが涙目になっている。

『全く……無茶をするのはあなたの悪い癖です』

「いや……ああしないと勝てなかったし」

負けるのは嫌だから。引き分けだったけど。

「訓練なんだよ、訓練！　訓練で大怪我してどうするの！？」

ぼすぼすとベッドを叩き、なのはが怒る。

「悪かった、俺が悪かったから……」

なんとか宥めようと言ってみるものの、ぷんすか怒るなのはの機嫌は直らない。
「もう知らない！　今晩はすき焼きにしようと思ってたけど……ユーノくんと二人で食べちゃうから！」
「えええええ!?　勘弁してくれよ！　牛肉なんてたまにしか食べられないのに！」
「知らないっ！」
うわあああああ……楽しみにしてたのに……！　なのはのやつ、やると言ったら絶対に実行するんだよ！

『というより、詰めが甘いです。背後の誘導弾に気付かないなど……まして、それで負けるなど』
静かな言葉に、滾るマグマのような怒りを感じる。
「れ、レイジングハート……?　秀人は勝ったんだから」
ユーノがフォローする。が。
『最後まで立っていなければ、勝ちではありません。引き分け?　そんなもの負けと同じです』
鬼だ。鬼がいる……！
『どうやら、訓練すべきはマスターでなく、ヒデトのようですね……?
では、意識が戻ったところでマルチタスクの維持訓練を……とりあえず１０個、６時間コースでフル稼働、始めましょうか?』
「死ぬ！　脳の神経が焼き切れる！」
『安心してください。焼き切れたら半田付けして差し上げます』
「俺の脳みそは古いラジオじゃねぇ！」

「ほ、ほんとにデバイスと漫才やってる……」
「……やはり、マリエルを呼ぶか」
蚊帳の外で、エイミィとクロノがそんなやりとりをしていたり、カオスな空間と化していた。

『ヒデト』
と、レイジングハートが口調を改めた。
『あなたが使ったという、カウンター技ですが……あれは、封印して下さい』
「……やっぱり？」
さすがにあんな自爆技、いくら俺の身体でも使い続けるには限界があるしなぁ……
『下手をすれば、リンカーコアが破裂します』
さらっと恐ろしいことを言われた。
「使っちゃだめ！　絶対だめ！」
なのはが、いよいよ涙を流して俺に詰め寄った。
う……これは反則だろ……
でも、あの技があれば、戦力を飛躍的に高めることができるのもまた事実。
さて、どうしたもんか……
『失礼。言葉が足りませんでした』
「「「え？」」」
俺、なのは、ユーノの声が重なる。

『私が、完全な制御プログラムを構築するまでは、封印して下さい』
「なるほど。レイジングハートの処理能力を割けば、魔力運用のサポートになる」
『うまくいけば、リンカーコアへの負担を最小限にまで抑えることが出来るはずです』
えっと、つまり……レイジングハートがいれば、連発できるようになる？
「連発って……」
ユーノはあきれ返っている。

「反動は軽減できるとはいっても、ゼロになるわけじゃないんだよ？」
「わかってるけどさぁ……俺には接近戦以外、取り柄無いし、アレは確実に決め手になるんだよ」
『決め手』が一回しか使えないのは困るし。
『まぁ、ヒデトもある意味私のマスターです。デバイスとしての本分を、忘れたつもりはありませんよ』
デバイスの本分……魔法の発動補助、か。
「ある意味って……まぁいいや。んじゃ、頼んでいいか？」
『勿論です。では……』
ん？　まだ何かあるの？

『マルチタスク維持訓練、始めましょうか』

「えええええええマジでやるの！？」
冗談だと思ってたのに！
『ヒデト……無様な敗北を喫しておいて、罰が無いとでも……？』
逃げようにも、身体が動かない！
「ちょ……誰か止めて！」

「頑張って、秀人さん」
「ごめん、僕には……」
「それじゃ、行くかエイミィ」
「そうだね、クロノくん」

四人はぞろぞろと部屋を出て行った。部屋に残ったのは……
『さぁ、始めますよ』
鬼教官と、俺。
「……ええい、やってやるよコンチクショウ！」
そして。

「――ぎゃあああああああああ……！？」

翌日、翌々日共に、俺は割れるような頭痛に苦しむことになったとさ……めでたく無しめでたく無し。

第十七話（後書き）

元ネタはダイの大冒険に登場する『あのお方』です。

第十八話（前書き）

遅れて申し訳ありません。
次は、かなり短期間で上げられますのでご容赦下さい。

第十八話

「いたたたた……」
エマージェンシーハンマーで頭蓋骨をカチコンカチコン叩かれるような痛みを目覚ましに、俺は布団からもぞもぞと這い出た。
「レイジングハートの奴、ちったぁ加減しろっつうの……」
とはいえ、一昨日の、頭蓋骨の中で道路工事が行われているような激痛に比べたら天国のようなものだ。
「おはよう、秀人」
ユーノ（人間形態）が、食卓から顔を覗かせた。
「ああ、おはよ」
洗面所で顔を洗い食卓に戻ると、白米・焼き魚・味噌汁・漬物の、和食が二人分用意されていた。なのはの姿は無く、書置きの手紙が置かれている。文面には短く一言。

『行ってきます』

「……行ったか」
今日は、待ちに待った勝負の日。
なのははフェイトへの必勝の策を練り上げ、フェイトは体力と魔力を万全に回復させた。
「なぁ、ユーノ」
味噌汁を啜りながら、慣れない箸に苦戦するユーノに話しかける。
「なのは、勝てると思うか？」
正直な意見が聞きたい。
「……そうだね」
箸を置き、真剣な表情になる。
「フェイトのスピードは、圧倒的だ」
それはわかる。俺も、初見では全く反応できなかった。

「攻撃魔法も多彩で、尚且つ高威力で、応用も利く」
一発でなのはを戦闘不能に追いやった雷撃。縦横無尽に襲い掛かってくる一斉射撃。鋼鉄をも切り裂いた魔力の鎌。スピードと相まって、防御も回避も困難だ。今の俺でも、勝てるかどうかはわからない。
「それを考慮に入れた上で、どうだ？」
ユーノが顔を上げる。難しい顔をしていたのが嘘のように、あっさりと……
「勝てるよ」
と、俺と同じ意見を言ってのけた。
「……だよな」
俺たちは、ずっとなのはを見てきた。
一回目の勝負に負けた時も。
二回目の勝負に勝てなかった時も。
三回目の勝負を邪魔された時も。
なのはは、一日だって訓練を欠かしていない。話を聞いたクロノが呆れ返るような密度の訓練を行い、着実に力を着けてきた。だから。
「なのはが勝つ」
……んで。
「何で俺が周辺警護なんだよ！？」

隔離結界の中、俺は、武装隊に指示を出すクロノに、おもいっきり噛み付いた。
「……僕も聞きたいよ」
この隔離結界を張っているのは、俺と同じく借り出されたユーノだ。
目の前には、ドーム状の結界が展開している。あの中は仮想空間になっていて、実際にはあの数百倍の面積が確保されているらしい。
「仕方ないだろう？　ここには、残りのジュエルシードが全て集合しているんだ。プレシア・テスタロッサが、それを見逃すとは考えられない」
最近アクションが無いから忘れそうになっていたが、フェイトの母親……プレシアは、まだジュエルシードを付け狙っているはずだ。
「それに、仮想空間の中に君がいても、二人の集中に水を差す結果になる」
「うぐ……！　た、確かに……」
俺は、その場にウ○コ座りをして頭を抱える。
「あ～……見たい！　でも見てたら邪魔になる……！」
どうすればいいんだ……！
見かねたクロノが、助け舟を出してくる。
「エイミィ、秀人とユーノに端末を渡すぞ」
『了解～』
Ｓ２Ｕから、何かが二つ、すぽんと排出された。
「秀人と……ええと、フェレットもどき」
「ユーノだ！　ユーノ・スクライア！　誰がフェレットだ！」
「うるさい奴め……」
手渡されたのは、液晶画面の無いｉ－ｐｈｏｎｅみたいな端末。
スイッチを押すと、モニターが空中に固定され、仮想空間の中と思しき風景が映った。
「それで文句は無いな？」
やれやれ、といった様子で肩をすくめるクロノ。

「サンキュー！　お前、いいヤツだな！」
生で見られないのは残念だだ……まぁ良しとしよう！
空間内では、今まさに二人の勝負が……
――ザッ、ザザザザ……
「あ！？　おい！！」
が、画面にいきなりノイズが走ったと思ったら、砂嵐になってしまった。
もしかして……
――ヴォオオオオオオオン！
『結界内に、侵入者あり！　数１！　ＡＡＡランク相当！』
ああもう！　落ち着いて観戦することも出来ないのかよ！
『強力なジャミングを確認！　仮想空間とのリンクが、一切遮断されました！』
援軍に来る可能性のある二人を、初っ端から隔離してきた。
なのは達が死力を尽くした勝負を終え、消耗しきった所を狙う作戦か。
「総員、迎撃体勢！」
俺は、端末をポケットに突っ込み、リンカーコアを起動した。
「おい、思いっきりやっていいんだな！？」
仮想空間は、厳重にプロテクトを掛けてある。こちらの戦闘音も届かないし、通信もできない。だから、俺たちがいくら暴れても、二人の勝負の邪魔にはならない！
「ああ、構わない」
Ｓ２Ｕを、侵入者に向ける。その侵入者は……
「……アルフ？」

そう。侵入者は……茜色の長髪が特徴的なフェイトの使い魔、アルフだった。俯き、両腕をだらりと垂らしている。
「今まで、どうしてたんだ？　フェイトも心配して……」
そして、俺がアルフに向かって足を一歩踏み出し……
「離れろ！」
クロノが警告するのと同時、俺は反射的に飛びのいていた。
「ぐがあああああああああああ！！！！」
凄まじい咆哮を上げ……
――ガチンッ！
俺の首筋があった空間を、鋭い犬歯が噛み潰した。
「あ……アルフ？」
俺は、半ば呆然と、半ば確信を持って、その名を呼ぶ。
「がああああああああっ！！」
そして、本性の赴くまま、俺たちに襲い掛かってきた！
「おい、クロノ！　これ……！」
「ああ、多分……洗脳されてる！」
やったのは勿論、プレシアか！

「グルルルル……」
だがアルフは、身構える俺たちの横を素通りしていった。
「まさか……！」
俺たちは、眼中に無かった。アルフの狙いは、最初から……！
「ユーノ！　逃げろおおおおおお！！」
結界を維持しているユーノと、サポートの魔導師！
「え？」
結界に集中していたユーノに、アルフが襲い掛かり……くそ、間に合え！
「ファイア！」
――キュドドドド！
バレットを乱射する。普通なら、回避するか、防御するしかない

攻撃に、アルフは……
「ガアアアアア！！」
「何ッ！？」
真正面から、突っ込んでいった。非殺傷設定にしてあるとはいっても、衝撃は通る。それを全く恐れない……いや、俺の攻撃なんて、最初から気付いていないように、ただ直進していった。
「うわっ！！」
ユーノは防御魔法を発動し、なんとかアルフの攻撃を回避する。だが、他の魔導師は……！
「うわああっ！」「ぎゃっ！」「……ぐっ！」
爪で引き裂かれ、顔面を殴打され、腹部を蹴り上げられて、それぞれ戦闘不能に。
同時、結界が『ぐにゃっ……』と揺らいだ。
結界を維持していた魔導師が、ユーノ一人になってしまった所為だ。
「このままじゃ……エイミィ！」
クロノが声を張り上げる。すると、
――ヴンッ……
「……持ち直した？」
一度は揺らいだ結界が、また元通りに強度を取り戻す。
『仮想空間リソース分だけ、結界の強度を上げたの』
仮想空間の制御が、完全に分離してしまったことが吉と出たらしい。

アルフは、結界魔導師を倒すだけ倒し……再び、俺達を襲う。
「縛れ！」『ｒｉｎｇ　ｂｉｎｄ』
クロノがバインドを行使する。
青白い魔力の枷がアルフの四肢を縛り上げ……
「ない！？」
なんと、バインドはアルフの体表に触れた途端、ぼそっと崩れる。
なのはのように、術式を分解した……というわけではなさそうだ。

そもそも、そんな器用なことが出来る精神状態ではない。
「君たちの世界で言うところの……ドーピングだろう」
アルフに施された強化は、恐らく二つ。
一つは、魔法を無効化すること。さっきもそうだったが、射撃魔法のような初歩的な魔法すら防げていないところを見ると、バインドだけを無効化することに特化している処置のようだ。身体を守ることなど考慮に入れていない、偏った術式。
そしてもう一つが、痛覚の麻痺……というより、遮断。正気をほぼ失っていることから見て、興奮剤を大量投与し、アドレナリンのような神経伝達物質を過剰に分泌させているのだろう。
だが、もしも薬物ではなく、大脳を外科手術で処置されていたとしたら……
「アルフ……！」
俺は、最悪の予感に唇を噛む。
この、主のことだけを想ってきた優しいオオカミを、なんとしてでも救ってやりたい。
「どちらにせよ、手遅れになる前に鎮圧するんだ！」
威力を抑えた誘導弾でアルフを牽制しつつ、クロノが言う。
「でも、どうする！？
バインドは効かないし、ダメージでノックダウンできたとしても……多分、鎮圧できる頃には手遅れだ！」
アルフが動きを止めたとき……それは、俺たち全員を倒すか……肉体が自壊し、構造的に動けなくなった時だけだろう。手足をへし折っても、『痛み』を無視できるのであれば、まだ動けてしまう。
編み出したばかりの、あのカウンター技は使えない。
加減ができないのだ。
今の俺には、あの技を『繰り出す』だけが精一杯で、『威力を抑え

る』なんて段階には達していない。
なにより、失敗すれば、それだけで俺が戦闘不能になってしまう。
チョークスリーパーで締め落とそうにも、興奮しきったアルフには効果が無いだろう。
「一か八かの賭けになるが……」
「言ってみろ！　……おらァ！」
武装隊の一人に飛び掛っていくアルフを蹴り飛ばしながら、クロノの案を聞く。
「ストラグルバインドを使う」
ずるっ、と思わずずっこけてしまった。
「アホかお前は!?　バインドは効かないんだっての！」
「誰がアホだ！　話を最後まで聞け！
この魔法は、相手を拘束するものじゃなく、解呪するための魔法だ！」
要はアレか。凍てつく波動か！　それなら、確かに！
「もしも、その興奮剤が魔法を用いて調合された物なら……きっと、打ち消せる」
なぜ最初から使わなかったのか……その理由は。
「だが、もし興奮剤が化学的に調合されたものだったり、外科手術が原因だとしたら……空振りになってしまうどころか、かえって症状を悪化させてしまう可能性も……」
いまさら、悩むことなんて無い。
「俺が押さえつける。その隙を狙え」
締め落とすのは無理だとしても……クロノが魔法を発動させるまでの数秒だけなら、俺の腕力で押さえつけることが出来るはずだ。
まさかプレシアも、バインドを使わずアルフの馬鹿力を押さえ込める人間がいるとは想定していないだろう。
「だが……下手をすれば」
大怪我をする……って？

「忘れたのか？　俺の身体は……」
身体を、深く沈める。四つんばいに近いまでの、前傾姿勢……クラウチングスタート。
「グアアアアアッ！！」
牙をむき出しにしたアルフが、今度は俺たちを標的として襲い掛かって来る。

「そういうふうに、できてるんだよ！！」

――ゴバッ！！
ビルの外壁をスターターに、突撃する！
「おりゃあああああ！！」
「ガアアアアアッ！！」
アルフが繰り出す拳と、俺の蹴りが、正面から激突した！
「グルアァッ！！」
五指を開いた、鋭い爪による一撃。
「んぐっ……」
それを、わざと首で受け止める。
「ガアアアッ……！」
「はッ……あ」
ギリギリと万力のように首を締め上げるアルフ。だが、これでいい。
俺の前に、無防備に差し出された腕を掴む。
ぐりん、と一回転させ……
「大人しく……しろっ！」
――ダンッ！
ビルの屋上に、身体ごと押さえつける。肩をがっちりと極めてあるせいで、アルフは思うように身動きが取れない。
「よし、このまま……！」
だが、アルフはそこで、信じられない行動を取った。

「アアアアッ！！」
肩を拘束されている方向に、力いっぱい捻り……
――ボギンッ……！
「な……何やってんだ！」
「グアアッ！」
――ドズンッ！
「ぐえっ！」
呆気に取られた隙に、ボディブローを喰らってしまった。
「グルル……！」
俺が極めていたアルフの右肩……そこは、赤黒く腫れ上がり、力無くぷらぷらと垂れ下がっていた。
どうかしている。拘束から逃れるために、躊躇いも無く腕を捨てるなんて！
「……くそっ」
きっと、四肢を個別に固めるだけでは押さえられない。
全身を、一気に縛り上げることができれば……
アルフの猛攻を防ぎながら、方法を探す。飛行魔法を駆使し、無人の街を飛び回り、工事現場の上を通り……工事現場？
「あれだ！」
工事現場の一角に放置されていた、高所作業員の命綱！
あのワイヤーなら……力で千切ることは出来ないはずだ！
「インパクト！」
――ドパァン！！
「ガウッ……」
衝撃波でアルフを弾き飛ばし……よし、ゲット！
がちんっ……とベルトを腰に巻く。準備完了！
「クロノ！　他の奴らを連れて、一旦引け！」
アルフの目に映る敵が俺一人なら、俺をひたすら襲い続ける。
――ブンッ、ブオンッ！
大振りの攻撃を、スウェーバック、ダッキングで避け続ける。

突き出された左拳。その左手首にワイヤーのフック部分を引っ掛け……

「グルアアアアッ！！」

――ブォンッ！！

「っと！？」

途端、今度はハイキックが飛んできた。でも……その足、もらった！

蹴りの軸足を払い、その場に転倒させる。

「ギャウッ！」

ずでん、と尻餅をつくアルフを逆マウントに固め、両手、両足を胴体と結びつけて固定する。

恐らくミッドチルダでは、魔法という便利極まりない技術が浸透しすぎて、こういったアナログな手段には耐性が低いのだろう。

『バインドされなければ捕まらない』なんて、本気で考えてしまうくらいには。

「オラオラオラ！　ドカタ暦3年は伊達じゃねえぞコラ！」

ワイヤーでぐるぐるの簀巻きにする。怪力を発揮しようにも、力を出すことが出来ない体勢にしてしまえば、あとは……

「クロノ！」

俺の後方で、術式を編んでいたクロノが、それを発動する。

――ギュウウウッ……！！

とうとう、アルフの身体に、青白い拘束魔法が巻きついた。今度は、分解されることは無い。

「ストラグル……バインドォッ！！」

トリガーボイスと共に、バインドが一層強くアルフの身体を締め上げ……

「ゲホッ……！！」
アルフが、口から何かを吐き出した。どうやら、幸いなことに魔法薬だったらしい。
抱き起こし、顔を覗きこむ。
「……え、あ？」
開きっぱなしだったアルフの瞳孔が、焦点を結ぶ。
「アルフ、俺が分かるか？」
見詰め合うこと、数秒。
「あ、あんた……？」
アルフは、ようやく俺の顔を認識した。
「よかった……正気に戻ったんだな」
これでひと段落。そう思っていた矢先のことだった。
「は……離れろ！」
――ドンッ！
いきなり、アルフが俺を突き飛ばした。
「うあああああ……！！」
突如として、アルフ苦しみだす。その身体から、明らかにアルフのものとは別の、禍々しく、膨大な魔力がにじみ出てくる。
「おい！　何が起きてるんだ！？」
通信の向こうで、エイミィの困惑するような表情が目に浮かぶ。
『アルフの体内に、高密度の魔力結晶が埋め込まれてる……』
魔力結晶……？
「つまり……爆弾だ」
クロノが、苦々しくそう言った。
「爆弾だって……？」
『きっと、アルフの魔法薬の効果が破られると、発動するように設定されて……』
そう。知恵の働くプレシアが、ストラグルバインドのことを想定していない筈が無かったのだ！　俺は、自分の迂闊さに腹が立った。
「くそっ！」

アルフに一歩歩み寄る。
『駄目！　逃げて、秀人くん！』
逃げる……？　今にも体内の爆弾が破裂しそうになっているアルフを放って？　冗談じゃない！
「逃げ……て」
ぼろぼろになったアルフが、諦観の表情を見せた。
「仕方ないんだよ……爆弾は、体内に埋め込まれている……」
「『仕方ない』で……見捨てられるわけないだろうがっ！！」
エリアサーチを応用し、探索魔法をアルフの体内に発動させる。
場所は……くそっ、肋骨の内側！　心臓の真横だ！
――ビリッ……
アルフの胸元をはだけさせる。今まで服に隠れていたが、真新しい縫い目が、その肌に痛々しく刻まれていた。
「なにを……」
『秀人君、何をするつもり！？』
決まっている。
「俺が……今ここで、爆弾を取り出す！」

第十八話（後書き）

、、、なんか、医学漫画のノリになってしまいましたね。
ごめんなさい。

なのは達の出番は、まだ先になりそうです。

第十九話（前書き）

オーメダル買い占めた人、怒らないから手を挙げなさい。

第十九話

『この場で爆弾を摘出する』

俺がそう言った途端、クロノが、エイミィが、猛烈な勢いで反対してきた。

『無茶だよ！　麻酔だって無いんだよ！？』

「俺は絶対に……誰も見捨てない」

『でも』

「ここでアルフを見捨てたら……もう、俺は二度とフェイトに顔を合わせられない」

最初は、ただの敵だった。

でも、彼女達にも譲れない事情があったことを知った。

フェイトが、なのはという好敵手を見つけるまで、懸命に、献身的に……たった一人でフェイトを支え続けてきたアルフ。

彼女にも、主と共に幸せになる権利があるはずだ。

こんな、ふざけた結末があっていいはずが無い！

ユーノは、結界の維持で精一杯だ。今ここで結界が破られたら、現実世界にまで破壊が広がってしまう。だから、ユーノの手を借りることはできない。

「クロノ。武装隊の中で、麻酔か何か使えるやつはいるか？　結界魔導師でもいい」

ユーノの代役ができるようなヤツが要れば……

「すまない……医療班は、アースラにしかいないんだ。それに、今アースラとは、通信するだけで精一杯で……」

まぁ……そうだよな。医者を最前線にまで引っ張ってくる奴はいないよな。

やっぱり、俺がやるしかない。

俺も、一応痛み止めを使える。使うのは、よく世話になっていた術式。

――ヴン……

足元に、魔法陣が展開する。

大丈夫だ。ちゃんと身体が覚えている。

「アルフ」

手刀に、極小の魔力刃を展開。設定を変更し、物体への干渉力を持たせる。

「もう一度、フェイトに会いたいか？」

「あたし、は……」

アルフは、一瞬だけ言葉に詰まる。きっと、助かりたいという願望と、助からないという諦観が、一瞬だけせめぎ合っていた。

「言っておくが、俺の痛み止めなんて、せいぜい二日酔いを抑える程度だ。死ぬほど痛いぞ。それでも、やるか？」

軽く脅しを掛ける。

だが、アルフの答えは、最初からたった一つ。

「私は……フェイトに、会いたい……！」

「……ああ、俺に任せろ」

これで、迷いは無くなった。

「行くぞ。我慢してくれ」

「……ん」

こくん、と頷くアルフの腹に、魔力刃のメスを当てる。そして、

――ずりゅっ……

「ぐうゥっ……！」

体内にメスを滑り込ませた瞬間、アルフの顔が苦悶に歪む。俺の身体に爪を立て、歯を

食いしばる。麻酔で多少は緩和されていても、体内の異物感だけは消せない。

――ぐっ……ぐりゅっ……

腹部から肋骨へ向け、内臓を傷つけないよう、慎重に、慎重に進める。

「がァァ……！　うあああああああ……！！」

ぽろぽろと涙を零し、アルフが呻く。

「頑張れ……！　もう少しだから……！」

焦ってはいけない。だが、爆弾のリミットはもうすぐそこまで迫っていて……

肋骨を抜け、心臓の横に指を伸ばし……！

――コツッ……

「あった！」

俺は、ソレを慎重に指先で摘み……

――ずりゅっ！

引きずり出す！

「うあああっ！！」

引き抜いた手に、魔法文字の刻まれた、八角形の水晶のような無機物があった。それは、危険な輝きを放ち、徐々に、徐々に光を強くし……！

『駄目だ！　その威力じゃあ、結界のどこで爆発しても……！』

なら……

「クロノ！　ユーノ！　アルフを頼む！」

――ドンッ！

一足飛びに、ユーノ達と距離をとる。とにかく、被害が広がることを防がなくては。

結界の中央に座し、集中させた魔力を、両腕ごと筒状に固定。

「すううう……はあぁ……」

深呼吸を一つ。そして、レイジングハートの講釈を、脳裏に再生する。

『魔力によって『筒』を形成し、その爆発のエネルギーを内部に通すことで指向性を与える。これが、直射型砲撃魔法です』

爆弾のエネルギーに指向性を与え、ただの『超高威力の砲撃魔法』に変えてしまうことができれば……被害は最小限に収まる。

「苦手でも、練習しておくもんだな」

筒……『砲身』を、より長く、より頑丈に構築していく。長くすればするだけ、地上への影響は少なくなる。だが、強度との折り合いを付けなければ、『砲身』はあっけなく破壊されてしまう。

そして、光が臨界に達し……

――キュゴオオオオオオオオオォォォォォッッ……！！

爆弾が、爆発した！

「うがあああああああああああああああああああああああああああああっ！！」

凄まじい衝撃に、俺は無意識のうちに悲鳴を上げていた。

「ぐううううっ……！！　うおおおおおお！！」

制御どころの話ではない。俺には、手元の『砲身』を維持するだけでも一杯一杯だ！

凄まじい光の柱が、天頂に向けて屹立する。
――ビキビキビキッ……！
「あぐっ……くそおお！！」
とうとう、罅が入ってしまった。
その罅割れた『砲身』の隙間から、破壊力の余波が漏れ出し……
――ボンッ……！

「あ……」
目の前を、血色の何かが、横切った。見覚えのある、千切れた五本の指と、それを伴っていた掌だった。

――俺の右手首から先が、バラバラに吹き飛んでいた。

「……ぐあああああああ！！！！」
もう、目の前がどうなっているかも分からない。吹き飛んだ右手から、左手に魔力を集中し直し、『砲身』を維持し続ける。

クロノとユーノが、必死な顔で俺を援護しようとしている。
が、ユーノはアルフの傷の止血と、結界の維持で手一杯。クロノも、暴風のように荒れ狂う破壊力の渦に邪魔され、近づくことすら出来ない。
（……それで、いい）
俺が無事に人間の姿を保っていられるのは、自身の肉体の恩恵があるからだ。もし、普通の身体だったなら……最初の爆発だけで、粉々に吹き飛ぶどころか、塵になって消滅していた。
だから、これは……俺にしかできない役目だ。

「くおおおおおおおおおおおお！！！」
即席の砲撃は、結界上部に大穴を開け、現実世界の雲を突き破り…
…成層圏をも突破している。

――ギュウウウウウゥゥ……ゥゥン……

永遠のようにも、刹那のようにも思える時間が、ようやく終わった。
「……う」
左手に、じゃりっとした感触。どうやら、気付かぬうちに倒れていたらしい。
目蓋を上げても、目の前が真っ白だった。どうやら、網膜をやられたらしい。
（爆弾は……？　皆はどうなった……？）
光に焼かれた網膜が徐々に回復し、周囲の景色が目に飛び込んでくる。
俺の周囲数十メートルは、かなり酷い状態だ。だが、そこから先は、ごく普通の町並みだった。つまり……うまくいった、ということだろう。
「……！　で……！　……でと！　……秀人！！」
続いて鼓膜が再生し、音を拾う。
「秀人ォ！！」
ユーノが駆け寄ってくる。
「よう……」
と、軽く身体を起こそうとして……先延ばしにしていた限界が訪れた。
「ぐ……あぁ……！」
あ……駄目だ。立てない。

よろけたところを、クロノに助け起こされる。
「あ……アルフは？」
それに答えてくれたのは、ユーノだった。
「大丈夫だよ。傷は深いけど、内臓には一切傷が付いていないから、簡単な止血と縫合で、アースラと合流するまでは持つ」
「そっか。よかっ……たぁ」
意識が一瞬だけ飛びかけた。

「……」
クロノ達アースラの面々が、俺を……正確には、俺の右手を凝視している。
あー……そういえば、吹っ飛んだんだっけ。
ってことは、今まさに再生が行われている最中で……
「ははっ……」
やっぱり、何人かは気味が悪そうにしている。そりゃあ、そうだよな。
でも……嫌われるのは、嫌だなぁ……
そんな弱気なことを考えていたら、ユーノが……自分の身体を盾にするように、視線を遮った。
「全く……いつもいつも、無茶ばかりだね、キミは」
「悪いな……でも、いまさら変えられないんだよ」
自己満足言われようと……俺の馬鹿は、直るようなものじゃないらしい。

「もう、大丈夫だ……多分」
何とか、立ち上がれるくらいには……よいしょっと。
――ごりっ……
「……ごり？」
地面に突いた右手に、違和感。何か、手がゴリゴリする。
恐る恐る、再生したばかりの右手を見る。

「……なんじゃこりゃあああああああああああ！？」

恐らく、骨格や筋肉を再生する際、巻き込まれてしまったのだろう。

俺の手の甲に……爆弾として使われていた瞳のような結晶体が、同化していた。

「取って！　これ取って！」

ぐいぐいとユーノに手を押し付ける。が。

「あ、あはは……ごめん、無理っぽい」

ユーノは、諦め気味の半笑い。

「神経系どころか、魔力のラインまで、ガッチリ癒着してる。多分、外科手術で取り出しても」

「取り出しても？」

「どこからともなく戻ってくる」

「怖！」

呪いのアイテムに取り憑かれてしまった！

「はぁ……」

俺達をあきれた目で見つつ、クロノがアースラと通信する。

「エイミィ、そろそろ回収を頼む」

『……』

が、エイミィからの反応は無い。

「エイミィ、どうした？」

『……』

空気が、緊迫していく。そして。

――ブオオオオオオオオオオオオオオオ……！！

紫色の魔法陣！

「来るぞ！」

敵の第二陣だ！
『オオオオオ……』
魔法陣から出てきたのは、中世の騎士を模したような……巨大なロボットだった。
大きいが、力はそんなに強くない。ここにいる武装隊だけで、簡単に駆逐できるだろう。だが……
――ヴン、ヴン、ヴン……！！！
転送魔法陣の数は、二つ、三つ、四つ……！！！
「嘘……だろ……」
武装隊の一人が、絶望的な声を上げた。
結界内を埋め尽くす……巨人の軍団。数は、十や二十では利かない。
まさか、アースラとの『通信だけ』が通じていたのも……今になって通信が遮断されていたのも……全て、この絶望感を味あわせるための、プレシアの策。
プレシアは、俺がアルフを助け、爆弾を処理することまでも想定していたのか！
母艦との連絡は取れず、戦力はガタガタ。怪我人を何人も抱え、退却することも叶わない。そんな状態で、大量の敵と戦う……正に、絶体絶命だった。
――からん……

誰かが、デバイスを取り落とした。それを皮切りに、
「くっそおおおおおおおおお！！」
「ま、待て！　体勢を立て直してから……！」
クロノの制止も空しく、武装隊の一部の面々は……敵の機械兵へ、無謀に特攻していった。

一人、また一人と倒れていく武装隊の面子。
特に、年齢が若そうな奴ほどクロノの指揮を聞いていない。ただがむしゃらに、自暴自棄に、敵兵に突っ込んで、撃破されていく。
「くそッ！　世話が焼ける！」
爆発の余波で転がっていた、俺のバイクを起こす。
「ユーノ、アルフを頼んだ」
――キュルルル……キュルルル……
掛かれ、掛かれ……！
――キュボッ！
よし、まだ動く！
「秀人！？　無茶だよ！　身体は大丈夫でも、魔力が殆どすっからかんじゃないか！」
ユーノが俺の手を掴み、引き止める。
「怪我人を背負って逃げるくらいはできる！」

フェードアウトしていくユーノの声をバックに、駆け出した。

「うわあああああっ！？」
『オオオッ！！』
今まさに、振り下ろされようとしていた大剣。
「させるかあああああっ！！」
――ズギャギャギャッ！！
バイクごと横滑りし、局員を抱える。
――グリッ！！

自らハイサイドを起こし、片腕で強引に車体を立ち上げる。
――ドドドドッ！！
俺がギリギリで避けた場所に、無数のエネルギー弾が着弾した。
「す、すまない、助かっ……」「この馬鹿野郎！　クロノの指示に従え！　それができないならすっ込んでろ！」
勝手に行動して、それが結果的に部隊を危険に追い込んでいる事に気付いていない。全く……こんなヒヨっ子を最前線に送るなんて、時空管理局って組織は何考えてんだ！
ビルの裏にポイ捨てし、また新たな馬鹿を拾いに行く。
何人かを拾い、物陰に放り捨てる。

だが、あくまでもその場しのぎにしかならない。
何せ、敵は一向に減っていないのだ。
「くそ……魔力さえ回復すれば……！」
魔力さえ……魔力？
右腕に目をやる。甲に埋まった、八角形の水晶のような結晶体。
膨大な魔力を蓄積していた結晶体。
「ひょっとして……」
意識を右腕に集中する。
――どくん……
「！！　やっぱり！」
まだ、魔力が残っている！
あの爆発に比べたら劣るが、俺の魔力を満タンにするくらいには！
「はあああ……」
右腕から、ポンプのように魔力を吸い上げるイメージを描く。
乾ききっていたリンカーコアが、徐々に潤っていく。
『オオオオオ！』
一体が、巨大な戦斧を振り下ろし……
「せー、の！」
――ズドォン！

『アアアアア……！！』
衝撃波に、粉々に砕かれた。
「よし！！」
復活！　プレシアの奴、置き土産で墓穴掘りやがった！
「行くぞこの木偶野郎オオオオオ！」

『　『　『　ゴオオオオオ！！　』　』　』
飛行タイプ・騎士タイプ・重騎士タイプ。それぞれが、上空からエネルギー弾を撃ち、槍を突き出し、戦斧を振り下ろす。
バイクを飛び降り、スライディングで回避する。

「そりゃあああああっ！！」
――バッチイイイイイン！！
『ウグオオッ！？』
掌打でエネルギー弾を弾き返し……
「せえええいっ！！」
――ガギョンッ！！
『グアッ！？』
渾身の撃ち下ろしで槍を殴り壊し……
「ディバイン……バスター！！」
――バゴオオンッ！！
『グオオオオオオ……！！』
砲撃で、重騎士の胴体をブチ抜く！

――ゴゴゴン……！！

三体が同時に爆発する。

「……っしゃあ！」

魔力の集中をかなり遅いスピードで行ったおかげで、身体への負担は少ない。ロボット兵どもの動きが、クロノやアルフに比べて緩慢なことが幸いだった。

地面に転がったままアイドリングしていたバイクに飛び乗り、再び走り出す。

「クロノ！！」

低空を飛行していたクロノに併走する。

「ヒヨっ子は全員避難させた！　武装隊の状況はどうなってる！？」

苦々しく眉間に眉を寄せる。

「……ほぼ全滅だ。ベテランの局員も、若手のフォローをしている内に……」

「……そうか」

残っているのは俺とクロノだけか。

俺も魔力が回復したとはいえ、あれだけの数を相手にし続けるのは無理そうだ。

『オオオオ！！』

目の前に、重騎士タイプが立ちふさがる。

「「邪魔だ！！」」

――ドゴンッ！！

クロノの砲撃が戦斧を握る腕を破壊し、バランスを崩した胴体を、インパクトで打ち砕く！

「お前、魔力残り何パーセントだ！？」

「３８パーセント。一応、まだ戦えるが……」

クロノの魔力の最大値は、俺やなのはの半分以下。長く戦えば戦うほど、不利になっていく。俺には魔力があるが、それを効率よく使うのが下手だ。

燃費とコントロール性に優れるが、パワーに乏しいクロノ。

パワーはあるが、燃費とコントロール性が劣悪な俺。

要は、俺とクロノを足して、2で割ればいい。

（……アレを、やるか）

あの時はただ夢中で、殆ど無意識だったけど……一度やれたなら、きっと！！

――ヴィイイイイイイイイ……！！

足元に、ミッド式魔法陣を展開する。

あの時の人数は、五人。さすがにレイジングハートの性能をフル活用しなければできなかったが……今回は、たったの二人だ。きっと、俺だけでも出来る！

ミッド式魔法陣。それを構成するうちの直線が、一本のラインになる。よし……このまま！

「クロノ！　行くぞ！」

「は！？」

慌てて振り向くクロノに……

「繋がれ！」

――バシュウウウッ！！

そのラインを、クロノの身体にブチ当てる！

「うわっ……！　何をした！？」

俺とクロノの間を、一本のラインが結んでいる。

「見てればわかる！」

目の前に、再び複数のロボット兵が現れる。数は４！

「借りるぞ！」

苦手だった砲撃魔法のコントロール。それが、驚くほどスムーズに行える。

「ブレイズキャノンッ！！」

――バゴゴゴッ！！
発射された四発の砲撃は、狙い違わず、四体のロボット兵の胴体を、頭部を、粉砕した！！
「……僕の魔法を使ったのか」
唖然とした様子のクロノ。
「お前もだ！　行け！」
「あ、ああ！」
そして、Ｓ２Ｕを構え……
「スティンガースナイプ！！」
本来ならば、牽制が主な目的の誘導弾は……

――ギュガガガガガンッ！！！！

敵の６体を、一瞬で撃破し尽した。
「……は？」
撃った本人が一番驚いている。
「何だ、このパワーは……！？」
「……すげえだろ、俺の魔力」
「君の……？　まさか」
「ああ。……リンカーコアを同調させた」

俺はクロノと魔力を共有し、クロノは俺と処理能力を共有している。

そう。俺があの時、４つのジュエルシードを完全封印した時に使ったのも、この方法だった。それぞれが勝手に、バラバラに魔力を放出してはロスが生まれる。

多気筒エンジンと同じだ。
完全な同調が取れた多気筒エンジンは……同排気量の単気筒エンジ

ンよりも、数段上の　スペックを引き出すことが出来る！

今この瞬間、俺とクロノは……二人で一人の魔導師だ！

「行くぞ！」「ああ！」

俺は拳を。クロノはＳ２Ｕを構え……敵陣の真っ只中へ……！

「「　うおおおおおおおっ！！　」」

突撃だあああああああ！！

第十九話（後書き）

秀人の謎魔法については、副作用のない超電磁砲のレベルアッパーみたいなものを想像してください。

第二十話（前書き）

久方ぶりの二人娘編です。
劇場版ＡＳ製作決定しましたね。楽しみです。

第二十話

「ありえない！！」

薄暗い庭園の中、プレシアは傷んだ髪の毛を振り乱し、絶叫する。

「ありえるわけがないわ！！」

必勝の策だった。途中までは、思うようにいっていた。だが、あの少年がアルフに仕掛けた爆弾を処理した時には少々驚いたが、それも十分に想定の範囲内だった。

事実、少年は魔力を使い果たし、傀儡兵の大群を前に、屈しようとしていた。

あとは、仮想空間を砕き、消耗しているであろう白いバリアジャケットの少女から、悠々とジュエルシードを奪い、それで終わるはずだった。

なのに。あの少年はあっさりと蘇り、あまつさえ……

「リンカーコアを他者と同調……いえ、接続する……？　そんな馬鹿なことが！！」

だが事実、今も手元に表示される映像の中では、少年は執務官と共に、鬼神のような戦い様で傀儡兵を駆逐している。

針の穴を通すような精密さと、山をも砕きかねない威力を両立させた、ふざけた力で。

生粋の技術者たるプレシアが、集団での戦闘能力と、同時操作をひたすら追求した攻撃兵器が、紙くずのように！

「う……おげえええええっ！！！」
――ビチャビチャビチャッ……
プレシアの口から、大量の血液と、胃液が混ざった液体がこぼれ出し、床を汚した。

「あああああ……！」
ふらふらと覚束ない足取りで、玉座の裏にある隠し扉を開く。
「どうして、皆邪魔をするの……！？」
がん、がつん、と壁や柱に身体をぶつけながら、そこへと歩を進める。

「私はただ……もう一度取り返したいだけなのにいいいィィ！」

叫ぶだけ叫び、先ほどまでの狂乱が嘘だったかのような、穏やかな笑みを浮かべる。
目の前には、溶液に満たされた巨大な水槽にたゆたう、幼い少女。
「ああ、ごめんなさいね。ビックリさせちゃったかしら？」
もう二度と返事などすることが無いであろう、水槽の中の少女に語りかける。
「大丈夫よ……お母さん、頑張るから。だから、待っていて頂戴……」
彼女の、名を。

「アリシア」

……四文字の、娘の名を。

◆　◆　◆　◆

「はあああああっ！！」

一気呵成になのはに肉薄し、鎌を振るう。
――ガギィンッ！！
なのはが展開したシールドが、それを阻む。
やはり、硬い。なのはの防御は、フェイトの渾身の一撃を受けきった。
『Ｈｏｌｄｉｎｇ　ｓｈｉｅｌｄ』
バルディッシュの光刃が、シールドに噛まれる。
「くっ……！」
以前、このパターンで痛い目を見た。フェイトはすぐさま光刃を解除。
『Ｂｌｉｔｚ　Ａｃｔｉｏｎ』
高速移動魔法で、必中の間合いから脱出する。そして……
『Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｂｕｒｓｔ』
――バゴォン！！
爆風に弄ばれ、一瞬だけ体勢を崩したところに、
「ディバイン……バスター！！」
桜色の砲撃が迫る！
「な……めるなあああああああ！！」
フェイトは、不安定な体勢から敢えて加速。とにかく、射線上から自身を外すことだけを考える。結果、建造物のレイヤーに身体がぶつかり、少ないないダメージを受けたが、砲撃の直撃を喰らうよりはマシだった。
「しまっ……！」
砲撃を撃っている最中、なのははその場に足止めされる。
「もらったあああああ！！」
ディバインバスターとすれ違うように、再びなのはに迫る。
『ａｃｃｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ』

「シュート！！」
牽制の誘導弾。
フェイトは、バルディッシュを振りかぶり、
『Ａｒｃ　Ｓａｂｅｒ』
光刃をブーメランのように発射。
「いっけえええええええええ！！」
光刃は、なのはの放った誘導弾を纏めてぶった斬る！
飛び続ける光刃は、なのはの真正面。それは恐らく、簡単に防がれてしまうだろう。だから。
（挟撃！）
得意の高速移動でなのはの背後を取り、バルディッシュによるショックブローを……シールドの展開より速く、叩き込む！
『Ｆｌａｓｈ　ｍｏｖｅ』
だが、その攻撃は空振ってしまう。
「なっ！？」
いきなり目の前から消えた。そして、
「高速移動は」
聞こえる声は、背後！！
「フェイトだけが使えるわけじゃないんだよ！」
『Ｆｌａｓｈ　Ｉｍｐａｃｔ』
「このおおおっ！！」
――ギンッ！！
バルディッシュで、背中をガード。それが功を奏し、なのはの打撃は不発に終わる。
「お返し……だッ！！」
振り向く回転動作に、攻撃を乗せる。
横薙ぎの一撃！
「チッ……！」
『Ｓｏｌｉｄ』

ソリッド。なのはは、物質強化魔法でレイジングハートの柄を強化し、
「「はあああああああああっ！！！」」
――ッギイイイイイン！！！！
火花が出るほどの勢いで、ぶつけあう！
『Ｉｍｐａｃｔ　！』
『Ｐｈｏｔｏｎ　Ｂｕｒｓｔ　！』
そして、示し合わせたように、衝撃波で互いを間合いから弾き出す。

「はぁっ……！！」
肺いっぱいに酸素を吸い込み、眼前を見据える。
白いバリアジャケット。同色の杖。
……自分より小さい女の子。
（強くなってる……前より、確実に！！）
だが彼女は、圧倒的な威圧感を放ちながら、フェイトの前に立ちふさがっている。
（おかーさん……！）
だがフェイトは、母への想いでその重圧を跳ね飛ばす。
（また二人で、ピクニックに行くんだ……！）
記憶が、フラッシュバックする。
見渡す限りの草原。そこにシートを広げ、母とたくさん話をして……また優しく、自分の名を呼んでくれるのだ。そう、『フェイト』と……

『アリシア』

「……え？」
ぱきん、と、何かが割れた。そして、堰を切ったように、今まで曖昧にしか聞こえなかった……いや、聞こうとしてこなかった四文

字が、母の声で再生される。

『おいしい？　アリシア？』

『アリシアは、甘えん坊さんねぇ』

『アリシア』

『アリシア』

プレシアが呼ぶのは、フェイト以外の誰かの名前。

（おかーさん……違うよ。ボクは、ボクは……）

あの、優しい笑みは……一体、誰に向けられたものだった？

フェイトは、ぶんぶんと首を振る。

（どっちでも、いい！）

自分が『フェイト』でも、『アリシア』でも。

（おかーさんが笑ってくれるなら、ボクは！！）

そのために、ただ全力で……目の前の敵を、打ち砕くだけ！

「行くよ……！！」

『Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ』

発動するのは、フェイトが最も得意とする攻撃魔法。だが、その規模は……フェイトの側面、数十メートルにまで魔力スフィアを展開する程だ。

「……やばっ」

なのはは、すぐさま危険を察知し、射程外への退避を試みる。が。

――ガチンッ……

「あっ、しまった！」

バインドにより、両腕を拘束されてしまう。

『Ｐｈａｌａｎｘ　Ｓｈｉｆｔ』

フォトンランサー・ファランクスシフト。

『個々の威力に劣る分を手数でカバーする』というフェイトの戦術理念を反映した、フェイト最強の攻撃魔法である。

いかなる防御であろうとも、３８の魔力スフィアによる一斉掃射を受ければ削りきり、落とす事ができる。そう自負している。

「これが！」

フェイトは詠唱を終え、空中に磔にされるなのはを睨み付ける。

「ボクの！」

そして、バルディッシュを振りかざし……！！

「全力だあああああああああああ！！」

――キュドドド

――ガガガガガガガガガ……！！
すでにその数は、三桁の大台に達している。
残った数十発分のフォトンランサーを、手元に収束する。
「スパークウウウウゥゥゥ……！！」
それは、魔法の名のとおり、槍のように固定化される。
長さは、五メートルもあろうか。
フォトンランサー・ファランクスシフトの、決定打！
「エンドオオオオオオオオオオオオオ！！！！」
投擲された槍は、吸い込まれるように……
――ズッゴオオオオォォォォォォォンン……！！！
なのはに、突き刺さった！！
「はぁー……はぁー……！　ど、どうだ、参ったか……！」
四秒間の一斉掃射。総数にして、１０２８発ものフォトンランサー。さらに、トドメの一撃まで、クリーンヒット。間違いなく直撃した。
煙が晴れたそこには、ズダボロになったなのはが、海面に向かって落下している筈だった。
だが。
フェイトの宿敵たる彼女。高町なのはは。
「……うそ」
健在だった。

当然、無傷とはいかない。
バリアジャケットは原型を留めないほどに破壊され、露出した素肌は、打撲による内出血で浅黒く変色している。レイジングハートにも、あちこち亀裂や欠損が見受けられる。

だが、確かに立っている。

「今度は」
静かな声。それに、フェイトは思わずビクッと身をすくませる。
「こっちの番！！」
『Ｃａｎｎｏｎ　ｍｏｄｅ』
ぎしぎしと、可動部分に破片でも入り込んだのか、ぎこちなく変形を行う。
「避けたいなら、避けていいよ」
その減らず口にカチンときた単細胞なフェイトは……
「来い！　このやろー！！」
バルディッシュを目の前にかざし、防御魔法に目いっぱい魔力を注ぎこみ、強度を上げていく。
『Ｓｉｒ．』
バルディッシュが警告を促す。
「うっさい！」

……その向こうで、なのはが……『掛かりおった！』とでも言いたげに『にやり』、もしくは『にんまり』と笑っていたことについては、言及しないでおこう。

「ディバイン……！！！」
――チュイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ……！！
「う、う……」

チャージが、長い。フェイトの脳裏に、じわじわと後悔が浮かんでくる。

（逃げてれば……よかったかなぁ……？）

顔を引きつらせながら、自分の選択に首をかしげるのだった。

『……Ｇｏｏｄ　ｌｕｃｋ』

バルディッシュの返答も、どこか投げやりだった。

「バスターーーー

一秒。グローブが砕けた。
二秒。スカートが千切れた。
三秒。マントが消し飛んだ。
四秒。バルディッシュに亀裂が入った。
五秒。瀑布が、収まった。

「……くっ、あはははは……！」
耐えた！　耐え切った！
フェイトは、思わず哄笑する。
『Ｒｅｓｔｒｉｃｔ　Ｌｏｃｋ』
――バキィン！
「……あ？」
その両足、右手に、桜色のリングが巻きつく。

「どこを見ているの？」

聞こえる声。それは、遙か天空から。
見上げた先。そこに、高町なのはが、レイジングハートをこちらに向け、佇んでいた。
「は……ハッタリだ！　もう、魔力なんてカラッポのくせに！」
バインドを力ずくで解除するだけの力は、残っていない。持続時間いっぱいまで、この場に拘束されることは、確定している。
「魔力なんて」
なのはは、笑みを崩さない。
「そこらへんに、いくらでもある！」
その言葉に呼応するように……

『Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ　！』

「使い切れずにばら撒いた魔力を……」
円環が、回る。
「もう一度、自分の下に集めて、再利用する……！！」
自分に確かめるように、言葉を反芻する。
「収束、砲撃」
ぽつりと、フェイトが口にする。フェイトが、ついには習得できなかった技術だ。それを、目の前の少女は使っている。

回る。そして、集まる。桜色の粒子と、金色の粒子。
「ああっ、それボクのじゃん！！　ズルい！！」
抗議するフェイトに、なのはは、クワッと目を見開き……
「勝てば官軍！！」
……勝利の鬼と化したなのはには、そんな抗議は通じなかった。
「レイジングハートと」
ぎゅるん、ぎゅるん……と、回転する円環の中心部に、明るい光が生まれる。
「ユーノくんと」
それは、あっというまに膨れ上がる。
「秀人さんと一緒に考えた、知恵と戦術」
遂には、直径５０メートルにも膨れ上がり、今か今かと発射の瞬間を待ちわびている！
「最後の……最強の切り札！！」
じゃきん、と、レイジングハートを振り上げ……！
「受けてもらうよ……」
それは、星の光。
「これが私の、全力全開！！」
そして、発動のキーとなる、トリガーボイスが紡がれる。
「スターライト……！！」

魔力スフィアが、一瞬だけ萎み……解放の瞬間を、迎えた。

「ブレイカアアアアアアアアアアアアアア！！！」

鉄槌の如く、振り下ろす！！

「ちっくしょーーーーーーー！！」

やけっぱちに、残る全ての魔力を防御魔法として放出する。

大中小からなる、五重の円錐状バリア。

正面からの攻撃に対しては、絶大な効果を発揮するそのバリアは、果たして。

――パリイイイイン……

「あ……」

呆気なく、第四層までを貫通。第五層……最後の一枚にも、致命的な罅が入っている。

それが、紙くずのように破られ、身体に直撃するまでの数瞬。フェイトは、ただ一つのことを、考えていた。

――ボクの、負けかぁ……

だが、不思議と悔しさは感じない。

母より遺伝した莫大な魔力と、リニスに教わった戦い方、そして、アルフと共に磨き上げた技術。

己の全てを出し切ったフェイトは、生まれて初めて……充足感と

共に、桜色の暴風雨に身を任せた……

第二十話（後書き）

劇場版ＳＬＢ、どう見ても戦略兵器ですよね。

第二十一話（前書き）

今回、少し展開がご都合的かもしれませんが、ご容赦下さい。

第二十一話

フェイトが『大事な勝負』のため、クロノに連れられて行った、そのしばらく後。

二人の少女が、『高町』と表札が掛かった家の前に立っていた。

「……ここ、ね」

一人は、金髪碧眼。気の強そうな吊り目の少女、アリサ・バニングス。

「うん、間違いないよ」

もう一人は、黒髪黒目。柔らかい雰囲気の少女、月村すずか。

二人が何をしにきたのかと言えば……

「……高町、いるかしら」

「もう、緊張しすぎだよ」

なのはに、あの日の謝罪をするためだ。子供なりに行動力を発揮し、なのはの住所録を調べ、ようやく辿り着いた。

アリサの手には、紙袋。中には、あの日破いてしまった上着が入っている。月村家のメイドによって完璧に修繕され、さりげなくワンポイントまで追加されていたりと、サービス満載だった。

本来であれば、すずかが渡すのが妥当なのだが……アリサが、どうしても自分で渡したいと頼み込んだのだ。

「ええい、死なばもろとも！」

どこか間違った掛け声とともに、インターホンを勢い良く押す。

――ピンポーン……

そして、玄関のすりガラスの向こうにシルエットが浮かび、ドアが開いた。

「はぁい、どちら様？」

出てきたのは、高町桃子。

「ええと、高町……なのはさんの、お姉さまでしょうか？」
すずかが丁寧に対応する。桃子は『姉』という言葉に苦笑し、改めて自己紹介をする。
「いえ。私は、なのはの母です」
二人は、ポカーンと口を半開きにし……
「「母ァ！？」」
全く同じタイミングで、驚愕の叫びを上げた。まぁ、驚くのも無理は無い。とても三人の子持ちとは思えないほど若々しく、髪の色も、顔立ちも、なのはと瓜二つなのだ。母というよりは、姉と紹介されたほうがまだシックリくる。
「……とりあえず、中へどうぞ？」
「失礼……」「します……」
二人は、促されるまま玄関を潜る。

恭也と美由紀は、しばらく行っていなかった翠屋へ行き、開店に向けて掃除と仕込みを始めている。なので、今は桃子一人だった。
「それで……今日は、どのような御用？」
桃子が淹れた紅茶の味に驚いている二人に、用件を聞く。
アリサが、それに応じた。
「服を返しに……あと、謝りに」
桃子は、詳しくは聞かなかった。それは、当人達の間で解決すべきことだったから。
「んー……なのはは、しばらく帰ってこないわ」
困ったように、寂しい笑みを浮かべる桃子。
『しばらく』には、どういった意味が込められているのか……それを、二人が知る余地は無かったが。
「何なら、私からなのはに伝えておくけれど……」
「いえ」
アリサは、きっぱりと固辞した。
「私が直接言わないと、意味が無いんです」

なのはへの謝罪を、人づてに済ますのは不義理に尽きる。
「そう。……ちょっと待っててね」
電話機の傍に置いてあったメモ帳とボールペンを手に、戻ってくる。
そして、メモ帳にボールペンを走らせる。
書き終えると、そのページをぴりっと切り離し、二人に渡した。
「それ、なのはの電話番号とメールアドレスよ」
「……」
じっとそれに見入るアリサ。ポケットから携帯電話を取り出し……
「ああ、今日はきっと出ないわよ？」
ずるっ、と、椅子の上で器用にずっこけた。
「今日、大事な勝負があるって……」
「「勝負？」」
なにやら穏やかではない単語に、怪訝な顔をする二人。
「えっと、勝負って……？」
「簡単に言えば……」
そこでしばらく迷う桃子。
簡単に言い表すのは難しいと、言ってから気がついたらしい。どこかずれているところは、なのはと似ていた。
「そう、」
ぽん、と手を打ち、ようやく口にした。
「意地っ張り同士の、意地の張り合い？」

かち、こち……

時計の秒針が、いやに大きく鳴った。
「……すみません、分かりません」
アリサ、降参。
「……あら？」

桃子は一人、首をかしげるのであった。

◆　◆　◆　◆

「ぜぇ～……！　ぜぇ～……！」

私は、肺を総動員して酸素を取り込む。実戦で撃ったのは初めてだけど……反動が、予想以上にキツい。気を抜いたら、飛行魔法が維持できなくなってしまいそうだ。

でも……！

『魔力反応、消失。全ての魔力を削り取りました』

レイジングハートが告げるのは、私の勝利！

「……やった」

とうとう私は……あの強敵を下したんだ！

「やったあああああぁぁ……ゲホッゲホッ……！　勝っ、ゲフッ！」

『落ち着いてください、マスター』

落ち着け私。

「レイジングハートの……みんなのおかげだよ」

ぎゅっ、と罅割れたレイジングハートを抱き寄せる。

「ごめんね。私も、魔力ギリギリだから、修復はまだ後で……」

『構いません。ところで、マスター』

「ん？　なぁに？」

『彼女が溺死寸前です』

「へ？」

スターライトブレイカーの着弾地点……そこに、水泡が浮かんでいる。

更に目を凝らすと……

「がぼがぼがぼがぼ……！」

水中でもがくフェイトの姿が見えた。

「ふぇ、フェイトオオオオ！？」

飛行魔法で加速し、勢いのまま水中に潜り、フェイトを救出。水上に上がり、何とか破壊を免れた廃ビルの傾いた屋上に、フェイトを寝かせる。

「ううう……」

青ざめた顔で呻いている……

とんとん、とんとん、と背中を叩く。

「げぇっほ！　げほっ……おえぇ……！」

身体を丸め、喉の奥から、たんまりと水を吐いた。

「し、死ぬかと思った……！」

「ご、ごめん……まさか、泳げないなんて」

うかつだった……戦いで体力を消耗しているのに、水泳なんてハードな運動が出来るわけ無いのに。

「違ーう！　キミの砲撃で、だ！」

「……え？」

嫌だなぁ、人聞きの悪い。確かに、ちょっと強い攻撃だったかもしれないけど……

「なんだよあの無茶苦茶な馬鹿魔力！　死ぬぞ！　ボクじゃなくても死ぬぞ！？」

ぎゃーぎゃーと怒り狂っている。

「もう、大げさなんだから」

「大げさなもんか！！」

立ち上がろうとするも、足に力が入らないようだ。

「ほら、まだ動かないの」

ふらつくフェイトを寝かせ、膝枕の体勢に持っていく。丁度、フェイトの顔を上からさかさまに見下ろす形だ。

ひとしきり騒いで、私もフェイトも、呼吸が整ってきた。

膝枕でフェイトを休ませながら、作り物の水平線を見渡す。

「いやぁ……なーんにも無いねぇ」

ちょっと……予想以上だったかも。私達がいるここ以外、見渡す限り水面だけだ。

「……『壊れた』んじゃなくて、『消し飛んだ』んだぞ」
ちょっととがめる様な口調。
見下ろすと、フェイトの真っ赤なルビーのような瞳が、私を見上げていた。
「まぁ……必殺技だし？　これくらい強力でも……」
「いいわけあるかっ！！」
フェイトが、頬を膨らませて噛み付いてきた。

しばらくにらみ合い……
「「ぷっ……」」
どちらからともなく、吹き出した。
「あははははっ……！　いいじゃない、別に！」
「くふふっ……あっはははは！　良くない！　絶対良くないよ！」
「あはっ、あはははははっ……何笑ってるの、フェイト……！」
「ふふふふふ……！！　キミこそ、笑いながら戦略兵器ぶっ放すなよ！　あははは！！」
「せ、戦略兵器!?　何ソレ、あはは！」
「だって、ドカーンって、廃ビルまとめて吹っ飛んだんだよ！　あは、はははは！！」
「吹っ飛んだんだ……!?　すっごーい！　あーはっはっはっは！！」
「キミがやったくせに、何驚いてるんだよ……ぷぷぷっ！！」
げらげらと、馬鹿のように笑い転げた。
「ねぇ、フェイト？」
「ん？」

「私の、勝ちだよね」
「……うん。ボクの負けだ」
フェイトは、どこか晴れ晴れと、負けを認めた。

「全部、出し切った。力も、技も……意地も」
もうフェイトは、偽悪の仮面を被っていない。
少し乱暴な、普通の女の子が、そこにいた。
「約束、覚えてるよね？」
あの夜、縁側で交わした約束。
「私が負けたら、ジュエルシードを全部あげる」
「ボクが負けたら、何でも言うこと聞く……だっけ？」
そう。全ては、このときのために。
フェイトと、友達になるために。
今こそ、言おう。
「あのね……」

『なのはちゃんっ！！』

ぶっちん、と、通信回線が乱暴に開かれた。
「うるさいなぁ……！」
なんてタイミングの悪い。下らない用事だったら容赦しないよ？
『大丈夫！？』
「ああ、うん」
大丈夫、と言い掛けて。
『ひどい……！』
仮想空間の中。私の最大砲撃で根こそぎ消し飛んだ建造物を見て、エイミィが戦慄している。ひどいって。
『一体、何があったの！？』
「ええと……」
説明しづらい。
『まさか、またプレシアの次元跳躍攻撃！？』
「いや、その……」
つまり何か。

今のこの惨状を作り出すには、プレシア並みの攻撃力がいるってことか。

『って、周辺魔力がほぼゼロ！？』

収束砲のエネルギーになりました。

『まさか……集積型の魔力爆弾が！？』

言うに事欠いて……！

「ブフッ……！！　ば、爆弾だってさ！　くくくくく……！！」

膝の上で、フェイトが腹を抱えて笑いを堪えていた。

だが、その後の一言で、空気が変わった。

『それとも、こっちにも襲撃があったの！？』

「こっち、にも……？」

『あ、やば……』

エイミィが失言に気付き、慌てた声を出した。

「どういうこと！？　ちゃんと説明して！」

やがて観念して、事情を説明し出した。

この仮想空間と外が、完全に切り離されていたこと。

アルフが、爆弾を仕込まれて寄越されたこと。

「アルフに……！？　そんな……そんな！！」

フェイトには衝撃が大きかったらしく、モニター内のエイミィに詰め寄った。

「アルフはどうなったの！？　ねぇ！？」

「フェイト、落ち着いて！」

腰の辺りを掴み、抱き寄せる。

「落ち着けるわけが……もごっ！」

その口を、掌で塞ぐ。
「いいから！　黙って聞きなさい！」
「うーーーー！！」
涙が滲む目で、私を睨み付けるフェイト。
「心配なのは、よくわかる。でも、今ここでフェイトが暴れても、何にもならないんだよ！？」
私だって、冷血漢じゃない。フェイト程ではないにせよ、それなりに面識のあるアルフに命の危険があると知らされて、何も感じていないわけが無い。
でも、だからこそ……今は、冷静にならないと。

「それで、アルフに仕掛けられた爆弾は？」
最悪の結果を覚悟し、聞く。
『それは、大丈夫。秀人君が、なんとか摘出してくれた』
ほう……と、安堵する。
「あ、あ……」
フェイトの動きが止まり……ふにゃっ、と弛緩する。どうやら、アルフが無事とわかって、一気に緊張が解けたらしい。
『でも』
そう。あのプレシア・テスタロッサが、その程度で済ますような、諦めのいい奴じゃないということは、よく知っている。
『多分、今も……クロノくん達は襲撃を受けている』
策が一つで終わりというわけはないだろう。万が一のときのために、保険を二重にも三重にも用意しているはずだ。
『爆弾を摘出した途端に、通信や操作が全部遮断されちゃったから、詳しくは分からないけど……』
秀人さん達を孤立させて、戦力を削ぐ気でいるに違いない。そして、護衛がいなくなったところで……
「次は、私ってこと？」
私の持っているジュエルシードが、プレシアの最大の標的だろう。

『多分……ううん、間違いなくそう。
そこはある意味一番の安全区域だから、二人は、そこで待機するようにっていうのが艦長の指示』
今すぐにでも、秀人さん達を助けに行きたい。でも、魔力も体力もカラッポのままでは、行っても足手まといになるだけだ。
悔しいけど……本当に悔しいけど、今はここでじっとしているしかない。
「アースラからの救援は？」
増援でも何でも、秀人さん達が無事でいてくれるならそれでいい。
『全力で結界に干渉してるんだけど、まだ小さな穴しか開けられていない状況が続いてる。だから、増援も、医療班も……』
「くそっ……！！」
何か無いの！？
（考えろ、考えろ……！！）
何かあるはずだ……！！
――未だに、
……そうだ
――小さい穴しか……
「エイミィ！！」
私には出来なくても！！

私は、胸元のレイジングハートを握り……

◆　◆　◆　◆

「だああらっしゃあああ！！」
――バギンッ！！
頭部を殴り砕かれた傀儡兵が、重い音を立てて地面に転がる。
「クロノ！　何体倒した！？」
「五十から先は、数えていない！！」

――ズガガンッ！！
誘導弾で傀儡兵を蜂の巣にしながら、クロノが答える。
「ああもう、何体隠し持ってるんだよ！」
――ガゴンッ！！
騎士タイプの胴体に風穴が開く。

俺とクロノは、リンカーコアを『結んで』いるおかげで、完全に消耗するまで、まだ猶予がある。だが、結界をたった一人で維持しているユーノは……
「ユーノ、大丈夫か！？」
ユーノともリンカーコアを『結ぶ』こともできるけど、そうすると、結界の維持なんて高度な計算をしているユーノに、余計な負担をかけることになってしまう。
「うん、大丈夫……！」
言葉とは裏腹に、額にはびっしょりと汗を掻き、膝は震え、今にも崩れ落ちそうだ。
「後援が来れば、負担も減るから……」
アースラの連中だって、いつまでも指をくわえて眺めているなんてことは無い筈だ！
「それに、」
にやっ、と、ユーノには珍しく、不敵な笑みを浮かべる。
「ここで負けたら、なのはに、顔向けできないからね……！！　絶対に死守する！」
たとえ戦闘に参加できずとも。ユーノは、果敢に戦っていた。
通常なら、アースラの出力に頼るか、何人かで交代しながら維持するような結界を、長時間、たった一人で支え続けている。いかにユーノが優秀な結界魔導師だとはいっても、疲労は蓄積する。傀儡兵に襲われでもしたら、無防備なまま攻撃を受けてしまうという緊張もあるはずだ。だがユーノは、俺達を信じ、全力で結界を支えている。

「……アースラのクルーは優秀だ」
その姿に思うものがあったのか、戦闘時には無口なクロノが、口を開いた。
「きっともうすぐ、干渉を無効化して増援が来る。だから……！」
『Ｂｒａｋｅ　Ｉｍｐｕｌｃｅ』
――チュイイイイイイイン！！
傀儡兵を振動波でバラバラに分解しながら、クロノが叫ぶ。
「もう少しだけ持ちこたえろ！　フェレットもどき！」
ユーノへの激励を！

『グオオオオオオ！』

「「すっこんでろ！！」」
『Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ　！』
――バガアアアアンッ！！
二発の砲撃が、重騎士タイプの装甲を爆破。副次効果の爆裂が、内部機構を滅茶苦茶に引き裂いた。とりあえず、第……八陣くらいか？……までを片付けた。だが、おかわりとばかりに、また転送魔法陣が出現し、何体もの傀儡兵が顔を覗かせる。
「残存魔力、３１パーセント……」
三分の一を切ったか。もし魔力が切れたら……と、そこまで考え、頭を振る。
（『もし』『たら』『れば』は、その時になったら考えろ！　今は、目の前の敵をブッ潰せ！）
俺は、拳に魔力を纏わせ……

『クロノくん、秀人君！』

――――待ってました！
少しばかりノイズ混じりの、随分と懐かしい声が聞こえた。

『遅れてゴメン！　状況は！？』
すぐに、クロノが声を張り上げる。
「術者が限界だ！　結界の維持を！」
『了解！』
――ヴンッ……
返事とほぼ同時、
「……はぁっ、はぁっ！」
ユーノが地面に手を突き、そのまま崩れ落ちる。　本当に……よく頑張ったな、ユーノ！
「他に、怪我人が多数いる！　転送ポートは開けないのか！？」
応急手当しかしていないアルフと、武装隊のヒヨっ子ども。今も、後ろのビルの中に引っ込めてある。ユーノと共にアースラに回収してもらうことができれば、自由に動き回り、遊撃に打って出ることが出来るようになる。いつの時代も、大変なのは拠点防衛戦だ。
『ごめん、今、全力で解析にあたってるから……』
あー……そう都合よくはいかないか。
『でも、援軍はいるから！』
そして、俺の目の前に、直径１０センチ程度の、極小の転送ポートが開いた。
『秀人君、これを！』
僅かに開いた転送ポート。そこから、心強い『援軍』が現れる！

『お久しぶりです。生きていますか？』

赤い宝石。レイジングハート！
「一応な！　手ぇ貸せ！」
『了解しました』
ある意味、誰よりも心強い援軍だ！　これで、自分の魔法が使える！
レイジングハートを右手に握る。

結晶体とレイジングハートが擦れ、かりっ、と硬い音を立てた。
『？　何ですかこれは？』
「ああ、これか」
右手が吹っ飛んだことをぼかして、説明する。
レイジングハートは『またですか』と、ため息一つで納得するだろうけど……なのはは、間違いなく怒る。そして泣く。というわけで、黙っておくのがベストだ。
『恐らく、無尽蔵に魔力を吸収し、蓄積するタイプのロストロギアでしょう』
レイジングハートは、そう結論付けた。
『簡単に言えば、ジュエルシードの亜種です』
多分だけど、ジュエルシードに辿り着くまで、プレシアが収集してきた候補の一つ。
とはいえ、さっきの魔力補充で完全に沈黙し、今はただの無機物になっている。
魔力を補充した、という話を聞いたレイジングハートが、何やら思案顔（顔無いけど）で考え込む。
『吸収……ですか』
――バキャッ！！
騎士タイプの頭部を握り潰す。
「打開策、何か出してくれよ！」
正直、クロノと連携する以上の考えなんて浮かんでこない。前にレイジングハートが言ったとおり、瞬間の閃きこそ強いが、長時間思考し続けることには滅法弱い、ドラッグレース仕様の脳みそだ。
『賭けになるかもしれませんが、よろしいですか？』
「このままじゃ、どうせまた魔力が切れる。それなら、お前に賭けるよ」
今までだって……レイジングハートの言うことが、間違っていたことなんて無いんだから。
レイジングハートはしばし黙考し、『ある術式』を起動した。

『Ｓｔｅｒｌｉｇｈｔ』

スターライト。

周辺に散らばった魔力を集め、再び利用する技術。攻撃にも、防御にも転用できる、かなり実戦的応用的な術式だ。

でも、何でだ？

「俺、スターライトには適性が無いんじゃ……」

練習の時は、いくら集めても、それを留めておくことが出来なかった。

『これぱっかりは、適性ですから』

と、レイジングハートも無理に習得をさせようとはしなかったのに。

「……賭けにもなってないぞ」

練習で使えなかったものが、いきなり本番で使えるようになるなんて……フィクションの世界だ。

『ええ、確かに。以前のヒデトなら、無理でした』

粛々と術式の発動を準備しながら、続ける。

『あなたの右手。そこに埋まっている物は何ですか？』

へ？　右手？

「ええと……カラッポの魔力結晶」

『その働きは何でしたか？』

確か……

「無尽蔵に魔力を吸収する……ああ！！」

そういうことか！！

理屈としては、筋が通っている。

魔力を『集める』ことはできるが、『留めて』おけない。だから、『留める』役目を、右手の魔力結晶に頼る。

だが、魔力結晶が一回こっきりの使い捨てタイプだったり、蓄積に長い時間が必要だったりしたら、もうアウトだ。

「ははっ……確かに、賭けだな」
リスクは高いが、リターンがあるかどうかも分からない。でも。
「やるぞ」
『よろしいのですか？』
レイジングハートが、少し驚いたように確認を取る。
たとえ、クロノに止められても、俺はやる。何故なら……
「俺は、お前を信じてる」
レイジングハートは、何度も何度も戦いを共にしてきた、仲間だから。仲間を信頼するのに、理由はいらないだろ？
「だからお前も、俺を信じてくれ」
『……』
レイジングハートが黙り込み……
『スターライトを、アカウント・吾妻秀人に合わせ、再編成。完了』
術式を、書き換えた。
「行くぞ！」
目を閉じ、意識を集中。自分を中心に、渦巻くようなイメージを描く。
――ギュイイイイイイイ……！！
そして……集まってきた魔力を、右拳の結晶体に。
だが。
シン……と、結晶体は沈黙したままだ。
（頼む……）
俺は、霧散していこうとする魔力を必死に繋ぎとめ、結晶体に送り続ける。
だが、しばらく経っても結晶体に変化は見られない。
駄目、なのだろうか。やはり、そう都合よくは行かないのだろうか。
（頼む……）

でも。
（頼む……！！）
それでも。
俺は、レイジングハートを信じると決めたんだ！

――ドクン

と、結晶体が、鼓動を刻んだ。
――ドクン、ドクン、ドクン、ドクン……！！
行ける。行ける！！
結晶体と、リンカーコアの鼓動。
バラバラのそれらを、時に押さえ、時に解放し、徐々に、徐々に同調させていく。
――ドクンッ！！
一際強く、弾けるような鼓動を刻み……！！！！
「いッけえええええええええええええええ！！」

そして……

――ギュゴアアア

「さて」
睥睨する先には、うじゃうじゃと傀儡兵の群れ。そいつらは、けが人を避難させているビルを目指していた。
「片付けるぞ！」
『Ｈｅｒｅ　ｗｅ　ｇｏ　！』
魔力結晶に吸いきれなかった魔力のカスが、俺の身体を中心に、放射状に広がっていく。なのはのスターライトとは、逆に……
そう。
『Ｓｔｅｒ　ｄｕｓｔ』
星屑のように。
決めた。この技の、名前は……！
「スターダスト……！！」
手刀に構えた右手を、居合い切りのように、腰に構える。
『『『『『グオオオオオオオオ！！！』』』』』
危険を感じ、方向を換え、俺に殺到する傀儡兵。でも、もう遅い！！
膨大な魔力を……俺の得意な衝撃波として……！
「ウォーーーーーーーール！！」
一気に、振り抜いた！！
そして発生する、桁違いに巨大な、魔力の大津波。
――ガゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……！！

それは、進行方向にあったアスファルトを、ビルを、天高くまで舞い上げ粉砕し、傀儡兵どもへと押し迫る！

効果範囲は……上は結界最上部。横は結界全幅。つまり……結界の端から端まで。

「逃げられねぇぞ、鉄クズ」

――……ゴアアアアアアアアアアッ！！！

元々、装甲は大して厚く無かった傀儡兵どもは……悲鳴も無く爆砕され、ただのスクラップへと成り果てた。

――ガランッ……

装甲の一部が、禿げたアスファルトとぶつかる。それを合図に、俺は戦闘態勢を解いた。

「ふう～……キツかった」

――ヴ……

転送魔法陣が出現し……

――……ウン

すぐに消える。癇癪を起こしたように、何度も、何度も……

「無駄だ。もう、お前の転送魔法は届かない」

俺は、きっと見ているであろうプレシアに宣言する。

「ジャミングは、お前の専売特許じゃない。少しは考えておくべきだったな」

先ほどの、収束魔力波。

アレにはわざわざ不純物を混ぜた、結界全域にバラまいておいた。

それらは、レーダーを乱反射させるチャフの役目を果たし、遠距離からの干渉を防ぐ。近距離……つまり、結界の中にいればさほど影響は無いが、このプレシアのようなタイプには効果的なはずだ。

「安全圏から一歩も出ずに、高みの見物を決め込むつもりだったん

だろうけど……残念だったな」

俺は、今にも直立を放棄しそうな両足を叱咤し、余裕を装って天を見上げる。

さぁ、どう出る？

諦め悪く出現と消失を繰り返していた転送魔法陣が、止まり消えた。

そろそろ、来る……

『おォのれえええええええええええええ！！』

ビリビリと、叩きつけるような殺気を含んだ声が、結界中に響き渡った。

この声が。こいつが！

「プレシア・テスタロッサ！！」

俺は、全身で殺気を受けながら、その名を呼んだ。

第二十一話（後書き）

秀人とプレシア、いよいよ邂逅です。
一期も山場です。
どうか、一区切り付くまでお付き合い下さい。

第二十二話（前書き）

作者の二号バイク、ＮＳＲ２５０Ｒの修理が完了しました。
早く走りたいです。

第二十二話

初めて聞くプレシアの声は少し低く、こんな激情にまみれていても、高い知性を感じさせた。
『お前は……なぜ私の邪魔をする！？』
なぜ、か。
思わず失笑が漏れる。
「別に、ご大層な理念でお前の邪魔をしているつもりは無いよ」
正式な管理局員ではないし、次元世界の平和だの、俺の手には余る。
「俺の家族と、その周辺を守ろうと思ったら……結果的に、お前の邪魔をするようになった、っていうだけの話だ」
『ふざけるな……！！　そんな下らない理由で！！』
「ふぅん……それじゃあ、お前にはあるんだろうな？　下らなく無い理由が」
今のプレシアは、冷静さを欠いている。もしかしたら、目的を聞き出すことができるかもしれない。
「お前、あんな危険なものを集めて何をしようとしてる？」
『そんなこと、お前には「まぁ、最も」
間髪入れず、その言葉を遮る。
「お前には何も出来やしないけどな。お前の手元には、たった九つしか無いんだから」
通信の向こうで、ギリッ、と歯を食いしばるような音がした。
『寄越しなさい……！！』
「嫌だね」
誰がお前みたいなキチガイに渡すか。
『それは、私たちに……私とアリシアに必要なのよ！！』

アリシア？
「それは、誰だ？」
……プレシアが、ああまでしてジュエルシードに執着する理由。
それが、『アリシア』らしい。人名っぽいけど……
『あああああああ！！』
その質問には、答えが返ってこなかった。何かが砕けるような音と共に、通信が切れてしまった。
「……悪い、クロノ。お前ほど上手くは出来なかった」
これは、本来なら執務官（警察官と検察官と弁護士を混ぜたような職業）であるクロノの出番だったのだろう。ついでしゃばってしまった。
「いや、十分だ。よくやってくれた」
労ってはくれるが、引き出せた情報は一つだけ。『アリシア』という名前。
「誰なんだろうな、アリシアって」
プレシアの大事な人……うーん、想像付かない。
そういえば、クロノは犯人のプロフィールに目を通していたんだっけか。
「クロノ、知ってるか」
「……まぁ、な」
何故か、クロノは言葉を濁す。
「……？」
何か、言いづらい事情でもあるのだろうか。
そこに、いつものごとく明るいながら、色濃く疲労を感じさせるエイミィの通信が入ってきた。
『秀人君。転送ポートの準備、ＯＫだよ！』
「……ま、戻るか」
アルフの傷も、止血しか出来ていないし……
「なのは達は？」

『もうアースラに回収済み』
勝敗は……まぁ、聞くまでも無いか。
「……戻ったら、話そう」
クロノは、考えた末にそう言った。
「頼むぞ……よいしょっと」
盛大にいびきをかいて眠るユーノを背負う。
「ふあぁぁ……」
俺も、さすがに眠いな……戻ったら、どこかで寝よう。

◆　◆　◆　◆

「アルフ……アルフッ……！！」
フェイトは、アースラの廊下を全力で疾走していた。とはいえ、疲労が抜けるまでまだしばらく掛かるらしく、へろへろと覚束ない足取りだった。
あまりにも危なっかしいので、私が手を引き、先導していた。
「走らなくてもいいってば……今、手術してるらしいから」
手術とはいっても、そこまで大仰なものではないらしい。せいぜい、臓器などに損傷が無いかどうかをスキャンし、問題なければ腹部の傷を縫合するだけで終わるそうだ。
秀人さんによって無理やり摘出された魔力結晶。あれは、本当にただ『仕込まれて』いただけであって、臓器などに『埋め込まれて』いたわけではなかったのが、幸いだった。
もし臓器など……心臓に癒着していたなら、万事休すだったけれど……なぜプレシアがそうしなかったのかは、今のところ分かっていない。
そして、手術室の前まで来る。私にはミッドチルダの文字は読めないが、扉の上でランプが点っているところを見ると、今もまだ手術が行われているらしい。
「ぐ～……ぐ～……」

「……ふが」
そこに設置されていたベンチで、秀人さんとユーノくんが、いびきをかいて眠っていた。その傍らには、くしゃくしゃに乱れたタオルケットが落ちている。どうやら、ズリ落ちてしまったらしい。
疲労の度合いで言えば、私達より遙かに高いのだから仕方ないのかもしれない。
「もう……カゼ引くよ、二人とも」
ふたりにタオルケットを掛け直す。
秀人さんの首に掛かったままのレイジングハートが明滅し、私に声をかけた。
『二人とも、単純に魔力切れ・体力切れです。一日も寝れば、回復するでしょう』
「そっか」
私達の勝負には、最初から最後まで、一切の邪魔が入らなかった。私が完全に消耗し切り……ジュエルシードを奪うには、絶好の機会だったにも関わらず。
「また……助けられちゃったね」
ありがとう、二人とも。
と、感傷に浸る私の視界の隅で、金色の髪の毛が、ふらふら、ふらふらと……
「う～……う～……」
フェイトが、手術室の前をうろうろと行ったり来たりしている。行って、ちらっ。手術中を示すランプを見上げる。来て、ちらっ。また見上げる。うろうろ。ちらちら。
「少し落ち着きなよ」
ぴたっと立ち止まり……
「だって、アルフが……アルフがぁ……」
泣きそう……というより、泣く寸前みたいな顔で、振り返った。
「はぁ～……」

手の掛かる子……

「こっちおいで」

袖を引っ張り、無理やり私の横に座らせる。

「リンディさんの話、聞いたでしょ？　命に別状は無いって」

戻ってきた時、最初にその説明を一緒に受けていたはずだけど……多分、心配で頭が一杯一杯になってたんだろう。

「でも、おなかに穴が開いたって……」

「だから、それを今塞いでいるの」

ゆっくり、言い含める。多少なりとも冷静さを取り戻したのか、もじもじ動くのをやめ、大人しくなった。

「ボク……アルフに、何度も酷いことしちゃったんだ」

懺悔するように、珍しく、自分から話し始めた。

「頭、ぶったり……髪の毛、ひっぱったり……それで、血が出たこともあって」

「それは、どうして？」

大体、想像できる。会って間もない頃のフェイトなら、多分……

「ボクの言うこと聞かなかったから、って」

はぁ……やっぱり。アルフ、苦労してたんだね。

「アルフは、いつもボクのために言ってくれてたのに」

ぎゅっと固められた手に、自分の手を重ねる。

「フェイト、あなたは、どうすればいいと思う？」

「ボク、は……」

以前のフェイトだったら、多分、考えない。

でも、今のフェイトなら……

「……謝らないと」

顔を上げたフェイトは。

「ボクは、アルフに謝らないといけないんだ」

きっぱりと、強い意志を目に宿していた。
「……うん」
ほら……やっぱりフェイトは、ちゃんとこういうことを考えられる子なんだ。
フェイトは本来、とても優しい子だったんだろう。もし、本当に性根が悪なのであれば、アルフといえども、見放していたに違いない。その優しさを歪めたのは……実の母親である、プレシアだ。
娘を利用し、悪事に加担させる母親なんて……そんなの、母親なんて言えるのだろうか？
私は、フェイトの手前、なんとか怒りを飲み込んだ。
「そうだね……ちゃんと、謝ろう」
よくできました。そんな感じで、フェイトの頭を抱き寄せる。
「ん……」
安心したように、身体を預けてきた。その目蓋が、少しずつ、下りてくる。
「疲れたでしょ？　寝てもいいよ」
頭を撫でてやると、僅かに頬を緩ませ……
「……」
返事は無く。フェイトは、私にもたれかかりながら、寝息を立て始めた。
「ふあああぁ……」
静かになった途端、大きな欠伸が出てしまった。
う……私も、そろそろ限界かも……
でも、手術中のランプは、まだ点いたままだ。
ちゃんと起きてないと。ちゃんと、起きて……

◆　◆　◆　◆

艦長室にいたリンディは、アルフの手術が完了したと報せを受け、手術室に足を運んでいた。途中、クロノとエイミィも合流し、廊下

に差し掛かったのだが……
「あらあら」
設置されたベンチに、折り重なるようにして、四人が眠っていた。
「……はぁ。仕方の無い」
だがクロノも、無理に起こそうとはしない。
「アルフの麻酔が切れるまで、まだ数時間ある。それまで、寝かせてやるか」
初対面の頃と比べれば、随分と丸くなったものである。
なのはをリンディが、フェイトをエイミィが。そして、秀人とユーノをクロノが、それぞれ仮眠室に運ぶ。
「クロノ、あなたも睡眠を取りなさい」
「いえ、魔力は空ですが、まだ動けますので」
必要書類の作成など、事務仕事はできる……と言いたいのだろう。
「有事に備えなさい。命令よ、クロノ」
いつ何時、プレシアの襲撃があるのか分からない以上、いつでも戦闘に移れるようにしておくべきだ、とリンディは言う。
「事務は、全てが終わった後にすればいいわ」
「……了解しました、艦長」
クロノは、それで納得した。
「はい、クロノくんの分のベッドメイク終了～」
こうなることを見越してか、ちゃっかり準備を済ませていたエイミィが振り返る。その目の下に、色濃い隈があることをクロノは見逃さなかった。
「エイミィはいいのか？　キミもほぼ徹夜だろう」
直接の戦闘に参加はしていなくとも、隔離空間の設置・監修に加え、戦闘中のオペレート、ジャミングの解消と、前線に次いで激務だったのがエイミィだ。
「んー、私は、クロノくん達が起きてから、交代で寝させてもらうよ」
からからと笑い……一転して、悪戯を思いついた子供の笑顔を浮

かべる。
「それとも、一緒に寝てあげようか？」
エイミィとしては、鉄面皮のクロノが狼狽する様でも見たかったのだろうが……
「いや、結構だ。三時間で交代しよう」
顔色一つ変えず、即効で断られた。
「……」
すげなくされたエイミィが、少し悲しそうな顔でリンディを見る。
「……」ふるふる。
リンディは無言で、首を横に振った。
「……クロノくんの朴念仁～！！」
エイミィは、そんなことを叫びながらばたばたと駆けていった。
「なるほど、まだ大丈夫みたいだな」
クロノは、もそもそと毛布を被りながら、そう結論付けた。
その、あまりにも鈍感な息子に、亡き夫であるクライド・ハラオウンを……そして、自身の苦労を重ねる。
（……頑張りなさい、エイミィ）
リンディは、将来は娘となるであろうエイミィに、深く同情するのであった。

◆　◆　◆　◆

ぼんやりと、昔の夢を見ていた。
『アリシア、ごめんなさいね』
目の前には、最愛の母。
玄関先で、身支度を整えた母親が、『アリシア』に謝っている。
『少し、慌しくなってしまって……しばらく、帰れそうに無いの』
それに対し、アリシアは……きっと、寂しそうな笑顔で、母親を見送っていたのだろう。
『大丈夫だよ！　わたし、ちゃんと一人でお留守番できるもん！』

本当は、寂しくて堪らないのだろう。その内心では、「行かないで」と今にも泣きそうだった。それでも、母親のことが大好きだから……我慢して、見送るのだ。

『それじゃあ、行ってくるわね』

母親も、本当は一緒にいてあげたいのだろう。何度も何度も振り返り、アリシアの姿を目に焼き付けようとしている。

『ママ！』

アリシアの本音が、一瞬だけ顔を覗かせ、母親を呼び止めた。

だが、寂しいという本音が顔に出たのは一瞬。

『誕生日プレゼント、早く頂戴ね！』

そして、母親の姿が見えなくなるまで、ずっと手を振り続けて……

「……誕生日、プレゼント？」

フェイトは、馴染みの無いベッドの中で目を覚ました。

自分が母親にねだったものとは、なんだったのか。以前であれば、『面倒くさい』とそれ以上の思考を停止していたのだが……今日は、なぜか気になってしまった。

（思い出せ、思い出せ……！）

頭の中を必死に掘り返し、記憶を遡る。

自分と友達になりたいとか言う、変な子に会った。

リニスが姿を消した。

アルフを拾った。

その前は……

――ズキンッ！！

「ぎっ……！！」

突然、針を差し込まれたかのような激痛が頭に走る。

「あ……」

その痛みが過ぎ去った後に、見たことの無い記憶が脳裏に蘇った。

――自宅のテラス。地平線まで見渡せる、お気に入りの場所

（あ、れ？　ボク、こんなの、知らない……）

知らないのに、知っている。その違和感に、吐きそうになる。

――母の勤める研究所がよく見え、帰りが遅いときは、いつもここから……

（知らない、知らない……！！）

それは、記憶の奥底に封印されていた悪夢。

――その日、大きな地震があり、研究所を中心に光の柱が立ち上った

陽光のような暖かさなど微塵も感じさせない、全てを焼き尽くす、破滅の光。

「やだ……やだぁ……！！」

思い出したくない。なのに、頭は思い出す。思い出してしまう。

――その光は、あっという間に広がり、自宅にまで届いて

逃げる間もなかった。

それは、母親が有事に備え張っていたバリアをあっさりと貫き……

――からだが、ひかりにのみこまれた

「うわあああああああああああああああああああああああ！！！」

フェイトは、記憶の中で恐怖を思い出し、絶叫した。
「……!?　フェイト、どうしたの!?」
なのはが飛び起きる。
「嫌ぁ!　嫌あああああああああああ!!」
「フェイト!　……フェイト!!」
なのはの必死の呼びかけにも答えず、頭を抱え、のた打ち回る。
「おい、何だ!?」
秀人とユーノまで起き出してきた。
「わ、わからない!　いきなり……!」
「ユーノ、医務官のオッサン呼んで来い!　俺はクロノを呼ぶ!」
「わかった!」
念話を使おうにも、艦内は厳重なプロテクトが掛かっていて使えない。携帯端末も持っていない二人は、人を呼びに走った。

「あああああ!!」
――がりっ!
「い……った!」
フェイトが振り回した手が、なのはの顔を引っかいた。頬から、じわりと血が滲む。
「フェイト!　落ち着いて!」
なのはが何度呼びかけても、フェイトはただ叫び、暴れる。

医務官が鎮静剤を注入し、ようやく収まったのだが……
「あの、こんなことしなくても……」
頬にガーゼを張ったなのはが、辛そうにソレを見る。
「……僕だって、やりたくてやっているわけじゃない」
クロノが、憮然と腕を組む。

――フェイトの両手は、頑丈な手枷で拘束されていた。

「でも！」「なのは」
言い募るなのはを制したのは、秀人だった。
「秀人さん……」
「フェイトが起きて、また暴れだして……大怪我したらどうする？」
誇張では無い。感情の暴走によってリミッターが外れた身体は、その耐久力の限界を簡単に超えてしまう。特に、フェイトのような少女なら、尚更だ。
「かわいそうだっていうのは、俺も同意見。でも、これもフェイトのためなんだ」
しゃがみ、目線の高さを合わせ、なのはを説得する。
「フェイトが落ち着いたら、ちゃんと外すから。な？」
「……わかった」
なのはは、渋々頷いた。

フェイトの隣のベッドには、手術を終えたアルフが寝かせられていた。丁度、麻酔が切れ、目を覚ます頃だ。
「アルフ」
秀人が声を掛けると、その目が、ゆっくりと見開かれた。
「……あぁ、アンタか」
「調子はどうだ？」
「悪くないよ。まだ動けないけど」
と、横のベッドに眠るフェイトを見つけた。
だが、取り乱したりも、慌てたりもしない。
「……フェイト、負けちゃったんだね」
まだ身体を起こすことはできないようで、ふぅ、と息をついた。
「アンタか？　それとも、そっちの子か？」
「あの……私」
なのはが、おずおずと挙手する。
アルフは、なのはをじっと見つめ、
「……ありがとう。フェイトを負かしてくれて」

何故かなのはに感謝した。
「え？　……なんで？」
「フェイトは、ずっと追い詰められてたから」
強くなければならない。
負けてはいけない。
――全ては、母のために。
半ば洗脳のように、それはフェイトの頭に刷り込まれていた。
幼い頃より甘えも許されず、ただ母親のために力を蓄え続けてきた。
人格が歪んでも、なんらおかしくはない、異常な生活環境だ。
そして、それを止められる者が少なすぎたことも、要因の一つだろう。
養育係であったリニスがいなくなってからは、それが更に顕著になり……結果が、なのはに出会う直前のフェイトだ。
他者を痛めつけることに何ら痛痒を感じず……むしろ、それを見て笑うような残忍な性格に変貌してしまっていた。
「フェイトは一度、誰かにキッチリ負けておくべきだったんだ」
フェイトには、必要だったのだろう。
……文字通り、性根を叩き直してくれる誰かが。
「あの、アルフ？」
「何だい？」
「フェイト、言ってたよ。『アルフに謝りたい』って」
「……そうかい。
……少し、疲れた。もう少し寝かせてくれ」

アルフはそれだけ言い、また目を閉じた。

――ピピピッ……

クロノの携帯端末が鳴る。

「全員、艦長から呼び出しだ」

四人は、ぞろぞろと連れ立って移動する。

「単刀直入に申し上げます」

呼び出された先の艦長室。そこで、秀人、なのは、ユーノ、クロノの四人は、一列に並んで説明を受けていた。

「先日の戦闘の際、転送魔法から座標を逆算した結果……」

秀人によってジャミングされ、何度も繰り返された転送魔法。冷静さを欠いていたプレシアの隙を突き、とうとう……

「プレシア・テスタロッサの拠点が、判明しました」

全員の背筋が緊張で伸びる。

とうとう、この時が来た、と。

「突入は、二日後になります。それまで、魔力と体力の回復に努めなさい」

「二日後？」

なのはが首をかしげる。

リンディは、ふっと表情を緩め、笑みを形作った。

「というわけで、明日は休暇です。ご家族や友人と、ゆっくり過ごしなさい」

「でも……」

どうにも、フェイトが心配らしい。

ぽん、とその頭に手が置かれる。秀人だ。

「僕と秀人が残るよ。フェイトとアルフのことは、心配しないで」

ユーノが言い、それに秀人が続ける。

「恭也とかに、ちゃんと経過報告してこい」
後ろ髪を引かれる思いのなのだったが、
「そんな辛気臭い顔してたら、起きたフェイトが心配するぞ？」
「ううう……わかった」
その言葉に、なんとか納得した。

そして、なのはは一日の短い休暇を過ごすことになるのだが……

第二十二話（後書き）

なのはは長女気質です。

、、、プレシアさんも、決して最初から悪人だったわけではないんですよ？

第二十三話（前書き）

２０万アクセス、１万５千ユニーク達成しました。
まぁそれはさておき、、、

仮面ライダーＷ、ＡｔｏＺ、レンタルで見ましたがパラダイスロストを超える神作品でした！
ゴールドエクストリームと、主題歌への入り方が最高です！

やっぱ、仮面ライダーは最高ですね！

第二十三話

約束どおり、『アリシア』という名前の人物について、クロノから詳しく聞くことになった。
「アリシア・テスタロッサ。プレシアの、実の娘だ」
実の娘って……フェイトだけじゃなかったのか？
フェイトは、そんなの知らないような様子だったが。
「享年、6歳」
「……は？」
享年って……
「それじゃあ、アリシアはもう死んでるのか？」
「ああ。……3年前にな」
そう前置きし、プレシアのプロフィールを語りだした。

聞いたところによると、プレシアは、ミッドチルダでは知らない者がいないというレベルの有名人だったらしい。

今から三年前のその日は、プレシアが開発の指揮を執っていた、新型動力炉の稼動実験が行われる日だった。理論はさっぱり不明だが、要は原子炉のようなものだろう。それも、前例の無い理論で作られた、全くの新型。
普通なら、何十にも安全対策をして、いざとなれば緊急停止もできるようにするのが普通なのだが……プレシアのいた企業のトップは、利益に目が眩んだのか、強引に稼動を決定してしまった。安全対策どころか、改善点がまだまだ残っていたというのに、だ。
押収した記録には、プレシアは最後の最後まで、安全装置の増設を訴えていたらしい。

そして当然のように、暴走した。

半径数十キロにわたって、結構な被害が出てしまった。研究所が辺鄙な地域に無かったら、災害レベルの死者が出ていたそうだ。
被害者は、多くの研究員。そして……研究所の近隣に住んでいた、研究員達の家族。

その中に、アリシア・テスタロッサが含まれていたのだという。

トカゲの尻尾切りのように、企業側は全ての責任を開発者であるプレシアに押し付けたらしいが……管理局は、そこまで無能な組織ではない。その後の調査で、現場主任と、社長ら数名が逮捕されている。

でも、そんなもの……何の慰めにもならなかったんだろう。

その直後、プレシアは失踪したそうだ。

娘の死。ジュエルシードというエセ願望器。そして、
『私とアリシアに必要なのよ！』
あの言葉。
「おい、まさか……」
その、あまりにも馬鹿馬鹿しい想像を、きっぱりと否定して欲しかった。
でも、どう考えたって、プレシアの目的は……

「プレシアの目的は、十中八九……アリシアの蘇生だ」

「……いや、無理だろ」
なぜなら。
「ジュエルシードは、万能の願望器なんかじゃない」

持ち主の願いを、一度でも完璧に果たしたことがあったのなら、まだ理解できる。

持ち主が何を願ったのか、判明しているものだけを思い出してみる。

シリアル１０。なのはの同級生が、『想い人を独占したい』と願った結果は、街を巻き込んだ大破壊。

シリアル１４。月村家の猫が、『大きくなりたい』と願った結果は、成長ではなく、体積の倍増。

つまり、願いを曲解する上、融通も利かない。

多分、２１個全部を共鳴させて、出力を稼ぐつもりだろうが……共鳴したジュエルシードは、その不完全な願望器としての力すら失い、ただのエネルギーの塊となって、全てを破壊する。

たった四つで、あれだけの破壊力。もし、プレシアの手元にある九つが発動したとしても、破壊力は単純計算で2倍。

「プレシアだって、それがわからないほど馬鹿じゃない」

仮にも、研究職に就いていたんだから。

「ジュエルシードで願いを叶えるつもりなのか……もしくは、ジュエルシードを使って、何らかの手段を用いるのか……」

クロノも、頭を悩ませているようだ。

「……というか、さ。フェイトはプレシアの何なんだ？」

三年前に、アリシアは六歳。生きていれば九歳。丁度、今のフェイトと同じ年頃だ。

「アリシアの双子の姉か妹か？」

「……プレシアが失踪する直前までのデータに、フェイト・テスタロッサという名前は一言も書かれていない」

おかしいな……

「プレシアは、アリシアを大事にしていたんだよな？」
娘を生き返らせたい、と思うほどに。
「もしフェイトがアリシアの双子の姉妹だとして、戸籍さえ作っていないなんて、ありえるか？」
「……」
クロノも、その辺で行き止まりになってしまっているようだ。
「拾い子か？　でも、」
以前、フェイトの身体検査を行った。その結果は……
「プレシアとフェイトには、明確な遺伝子の繋がりがある」
ＤＮＡ鑑定の結果、フェイトは、プレシアの実の娘であることが判明した。
アリシアと、フェイト。二人の関係は、一体……

――ビーッ
と、休憩室のブザーが鳴る。
『訓練室の準備、整いました』
エイミィとは別のオペレーターが、スピーカー越しに言う。
今は、決戦に向けて弱点の改善だ。

インターバルを終え、再び訓練室に戻る。
俺達のほかにも、武装隊の何人かが訓練を行っていた。
決戦を控えているから、本格的な模擬戦は行わず、魔法の制御を行うのみ。
特に、俺の燃費の悪さは露呈したわけだし、対策を講じなければ、プレシアに辿り着く前にリタイアしてしまう。
そこで、使える魔法の多彩さでは俺達の遥か上を行くクロノに、いくつか教えてもらっている次第だった。
『Ｂｌａｚｅ　Ｓａｂｅｒ』
ブレイズセイバー。そう発音したＳ２Ｕの先端に、銃剣のような小ぶりの魔力刃が出現する。フェイトのより大分短いが、その分軍用

ナイフのように厚みがある。
――ゴトン
目の前に、ドアのような平べったい鉄塊が出現する。訓練用の仮想物質だ。
クロノは、ブレイズセイバーをひょいと持ち上げ……
――斬！
鉄塊を、真っ二つに切り裂いた。
なるほど。威力もそれなりか。
「このように刃の形で固定してしまえば、魔力消費を抑えることが出来る。キミの使った掌打と同じだな」
あれの応用か。
「んー……」
魔力刃を使ったこともあるんだけど、手刀サイズが精々だ。『刃』なのだから、ある程度はリーチが長いほうが有利なのは分かっているのだが……
「よ……っと」
――ヴ、ヴヴ……！！
あ、ダメだ。境界が曖昧に揺らいでいる。
このまま魔力を注いでも、すぐに破裂してしまう。
「刃じゃなく、『容器』と、『中身』をイメージしてみろ」
クロノのアドバイスどおり、魔力で、刃の形をした『容器』を作るのだが……
「あー……」
やっぱり、ユラユラと曖昧な形にしかならない。
「僕に一度、手刀を突きつけたことがあっただろう。あのイメージでやってみるといい」
ああ……アレか。
手刀を構え……腕そのものを、『容器』として。
――ヴンッ！！
「出来た！」

二の腕を包み込むような形で、刃の外殻が形成された。
「ふむ……」
クロノは、S2Uでコンコン、とその外殻を叩く。
「まだ構成が甘いな。これでは鈍器だ」
なら、より鋭く、より頑丈に。
うんうん唸ること、一時間弱。

――ギンッ
ようやく、『刃』と呼べるだけの鋭さと、長さを持たせることが出来た。刃の全長は、1．5メートル程だろうか。腕の部分を除くと、約1メートルの片刃の形だ。
「ああ、そんなものだろう。後は簡単だ。魔力を流してみろ」
言ったとおり、そこから先はスムーズだった。魔力刃が空色に染まり、僅かながら質量を帯びる。とはいえ、重量は殆ど感じない。これ、本当に切れるのか？
――ゴトンッ
目の前に、クロノが切ったのと同じサイズの鉄塊が現れる。
「切ってみろ」
よし。やってみるか。
腕を振り上げ……
「せいっ！」
斜めに振り抜いた。が。
――スカッ
「ん？」
全く手応えが無かった。もしかして、空振った？　こんな近距離で？
「合格だ」
だが、クロノが顎で示す先。鉄塊が、滑らかな切断面を覗かせていた。

「おおお！　やった！」
腕には、まだ魔力刃が残っている。魔力も、殆ど消耗していない。
でも……
「これじゃ、傀儡兵には効果薄そうだな……」
刃はこれ以上伸ばせない。人間サイズの相手には有効な武器になるだろうが……傀儡兵を切り裂くには、リーチが足りなさ過ぎる。
至近距離まで近づけば効かなくも無いが……
「あくまでこれは、牽制程度に考えておけばいい」
だからこそクロノは、先の戦闘では使わなかったのか。
もっと長く、遠くまで伸ばすことが出来れば……

「……よし」

こうすれば……どうだ？
「おい、何を……」
鉄塊から、十メートルほど間合いを取る。
腕を振り上げ……
「せー、」
斬撃の瞬間に、『容器』の中の魔力を、刃に沿って、細く、鋭く……
「のっ！！」
衝撃波として、射出！
「！？　馬鹿やめろ！」
クロノの静止は、遅すぎた。ぴしゅんっ、と小気味のいい音を立て発射された衝撃波は、

――ズギャギャギャギャギャギャ……

「あ」「あ」
地面を切り裂きながら奔り、

――ドカーン！！

「「「ギャアアアアア！！」」」

訓練中の武装局員を木の葉のように空中に吹き飛ばし、

――ドゴオオオオン！！

訓練室の壁に、くっきりと跡を刻み込んだ。

「……」

「……」

衝撃……いや、斬撃波の通った跡。頑丈であるはずの床がザックリと抉れ、ぷすぷすと焦げている。

「……」

「……」

沈黙が、痛い……

「……何か、言うことはあるか？」

射抜くような目で俺を睨むクロノ。

「……いやぁ」

「ぐおおお……」「い、痛てぇ……！」「い、医者を……！！」

そして、戦闘不能レベルのダメージを負い、倒れ伏す局員達。

何だこの地獄絵図。

やったのは誰だ……って、俺か。

額に青筋を浮かべるクロノに、俺は……

「……どんまい！」

殴られた。

「おおお……マジで殴りやがって」
まだ奥歯がガタガタしてる気がする。
「魔力刃を教えていたのに、なぜ飛び道具を開発するんだキミは！」
「いや……なんとなく、できるかなぁって気がして、つい……」
「『つい』で貴重な戦力三人を病院送りにしてどうする！？」
「スマンッ！　俺が四人分働くから！！」
平身低頭。
「……全く。キミの発想には驚かされるよ」
魔力刃としては失敗もいいとこだが、単純な飛び道具としてなら……かなり有効なんじゃないか？　威力はディバインバスターには多少劣るが、貫通性能と命中精度は段違いだ。俺の、致命的ノーコンが解消される。
内部にあるだけの魔力しか消費しないから、ロスも少ないし……何より、再び魔力を充填すれば、引き続き魔力刃として利用できる。
「まぁ……傀儡兵相手なら、有効な技かもしれないな……」
少数相手なら魔力刃で。数が増えたら斬撃波で。
「だろ？」
少し得意げに、胸を張ってみた。
「調子に乗るなッ！！」
今度はＳ２Ｕでドツかれた。痛てぇ……

訓練を終えシャワーを浴び、フェイトとアルフのいる部屋に向かう。
「んじゃ、またなー」
「ああ」
おざなりな挨拶を交わし、クロノと分かれる。
なんかいいね。学生っぽくて。
まともに中学高校に通ってたら、こんな感じの毎日が送れたのだろうか。

「よーっす」
扉を開ける。
「ああ、秀人。お疲れ様」
ユーノは、アルフの横に座って治癒魔法を掛けていた。その手には、レイジングハート。
魔法の処理能力を上げるため、なのはが置いていったのだ。
『またやらかしましたね？』
「……すまん」
どうやら、バレバレのようだった。
「調子はどうだ？」
緑色の光を気持ちよさそうに浴びていたアルフは、ぱちっと目を開けた。
「あたしは……まぁ、何とか」
「そうか。よかった」
アルフの腹の傷は、適切な縫合とユーノの治癒魔法のおかげで、大分塞がってきている。安静にしていれば、もう数日しないうちに完治するらしい。オオカミの生命力、たいしたものだ。
「ちょとフェイトの様子見てくるよ」

挨拶をして、奥の区画へ。俗に、営倉と呼ばれる懲罰房があり、その一室に、フェイトは寝かせられていた。
「フェイト、気分はどうだ？」
そして、隣のベッド……手枷をされたフェイトが、不満げに上目遣いで俺を見上げる。
「いいわけないだろ。こんなもんつけられて……」
「だよなぁ……」
営倉とはいっても、ベッドもトイレも水道もあり……場末のビジネスホテル程度にはなっている。何より、フェイトは別に囚人ではない。また暴れだすことが無いよう、ここに隔離されているだけだ。

ベッドサイドに置いてあった、リンゴっぽい果物を手に取る。丸かじりにするには皮が硬く、フェイトの小さな口では食べるのに難儀しそうだった。

――しゅぴんっ

「剥けたぞ」

精神状態が不安定なフェイトに、刃物は厳禁。というわけで、指先に魔力刃をちょっとだけ展開し、果物の皮を剥いた。皿に並べ、フェイトに差し出す。しょりしょりと果物を齧りながら、ぽつりと一言。

「……そんな使い方する奴、初めて見た」

確かに、『魔法』というにはアットホーム過ぎる使い方。

「力ってのは、使いようだからな。生かすも殺すも、使う奴の気持ち一つだ」

俺達の魔法は、人間くらい簡単に殺せてしまう。なのはの砲撃しかり、俺の拳しかり、ユーノの治癒魔法だって、使い方を変えれば、人間を内部から破壊できてしまう。

でも、俺達はこの力を、誰かを守るために使うことが出来る。力そのものは、悪ではない。誰が、どのように、どのような目的で使うかが大事なんだ。

「気持ち、一つ……？　でも、ボクは……」

確かにフェイトは、酷いことをした。子猫を半殺しにし、民間人を襲い、傷つけた。

「大丈夫だよ」

その、少し傷んだ金髪を撫でる。

「フェイトの力を、正しく使える時がきっと来る」

「それは、いつ？」

無垢な表情で訊ねるフェイト。

「さぁな。それは、フェイトにしかわからない」

これぱっかりは、本人が気付かないことには意味が無い。誰かに言われるままでは、これまでと変わらない。

「……よくわかんない」
眉をハの字にし、首をかしげた。
「いずれわかるよ。それまで、しっかり考えておけ」
「……わかった」
えらく素直になったもんだ。
「いい子だ」
ぐりぐりと頭を強めに撫でる。フェイトは嫌がるでもなく、されるがまま。
野生動物の餌付けに成功した気分だ。

本当は、アリシアについて何か聞けたら……と思っていたが、それはもういいな。
「ボクのおかーさんはね」
と、思っていたら、フェイトから話し始めた。
「昔は、すごく優しかったんだ」
それは、報告書にも書いてあった。いかれる前のプレシアは、いっそ親馬鹿と言っても過言ではない程に、娘を溺愛していた。
「何度も何度も、優しい声で言うんだ。
『アリシア』……って」
息を呑んだ。フェイトは、気付いている……？
「『フェイト』っていう名前は……一度も、呼んでくれたことが無かったんだよ」
それは、フェイトの自意識と、記憶の齟齬。フェイトにとって、プレシアは優しい母親。でも……その逆は？
「ボクは、おかーさんにとって何だったのかなぁ？」
半ば自分に問いかけるように、そう言う。
「もしかしたら、ボクは……」
――本当の子供じゃ、ないのかもしれない

そう言いたかったのだろう。でも、口にしたら本当のことになってしまうような気がして、言えない。
「プレシアにとって、フェイトが何なのかは……正直、俺にもわからない」
言葉を慎重に選び、フェイトに言い含める。
「でも、俺に……俺達にとって、おまえは『フェイト』だよ」
ぴくりと、フェイトがわずかに身じろぎする。
「なのはのライバルで、アルフの困った主人」
俺にとってのフェイトは……正直、はっきり言葉に出来ない。なんというか……娘（なのは）の喧嘩友達みたいな、そんな感じ。
「だから、そんなに気にするなよ」
「……うん」
あー……俺って、口下手だなぁ。もっと上手く伝えることもできるかもしれないのに。
フェイトは、くるっと俺に向き直り……
「ありがとう……ひでと」
「え……」
ハッキリと……俺の名前を、呼んだ。
「……ちょっと疲れた。寝るね」
ぼすっと枕に顔を埋め、表情が伺えなくなってしまう。
ただ、僅かに見える頬と耳は……真っ赤に染まっていた。
「ああ。またな、フェイト」
きっと明日、全ての謎が明かされるだろう。
もしそれが残酷な真実だったとしても。俺は、全てを受け入れてやろう。
フェイトはもう、俺の身内なんだから。

決意を新たに、俺は独房を出て行った。

第二十三話（後書き）

次回はなのは編です。
早めに上げます。

第二十四話（前書き）

なのは編です。
ちょっとはじけてるかもしれません。

第二十四話

「おはよう、ございます……」
消え入るように小さな声でそう言い、およそ十日ぶりに、教室のドアを開けた。
時刻は八時十五分。ホームルームが始まるまで、まだ少しある。だからなのか、教室のいたる所で、いくつかのグループが談笑していた。
「……」
からから、というドアの動く音に気付き、一斉に私に視線が集まる。
十日ぶりとはいえ、元々クラスに親しい人はいない。誰も、何も感じないはずだが……
「あー、高町さんだ。久しぶりに見た」
「あ、ホントだ、久しぶりー」
「どこ行ってたのー？」
話のネタに飢えているらしい女子のグループに、取り囲まれてしまった。
「あ、あの……？」
完全に及び腰になって、包囲の輪から抜け出そうとするのだが……じりじりと追い詰められて……
――とんっ
壁に背中がぶつかった。
「ね、どこ行ってたの？」
「何してたのー？」
「う、ううぅ……」
早くも帰りたいよぉ……

「はいはい、ストップ」

と、そこに、パンパンと手を打ちながら一人の女子がやってきた。

「あ、望」

「おっはよー」

……八代さんだ。

「もう、高町さん困ってるじゃん。ほら、散った散った！」

わざとふざけて、そのグループを追い散らした。グループの女子達は、きゃーきゃーと楽しそうに逃げ、また別の場所で雑談を始める。

「……」

八代さんの横顔からは、いまいち表情が読み取れない。

「……、……あり、がとう」

「ん」

短いやり取りだけをして、互いの席に戻る。まぁ……こんなもの、だよね。クラスメイトの距離感は。

「ねぇ、なのはさん？」

昼休み。私は廊下で、先生に呼び止められた。

「なに？」

「昨日、『高町さんはいつ登校しますか？』って電話があったんだけど……心当たり、ある？」

私に？

「ううん、全く」

私に用がある人なら、携帯電話に掛けてくるだろうし。

「そう……何かあったら、相談してね？」

結構、先生も変わった。頭ごなしに怒ることも少なくなって、段々と、頼りがいのある教師に……

「富山さん？」

びくぅっ！？　と、富山先生が跳ねた。後ろを振り返り、あから

さまに狼狽する。
「ははは、長谷川先生？　なな何でしょうか？　申し送り事項も、不備は無かったと思うんですけど……？」
「職員室前の掲示板への記入がまだでしたよ」
「あ……」
その掲示板には、各部活動への連絡など……結構、重要な連絡事項を書くことになっている。
先生、大ポカだよ……
「ふぅ……朝に頼んでおいたのですが……仕方ない。書き方のイロハから教えてあげます。来なさい」
「あの、できますから！　ひとりでちゃんとできますからあああ手を引っ張らないで下さいいいい！？　ごめんなさい長谷川先生――！？」
フェードアウトしていった。
「先生……頑張れ」
訂正。まだまだ、道は遠そうだ。

学校は終わったけど……どうしようかなぁ。『報告して来い』って秀人さんに言われたけど……母さん達は翠屋だし。仕事中に行っても、話をする暇なんて無いだろうし。
うん、今日はもう帰ろう。
報告はメールでいいや。

冷蔵庫の中身は……確か、豚肉とじゃがいもがあったと思う。肉じゃがにしようか。それとも、カレーにしようかと、夕食のことをあれこれ考えていたら……

――すっ……

恐ろしく静かなエンジン音を立てて……何やら見覚えのある、黒

い車が止まった。そして扉を開け出てきたのは、やはり見覚えのあるメイド。
ああ……猛烈に、面倒事の予感がする……
「高町様、お迎えに上がりました」
ほらやっぱり！
「頼んでません！」

逃げろー！！

反転し細道に入って……
反則かもしれないけど、飛行魔法をちょっとだけ使って、塀を足場にジャンプ！
瓦屋根を、コンクリート屋根を、モルタル屋根を、飛び越え、乗り越え……着地！
（見えた！）
アパート！　あとは、一直線に……！

「あらあら、足がお早いのですね」

いきなり目の前に、メイドが現れた。
「ひっ！！」
ずざざざっ……と、急ブレーキ。ど……どうやって追いついた！？　車が入ってこれないような細道を、魔法まで使って飛び越えて来たのに！
「ふふふ……わたくし、高町様の健脚ぶりに驚いてしまいますわ。素晴らしい跳躍でした」
見られていた？　つまり……このメイドは、魔法も何も使わず、私の後ろに余裕でついて来ていた……？
「高町様」
すぅ……っと、黒塗りの車が、私の目の前に止まった。

数分前の再現ビデオを見るように、メイドは、全く同じ角度でお辞儀をし……

「お迎えに、上がりました」

その目は言外に……明確に、語っていた。

――逃がしませんよ？

と。

「……はい」

私はガックリとうな垂れ……車に、乗った。

出荷されていく羊の気分が、少しだけ分かった気がした。

「お飲み物はいかがですか？」

車内というか……下手をすれば、そこいらのホテルの一室のような空間で、メイドの接待を受ける。

「いえ……結構です」

緊張し過ぎて、喉を通りそうに無い。

「……何で、今更」

「はい？」

私の呟きに、メイドが頷く。

「今更、何の話ですか」

月村さんか、バニングスさんか……どちらにせよ、最悪の別れ方をした相手だ。酷い誤解をされて、それを解くことが出来なかった。今でも、彼女達にとって私は、大事にしていた子猫を傷つけた、憎い相手の筈なのに。

「それは、お嬢様から直接お聞き下さい」

そして、車に揺られる？こと（恐ろしいことに、全く振動が無か

った）二十分。
「お待たせいたしました」
私は……月村さんの屋敷に到着した。
「ご案内いたします」といったメイドが早々に歩き出してしまったので、後を追う。
はぁ……相変わらず、大きい家だ。
その長い廊下を歩ききり、扉の前へ。メイドがドアをノックする。
「お嬢様、お連れいたしました」
……覚悟を決めよう。どうせ、こちらの心証はマイナスゲージを振り切ってるんだ。今更、何を恐れるものがある。

私は、部屋に足を踏み入れた。すると。
「にゃー……」
「え？」
歓待の声は、足元から上がった。見ると、縞模様の入った灰色の猫が、私の足に擦り寄ってきていた。首には、小さな鈴が着いた赤い首輪。
「……もしかして、」
あの時の？
「そうだよ」
「……ッ！？」
いきなり背後から声を掛けられ、飛び上がってしまった。
「悪趣味だね……覗き見？」
「うん」
開けられたドアの後ろに隠れていたらしい。悪びれもせず、肯定する。そして。
「……」
「バニングス、さん」

腕を組み、むっつりと私を見る、バニングスさんもいた。
「……」じー。
「……」じー。
無言で、見つめ合う。
「……」にこにこ。
なぜか、月村さんがほんわかと私達を眺めている。
「……」じー。
「……」じー。
「……」にこにこ。
そして。

「「だあああああああ！！」」

いい加減、我慢の限界！

「何！？　何なの！？　言いたい事があるならさっさと言いなよ！」

無言でプレッシャー掛けるような真似して何のつもり！？

「あんたこそ何なのよ！　あの日のこと怒ってるなら、ちゃんと抗議しなさいよ！」

「はぁ！？　今更気にしてないことを、何で抗議しないといけないのよ！」

「気にしなさいよ！　あ、あたし、あの後、すっごく謝りたかったのに！」

「知らないよそっちの事情なんて！　気にしてないったら気にしてないの！」

「気にしなさい！」
「死んでもイヤ！」
「「むぐぐぐぐ……！！」」
額をぶつけ合い、至近距離から睨み合い。
――あれ？
ふと我に返り、力を抜く。
「のわぁっ！？」
バランスを崩したバニングスさんが床に倒れそうになり、それを月村さんが抱きとめた。
「……謝りたかった？」
何で？
「あの後、いろいろ考えたんだけど……」
月村さんが、バニングスさんを支えながら話を接ぐ。
「にゃ～」
と、またしても子猫が私に擦り寄ってきた。
「高町さんは、やってないんでしょ？」
その様子にくすっと笑いながら、核心を突いてきた。
「……うん」
やったのは、初めて会った時のフェイトだ。
「一昨日、アリサちゃんがどうしても謝りたいって言って、高町さんのお家まで行ったんだけど……いなくって」
一昨日……私とフェイトが勝負をした日。高町の家には母さんしかいなかった筈だ。
そもそも、私はあそこには住んでいない。
「学校に問い合わせたら、今日登校するって聞いて」
待ち伏せていた……ってことか。

「……そういうことよ」
バツが悪そうに、バニングスさんが言う。
「あ～……！」
がりがりと頭を掻く。何やら懊悩しているようだ。
そして、顔を上げ……
「高町！」
「は、はい！？」
ずかずかと目の前まで歩いてきて、

「ひどいこと言って、ごめんなさい！」

がばっと、頭を深く下げた。
「……」
そのまま、動かなくなる。
これは、私が「許す」と言うまで、動かないだろうなぁ……
「いいよ。許す」
元より、あまり怒っていない。今冷静になって考えてみれば、あんな状況では、私は疑われて当然だ。親友である月村さんが大事にしている子猫を傷つけられ、怒るのも無理は無い。
「……いいの？」
バニングスさんの表情は、まだ不安げだ。本当に許してもらえたのかどうか、図りかねているらしい。
「だから、いいよ」
「でも……」
はぁ……なかなか、難儀な性格をしている。サクッと納得してもらうには……あ、そうだ。思いついた。お互いに納得できる、解決方法。

「バニングスさん。歯を食いしばって」

「……！　わ……わかったわ」
そして、ぎゅっと目を瞑る。スカートをぎゅっと掴んで、これから来るであろう衝撃に耐えようとしている。
「行くよ」
左腕を振り上げ……
――びしぃッ！！

でこピン。
「いったぁ！」
額を押さえ、うずくまるバニングスさん。
「これで許してあげる」
……さすがに、殴るのはやりすぎだからね。
「ふふ……よかったね、アリサちゃん」
月村さんはどうやら、私がバニングスさんを殴る気なんて無いことに、最初から気付いていたようだ。
「くああ……！　効いたぁ～……！！」
バニングスさんが涙目になって、一部分だけ赤くなった額を擦る。
「くすっ……」
何となく面白くて、月村さんと顔を見合わせて笑い……恥ずかしくなって顔をそらした。

あの日と同じ席に座り、紅茶を飲む。
「何だったら、本人連れてきて謝らせるけど？」
そのぐらいは、何とかしよう。
「え……知り合いなの？」
「うん。色々複雑な事情があって、追い詰められちゃったみたい」
もちろん、それで全てが許されるわけではないだろうけど……せめて、多少は印象を良くしてあげよう。
「その子、今は大分落ち着いてきてるし……多分、素直に謝るから。

そうしたら、許してあげてくれないかな？」
……まさか、私がフェイトを擁護することになるなんて、思いもしなかった。何となく、放っておけないんだよねぇ……
「ねぇ……それ、どんな子？」
バニングスさんが聞いてきた。どんな……？　ええと。一言で言えば……そう。

「可愛い子だよ」

見た目もどことなく小動物っぽいし……本性なんて、人に慣れない野生動物そのものだ。
見ていて飽きないし、つい弄くり回したくなる。
猫……ではない。フェイトは、一人でいることを嫌う。だからといって、犬というわけでもないし……あ、そうか。

狐だ。

猫っぽい犬。ピッタリだ。
「……」「……」
二人は、目をまん丸にして私を見ている。
「？　どうかした？」
「アンタ……その子と、どういう関係なわけ？」
ああ……そういえば。忙しくて『お願い』を聞いてもらうの、忘れてた。
「友達……候補、かな？」
そうとしか言いようが無いんだよね。
「候補って何よ……」
どこかゲンナリとした様子。
「え？　だから……『友達になろう』って言ったけど、まだ返事が貰えずにズルズル一緒にいる……みたいな」

「そういうの、世間では『友達』っていうんだけど？」
「そうなの？　でも、向こうからお返事貰ってないし……」
向こうの気持ちも考えないで、友達面するのは、ちょっと……
「少なくとも、私は……」
「私は？」
「私、は……」
カップを手元でいじり、尻すぼみになっていった。
何かを言おうとしているらしいのだけれど、まだ踏ん切りがつかないらしい。

――ボーン、ボーン……

壁掛け時計が、午後五時を指し、鐘を鳴らす。
「ごめんね。そろそろ時間だから行くね」
席を立つ。タイムアウトだ。
明日に備えるためにも、これ以上ここに居座ることは出来ない。
「紅茶、美味しかったよ。ありがと」
今日は、気持ちよくお別れすることができそうだ。
「待って！」
と、バニングスさんに呼び止められた。
「？」
月村さんは、なにやらニコニコと……いや、これはこの人のデフォルトの表情か。
バニングスさんは、椅子の下から包みを取り出し……
「ん！」
ぼすっと胸に押し付けられる。
「……開けていい？」
こくん、と肯定の頷き。ぺりぺりと包装を丁寧に剥がして……あ。
「これ……私の上着」
バニングスさんに破られた、上着。完璧に修繕されているどころ

か、ところどころグレードアップしている。
「……あたしが直したわけじゃ、ないけどさ」
顔を真っ赤にしてそんなことを言うバニングスさん。少し誤解していたけど……本当は、結構いい人だったんだね。
「ありがとう。バニングスさん」
そして、もじもじとして……
「アリサ、でいいわよ。友達は、みんなそう呼ぶから……」
「……え？　え？」
今、何て……？　聞き間違い？
「私は……なのはのこと、友達だって……そう、思ってるから……！　だから、私のことは『アリサ』って呼びなさい！」
聞き間違いではなかったみたい。バニングスさんは、もうヤカンのように真っ赤だ。
「……」
でも、多分私も、同じような顔をしているに違いない。
月村さんに、すっと手を取られる。
「わたしも、『すずか』って呼んで欲しいな。なのはちゃん」
私の返事は……もう、決まっている。
「ありがとう……アリサ。すずか」
これからも、よろしく。
二人に見送られ、屋敷を出る。あの日曇天だった空は、今日は綺

麗な夕焼け。
茜色に染まる道を、スキップしそうなくらい元気良く駆け抜ける。
「はっ、はっ……あははっ」
嬉しくて、もどかしくて、つい笑いがこみ上げてきてしまう。道行くおじさんやおばさんが、怪訝そうな顔で振り返る。でも、全然気にならない。
だって、本当に嬉しいんだから！
「あーはっはっは！　いやっほー！！」
高町なのは。九歳の梅雨。
――――友達が、出来ました！

第二十四話（後書き）

本当は、結構悩んだんですよ。
フェイトと友達になる前に、アリサ達と友達になるかどうか。
なんというか、フェイトを後回しにして浮かれているような気がして。

ハルハルの能力不足で、このタイミング以外ではアリサ達を絡めることが出来なかった、、、というのもあります。

ご容赦下さい。

ご意見、ご感想お待ちしております。

第二十五話（前書き）

劇場版第二作、楽しみです。

第二十五話

――ピピピ、ピッ。

目覚ましの音を、鳴り始めると同時に止める。

「なのは。朝だぞ」

布団をめくり、コアラのように真正面から俺にしがみ付いているなのはを揺り動かす。この寝相、いずれはちゃんと矯正しないとなぁ……

「……う～ん」

もぞもぞと動き……半開きの眼で、目を覚ました。

「もう、あさ……？」

「そ。朝だ」

「……そっかぁ、それじゃあ、デッキブラシで洗わないとねー……」

駄目だこりゃ。完全に寝ぼけてる。

「なーのーは！　起―きーろー！」

頭を掴み、ぐわんぐわんと前後に揺さぶる。

「あうあうあう……！　お、起きた！　起きたよー！？」

よし。

「今日は大事な日なんだろ？　早く起きて仕度しなきゃ、リンディさんに怒られてクロノに皮肉言われるぞ」

「それは嫌ッ！」

がばっと起き上がる。やっぱ、あの二人の名前は効果的だな。

「朝飯どうする？　俺が替わろうか？」

「ううん、大丈夫」

そして、寝巻きのまま台所に歩いていった。

心なしか、うきうきと踊っているようにも見える。

「おはよう秀人。……よいしょっと」

出窓に置いてあるバスケットから、ユーノが危なげなく飛び降りる。そして、変身魔法を解除し、人間体に戻った。

朝食を頬張りながら、神妙な顔になる俺達。

「いよいよ、今日だな」もりもり
「……そう、だね」ぽりぽり
「ほんと、早かったね」もぐもぐ

今日は、プレシアの拠点へ総攻撃を仕掛ける日。
昨日は全員、しっかりと身体を休め……魔力と体力を満タンまで回復させた。

いつ戦闘になっても困らない。士気は高く、負ける気はしない。
「なのは、嬉しいのはわかるけど、しっかり切り替えろよ？」もりもり
昨日、にこにことても嬉しそうな顔で帰宅してきたなのはは、『友達が出来た！』と、とても嬉しそうだった。携帯電話のメールで、桃子達にまで報せていたのだから、本当に嬉しかったのだろう。だからといって、今日の行動に支障をきたすようでは困る。
「うん。それは大丈夫」ぽりぽり
なのはは、しゃきっとした態度で答える。
「秀人、心配しすぎだよ。なのははその辺、ちゃんとしてるって」もぐもぐ
「そうだよな。悪い」もりもり

そう。いよいよ、今日だ。

「お、今日の鮭、濃い目の味付けだな」
塩辛くは無いが、いつもの味付けと違う。

「いっぱい動くだろうから、少し多めに調味料使ってみたんだ」
なるほど。確かに。
「そう？　十分に美味しいけど」
ユーノはマイペースに箸を動かす。
「「「……」」」もりもりぽりぽりもぐもぐ。
……今日、だよな？

朝食を終え……俺達は、アースラのブリッジに集合していた。
「皆さん」
リンディさんは普段の柔らかな態度を封印し、厳格な『艦長』として、俺達の前に立つ。
出撃を控えた武装隊も、モニターで見ているだろう。
「いよいよ、この時が来ました」
偶然にしては出来過ぎていた、あの出会い。
俺達がユーノと出会い、ジュエルシードを始めて封印した夜。あの夜から、全ては始まった。
なのはとユーノ、レイジングハート。一人っきりだった生活に、三人の家族が加った。
負けられない相手……フェイトとの出会い。
幾度も衝突し、何度も負けた。
『友達になりたい』という願いを込めた、全力の勝負。その末に、

遂に勝利をもぎ取った。

フェイトにもまた、負けられない理由があった。それは、母のため。

そして、今。その全ての因縁に、決着が付こうとしている。

「プレシア・テスタロッサの拠点へ、総攻撃を仕掛けます」

ざわ……と、アースラ全体が、にわかにさざめき立つ。

「まず、アースラ所属の武装局員が先行。進入経路を確保し、敵拠点の構造を把握します。その後、少数精鋭の突入部隊が最深部へ乗り込み、プレシア・テスタロッサを確保。以上です」

本当に、至ってシンプルな作戦だ。それだけに、達成は難しいだろう。

武装隊が相手にするのは恐らく……あの時以上の数の、傀儡兵。プレシアの本丸を守る、強力な個体が出現するかもしれない。

さすがに、出てくると分かってさえいれば、以前のように自暴自棄の特攻をするような馬鹿は出ないだろう。

そして、俺達がプレシアを押さえることができれば、傀儡兵は機能を停止するはずだ。

「突入部隊は、四人」

問題は、その突入部隊だが……メンバーは、既に決まりきっている。

「クロノ・ハラオウン」

まずは、クロノ。執務官としての実力・経験共に、前線指揮官を担うに相応しい。目の前の敵を倒すことしかできない俺に、的確な指示を出してくれることを期待する。

「ユーノ・スクライア」

次に、ユーノ。攻撃こそ苦手だが、転送・捕縛・回復・強化など、現地での貴重なバックアップ要員。後援があると分かっていれば、俺も、他の局員も、安心して力を出し切れる。

「高町なのは」

そして、なのは。言うまでも無く、戦力の要。実戦で磨き上げた力は、恐らくは俺を上回る。その自慢の砲撃は、有象無象を寄せ付けない。露払いからトドメまで、オールラウンドで活躍するだろう。

「吾妻秀人」

最後は、俺。ジュエルシード事件の当事者として、また、ユーノの協力者として、最後まで関わり、見届ける義務がある。

「以上の四名を、最深部への突入部隊として編成します。質問があれば、今のうちに」

たった四人での突入。だが、負ける気は欠片も感じない。

「無いようですね。では……」

全員をぐるりと見渡し……

「状況、開始！」

「「「

フェイトは、アースラの廊下を走っていた。懸命に足を動かし、その場所を目指す。

一応、精神状態は安定したと見なされ、アースラ内部であれば、自由に動き回ることを許可されていた。

とはいえ、片腕には未だ無骨な腕輪が装着されており、バランスを取るのが難しそうではあるのだが。

行き着いた先は、アルフの病室。独房を出られたら、真っ先にここに来ると決めていた。

ドアを開ける。

「おや、君は……」

アルフに治療を施していた医務官の男性は、フェイトの姿を見て、軽く驚いたようだった。

「おじさん、アルフの具合は？」

「おじさんって……私はまだ、二十代なのだが……」

少し凹んだような様子で、咳払いを一つ。

「ああ、正直驚いているよ。スクライア君の治癒魔法という要因はあるのだろうけど……数日どころか、もう動いても問題無いレベルにまで回復している」

さすがは、生命力の強いオオカミをベースにしているだけのことはある。

「アルフ……アルフってば」

フェイトが声を掛けると、アルフは目を覚ました。

「……フェイト！？」

がばっと跳ね起きる。確かに、もう動いても問題は無いようだ。

「お願いアルフ。ブリッジってところまで着いてきて」

その切羽詰った様子に何かを感じ、アルフはベッドから起き上がる。

「オッサン、行っていいかい？」

少なからず世話になった相手だからか、一応許可を求めるアルフ。
「だから私は二十代だと……ああ、構わんよ」
諦めたように、退院許可を出した。

ブリッジへのドアを開ける。
「え……？　フェイト！？　アルフ！？」
突入に備え、ブリッジで待機していた秀人たち突入班が、目を剥いて驚いた。
それを無視し……いや、最初から気付いていなかったのだろう。
リンディの目の前までやってくる。
「リンディ、あの……」
恐らく、これがプレシアと話をするチャンスだと考えているのだろう。言葉を選んで、考えあぐねて……出てきたのは、簡単な一言。
「ここにいさせて」

意を決して、リンディにそう頼み込んだ。
本来なら、却下されて当然のことだ。局員でも、協力者でもないどころか、元・容疑者の一味なのだから。牢に閉じ込められないだけでも、異例の温情措置なのだ。
だが、リンディは予想に反し、来ることが分かっていたようで……
「特別よ？」
と、同席を許可した。
「……フェイト・テスタロッサ」
クロノが口を開く。やはり、拒否するのだろうか。だが、クロノが口にしたのは、俺の予想とは違っていた。
「ここにいたいというのなら、条件がある」
リンディは、クロノに任せるようだ。
「……なに？」

フェイトは、どこか不安げに、その『条件』を尋ねる。
それは……
「最後まで、逃げる事無く……見届けるんだ」
真実と向き合え……そう、言いたいらしかった。きっと、何か真実の一端を掴んでいるのだろう。フェイトを見る目が、少しだけ弱弱しい。
フェイトは。
「……うん、頑張る」
その条件を飲んだ。

モニターの中では、今まさに、先行部隊が敵拠点へ足を踏み入れるところだった。

先行部隊の面々は、敵の拠点……その『庭』に該当する位置に転移した。
目の前には、巨大で、禍々しい気配を漂わせる城砦。あそこが、プレシアの居城。
「行くぞ！」
既に、プレシアは感づいているだろう。故に、傀儡兵が出現するより一刻でも早く、城砦へ乗り込む必要があった。

「……妙だな」
だが、予想に反し城砦は、異常なまでに手薄……いや、無防備だった。巨大な鉄扉は施錠すらされておらず、手動で簡単に開いた。絨毯敷きの廊下には罠も無く、妨害される事無く通過することが出来、一直線だった。突き当たった先の扉もまた、人一人で簡単に開いてしまった。
そして、極めつけに。最深部どころか、最も手前の広間。その玉座に……

「プレシア・テスタロッサ！」

プレシアが、悠然と腰を下ろしていた。

◆　◆　◆　◆

「あいつが……」

全ての元凶にして、フェイトの母親。プレシア・テスタロッサ。

もっと凶悪な面構えをしてるのかと思ったが……思っていたより、普通だ。

疲れ、やつれたようにこけた頬。紫色の口紅。どこぞのシャーマンがするような、幾何学的な模様を顔に描いている。化粧の毒々しさを除けば、妙齢の美女といった外見だ。

「おかーさん……！」

フェイトが、モニターに映る映像だと分かっていながら、一歩前に踏み出した。

映像とはいえ、双方向通信によって、向こうとの会話は可能だ。プレシアと話がしたいという、フェイトの心境も分かる。だが、なのはが、その手を掴んで止める。

「ダメだよ」

これ以上、フェイトを傷つけさせない。そんな強い意志を感じさせる行動だった。

「でも、」

「フェイト」

「……わかった」

それも、なのはに静かに見つめられ、引き下がる。

もう少し……静観することにしよう。

◆◆◆◆

「そこを動くな！」

局員達は円状に展開。玉座を取り囲むようにして、デバイスを構える。

「プレシア・テスタロッサ。時空法違反・公務執行妨害の容疑で、あなたを逮捕します！」

対して、プレシアは。

「……愚かしいわね」

ただ、ぼそりと、そう呟いただけ。局員達によってデバイスを突きつけられていることに、全く動揺していない。ただ気だるげに、頬杖を突いている。

だが、局員達が『そこ』に足を踏み入れた途端、態度が豹変した。

「何だ、これは！？」

「……ッッ！！」

局員達は『ソレ』を目にし、息を呑み……手を触れようとした、その時。

「アリシアに触るなアアアアァァアアアアァァァァァ！！」

――ズガアァァン！！

轟く大音声。目を焼く閃光。

「なっ……！？」

驚き、振り返った局員が見たのは……黒焦げになり倒れ付す仲間達。

油断などしていなかった。いつ動いても、即座に鎮圧できるはずだ

った。
それは、わずか一瞬で崩れ去る。

そして。
「私の娘にいいぃ……！　触るなあァァ！！」
悪鬼の表情で迫る、プレシアだった。
「ヒッ……！」
デバイスを構えようとする局員の顔面を鷲掴みにし……異常な腕力で、そのまま宙に掴み上げた。
――ギリギリギリ……！
そのまま、冗談のような膂力で頭蓋骨を締め上げる。
「あ……がァッ……！」
痛みに呻き、プレシアの手を振りほどこうとした拍子に、デバイスを取り落としてしまう。
仲間達は、距離が近すぎて攻撃魔法を撃つことができない。タダでさえ、狭い場所で魔法を撃つ危険は高い上、仲間がプレシアと密着しているのだ。巻き添えにしてしまう可能性も、十二分にあった。
――バチイイィンッ！！
「ぎゃっ……！！」
掴まれていた局員は、ゼロ距離から電撃を食らわされ一発で失神。
「ああっ！！」
ゴミのように放り投げられたその身体は、近くにいたもう一人を巻き込んで床に転がる。
『Ｐｈｏｔｏｎ　Ｂｕｒｅｓｔ』
狼狽する残りの局員へ、攻撃魔法を仕掛けた。
――ドゴオォン！！

狭所での爆発は、その威力を数倍に増し……局員達を蹂躙する。
シールドは砕け、吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。
「……他愛もない」

気だるげに、プレシアが言う。
戦闘開始から、たった数分。それだけの時間で、先行部隊はプレシア一人に敗北した。

「管理局。見えているかしら……？　聞こえているかしら……？」

◆　◆　◆　◆

『管理局。見えているかしら……？　聞こえているかしら……？』

私は、モニターから目を離すことが出来なかった。
プレシアに呑まれていたわけではない。先行部隊の惨状に慄いているわけではない。
ただ、その映像のインパクトに、動くことを忘れていただけだ。
「……フェイト？」
そう。それは、一見フェイトのようだった。
顔は、同じ。そっくりとか、瓜二つとかいうレベルを越えて、同じ。
長く、量の多い金髪。閉じられてはいるが、その両の瞳も、フェイトと同じ赤い色をしているだろう。
だが、共通点といえばその程度。
残るのは、怖気を催すほどの異常な光景だ。

モニターに映る少女は、上下を密封された、瓶のような水槽の中で、薄緑色の溶液に漬かっていた。
胎児のように溶液の中に浮かぶ少女の口からは、気泡が漏れてい

ない。つまり、生きていない。
「う……ッ！」
モニター越しとはいえ、人間の死体を直視してしまい……何より、死体を『娘』と呼び、瓶詰めにして保存している、プレシアの異常な行動が恐ろしくて、目をそらしてしまう。
「あれは……何？　アリシアって、誰？」
「プレシアの、実の娘だ」
私の疑問に答えたのは、クロノだった。
「プレシア・テスタロッサの娘、アリシア・テスタロッサは……三年前に死亡している」
クロノが、諦めたように白状しだす。
「フェイト・テスタロッサという名前は、プレシアの過去の経歴には、一言も登場していない」
だが、と言い、一拍置く。
「フェイトという『名前』は無かったが……『名称』は、存在していた」
名前ではなく、無味乾燥な名称。
「それは、人造生命……クローンの製造」
え……？
「クローン……？」
フェイトと瓜二つの少女。
いや、違う。あの少女がフェイトに似ているんじゃなくて……フェイトが、あの少女に似ているんだ！
「記憶転写型特殊クローン。プロジェクト・ＦＡＴＥ（フェイト）」
フェイト……？

私の小ざかしい頭脳が、勝手に結論へ辿り着いてしまう。
フェイト。フェイト・テスタロッサ。目の前にいるプレシアを母親と慕う少女。記憶の中にいるプレシアは、随分と優しい母親で……でも、ある境を機に、ぱったりとプレシアは愛情を見せなくなっ

た。
その『境』とは、十中八九……
『そうよ。フェイト……お前は、プロジェクトＦＡＴＥの実験体、その第一号……
アリシアの模造品よ』
それは、プレシアによって明言された。
フェイトは、アリシアのクローン。私はなかなか、その事実を受け入れられなかった。
でも、それとは関係なしに、プレシアの口からは悪意が吐き出される。
『私がアリシアを取り戻すまでの間を繋ぐ……ただのお人形』
一言一言が、フェイトの心を抉っていく。
『やっと、アリシアを取り戻す算段が付いた……』
恍惚とし、瓶詰めの娘の遺体を撫でるプレシア。
『だから』
こちらを向き、表情を一変。嫌悪感を隠そうともせず、吐き捨てる。
『おまえはもう、いらないわ。』
どこへなりとも……消えなさい！』
これが……曲がりなりにも、母親の言うことか！？
「フェイト、！」
母親から悪意を叩きつけられたフェイトは……地べたに、ぺしゃんと座り込んでいた。
「なんとなく……わかってたんだよ」
ぽつりと、寂しげにフェイトが言った。

「記憶が、ところどころ抜け落ちていたり、逆に、見たことが無いような光景を突然思い出したり」
この前の、突然のパニック。あれも、そういうことだったの？
「当たり前だよね……だって、ボクの記憶じゃないんだから」
フェイトの記憶ではない……なら、その記憶の、本来の持ち主は……
「これは、あそこにいるアリシアの記憶なんだから」
その内心を知ることはできない。けど、想像する事はできる。
自分の記憶の大部分が、自分のものでは無かった。
『優しい母親』だったプレシアが、愛情を注いでいたのが、自分ではなかった。
フェイトがどんなに頑張っても、プレシアは『優しい母親』になどなってくれない。
それは、アイデンティティの崩壊だ。

「わかってたんだよ。でも……！」
堪えきれず、フェイトの頬を一筋、涙が伝った。
「昔のおかーさんは、優しかったんだ……！　それを、信じたかった……！」
一度堰を切ってしまった感情は、涙となってあふれ出す。私は……慰めも、同情も、何も出来ず、何も言わず……ただ、フェイト身体を、アルフと一緒に抱きしめる。
私と同じくらいの大きさであるはずの身体は、細く、小さく、今にも折れてしまいそうで……
「うえええええぇぇん……！！　えええええぇぇん……！！」
「フェイトッ……！」
打ちひしがれたフェイトの泣き声が、胸に突き刺さる。
『あっははははは……』
耳障りなプレシアの嘲笑が、私の神経を逆撫でした。
「おまえは……ッ！！」

どこまで……どこまでフェイトの気持ちを踏みにじれば気が済むんだ！

「てンめえええええええええええ！！」

アルフが、ぎりぎりと拳を固める。

それを、さも愉快そうに見つめ……

『私はねぇ、フェイト……

アリシアと同じ顔をした、あなたのことが、ずっと、ずっと、ずっと……！！』

プレシアが、決定的な一言を吐き出そうとする。

私は咄嗟に、フェイトの耳を塞ごうとする。

クロノがエイミィに、通信を遮断するように指示する。

リンディさんが立ち上がり、何かを言おうとする。

ユーノくんが、感情を露に叫ぼうとする。

全ての行動の、直前。

――――アースラが……『揺れた』。

比喩的な意味ではなく。心理的な意味ではなく。

ただ、物理的に。極めてアナログに。
物体と物体が衝突した際に発生するエネルギーの波を、私達は『揺れ』として感じ取っていた。

その轟音はプレシアの言葉を引っ込めさせ、発生した揺れは、その場にいた全ての者の動きを直前で硬直させる。

衝突した、二つの物体。

うち一つ。それは、アースラの内壁。
合金とも、カーボンとも、プラスチックとも違う、私にとっては未知の物質。ただ、私の常識を覆しうるだけの強度を持っているということは、間違いない。それも、アースラという艦船の最重要区画である、ブリッジを守るために構築された内壁。

その、非常識なまでに頑丈な内壁に……非常識な大穴が開いていた。

数ミリや数センチなど、植物の根が時間を掛けて侵食するなどという、ちんけな穴ではない。まるで、薄いアルミに、釘を金槌で打ち付けたが如き、大穴。
釘と金槌。二つで一つの、衝突した物体のもう片方。それは……

――秀人さんの、右腕だった。

「……お前は」

ぼそりと、低く、小さく……それでいて、万人の耳に届く声が、

耳朶を打つ。

「……もう、口を開くな」

誰も口を開かない。身じろぎ一つしない。リンディさんも、クロノも、ユーノくんも、アルフも、フェイトも、私も……画面の向こうのプレシアさえ……凍りついたように、口を閉ざしていた。

第二十六話（前書き）

エグい話が多分に含まれます。
耐性が無い人は読み飛ばしてください。

第二十六話

『口を開くな』。

それは、プレシアに向けて発せられた命令のはずだった。

だというのに、なのは達は、一歩も動けない。

俯いたまま、めごっ……と、肘までめり込んだ腕を、壁から引っこ抜く。

魔法の発動気配は、一切無かった。つまり、正真正銘……単純な腕力だけで、壁を穿ったのだ。当然、引っこ抜いた腕は無傷では済まない。

握り固められた拳は、自らの握力か、衝突の所為か、グチャグチャにひしゃげていた。

あるはずの無い関節が急造され、骨が、肉を突き破って露出している。

それは徐々に回復はしているが、痛くないわけではないだろう。痛覚が無くなるわけではないのだから。

痛みを脳に伝えるべき神経が千切れたか……もしくは、怒りが痛みを振り切ったか。恐らくは、後者だ。

――ボタッ……ボタタッ……

噴水のように噴出した血が、床に鉄錆びくさい水溜りを発生させる音と。

――パチ……パチッ……！

何かが弾けるような音。

その二つだけが、だだっ広いブリッジにある、唯一の音だった。

アースラ内部で、訓練室など限られた場所以外では魔法は使えない。アースラに搭載された装置で、魔力の結合を打ち消されてしまうからだ。

なのに……秀人の身体を取り巻くように、空色の光が立ち上り、弾けるように帯電している。

魔力は……魔法の力は、多分に感情や、精神力に影響される。

普段なら、いくら秀人やなのはといえど、ここで魔法を使うことはできない。

だが、今は……秀人の魔力は感情に呼応し、異常なまでに高まっている。

時折稲妻が爆ぜ、アースラのエネルギーと、秀人の魔力がぶつかり合っていることを示していた。

そして、その色が空色……秀人の魔力光だということは、アースラが、秀人の魔力を打ち消しきれていないという、なによりの証だった。

感情。それは……『怒り』だ。

地底のマグマのように煮え滾り、天上のフレアのように燃え盛る……圧倒的な、いっそ暴力的なまでの、『怒り』。

その怒気に中てられ……なのは達は、呼吸することさえ、忘れていた。

いや、違う。この『怒り』に触れて、矛先が自分に向いてしまうこ

とが怖くて……何も、出来なかった。
『ふ……ふん！　お前が何を言おうと……私の邪魔はさせない！』
最初に動いたのは……動いてしまったのは、プレシアだった。
秀人が顔を上げる。さながら、獲物を捉えた肉食獣のように……
『怒り』の全ては、プレシアへと向けられた。
「口を開くなと……」
幸いなことに、なのは達はその表情を見ることは無かったが……プレシアは、真正面から見てしまった。
――憤怒に染まる……鬼のようなその顔を。
「言わなかったか……？」
ずしん、と、重力が増したかのような錯覚を、なのは達は感じた。威圧感、圧迫感……そういうレベルではない、文字通りの『重圧』が、なのは達を真上から押し潰した。
『ひっ……！！』
プレシアは明らかに恐怖を覚え、一歩後退する。その時点で、既に勝敗は決していた。
『な……舐めるなあああああ！！』
その恐怖を振り払うように、プレシアがデバイスを凪ぎ……
「敵拠点に、大量の魔力反応……ランク、いずれもＡＡからＡＡランク……」
蚊の鳴くような声で、エイミィが報告する。この状況で発声できただけ、エイミィは立派だ。フェイトなど、とうに限界に達し、意識を失っているのだから。
「エイミィ」
ぞっとするほど静かな声で、秀人が言う。

「先行部隊は全滅した。出撃する」
凍り付いているリンディに構わず、確定事項のように、そう言った。
「あ……あの、ちょっと待って。さっきのゲート、潰されちゃって……新しく開くのに、ちょっとだけ時間が……！」
「何分だ」
単刀直入に、そう聞く。
「にじゅっぷん……」
「十分でやれ」
「は、はいッ！！」
エイミィは、青ざめた顔と涙目でコンソールを叩き始める。

そして、しばし沈黙の後……ふと、秀人が表情を変えた。
「……準備が出来たら呼んでくれ」
それは、いつもの秀人の声色。
もちろん、努めてそういう声色を作っているわけだが、なのは達は、それに気付かなかった。僅かながら自制心を取り戻し……端的に言えば、我に返ったのだろう。
だが、なのは達はそんなことを考えるより先に、重圧から開放されたことに安堵し、久方ぶりとなる呼吸を行う。
「はいっ！　お任せ下さい！」
エイミィは慣れない敬語と共に、びしっと敬礼した。
「……」
その背中に、なのはが声を掛けた。
「秀人さん……だよね？」
なのはは、そう言ってから、あまりにも馬鹿な質問をしてしまったと気付いた。
だが、それを責められる者が、誰一人としてここにいただろうか？
誰よりも秀人を信頼するなのはでさえ、そう感じずにはいられな

かったのだ。
秀人の怒りには、それだけ凄まじいものがあった。
プレシアの所業に、堪忍袋の尾が切れた――ただそれだけとは、到底考えられない。無理やり言葉に表現するとしたら……そう。
自らの信ずる何かが、穢されたかのようだった。

「……」
なのはは、恐々と確かめるように……秀人の指先をそっと掴む。
そうして振り払われないと確認し、ぎゅっと両手で掴む。
秀人もそれを握り返し……ようやく、なのはに振り返った。
「……ごめんな。怖がらせて」
ぽん、といつものように頭を撫でられる。
「……！」
たまらず、人前であるということも忘れ、秀人の腰のあたりに抱きついた。

「ごめんね。つい……」
なのはが、顔を赤らめて身体を離す。まだ僅かに指先を掴んだままというのは、単に甘えているだけだろう。
「もう手はいいの？」
ユーノが秀人に聞く。
「このとおり」
ひょいと持ち上げられた右手は、傷跡一つ無く治癒していた。その手で、床にへたりこんだフェイトを、横抱きに抱え上げる。
「ユーノはアルフを」
「ああ、わかった。……ほら、アルフ」
「すまない……」
そしてユーノは、腰砕けになったアルフに肩を貸し、立ち上がらせる。

そのままブリッジを後にし……クロノも、その後を追った。

◆　◆　◆　◆

秀人たちがブリッジを出て行った途端、空気が一気に弛緩した。

「こ……」

ぴたりと、作業する手を止めるエイミィ。

「怖かったぁ……！」

べしゃっ……と、そのまま突っ伏す。

「……」

だが、リンディはそれを責めることはしない。というより、できない。リンディもまた、膝が震えて立ち上がることができないからだ。

管理局員として、提督として、アースラ艦長として……決して少なくない数の修羅場を潜ってきたはずだった。

だが、あれは……埒外だ。あそこまで純粋で、高濃度な『怒気』は、未だ経験したことも無い。

『殺気』であれば、まだ耐えられた。戦場では、大なり小なり必ず経験するものだ。『殺してやる』という、言ってしまえば分かりやすい感情に過ぎない。

だが、『怒気』は違う。何をするのか、全く想像する余地が無いのだ。それだけに、恐ろしい。

それに加え、あの魔力。

確かに、感情に比例して魔力が高まるというのは事実だ。

しかしそれは、数値にして数パーセント、最大でも十パーセントに届くかどうかというレベルに過ぎない。あんな……艦船の阻害効果を上回る程の増幅など、あるはずがない。

オーバーSランク魔導師の魔力量は、平均して２００万前後。魔力量で強さの全てが決まるわけではないが、一つの基準にはなる。

アースラや他の次元航行艦には、魔力の結合を阻害する……ＡＭＦ（アンチ・マギリング・フィールド）の発生装置が搭載されている。

まだ新しい技術のためサイズは巨大であり、十メートル四方もあるが、効果は折り紙付きだ。

最大魔力値３００万以下の魔導師……すなわち、現時点で確認されている全ての魔導師は、魔法の発動すら困難になる。まして、『無意識に流れ出した魔力が、体表に目視で確認できる』レベルの魔力結合など、誰にも……リンディにもできない。しかも、秀人はそれを無意識の内に行っていたのだ。

つまり、あの時点で秀人の魔力は、３００万を軽く超えていたということになる。

以前計測した際の、秀人の魔力量は１５０万前後。当然、これだけでも非常に高い数値なのだが……その、更に二倍。

記録が残っているだけでも、それだけの魔力を持った人間は確認されていない。

そう、まさに……

「……非常識だわ」

リンディには、そう漏らすことしかできなかった。

◆　◆　◆　◆

「ありがとう」

フェイトをベッドに寝かせていたら、アルフに礼を言われた。

「何がだ？」

「あの時、プレシアの言葉を遮ってくれて」

……ああ。

「もし、最後まで言われていたら……フェイトは持たなかった」

あの時プレシアが言おうとしていたのは、きっと……フェイトを決定的に殺す言葉。

ああしなければ、アルフが言うように、フェイトは正気ではいられなかったはずだ。

とはいっても、さっきキレたのはそういう計算じゃない。本気の本気で、俺はプレシアに対して怒っていた。いや、今も、プレシアへの怒りが渦巻いている。

なのはが怖がるから今は抑えているが……戦闘になったら、抑えきれるとは思えない。

まぁ、その辺はクロノが上手く手綱を握っていてくれると信じよう。

「なぁ、頼みがあるんだ」

頼み……？

「何だよ。言ってみろ」

「アタシも、連れて行ってくれ」

……

「それは、」

言葉に詰まる。

アルフは……回復したとはいっても、それはあくまで、普通に過ごすなら、という前提での話だ。戦闘なんて、とんでもない話だ。

「いいんじゃない？」

「ユーノ！？」「ユーノくん！？」

思わず、なのはとハモる。いきなり、何を言い出すんだ。

「行きたいっていうなら、連れて行ったほうがいいよ」

「でも……まだ、ダメージが」
残っている。そう言おうとした俺の眼前に、目にも止まらない速さで、拳が寸止めされた。拳の主……アルフが、不敵に笑う。
「ダメージが……なんだって？」
……一応、雑魚の相手くらいはできるか。でも、持久戦は厳しい。
「……クロノ」
俺は、クロノに意見を聞いた。
「おい、フェレットもどき。きみには勿論、考えがあるんだろうな」
クロノはまず、言いだしっぺのユーノに確認を取る。
「簡単だよ。僕がアルフとワンセットで行動する」
サポートには秀でているが直接的な攻撃力に乏しいユーノと、攻撃力はあるが長く戦えないアルフ。確かに、理にかなっているかもしれない。
「……言っておくが僕も、自分のことで手一杯だ。手助けはできないかもしれないぞ。それでも、やるのか？」

「「やる」」

答えは、随分とあっさり出た。
ユーノとアルフは声を揃え、頷いた。
「……ああ、わかった」
微妙ながら、戦力が増えた。
「秀人さん」
なのはが、こしょこしょと小声で話してくる。
「イザというときは、私がフォローするから……」
「ああ、俺も気をつける。
もしアルフに何かあったら、フェイトに顔向けできないからな……」

それと、もう一つ。
「先に行ってくれ。すぐ追いつく」
俺はきびすを返し、元来た道を逆走する。
「どうした？」
「忘れ物、だよ」
それも、かなり大きな。
「急げよ」
クロノは、さっさと行ってしまった。察しのいい奴で助かる。

「フェイト」
俺は、フェイトの寝るベッドに腰を下ろす。
「……寝ていてもいい。俺の独り言に、付き合ってくれ」
俺の今からやろうとしていることは、ただの自己満足の不幸自慢だ。
生傷を他人に晒して悦に浸る、馬鹿な行為に過ぎない。
でも、それがフェイトに必要なら……俺は、喜んで馬鹿になろう。

「俺の身体のことは、もう知ってるだろ？」
ベッドの脇に置かれた、金属製のポッドを手に取る。
――メキッ……ガキキッ……
それを握り潰し……手の平サイズにまで圧縮する。

「この馬鹿力は……別に、欲しくて手に入れたものじゃないんだ」
そう。こんな力なんて、要らなかった。俺はただ平凡に……両親と共に過ごしたかっただけだったのに。この身体のせいで……俺は何もかも失った。

「骨格が筋力に耐えられるようになるまで、ベッドから一歩も動けなかった」

痛みで暴れないよう、特製のベルトで全身をベッドに拘束され、縛り付けられた。
食事も排泄も治療も、全てベッドの上。

「一日に何度も骨が折れて、靭帯が千切れて……治療費も、かなり掛かった」
際限の無い支出に、家計は火の車。父さんは病気を患い、母さんは心を病んだ。
仲の良かったおしどり夫婦。そのはずなのに、いつも廊下で言い争って……いや、不満をぶつけあっていた。
「母さんが言ってたんだ」
もう、俺に聞こえることも気にせず、母さんは大声で叫んだ。

「『あんな子なんか、産まなければよかった』……って」

どんな怪我よりも、あの言葉が痛かった。だから、願った。
「……毎日毎日、鎮痛剤で薄らボンヤリとした頭で、カミサマなんてもの相手に、必死に願ったよ。
『身体を丈夫にしてください』
『怪我をしても大丈夫なようにしてください』
……って」
実際、カミサマはいたのだろう。俺の願いは、聞き届けられた。
「身体が筋力に馴染んで、どういうわけか、怪我がすぐに治るようになった」
俺は喜んだ。これで、母さん達に迷惑がかからない。家に帰れる……そう思った。
「でも、遅かったんだ」
父さんは、母さんは……もう、俺と一緒にいることさえ、嫌にな

っていた。
「俺は、遠い場所にある施設に入ることになってた」
ハッキリと言えば、厄介払いだ。

「俺と同じような境遇のヤツが、結構いたよ」
親に捨てられた。親が蒸発した。親が死んだ。親戚中をたらい回しにされて来た。
男も女も、野良犬みたいにギラついた目をしていたっけ。
自分より年下を、自分より身長が低い奴を、成績が悪い奴を、自分より駆けっこが遅い奴を……自分の『格下』を、虐げる対象を、いつもいつも、捜し求めていた。
俺は、私は……コイツよりはマシだ、と慰めるために。

「でも、そんな奴らも……俺のことを怖がって、近づこうとすらしなかった」
腕力というのは、子供社会の中では絶対だ。それが、子供相応のものだったら、腰巾着が擦り寄ってきたりもするのかもしれない。
だが……グランドピアノを片手で持ち上げ、コンクリートの壁をぶち抜くような力は、明らかに異質で、異常で……異端だった。

「大人達には猛獣扱いされて、檻の中に閉じ込められた」
鋼鉄の扉の奥の、鉄格子の窓しかない薄暗い部屋に閉じ込められ、食事もトイレも睡眠も勉強も、全て一人で済ませていた。
扉の横にある、食事やらが差し入れられる小窓が、外界との唯一の接点だった。

「誰かと会話することも、滅多に無かった」
娯楽用に差し入れられる、時代遅れの漫画や小説。
その中に自分を登場させ、架空の友情や愛情で、自分を慰め続けた。

漫画の中のヒーローが、自分をこんな牢獄から連れ出してくれるのだと、妄想に耽っていた。でも、そんなことは有り得るはずも無く……

「何年かそこで過ごして……高校卒業の資格を取ったのと同時に、そこを追い出された」

就職し自立できるように……正確には、国からの支援金が打ち切られる年齢になると同時に、俺は呆気なく牢獄から解放された。

結局のところ、俺を助けてくれるヒーローなんて現れず……ただぞんざいに、扱い方の分からない『自由』を投げ渡された。

「必死で、生きるために駆けずり回ったよ」

泥水を啜って生きるのも、野垂れ死ぬのも、自由だった。

何者にも拘束されない代わりに、誰にも支えてもらえなかった。

今の職場に落ち着くまで、各地を転々とした。日雇いから短期……時には、合法なのかどうかも分からないような仕事、明らかに違法な品物の運搬まで。モラルなんかとうに無くなり、ただその日の食事と、雨風を凌げる場所を見つけるだけで一日が終わっていった。

俺とそう年の変わらない奴らが……何の心配事も無いような能天気な顔で、親に洗濯してもらった綺麗な服で、ただ遊ぶ金を稼ぐための気楽なバイトをして、買ったアクセサリーをジャラジャラさせて俺の横を通るたび……殺したいほど、妬ましくなった。

「今の職場に拾ってもらわなかったら、俺は泥棒か、人殺しになっていたかもしれない」

そんな俺を拾ってくれたのが、今の上司……カントクだ。

日雇いの仕事現場の縁で、素性の怪しい俺を雇ってくれた。

企業を立ち上げたばかりで、とにかく若くて体力のある奴が必要だったのだと言った。

実際には、カントクの会社には俺を雇う余裕も、俺の保証人にな

ってアパートの敷金礼金を立て替える必要も、全く無かった。
一応は社長であるはずのカントクさえ、生活費だけが給料のような、ギリギリの生活が一年以上続いていたのだから。

「……しばらく後に、探偵を雇ったんだ」
会社がようやく軌道に乗り始め、『貯蓄』という言葉の意味を、身をもって実感した頃、
それでも生活費を差し引いたら殆ど残らないような給料を……なけなしの生活費を削って、何ヶ月も貯めて、ようやくその資金が溜まった。
「父さんと母さんを探してくれ……って」
散々な目にあってきた。
やっと救われる。そう思った。
離れ離れだった両親と再会して、ぎこちなくても、親子の関係を取り戻し、また三人家族で暮らせる。
俺には、誰よりも幸せな未来が待っていると……そう信じていた。

「一ヶ月くらいで見つかったけど……遅すぎた」
カミサマはいなかった。
いたのは、俺に他人分の不幸を押し売りする、『現実』という名の悪魔だった。
俺がこんな身体になったのも、交通事故で死ななかったのも……全ては、俺を絶望に突き落とすために仕組んだ、悪魔の脚本だったのかもしれない。

仕事熱心だったのか、おしゃべりだったのか。あの探偵は、現場の状況まで、詳しく教えてくれたもんだ。
「母さん、は……」
不意に、目の前が滲むが……それだけだ。もう、流れるものは、何も無い。

「俺……俺を、施設に預けた、その日の晩に……」
あの時、引き止めていれば……それをしなかったばかりに、母さんは。

「首を吊って……死んだんだ」

俺が生まれ育った家で。いつも食事をしていた部屋で。排泄物を垂れ流しながら、白目を剥いて死んでいたそうだ。
それを見つけたのは、病身の父さんだった。
「父さんも、その後すぐ……」
その父さんは、次の月に病気をこじらせて、一人で死んだ。今の俺が暮らしているような安普請のアパートで、孤独死していたらしい。
もう、病気を治す気も無かったんだろう。病院の往診記録は、母さんが死んだ日で、ぱったりと途切れていた。

「俺の家は、とっくに取り壊されて無くなってた」
自殺者の出た借家など、買い手も借り手も付くはずが無く……大家によって取り壊され、駐車場になっていた。
毎朝寝起きしていたベッドも、食事をしたリビングも、窓からの眺めが良くて気に入っていた屋根裏部屋も、何もかも、何一つ、残っていなかった。

「だから、俺にはもう……やり直せない」
やり直すべき両親はもう、この世にいないのだから。
「どんなに泣いて後悔したって、あの日には戻れない」

――何度、夢に見ただろう。

あの日、道端で遊んでいなければ。
車に撥ねられなければ、今でも俺は普通の人間で、普通の人生を歩んでこられたのかもしれないと。

――何度、夢に見て泣いただろう。

あの日、母さんを引き止めていれば、母さんは死なずにすんだかもしれない。
父さんと一緒にちゃんと病気を治して、二人だけでも幸せに過ごせたかもしれないと。

でも、もう遅い。

俺の家族は終わってしまった。どうしようもない程に、壊れてしまった。もう、直すことも、取り戻すこともできない。
「でも、フェイトは……まだ、やり直せる」
フェイトの母親は、プレシアは……まだ生きているのだから。
「俺がプレシアの首根っこふん掴まえて、フェイトの前に連れて来てやる」
どんな事情があろうと。どんな理由があろうと。
「プレシアに土下座させて、今までのことを謝らせる」
全ては、それからだ。
「もし、それでも無理だったら……どうしてもプレシアを許せなかったら」
フェイトは、プレシアにされたことを覚えているだろう。
もう、盲目的に従うことをやめたフェイトは、ちゃんと不満を訴えることができる。怒ることができる。そして、その結果、プレシアとの決別を望むなら……
「アルフも連れて、俺ん家に来ればいい」

俺が、フェイトの家族になる。

「なのはと、ユーノと、俺と……五人で、楽しく暮らそう」

きっと、楽しい。寂しさなんて、感じる暇も無いだろう。

フェイトは毎日、なのはやユーノ、アルフと遊んで、喧嘩して、何度も仲直りを繰り返して……今よりもっと、絆を深めていく。

「皿を突っつきあって食事して、取り分が多いの少ないの、つまんないことで騒いだりさ」

――俺がしたかったこと。家族みんなでの食事。

「ああ、学校に通うのもいいな。友達を作って、放課後、おしゃべりしながら道草食って帰るんだ」

――俺が出来なかったこと。普通の学校生活。

「誕生日には、みんなで盛大にお祝いするんだ。でっかいケーキ買って、年の数だけ蝋燭立てて、その日の主役が一気に吹き消したりして」

――俺がしてもらえなかったこと。誕生日のお祝い。

したかったことを、できなかったこと、してもらえなかったこと。

全部、全部……俺が、叶えてやる。

「俺が、嫌でもフェイトを幸せにしてやる」

時計を見る。丁度、十分が過ぎていた。
「独り言は、これでおしまい」
――コトン……
ベッドの脇に、それを置く。
フェイトの魔力光と同じ、黄金色のトライアングル。
バルディッシュ。クロノからガメておいた。
一人では心細いに決まってる。常に傍にいて、アルフと共にフェイトを守ってきた、フェイトの相棒なら、きっと。
『フェイトのこと、頼んだぞ。バルディッシュ』
届くはずの無い念話を、願掛けのつもりで送ってみる。

『言われるまでも無く』

……え？

頭に直接響いた声……念話に驚き、振り返る。
だが、フェイトは変わらず眠ったままで、バルディッシュも沈黙している。
聞き間違い……だよな。
マスター登録されていない俺は、ＡＭＦ下でマスター登録をしていないデバイスと、念話を行うことはできない。

……ま、いいか。

「行ってくる」

さぁ、行こう。フェイトの幸せを、取り戻しに。

◆　◆　◆　◆

秀人が出て行ってすぐ、フェイトはぱちっと目を開けた。どうということはない。最初から……正確には、廊下を秀人に抱えられて移動していた時には、もう目を覚ましていたのだ。狸寝入りならぬ、狐寝入りというやつだった。

「……秀人も、辛かったんだ」

ベッドから降り、バルディッシュを手に取る。ろくにメンテナンスもされず、戦闘を続けたせいか、細かな傷や罅割れが痛ましく刻まれていた。

――キンッ……

デバイス形態に変形させる。

「あはは……ボロボロ、だね」

そう。デバイス形態のバルディッシュは、あちこちがひび割れ……すでに、限界近くに達していた。武器としての強度を保っているかどうかも怪しい。

「ボクといっしょだ」

見てくれだけの、ポンコツ。

「おかーさんは、ボクのことなんて、最初から見てなかったんだ」

自分がプレシアの娘だというのは、ただのまやかしで。

「おかーさんが大事だったのは、アリシアだけだった」

自分は、アリシアの模造品だった。

でも。

「あいつらは……『ボク』を見てくれた」

アリシアの模造品ではなく、一人の『フェイト』という人格として。対等に扱ってくれた。

「あいつは……こんなボクでも、友達になってくれるのかな」

高町なのは。フェイトの宿敵で、ライバルで……『友達になりた

い』と言う、変な奴。

「あいつは……こんなボクでも、幸せにしてくれるのかな」

吾妻秀人。『嫌でも幸せにしてやる』と言った、不思議な奴。

「ボクは……どうすればいいんだろう」

彼に、彼女に……報いたい。でも、どうすればいいのか分からない。

「何から始めたらいいんだろう」

誰かのために、何をすればいいのか。

『Ｓｉｒ.』

迷える主に、寡黙な戦斧が答えた。

『私は、造物主の願いを託され、それを実現しうる者として作り出されました』

「リニスの……？」

バルディッシュの製作者。プレシアの使い魔にして、フェイトの育ての親……リニス。

「リニスは、何て……？」

ある日、忽然と姿を消してしまった。何も言い残す事も無く。

彼女がバルディッシュに託した願いとは、一体……

『――あなたの未来を切り開く剣であれ。

――あなたの生涯を支える杖であれ。

――あなたのために強くあれ。

……そう、託されました』

「……リニス」
目を閉じ、メッセージを反芻する。その目蓋から、一筋の涙が流れた。
「そうだよね。今のボクを見たら、がっかりしちゃうよね」
うじうじと悩んで、二の足を踏むような自分が、リニスに誇れる姿なわけがない。
「……うん！」
顔を上げたフェイトは、吹っ切れたような笑顔を見せた。

バリアジャケットを装着。
「ボクは、もう一度強くなる」
己の覚悟を確かめる。
「リニスに、アルフに……誇れる自分になるために！」
傷だらけのバルディッシュを手に立ち上がったフェイトの姿は、凛々しく、気高く……

「行こう、バルディッシュ！」

誰よりも、美しかった。

バルディッシュのコアが……黄金色に眩く輝いた。
光は広がり、バルディッシュを包み込む。そして……
――バキィンッ……！！
『Ｒｅｃｏｖｅｒｙ　ｃｏｍｐｌｅｔｅ』
全ての傷を、完全に修復した。

誰もが、知る由も無いだろう。
秀人がぶち抜いたブリッジの壁。丁度その場所に、ＡＭＦ発生装置のコントロールユニットがあったことを。そして、秀人の拳が、

寸分違わずそれを砕き、ショートさせていたということを。全ては、偶然に過ぎない。だが、その出来すぎた偶然はまるで、フェイトを促しているかのようだった。

何も阻むものは無く、フェイトは魔法を発動する。

『いいのですか？　使ったことの無い魔法です。失敗すれば、命を落とす危険もあります』

そう。フェイトは、転移魔法を使ったことがない。バルディッシュに登録されてはいるものの、いつもアルフにまかせっきりで、練習さえ怠っていた。

魔法の失敗は、直に命を危険に晒す。

ここで大人しく待っていれば……そう呟く、弱気な自分がいる。

だがフェイトは、自分の弱さを、己の意思でねじ伏せた。

自分はもう、一人ではないと……

「ボクを支えてくれるんでしょ？」

『……Ｙｅｓ．』

頼りになる相棒が、支えてくれると気付いた。だから……

「頼りにしてるよ、バルディッシュ！」

『Ｙｅｓ　ｓｉｒ　！』

フェイトはもう、迷わない！

――ヴォンッ！！

そして立ち上る、黄金色の魔力光。

『術式構築・確認。座標入力・確認。必要魔力充填・確認。オールクリア』

驚くほどスムーズに、魔法は発動段階に入る。

フェイトの魔法の才覚が、意志と完全に合致した瞬間だった。

『主。その力は、何のために？』

バルディッシュは、再び主に問う。

何のために戦うのか、と……

「当然！」

――その力を正しく使える日が、きっと来る。

（今が、その時だ）

フェイトは迷い無く、バルディッシュの問いに、あの日の言葉に……今こそ答える。

「ボクの友達を、助けるために！！」

――フェイトは、飛翔する。

第二十六話（後書き）

今回は、かなりの難産でしたが、、、ようやく、フェイトを更生させることができました。
長かった、、、

第二十七話（前書き）

待たせた割に、短くて申し訳ありません。
精進します。

第二十七話

キーを差込み、イグニッションキーを回す。
この先必要の無いと分かっていても、ついライトやウインカーの灯火類を確認してしまう。セルスイッチを押すと、ボンッ……と、低音と共にエンジンが始動し、アイドリングを始めた。
「向こうの状況はどんな感じだ？」
『ゲートはギリギリまで遠ざけたんだけど……やっぱり、転移してすぐ、敵兵に襲撃されると思う』
ま、今回はそうだよな。先行部隊があんなに簡単に突入できたのは、きっとプレシアが舐めきっていたからに違いない。事実、瞬殺だったもんなぁ……

ヴォンッ、ヴォンッ……と、エンジンを空ぶかしして、調子を確かめる。
「各部、問題なし……と」
俺がシートに座り、なのはがタンデムシート。ここまでは、いつもの乗り方だ。
ただ、今日は……
「せ、狭い……！」
ユーノは俺のポケットにねじ込まれ。
「アルフ、ちゃんと掴まるんだよ」
「ああ、そうする」
なのはの後ろに、アルフが座り。
「……走るのか？　この状態で」
「カワサキなめんな」
クロノがリアキャリアの上に立ち、俺の肩に手を伸ばすという…
…どこの途上国のカブだと言いたくなる様な、凄まじい曲乗りだった。

飛行魔法でバラバラに飛んでいたのでは、飛行スピードの差でばらけてしまうし、アルフは普段のスピードを出せない。
だからといってアルフを抱えて飛ぶだけの余裕は誰にも無く……こうして、俺のバイクに五人ですし詰めになっている、というわけだ。
大半が子供と女。それぞれの体重は軽いが、五人合わせれば二百キロ近い。
６００ｃｃのエンジンを積んでいるとはいえ、いつもの速度が出せるのかどうか……ハイオク入れて、エアクリ外して直キャブにして、マフラー換えて……と、突貫工事でパワーアップしてみたが、傀儡兵の追撃を振り切れるかどうかは、正直疑問だ。
もっとパワーのあるバイクも用意できないことも無かったんだが（管理局は予算潤沢）、身体に馴染まないバイクにいきなり乗せられて、いつもの運転ができるかどうかわからなかったから、いつものバイクを使う流れになった。
『あと五秒で転送するよ』
エイミィの声を聞きつつ、両足でバイクをしっかりと支える。

『３』

『２』

『１』

――ガオオオオオオオオオオッ……！！

レッドゾーン寸前まで吹かして……
『みんな、死なないでね！』
ゼロ。同時、目の前の景色が歪み……次に見えたのは。

『『『『グオオオオオオオオオ！！』』』』
傀儡兵どもの、一斉攻撃！！
「うおおおおおおおおおおお！！」
一気にクラッチを繋ぎウイリー気味に急発進し、その攻撃をかわす。
――キュゴガガガガガッッッ！！
無数に飛来したエネルギー弾や投擲の雨が、直前までいた場所を抉り、吹き飛ばした。

雑魚には構わず、一気に門に突撃する。蹴散らすのは簡単だが、温存しておいて損は無い。この先どんな敵がいるのか、全く分からないのだから。
でも……
（加速が鈍い！）
スピードメーターは、時速１２０キロあたりで停滞していた。やっぱり、過剰積載のツケが回ってきたか……！
「チッ……！」
速度重視の飛行タイプが、確実に距離を詰めてきている。
――ドンッ！　ドンッ！
「っと！！」
なんとか、かわしたけど……さすがに、体重移動が難しすぎて傾け辛い。
「どうする？　ここでバラけて戦うのか？」
クロノは、流れ弾をひょいっと軽く避けながら聞いてくる。
一応、門までの距離は縮まってはいるけど……今こうしている間にも、門のあたりに大量の傀儡兵が集まってきている。このままのペースでは、あの日と同じか、それ以上の数の傀儡兵を相手取ることになってしまう。
だからといって、バイクより速く飛べる奴はいない。
ま、しょうがないか。

「クロノ、降りるぞ」

かくなる上は軽量化だ。

一番重い荷物……俺とクロノが降りれば、まだ加速できるはずだ。

「は？」

クロノが怪訝そうな顔をする。

「なのは、後よろしく」

「え？」

なのはの手をハンドルに導き、しっかりとスロットルを握らせ……

「とうっ！」

クロノの腕を掴んで、バイクから飛び降りた。

「えええええええええええええええ！？」

ギアチェンジとコーナリング、ブレーキのことを考えなければ……ただしがみついて、スロットルを開けてさえいれば、バイクは直進する。

「ひ、秀人さあああぁぁぁぁ……」

フェードアウトしていく、なのはの叫び。

「っと！！」

クロノは危うげ無く着地。

――ブオオオオオオオッ……！

おー、ちゃんと走ってるな。とりあえず一安心だ。

「……大丈夫か？」

心配性な奴だなぁ……

「大丈夫だって。自転車に乗れればバイクにだって乗れる」

あとは、なのは次第だ。いつもタンデムシートに乗っていたし、直進するだけなら、さほど問題は無いと信じよう。

「さぁて……」

――ギンッ……
魔力刃を構築。
目の前にいる数多くの傀儡兵を、正面から睨みつける。
「ちょっとばかし、足止めさせてもらおうか？」

プレシアの居城のどこかには、きっと傀儡兵の生産プラントがある。でなければ、あれだけの兵力をたった一人で生産・維持できるとは思えない。
俺達がここで大多数の傀儡兵を足止めし、その間になのは達が生産プラントを潰せば、あとはプレシアまで一直線だ。
「水を差すようで悪いが……生産プラントがあの中にあるのか、まだ確定したわけじゃないぞ。別の場所にあったり、最悪、生産プラントなんてそもそも無いかもしれない」
クロノが言うことも尤もだ。でも、やってみないことには分からない。それに……
「俺達が足止めしておけば、なのは達が少しでも楽に進めるだろ？」
なのはは、いかに魔力が多かろうが九歳の女の子だ。体力にも恵まれていないし……何より。
「なのはの身体には、傷一つ付けさせないって決めてるんだよ、俺は」
「……過保護だな、君は」
そう言い、Ｓ２Ｕを構えるクロノ。俺が過保護なら、クロノはお人よしだ。
「悪いな。また付き合ってくれ」
――ヴォンッ！！
あの日と同じように、魔方陣を展開し、ラインを伸ばす。
――バシュッ！！
そして、クロノに繋げる。
あの時と違うのは、俺も、クロノも、万全の状態だということ。
これで、俺にはクロノの処理能力が加わり、クロノには俺の魔力が

加わる！
『『『グオアアアアア！！』』』
痺れを切らし、傀儡兵が突っ込んできた。さぁて、と。
「「「うおおおおおおおおっ！！」」」
行くぞッ！！

◆◆◆◆

「ひゃあああああああ！」
ひ、秀人さんの馬鹿ーーーー！　私が、私が……！　すっごい運動音痴で、自転車にも乗れないってこと忘れてるでしょおおおお！？
『グオオオオオ！！』
「きゃあああああ！　どいてーーーーーー！！」
見よう見まねでブレーキを掛けようと、して……
「届かないー！？」
スロットルを握るのだって精一杯なのに、ブレーキにまで手を伸ばす余裕なんてあるはず無いよー！！
『Ｆｌｏａｔｅｒ』
ふわ、っと前輪が浮かぶ。
『Ｓｏｌｉｄ』
その前輪が、強化魔法の光を纏って……
――めきぐしゃべきっ
傀儡兵を、轢き潰した。
「……」
ははは……やっちゃった……自動車運転過失致死……

もう、引きつった笑いしか出てこない。
『オ、オオゥ……』
ミラーに映る傀儡兵が、ぴくぴくと悶えている。
『マスター、落ち着いてください。いつも乗っているではありませんか』
「いつもは秀人さんが運転してくれるんだもん……」
「なのは！　前！　前ー！」
って、
『『『『ウオオオオオ！！』』』』
怒りに燃える傀儡兵たちが、目の前に迫っていた！
「いいぃやあああああああ！！」
『Ｓｏｌｉｄ　！』
前輪の強度を上げ、
――ばごばごべきべきめきゃっ
撥ねて、轢いて、押し通る！
『『『ギャアアアア！！』』』
「ごめんなさあああああああい！！」
何て後味の悪い！！
――ガッ、ガガガガガガッ！
「うわ、うわあああああっ！？」
砂利やら砕けた石畳の欠片を踏んでしまい、一気にハンドルがぶれ出す。

「くっ、このっ！！」
ハンドルは、私の抵抗を嘲笑うかのように暴れ……！
――ずるっ
「あっ……！」
こ……転ぶッッ！！
「っとォ！」
と、私の両側から手が伸び、ハンドルをがっちりと握った。
「こんにゃろっ！」
ぐわん、と大きく揺れ……なんとか、タイヤが地面に接地し直した。
とりあえず、転倒することは防げたけど……
「アルフ、運転できるの！？」
ユーノくんが、私のポケットから顔を出し、風切り音に負けないように叫ぶ。
間違いなく、初めての筈。だが、
「ああ！　もう十分見たからね！」
カキンッ、と、左下方でギアの変わる音。そして、
――ガオオォォッ！！
アクセルを開け、加速！
まだ多少のぎこちなさはあるけど、間違いなく……乗れている。
「ははっ……なかなか、いいモンじゃないか！」
――ガオンッ！！
「ひゃっほー！」
アルフは、その長い手足を存分に活かし、バイクを操る。殆ど直感的にバイクの挙動を見極め、コントロールしている。
すごい。さすが、狼を素体にしているだけあって、運動神経も反射神経も抜群だ。
タンクにへばりつくようにして、メーターを覗き見る。時速……２００キロオーバー！
門はもう、目の前だ！

「レイジングハート！　ユーノくん！」
『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ』「わかった！」
私がプロテクションを展開。そして、ユーノくんが円形の形を崩し……以前、秀人さんが使ったときのように、円錐状に変形させる。
「アルフ！　スピード上げて！」
「言われなくても！」
――ガオオオオオオオオオッ！！
アクセルを全開！
「う、う……！」
しがみついているタンクから引っぺがされそう！　でも、これだけスピードが出ていれば……！
――ヒュガガガッ！！
傀儡兵達はまともに照準を合わせることができず、攻撃は掠りもしない。
傀儡兵の攻撃を振り切り、巨大な扉へ！
「「「いっけえええええええええええええええええ！！！」」」
――バガアアアアアンッッ！！
扉を粉砕し、プレシアの居城へ乗り込んだ！

◆　◆　◆

「忌々しいッ……」
プレシアは、アリシアの眠るポッドを伴い、庭園の最下層に降下していた。
目の前に展開されるモニターには、増産が追いつかない程のペースで傀儡兵を破壊する秀人とクロノが、そして、庭園内を原始的な

ガソリンエンジンで爆走する、なのは達の姿が、それぞれ映し出されていた。
「でも……もう終わり」
秀人の気迫に怯えるという醜態は晒したが、プレシアの手元には、九つのジュエルシードがある。
「さぁ……始めましょう」
アリシアのポッドを、愛おしそうに撫でる。その周囲に、九つのジュエルシードが浮かび上がり、旋回していた。
「取り戻すのよ……」
コンソールのキーを、叩いた。
――ズズズ……
低く、庭園が唸る。そして、
――ズゴゴゴゴゴ……！！
それは、巨大な震動へと変化した。
「私達の全てを！！」
アースラのブリッジ。そこは現在、かつて無い緊迫感に包まれていた。アラートは鳴り続け、誰もが現状の把握と対処に追われていた。
「次元震、発生！！」
「徐々に増加中！　既に、中規模に達しています！」
エイミィは庭園内をサーチし、この次元震の発生源を探る。
「『庭園』の動力炉と連動しています。恐らく、足りない分の出力を補おうと……」
九つという、想定の半分にも満たない数。

それを補うため、動力炉を限界以上に稼動させているのだろう。
あの巨大な庭園を常時、準虚数空間に浮遊させ続け、完全に独立したエネルギー供給を実現させる動力炉だ。そのエネルギー総量たるや、ジュエルシードにも匹敵するだろう。
秀人たちの世界で言えば、原子炉のようなものにあたる。
適切にに管理し、安定供給を続けるなら、さほど危険は無い。だが……

「わざとバランスを崩して、意図的に暴走させているのかと」
炉心溶融（メルトダウン）させるのであれば……炉の破壊と引き換えに、莫大なエネルギーを発生させることができる。できてしまう。
動力炉の暴走。
それは、プレシアが娘を失うことになった、直接の原因。あれは、未完成のまま強引に稼動を決定した上層部が引き起こした事故だった。プレシアには、非難される謂れは無い。
だが今回は、プレシア自身がそれを引き起こそうとしている。
「なんてことを……！」
リンディは、席を立った。
「私も出るわ。庭園内から、次元震を抑えます」
「了解！」
指揮権を副官に移譲。リンディは裾を翻し、ゲートへと向かった。
（必ず阻止する）
リンディは、歩きながら決意を新たにする。
（死者は、決して蘇ったりはしない）
リンディ自身が、それを知っていた。
十一年前。とあるロストロギアを追っていた、リンディの夫、クライド・ハラオウン。
彼はそのロストロギアを道連れに、この世から消滅した。
一片も……髪の毛一本として、この世には残らなかった。
悲嘆に暮れ、親友の言葉にも耳を貸さず、ただ部屋に閉じこもって泣くだけの日々。

提督という、それなりに高い地位にあったリンディは、上層部にのみ公開されるロストロギアの資料を読み耽る日々を送った。
夫を取り戻す。ただ、そのためだけに。

そして、候補になりそうな物を見つけた。それは、管理局の保管庫に、極めて厳重に収められていることを知った。
普通ならば、躊躇したり、諦めたりもするだろう。だが、当時のリンディは、正気を失う一歩手前まで、追い詰められていた。
そしてその晩、リンディはデバイスを手に、着の身着のまま部屋を飛び出した。
地位になど、クライド無き生活になど……今更、未練は無かった。反逆者として追われることになろうと、クライドさえ取り戻すことが出来れば……そう、本気で考えていた。
そして、家を飛び出そうとした彼女が目にしたのは……たった一人で廊下に佇み、リンディに声を掛けるか、掛けまいかと葛藤する……クロノの姿だった。
そして、ようやく正気に戻れたのだ。
自分には、まだ愛する者がいるのだと、気付くことができた。
あの晩、クロノがいなければ……リンディもまた、狂っていたのかもしれない。

今のプレシアの姿は、リンディの可能性の一つだ。
愛するものを失い、引き止めるものも無く、ただ修羅の道を進むことでしか己を保てなかった、もう一人の自分。
その気持ちは、誰よりも……本人よりも理解できる。
それでも。
だからこそ。
（必ず……止める！）
彼女を、止めなくてはならない。

――彼女と同じ、一人の『母親』として。

第二十七話（後書き）

バイクは安全運転で乗りましょう。

ご意見、ご感想お待ちしております。

第二十八話（前書き）

今更ですけど、星光の殲滅者って可愛いですよね。、

第二十八話

――ズズズズ……！！

いきなり、足場がぐらぐらと揺らいだ。

「うわっ……何だ！？　地震か！？」

って、こんな場所で地震が起きるはずが無い。

『オオオオオ！！』

「るっせぇ！」

――ザンッ！！

首を切り落とし、飛行タイプの撃ってきた魔力弾を回避する。

とんっ、と着地した、その時。

――ボゴッ！

「うぉわっ！？」

唐突に、足場にしていた石畳が抜け落ち、巨大な穴が開いた。妙な極彩色の……原始的な恐怖を呼び起こすような、どこまでも続く穴。

「何だ、これ」

もう少し遅かったら、落ちていた。

『オオオオ……！！』

俺を追撃していた飛行タイプの一体が、その穴の上を通過しようとした、その時。

『オオオッ……』

まるで、いきなり見えない手に掴まれたかのように、穴に落ちていった。

何だ？　何が起こった？

「何で飛ばないんだ……？」

飛行タイプなのに。
「飛べないんだよ」
穴を迂回してきたクロノが、意味の分からないことを言った。
「？　どういう意味だ？」
「あれは虚数空間……魔法が一切発動できない空間だ。次元航行艦ですら、あれに落ちたら重力の底まで真っ逆さまだ」
恐ろしいことをサラッと言う奴だな……でも、
「そりゃ、好都合だ！」
いいこと聞いた！
『グオオッ！』
重騎士タイプ。とにかく装甲が硬く、二発、三発とこれ一体に消費させられる、厄介なタイプだ。だけど、
「そりゃっ！」
――ゴンッ！
胴体を蹴りつけ、数歩後退させれば……
『オ、オオオオォォォォ……』
虚数空間の穴に、勝手に落ちていってくれる。
「……なるほど」
クロノが感心したように息を吐く。
――ギャリリリッ……！！
騎士タイプを三体纏めてバインドし、
『Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ』
――ゴンッ！！
『『『ギャアアアア……』』』
纏めて、穴に叩き落とす。
とはいっても、下手をしたらこっちが穴に落ちてしまうことも考えておかないと。
「インパクト！」
――ドゴオォォン！！
広域版インパクトで、傀儡兵の足元を爆破する。ただでさえ図体

のでかい傀儡兵。一度バランスを崩してしまえば、転倒は必至。そして、倒れた先には……大口を開けて待ち構える、虚数空間。

『オアアア……！！』

さよならーっ、と。

クロノはクロノで、バインドで足を引っ掛け、誘導弾で穴に突き落としている。

「おっ」

さすがに、敵兵も馬鹿じゃないようだ。穴を迂回し突進してきている。

「……でも、所詮はロボットだな」

傀儡兵どもは、総じてガタイがいい。穴の隙間を縫うように走ってきても、一直線に並ぶという……入れ食い状態になっていることに、全く気付いていない。

魔力刃を振りかぶり、

「はあああああッ！！」

――バシュンッ！！

斬撃波を射出！

――ザンッ！！

騎士タイプ、飛行タイプを数体纏めて両断し、その後ろにいた重騎士タイプの装甲に亀裂を入れる。

『Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ』

――バォンッ！

亀裂の中に、クロノの放った砲撃が直撃。重騎士タイプは後退し、虚数空間へと落ちていった。

とりあえず、足止めは問題無く……

「秀人、下がれ！」

「っとォ！？」

クロノの声を聞き、全力で後ろに跳ぶ。

――ヴォンッ！！

俺が飛びのいた場所に、巨大な魔法陣が展開された。
「……何か、ヤバそう？」
ボス的な何かが、出現しようとしている。
そして。

――ズズゥ……ン！！

巨大な質量を伴い、そいつは現れた。
「で……っけぇ」
思わず感心してしまうほど、巨大な傀儡兵だった。
『グ、グ……』
大きさは、足元に転がった重騎士タイプが、子供に見えるほど。
足は無く、巨大な円盤のようなものに上半身が直接生えている。
腕は、大小含めて八本。
「ボス戦か……」

『グ……ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！』

――キュイイイイイイイイイイイイイイイイ……！！！

小さいほうの四本腕。その先端に、魔力スフィアが生成されていく！
「来る！」
防ぐ……のは、得策じゃないか。
「上手く避けろよ！　クロノ！」
「君もな！」
――ズバババババババッッ！！
「うおおおおおおっ！！」
四本の腕から乱射されるビームの束。狙いを付けているのかどう

かも分からないそれを、右へ、左へ、上へ、下へ、とにかく避けて避けて避けまくる！
――ギュボンッッ！
「ぐァッ！」
「秀人！」
目の前が白く染まり、右腕に激痛が走る。
（ヤバ……！）
回復した視界の中、右腕を覗き見る。
まだ……腕は繋がってる。
「あっぶねぇ……！」
右手の結晶体で受け止めなかったら、腕が吹っ飛ぶところだった。
放っておけば治るけど……今は、いちいち修復を待っている時間は無い。
『ゴアアアアア！！』
巨大な腕を振りかぶり、打ち下ろす！
「舐めるなあああァァァ！！」
左腕に強化魔法を纏わせ、迎撃！！
――バギイィィンッ！！
硬い！　さすがに、雑魚とは装甲の厚みからして違う！
「こいつで……どうだァッ！」
――ザンッ！！
魔力刃を、思いっきり腕に突き立てる。よし、刺さった！
「ブレイク……インパルスッ！！」
Ｓ２Ｕから魔法を発動！　突き立てた魔力刃から、体内に振動波を送り込む！！
――ボォンッ！！
「チッ……」
破壊できたのは、肘から先のアーム部分だけ。わざと腕をパージして、ダメージを最小限に抑えやがった！
だが、この調子で腕を？（も）いでいけば……

「なっ……！？」
だが、そう上手くはいかなかった。
――ビュウウウウウ、ン……
光が軌跡を描いたと思ったら、そこにすっぽりと収まるように、腕が元通りに修復された。
「はァ！？　そんなのありかよ！？」
「君が言うな」

……それもそうだな。

――ギュイイイイイイイイィィン……！！

四肢の先端に魔力スフィアが出現する。またあのビーム弾幕を撃つ気だ。
「させるかっ！！」
『Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｓｎｉｐｅ』
クロノが誘導弾で誘爆を狙う。
――ガキンッ！！
だが今度は、強固なシールドに阻まれてしまった。
「攻防共に死角無し、再生能力付きって……」
思わず呆れてしまう。
――ズバババババッ！！
「ぬおおおおおおおっ！！」
そして発射された弾幕を掻い潜り……
「ファイア！」
バレットを数発、試しに撃ってみる。すると、
――ガガガガンッ！！
「駄目か……！」
攻撃中はバリアを張れないと思っていたが、そう上手くはいかないらしい。

『ウオオオッ！！』
弾幕が止むと、今度は巨腕による攻撃。今度は、しっかりと表面がバリアで覆われている。やろうと思えば、ぶち抜けなくも無いけど……
「はっ！！」
――バゴンッ！
回し蹴りにインパクトを纏わせ、巨腕を蹴りつける。
バリア越しに多少のダメージ……装甲の表面を凹ませることはできたけど、またすぐに直ってしまった。

「エイミィ、何かわからないか！？」
クロノが、通信の向こうにいるエイミィに聞く。
『もう一度、そのでかい奴に攻撃当ててみて！』
「了解！」
『Ｂｌａｋｅ　Ｉｍｐｕｌｓｅ』
――チュイイイイイイイン！！
振り下ろされた巨腕を回避し、振動波を打ち込む。
――ボンッ……！
『グッ……！』
一瞬だけたじろぐ傀儡兵だったが、またしても腕だけを切り離し、そこを修復してしまう。
『……うん、やっぱり！』
だが、エイミィはそこから何かを掴んだようだった。
『別の場所にもう一つ、そいつと全く同じ反応があって、リンクし合ってる』
「別の場所……？」
しかも、リンクし合ってるということは……
『そこにいるもう一体も同時に叩かないと、いくらでも再生しちゃう』
お互いが、お互いのバックアップになっている……そういうこと

か。
『今、そこになのはちゃん達が向かってるから……！　それまで、持ちこたえて！』
　攻撃力も防御力も高くて、再生能力もあって、パーツを切り離してダメージを抑える知能まで持ち合わせている。
そんな馬鹿げた敵を相手に、いつまでも時間稼ぎなんてしていられない……
……
……
……あれ？
「ダメージ……？　待てよ……？」
　思わず考え込んでしまう。
「どうした！？」
　クロノが、ビームを避けながら聞いてくる。
「いや……回復するなら、腕を一々切り離す必要なんて……ダメージの大小を気にする必要は無いんじゃないか？」
　その再生力が無限なら、ダメージのことなんて気にしないで戦うに決まっている。
「……あ」
　クロノが、腑に落ちたようにハッとする。
そう。ダメージを気にするってことは、つまり……

「「耐久力にも再生力にも限界がある」」

　ということだ。
「……僕としたことが、再生能力に気を取られすぎていた」
　じゃきっ、と、Ｓ２Ｕを強く握りなおす。
「どうする？」
　これは、時間稼ぎの防戦なんかじゃない。道を拓くための、攻戦なんだ。

そうと決まれば、話は簡単！
「変更は無しだ！　再生が追いつかなくなるまで……徹底的に破壊する！」
「了解！！」
こっちを潰せば、向こうのもう一体も、バックアップを失って弱体化する。そうと分かれば、気合も入るってもんだ！
『そいつが傷を再生する時には、胴体と円盤部分の繋ぎ目、そこが中心になってる！　多分、そこが弱点！！』
「っしゃあ！」

『オオオオオオ……！！』
――ギュイイイイイイイイ……ン！！

「クロノ！　突っ込むぞ！」
右手の結晶体を中心に、小さく、硬くしたシールドを展開する。全身を覆うと被弾面積が大きくなってしまい、突進を阻まれてしまう。
小さなシールドで、頭などの致命傷になるであろう部分だけを防ぎ、一気に間合いを詰め、叩く！
「ああ！」
『Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ』
『Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｓｎｉｐｅ』
クロノもまた、砲撃と、誘導弾をセットする。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！』
一際大きな咆哮を上げ……
――ゴバアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！
なのはに匹敵するほどの巨大な砲撃を発射した！

掃射時間を犠牲にする代わり、攻撃範囲を広げたのか！
――ドバババババババババババッ！！
「んがあああああああああああああっ！！！」
シールドをかざし、砲撃を受け止める。
「やれ！　クロノ！」
俺の背後……庇う形になったクロノに、檄を飛ばす。
「はあああああっ！！」
『Ｆｉｒｅ！』

クロノが発射した砲撃と誘導弾は……

――バゴォンッ！！

砲撃の隙間を掻い潜り、砲身となっている小腕を叩き折った！
『グ……グ……』
またしても、腕を切り離す。けど……
――ギャリイイインッ！！
チェーンバインドが絡みつき、それを妨害する！
「今だ！！　行け！」
「よっしゃあああ！！」
クロノの声に応え、飛び出す！！

小腕が無ければ、射撃や砲撃はできない。
さっきから観察し続けて発見したことだが、この巨大傀儡兵は……巨腕と小腕を、同時に動かすことはできない。憶測だが、同時に操れる腕は四本が限界なんだ。
いくら機械仕掛けでも、八本もの腕を干渉しないように同時操作するなんて出来ないのだろう。
そして今、あいつは小腕を切り離すことに夢中になっていて、俺の接近に対する反応が明らかに遅れている。

チャンスは一度だ！　一撃で、あの巨体をブッ壊す！

両掌に、ディバインバスターとブレイズキャノンをセット。そして、殆ど直感的に、

――ぱぁんっ！！

掌を打ち合わせ、二つの魔法を合体させた。

発生した魔力スフィアを発射するのではなく、魔力刃のフレーム内部に溜め込む！

『『『ウオオオオッ！！』』』

『Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｓｎｉｐｅ！』

――キュゴガガッ！！

それを阻もうとする傀儡兵に、クロノの放った誘導弾が突き刺さる！

俺は、完成したばかりの新魔法を片手に、一直線に巨大傀儡兵へと切りかかる！

狙うは胴体！　正中線！！

「カラミティ……！！」

――災厄を、断ち切る刃！！

「ディバイドオオオオオオオオオオオオッッ！！」

――斬ッッ！！！！

「……」

振り下ろした刃は、巨大傀儡兵の正中線を、正確に切り割っていた。

『ガ……ガ……！』

ぶった斬られた断面同士が、磁石であるかのように引き寄せあう。

ここまでやってもまだ生きているとは恐れ入る。

だが……

『ガッ、ゴガアアアアアアアアアアアアッッ！！？？』

――ボゴンッ！！　ボゴゴゴゴンッ！！

切断面から、爆発が連続して発生し……

『ギャアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！！！！』

――ズガアアアアアアアァァァンッッッ！！

一際巨大な爆発と共に、巨大傀儡兵を粉々に爆砕した！

爆風が収まり、視界が開ける。周囲を見渡してみるが、動いている傀儡兵の姿は見えない。

「……片付けたみたいだな」

ガラン……と、剥がれ落ちた装甲が足元に落ち、さらさらと砂のように崩れた。

『反応、消失！　撃破を確認！！』

エイミィの歓声が聞こえ、俺は、ようやく一息ついた。

「これで、このフロアは制圧だ」

足元に転がった、飛行タイプの頭部を虚数空間に蹴り捨て、クロノが戻ってきた。

「よし……次だ」

休んでいる暇は無い。まだ、他のフロアには敵がうじゃうじゃと徘徊している。

「なのは達はどこだ？」
早いとこ合流したい。
『庭園の……動力炉に繋がる通路！　そこからの最短距離は、Ｓ２Ｕに転送済み！』
よし。
「クロノ、先導頼む」
「ああ」
いつ虚数空間が開くかもわからない以上、うかつに飛行魔法で飛ぶのは危険だ。バイクも無い以上、走って行くしかない。
無事でいろよ、なのは！

第二十八話（後書き）

次回はなのは編です。

ご意見ご感想、お待ちしております。

第二十九話（前書き）

３０万アクセス突破しました。
ご支援、感謝いたします。

第二十九話

フェイトは、バルディッシュを手に庭園内へと降り立った。

いつもの通路。そして、いつもと違うのは、通路いっぱいに傀儡兵が立ち塞がっているということ。

『『『ウオオオオオオオオッ！！』』』

途端、襲い掛かってくる傀儡兵。

侵入者へと、容赦の無い攻撃が加えられる。

『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ』

だが、その攻撃がフェイトを捕らえることは無かった。

――ガギュンッ！！

フェイトは、すれ違いざまにバルディッシュを一閃。傀儡兵の脚部を切断する。

――ドドドドドッ！！

数体の飛行タイプが撃ち出すエネルギー弾の弾幕。

『Ａｒｃ　Ｓａｂｅｒ！』

「はああっ！！」

フェイトは大上段から、光刃を解き放つ。

――ザンッ！！

回転しながら突き進むそれは、弾幕を突き破り道を開け、その向こうにいた飛行タイプを両断した。

弾幕に開いた穴から、マントを翻しフェイトが疾走する。

『Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ　Ｍｕｌｔｉｓｈｏｔ』

フォトンランサーを掃射。

――ガガガガガガガガガガガッ！！

魔力弾の豪雨は、傀儡兵の頭に、核に、武器に、吸い込まれるか

のように突き刺さり、
――……ドゴォン！！
一拍遅れ、爆発四散。
傀儡兵達は、何もできぬまま無意味な鉄塊へと成り下がった。
「やあああああっ！！」
フェイトは足を止めず、文字通りに道を切り開き、前へ進む。
（ボクは、アリシアじゃない）
戦いながらも、考える。
（ボクとアリシアは、別の人間だ）
それでも、覚えている。
あの事故の後……つまり、アリシアが死に、フェイトが『作られ』、目覚めた時……抱き締められた温もりを。それが、『フェイト』ではなく、『アリシア』への抱擁だったのだとしても、あの瞬間だけだったとしても……間違いなく、プレシアに愛されていたのだと。
とはいえ、かつてのように妄信しているわけではない。
プレシアはあの時、フェイトを捨てた。それ以前に行われていた暴行についても、『アレは虐待だった』と正しく認識している。
それでもフェイトには、プレシアに会わねばならない理由があった。
「会うんだ……！」
アリシアの記憶にあった、あの言葉。
――ママ、わたしね……
「会って、伝えるんだ！！」
その言葉を……心を病むほどに愛した、アリシアの遺言をプレシアに伝えるという、理由が。
「バルディッシュ、いちばん近い道！」
フェイトは、この庭園の構造を殆ど把握していない。住んでいたのは、表層の居住区、さらにその一部だけ。
『ルート、既に登録済みです』

バルディッシュは呆気なく、あっさりと回答した。
バルディッシュの創造主、リニス。
プレシアの使い魔であり、アリシアの飼い猫で……フェイトの育ての親。
彼女はこうなることを……フェイトがプレシアと向き合おうとすることを、予想していたのだろう。
「よーし、頑張ろう、バルディッシュ！」
『Ｙｅｓ　ｓｉｒ』
バルディッシュは、どこか嬉しげに応じた。

――ヴンッ！！

新たな傀儡兵の部隊が出現する。
「邪魔だあああああああっ！！」
だが、フェイトは止まらない。
――ザンッ！！　ガゴンッ！！　ガガガガッ！！
切り裂き、打ち抜き、薙ぎ払い……瞬く間に殲滅していく。

それも、ただ闇雲に戦っているのではない。
脚部や武装などを破壊し、敵の数を減らすことなく行動を不能にしている。

なのは達には知る由も無い事だが、この傀儡兵達が現れる転送魔法陣は、自動制御。
傀儡兵の頭数に変化が起きると、生産プラントから増援が現れるように設定されている。
つまり、フェイトのように、『頭数を減らすことなく』敵を無力化してしまえば、増援は来ないのである。

そして、フェイトは動力炉までの近道……螺旋階段を目指し、稲妻

のように駆け抜ける。

――バンッ！！

通路の突き当たり、巨大な扉を蹴破る。

その先に見えたのは、底が見えない程に長い螺旋階段。

遥か下方から、戦闘音が聞こえてくる。

「……もしかして」

目を凝らして見ると、時折、見慣れた桜色の光が散っている。

「やっぱり！」

吹き抜けを飛び降りる。

あえて飛行魔法を行使せず、自由落下の速度に任せる。

そして、見えた先で……

「……ッ！！　危ない！」

高町なのはの死角から、傀儡兵が戦斧を投擲していた。

「バルディッシュ！」

『Ｙｅｓ　ｓｉｒ.』

――バチッ……バチバチッ！！

フェイトの身体の周囲に、稲妻が迸る。

『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ』

全身に稲妻を纏ったまま、落下速度に、高速機動魔法による加速を加える。そして……

『Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｉｍｐａｃｔ！！』

戦術も何も無い、身体ひとつでブチ当たる……特攻を仕掛ける！

「間に合えええええええっ！！」

◆　◆　◆　◆

――バゴンッ！！

胴体を撃ち抜かれた傀儡兵が、吹き抜けを落下していく。

「はあああっ！！」

『Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ』

「シューーーーート！！」

――バゴゴゴゴンッ！！

後から後から！　きりがない！

「ユーノくん、そっちは！？」

「……芳しくない、かも！」

――ギリッ……ギリリリリッ……！！

十本近いチェーンバインドで、傀儡兵を纏めて縛り上げている。

そして、

――メキャメキャメキャッ！！

傀儡兵たちの身体を、捻じ切った。

……えげつない。でも、バインドを攻撃に転用するのは考え付かなかった。

「レイジングハート、次から参考にしよう！」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ』

「もう！　どこまで続いてるの！！」

ただ延々と……妙に長い螺旋階段を、アルフの駆るバイクで延々と下る。

「あたし達は、いつも転移魔法で移動していたから詳しい構造は知らないんだけど……」

階段の段差を危うげ無く越えながら、アルフが言う。

手摺の下を覗き込んでも、ただ延々と続く螺旋階段しか見えない。

バイクごと吹き抜けにダイブしてもいい……というか、そうしたほうが早いのは当然だけど、そうした瞬間にバイクはただの重い荷物になってしまう。何より……

『Ｃａｕｔｉｏｎ！』

螺旋階段の中心……だだっ広い吹き抜けから、また数多の傀儡兵が顔を覗かせる！

「ああもう！　鬱陶しい！！」

こうして、敵にしつこく妨害されるっていうのが、一番の理由！

「アルフ、ユーノくん！　先行ってて！」

バイクから飛び降り、吹き抜けに身を躍らせる。

「ちょ！？」「なのはっ！？」

『『『オオオオオオッ！！』』』

いちいち対応していたんじゃ、間に合わなくなる！

何より、この三人の中では、私が一番戦闘力があるんだから……私が一番、がんばらなきゃ！！

『Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ！』

「シューーーーート！！」

――キュゴゴゴッ！！

「次！」

『オオオオッ！！』

次は、重騎士タイプ！

「ディバイン……！」

『Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ』

「バスターーーーーーーーーー！！！」

――ズバアァァンッ！！

「次ッ！！」
『『『ウオオオオオオオオオオ！！』』』
次、飛行タイプと騎士タイプの編隊！
『Ｃｈａｉｎ　Ｂｉｎｄ』
――ギャリリリッ！！
そのうち三体に、バインドを絡ませる。
「この～……！！」
――メキ……メキッ！！　バゴォンッ！
撃破はできたが、やっぱりユーノくんのようにスムーズにはいかない。これなら、誘導弾か砲撃の方がまだ……
「なのはァッ！！」
『Ｃａｕｔｉｏｎ　！』
ユーノくんの、切迫した声。
「うわっ！？」
振り返った途端、血の気が引いた。
目の前に迫る……巨大な戦斧。遥か下方には、それを投擲したと思われる騎士タイプ。
回避……無理。防御……無理！　迎撃……間に合わない……！！
「や、ばい……！！」
最悪だ……！　調子に乗った挙句、こんな所で……！

「だりゃあああああああああああ！！！！」
――ズッガアアアアアアアアアアアン！！！！！！！！
「きゃああっ！？」
いきなり、目の前に閃光が弾けた。いったい、何が……！？
「サンダー……！！」
え！？　この声、まさか！！
閃光で一瞬だけ失った視力が、回復する。

そして見えたのは……漆黒のバリアジャケット。そして、揺れる金髪。手には、無骨な黒い斧！

「レイジーーーーーーーーー！！」

――ガッシャアアアアアアアアン！！

発生した落雷は、傀儡兵を纏めて打ち砕いた。

「……フェイト？」

紛うことなく、フェイトだ。

「……うん」

「……どうして？」

あれだけ、プレシアに酷い言葉を言われて、突き放されて……もしかして、まだ、プレシアに縋っているというのだろうか。

「その……ええと……」

蚊の鳴くような小さな声で、もそもそと呟き……

「た……たしゅけにっ……！！」

……噛んだ。

このシリアスな場面で、思いっきり、可愛らしく噛んだ。

「……」

「……」

「……」

私はもとより、フェイトに駆け寄ろうとしていたアルフや、いきなりバイクを押し付けられたユーノくん、その全ての動きが、止まった。

「た、たしゅけ、たひゅっ、たひゅけに……！！」

しかも、噛みまくってドツボに嵌り、まともな発音が出来なくな

っている。
こ、これは……ちょっと……無理……！
「ぶフッ！！」
とうとう、吹いてしまった。我慢できないって。
「……うがー！！」
あ、壊れた。
「助けに来たっつってんだろー！！」

――バゴォン！！

まるで、フェイトの叫びにシンクロするように、螺旋階段が纏めて吹っ飛んだ。
『グウウオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！』
で……でかっ！！
全体の形としては、二足歩行の人型だけど……とにかくサイズが桁外れだ！　さっきまで相手にしていた傀儡兵が、ミニチュアに見える！
――ガシャコンッ！！
そして、背中に装備した……これまた巨大な大砲が、私たちに向けられる。
させるか！
「シュート！！」
先手必勝！
砲口目掛けて、誘導弾を発射する。これで、あの大砲は粉々に……
――バチイィッ！！
「え！？」
砲口に吸い込まれる寸前……障壁に阻まれてしまった。
絶好のチャンスを逃してしまい……私の身体は、敵の照準の中。
更に、砲口内部には十分なエネルギーが充填されている！

――ドゴオオオオオオンッ！！

『Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ』
『Ｆｌａｓｈ　Ｍｏｖｅ』
レイジングハートと、フェイトのバルディッシュが同時タイミングで高速機動魔法を発動。その射線上から、緊急退避する。
――ガキッ、ガキンッ！！
砲身が左右に可動し、もう一度私たちに向けられる。
「「させるかぁっ！！」」
――ギャリイイイインッ！！
緑色と、茜色。ユーノくんとアルフが、チェーンバインドで砲身の向きを換える。
――ドゴオォン！！
的をはずした砲撃は、私たちが下ってきた螺旋階段を、壁ごと大きく抉り取った。
「……っと」
――ザッ！
いつのまにか、最下層に到着していたようだ。こうして地面に立って見上げてみると、いかにこの傀儡兵が巨大であるのかがわかる。
――ズシン……
『グロロロロ……』
同じく、着地を果たした傀儡兵。
足場を得たため、より巨体を活かした格闘戦を仕掛けてくるかもしれない。
――ジャコンッ……！！
やっぱり。
背中に収納されていた、これまた超巨大なハルバードを取り出した。
「ぜぇッ……ぜぇッ……」
アルフは、無茶をしすぎた反動からか、ぐったりしている。ユーノ

くんがアルフを庇いつつ、巨大傀儡兵の死角に退避。

「はぁっ！！」

『Ａｒｃ　Ｓａｂｅｒ！』

フェイトが光刃を飛ばす。それを、巨大傀儡兵は棒立ちで迎えた。

――ガキィンッ！

避けるまでも無い、ということか。光刃は、あっさりとバリアに弾かれてしまった。

「バリアも硬い！」

最大威力に近い誘導弾を、数発纏めて弾いたバリアだ。ディバインバスターでも、打ち抜いて本体にダメージを与えるのは難しいかもしれない。

「それに……ッ！！」

『ウオオオオオオオオオオオオオオオッ！！』

大上段から、ハルバードで薙ぎ払ってきた！！

――ドガガガガガガッ！！

地面を、壁を、掘削機のように抉り飛ばす！

暴風のような攻撃の中、照れくさそうに……そして、嬉しそうに、フェイトが言う。

「でも……二人でなら！！」

私への信頼を、口にする！

――ガキンッ！！

再び、背中の大砲が私たちに向けられる。

でも。

「うん……！！」

フェイトが、私を信頼してくれている……

「うんっ！！」

それが……そんなことが、堪らなく嬉しくて……！
『ウオオオオオッ！！』
「はあああああああっ！！」
――キュゴゴゴゴッ！！
『グアッ！？』
力が、沸いてくる！！

「アクセルシューター……フルパワー！！」
「フォトンランサー……マルチショット！！」

単発が効かないのなら、数で押す！！

「シューーーート！！」
「ファイアッ！！」

――ガゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴンッ！！

巨大傀儡兵が仰け反る！

今がチャンスだ！！

「行くよ、バルディッシュ！！」
『Ｌａｎｃｈｅｒ　Ｆｒｏｍ』

「こっちもだよ、レイジングハート！」
『Ｃａｎｎｏｎ　Ｍｏｄｅ』

――チュイイイイイイイイイイイイイイイン……！！

敵の大砲に、膨大なエネルギーが集まっていく。

そんなもの！！

「ディバイン……！！」「サンダー……！！」

私たちには、通じない！！

「バスターーーーーーーーーーーーー！！」

「スマッシャーーーーーーーーーーーー！！」

――ッドゴォン！！

私たちの砲撃魔法と、敵の砲撃が衝突し、拮抗する。

『グ、グオオオオオオオオオオオオオオ！！』

じりじりと、押されている。でも！！

「フェイト、行くよ！！」

「うん！！」

フェイトと私は、何度も何度も戦った好敵手。

攻撃のタイミングから、砲撃魔法の瞬間最大放出量まで、把握しきっている。

呼吸の合わせ方なんて、今更確認するまでも無い！！

「「せーーーーーーーーーの！！！」」

気合とともに、一気に威力を増した砲撃魔法は……

――ドバアアアアアアアアアアアアン！！

『ギャアアアアアアアアアアアアア！！！』

巨大傀儡兵を打ち抜き……庭園の外まで、突き抜けた！！

第二十九話（後書き）

なのはシリーズにおいては、「強敵が味方になると弱くなる」という法則は適用されませんのでご安心ください。

第三十話（前書き）

短い上にgdgdですごめんなさい、、、

第三十話

――ズズゥン……

巨大傀儡兵が、沈む。

――バシュウウウウッ……

レイジングハートとバルディッシュが、一仕事を終えたかのように排熱を行う。

「……フェイト」

歩み寄り、その手を取る。

「……」

無言で……でも、確かに、フェイトは握り返してきた。

「ありがとう、助けてくれて」

「……うん」

少しはにかんで、フェイトが笑う。

「フェイトーーーーーー！！」

アルフが、ユーノくんを荷物のように小脇に抱えて駆けて来た。

「アルフ……ッ！！」

それを、フェイトがしっかりと抱きとめた。

と、その時。

視界の隅で何かが……倒れたはずの巨大傀儡兵の巨体が……！

『ウ、オオオオオオオオ！！』

「なっ……！？」

うそ！　まだ動けたの！？

『グガアアアアアアアアアアアアアッ！！』

――ブオォンッ！！

巨大傀儡兵は残った右腕で、へし折れたハルバードの柄を、私た

ちに投擲してきた！
「くっそ……！！」
間に合うかどうかわからないけど、ディバインバスターで……！
「――――ぉぉぉおおおおおりゃあああああああああああああ！！」
――バゴオオオオオオオオォォンッッ！！
投げつけられた、電柱ほどの太さのあるハルバードの柄が、粉々に粉砕された。
『Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ』
そして、涼やかな電子音声。
――バゴンッ！！
『ゴブッ……！！』
巨大傀儡兵の頭部を、消し飛ばした。
もうもうと立ち込める砂煙。
それを切り分け、出てきたのは……
「なのは、無事か！？」
秀人さんだった。
「大丈夫、だけど……」
秀人さんの足に目をやる。
よっぽどの勢いで落下してきたからなのか、片足をずるずると引きずるように歩いてきた。
「足、大丈夫？　痛くない？」
「……ああ、気にするな。すぐ治る」
だから、そういうこと言ってるわけじゃ……
「って、フェイト！？　何でここに！？」
秀人さんが仰天している。

「……秀人」
あ、クロノだ。でも、どうしたんだろう？
額に、見事なまでに青筋が浮かんでいて……明らかに怒っている。
「……エイミィから連絡があった。君が破損させたブリッジの内壁……その奥にあった、ＡＭＦ発生装置のコントロールユニットが粉々だそうだ」
ああ、だから転送魔法で来られたんだ……
「……ツケに」
「出来るかッ！！」
――ごんっ！
Ｓ２Ｕでしこたま殴られていた。
「まぁまぁ……おかげで、危ないところで助かったんだし、いいんじゃない？」
あそこでフェイトが助けてくれなかったら、墜とされていた。
差し引きゼロ、ってことで。
「それは……そうだが」
「そうなの。だから、結果オーライだよ」

『みんな、聞こえる？』
Ｓ２Ｕから、全体に向けて通信が入った。
『さっき、秀人君となのはちゃんが倒した二体の傀儡兵なんだけど……』
エイミィだ。
『どうにも、あの二体が、他の傀儡兵の親玉……っていうか、生産プラントそのものだったみたい。
二体の間で循環するエネルギーの余剰出力で、他の傀儡兵を製造したり、動かしていたらしいんだ』
一応、念のために。
「レイジングハート、エリアサーチお願い」
『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ』

――キンッ……
音叉を鳴らすような音を立て、波紋が広がる。
エリアサーチの結果は……
『周辺に、敵性因子と思われる熱量・質量・魔力を持った存在は、認められません』
「……本当みたい」

ところで。
「秀人さん達も、あのおっきいの倒したの？」
「ああ。でも、そんなに強くは無かったけどな」
秀人さんは、右斜め上に視線を外し、言う。
これ……秀人さんが、話を誤魔化す時の仕草だ。
「……嘘」
秀人さん……何を誤魔化そうとしているのかな……？
「な、何がだ？」
「……怒らないから。絶対に怒らないから。……正直に教えて？」
「いや、何のことだか俺にはさっぱり、」
この期に及んで、まだ白を切ろうだなんて……
「お・し・え・て？」
――ごりっ……
キャノンモードの先端を、鼻先に突きつける。
「秀人……諦めろ」
クロノが、ふぅとため息をついた。
秀人さんは、がっくりと肩を落とす。
「……わかったよ」
そして、クロノも説明に加わって……

「秀人さんの馬鹿ーーーーーーーーーーー！！」

「おおお怒らないって言ったろー！？」
さっきはさっき、今は今！！
「何で言ってくれないの！？　同時に叩けば、もっと負担無く倒せたのに！！」
リンクしているというのなら、二体の、同じ箇所に損傷を与えてしまえば、修復は行えない。
そんな簡単なこと、秀人さんが気づかないわけない。
なら、理由はひとつだ。
「また、私に負担をかけないようにって抱え込んだんでしょ！？」
「……ああ」

――ぶちんっ……

「……レイジングハートッ！！」
『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．』
今日という今日は……許さない！！
『Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ』
「なのは、ストーーーーーーーップ！！」
「ちょっと待った！　話を聞いてくれ！！」
ユーノくんまで、庇い立てする気！？
「……なに。言い訳なんて聞きたくない」
チャージ、完了。
「なのはには、大事な役割があるからなんだ！！」
ぴたっと、発射直前で止める。
大事な、役割……？
「この先に、この庭園を動かしている動力炉がある」
『うん。そこから、数百メートルの距離』
エイミィが言うからには、本当なんだろう。
「動力炉には、ロストロギアが使われているらしくて、封印魔法で

動きを止めることが出来る」
　フェイトが、バルディッシュ振った。
「リニス……えと、ボクの先生みたいな人が、バルディッシュの中に色々とデータを残してたから、本当だよ」
　なんとなく、話が読めてきた。
「でも、俺の封印魔法は乱暴すぎて……逆に、動力炉を暴走させるかもしれない」
「……」
「だから、なのはには、できるだけ万全の状態で動力炉の封印に向かってもらおうと思って……」
「……話は、理解できたよ」
「なら……」
「でも！！　……一言くらい、欲しかった……」
　レイジングハート、砲撃はキャンセル。
（『……Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ』）
少しくらい、頼ってくれたって……私、そんなに頼りないのかなぁ……
「悪かった。今度からは、ちゃんと言うから」
　凹んで俯いた私の頭に、ぽん、といつものように秀人さんの手が乗っかる。
「……絶対だからね」
　今日のところは……許してあげよう。

「二手に分かれるぞ」
私と、ユーノくんと、クロノは動力炉へ。
　封印魔法が使える私と、結界魔法に詳しいユーノくん、それに、いざというときの保険にクロノ。
　傀儡兵はもういないけど、崩れた瓦礫で道が塞がれていたとき、一々私が吹き飛ばしていたのでは、肝心なときに魔力が足りなくな

ってしまうかもしれない。
そこで、クロノが露払いを買って出た。

フェイトと秀人さんとアルフは、プレシアの元へ。
こちらは、秀人さんがどうしてもプレシアに一言ぶつけてやりたい、と望んだことだ。
「秀人さん、気をつけてね」
「任せとけ」
うん。秀人さんがいれば、こっちも大丈夫。
「ユーノ、クロノ。なのはのこと、頼む」
「うん。任せて」「ああ」
それにしても、秀人さんとクロノ……初対面は最悪だったのに、結構仲良くなったよね。
これも、秀人さんの特徴なのかもしれない。
もしかしたら、プレシアも説得できちゃったり……なんて、都合良すぎるよね。
「それじゃ、行こう！」
妄想はここまでだ。
「無茶はするなよ、なのは」
「秀人さんには言われたくないよっ！！」
まったくもう！！
「ははは、そうだな。んじゃ、行くぞフェイト、アルフ！」
バイクではなく、自分の足で走っていく。

「フェイト！」
秀人さんについていくフェイトに、声をかける。くるりと振り向いたフェイトに、一言。
「がんばれ！」
「……うんっ！」
フェイトは今度こそ振り返らず、走っていった。

◆　◆　◆　◆

――ドォン……！！

「……っく！？」

プレシアは、次元震とは違う揺れに身体を揺さぶられた。

一瞬、苦痛に顔をしかめ……次第に、歓喜に染まっていく。

「あと、少し……」

ジュエルシードが、いよいよ本格的に空間を破ろうとしている、その証だった。

「もうすぐ……行ける……アルハザードに……」

うわごとのように、ぶつぶつと繰り返す。そして、唐突に、

――ズズズズ……ズ……

振動が、止まった。

「……なに？」

『プレシア・テスタロッサ……聞こえていますね？』

その声を……リンディの声を聞き、悟る。

「邪魔を……！！」

こんな大詰めで、またしても邪魔が入ったことを。

『次元震は、私が抑えています』

「ディストーション、シールド……！！」

次元震を押さえ込む。ただそれだけに特化した、汎用性の欠片も無い術式。

途方も無い魔力を喰う上、非常に高度な演算が求められるために、術者は他の魔法を発動できず、その場を動くことも出来ない。

そして、次元震の中心部近くでしか発動できないという最大のデメリットがある。
リンディが今の今まで使用しなかったのは、そういうことだった。
秀人たち突入部隊が道を開き、障害となる傀儡兵を全て止めたことで、ようやく発動できたのだ。
『動力炉も、じきに封印されます』
リンディは、宣告を下す。

『終わりです』

「まだよ！　私は、アルハザードへ……！！」
『アルハザード……失われし都。禁断の秘術……そんなものは、もう失われています』
それは、管理世界の人間であれば、生涯に必ず一度は耳にするであろう御伽噺。

原初にして、至高の世界。
死者蘇生。時間支配。因果律操作。
神域の技法を誰もが使用し……なんらかの理由で、滅びた世界。

そんな世界は、最初から無かった。
そもそもが作り話だというのが最も現実的な話だ。
第一、　本当に時間や因果律を支配できたというのなら、なぜ滅びたというのか？
この御伽噺の作者が未だに不明だということが人々の空想に拍車を掛け、一人歩きしているに過ぎない。
いよいよ、そんなオカルトじみたものに縋るようになってしまったのか、と、リンディはプレシアを哀れむ。
「違うわ」
だがプレシアは、それを確信を持って否定する。

「アルハザードは存在する」
『……では、あなたは。そこに行って、何をするの？』
「取り戻すのよ……私とアリシアの……過去と未来を……」
神を、運命を呪う、呪詛を吐く。
「こんなはずじゃなかった、世界の全てを！！」

――バゴンッ！！

と、壁が破壊された。
「おかーさん……」
フェイトとアルフが、姿を現す。
「お前に一つ、教えてやるよ」
更にその向こうから、瓦礫を踏みしめる足音。
ボロ切れ同然のジャケット。穴だらけのグローブ。プロテクターが剥がれ落ちたブーツ。

「過去を取り戻すことは、誰にも出来ない」

秀人が、プレシアの元に辿り着いた。

第三十話（後書き）

次回は、ハルハルが一番書きたかった話を掲載します。
かなり早く上げられるので、お待ちください。

第三十一話（前書き）

ごめんなさい！！
ハードディスクがウボアーしてしまいました！！
遅れを取り戻すために、続きは明日、投稿いたします。

第三十一話

（やっぱり、似てるなぁ……）

秀人は、初めて生身で相対するプレシアに、そんな意味不明の感想を抱いていた。

漫画のような巨悪をイメージしていて、モニター越しに見た姿はまさにソレだったのだが……こうして見ると、普通の人間であることに、戸惑った。

「お前は、お前たちは……なぜ、邪魔をする!?　何度も、何度も……！！」

憎憎しげに秀人を睨み付けるプレシア。

その傍ら、あの巨大な水槽の中には、フェイトにそっくりな少女の遺体。

フェイトはそれを、何ともいえない表情で、ただ見つめていた。

「……あんたが、俺の家族や知り合いを危険に晒すからだ」

次元断層などというものをこんな場所で起こされでもしたら、秀人たちの世界は、凄まじい被害を被ってしまう。カントクも、先生も、桃子も、恭也も、、美由紀も、アリサも、すずかも……傷付き、最悪、死んでしまうかもしれない。

「もう、よせ。あんたがどう足掻いたって……その子はもう、死んでいるんだ」

プレシアもまた、ある意味被害者であるということは、秀人にも分かっている。

話し合いで止まってくれるなら……暴力に訴えずに済むのなら……それに越したことは無い。

「あんたがやろうとしているのは、ただの無意味な虐殺だ」

「関係無い……！　私は、アリシアさえ取り戻せれば……！！」

（駄目か……）

諦観が、秀人の心を支配しかける。もう、誰かの言葉で止まれる段階ではないようだ。

（仕方ない。言葉が通じないなら……ぶちのめして、確保しよう）

「待って」

だが、フェイトが秀人を止めた。

「ボクに、話させて」

両手を横に広げ、秀人の前に立ち塞がる。

「……大丈夫か？」

「うん。……アルフも、お願いだから、ボクにやらせて」

「……わかった」

「ありがと」

アルフを一撫でし、一歩、前へ。

「おかーさん……」

フェイトが、プレシアに一歩、近づく。

「お前の母親になった覚えは無い」

プレシアは、目も向けずにそう言った。

「てめぇ……！」「アルフ、少し待て」

飛び出そうとしたアルフの手を掴み、止める。

「ううん。おかーさんは、おかーさんだよ」

笑みを浮かべ、母親への好意を言葉にする。

「ボクの中にある記憶は、アリシアの物なんだよね」

「そうよ。おまえは、アリシアの模造品だもの」

淡々と、フェイトを否定する。

「おかーさんは、ボクのことなんてどうでもいいんだよね」

「そうよ。私には、アリシアさえいればいいのよ」

暖かな言葉に、酷薄な返事。

だが裏を返せば……フェイトは、プレシアとの会話を成立させているということだ。

「おかーさん、覚えてる？　アリシアの、六歳の誕生日のこと」

六歳……アリシアが、死んだ年。

「……」

黙っているのは、肯定だろうか。

「ピクニックに行って、シート広げて……花の冠、作ってあげたんだよね」

場違いなほど楽しそうに、自分のものではない思い出を語る。

「それが、何だって言うの！！」

プレシアは激昂し……初めて、フェイトと目を合わせた。

「それは、アリシアの記憶よ！　お人形のお前じゃない！　私の、アリシアの記憶なのよ！」

プレシアは、言葉のナイフでフェイトを切り刻もうとする。

「ううゥ……！！」

アルフは怒り心頭で、変身魔法が解けかかっている。

「頼む。もう少しだけ、我慢してくれ」

「うん、知ってるよ。これは、アリシアとおかーさんの記憶」

だがフェイトは、寂しそうではあるが、微笑を崩さない。

「おかーさん……アリシアが、誕生日に何を欲しがっていたのか、覚えてる？」

劇的な、変化があった。

「……あ、……あ」

ぱくぱくと、愕然とした面持ちで、フェイトの顔を……いや、アリシアの面影を、穴が開くほど見つめる。

「……覚えてない？」
「違うッ！！　覚えてる……覚えているわッ！！」
プレシアは、割れるような大声で、否定した。
だがそれは……暗に、今の今まで忘れていたということの、証明だった。
「プレゼント……アリシアの、誕生日プレゼントは……！！」
必死に思い出そうと、髪を振り乱し、かきむしる。

ふらふらと後ずさり……虚数空間の穴の方へ……！！
「ッッ！　止まれ、馬鹿！！」
秀人の制止も空しく……
――ごつんっ……
と、プレシアの身体が、アリシアの遺体が入った水槽にぶつかった。
次元震の揺れで、不安定に傾いていたアリシアのポッドは、自重で傾いていってしまう。
「アリシアッ！！」
我に返ったように、アリシアの水槽の、その金具部分を掴み止めようとした。
だが、質量の差から、プレシアの身体までもが、虚数空間へと吸い込まれるように……
「……あ」
落ちる。
「アリ、シア……」
落ちていく。奈落の底へ。

――綺麗な花が咲く、どこまでも続くような草原。
それは、人が死の直前に垣間見る、走馬灯だったのだろうか。
――自分と娘だけの、一年に一度の、楽しい時間。

かつて無いほど鮮明に、幸せだったあの日の風景が、目の前に広がる。

――アリシアは、小さな手で一生懸命に花の冠を作ってくれて、少し楕円気味になったそれを、頭に乗せてくれた。

「アリシア、ありがとう……母さん、とても嬉しいわ……」

プレシアの口から、言葉が漏れる。心だけが、あの日に戻ったかのように。

「誕生日のプレゼントは、何がいい……？」

久しく忘れていた笑顔を浮かべながら、幻影のアリシアに語りかける。

「なんでもいいのよ……ぬいぐるみ？　おもちゃ？」

『本当に、何でも良いの？』

「ええ、もちろんよ」

『それじゃあ……』

アリシアへのプレゼントとは、なんだったのか。

『ママ、わたしね……』

――妹が欲しいの

「あ……」

ハッと……夢から覚めたように、思い出した。

『妹がいれば、お留守番してても、寂しくないんだよ』

「そう……でも、ごめんなさい。すぐに用意することは……できな

いの」
『ふ～ん、そっかぁ……じゃ、約束！！』
「約束……」
『いつか必ず……妹に会わせてくれる？』
「ええ、約束するわ。いつか、必ず。あなたの妹に……会わせてあげる」

「おかーさん！　……おかーさんッ！！」
穴の淵から、必死に手を伸ばす……自分を母と呼ぶ、アリシアとよく似た少女。
「妹……アリシアとの、約束……」
そう。最初から、間違えていたのだ。
『彼女』は、アリシアの代替品では……人形などでは無かったのだ。
「わたしは……何をしていたのだろう」
彼女は、アリシアではない。
「私は、いつも……」
彼女は、アリシアが切望した……妹だったのだ。
「気づくのが、遅すぎる……」

――約束は、果たされていた。

「ごめんなさい……アリシア」
大事な妹を、愛してあげなかったことを。

――――神という存在が、あるとしたら。

「ごめんなさい……フェイト」
もう一人の娘を、愛してあげなかったことを。

――――残酷なまでに平等で、公平だ。しかし。だからこそ。神という存在は……

「ごめんなさい……ッ！！」

心の底から、謝罪した。

――――罪を償おうとする者には、平等に……

「気付いたなら……まだ、遅くない」

――――手を、差し伸べる。

「過去を取り戻すことは、誰にも出来ない」

――救いの手は痛いほどに、力強く……プレシアを繋ぎ止めている。

「それでも……どんなに辛い過去、やり直したい過去でも……現在（いま）に繋がっている」

――腰元から伸びる、一本のロープ。それだけの装備で、虚数空間へ飛び込んだ。

「過去を取り戻すことが出来なくても、あの日に帰ることができなくても……」

――彼は、そういう男だ。手を伸ばさずにはいられない、愚直なまでの、お人よし。

「現在（いま）を生きて、過去を償うことは、きっと……誰にでも出来る」

――吾妻秀人は、そういう男だ。

◆　◆　◆　◆

――間に合った……！！

柱に命綱を結んで、虚数空間にダイブして……プレシアの手を、掴んだ。

「……っく！！」

でも、さすがに重い……！！

無理がある体勢で、プレシアと……プレシアが掴んでいる、液体が満タンに詰まった水槽を支えているんだ。

プレシアがアリシアを手放せば簡単だけど……そんなこと、絶対にしないだろう。

「この～！！」

フェイトとアルフが引っ張りあげようとしているけど……こいつは厳しい。

「手を、放しなさい」

宙ぶらりんのまま、憑き物が落ちたように涼やかな声で、プレシアが言った。

「このままじゃ、あなたまで落ちてしまうわ。私は、いいから……」

「ざっけんな！！　何、一人で勝手に諦めてんだよ！！　あんたは、

まだ……！！」

力を込めながら、プレシアに届かせるように、叫ぶ！

「フェイトに、謝ってないだろうがッ！！」

プレシアは、心底不思議そうに首をかしげた。その手は、水槽を保持し続けている為にうっ血し、青黒く染まっている。

「なぜ、そこまでするの……？　私は、フェイトをさんざん虐めて痛めつけた……あなたにとっても、憎い敵なんでしょう……？」

確かに、憎くないと言えば嘘になる。

「超、個人的なことなんだけど……」

でも、憎めない。憎みきれない。なぜなら……

「……あんたってさ、」

初めて見たときから、思っていた。

「俺の母さんに、似てるんだよ」

あの日、離してしまった手。

「マザコン野郎って笑いたければ、笑えよ……！！」

今は……この手を、絶対に離さない！！

「もうすぐ、増援が来る！！　それまで、諦めるな！！」

命綱は……まだ、ほつれていない。クロノ達が来れば……

――ズズンッ……！！

と、庭園が、最後の抵抗のように、身を震わせた。

その揺れは、最深部に程近かったこの場所にも伝播し、地面を揺

らし……

「あ……」

フェイトの小さな身体を、宙に放り出した。

穴の淵に足を掛け、踏ん張っていたフェイトは当然、虚数空間の中に……！！

「フェイトオオオオオオオオ！！」

アルフの絶叫が、木霊する。

「フェイト、掴まれえええええ！！！」

プレシアを右腕一本で吊り下げ、左手を伸ばす！！

――ズルッ……

フェイトの手は、俺の手をすり抜けて……！！

「くそおおお

お！！」

秀人がフェイトの手を掴み損ね、叫ぶ姿が……静止画のように、目に飛び込んできた。

「フェイト……」

それは、半ば無意識で行った行動だった。

――『現在を生きて、過去を償う』。

秀人の言葉……それが、その瞬間にプレシアの脳裏に浮かんだのかどうかは、不明だ。

「フェイトッ！！！」

プレシアは、迷うことなく……

――アリシアの水槽を手放し、フェイトの手を……しっかりと、掴んだ。

「え……？」

フェイトは、ぽかん……とプレシアを見つめる。

「おかー、さん……？」

必死な表情で、自分を助ける、母親の姿を。

「フェイト……！　放したら駄目よ……！！」

「おかーさん……でも、アリシアが！！」

虚数空間へ落ちていく、アリシアの亡骸。

「アリシアはもう、死んでいるの……！！」

とうとうプレシアは、現実を受け入れる。

「あなたはまだ、生きているのよ！

アリシアの妹を……娘を！　二度も死なせて、たまるものですか！！」

「……！！」

フェイトの目が、見開かれる。

「ボク……おかーさんの子供で、いいの？　アリシアの、代わりで……」

「馬鹿なことを言わないで」

しょぼくれるフェイトに、プレシアが微笑みかける。

「あなたは、アリシアの妹。わたしの娘……フェイト・テスタロッサよ」

恐らくは、初めてであろう……フェイトに向ける、笑顔だった。

「おかーさんっ！！」

母は娘を。娘は母を。

放さぬように。離れぬように。お互いを、しっかりと抱きしめた。

最後の手向けにと……落ちていくアリシアを、瞬きもせずに、見送る。

その二人の耳に……ある声が、確かに聞こえた。

『――――ママ……約束、守ってくれてありがとう』

それは、プレシアには懐かしく。

『――――フェイト……やっと会えたね』

フェイトには、聞きなれない声だった。

それは、この場においてありえる筈の無い……アリシアの声だった。

だが、二人の耳に、アリシアの声は確かに届き。

水槽の中。動くはずの無いアリシア亡骸は。

『――――――――――ちゃんと、仲良くするんだよ？』

確かに……微笑んでいた。

「「アリシアアアアアアアアアアアアアア！！！」」

二人の母娘の長い夜は……ようやく、終わりを告げた。

第三十一話（後書き）

『プレシア生存』というifは、そもそもハルハルがこの小説を書き始めるきっかけにもなった妄想です。
というか、この話が書きたいがための小説です。

続きは明日。
結構長めですので、お付き合いください。

第三十二話

「おりゃあああああ！！」
――ブオンッ！！！
最も重い水槽が無くなったことで、俺とプレシアとフェイトは、アルフの気合と共に、穴から引っ張り上げられた。
「さ、さすがに、今回ばかりは……死ぬかと思った……！」
息も絶え絶えに、その場にへたり込んだ。
プレシアとフェイトは、お互いを抱きしめあっている。
解決……といえば、解決だ。九つのジュエルシードは虚数空間に落ちてしまったけど、主犯のプレシアは無事確保。次元震も、リンディさんのなんとかシールドで抑えられていて、持ちこたえている。
でも。
あのアリシアって子の遺体……できればあれも、ちゃんと回収してやりたかった。
「ウー……」
アルフが唸りながら、フェイトとプレシアを見ていた。
「いいのか？　お前は行かなくて」
ひょこっと顔をこっちに向ける。
「あたしはまだ……アイツを許せない」
……そりゃ、そうかもな。フェイトを散々痛めつけた奴だ。フェイトを大事にしているアルフが、そう簡単に納得するわけがない。
アルフ本人も、結構……いや、滅茶苦茶ひどい目に遭ってるし。
「でもさ」
と、アルフが俺を……正確には、右手の魔力結晶を見ながら、言う。
「それ、元はあたしの腹ん中にあったんだよな」
「ああ」

「でも、臓器との癒着は無かった」
「……ああ」
なんとなく、アルフの言いたいことが伝わってくる。
「もしかして、プレシアは……最初から、いざとなれば取り出せるようにしていたんじゃ……」
「……どう、だろうな」
確かに、そういう見方もある。俺も最初は、理由を思いつかなかった。
もしかしたら……という、あくまで仮定の話だが。プレシアは、最後の最後まで、己の内にあった修羅に、抗い続けていたのではないだろうか？
「あたしは、信じてみようと思うんだ。今は無理でも……アイツが、ちゃんと反省してるってことが、納得できるまでは……」
その頭に手をやり、犬にするようにわしわしと撫でる。
「……好きにするといい。これから、時間はいくらでもあるんだからな」
さてと……
「急いで脱出しよう。もう、いつ崩れるかも分からない」
なのは達のことだ。ちゃんと封印はできているとは思うが……さっきから、細かな震動が続いている。もう、この庭園そのものが崩れ始めているんだ。
「プレシア、フェイト。脱出するぞ」
俺は、落ち着いてきた二人に言う。魔力以外にも、いろいろと消耗しているに違いない。
「おかーさん、立てる？」
「ええ。……ッ！！」
立ち上がろうとして……すとん、と膝が砕けてしまった。
ったく……無理するから。

「よいしょ」
プレシアを担ぎ上げて、背負う。軽いなぁ……
「……あ」
耳元でプレシアが何かを言おうとしていたが……とにかく今は、脱出する方が先だ。
「行くぞ！！」

◆　◆　◆　◆

――ズズズズ……
封印魔法を打ち込まれた動力炉は、始めは抗うように震動を増していたけど……それが、ぴたりと止まる。
『Ｓｅａｌｉｎｇ　Ｃｏｍｐｌｅｔｅｄ』
「よし！！」
動力炉の封印、完了！！
「クロノ、ユーノくん、戻るよ！！」
「了解だ」「急ごう！」
もう用は無い。一刻も早く、秀人さん達と合流しなきゃ！
――ズシン！！
「え！？」
今の揺れは……！？
「ちゃんと、封印したよね！？」
走りながら、ユーノくんに聞く。
「ああ、手順も問題なく、魔力も十分だった！」
「じゃあ、何で！？」
「単純に、この庭園そのものが壊れ始めているんだ！　急いで脱出

しないと、生き埋めだ！」
　ったく、最後の最後まで気が休まる暇が無い！
『クロノくん！　転送ポート、一番近くに開いたから！　なのはちゃん達も連れて、急いで！！』
　一番近くって……それでも、直線距離で二百メートル以上は離れている。
「秀人たちと……プレシアはどうなった！？」
　目の前の壁を、砲撃魔法で破壊しながらクロノが聞く。
『ええと……魔力反応、四つ！　健在だよ！！』
　秀人さん。フェイト。アルフ。そして……プレシア。
「ヤツなら当然だ」
「うん。秀人なら、やってくれると思ってた」
　クロノとユーノくんは驚いた様子も無い。
　でもまさか、あの益体の無い妄想が現実になるなんて……
『……よし、バルディッシュに、データの転送、完了！　もう大丈夫！』
　それじゃあ後は、脱出用の転送ポートに向かうだけだ！

　足元に開く虚数空間に気をつけながら、走る。
「なのは！！」
「秀人さん！！」
　よかった！　フェイトも、アルフも無事で……
　その秀人さんに背負われて……プレシアの姿が見えた。
「……プレシア・テスタロッサ」
　クロノが一歩、踏み出す。
　そして、感情を抑えた声で罪状を読み上げる。
「時空法違反・特殊研究管理法違反・ロストロギアの不正使用……
　そして、児童虐待の容疑で、あなたを逮捕する」
　フェイトが、プレシアの服の裾を、ぎゅっと不安そうに握り締めた。

「クロノ、今はまだ……」
秀人さんが、苦りきった顔で言う。
「……分かってるさ。今は、脱出する方が先決だ」

転送ポートに、大人数で一気に飛び込み、アースラに帰還。その直後、さっきまで転送ポートがあった場所が、虚数空間に飲み込まれた。
「あ、危なかった……！！」
ドッグの床に座り込む。全員、無事だ。

これで、一安心……
――ズズズ……！！
じゃない。もう震動は、かなり危ないレベルに達してきている。
「クロノ。もしこの庭園が崩れたりしたら、どうなる？」
秀人さんが、単刀直入に聞く。
「これだけの質量だ。たとえ動力炉を封印してあるとはいっても、周辺の次元世界には、少なからず被害が出る」
「具体的には？」
「……庭園の破片が、ワープアウトして落ちてくる」
大惨事だよ！！　庭園の破片……遠めに見ただけでも、１０メートル四方はある！　それが、無数に降り注いだりしたら……！！
山奥とかだったら、まだいい。でも、それが街中に落ちてきたりでもしたら……！！
「アースラの武器で、粉々にしたりとか……！」
あの図体だ。どうせ、山のように武器を搭載しているに決まってる。
「粉砕しようにも……封印した動力炉がまた活性化して……更に被害が広がることも考えられる」
「じゃあ、どうすればいいの！？」
ああもう、クロノに当たっても仕方ないっていうのに！！
「あの庭園を、丸ごと封印するしか無いだろうな」

「丸ごと……」
あの、東京ドーム何個分かを数えるのも馬鹿馬鹿しいサイズの、庭園を……？
「なのは。ユーノ」
秀人さんが、その庭園を睨みながら、言う。
「俺達で、なんとかしよう」
……そうだよね。今ここで騒いでいる暇なんて、無いんだ。
頭が、すーっと冷えていく。そして、レイジングハートを握り締める。
「待って！　ボクも……！」
フェイトが加われば、成功率はぐんと上がる筈。
「バルディッシュ、もうヤバいんだろ」
え……？　見た感じ、傷一つ無いけど……
「う……」
苦虫を噛み潰したような表情で、黙りこくる。じゃあ、本当に……？
「うん。間に合わせで応急処置したんだけど、ここに来るまでの戦闘で……」
バツが悪そうに、白状した。
「でも、魔力ならまだ余裕が……！！」
それに、レイジングハートが答える。
『これから行う封印魔法は、大量の魔力を消費します。バルディッシュが万全ならば、耐えられるでしょう』
それは、逆を言えば万全でなければ耐えられないということだった。
「もし、今の状態でバルディッシュを使ったら……？」
『全機能……機構から思考ＡＩまでの全てが、全損します』
「……！」

フェイトはバルディッシュを握り締め、息を呑んだ。
機構……外装の損傷であれば、直せば直る。でも、思考ＡＩ……
要は、バルディッシュの心は、戻ってはこない。
つまり、バルディッシュは死んでしまう。
『……あなたが、望むのであれば』
「馬鹿なこと言うな！！」
バルディッシュのその言葉に、フェイトが声を張り上げる。

「だから今回は、俺達に任せておいてくれ」
うん……それしか、無いよね。フェイトだって、バルディッシュを犠牲にしたくはないだろうし。ちょっとだけ、厳しいかもしれないけど……
「待って」
意外な人物が、声を上げた。
「おかーさん？」
プレシアが、秀人さんを見ている。
「少しだけ、待って頂戴」
いったい、何だろう。
「フェイト、バルディッシュを」
「うん」
疑いも無く、バルディッシュを差し出した。プレシアはそれを手に、極小の探査魔法で、バルディッシュの状態をスキャンする。
「機体の損耗は……外部は１２％、内部が４０％」
四割……大雑把に言って、半分が壊れているらしい。秀人さんの見立ては、正しかった。
そしてプレシアは、次に私を見た。
「あなたのデバイスを、見せてくれないかしら」
「え……」
レイジングハートを抱き、後ずさる。だって……ついさっきまで敵だったんだ。警戒するな、って方が無理だ。

「お願い。時間が無いの」
どうしよう……考えて、考えて。
「ううううう……秀人さぁん……」
秀人さんに、委ねた。
「……それは、なのはが決めるといい」
「そんなぁ……」
私はまだ、そこまで割り切れないよ……
『マスター』
レイジングハート……？
『ヒデトは、彼女を信じたようです。ですから、私も彼女を信じてみようと思います』
……レイジングハートが、そう言うなら。
「……わかった」
本当は嫌だけど、プレシアに任せてみよう。
「……どうぞ」
プレシアに、レイジングハートを手渡す。
そしてプレシアは、バルディッシュと同じように、内部をスキャンした。
「損耗率、内部・外部、それぞれ１０％以下……っ！？
これは……！？」
何か驚いた様子だ。さっきから、プレシアは一体何をしようとしているのだろう。
「あなた……」
秀人さんに何かを言おうとして、言葉に詰まった。
「秀人だ」
あ。そっか、名前……
「秀人。この二機を持ちなさい」
プレシアは、フェイトから受け取ったバルディッシュと、私達のレイジングハートを秀人さんに手渡した。
「ええと……持ったけど」

左手にレイジングハートを、右手にバルディッシュを持った秀人さんが、プレシアに聞き返す。私もフェイトも、両手の納まりが悪い。

「あの魔法を使いなさい」

あの魔法……って、例の連結魔法陣を？　何でこのタイミングで……

「でも、いくらアレで魔力を増しても、バルディッシュの機体が耐えられないことに変わりは……」

秀人さんも同じようで、納得がいっていない。

だがプレシアは、予想外の提案をしてきた。

「あなたたちじゃない……バルディッシュとレイジングハートを、繋ぎなさい」

「……はい！？」

え、それって、レイジングハートとバルディッシュを、合体させるってこと！？

「そんなこと、できるわけが……！」

機体を制御するプログラムから、構成素材まで……レイジングハートとバルディッシュに、共通項はほとんど無い。

いや、もしあったとしても……そんなプラモデルみたいに簡単には……

だがプレシアは、確信を持って告げる。

「秀人になら……いえ、秀人にしか出来ないわ。秀人の魔力資質……」

魔力資質……？　確か、フェイトの電気がそうであるように、変換プロセスを経ずに魔力の属性を変換できる、ある種の才能。秀人さんに、そんな物が……？

「……『結合』」

「ありえ、ない……」

真っ先に反応したのは、クロノだった。

「ソレ（結合）は、何年も前に、存在を否定されている」

そんなに珍しいの？

聞く限りでは、『結び合わせる』という、ごく単純なものに思えるけど……ユーノくんまで愕然としている。

「あのー……具体的には、その『結合』の、何がありえないの？」

とりあえず、聞いてみた。

「たとえば、リンカーコア」

クロノの話は、いきなりその言葉から始まった。

「空気中の魔素を取り込み、魔力を精製する……魔導師にとって、もう一つの心臓のようなものだ」

うん。それはユーノくんの授業で、何度か耳にした。

「その精製する魔力の大小の差こそあれ、機能的には、誰のものであろうとも大差は無い」

それも、聞いた。たとえ魔法が使えない人にも、必ずリンカーコアは備わっているのだと。

「だが……例えば、僕と秀人のリンカーコアに、互換性は全く無い。なぜなら……僕達二人ののリンカーコアを動かしているのは、それぞれ全く別の意思（プログラム）だからだ」

同じように、同じ魔法を習得したとしても……その発動の際に踏まれるプロセスは、千差万別。

『同じようなもの』と、『同じもの』には、絶対的な隔たりがある。

そういうことらしい。

「その、全く違うものを、文字通り『結び合わせる』……言ってしまえば、水と油を、有機物と無機物を、プラスとマイナスを、完全

に融合してしまう。
それが、魔力変換資質『結合』だ」
……確かに、そんなことはありえない。でも……
「でも、あなたは……誰よりも、知っているのではなくて？」
「……」
クロノは、グウの音も出ない。私とフェイトの勝負の日も、今日、大量の傀儡兵を相手取った時も……クロノは、秀人さんの能力を身をもって実感しているのだから。
もちろん、私たちも。
「だが、二機はＡＩ搭載のインテリジェントデバイスだ。ＡＩが衝突（コンクリクト）して、対消滅してしまうかも……！！」
「そのレイジングハートというデバイスは、少し特殊だわ」
……ユーノくんが、古代遺跡から発掘した、正体不明の出土品。
それが、レイジングハート。デバイスとしての使用が可能だったから、デバイスとして扱ってはいるけど……まだまだ、謎が多い。
「容量が、デバイスとしては異常なほどに大きいの。自身の人格ＡＩと、全ての魔法術式……その全てを合わせても、全体の１０パーセントも使っていない」
うそ。たったの一割も……？
あれだけ毎日、たくさん魔法を覚えて、登録して……それでもまだ、十分の一以下!?
「レイジングハート、本当？」
『Ｙｅｓ．　Ｎｏ　ｐｒｏｂｒｅｍ』
……私、実はとんでもない子と契約しちゃったんじゃないだろうか。
「だから、バルディッシュと合体させたとしても、ＡＩが対消滅することは起きない筈よ」
「信用していいんだろうな」
クロノが、用心深く聞く。
「腐っても科学者よ」

プレシアは胸を張り、太鼓判を押す。
「ひでと、お願い」
フェイトが、秀人さんを上目遣いに見た。
「ボクは……最後まで、ちゃんとやりたい」
秀人さんは、少しだけ考え込んで……
「……よし、ちょっと待ってろ」
フェイトの頭を、ぽん、と軽く撫でた。

「行くぞ、レイジングハート」
『Ｙｅｓ，ｍｙ ｂａｄｙ』
レイジングハートは、相棒、と秀人さんを呼ぶ。
「バルディッシュも、力を貸してくれ」
『Ｙｅｓ，，，，，，ｍｙ ｆｒｉｅｎｄ』
「……！」
バルディッシュの言葉に、秀人さんが目を見開き……嬉しそうに、笑った。
「ああ！　それじゃ、二人とも……やるぞ！」
『『Ｓｔａｎｄｂｙ ｒｅａｄｙ』』
――ヴオオオオンッ……！！
秀人さんの足元に、魔法陣が展開する。
いつものように、魔法陣が分解し……
――バシュッ……！！
伸びたラインが、クロノ、ユーノくん、アルフの順に、繋いでいく。
「せめて一声掛けろ……」
残り少なくなっていた魔力を吸い取られ、げんなりしながらクロノが言う。
けどもう、既に諦めたかのような、気安い雰囲気が漂っていた。
なんだかんだで、秀人さんには振り回されっ放しだもんね……
そして四人の魔力のラインが、レイジングハートと、バルディッ

シュを繋いだ。
――ヒュイイイイイイィィィィィン……！！
レイジングハートとバルディッシュが、光に包まれる。レイジングハートは、桜色。バルディッシュは、黄金色。
二色だった輝きは、徐々にその色合いをシフトさせ、空色へ近づいていく。
「ぐっ……！」
ユーノくんが、がくりと膝を突く。
二つの光は、次第に重なっていき……一つの光へ。
「う……！」
アルフが、その場に倒れる。
一つになった光は、次第にある形へと収斂する。
「しっかりと、決着を着けろよ……」
ばたん、とクロノが倒れる。
そして……
「……来い！！」
秀人さんが、魔力を最後の一滴まで注ぎ込み……

――光の中から、一本の杖が現れた。

基本は、レイジングハートのキャノンモード。その各部を補強するように、バルディッシュを思わせる外装が装着されている。レイジングハートの基本色である白と、バルディッシュの基本色である黒が、美しいツートンカラーを描いている。
核である赤い宝石の隣には、バルディッシュの……フェイトの魔力光と同じ、黄金色の宝石。少し地味であるモノクロの杖に、鮮烈な色を加え……

「……きれい」

「……かっこいい」

その美しさに……そして、その凄みに圧倒されてしまう。

レイジングハートでもあり、バルディッシュでもある杖が、二重音声で発声した。

『『Ｕｎｉｔｅｄ　Ｈｅａｒｔ　Ｓｅｔ　Ｕｐ』』

ユナイテッドハート（結ばれた心）……それが、この杖の名前。

……まるで、私達を象徴するかのような名前。

『『さぁ、マスター達。私を手に取ってください』』

「マスター……」「……達？」

フェイトと、ぴったり同じタイミングで秀人さんを振り返る。そういえば、この杖は誰のものなんだろう。私？　それとも、フェイト？

秀人さんは、今度こそ魔力と体力をすっからかんに干上がらせ、床に倒れていた。その体勢で、答える。

「どっちも……なのはと、フェイト。二人がマスターだ。中身も、そういう風にしてある」

「本当に……よくやったわ、秀人」

プレシアが、秀人さんを膝枕で休ませる。ちょっとばかりプレシアが妬ましいけど……今だけは、目を瞑ろう。

『二人とも！！　準備はいい！？』

エイミィの呼びかけに、私達は、声をそろえて……！

「「　いつでも！！　」」

アースラのハッチが開き、目の前に、準虚数空間に浮かぶ庭園が現れる。轟々と唸り、今にも瓦解しそうな、巨大な質量を持った建

造物。
もしもあれが砕け、地球に、海鳴市に降り注いだりでもしたら…
…私の大事な人たちが、欠けてしまうかもしれない。絶対に、止めなければならない。
「……ボクね、」
と、フェイトが独白を始めた。目はしっかりと目標を見据えながら、それに耳を傾ける。
「ついこの間まで、おかーさんとアルフ以外、何もいらないって思ってた」
初めて会ったときの……冷酷な敵。
「でも、今は……ちょっとだけ違うんだ」
それは、偽りの姿で。本当は、ただ寂しがりやなだけの、優しい女の子。
「ももこ、みゆき、きょうや……」
フェイトにつかの間の温もりを与えた、私の家族。
「ユーノに、ひでと。それから、それから……」
手を伸ばしたのは、ほぼ同時。
私と、フェイトの手が、

「なのは」

ユナイテッドハートを、手にした。
「フェイト……？　今……」
今、私の名前を……
「ボクは、みんなを守りたい」
目の前には、照れくさそうなフェイトの笑顔。
「力を貸して。ボクたち二人なら……なんでも出来る！！」
「……うん！」
……暖かな気持ちが、胸を満たしていく。
それは俗に……『友情』と、呼ばれる気持ちだった。

「やるよ、フェイト！！」
名前を呼ぶ。
「うん、なのは！！」
呼び返してくれる。

無敵の万能感が、全身を満たしていく！！

『『Ｓｅａｌｉｎｇ ｍｏｄｅ ／Ｈｉｇｈ ＥＮＤ』』

桜色と、黄金色。二対の翼が、広がる。
シーリングモード・ハイエンド。
放たれるのは、最強の封印魔法。
魔力収束……スターライトで集めた魔力を、私たち二人の封印魔法に乗せて、打ち出す。本来であれば、機体も、肉体の限界もはるかに超えた、過剰出力にも程がある魔法。

今の私達には、『限界』なんて……きっと無い。

既に、十分な魔力は集まっている。
あとは、たった一節の言葉を、詠唱するだけ。
それは、レイジングハートとの契約の一節。
初めて魔法を使って暴走体を封印するときに、秀人さんが選んでくれた。

始まりの言葉。

それを今、もう一度口にしよう。

「「 不屈の心は…… 」」

……これで、終わる。今までのすべてが。
そして、これから始まるんだ。私の……私たちの、すべてが。

「「この胸に！！」」

――――――――――――――――――――！！！！！！！

発射された二色の封印魔法は、まっすぐに、揺れることも、阻まれることもなく突き進み……

――ゴオオオオオオオオオオオオオオンッッッ！！

今にも崩れようとしていた庭園を、捉えた。
貫くのではなく……命中した箇所を中心に、庭園を魔力の殻で包み込んでいく。
負担は、ほとんど感じない。当然のように、封印は成されていく。
そして。

――キィンッ……！！

そんな甲高い音を最後に、庭園の震動は完全に止まった。
『『Ｓｅａｌｉｎｇ Ｃｏｍｐｌｅｔｅｄ』』
封印、完了。

『『Ｍｏｄｅ Ｒｅｌｅａｃｅ』』

役割を終えたユナイテッドハートは、元の二機に分離し、レイジングハートは私の左手に。バルディッシュはフェイトの右手に、そ

れぞれ帰還した。
『皆さん』
エイミィではなく、リンディさんが直々に通信をしてきた。『皆さん』と言うからには、これはきっと全体通信。
『次元震の停止を、確認しました。これより、準警戒態勢へと移行します』
危機は脱した。
『嘱託魔導師の皆さん』
嘱託……つまり、私たちのことだ。
『あなた方の協力無しには、本件の解決はありませんでした。アースラ艦長として、また、一人の管理局員として、深くお礼申し上げます』

そっか……終わったんだ。でも……
ちらりと、横を見る。
この事件が終わったら、フェイトは、事件の重要参考人として、連れて行かれてしまう。死に別れるわけではないから、一生会えないというわけではないけど……でも折角、仲良くなれたのに……
――ぎゅっ
俯いていた私の手を、フェイトが握った。
「大丈夫だよ」
――また、会えるから。
暗に、そう言われた気がした。
全く……そんな希望に満ちた顔をされたら、私が馬鹿みたいじゃないか。
「ん……」
でも、わざわざお礼を言ってやるのも癪だから……今は、こうして。

手を取って、少しでも長く……繋がっていよう。

私は、フェイトの手を握り続けた。ドッグに局員が来て、フェイトを連れて行く、その間際まで。

そして、ジュエルシード事件……後に、P・T（プレシア・テスタロッサ）事件と呼ばれるこの騒動が終結して、一週間が過ぎた。

第三十二話（後書き）

レイジングハートとバルディッシュの合体というネタは、公式での没設定（本当）

、、、これで、なんとか一段落です。
あとはエピローグで、第一期は完になります。

Ａｓは、、、現在、設定やらキャラクターを煮詰めている最中ですので、少し先になるかもしれません。

ＳｔｒｉｋｅｒＳまでの三部作を予定しています。

第一部『なのはとフェイトの物語』
第二部『八神はやての物語』
第三部『吾妻秀人の物語』

って感じです。
ご意見ご感想、お待ちしております。

第三十三話（前書き）

ごめんなさいっ！
まさか、エピローグを書くのがこんなに難しいなんて思いませんでした。

第三十三話

――ピピピピピッ……

「う……？」

無粋な電子音は、気持ちのいい睡眠から、私を強制的に現実へと帰還させた。

「うる、さいぃ……！」

薄目を開けて、カーテンを引いた窓を見る。

……確かに、もう日は昇っているけど……

「いま、何時……？」

携帯電話を引き寄せ、開く。

闇に慣れた目を、ディスプレイのバックライトが眩しく照らす。

「午前、五時……？」

誰だ。こんな時間に非常識な。

それに僅かに顔をしかめ、メールボックスを開ける。

「クロノだったら……ぶん殴ってやる……」

人の睡眠を……よりにもよって、第二土曜日の朝を、台無しにしてくれて……！

ベッドの下。秀人さんは、布団の中でもぞもぞと身じろぎをした。

「……すー」

また、布団を被りなおして、静かな寝息を立て始めた。

よかった。起こしちゃったのかと思った。

五日前から仕事に復帰し……それまで休んでいた分もガンガン働き、疲労困憊なのだ。

おかげで洗濯物が多くなって、我が家の洗濯機は回りっぱなし。食事もお肉が中心になって、エンゲル係数も鰻上りだ。

「って、そうだ。メール……」
そして、表示された文章に目を通す。
『クロノだ』
よし、ぶん殴ろう。
『朝早くにすまない。だからひとまず、僕を殴ろうとするのはやめてくれ』
……ちっ、行動を読まれてる。
『さて、それでは用件の方だ』
スクロール。
『フェイトに会いたくないか？』
「えっ！！？？」
フェイトに、会える！？
布団を跳ね飛ばし、起き上がる。
『フェイトとアルフは今日、時空管理局の本部へ護送される。時刻は、地球で言うところの午前七時だ。午前三時にその時刻が決定されたおかげで、こんな時間に連絡することになってしまった。すまない』
クロノ、ナイスだよ！！
スクロール。スクロール。夢中で文章を読み進める。
『午前六時から午前七時までの一時間だけ、地球で面会が許されている。場所は……』
『海鳴臨海公園』
「……あはっ」
あまりに気の利いた待ち合わせに、笑みがこぼれてしまう。だって、あそこは……

「なのは、どうした？」
あ、起こしちゃった……私の馬鹿。
「ごめん。でも、これ」
秀人さんに、携帯電話を渡す。それを徐々に読み進め……
「急いで準備するぞ」
「うんっ！」
さぁて、ちゃっちゃと着替えよう！
「ユーノ、起きろ！　おい！」
「ぐえっ！！」
バスケットの中にいたユーノくんを掴み上げ……
「ストラグルバインドッ！！」
――バシイイイッ！
「ぎゃあああああああああああああッ！！！」
……変身魔法を強制解除され、床に落ちた。
ユーノくん、こんなのばっかり。
「な、な、何をするだァー――！！！！」
ネズミ柄のパジャマ姿で秀人さんに詰め寄る。
「フェイトとアルフに会える！」
押入れの中から服を取り出し、投げる。
「おっ……っと！」
反射的に受け取ったユーノくんの手を引き、脱衣所に消える。
お風呂に入ろうとしているのではなく、私が『女の子』だから、着替えは別々……ということらしい。私は別に、一緒でも構わないんだけど。
ハイソックスにスカート。無地の長袖シャツの上に、アリサから貰った上着を羽織り……母さんと姉さんからもらったリボンで髪をポニーテイルに纏め、準備完了。
「秀人さん、ユーノくん、もういいよー」
二人が出てくる。秀人さんは、ジーンズに薄手のジャンパー。ユーノくんは、ハーフパンツにパーカー。

「変じゃないよね？」
私なりに精一杯おめかししてみたけど……
「似合ってる。可愛いよ」
「そ、そうかな？　えへへ……」
褒められちゃった。
「二人とも、時間！　時間！」
そうだった。

携帯電話を開き、メールをタイプする。
『今から海鳴臨海公園で、フェイトと会ってきます』……文面は、これでいいかな。
メールアドレスに載っている人全員に、一斉送信っと。
ポケットに携帯電話を突っ込み、家を出た。

いつものようにバイク……ではなく、今日は……
「それじゃ、行くよ……レイジングハート」
『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ』
ふわ、っと飛行魔法を発動し、浮上する。
「ユーノくん、お願い」
「りょーかい」
ぱしゅん……と、私たち三人の周囲に、五メートル四方の結界が発動する。移動式の結界だ。これで、誰かに見られる心配は無くなった。
――実は、秀人さんのバイクはもう無い。
脱出することが先決だったから、庭園内に置いてきてしまった。庭園を封印した後、取りに行ったんだけれど……バイクを置いていた場所に虚数空間が開いてしまったらしく、影も形も見当たらなかった。
『気にするな』って言われたけど……やっぱり悲しい。たったの一ヶ月かそこいらでも、私たちの思い出が詰まった一台だった。

「はぁ……」
ため息をついて、眼下に広がる町並みを眺める。
「こら」
ぽすっ、と頭を軽く撫でられる。
「そんな顔で、一週間ぶりにフェイトに会う気か？」
う……言われてみれば。沈んだ顔をしていたら、フェイトに申し訳ない。
笑顔、笑顔……よし。
「さ、急ごう！」
秀人さんとユーノくんの手を掴み、スピードアップ。

臨海公園まで、あと少し。

◆　◆　◆　◆

早朝の市街を、黒塗りの高級車が走っていた。
走行音は、恐ろしいほどに静かだ。車のポテンシャルを、熟練のドライバーが引き出したが故の、無音。
だが、それとは対照的に……
「鮫島、もっと飛ばしなさい！」
「駄目だよ、アリサちゃん。法定速度は守らないと……」
「私が法よ！　というわけで、ガンガン飛ばしなさい！」
「アリサちゃん……」
車内は騒がしかった。
ドライバー……鮫島は、法定速度ギリギリの速度で、海鳴臨海公園へと向かう。
「全く、何でこんな直前に言うかなぁ……」
腕を組み、ドカッと座席に座る。
愛犬の散歩をしていた最中、いきなりなのはからのメールを受け取った。

「ふあぁ……」
隣のすずかも、大きな欠伸をしている。朝に弱い彼女をたたき起こし、車に押し込んだのもアリサの仕業だった。
「どんな奴なのか、面を拝んでやろうじゃないの……！」
聞いた話では、あの日、子猫を半殺しにした張本人だという。理由はどうであれ、その罪に変わりは無い。
「確か～……『可愛い子』、だったっけ？」
「そんで、『友達候補』ね」
「……」「……」

「「……どういう子？」」

考えれば考えるほど、よく分からない。
「ま、会えばわかるわよ」
「そうだね」
想像を切り上げ、背もたれにどっかりと体を預けた。
「そうだ、すずか。今日、私の家になのは呼んで遊ばない？」
「あ、賛成」
そして二人は、今日の予定を組んでいく。臨海公園まで、あと十分ほどだった。

◆　◆　◆　◆

――カラン
店のドアに、『ＣＬＯＳＥＤ』の看板を出し、鍵を閉める。
そして、手書きのチラシをどさっと置く。
『喫茶翠屋、本日臨時休業。
こちらのチラシをお持ちの方、次回ご来店の際にケーキ半額！』
「これでよし、と」
彼女……高町美由紀は、満足げに頷いた。

「おーい、まだか！」
ウェイターの格好から、普段着に戻った恭也がせっつく。
「はいはい！　今行くよー！」
ばたばたと慌しく、スニーカーで駆けていく。
幸いにも、この翠屋のある大通りから臨海公園まで、走れば十分程度だ。
桃子は二人に後を任せ、先に向かっていた。

今日は掻き入れ時の第二土曜日。それを臨時休業にするなど、以前なら絶対にありえないことだった。さすがに、反省したのだろう。
「フェイト……会えなくなっちゃうのかな」
走りながら、どこか寂しそうな美由紀。
僅かな……一週間にも満たない期間ながら、汚い食べ方を矯正し、最低限のマナーを文字通りに叩き込み、髪の毛の手入れをしてやったりと、色々と世話を焼いてやったのは彼女である。
「なに、死に別れるわけじゃない。また会えるさ」
なぜかフェイトの実戦訓練につき合わされ、日がな一日、木刀を振る羽目になった恭也。
「……それまで、鍛えなおさねば」
何気に、フェイトに何本か取られてしまったのは苦い思い出である。剣の鍛錬を疎かにしていたことを、今更ながら悔やんだ。

「……今日は、なのはと食事でもするか」
「そう言うと思って、料理の下ごしらえしてきたんだよ」
美由紀がサムズアップし、手柄を誇る。
「……そういえば、今日が初めてか」
秀人との約束。週に一度は、家族で食事をすること。
先週は、なのはが疲労でダウンしていたためお流れになってしまったが、今日は大丈夫な筈だ。
「で、何を作るんだ？」

「ハンバーグとパスタ。後は、お母さんと一緒に即興で作るよ」
「いいな。きっと喜んでくれる」
二人の中では、なのはは一日、自分たちと過ごすことが決まっているようだった。

◆　◆　◆　◆

「くー……くー……」
富山咲は、週末らしくベッドで惰眠を貪っていた。
一日の大半は寝て過ごし、日ごろの疲れを忘れる……それが、咲のいつもの週末だった。
たぶんに漏れず、今日という日もまた、枕を抱き締め涎を垂らし、怠惰な一日を満喫しようとしていた。
――♪♪
と、その睡眠を妨害する物があった。咲の携帯電話である。流行の音楽の一節が、メールの着信を告げていた。
「ん、ん～～……」
だが、咲は起きない。
――ピリリリッ！
今度は、メールではなく電話が着信した。
「んぁ～……？」
半分以上寝ている頭のまま、携帯電話を取る。
「はぁい……ただいまるすにしております……ぴーというおとのあとに～……」
……居留守を使うつもりらしい。
『富山さん、起きなさい』
だが、電話口から聞こえてきた声に、少しだが目を覚ます。
「あれー……はせがわせんせー……？」
『はいそうです。メールは見ましたね？　すぐに向かいますよ』
「めーる……？　はい、すぐに～……すぴー」

懲りずに眠りに落ちていく。電話の向こうで、すぅっ、と息を吸う音がして……

『起きなさい！！』

「わひゃあああああっ！！」

ずでんっ！とベッドから転げ落ちた。

「あた、あたたた……！　お尻打った……！」

『起きましたね？』

「そりゃ起きますよ……もう、何ですか？」

『ついさっき、高町さんからメールが届きました。件の彼女と、海鳴臨海公園で会うそうです』

「なのはさんが？　……何時に？」

『今からだそうです』

時計を確認。午前五時五十分。

「な、何でこんな朝っぱらに言うのよーーーー！！」

携帯電話を放り出し、洗面所に駆けていく。ざぶざぶと顔を洗い、最低限のメイクを施し、髪をバレッタで纏める。

わたわたとパジャマを脱ぎ捨て、クローゼットから服を引っ張り出す。いつもの癖でスーツを取り出し、ハッと気づいて今度はワンピースを取り出した。

時刻は、六時になろうとしていた。

「うえええええん、間に合わない～……！！」

ハンドバッグに携帯電話を開いたまま放り込み、原チャリの鍵を手に玄関を飛び出していった。

『変わりませんねぇ、あなたも……』

電話の向こうで、長谷川が呆れて呟いた。

マンションの横に一台のセダンが停車し、クラクションを短く鳴らした。ヘルメットを被ろうとしていた咲は、それを放り出し、運

転手の顔も確認せずにセダンに駆け寄る。
「先生、ありがとー！！」
ダイブするように助手席に滑り込んだ。
「全く、世話の焼ける……」
律儀に咲がシートベルトを締めるのを確認してから、発進させた。
「でも、わざわざ迎えに来なくても……何でです？」
ポーチから取り出した櫛で、寝癖を直しつつ聞いた。
「あなたのことです。あのまま原付で家を出ていたら、道路交通法違反で警察のご厄介になるのは目に見えていますから」
「うっ……」
実は、既に点数がギリギリの咲であった。
「……前にもこんなこと、ありましたねぇ」
「ええ。小学五年生の遠足でした」
「違いますよ。四年生です」
珍しく、咲が正解を言い当てた。
「む……そうでしたか」
「はい。ちゃーんと覚えてますよ。寝坊した私を迎えに来てくれて、お弁当を半分こしてくれましたよね」
胸を張る咲に、ぼそりと一言。
「覚えているなら、なぜ寝坊癖が直らないのでしょうか……」
実は、こうして送り迎えをするのは今回だけではなかったりする。
「え？　……あ、あはは、それはまぁ……えぇと、何といいますか……」
途端、しどろもどろになる。それに苦笑しつつ、臨海公園に近づいていく。
「ねぇねぇ、先生」
「何ですか？」
くいくいと袖を引く咲。律儀に応対する長谷川に、咲は提案する。
「今日は秀人さんとなのはさんを連れて、動物園にでも行きませんか？」

「ふむ……悪くないですね。予定らしい予定もありませんし。ですが……」
長谷川は、その場面を想像してみた。
十代の少年と小学生の少女を連れて、動物園を歩く自分と咲。
「……はは、まるで夫婦ですね」
何の気なしに言った言葉に、咲が過剰に反応した。
「えっ！？　ふ、夫婦……！？」
赤面し両頬に手を添え、かぶりを振る。
「も、もう！　先生ったら何を言い出すんですか！」
「……？　はぁ、済みません」
長谷川は、よく分かっていないようだった。
「うふふ～♪」
「……？」
咲が機嫌を良くした理由がいまいち分からず、首をかしげる。
「秀人さん……というのは、どのような方ですか？」
話には聞いているものの、実際に会ったことは無い。
「先生とは、きっと気が合いますよ」
咲は、妙な確信を持ってそう言った。

臨海公園は、目の前だった。

◆　◆　◆　◆

何分かの飛行を経て、俺たちは臨海公園に到着した。まだ早朝というだけあって、人はあまりいない。ジョギングをする人、犬の散歩をする人……その程度だ。
それも、事前に展開されていた認識阻害結界をくぐった途端、いなくなる。

さーてと。待ち合わせは、確か遊歩道だったか。

「秀人さん、ユーノくん。こっちこっち」
俺たち二人の手を引き、ぱたぱたとなのはが走る。ポニーテイルの先端がぴょこぴょこと跳ね、抑えきれない喜びを表現していた。
雑木林を抜けた先……海沿いの遊歩道に、クロノと、アルフと……少し挙動不審なフェイトが待っていた。
「フェイト！」
喜色満面で走り寄っていく。
「ひぅ……！」
が、フェイトはアルフの背中に引っ込んでしまった。
「ふぇ、ふぇいと……？」
がびーん、とでも形容できそうな表情で、なのはが立ち尽くす。
「私と会うの、嫌だった……？」
縋るような声。
そんなに心配することは無いんだけどな。大方、久しぶりに会うなのはに、どんな態度で接すればいいのか悩んでいるだけだし。
「……ちがうよ。ちょっと、はずかしかっただけ」
恐る恐る、アルフの背後から出てくる。服は……少し地味だ。まぁ、事件の重要参考人がフリフリのゴスロリファッションなんて、着れるわけないんだけど。
長くて量のある金髪が、潮風に揺れている。
「よっ。久しぶり」
三人に、軽く手を上げて挨拶する。
クロノは目礼。アルフは尻尾を振りながら片手を挙げ、フェイトは控えめに手を振る。
「……」
「……」
じーっと見詰め合う、なのはとフェイト。
「んじゃ、俺たち向こうで待ってるから」
「時間が来たら呼びに来る」
水入らずで話をしたいだろうし、二人っきりにしてやろう。

「リンディさんとエイミィ、来てないのか」
誰よりも真っ先に駆けつけてきそうなのに。
「艦長は事後処理、エイミィは仮眠に入った」
「ふぅん……みんな疲れてるんだな」
確かに、なのはとユーノもあの後二日間くらい寝込んでたっけ。
「……あの翌日にピンピンして仕事に行った君が、異常なだけだ」
「何日もずっと欠勤してたんだぞ。身体は動くんだし、早いとこ復帰しないと申し訳立たないだろ」
普通の会社だったら、とっくに首にされているところだ。
「秀人、君に会わせたい人がいる」
「何だよ、藪から棒に。誰？」
クロノは、ユーノとアルフを見た。
「……できれば、秀人と二人きりのほうがいいらしくてな。ユー……フェレットもどき、犬。秀人を借りるぞ」
「「誰が（フェレットもどき／犬）だッ！！」」
仲良いなぁ、お前ら。だがユーノ、さすがにバインドカッターはやりすぎだ。アルフもその爪を引っ込めろ。
「は、離せ秀人！　わざわざ言い直しやがったぞこの野郎！」
「このチビ！！　あたしは犬じゃなくて狼だ！」
「はいはい。すぐ帰ってくるから大人しくしててくれ……よっ」
――ギュルルルルッ！
ストラグルバインドで、二人を纏めて縛る。
「ひ、秀人おおおお！」
恨みがましいユーノの声をスルーし、クロノの後を追った。

「この辺りでいいだろう」
何本か道を挟み、クロノは足を止めた。
簡易結界を展開し、懐からＳ２Ｕを取り出す。
「どうしても、君と話がしたいらしくてな。……ほら」

それを俺に渡し、ユーノとアルフがいる場所に戻っていった。
S2Uから、空中にモニターが投影される。相変わらず、意味不明にハイテクだ。
そのモニターに、真っ白い……囚人服のような服を着た、一人の女性が映し出された。
その人物に、俺は息を呑む。

『……久しぶりね、秀人』

「……プレシア」
あんたかよ。
一週間ぶりに見るその顔は、あの呪的なメイクが剥がれ落ち、元の端麗な容貌となっていた。
『十分間だけ、あなた達と話をする時間を貰えたの』
十分？　たったそれだけか……でも、何でわざわざ俺に？
「フェイトはいいのか？　色々、話したいこともあるだろ」
紆余曲折を経て、ようやくフェイトと向き合うことができたのに。
ただの十分でも、フェイトと話したいんじゃ……
『……駄目よ』
プレシアは首を横に振る。
駄目って……何でだ。もしかして、話をできる人物にも制限がされているとか？　やっぱり、主犯格だと色々厳しいんだろうか。
だが、違った。
『私は人間として、母親として……娘に、最低の行いをしてきたわ』
表情に色濃く、悔恨を滲ませる。
『この罪を清算しない限り、私には母親を名乗る資格は無い』
「そんなこと……！」
無い、と言いかけて、口を閉じた。

プレシアの罪は、重い。
もし本当に次元断層が発生していたら……数え切れない程の命が、失われていた筈だ。さらに言えば、フェイトを虐待していたという事実もまた、プレシアの言う『罪』なのだろう。

「大体、どうやって清算するって言うんだよ！
ただ牢屋でじっとしているだけが、あんたの言う『償い』なのか！？」

代わりに出てきたのは、自分でも理解できない激情だった。
プレシアは瞑目し、努めて冷静に宣言した。
『私の刑期は、少なく見積もっても数百年……事実上の、永久幽閉よ』
「……！」
でも、どこかそれに納得している自分がいる。即刻死刑にならないだけ、まだ温情措置だと考えられる。
「でも、そんな……！」
これじゃあ、救いが無さすぎる。

くすっ、と小さな笑い声が聞こえ、再び視線をモニターに移す。
『でも、１００％、永久に会えないというわけでは無いのよ』
……どういうこと？
とっくに脳がオーバーヒートして、思い浮かばない。
『私の知識と技術を供与し続ければ、減刑も可能』
「え……？」
減刑できる……？
『現在を生きて、過去を償う……あなたの言葉よ、秀人。私は私なりに……精一杯、『生きて』みるわ』
その表情は、これから獄中へ入るものとは思えないほどに澄んでいて、力強い。
本気……なんだ。本気で、数百年の刑期を相殺するつもりなんだ。

『もう一度、フェイトに会えるようにね』
「プレシア……」
どう声をかけるべきか。激励か、慰めか。
だが、先に口を開いたのはプレシアだった。
『……吾妻秀人さん』
画面の向こうでプレシアは、改まって俺の名を呼ぶ。
その声は、僅かに震えていた。
冷静に振舞っていても……やはり、娘と離れ離れになってしまうことは、嫌に決まっている。
何かを言おうとしては、口をつぐみ……それを幾度も、幾度も繰り返す。
そして、プレシアが搾り出したのは……ありふれた、たった一言だった。
『娘を……フェイトを、よろしくお願いします』
そして、深々と頭を垂れる。
――ザッ、ザザッ……
いよいよ、時間切れらしい。映像が、徐々に消えていく。
「……ああ、任せろ！」
同時、プツン……と、映像が消えた。
聞いたのかどうかは、分からない。だからあれは、俺の決意表明だ。
プレシアが帰ってくるその日まで……俺が、フェイトを守る。

三人が待つ場所に戻る。
「秀人、誰だったの？」
「ああ、プレシア」
特に隠すようなことでもないだろう。サクッと簡潔に伝えた。
「……」
アルフの耳が、ぴこんと動く。
「……ふん、あの女……私にも言ってたよ。『フェイトを頼む』って。一々言われなくても、そうするに決まってるだろ」
なるほど。そのくらいの話をする程度には、なっているんだな。

「……クロノ、さんきゅ」
Ｓ２Ｕを返す。
たったの十分。だけど、その十分を捻出するのにどれだけ苦労したかなんて、目の下の色濃い隈を見ればハッキリ分かる。
こいつはこいつで、プレシアの……ひいてはフェイトのため、奔走していたんだ。
「別に、僕は何もしていない」
ったく、礼くらい素直に受け取れっつーの。

それから数十分、たわいも無い話をしたり、水切りの回数を競ったりしながら、時間を過ごす。
「……そろそろ、時間だ」
柱時計は、午前六時五十分を指していた。
「……そうか」
いよいよ、本格的にお別れか。
「そろそろ、認識阻害も限界だ」
確かに。
早朝の数人しか通らないような状況であれば、認識阻害結界は有効な人払いだ。確固たる目的も無い人は、無意識のうちにこの公園を避けるようにできる。

だが、今日は土曜日。朝七時にもなれば、この公園目当てに近所の住民が来てしまうかもしれない。そうしたら、認識阻害は意味を成さなくなってしまう。だからこそ、こうして早朝を選んだんだろう。

「たったの一時間……僕もまだまだ、力不足だな」

「そんなこと無い。一時間でも、十分でも……二人には、必要な時間だ。それを作ったのは、クロノ、お前の力だ」

「決まってたなら、僕に一声掛けてくれればよかったのに。結界は得意分野だよ？」

ユーノの結界魔法の腕は、クロノを上回っている。

「……いや。さすがに、民間人の手を借りっぱなしというのは体裁が悪くてな」

「管理局ってのも、大変だねぇ……」

そこらへんは、大組織の弱みか。

でもまぁ、そんなに気にすることでも無いだろう。

あの二人なら、きっと今頃……

◆◆◆◆◆

「久しぶりだね、フェイト」

「うん。一週間ぶり……くらい？」

ひょこっと首を傾げる。

「くらい、じゃなくて、丁度一週間だよ」

「……」

「……」

……ええっと、何だっけ。

おかしいなぁ……色々、話したいことがあったのに。フェイトの顔を見た途端、全部吹っ飛んじゃった。

「……おかーさん、ね」

ぎりぎり潮風にかき消されない程度のか細い声で、フェイトが話し出す。

「しばらく、ボクとは会えないんだって」

……フェイトと違い、今回の事件の主犯のプレシアが、そんな軽い刑で済む筈が無い。そんなこと、フェイトが一番よくわかっているはず。

「せっかく、仲直りできたのになぁ……」

それでも、理性と感情は別物で、折り合いなんて付けられない。

「もう怒ってないって言ってるのに……ボクをいじめてたことも、ちゃんと償うんだって」

「そっか……」

微妙な気分だ。改心したとはいえ、プレシアがフェイトを虐待していたという事実には変わりは無い。私としては、プレシアにはしっかり罪を償ってもらいたいけど……それは、フェイトから母親と一緒に過ごす時間を奪うということだ。

「ボクたちも、しばらく会えなくなっちゃうんだよね」

「うん……」

そして、フェイトもまた……プレシアの言いなりだったとはいえ、実行犯として、この事件の中心にいた。

聴取が終われば、今度は裁判だ。リンディさん達は、可能な限り情状酌量を勝ち取ってみせると言っていたけど……少なくとも、数ヶ月は会えないことは、もう確定しているらしい。

ああ……久しぶりの再会なのに、どんどん暗い話になっていく。

「おかーさんが、言ってくれたんだ。『後悔しないように行動しなさい』……って」

え……？

「多分、今日を逃したら、ずっと言えなくなっちゃうんだ」

それって、もしかして……

「何だかんだで先延ばしにしちゃってたけど、あの時の返事……今、するね」

「う……うん……！」
心臓が、五月蝿いくらいばくばくと脈打つ。
（断られたらどうしよう……）
そんな懸念が、ぐるぐると渦巻く。

「ボクは、キミの友達になりたい」

――――――――――――――やっと、言ってくれた。
感無量になり、抱き寄せようとして……
「でも、さ……」
あれ？　何で困ってるの……？　ここは、感動の抱擁をする場面じゃないの……？
「友達って……どうやって『なる』の？」

……あれ？
迂闊だった。友達になろうにも……私、自分から作ったこと、一度も無かった。
「ええっと……友達っていうのは……そのー……」
……やばい。知らない。
「……知らないの？」
「ちょっと待って！　今考え……じゃなくて、思い出すから！　すぐに！」
ど……どうしよう……！このままじゃ、フェイトと友達になれない……！

「キミ……もしかして、友達いないの？」

「はうっ！！」
フェイトの無邪気な一言は、ぶっすりと、私の心のナイーブな部分を貫いた。
「い、いるもん！」
涙が浮かんだ目で、反論する。まったく、失礼な！
「二人もいるんだから！」
「それ、多いの？」
「……もう許して」
ううう……泣いてないもん……友達は量より質だもん……
アリサと、すずかっていう立派な友達が……
アリサと、すずか……？

『アリサでいいわよ』
あのときの記憶が、フラッシュバックする。
『友達は、みんな……』
「あ……」
何だ……ちゃんと知ってるじゃないか。
「……名前」
「え？」
「名前で呼び合うのが、友達なんだって」
多分、最初はそれでいいんだ。

「だから、『キミ』じゃなくて……ちゃんと、『なのは』って、呼んで欲しいな」

きっかけは小さくても……それで、友達になれれば。
「知ってるかもしれないけど……私、なのは。高町なのは、だよ」
フェイトが私の名前をちゃんと呼んでくれたのは、あの戦いの最中……言ってしまえば、ドサクサ紛れの一度きりだけだ。
だから、ちゃんと呼んで欲しい。

フェイトは頬を染め、すうっ、と深呼吸。
「……なの、は」
ごにょっ、と、蚊の鳴くような声で……確かに、呼んでくれた。
「うん！」
それに、大きな声で返す。
「……なのは」
恐る恐る、確かめるように。
「うん！」
ぱぁっ、と、フェイトが笑顔を見せた。
初めて会ったときのような、諦めきった、冷酷なものじゃない。
フェイトの……本当のフェイトの、笑顔。
「なのは！」
それが今、私に向けられている。あの頑なだった心を、開いてくれたんだ。
「フェイトっ！」
「ひゃあっ！」
うれしくてうれしくて……今度こそ、フェイトを抱き寄せた。
「……ありがとう、なのは」
最初は恥ずかしがっていたフェイトも、私の身体に手を回して、抱き返してくれる。
「なのは達がいなかったら、ボクはきっと駄目になってた。
今だから言うけど……なのはは、ボクの憧れだったんだよ」
「……憧れ？」
何で……？　私、最初のうちはボロ負けして、敗走して……とてもじゃないけど、憧れの対象では無かったと思うけど……
「自分の力を信じて、仲間と力を合わせて、強敵に立ち向かう。
……まるで、正義のヒーローだ」
手放しに褒められ、背中がむず痒くなってしまった。
「そんなつもりは無かったんだけどなぁ……」
正義とか、そんな小難しいこと知らないし。

「秀人さんと一緒にいて、恥ずかしくないように……秀人さんに、誇れる自分になるために、がんばってただけだもん」
「誇れる自分に……か」
密着しているせいで、フェイトの表情は読めないけど。何か、思うものがあるみたいだ。

「ごめんね。そろそろ、みたい」
「……うん」
柱時計は、午前六時五十五分を回ろうとしていた。
向こうから、クロノが戻ってきてしまった。
「なのは」
秀人さんと、ユーノくんも。
「フェイト、時間だ」
「あの、もうちょっとだけ……」
クロノは、時計を見る。
「あと五分だ。伝えたいことがあるなら、今のうちに」
「うん、ありがと」
そして、ちょこちょこと私たちの前にやってくる。
「あのね……もしかしたらボク、一年以内に出てこれるかもしれないんだ」
あくまで、可能性の話。でも、かなり高い確率。
「そうしたら、アルフも連れて、こっちで暮らそうと思ってるんだけど……」
何かを言いたそうに、ちらちらと秀人さんの顔を見る。
「ひでと、言ってくれたよね……？『ウチに来い』って」
秀人さんは、うーん、と考え込む。
「さすがに、今の家じゃ狭いなぁ……」
六畳一間に、五人……確かに、無茶がある。
「え……」
がぁん、とショックを受けていた。

「そ、そっかぁ……は、はは……」
フェイト……話は最後まで聞かないと駄目だよ。
――ぽん
その頭に、秀人さんの手が乗る。
「『五人で』暮らせる家探すの、手伝ってくれよ？」
「え……？」
きょとん、と目を丸くする。
もう……お馬鹿さんなんだから。
「う……うんっ！！」
一転して、うれしそうに笑う。

あれ……？　そういえば、ユーノくんとアルフは、どこ行った？

「うっ……ぐすっ……フェイト、良かったねぇ……」
あ、いた。
「……でも、フェイト取られちゃった……ぐすっ」
喜びながらいじけるという、器用な真似をする。
「……」
その肩を、無言でぽんぽん、と叩くユーノくん。
……苦労性同士、気が合うみたいだ。

「午前七時。時間だ」
「うん……」
フェイトは名残惜しそうに、私の手を離す。
――キィンッ！
フェイト達を中心に、魔法陣が展開した。
いよいよ、お別れだ。
しばらく会えない。その事実が、今更ながらのしかかってきて……
「フェイトッ……！」
思わず、駆け寄る。

「なのは」「駄目だ」
けど、秀人さんとユーノくんに肩を押さえられ、止められた。
「辛いのは、フェイトも一緒だ」
「でもぉ……！」
せっかく友達になれたのに、もう離れ離れなんて……
「なのは」
でも、私の名を呼ぶフェイトの表情に、悲しみは見えない。
「大丈夫。また、すぐに会えるよ」
いや……目じりに、薄っすらと涙が浮かんでいる。
秀人さんが言うとおり……フェイトだって、悲しいのを我慢して、私に笑顔を見せているんだ。私だけがぐずぐず泣いているなんて、みっともない。
ぐしぐし、と乱暴に涙を拭う。
「ふ、ん……！　さっさと出てこないと、フェイトのことなんて忘れちゃんだから……！」
意地を張って強気に、思ってもいないことを言ってしまった。
「ふふ……それじゃあ、がんばらなきゃ」
光が強くなり……フェイトの姿が、段々見えなくなっていく。
「またね。なのは、ひでと、ユーノ」
徐々に、徐々に……
「嘘だよ！」
……意地を張るのは、もうやめる。
せめて、友達には素直に……笑顔を向けよう。

「フェイトのこと、ずっと待ってるから！」

「……！　うんっ！」
ぶんぶんと、大きく手を振る。
フェイトも負けじと、大きく手を振り返す。

――そして、光が収まった。
「……」
もう、そこにフェイトはいない。周囲を覆っていた結界も、同時に解除された。
「……さ、帰ろう！」

「ユーノ、お前はどうするんだ？」
秀人さんが、傍らを歩くユーノくんに聞いた。
そういえば……ジュエルシードのことが全部解決した今、ユーノくんがここにいる理由は、もう無いんだった。
「……ユーノくん、帰っちゃうの？」
「うーん……一族からは、報告も兼ねて帰って来いって言われてるけど……」
「そっかぁ……」
はぁぁ……何で、私が仲良くなった人は、私から離れていくんだろう。
「でも、まだ帰るつもりは無いんだよね」
……え？
知らず知らず下がっていた顔を上げる。
「報告なんて手紙ですれば問題ないし、まだしばらく、こっちにいるよ」
「……！　うんっ！」
良かった……！　本当に！

――ぐうぅ～……
秀人さんのお腹から、盛大な腹の虫が鳴った。
「……悪い、腹減った」
そういえば、朝ごはん、まだだったよね。
「もう、仕方ないなぁ……」

帰ったら、何か作ってあげる。
「せっかくこの辺まで出てきたんだし、どっかで食べていかない？」
うぅん……外食は高いんだけど……たまになら、いいよね！
二十四時間営業の店もあるし。

そんなことを話しながら歩いていたら……見知った顔ぶれが、こっちに走ってきていた。
「え」
しかも、妙に多い。
「なのはっ！　どこにいたの！？」
「探しても見つからないから、焦っちゃったよ」
「あ、ごめん……ちょっと別の場所にいたんだ」
アリサとすずか。

「あらあら……遅かったかしら？」
母さん。
「うん、ついさっき行っちゃった」
「そんなぁ……」
べちゃっと座り込む姉さんと、
「だから、急げと……」
呆れたように腕を組む兄さん。

「なのはさん、ちゃんとお話できた？」
「うん。っていうか先生、髪の毛ボサボサ」
「へっ！？」
あわあわと頭を撫で付ける富山先生。
「富山さんは猫毛ですからね……」
懐から取り出した櫛で、富山先生の髪を梳かす長谷川先生。何でそんなに手馴れてるんだろう……
「先生、しっかりしなよ……大人なんだから」

「ううううう……！　小学生に言われたぁ……！」
ちょっと涙目だった。

「それで……みんな、私たちに何か用？」
まず最初に口を開いたのは、アリサ。
「なのは、今日ヒマ？」
「ヒマって……何が？」
私の今日の予定なんか聞いて、どうすんだろうか。
「お洗濯とか、お掃除とかする予定だけど……」
「なのは……」「なのはちゃん……」
……なんでそんな、変な物体を見るような目で私を見る。
「……ああもう、つまりヒマなのね！　よし、決まり！　今日は、私たちと遊びにいくわよ！」
ええと、これってアレだよね。友達同士で、お出かけ……！
「うんっ！　私でよければ……！」
どうしよう……友達と遊びに行くなんて、人生で初めてかも！

「ちょっと待ったー！」

と、姉さんがアリサの言葉を遮った。
「なのはは今日、私たちと一緒に過ごすんだよ！」
そのまま、がばっと私を抱き上げる……って、何するの！？
「ね、姉さん！？」
「秀人くんとの約束でもあるんだから！　ね、恭ちゃん！　お母さん！」
うんうん、と後ろで頷く二人。
『秀人さん、一体姉さんたちに何を……』
『ああ、うん……週に一度は、なのはとの時間を持て、と……』
そういえば先週、食事に誘われたような気が……
「というわけで、なのはは連れて帰りま」

「待ちなさい！」

ぐわん、と視界がぶれ、気がついたら先生に抱きすくめられていた。

せ、先生まで！？

「なのはさんは、私たちと動物園に行くんです！」

「何で！？」

どこからそんな話が出てきた！？

「そんなの、仮病で休んだ春の遠足のやり直しに決まっています！」

「きゃー！」

何でみんなの前で言うの！？　先生の馬鹿！

「仮病じゃないってば！　本当に、熱が出てたんだから！」

三十七度だけど！

「気づかなくて御免なさい……！　駄目なお母さんを許して……！

う、うう……！」

うわ、母さんに飛び火した！？

「母さん、違うの！　熱って言っても三十七度で、『振って沸いた休日最高！』って感じだったし……って、やべっ！」

「な～の～は～さ～ん～……！？」

バレたあああああああ！！

ぐいっと腕を引っ張られた。

「ちょっと、おばさん！　なのはは私たちと遊びに行くんだってば！」

「お、おばっ……！？」

アリサの大馬鹿！　なんてことを！

「張っ倒すぞゴルアアアアアァ！」

先生、ヤンキー時代に逆戻りしてるうううう！？

「ああもう！　部外者は引っ込んでてってばー！」

――ぐいっ！

もう片方の腕が、姉さんに引っ張られる。

「家族が優先！　遠足なんて、また次行けばいいでしょ！」

「あァン！？　地味子はすっ込んで背景に徹しろや！」

先生、何気に一番酷い……

「地味、子……？」

姉さんの顔から、すーっと表情が消えていく……ああ、修羅場だ……！

秀人さん助けてー！

「はじめまして。私、三年生の学年主任を勤めております長谷川と申します」

「これはこれは、ご丁寧に……吾妻秀人です。……ええと、あちらの先生は」

「ははは、懐かしいですねぇ……後でお仕置きですが」

「あの、これからはちゃんと行事にも参加させますので……」

「ええ、責任を持ってお預かりします」

保護者会！？

「なのは！」

「なのは！」

「なのはさん！」

じり、じり……と、距離が詰められていく。

「「「誰と行くの！？」」」

「う、ううう……！」

選べるわけ無いじゃん……だって、みんな同じくらい好きなのに……

秀人さん、ユーノくん、兄さんってばー！

「ははは、モテモテだなぁ……」

嬉しくないー！

「もう！」

「「「あ！」」」

三人を振り払い、ダッシュ！

「秀人さん、ユーノくん！」

二人の手を掴み、走り出す！

「おいおい、どうするんだよ……」

「いいのかなぁ……」

後になったら考えるからいいの！

「さぁ、行くよー！」

見上げた空は、綺麗な快晴。

この広い空の下には、幾千の、幾万の人がいて……きっと、それ以上の出会いと別れがある。

フェイトとのお別れは悲しいけれど……きっとこれも、新しい物語のプロローグ。

どんな物語になるのかは、誰にもわからない。でも……

「秀人さん。ユーノくん。レイジングハート！」

両手に感じる温もりは、確かなものだから。

「ちゃんと、ついてきてね！」

私はもう、一人じゃないから――――

◆

◆

◆

◆

しゅー……と、車輪のベアリングを僅かに鳴らしながら、車椅子を進める。

座っているのは、小さな少女だ。年のころは、十歳程度だろうか。だが、その表情は妙に平坦……いや、見合わぬ厭世観が浮かんでい

た。
膝の上に乗せているのは、コンビニの袋。中に入っているのは、脂っこくカロリーの高い弁当と、自然界には存在しない色をした飲み物。
「……不味そ」
それでも、それを食べなければ生きていけないという事実が、少女を苛立たせる。
平日であれば、学生や会社員の視線を浴びながらの買い物。だが、今日は第二土曜日。普段であれば鬱陶しい好奇の視線も、そんなに多くはない。
これでも、比較的機嫌のいい状態であった。

と、通路の前方から、騒がしい集団が走ってきた。
先頭を切るのは、栗色の髪の毛の少女。その少女に手を引かれ走る、黒髪の青年と金髪の少年。そしてそれを追いかける、年齢も性別もバラバラな集団。
どたどたと走り抜けていき、その際に発生した風が、少女の異様に長い髪の毛を散らす。
「うぷっ……！」
顔を叩いた一房を乱暴な手つきで振り払い、不快に顔を歪める。
「チッ……！　騒がしいったらありゃしない……」
道を行く少女の前から、家族連れやカップルが、臨海公園の方向目指して歩いていく。
決まって、少女に好奇の視線を向け、すぐに逸らすという行動を取りながら。
それとすれ違いになる度、少女の眉間には皺が刻まれていく。
さらに一組……今度は、ボールを入れた袋を持った少年と、バスケットを提げた少女が前からやってくる。
「早朝練習、やっと終わったー……おい望、どこで食うんだよ、それ」

「健太ってば、食べることしか頭に無いわけ？」
二人の視線が、やはり、少女に向けられる。
「……！」
ぎっ、と睨みつけ……
「何見てるのよ！」
怒りを、叩きつけた。

怒りの赴くままに車輪を回し、足早に自宅を目指す。
自宅のドアを閉めたのと同時、オートロックで施錠する。
「はぁっ、はぁっ……」
僅かに汗ばみ、立てば膝まである髪の毛が、首筋にへばりついている。
「チッ……」
またしても舌打ちをし、コンビニ弁当の入った袋を、乱暴にリビングに投げ捨てた。
「どいつも、こいつも……！　ヘラヘラ締まりの無いツラしやがって……！」
だが、ぶつける対象のいなくなった今、その怒りは自らのうちで分解され……ただ、言いようの無い空しさが残った。
――ちゃりっ
胸元には、大人びた十字架のネックレス。それを、ぎゅっと握り締める。

「……パパ、ママ」

窓に切り取られた狭い空は、忌々しいほどに晴れやかな快晴だった。

第三十三話（後書き）

Ａｓは、やっぱりキャラ崩壊が前提で話が進みます。

ほぼオリジナルの話になりますので、投稿までにまた間が開いてしまうかも知れません。

更新がしばらく遅くても、見捨てないで下さい……（切実）

あと、ご意見ご感想、お待ちしております。

第三十四話（前書き）

それでは、Ａｓ編の開幕です。

原作ファンの方、、、ごめんなさい。

第三十四話

……朝が来て、目を覚ました。
遮光カーテンを引いたというのに、忌々しい朝日は容赦なく差し込み、私から睡眠を剥ぎ取っていった。
時計を見ると、朝九時。
半端な時間に起こされたせいで、中途半端に眠気が残って不愉快極まりなかった。
「……チッ」
今日の朝も、舌打ちから始まった。

ベッドの上には、読み散らかした本や漫画が転がっていた。
開いたまま置きっぱなしにしていた所為だろうか。癖が付いて、きっちり閉じられない。
……いいや、別に。もう読まないし。大して面白くなかったし。

つい、半分寝ぼけたままの思考で……以前からの習慣で、ベッドから自分の足で降りようとしてしまう。そして、現実に引き戻された。
――一生、足が動かないという現実に。

「……くそったれ！！」

太ももの辺りを拳で強く叩いても……痛みどころか、僅かな痺れさえ感じることは無かった。
「……はぁ」
やめよう。叩いて直るわけでもないし……怒るのも疲れるし。
車椅子を引き寄せ、腕の力で身体を乗っける。

ドアを開け、埃っぽい廊下に出た。またしても、引きっぱなしのカーテンの隙間から陽光が入り込んできている。宙を漂う埃に陽光が反射していて、まるで私の怠惰を戒めているかのようだった。

まぁいいや。別に、埃が積もったところで死ぬわけでも無いし。来週か、来月か……気が向いたら、掃除しよう。

リビングに向かう途中、二階に続く階段が目に入ってきた。

二階には、誰も使うことなく、物置になることもなく、空っぽのまま半年は放置されている部屋が四つある。

そのうち一つは私の部屋だけど、この忌々しい身体のせいで、二階へはまだ足を踏み入れたことさえ無かった。

今の私の部屋は、書斎になるはずだった部屋にベッドを置いただけの場所だ。

トイレにもリビングにも玄関にも近い、六畳一間。これなら、ワンルームマンションにでも住んでいるほうが楽なのに。

――ぐぅ。

「あー……腹減った……」

車椅子の車輪を回し、生活臭ゼロのリビングへ。

聳え立つ冷蔵庫の下段を開き、出来合いの弁当を一つ、取り出す。

「……うへ」

見ているだけで、げんなりとしてしまう。

脂っこくて、変な匂いのする食べ物。正直、こんなもん食べたくない。

でも、自分で料理をしようにも、コンロが高すぎてうまく手が届かない。シンクで水をヤカンに入れ、茶を沸かすのが精一杯。

……結局、こんな不味い物体を食べるという選択肢しか無いわけだ。

レンジに放り込み、三分くらい待ってから取り出す。

「……いただきます」

当然ながら、返ってくる答えは無い。
言う必要が無いとわかっていても、つい口にしてしまうのは両親の躾の賜物だろうか。

ボソボソした鮭と、粘っこい飯と、変な色の漬物を口に入れ、お茶で流し込むという作業を繰り返し、朝食は終了した。
「うぅ……」
満腹感もそこそこに、不快感が胃に沈殿してくる。
だから、朝一番でこんなもん食べたくなかったんだ。

不快感が抜けてから、プラスチックの容器と、割り箸をゴミ袋に捨てる。そろそろ、一袋が満タンに……って、
「おぇっ……！　臭っせぇ……！」
梅雨明けから間もないからなのか、変な臭いが漂っていた。
換気だ換気！
窓を開けた途端、ぶわっと吹き込んできた生暖かい風が部屋の埃を巻き上げ、ゴミの匂いとブレンドされ……要は、部屋中が臭くなった。
「……くそったれ」
でも、窓を開けたまま放っておけば、多少はマシになるだろう。
その間に、風呂……じゃなくて、シャワーでも浴びるか。

タオルと着替えを持って、浴室へ。
浴槽には、入ろうと思えば入れる。でも、入ったが最後、私の腕力では出ることが難しくなってしまう。一度それで痛い目に遭って以来、私の入浴は専らシャワーだけだ。
シャンプーを多めに手に取り、髪の毛を洗う。
――ごしごしごしごし……
それにしても、我ながらよく伸ばしたものだ。
ほったらかしにしている間に、なぜか膝まで伸びてきてしまった。

ママが生きていたころは、一緒にお風呂に入って、背中の洗いっこをしたり、髪の毛を切ってしてもらったりしていた。でも、今は……

鏡を覗くと……まるで、ホラー映画のような出で立ちをした子供が写りこんでいた。

はっ……言いえて妙かも。

年中カーテンを閉め切った家に住む、陰気臭い子供。舞台設定もバッチリだ。

自嘲しつつシャワーで石鹸を洗い流し、浴室から這い出した。

リビングに戻ると、嫌な臭いはほぼ消えていた。

燃えないゴミの収集は、明日だったか……今夜中に出してしまおう。

さてと……部屋に戻ろう。

「……あー」

そういえばアレも、早く処分しないとなぁ……部屋の隅に放置してある、珍妙なオブジェ。

「粗大、いや、資源ごみ……？」

目障りで困るんだよねー……金属バットがめり込んだテレビなんて。

「……まぁいいや」

破片は捨てたし、蹲いて怪我するなんてことは無いに決まってるし。放っておこう。

「あン……？」

電話機のランプが、チカチカと点滅している。

あーあ、またか……

イラつく手つきで、留守番電話の録音を再生する。

メッセージは二件。最初のメッセージは……

『〇〇テレビです。今度、あの事故について特番を組むことになっ

たので……』
「死ねッ！！」
――バキッ！
拳で叩きつけるようにしてボタンを押して、再生終了。
「……ったく！　どっから聞きつけてんのよ……！！」
片っ端から着信拒否リストに放り込んでやっているというのに、ゴギブリのように沸いてきやがる。
あー、そうだった。残りの一件は誰だ？
また下らない用件だったら、電話機ぶっ壊してやる。
ぴっ、と音が鳴って、メッセージが再生される。
『石田です。最近、リハビリに来ていないじゃない？　確かに、あなたの足が動く可能性は低いわ。でも、治療法が分かった時に、間接が固着していたら……』
――再生、終了。
「……無駄だよ、先生」
大体……治ったところで、歩けるようになったところで、どうなるの？
私が歩けるようになったって、パパとママは褒めてくれない。二度と戻ってこないのに。
頑張ったから報われるなんて、漫画の中だけだ。
せいぜい、お涙頂戴な不幸話が大好きなマスコミの、恰好の視聴率稼ぎの道具にされるのが関の山。
友達を作ろうにも、こんな身体じゃできっこ無い。道行く人の反応を見ていればわかる。ちらっと私を見て、ふいっと顔を逸らす。
コンビニに行っても、図書館に行っても、全く同じ反応しかしない。
二言目には、『大丈夫？』で、次は『手伝おうか？』だ。大きなお世話だ偽善者どもめ。
結局、私にはまともな未来なんて無い。それならいっそ……残りの一生を、この家に引きこもって暮らしていたほうがいい。

怠惰に。無為に。
起きて、食べて、眠くなるまで時間を潰して、眠くなったら寝る。
それが私……八神はやての選んだ日常なのだから。

――プルルルルッ……
言っているそばから、電話が鳴った。
留守電に設定し直していないせいで、いつまでも鳴り止まない。
「……」
仕方ないから、受話器を取った。
「……はい、どなた？」
受話器の向こうで、息を呑む気配。あーあ……これは、一番うざい輩だ。
『ああ、やっと出てくれたのね！』
きんきん耳障りな声。受話器を耳から離す。
『心配してたのよ。ずっと電話しているのに、出てくれないんですもの』
……誰だっけ、こいつ。
「何か用ですか」
『そろそろ、学校のほうへ出てきてくれないかしら？』
……ああ、先公か。
『クラスの皆も、あなたが登校してくるのを待ってるわ』
阿呆か。会ったことも無い他人を待ちわびる子供なんて、いるわけないだろ。
……ここで切ると五月蝿いから、言うだけ言わせてやろう。
『あの事故のことは、残念だったけど……』
……あ？

今、なんつった？

残念……？
パパとママの死を、そんな一言で済ませやがったのか……？
黙って聞き流してやろうかと思ったけど……やめた。
『あなたのお父さん、お母さんも、きっとあなたが元気になることを』
「黙れ」
『望んで……え？』
「黙れっつってんだよ」
こいつに……パパとママの何が分かる。私の何が分かる。
「てめぇ、何様のつもりだ？」
したり顔で、人の心にズカズカと入り込んできやがって。
『私は、あなたのために言ってるのよ！　それを……！』
「あなたのために……それ、『自分のために』の間違いだろ？　お前は自己満足、自己陶酔で酔っ払ってイイ気分なんだろうけどさぁ……正直、うぜぇよ」
『教師に向かって何て口の利き方を……！　人が気を使ってあげているのに！』
はン……これが本性か。
いい人面して近づいて、恭順しないとわかった途端に高圧的になる。典型的な偽善者だ。
そのカスが電話口でキーキー喚いている光景を想像しただけで笑えてくる。
「うるせぇ黙れ偽善者」
――がしゃん
受話器を置き、電話線を引っこ抜いた。
最初から、こうしておけばよかったんだ。
はぁ……馬鹿馬鹿しい。

今日は何をして時間を潰そうかなぁ……
「図書館にでも行くか……」

何か、適当に長い小説でも借りて、退散しよう。

平日の真昼間。時折すれ違うのは、汗を流して営業に精を出すサラリーマンと、犬を散歩させる老人くらい。実に歩きやすい。引きこもっている内に、無意識に人の少ない時間帯を見つける能力が備わったらしい。

そういえばこの前、病院の帰り道に、変な集団とすれ違ったなぁ……

何人も連れ立って、悩みと無縁の楽しそうな表情で……

「……チッ」

……くそ。思い出したらまたイライラしてきた。

陰鬱な気分のまま、図書館に到着。エントランスを潜ると、快適な空調が私を出迎えてくれた。少しだけ浮いていた汗が、引いていく。

貸し出しカウンターから、白いカーディガンのお姉さんが会釈する。

「……」どうも。

会釈を返し、書架へ。

時代小説。現代小説。エッセイ。自叙伝。ドキュメンタリー。ノンフィクション。ティーン小説……と、ここだ。この辺の本なら、私にも読める。

学園恋愛。非日常バトルもの。ロボットバトル。ＳＦ。異世界冒険譚。不条理ギャグ。剣と魔法の物語。

あ、これいいかも。

私は、剣と魔法の物語のシリーズを書架から……書架から……

「……届かない」

せめて、もう一段低い段に入っていれば……

「はぁ～～～……」

つくづく、このポンコツの身体が恨めしい。
今日は、厄日だ……
恨めしく本棚を眺めても、本が落ちてくるわけでもないのに。すっぱいブドウ……じゃないけど、諦めるしかない。誰かに頼むなんて情けない真似、したくないし。
仕方なく、下の段に入っていたＳＦ小説を纏めて引っこ抜いた。
「……お願いします」
貸し出しカウンターに持って行き、カードを差し出す。
「あら、たくさん借りるのね」
「ええ」
会話終了。
「ねぇ、八神さん？」
手提げに本を入れていたら、お姉さんに呼ばれた。
「本、好き？」
じっ……と、なぜか探るような目でみつめられる。
「……」
どう答えるべきだろう。司書なんて仕事に就いているからには、このお姉さんはかなりの本好きなんだろう。ただ時間つぶしの手段に読書をしている、なんて答えたら、気を悪くするに決まっている。過干渉してこないこのお姉さんは結構好きだし……
「……ええ、好きですよ」
心にも無い嘘で、ごまかした。
「そう、よかった」
うれしそうな声に、ずきん、と胸が痛んだ。
「……それじゃ、」
俯き加減のまま、出口に向かう。
と、入ってきた人とぶつかりそうになってしまった。
「あ……すみません」
謝って、今度こそ外に出た。
あーあ……何やってんだろ……

――ちゃりっ
半ば無意識で、胸元の十字架に触れた。

「……参った」
翌日の深夜。私は、冷蔵庫の前で途方に暮れていた。
「食べ物、無くなった……」
朝起きて、何の気なしに読み始めたＳＦ小説が以外にも面白く、夢中で読みふけっているうちに夜の十一時を回ってしまった。
こんな時に限って、買い置きのカップ麺も無い。
「しゃーない……買いに行くか……」
ああ、嫌だ。
もう出前もやってないし、ピザは高いしもたれるし。

鍵を持ったことを確認してから、オートロックの扉を閉める。
一日に二度も外出するなんて、久しぶりのことだ。
暗い夜道を、申し訳程度の街灯が照らしている。寒くは無いけど……好き好んで出かけようとは思えない。でも、人目を気にせず出歩けるというのは有難い。
財布には、現金で３０００円くらい入っている。
私は障害者だし、追い剥ぎに狙われることも考えて、常に必要最小限の額しか持ち歩かない主義だ。……持ち『歩く』機会なんて、この先一生訪れないんだけど。
「はっ……」
下らない。つまらない自虐をしている暇があったら、さっさと用事を済ませて帰ろう。

車椅子で十分弱。いつものコンビニに到着した。
「らっしゃーせー……」

やる気ゼロの店員に迎えられ、弁当のコーナーへ直行。
海苔弁、シャケ弁……あと、軽めのサンドイッチと惣菜パン。
「２４５０円でーす」
無言で、千円札三枚を差し出す。
「５５０円、お返しッス。ありゃーとあしたー……」
とりあえず、幼稚園からやり直せばいいと思う。
からから……と車輪を回し、店を出る。
帰り道は、これまた一層薄暗い夜道だった。
民家も少なく、あったとしても電気は点いていない。

――いきなり、衝撃が走った。

「……ッ！？」
驚いて振り向く。すると、
「つーかまーえたァ……！」
下卑た笑みを浮かべた男が、車椅子のハンドルを掴んでいた。
「な……んだテメ……！　うムッ……！！」
口を塞がれる。
「ひぁはははは……！！」
がしゃん、と車椅子から引き倒された。
「うー……！！」
半年も引きこもっているうちに、警戒心がとことん鈍っていた……
人通りが少ない夜道なんて……こういった手合いの巣窟だってこ
とにさえ、気づかない程に……！
「……ッ！　……ッ！」
離せ、離せ、離せ！！
目いっぱい力を込めて、抵抗する。爪を立て、暴れ……
「ひひゃひゃひゃ……！」
辛うじて目に入る光景。そこは、鬱蒼とした雑木林……！！
「、――ー！！」

本能的な恐怖が、最後の抵抗を試みる。
がりっ、と、男の顔面をひっかいた。男は一瞬、私の口をふさぐ手を離し……
――バキッ！！
「あがッ……！！」
視界がブレて、そして、左頬に強い痺れが走る。
遠慮呵責も無く殴られた……そう気づいたのは、折れた歯が口から転がり落ち、錆臭い血の匂いが口内に充満してからだった。
「う……」
ぐらぐらと、脳震盪なのか、恐怖によるものなのか……だけど、確かなことは。
もう、抵抗する力は残っていないということだった。
私はこの小汚い男に陵辱されて……きっと、死ぬ。
――これで、終わりか。
恐怖でも、怒りでもない。ただ底なしの虚無感が、頭の中を支配する。
たった十年にも満たない人生が、今終わる……いや、違うな。
私の人生は、半年前……両親が死んでしまった時に、とっくに終わっていたんだ。
パパが死んで、ママが死んで……他にも、たくさん死んで。私だけが生き残ったのが、間違いだったんだ。
――ブチッ……！
胸元に下げていたアクセサリーが……洋服ごと引きちぎられた。
何よりも大事な宝物が、ゴミのように。
「あ、ああ……！！」
一瞬、虚無感を忘れた。

押し倒されたまま、男の握る十字架に手を伸ばす。
「か、えして……！！」
それは、その十字架だけは……！
「かえしてよッ……！」
「あァ……？」
男は、訝しげに私の顔と、手に持った十字架を見比べ……にたぁ、と笑った。嗜虐心が疼いたのだろうか。私の手の届かないギリギリのところで、見せびらかすようにぷらぷらとチェーンを揺らし……
「ヒヒッ……返してやる、よっ！！」
「あっ……！」
振りかぶり……遥か遠方の道路に、投げ捨てられた。
「あ、あ！」
そして。
――ギャリッ……
通りがかったトラックの車輪に巻き込まれ、手の届かない場所へと……消えた。

「なん、で……」

ぼそっ、と、切れた唇が、痛みを無視して言葉を紡いだ。
『何で』、と。
「なんで、わたしが……」

理不尽な事故に家族を奪われて。
無神経な奴らに平穏を奪われて。
たった一つの宝物さえ奪われて。
――なんで、私だけが……！！

「こんな目に、遭わないといけないのよ……！！」

――憎い。

どろりと、ドス黒く粘りつくような『何か』が、胸の奥で脈動する。

――憎い。

どろどろ、どろどろと……ヘドロのように、あふれ出してくる。

――薄汚く笑うこの男が憎い。

それは、恐怖を塗りつぶし、

――平穏を奪った偽善者どもが憎い。

虚無の平野を、汚泥の如く侵略し、

――家族を奪った事故が憎い。

たった一つの言葉が、全身を支配した。

憎い。憎い。憎い。　憎い。憎い。憎い。

憎い。憎い。憎い。

どろどろとした暗闇が……はっきり目に見える形で、私の身体を取り巻いている。

まともな神経の持ち主なら、怖気づくか、嫌悪する光景。

だけど私には、その得体の知れない闇が何よりも頼もしく……愛おしく感じられた。

「……ふふ」

どうやら、私の『まともな神経』とやらは……壊れてしまったらしい。

「ふふふ……あはははは！」

――それが、何？

すっくと……立ち上がる。

呆気無く。いとも簡単に。

私を地べたに縛り付けていた足が、再び私の元に返ってきた。

まともな神経なんぞに固執していたら、絶対にありえなかったことだ。

ああ、馬鹿馬鹿しい。

こんなことだったら、もっと早く……壊れていればよかったんだ。

「あはははは……！！　あーっはっはっはっはっは！！」

ああ、可笑しい。

「ひ、ひいいい……！！」

……ああ、まだいたんだ。

みっともなく尻餅をついて……腰が抜けたんだね。

立場は、完全に逆転していた。

私は二本の足で地面に立ち、男は地面に這いつくばっている。

「……刃以て、血に染めよ」

ふっと、頭に浮かんだ言葉を口にする。

闇は、私の命令を忠実に実行した。

――ゴポッ……ゴポポッ……！
不定形だった闇の一部が分離・凝固し……紅色の短剣へ、変化する。
標的は……あの男。
「た、たすけッ……たすけてぇっ……！！」
……逃がさない。
――がきんっ
「ヒィッ！」
闇を操作し、男の身体を樹木に磔にする。
……恐怖に染まった顔が、よく見える。
「穿て」
これは、復讐の第一歩だ。
私を虐げてきた物すべてを……闇に葬ってやる。

「……ブラッディ・ダガー」

――ドガガガガガガガッ！！！
「……！！　……ぁ！　……！」
ざくざくざくざくざく。
気持ちのいい感触が、闇を通じて伝わってくる。
「……あ、あ」
――ぼどっ……
男の身体から、両腕が肩から剥離する。
両足は……
「……あーあ、はずしちゃった」
膝から下はミンチになってるけど……大腿部が、中途半端に身体と繋がっている。どうやら、角度が浅くて切断しきれなかったみた

い。
「……す、け……け、て……」
うわごとのように、男がつぶやく。
「……ふふ。いい格好」
闇が、ねだるように渦巻く。
「いいよ」
何を望んでいるのか……言葉が無くとも、ハッキリ分かった。

「食べちゃえ」

獲物……私を強姦しようとした男へ、闇が群がる。
――ごりごりゅごりゅぐちゅぐちゅぐちゃぐちゃ……！！
骨を噛み砕き、肉をすり潰し……血の一滴までも、闇が貪る。
咀嚼音をＢＧＭに、夜空を見上げる。街灯が壊れたおかげで、真っ暗だ。
――新月。
夜空のどこを見ても、闇夜を照らす月は見当たらない。
月も星もロクに輝かず、ただ暗闇だけが存在する……本物の、夜。
「……」
ずるりと、男の身体を貪りつくした闇が、戻ってきた。
手を触れ、意識を集中させる。
「……まだまだ、未熟者だけど」
闇の奥深くには、膨大な知識と経験値が埋もれている。
その全てが……私が欲しているとおりの力だった。
「これから、よろしくね」
にっこりと……久しぶりに、心から笑えた。
「……ん？」
でも、おかしい。なんで、両目から涙が流れるんだろう。これっぽっちも、悲しくないのに。
「それ、片付けて」

不自由の象徴……車椅子を、闇に沈める。

二本の足で地面を踏みしめながら……私は、家へ続く暗闇へと歩を進めた。

第三十四話（後書き）

本当は、ヴォルケンリッターとキャッキャウフフする予定だったのですが、、、どうしてこうなったし。

ご意見ご感想、お待ちして、、、、、いいのかな、これ。

第三十五話（前書き）

ＶｉｖｉｄとＦｏｒｃｅの3巻、限定版に手を出したら負けかなと思ってる。

第三十五話

――じゃきんっ

髪の毛に鋏を入れ、腰から下を切り落とす。

「……これでいいの？」

足元の受け皿には、黒々とした頭髪が散乱していた。

何も、イメチェンしようとか思ったわけではない。全て、これから行う儀式に必要な物質だ。術者の頭髪。魔力。そして残りは……

「うん、わかった」

――ぶしゅっ

術者の血液。

手首を切り裂き、必要なだけの血液を抽出する。適当なところで止血。

それが、受け皿の中の頭髪と交じり合う。

ずももも……と、私の魔力がそれを飲み込む。

あとは、闇が教えてくれた通りの呪文を唱えるだけ。

「我、力を乞う者なり。

汝が剣、我が怨敵を処断するもの。

汝が槌、我が仇敵を鎚滅するもの。

汝が盾、我が運命を守護するもの。

汝が鏡、我が願望を反映するもの。
我は乞う。
四種の力よ、我が手に集え。
我は王なり。
闇統べる王なり。
汝らが王なり。
汝らが王、八神はやての名の元に、馳せ参じよ……」
すぅ……と一拍置き、『その名』を呼ぶ。
私が持つべき、闇の力。その象徴。その名は……
「ヴォルケンリッター！！」
――ギイイイイイイイイインッッ！！
足元に、数学的な図形が展開する。正三角形の頂点に円を配置した、いわゆる魔法陣。
「ぐ……ううう……！！」
体中から、膨大な魔力が搾り取られていく。でも、これは……儀式が成功したという証だ。だから耐えられる。力を得る代償がこの程度なら、安いものだ。
「ぜー……！　ぜー……！」
そして、体中の魔力が殆ど空っぽになる頃……

――がしゃっ

私の目の前に、プレートアーマーで全身を覆った者が四人……揃っていた。色合いに多少の差異はあれど、基本色は黒。

一人だけ、妙にちんちくりんなのがいるけど……感じる魔力は本物だ。

「……剣の騎士」

紫がかった鎧。腰には、その名の通り、長大な剣が佩いている。

召喚と同時に、四人の基本スペックは把握している。この剣の騎士は、守護騎士……ヴォルケンリッターを統率する将という役割があるらしい。

スキルも近接オンリーという徹底ぶり。

「鉄槌の騎士」

あらー……やっぱり、ちんちくりんだ。

下手したら、私より身長低いんじゃないだろうか。鎧までミニサイズだった。

こんなナリで、本当にヴォルケンリッター随一の破壊力を持っているんだろうか果てしなく疑問だ。

それでいて、中距離・近距離戦闘をこなせて、防御力も水準以上。万能選手だ。

……まぁいいや。実戦で役立てば、何でも。

「盾の守護獣」

鎧越しでも分かる、鍛え上げられた肉体。

使用術式の大半は、強固なシールド等の防御系ばかり。

命令を下すと、青白い光を纏い……その身を、狼のような姿へ変えた。

なるほど……二形態を使い分けられるってことか。

「湖の騎士」
最後の一人の使用術式は……回復と捕縛、索敵に転移。
直接的な戦闘力は一番低い。
なるほどね、後方支援タイプ……あと、現場指揮官か。

『剣』と『鉄槌』がオフェンス、『盾』がディフェンス、『湖』がバック……そういう布陣で戦えば、どんな相手でもかなりの確立で撃破できる。
ネックなのは、個々の能力が尖りすぎていて、応用が利かないことぐらいか。
一角でも落とされれば、そこから綻んでしまう。とはいえ、落とされることなんてそうそう無いだろう。

ずるぅっ……と、闇の中から一冊の本を拾い上げる。この本は、魔力の蒐集器として機能する上、闇の魔法を一時的に使用することもできる……自分で言うのもなんだけど、高性能な一品だ。ただ、高性能なおかげで一冊しか作れない。四冊作れれば、もっと楽なんだけど……ま、無いものねだりしても仕方ない。
それを、『湖』に手渡す。
「行け」
守護騎士たちは、私の血肉を用いて作った分身のようなもの。だから、多くの言葉を交わさずとも意思を伝えられる。
「……」
四人は恭しく一礼し……隠蔽結界を展開しながら、町の方角へ向かっていった。
「さーて、と」
面倒な魔力の蒐集は守護騎士たちに任せて……私は、自分自身の力を磨こう。
「私たちも行こうか？」

練習台を、探しに。

以前、私が破壊した街灯は修理され、いつもどおりの光を灯していた。

人気の無い裏通りを、てくてくと歩いていく。

街灯も、民家も、どんどん少なくなっていって……

「や、やめてくれ……！」

「だぁかぁらぁ……大人しく財布出せば、見逃してやるっつってんだよぉ……」

「俺たち未来ある若人に、お小遣い恵んでくれよ、あァ？」

みーつけた。

典型的な恐喝。それを行っているのは、茶髪に金髪。だらしない服装に、くわえタバコ。典型的なクズだった。まるで、誘蛾灯に吸い寄せられる虫けら。

「ねぇ」

クズ共に、背後から話しかける。

「あァ……？」

振り返ったクズの一人が、私を見て訝しげな顔になる。

「あなたたち、楽しい？」

げらげらと笑いながら、数の力を自分の力だと勘違いして……

「弱い奴を威圧して、力を誇示して……楽しい？」

「おい、何言って……」

「ひいいいっ！！」

私に意識を移した隙を見て、おじさんが逃げていった。

「あ、おい！！　……チッ！」

「くっそ、財布が逃げちまっただろうがよォ……！」

「おい、どうしてくれんだよガキ！！」

精一杯の睨みを利かせて、子供相手に本気で凄んでいる。

くすくす、と笑いがこみ上げてきた。
いい年をして、群れることでしか力を誇示できないクズ達が。
「わかるよ。力で何かを屈服させるのって、楽しいよね。うん、わかるわかる」
くすくす。
「何がおかしいんだよテメェ！！」
ぐいっと胸倉を掴もうと、伸ばされる腕。
「だって、私もすっごく楽しいから」
――とととんっ
「……あ？」「え」「へ……？」
クズ達は、何が起きたのか分からないといった面持ちで、きょとんと見ている。
……消失した、自らの肉体の一部を。
「いやだなぁ……クズの分際で、私に触れないでよ」
うぞうぞと、闇が蠢く。先端は、刃の形状。異常なまでに鋭い刃が、上腕部の半分から下を、足首を、両目を、串刺しにしている。
「ひやあああああああああああ！！　腕、おれ、うで、うでえええええええええええ！！！？」「あああああああ！　足があああああ！！」「いてぇぇ……いてえええええええ！！」
肩を足を顔を押さえて、ばたばたとのた打ち回る。
刃の先端に串刺しになっていた肉塊が、闇に食べられて魔力に変換される。
「おいしい？」
闇は、物足りなさそうに蠢く。
「大丈夫……まだまだあるから」

今日は三人。大漁だ。
「さ、始めようか」
隠蔽結界を展開しているおかげで、邪魔は入らない。
思う存分……魔法の練習に励めるというものだ。
「まずは～……射撃誘導の練習」
「ひィッ！！」
眼球を抉り貫いた肉の的を、前方につるし上げる。
狙うのは、胴体。
「闇に沈め……」
簡易詠唱で発動させる。
「ブラッディ・ダガー」
――ドドドドドッ
「あ、あぎ、ぎ、ぎゃ、……！！」
胃腸をズダズダに切り刻み、肋骨を切断し、肝臓を、肺を貫通し……最後に、心臓を破る。
「よし……狙い通り」
初めて使った時は、何発か狙いがそれてしまったけど……段々と、コントトール能力が上昇している。この調子で行けば、百発百中の精度にまで磨き上げられるだろう。
ぐりんと白目を剥いて、男が死んだ。
もう全身ズタボロで、的に使っても手ごたえが無くて面白くなさそう。
というわけで。
「はい、召し上がれ」
――ごきごきぼきごぎゅん
あっという間だ。

残りの二人は、ガタガタと恐怖に震えながらその光景を見ていた。
「次は、近接攻撃の練習を……」
さて、どっちにしようか。

「うわあああああああああ！！」「て、テメエが行けえええええええっ！！！」

半狂乱になって、さっきまでつるんでいた片割れを足蹴にする。

「あーあ……駄目じゃない。トモダチは大事にしなきゃ」

決めた。次はお前だ。

右足を掴み、さかさまに吊り上げる。

「嫌だあああああああああああああああああ！！！！」

もう、うるさいなぁ。静かにしてよ。集中できないじゃない。

今度は、これだ。近接用の、魔力付加攻撃。

宙吊りになった男の胸に、掌を当てる。

ええっと……技名は……

「……フランメ・シュラーク」

――ボンッ……！！

「……！」

一瞬だけびくっと痙攣し……絶命する。

「ん……？」

背中を見てみると……威力が大きすぎたのか、身体の中身が道路にぶちまけられていた。

「あっちゃー……難しいなぁ」

本当は、体内だけを綺麗に焼き潰すつもりだったのに。

「チッ……失敗か」

じゅるじゅると、道路にぶちまけられた臓器や血液、骨の欠片まで、闇が啜り尽くした。

ぽいっとセミの抜け殻みたいになった死体を闇に放り、食べさせる。

「何でだよォ……！！　何で俺なんだよォ……！！」

涙と鼻水で顔をどろどろに汚しながら、最後の一匹が聞いてきた。

特に理由は無いんだけどなぁ……ああ、そう。強いて言うな

ら。

「たまたま、そこにいたからだよ」

あんたたちと、同じ理由だよ。

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け」

さっきの二人を喰ったおかげで、また一段と闇が活性化し……新しい魔法を、使えるようになった。早速試そう。

「嫌だ！　嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！！　助けて！　助けて母ちゃ……！」

感謝して欲しいくらいだ。何の意味も、価値もない命を……私が有効に活用してあげるんだから。

白色に輝く槍。さぁて、どういう効果があるのやら……

「ミストルティン」

――ざしゅっ！

「ぎゃっ……！」

槍は、男の残った右腕、両足、腹部、胸部に突き刺さった。

「あ、あ……？　いき、てる……？」

それ単体でのダメージは、肉体を貫通する程度の微々たる物だ。死にはしない。

「はひゃ、ひゃひゃひゃひゃ！！　生きてる、まだ生きて……！」

歪んだ歓喜の表情を浮かべ……

――ビキンッ……

「……？」

男は、両の眼球を残し、動かなくなる。

全身が、石化していた。

「へぇ……石化するんだ。それも一瞬かぁ……え？　的が小さいから、早く固まっただけ？」

こんこん、と軽くノックしてみても、岩石そのものだ。

「魔法って、何でもアリなんだ……ねっ」
細い小指を、ぺきっとへし折ってみる。
断面から、真っ赤な血がたらたらと流れ出してきた。
「……！　……！！」
ぎょろぎょろと両目が動く。
「あはは。ちゃんと痛いって、わかるんだ？」
正確には、全身の筋肉を石化させているわけだから、痛覚もある。
当然、心臓も肺も機能しているから、呼吸もする。
ただ、口と鼻を完全に塞いでいるから、死ぬほど苦しいだろうなぁ……あらら、目が見る見る血走っていく。うわぁ、苦しそう。
可哀想に……一思いに、殺してあげよう。

「テートリヒ・シュラーク」

腕に、闇の魔力を纏わせ……
――ガゴンッ！！
石の身体を、粉々に打ち砕いた。
うひゃー……とうとう素手で岩を砕いちゃったよ、私。
――ごりごり……
闇は、石の身体をお構いなしに噛み砕き、飲み込んだ。

――――……
闇が、まだ足りないと訴えている。でも……
「もう、三人も食べさせてあげたでしょ？　今日はおしまい」
隔離結界、攻撃魔法と使い続けて、守護騎士も遠隔維持してるおかげで疲れた。
今日はもう、守護騎士たちも呼び戻して帰って寝よう。

あっちはどのくらい集まったかな。

「ん……」
歩きながら、『剣』『鉄槌』と視界を共有する。
「……うん、順調みたいだね」
なにやら、杖を構えた人たちと相対している。その足元には、同じような服装の人たちが転がっている。
見た感じ、相手方の実力は、『剣』『鉄槌』に遥かに及ばない。百人で掛かってきたって、撃退できるだろう。
「『剣』、殺したら駄目だからね」
殺したら、魔力の源……リンカーコアが、取り出せなくなる。
「殺さなければ、腕や足の一本は飛ばしてもいいから」
ま、そういうことだ。
視界の向こうで……『剣』が、残った数人に襲い掛かる。
『盾』と『湖』に、『剣』『鉄槌』の回収を命じて、視界を閉じた。
今日は大量だ。三人を喰って、リンカーコアも多数を蒐集できた。
……そうだ。いいこと考えた。

「らっしゃーせー……」
今日も今日とてやる気の無い店員に迎えられた。目指すのはは弁当じゃなくて……ドリンクコーナー。
「これと、これと……あとこれ」
かごの中に、チューハイだとかビールの缶をぽいぽい放り込んでいく。
祝杯というやつだ。
レジに持っていくと、金髪の店員は訝しげな顔をした。
売ってくれないというのであれば、魔法で催眠を掛けてやればいいか。
「あー、すんません。お酒はハタチからなんでー、売れないんスけど……ま、いいや。オーナーいねぇし」
こんな店員を雇っていて、問題ないんだろうか。素直にありがた

いけど……
「あのさぁ、」
と、財布から現金を取り出す私に、興味本位で話しかけてきた。
「あんた、足治ったの？」
……店員は、案外客の顔を覚えているものらしい。そこそこ通っている私が、今日は自分の足で歩いていることに気付いたようだった。
「ええ、問題なく」
少しイラッとしつつも、如才なく答える。答えてやったんだから満足だろう。
けど、店員は妙に真剣な顔で食いついてきた。
「どこの医者？　教えてくんねーかな」
……めんどくせぇ。
「海鳴総合病院の、石田って人」
敬語と愛想を彼方に投げ捨て、端的に教えてあげた。
「もういい？　眠いんだけど」
店員は、メモ帳に汚いカタカナで『海鳴総合病院・石田』と殴り書いた。
「ああ、さんきゅー」
んじゃ、帰るか。

「ただいまー、っと」
家のリビングには、守護騎士四人が戻っていた。チェックしてみた感じ、大きな負傷は無い。楽勝だったらしい。
すっ、と『湖』が本を差し出した。
「ん」
受け取り、ページを確認してみる。かなり分厚い本の、最初の数ページが埋まっていた。
記されている魔法も、闇が保有しているものよりずっと低レベル。
「あんな雑魚じゃ、この程度か……」

この本のページが全て埋まった時……闇の奥底に眠る、最強の殲滅魔法が完成する。

焦る必要は無いけど、ちんたらやっているのも性に合わない。

もっと魔力の大きい獲物を、狩らなければ。

「……明日は、コレ使ってみるか」

瞑目し、今現在私が使える魔法をリストアップしていく。

結界魔法のバリエーションに、『魔力を持つものだけを閉じ込める隔離結界』という便利なものを見つけた。どうやら今日、蒐集した中にあったらしい。

クズを嬲り殺すのも楽しくていいんだけど、やっぱり本命はこっちだ。

……明日は、私が現場に赴くとしよう。守護騎士の連携も、直に見ておきたいし。

ぷしゅっと缶のプルタブを開け、人生初のアルコールを口に含んだ。

「……う」

最初、つーんとした刺激臭が鼻をつき、続いて、人工的な果汁の匂いが口に広がる。

「……悪く、無いかも」

くらくらと酩酊して……何というか、気持ちいい。

「んっ、んっ……」

二口、三口と飲み……

……その後の記憶が消えた。

「あたまいたい……きもちわるい……おえええぇ」

リビングのソファで起きて、目にしたのは三本のお酒の空き缶。

酔っ払って、一晩で飲んでしまったらしい。
これが世に言う、二日酔いというやつか……キツい。
「……ん」
本はどこにいったのかと思ったら、頭に敷いて枕にしていた。
寝転んだままページをめくり、都合のいい魔法を探す。
「体内浄化魔法……」
よし、これで体内のアルコールを飛ばせば大丈夫のはずだ。
なぁんだ。これさえあれば、いくらでも飲み放題だ。
早速、発動っと……
「……あれ？」
発動しない。何で？
「この、このっ……何で！？」
調べてみると、何故か闇が発動を妨害していた。
「ちょっと、何すんのよ！」
――――……。……。
「『飲みすぎです。少し懲りてください』だぁ……！？」
あんた、いつから主にそんな生意気なこと……！
「いっ……！？　たたたた……！！」
あ、頭が痛くて、怒るに怒れない……
「お、覚えてろテメェ……！！　う、おえぇ……！」
幻聴なんだろうけど、呆れたようなため息が聞こえた気がした。

結局、昼過ぎまでソファでぐったりしていた。
多少はマシになってきたけど……まだ立ち上がると辛い。
「水……」
ああ、駄目だ。シンクまで歩いていくのがキツい。
車椅子、処分するのは早まったかなぁ……

「……」
「んー……？」

気配を感じて目を開けると、赤い鉄兜が目に入ってきた。
『鉄槌』……？　私に何か用でもあるんだろうか。
「……」
すっ……と差し出されたグラスの中には、氷水。
「……もしかして、私に？」
『鉄槌』は、こくんと頷いた。
「ああ……ありがと」
少し驚いたけど、助かった。
「んぐっ、んぐっ……ぷは～～～っ！！」
生き返る……！
にしても……
「あんたたち、自由意志あったんだ」
てっきり、私の意志を忠実に実行するだけの人形だと思っていたけど……ちゃんと考えることができるんだ。
からん、と、グラスの中で氷が滑る。そう、氷だ。冷蔵庫を開けたとしか思えない。
「……」
中世の物語に出てくるような鎧の騎士が、冷蔵庫から氷を取り、グラスに水を注ぐ……実にシュールな光景を、想像してしまった。
「ま、助かったよ。ありがと。ええっと……」
『鉄槌』、と言いかけて、少し悩んだ。
「ねぇ、アンタたちの名前……」
――ばつんっ……
「……あれ？」
いきなり、目の前から『鉄槌』が消えた。消えた……というよりは、強制的に闇の中に引き戻された感じだ。
――――……。
「『アレは人形だ。名前など無い』……ねぇ。はいはい、わかっ

たよ」

……違和感が残った。

まるで、聞かれたくないことを聞かれてしまったように、唐突に話を遮った。いくらなんでも不自然だ。

それに、二日酔いをたしなめた声と、今の声……トーンが違っていた。

前者は、暖かく柔らかい声で……後者は、冷徹で硬質。

まるで……

――闇の中に、二つの人格があるようだ。

第三十五話（後書き）

自分で書いていてアレですけど、落差が激しいです。

というわけで、ヴォルケンリッターはこんな感じです。

闇の書の設定も、かなりいじくります。

ご意見ご感想、お待ちしております。

第三十六話（前書き）

テレビを見て「かわいそうに」とか言ってるのは飽きたんで、更新します。

停電とのチキンレースです。

第三十六話

ったく……酷い目に遭った。今度から、酒は控えよう。

「おかげで、一日無駄にしちゃったよ」

ぶつくさ愚痴りながら、夜の歓楽街を歩く。警察官がパトロールをしているが、私を呼び止めるようなことはしなかった。

新たに覚えた、変身魔法のおかげだ。今の私の姿は、十代後半から二十代程度に見えている……はず。

「……」

今日は、『湖』を連れている。もちろん、隠蔽結界を展開しながら。

歓楽街から外れて、裏通りへ。

本当なら、今日は守護騎士の連携を見ておきたかったんだけど……それよりも試してみたいことがある。

「ん。あったあった」

一際大きく……電気が点いているのに、どこか薄暗いイメージを受けるビル。

大仰な木の表札には、達筆な字でナントカ『組』と書かれている。世に言う、ヤクザ事務所だった。

「『湖』」

「……」

指示を聞いた『湖』が、その身を包む結界を大きく広げた。

とにかく堅牢な結界で、『湖』が解除するか、それ以上の力をもって無理やり破壊するでもしない限り、外には出られない。

「ここで待ってて。手出し無用だからね」

「……」

こくん、と頷く『湖』を残して、中に入る。

「……嬢ちゃん。何の用だい」
受付にいた厳つい風貌の男が、のっそりと立ち上がる。
うわ……大きい。身長、2メートルくらいあるんじゃないかな？
「よッ……と」
変身魔法を解除。
いまさら、素顔が割れたところで困りはしない。
だって……目撃者は、一人も出ないんだから。
「……あ？」
大男からすれば、いきなり目の前に子供が現れた……としか思えないだろう。
とん、と大男の腹に手を添える。
「フランメ・シュラーク」
――ボンッ……！
くぐもった爆音……そして、大男は鼻と口から、煙突のようにぷすぷすと煙を上げ、倒れた。
「うん……いい調子」
細かな制御も、問題無い。これなら……使えそうだ。
「おい、何の騒ぎだ！」「出入りか！？」
どやどやと、明らかに堅気ではない風体の男たちが出てきた。
おあつらえ向きに、短刀や拳銃で武装している奴もいる。
「……子供？」
怪訝な顔をして私を見て……その足元に転がる大男の死体を見て、血相を変えた。
「コンのガキがあああああ！！」
「待て、いくらなんでもありえんだろう」
「でも、どう見たって……」
ごちゃごちゃごちゃ……サンドバッグが騒いでるなぁ。
「『甲冑』、展開」
――ぞぞぞぞ……！

影から、闇が起き上がる。
「……は？」「なんだ、アレ……」
両腕を広げて、告げた。
「おいで」
――――――！
轟々と、私を取り巻く闇が渦を巻き、私の身体へ収束していく。
試してみたかったこと……それは、新しい魔法の性能。
この前知ったことだけど、魔法をフルに使うには『デバイス』という道具が必要らしい。蒐集した連中の持っていた杖しかり、守護騎士たちの武装しかり。
でも……剣、ハンマーとか、武器として使えるならともかく、なんでわざわざ『弱点』を手に持つ必要がある？
腕ごと切り落とされてしまったら、そもそも破壊されてしまったら、ロクに魔法を使えなくなってしまうのに。
そして編み出したのが、この『甲冑』という術式だ。
「……はぁっ！」
――バオッ！！
余剰魔力の竜巻を、吹き散らす。
「変身……ってね」
そして、私の姿は変貌していた。
体格は、成人女性に近いめりはりの利いた体格に。
髪の毛は白銀に染まり、地肌に赤い紋様が浮かび上がる。
全身を覆う装束は、左右非対称。編みこめるだけの攻撃魔法・強化魔法・補助魔法を編みこんだために、少しだけ歪な形になってしま

った。
　これは常に複数の魔法が発動している状態であり、必要に応じて出力を上げ下げするだけで済むから、発動にかかるタイムラグも無い。
　……まぁ、燃費はすこぶる悪いけど。
　闇の魔力自体が膨大で、私自身の魔力もそれなりに大きいおかげで成立した。
　ぎゅぱぎゅぱと手を開けたり、閉じたり。
　……そんじゃ、ま。
「試運転、開始！」
　脚部の高速移動魔法で、一気に間合いを詰める。そして、攻撃魔法そのものと化した腕を振るう。
――パゴンッ！！
　小気味のいい音をたて、スイカのように頭が爆ぜた。
「あはっ、呆気なーい！！」
「な……」
　中途半端に匕首を抜いたまま、銃を持ったまま……無防備に硬直する。
「ぎッ……！！」
　そのうち一人の顔面を鷲?みにして……爆破！
――ボンッ！！
「あーっはっは！！　ほらほら、ボサっとしてないでさぁ……！頑張らないと死んじゃうよーーーー！？」
――ざしゅっ……ぐちゃっ……ぶちィっ！！
手刀で心臓を貫く度に……頭蓋骨を握り潰す度に……脊髄を引っこ抜く度に……赤黒い悦びが、頭の中を快楽で染め尽くす！！

「ひゃはははははッ！」

ああ……楽しい！！！！！

「うわあああああああ！！　バケモンだあああああああ！！」

――パンッ！　パンッ！！

拳銃が火を噴き、鉛弾を撃ち出す。

そんなオモチャが、私に通じるわけないじゃない！

「……あむっ！」

がちん！

「……へぁ？」

口の中に広がる、火薬の匂い。

「銃弾噛み……なんちゃって」

ぺろん、とキャンディーのように銃弾を乗せて、舌を出す。

何かの小説で見た技だけど、簡単なもんだ。

「プッ！！」

再び口に含んだ銃弾を吹き出す。

――びすっ！

「……あ」

頭の中に返却っと。

「うおぁぁあああああああっ！！」

「ん？」

抜き放った日本刀が、私の肩口で停止した。

へぇ……そこそこ骨のある奴もいる。でも……しょせんはオモチャだ。『甲冑』を貫くには、威力が足りなさすぎる。

「これちょーだい」

ひょいっと指先で刀を摘み、取り上げる。

「この！」

今度は、懐の匕首を抜いて切りかかってきた。

「ひゃはッ、やるじゃん！」

いつでも殺せるけど……ちょっとだけ、チャンバラに付き合ってやろう！

――ガキンッ！

相手の匕首に、力任せに日本刀をぶつけた。

「くッ……コンの、バケモンが！」

手がしびれているだろうに、懸命に匕首を振るっている。

「ほらほらほらぁっ！！　がんばれがんばれー！　ひゃははは！！」

――ガキキキキキンッ！　バキッ！

あらら、折れちゃった。

「今だあああああああああっ！！」

正面に匕首……背後に拳銃が3、か。

「よいしょっと」

髪の毛に魔力を流し、操作。

――形質変化。

腰までの髪の毛を、魔力で延長。

――硬度強化。

絹糸並みのしなやかさに、刃の切れ味を追加。

――衝撃加速！！

遠心力を、数十倍に増幅！！

「そりゃあっ！！」

――ザザザザンッ！！

四の肉体を切断する感触が伝わってきた。
そして、倒れる音は三つ。
……三つ？
「ひいいいいいいいいいいいっ！！！」
両手首から先を失った男が、出口に向かって這いずっていく。
……取りこぼしちゃった。
「待ってよー」
すたすたと近づいていく。
先っぽが無い腕で、扉をごすごすと押し……逃げられないと悟り、命乞いをはじめた。
「た、たすけて！　なんでもするから……！　命だけは……！」
……馬鹿だなぁ。
そうやって祈っていれば助かるなんて、御伽噺みたいなもんだ。
そんなんで助かるなら、パパとママは死ななかった。
……少し、現実ってものを教えてやるか。
「ねぇ、おじさん？」
目の前にしゃがみこみ、視線の高さを合わせた。
「は、はいっ！？」
助かるかもしれない。そんな希望的観測が、表情から読み取れた。
あはは……おめでたいなぁ。
とん、と人差し指で胸を突く。

「運命って、残酷だよね」

――バスッ……
「ぐひッ……！」
指先から迸った極細の射撃は、正確に心臓を貫いた。
「あと何人いるかな～……っと」
建物の中をサーチしてみても、数人が隠れているだけだ。いちい

ち探し出すのも面倒だし……そろそろ、お開きにしよう。
手をかざし、魔力を集める。
いくら『甲冑』を纏っているとはいっても、このクラスの魔法を使うには、多少のモーションと、詠唱が必要だ。
手のひらに、闇色の球体が出現する。
「サポートよろしく」
まだ、使い慣れてないからね。
――……。
広域空間攻撃。闇の中に埋もれていた魔法の大部分は、この類。
今から行使するのは、その初歩にあたる。

「闇に、染まれ」

手のひらサイズの隔離結界の中に、魔力を溜め込んでいく。
隔離されている空間を魔力で満たし、破壊し……現実世界へ一気にフィードバックさせることで、破壊力を生み出すのがこの魔法の真髄だ。
術式名称……

「デアボリック・エミッション」

――――――――――グアアオオオオオオオオオオン！！

お。おおお。すごい反動。
私を中心に発生した魔力の衝撃波は、凄まじい勢いで膨れ上がり……結界内を、蹂躙していく。
――ギチッ、ギチッ……！！
『湖』が展開する結界が、軋んで歪む。
――――――――――オオオオオオオオ……！！
衝撃波は鉄筋のビルを……そして、無様に隠れていた残りのクズ

共を、飲み込み、破砕し……分子レベルにまで粉々にしていく。
「あ、あらら……？」
――ギチッ……ビキッ。
やべっ！　結界にヒビが……！
「ちょ、ストップストップ！！」
慌てて手綱を握りなおそうとするものの……一向に止まらない。
――……、……。
「魔力の配分を、間違えた……？」
……最初に注いだ魔力が、多すぎたらしい。
「どうしろっていうのよ！？」
こうしている間にも、破壊力は増し続けている。
もういいや！　制御放棄！
――ギュゴオォォォ

どうせ、あのビルは中身ごと消滅させるつもりだったんだし。
――……。……？
「うるさいなぁ！　わかってるってば！」
闇にお小言を言われた。
――ザッザッ……！
げっ……足音！？　それも、かなり多い！
さすがに騒ぎすぎたか……
「『湖』！　もう一度結界を……ってえええええええええ！？」
『湖』は、結界を破壊されたダメージをモロに食らって倒れていた。
「つ、使えない奴め……！」
私が張ろうにも、『甲冑』の維持に大部分の魔力を消費しているし……解除したら素顔がバレるし……！
「めんどくさいなぁ、もう！」
『甲冑』姿で逃げるしかない！

ええっと……逃げる魔法、逃げる魔法は……あった！
「スレイプニル！」
――ばさっ！！
背中に編みこんでいた、飛行魔法を発動。
烏のような漆黒の羽根が、空気を叩いて羽ばたく。
『湖』を闇に埋没させ、一気に上昇！
全速力で空を翔る。
今時分、星を見上げる酔狂な人なんていないだろうから、見つからずに済みそうだ。
できるだけ人目を避けて、自宅を目指す。

「おっ……とと、難しいな……」
真っ直ぐに飛んでいるつもりでも、フラフラと左右に振れてしまう。
闇がちょこちょこ軌道を修正してくれるおかげで、墜落はしない

で済んでいるけど……これも、要練習だなぁ……
「ん？」
ここまで来て、ようやく思い至った。
何で逃げてるんだ、私？
目撃者なんて、皆等しく消してしまえばいいだけなのに……
もしかして、捨てたと思っていた良識が、まだ残っていたんだろうか。
罪無き人に、理由無く手を出してはいけないという……
……
「チッ……」
イラつく。
何が、『罪無き』だ。一番タチが悪い連中じゃないか。
自称一般人なんて、一皮剥けばどれも同じだ。
普段は善人ぶって、他人の不幸を面白おかしく取り上げた情報媒体を娯楽にして、『かわいそうねぇ』とか、『大丈夫かしら』なんてしたり顔でのたまう。
それを助長するのが、自称ジャーナリストのハゲタカだ。
わざわざ病室にまで押しかけてきて、カメラとマイクを突きつけて……
『ただ一人生き残ったご感想は？』
……だったか。
「……うん、あれは殺そう」
丁度、隣町に支部があったはずだ。片っ端からブッ殺しておかないと……今夜、ぐっすり寝られない。
――……。
「『おやめください』……って言われてもね」

もう、闇の一人格が何を言おうと聞く気はない。
「私は、あの連中を殺すって決めたの。黙って従え」
――……。
「は？　何よ、『やむをえません』って。いいから、方向転換を……」
――がくんっ。
「へ？」
いきなり、視界がかくんと一段下がる。そして……
――ガガガガッ、ゴガガガッ！！
「きゃあああぁぁあああああああ！！」
いきなり、きりもみ回転ーーーーーーーーー！！！？
「ちょっと……きゃっ！　何すんのよ！　早く、姿勢制御を……！
うひゃあっ！」
ぐわんぐわんと、いきなり制御がきかなくなって……！　このっ！
「あ、アンタわざとやってる！？　っていうかわざとでしょ！」
――……、……。
『あなたには、こうしたほうが効果的であると判断しました』だとぉ！？
「こんなことして、後でどうなるか……！　お、覚えてなさいよー！？」
ぐいいっ、と、今度は襟を引っ張られたように、後ろに急発進……！
背後には、コンクリートの壁って、えええええええ！？
――ぐんっ！
唐突に引き上げられ、
――……どべしゃっ

「んぎッ……！」
……床にスライディングさせられた。
「い……ってぇえ……！」
『甲冑』のおかげでダメージはゼロだけど……気分的には痛いのよ！
「離れろ、このやろっ！」
『甲冑』を解除し、元の姿に戻る。

「……あー、クソッ……どこだ、ここ」
妙に暗い……というか、午後十時だから、消灯されていて当然か。
ベッドと、テーブルと、テレビ、白いカーテン。ここ……病院？

――からから……
「あン？」
背後から、妙に慣れ親しんだ音が聞こえてきた。
振り返った先で……なんというか、デジャブを感じる光景を見た。
「……お姉ちゃん、誰？」
車椅子に腰掛けた女の子が、興味半分、怖さ半分くらいの表情をしていた。
「チッ……さぁね。誰だと思う？」
「え？　ええと……」
はっ、わかりゃしねぇって。

「……魔女、さん？」

――――――――、は。
「は、ははは……！」
魔女……魔法使いじゃなくて、魔女！！
悪魔と交わり、人に災いを齎す異端者！

「ひゃはははは……！　はっ、はは……！　魔女……！　そう、魔女！」

ああ、おかしい。

おかしくて、おかしくて……

「お、お姉ちゃ……！？　ひグッ……！！」

――つい、殺したくなっちゃう。

首筋を、折れない程度の力で締め上げる。

「あ、……あ、！」

ひゅーひゅーと、空気を求めて鳴る喉。

「……ブチ殺すぞ、ガキ」

もう一段、強く締め上げる。

「ああ、そうさ……私は魔女だよ。大正解だ」

確かに私は、人並み以上の悪行を行ってきた。

でも、それを改めて突きつけられると……無性に、腹が立つ。

「魔女らしく、理不尽に殺してやるよ……！！」

決めた。殺そう。

――――……、……。

魔力資質、極めて高し……？

「へえぇ……いいこと聞いちゃったァ……！！」

余計に、殺す理由が増えた。

リンカーコアと心臓を、いっぺんに抉り出してやる……！

さぁ、体中の水分を涙と鼻水にして泣き喚け。小便を垂れ流しながら命乞いをしろ。

クズ共と同じように！

――ぎりッ……！

あと少しで、首が折れる。
目の端に涙を浮かび、無様な断末魔が見られる……と、思っていたのに、ガキは、
「……」
――全てを受け入れるように、目を閉じた。
「……おい、」
首を解放し、落とす。
「……、げほっ、げほっ！」
涙目で喘ぐ。
「何で、抵抗しない……！？」
違う。私が見たかったのは……無様に命乞いをして、泣き喚く姿だ。
それをへし折って、殺すつもりだったのに……！！
こんなの、ぜんぜん楽しくない！
「答えろ！！」
足元のガキを、問い詰める。
ガキは、呼吸を整え……言った。
――私は、お荷物だから
……と。
「私の足、事故でこうなっちゃったの」
こう、と言いながら、足をさする。
「でも、院長先生は、『まだ動くかもしれないから、がんばって治療しよう』って……」
動く可能性があるだけ、マシだろう。私なんか……１００パーセント、動かなくなっていたのに。

「だから……いろいろな治療法を試して、そのたびに、お金が掛かって……」

……

「それでも、動かないの！！」

感情が爆発し、とうとう涙が流れた。

「お兄ちゃんと、お姉ちゃんは……自分の物なんか何も買わないで、真夜中までお仕事して、お金を稼いで、高い薬を買って！　治療費を払って！！」

俯く先には……足。

動かない、重石。

「なのに、なのに……！！　私の足は、動かない！！」

がす、がす、といっそ憎しみさえ持って自らの足を叩く。

「だから……！！　私なんか、いなくなっちゃえば……！」

「甘えんな。ガキ」

「……え？」

ガキは、涙に濡れた顔を上げた。信じられない……そんな気持ちが、表情に見て取れた。

「悲劇のヒロインぶってるんじゃねぇよ。お前の兄と姉は、お前の足を直すために必死こいて働いてんだぞ……！？

今のお前の言葉は……お前の兄と姉の気持ちを踏みにじる言葉だって、何で気付かない！？」

なぜ、ここまで怒るのか……自分でも、よく分からない。

人殺しの私でも……このガキを殺そうとしていた張本人でも……そう言わなくちゃ、いけないような気がしたんだ。

ガキは……くしゃっと顔をゆがめ、言った。

「お姉ちゃんには、わからないよぉ……！」

……キレ、た。

今度こそ、本当の本当に……堪忍袋の尾が、ブチ切れた。

……無言で胸倉を掴み上げ、至近距離から睨みつける。

「ならお前は……わかるのかよ」

「なに、が……」

二人も家族がいて、愛してもらっている奴に……！

「自分の父親と母親が、目の前で焼け焦げて死んでいくのを見ていることしか出来なかった私の気持ちが、わかるのかって聞いてンだよ！！」

一気に言い切り、呆然としたガキの顔を睨みつけ……一気に、醒めた。

「……もういい、お前なんか知らん。……これからも、ずっとずっとそうやって、無駄な人生を全うすればいい」

……もう、殺す気も無くなった。

――……。

うるさい。こんな甘ったれのリンカーコアなんて、奪う価値も無い。

「待って……」

弱弱しく、呼び止められた。

「……」
無視して、窓枠に足を掛ける。
「待ってよ！！」
縋り付くように、腰元を掴まれた。
「……何」
「私は、どうすればいいの……？」
……この期に及んで。振り払うのは、簡単だ。
でも……
「私は……どうすれば……」
あまりにも心細そうな姿に、庇護欲がそそられたのか。それとも、自分と似たような境遇のこいつに、同情したのか。
自分でも、よくわからない。
……今回、だけだ。
「お前……名前は？」
こうして、お節介を焼くのは。

「柳瀬、美香」

「美香。お前には、資質がある」
「ししつ……？」
「そして、資質のあるお前には、二つの選択肢がある」
魔力の大きさじゃない。世界を憎む気持ちがあるのであれば……
「このまま、庇護され続けて残りの人生を生きるか……魔の力を手にして、闇に生きるのか」

――魔女に、なれる。

「もし、魔女になるなら……私でよければ、教えてやるよ」
力の使い方。そして……世界の呪い方を。
すっ、と手を差し出す。

「選べ」
手を取らなければ、人間として、光の中を生きる。
取るのであれば、、魔女として、闇の中を生きる。
「私は……」
美香は、ほんの少しだけ葛藤し……
「……魔女に、なる」
――決意を込めて、手を取った。
「契約、成立」
美香の身体を抱きかかえ、窓の外に飛ぶ。
「わ、わ……！？」
驚いて、ぎゅっとしがみ付いてきた。
――リンカーコア、励起。
「うあ……！？」
未知の感覚に、驚きの声を上げる美香。
そして。
「うあああああああああああああ！！」
――群青色の光の柱が、屹立した。
（……すげ）
天を貫く極太の光を見ながら、感嘆を押し込める。
美香の魔力総量は……『闇』を上乗せしていない状態の私を、凌駕していた。
「……契約」
「え？」
約束は、約束だ。
「教えてやるよ。力の、使い方を」

美香の魔力光は、群青……夜明け前の色。
闇統べる王……私の弟子に、相応しい。

夜の闇と、夜明けの群青。

二色が交じり合う場所で……私は、ただ一人の仲間を得た。

第三十六話（後書き）

うーん、、、微妙。
もしかしたら、大幅に書き直すことがあるかもしれません。
『甲冑』は、羽根の生えていない闇の書の意思を想像していただければＯＫです。
、、、そろそろ、秀人たちの話に戻ろうかなーって感じです。

ご意見・ご感想お待ちしております。

※４月９日
最後の部分を大幅変更しました。

第三十七話（前書き）

遅れてすみません、、、

第三十七話

板張りの床を素足で踏みしめ、構えを取る。
「……んじゃ、始めるか」
暑さと緊張感で流れた汗が顎を伝い、床に落ちる。

「ああ、いつでも来い」
相対するのは、恭也。両手に短い木刀を持ち、構えている。少しぎこちなさを感じるのは、ブランクが長いからだろうか。
――ぎっ……
僅かに床が軋み……

――だんっ！

それを合図に、一気に間合いを詰め……
「おおおおっ！」
勢いのままに、掌打を振りぬく！
「はっ！」
紙一重で回避され、カウンターの突き技が繰り出される。
鳩尾を狙った一撃。
左手でそれを払いのけ、顎を狙ってアッパーカット！
――がんっ！
木刀の柄尻でそれを受け止められる。
（ここ！）
左手でボディを狙う。この距離なら、木刀より拳の方が速い！
が……
――ぱんっ！！
「うわっ！？」

拳を打ち合わせていた柄尻から衝撃が発生し、弾かれた。
何だ、今の!?
まるで、攻撃魔法（インパクト）を喰らったみたいな衝撃だ。
でも、恭也の……というか、なのはを除く高町家の面々は魔力ほぼゼロのはず……！
「おおりゃっ！！」
よくわかんねぇけど、間合いを取るために、上段蹴り！
――とんっ……
「は！？」
何と、恭也は俺の脚をジャンプ台にして……跳んだ！
なんて身の軽さだ！
「はぁっ！！」
横凪ぎの一閃！　狙いは、延髄！
（間に合え……！）
左の二の腕を、射線上に上げる。左手を盾に！
――ボグッ……！！
「……っぐあ！」
痺れと痛みが、いっぺんにやってくる。折れてはいないだろうが……回復するまで、左手は使えない。
「おおっ！！」
好機と見て、一気呵成に攻め込んでくる。
――ひゅんっ！
縦横無尽に繰り出される刃。
半身に構え、右腕と足捌きのみで応戦するが、やはりリーチの差も相まってじりじりと追い詰められていく。
「はっ！！」
再び、一閃！
「くっ！」
――ごきんっ！
拳と相殺。だが、

――ぱぁんっ！！
……、また！
どうあっても、獲物同士をぶつけ合うつもりは無いようだ。
しかも、マズい！　衝撃で、腕が上に跳ね上げられた！
――ひゅっ！
今度は、脇腹狙い！
「こンのっ！！」
身体を捻り、床の上を転がって退避する。
「はぁ、はぁ……！　っしゃあ！」
腹筋で立ち上がり、感覚が戻ってきた左腕を構えに入れ、ファイティングポーズを取る。
甘く見ていた。こいつ、下手したら魔法抜きでもクロノ並みじゃねぇの？
身体能力は高いし、剣術は冴えてるし……何より、あの意味の分からん衝撃が厄介だ。
対策は……
「……シッ！」

実は、ある！

恭也の右側に回りこむ。
「っ！」
思ったとおり、横薙ぎの一閃。この立ち位置なら、一刀しか使えない！
それに……再び、拳を合わせる。
二、三回受けて……衝撃のタイミングは、大体わかるようになった。
接触して、０．５～１秒。多分、ブランクが無ければもっと速いんだろうが……今は、十分に対応できるレベルの速度だ。
――バチンッ！！

「ぬっ……！」
対策。それは……
「弾かれるなら、弾かれないようにしっかり握ればいい！」
そんだけだ！
「ふんっ！」
――ベキャッ！
木刀を握り潰す。よっしゃ、これで手数が減る！
「……！」
残った一刀で、懸命に手数をカバーする恭也だけど……この勝負、俺が貰った！
――ガスッ
木刀を肩で受け止め、間合いを詰める。
「うおりゃあああああああああっ！！」
渾身の……正拳突き！！
「……使うつもりは、無かったのだが」
そんな一言を残して……恭也が、目の前から消えた。
「は！？」
姿を探すより先に、ぞわっ……と、鳥肌が立つ。
回避……駄目だ、遅い！
――ドガッ！！
「がぁっ……！！」
延髄に、クリーンヒットした。
「……これでも、倒れないか」
恭也も、運動とは別の汗を浮かべている。
あれだけの無茶な機動、生身でそう何度も使えるわけが無い。でも、多分だけど……少なくともあと一回くらいは、使える。
……そう何度も、使われるわけにはいかない。

あと一発。あと一発で決められなかったら……素直に降参だ。
「……」
一本きりになった木刀を逆手に握り、互いのチャンスを伺う。
じりじりと、円を書く動きで動き……
――ビシッ！
「……っ！？」
何だ、目に何かが……！
「アレか……！　くそ！」
俺が砕いた、木刀の破片か！
「決まりだ」
声だけの恭也の気配が、また目の前から消える。
探っても、探っても……恭也は見事に気配を殺している。
「……ああもう当たれえええええええ！！」
ヤケクソで、裏拳を振る！
――ごしゃっ！
「がはっ！！」
あ、あれ……？　当たった？
「おおおおおっ！」
無理やり目を開ける。
目の前には、木刀を振りかぶった恭也の姿！
「はあああああああっ！」
「おりゃあああああっ！」
斬撃が俺の首を薙ぐ寸でのところで……俺の正拳突きが、恭也の顔面を捉えた！
――どばぁんっ……！！
「げふっ……！」
恭也を道場の壁に叩きつけ……そこで、恭也が限界を迎えた。
「……参っ、た」

でも、俺もギリギリだ。
「ぜー、ぜー……！　ど、どんなウエイターだよ……！」
まさか、あと一歩にまで追い込まれるとは思ってもみなかったぞ……
最後の一撃が、あとコンマ数瞬速かったら。あと数日ブランクが短かったら。
ああして倒れているのは、俺だった。

疲労困憊で、道場の床の上に身を投げ出す。
「あー……あちー……」
道場の外からは、じーわじーわと気の早いアブラゼミの鳴き声が聞こえている。

季節は、初夏を迎えようとしていた。

◆　◆　◆　◆

――……ばぁんっ！！

あ、終わったみたいだ。
茹で上がったそうめんから顔を上げ、道場を見る。
さっきから断続的に聞こえていた踏み込み音や、衝突音は聞こえない。
どっちが勝ったのかなぁ……
「ま、秀人さんだろうけど」
言っちゃ悪いけど、秀人さんと兄さんの力の差は歴然だ。
異形の怪物や歴戦の管理局員、リアル魔法使い（プレシア）を相手に、常に実戦で力を磨き続けていた秀人さんに対して、剣に埃を被せていた兄さん。
前は強かったらしいけど、今は最盛期の半分も強くないに決まっ

ている。稽古を怠れば怠っただけ、力は削げ落ちていくのだから。
「ふふふふふ……いい気味」
私をほったらかしていた報いを、今こそ受けるといいよ……
「な、なのは……？　二人の様子を、見てきてもらえる……？」
若干怯えた様子で、母さんが恐々と頼んできた。
「はーい」
エプロンを畳み、椅子に引っ掛けた。
「準備は、僕らがやっておくよ」
人間形態のユーノくんが、慣れた手つきで稲荷寿司を皿に載せていく。
「うん。ありがとう」
それにしても、ユーノくんもこっちにかなり馴染んだよね。お箸だって使えるし、日本語の小説を読めるほど言語も習得して……
「ねぇ、ユーノ。後で古文の課題手伝ってよ。難しくてさぁ……」
「うん、いいよ。源氏物語だっけ？」
今や、高校生の課題程度なら片付けられるほどになっている。
でも姉さん……そのくらい、自分でやろうよ。

机の上には、夏らしいさっぱりした味付けの食べ物が所狭しと並んでいる。
うん。稽古でお腹を空かした二人には丁度いい量の筈だ。アスパラのベーコン巻きと鰹の叩きは、特に自信作。
「姉さん、兄さん運ぶから手伝って」
「負けてること前提なんだ……」
勝手口からサンダルをつっかけて、道場へ。
「お待たせー。お昼ごはんできてるよー」
がらっと引き戸を開ける。
「よっしゃ、飯だ！」
秀人さんはタオルでぐいっと汗をぬぐい、跳ね起きる。
「おい恭也、飯だ起きろ」

壁際に座り込む兄さんの肩をぽんぽん、と叩いた。
「……だから、何故お前はそうピンピンしているんだ」
姉さんが肩を貸し、立ち上がらせる。
「もう……恭ちゃん無理するから。意地になるような年じゃないでしょ？」
「……すまん」
この稽古というのも、実は兄さんから言い出したことだ。

『恭也、お前ちょっと身体動かしたほうがいいぞ。身体硬くないか？』

秀人さんの何気ない一言。それが、高町の人間に共通の、『負けず嫌い』に火をつけてしまった。
よろしい、ならば模擬戦だ……と、あれよあれよと言う間に、秀人さんと兄さんが対決する運びになり、じゃあ飯ができるまで一汗かくかー、と道場に来たのが一時間前。
全くもう……一汗どころじゃなくなってるよ。
「秀人さん、シャワーでも浴びてきなよ。上がったらすぐに食べられるようにしておくから」
「悪いな。頼めるか？」
「もちろん」
秀人さんは自分の足で、兄さんは姉さんに支えられ、浴室に向かった。

「おお、美味そうじゃん」
戻ってきた秀人さんは、食卓の上を見てそう言った。
「強いて言えば、どれがおいしそう？」
……気付いてくれるかな？
「そうだな……」
平静を装い、内心どきどきしながら言葉の続きを待つ。

「アスパラのベーコン巻き……かな」
よっしゃあ！
「それ、私が作ったの」
「さすがだなー……俺もレパートリー増やさないと」
私はこうした細かい料理が得意で、秀人さんは鍋でたくさん煮込むような料理が得意。
ユーノくんは、専ら仕込みや味付けのお手伝い。しっかりと役割分担ができている。
「あら、褒めるのはなのはの料理だけ？」
母さんとユーノくんが、最後の二品を持ってきた。
「いや、桃子の料理も十分に美味そうだ」
「良かった……たくさん食べてね」
よし、みんな揃った。
「それじゃ、」

――いただきます！

「はい、秀人さん、ユーノくん」
二人の取り皿に、料理を取り分ける。
そして、早速私の料理を口にした二人が一言。
「うん、やっぱり美味い」
「おいしいよ」
そう言ってもらえると、がんばって作った甲斐がある。
「まだまだあるから、たくさん食べてね」
次は、何を取ってあげよう。
「なのは。取り分けてくれるのはありがたいけど……なのはが食べてないじゃないか」
「いいの。好きでやってるんだから」
別に、すぐに無くなる量でも無いし。自分で食べるのもいいけど……作ったものを『おいしい』って言ってくれるのが、すごく嬉し

いんだ。
「秀人さん、いつもお仕事大変なんだから一杯食べなきゃ」
「そうか？　悪いな……」
ぱくぱくと料理を口にする。
あ、お茶が無くなってる。おかわりを注いで……っと。
「さんきゅー」
「どういたしまして」
していることはいつもと同じだけど、大人数で食べるのも、たまになら悪くないね。
いつもは作らないような料理も作れるし、他の人の意見もこれからの参考にできる。

「ねぇ、ユーノ」
ずぞぞっ、と素麺を啜り、姉さんがユーノくんに聞く。
「ん？　何だい？」
「……あの二人、いつも『ああ』なの？」
かつん、と、兄さんが茶碗を置く音がやけに大きく聞こえた。
「……詳しく教えてもらおうか」
ずいっ、とユーノくんに詰め寄る。
「恭也、近い、近いって……」
「で、どうなんだ？」
姉さんは止めず、むしろ興味津々といった感じで様子を見ている。
「まぁ、いつも大体あんな感じだよ」
さらっと告げられた言葉に、兄さんは食卓に額をぶつけ、姉さんは口を三日月にして、
母さんは妙に嬉しそうにニコニコと笑顔を浮かべた。

「何の話？」
目の前で、気になるじゃないか。
「あなたたち、仲がいいのね～……っていうお話よ」

「ふぅん……？」
でも、何を今更？
そろそろ、私も食べようっと。
適当に取って、一口。
うーん……やっぱり、母さんの作った方がまだ美味しい。
私も作ってるけど、年季の違いだろうか……？
「ねぇ母さん。この南蛮漬け、タレに何を使ったの？」
「うふふ、秘密」
「えぇ～？」
教えてくれたっていいじゃん。
「ねぇ、秀人くん」
「何だ？」
箸を止め、顔を上げる。
「前になのはが作った方と、今日の品、どっちがお口に合う？」
「え？　ああ、そうだな……」
ぱくり、と一口。もしゃもしゃと噛み砕き、飲み込んだ。
「桃子には悪いけど、なのはが作ったやつの方が美味い」
え……？
「ほんと？　正直、母さんの方が一枚上手だと思うけど……」
「そんなことで嘘は言わないって。俺、なのはの料理が好きだから。自信持っていいぞ」
「う、うん……」
どきっとした。秀人さん、真顔でさらっとすごいこと言うなぁ……
「ほらね」
母さんが、分かっていたように笑う。
まぁ、秀人さんがそう言ってくれるなら。

食べ終わった後、食器を洗って、後は雑談の時間だ。
私の学校生活や私生活の報告がメインで、アリサとすずかと遊んだこととか、フェイトにビデオレターを送ったこととか、クロノか

らは時々メールで報告が来るとか、他愛も無い話をしながら、時間が過ぎていく。
お茶を注ぎ足そうと戸棚を開けた母さんが、困ったように頬に手を当てた。
「あら、お茶が無くなっちゃった」
そりゃ、いつもの倍の人数で飲んでいれば無くなるのも早いか。
「私、買ってくるよ」
「そう？　悪いわね……」
千円札を受け取って、外に出た。
「なのは」
あれ、秀人さん。
「どうしたの？」
「一人じゃ危ないだろ。俺も行くよ」
そうかな？　この辺、治安は結構良いんだけど。それに、まだお昼だし。
でもまぁ、厚意は素直に受け取ろう。
「うん、ありがとう」
手を繋いで……少し遅いペースで歩く。

週に一度、家族と楽しく食事ができる。
休日には、友達と一緒に遊びに行く。
学校は面倒くさいけど、そこそこ面白い。

――夢のように楽しい、充実した毎日。

こんな日が、いつまでも続くのだと思っていた。

だけど、私は愚かにも、すっかり忘れていた。

一度関わってしまった非日常とは、そう簡単には縁を切れないと

いうことを。

魔法という力はいつだって……争いの呼び水になるんだ、っていうことを。

『Ｃａｕｔｉｏｎ　！』

レイジングハートがおよそ一ヶ月ぶりに鳴らす鋭い警告が……穏やかな空気を切り裂いた。

第三十七話（後書き）

新しい仕事が始まったので、これから更新が滞るかもしれません。
ですが、少なくとも週に一度は更新するようにしますので長い目で見てください。

第三十八話（前書き）

一週間を少しオーバーしました、、、すみません、、、、

５０万ＰＶを突破しました！
皆さんの応援のおかげです！
ありがとうございまーす！！

第三十八話

「え……」

突然の警告に私は、そんな間の抜けた声を出すことしか、できなかった。

ああ、認めよう。

鍛錬を怠れば、その分だけ力は削げ落ちていく……それは、私にも適用されてしかるべきだった。

平和に慣れきって……神経が、完全に鈍っていた。

ほんの一ヶ月前までなら反応できたはずのレイジングハートの警告に、呆けてしまったことが、何よりの証だ。

だから、気付かなかった。

振り向いた背後から、すぐ目の前に……鋭い凶刃が迫っていたことを。

得物は日本刀。

それを手にするのは、黒い鎧を纏った騎士。

ちぐはぐな組み合わせの襲撃者は、迷い無く躊躇い無く……私の顔面へ、刃を突き出した。

「……何やってんだ、てめぇ」

けれど、その凶刃が私に届くことは無かった。

――ビキッ……

ぎらぎらと輝く日本刀は、私の目の前数センチで、その進攻を止められていた。

「おい……」

――ビキッ、パキッ……！

めきめきと、単純な握力だけで鋼を握り潰していく。
「秀人、さん……」
――バキンッ！！
とうとう砕け散った金属片が、血と一緒にぱらぱらと落ちた。
「何やってんのかって……！」
ぎちぎちと、拳が硬く握りこまれていく。
「……ア……アアア」
襲撃者は言葉にならない呻きを上げ、構わず日本刀を振り上げる。
それよりも速く……

「聞いてンだよオオオオオオオオオオッ！！！」

――グギャアッ！！

その顔面に、鉄拳がめり込んだ！
「ゴ、ゴフッ……ギャァッ……！！」
コンクリートの塀を何枚もブチ抜き、何件もの民家の庭をぶち抜き……ようやく止まった。
「怪我は無いな？」
手に食い込んだ金属片を抜き取りながら、私の心配をする秀人さん。
「う、うん」
ようやく、言葉が出せた。
「よかった。……あの野郎、死ぬ寸前までサンドバッグにしてやる」
安堵の笑顔から一転。憤怒の形相で殴り飛ばされた襲撃者を睨む。

でも……生きてるかな、アレ。顔面がべっこり凹んでるけど。
「……ア、ア」
顔面を陥没させ、足が変な方向にひん曲がった状態で立ち上がっ

た。
気持ち悪ッ……！
「……まともな状態じゃ無い。レイジングハート、スキャンだ」
すっと怒りを霧散させ、敵の身体をスキャンする。
『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ．』
そして、結果が提示された。
『あの鎧は、魔法により実体化したものです』
「つまりはバリアジャケットか。他は？」
『思考操作の形跡が見受けられます。生命反応が微弱ながら在るので、洗脳され、操られているのでしょう』
洗脳って……いきなり現実感の無い言葉が出てきた。
いやまぁ、私もやろうと思えば出来なくも無いけど……それを実行するには、良心が咎める。
つまり、こいつを洗脳してけしかけた奴は、何本か頭のネジが飛んでるんだろう。
「……傀儡兵みたいに、四肢をもぎ取って動きを封じるのは無理か」
「だよね」
中身が人間……それも、何かの被害者だというのなら、力ずくで叩き潰すわけにはいかない。バインドして、動きを止めて……
「やっぱりな。気づかない内に、結界の中に誘い込まれてた」
「え？」
結界……？
「さっきから、ユーノと連絡が取れない。真昼間なのに人もいないし、間違いないだろ」
『迂闊でした。まさか、私のセンサーに悟られずに結界を展開するなど……』
――ぱんっ！！
「うおっ！？」

乾いた音が響いたのと同時、秀人さんが上体を思いっきり反らした。

ちゅいんっ！　という変な音と共に、塀に何かが当たり、砕けた。

「野郎ッ！」

『Ｉｍｐａｃｔ　！』

――バゴォンッ！！

衝撃波でブロック塀を破壊する。

その影から転げ出てきたのは……オートマチック拳銃を構えた、さっきのと同じ鎧を身に着けた騎士だった。

「拳銃……？」

さっきの日本刀といい、なんでこんな変な武器ばっかり……

「ア、　ア……」「ウウ……」「ウアァ……」

続々と増えていく、黒い騎士。

釘バット、鉄パイプ、匕首、拳銃、日本刀……まるでヤクザだ。

じりじりと、緩慢な動きで間合いを詰めてくる。

落ち着け。警戒を怠るな。これは、一ヶ月ぶりの実戦だ！

「レイジングハート、」

レイジングハートを掲げ、起動させる。

『Ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅａｄｙ，』

一ヶ月のブランクを感じさせない、力強い声が返ってくる。

よし……！

「セットアップ！！」

『Ｓｅｔ　Ｕｐ　！』

巻き上がる、桜色と空色。

バリアジャケットを装着し、デバイス形態のレイジングハートを

握る。
「それじゃ、軽くやっちゃおう！」
油断さえしなければ、雑魚に遅れは取らない！
「アクセルシューター！！」
誘導弾を形成。数は１２！！
「バレット」
秀人さんも散弾を準備完了。

「オオオ！！」「アアアアア！！」

凶器を振りかざし、迫る敵兵。
ふん……取り柄は、魔力気配の遮断だけ。攻撃力なんて、十回喰らったって私の防御は貫けない貧弱なレベル。
「シューーーーート！！」
「ファイア！！」
――キュゴガガガガガガガッ！！
「ギッ……！」「ギャアッ！！」
面白いように命中する。でも、やっぱり……
「うわ……」
ぶらぶらと、多分折れたらしい腕や脚を引きずりながら、ゾンビのように近づいてくる。
無駄に頑丈……というか、痛みを感じていないんだろう。
「ストラグルバインド」
――バチイイッ！！
秀人さんが、魔法効果を打ち消すストラグルバインドを仕掛ける。
あの鎧はバリアジャケットの一種だし、思考操作が魔法によるものであれば、救出も可能かもしれない。
でも……
「……駄目みたいだな」

「……うん」
バインドの効果で足止めは出来るけど……それだけだ。
「解除。魔力の無駄だ」
『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ』
バインドを解除する。
うーん、どういうこと？　魔法効果なら、打ち消せるはずなのに……
『単純に、向こうの魔法のほうが強力なのです』
ああ、効いていないわけじゃないんだ。
『もし、あの魔法を打ち破ろうとするのなら……瞬間最大放出量を増やすしかありません』
もっと魔力を注げば、効くかもしれない。
「却下だ。魔力切れして負けるのが目に見える」
「だよね」
そうと決まれば、話は簡単だ！
「耐久力の限界までボッコボコにして、無力化する！」
『妥当な判断です』
じゃきん、とレイジングハートを構えなおし……攻撃魔法を発動！
『Ｉｍｐａｃｔ　ｗａｌｌ！』
インパクトウォール。
秀人さんの収束系最大技、スターダストウォール。その発動に必要な魔力収束（スターライト）の代わりに、インパクトを組み込むことで、速攻性と汎用性を持たせた簡易版。
さすがに攻撃範囲は小さくなるけど……威力と扱いやすさは広域版インパクトを数段上回る。
「インパクトォ……！」
こういう、雑魚の殲滅にはもってこい、ってね！
「ウォーーーーーーーーール！！」

――……グオオオオオオオォォォォォ！！

そそり立つ衝撃波の壁が、兵士の軍勢に迫る！

「オオォ……！」

ある者は逃げ、ある者は手にした得物でささやかな抵抗をしているけど……決まりだ！

「よし……ッ！？」

――ずりゅっ……

胸元に違和感を感じるのと同時……ぷしゅん、と、衝撃波が掻き消えた。

「……あ？」

わけが分からない。

術式に穴は無いはず。

発動工程にミスは無かった。

十分な魔力も注いだ。

「なのは……！？」

秀人さんが、驚愕に目を見開いて、私を……私の胸元を見ている。

「あ、あ……？」

見下ろした先、私の胸元から……漆黒の篭手が、生えていた。

「う」

痛みは無い。でも、そこには確かに、手があって……

「う、」

手の平に、ピンポン玉サイズの桜色の光球を握っている。

「この、野郎……！」
秀人さんが、その篭手を捕まえようとして……
――ずるぅっ……！
「うあああああああああああああああああああああああああっ！！」
極大の違和感と共に、全身の力が、ゴッソリと喪失した。
バリアジャケットが……まるで、腐り落ちるように崩れていく。
「あ、あああ……！」
あの光球……あれは多分、魔法の源、リンカーコア。
魔力を生成する、魔導師にとっての、もう一つの心臓。
それを、抜き取られた。
「……くも、」
私の大事なものを、
「よくも……！」
秀人さんと、ユーノくんと、レイジングハート……私たちを繋いでくれた……魔法の力を！！
「よくも……やってくれたなあああああ！！」
胸元の穴に、レイジングハートを突っ込む！
「なのは、何を……！？」
この穴の先に、必ずいる筈だ！
（ぶっ飛ばしてやる……！）

『マスター！』
（絶対に、許さない！！）
「ディ……バ、イン……！！」
――ギンッ……！！
残った魔力を総動員して、砲撃魔法を発動させる。
『お止め下さい！そんな事をしては、あなたの身体が！』
「なのは、よせ！」
消し飛べえええええええええ！！！
「バスタァァァーーーーー！！」
発射された砲撃が、私の身体を貫通することは無く……
――――――ゴォォォ、ン……！！！
遥か遠方で、着弾したような轟音が鳴り響いた。
「うあああああああああっ……！！」
倒せたかどうかは分からない……それに……！
どさっ……と、立っていられなくなって、地べたに倒れた。
「がっ……！あ、はっ、あああ……！」
刃物を突き立てられたような痛みが、全身に広がる。
やっぱり……体内に向けて砲撃なんて、暴挙だった……
でも、そうしないと敵の位置は分からないし……今度は、秀人さんが狙われたかもしれない。
「ああ、あああああ……！！」

でも……ダメージがここまでだなんて、予想外だった。
バラバラになりそうな身体を抱きしめ、痛みを堪える。
「なのは……なのはっ！くそっ……！」
多分、秀人さんが一人で敵兵を退けているんだろう。
あれだけの数……しかも、異様にタフネスが高い集団を。
なんとかして加勢しようとしても……すぐに力が抜け落ちてしまう。
「く、ううぅ……！」
……馬鹿だ、私。
平和ボケして、勘を鈍らせて……挙げ句、自爆して秀人さんのお荷物になって……
「秀人さん……ごめん」
ぷつん、と。
意識のブレーカーが……落ちた。
◆　◆　◆　◆
「なのは！」
くそっ……なんて馬鹿な真似を！
「レイジングハート、どうだ！？」
『……危険です。リンカーコアを無理やり摘出された上……砲撃により体内の臓器にまでダメージが及んでいます。非殺傷設定とはいえ、これでは……！』
自分の身体の中に砲撃を撃つなんて、何考えてるんだ！
「治癒魔法を……邪魔だおらァッ！！」
――ベゴンッ！！

手加減無しのミドルキックを繰り出し、敵兵を纏めて蹴り飛ばす！
悪いけど、手加減できるような余裕は無い！
――ゴバババッ！！
砲撃を振り回し、広範囲を薙ぎ払う！
傀儡兵レベルだったら一気に蹴散らせる威力だというのに、敵兵は何事も無かったかのように立ち上がった。
「くっそ！　キリが無い！」
でも、とにかくなのはの治療が先だ。
『Ｈｅａｌｉｎｇ』
治癒魔法に大部分のタスクを割き、残った一つだけで戦闘を行う。
俺は、なのはを守るためにここを離れるわけにはいかない。それに対し、敵は大勢で、自由に動き回れる。
『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　！』
今はこうして、防御に徹するしかない。
ああ、畜生……ユーノがいればなぁ……！
『Ｃａｕｔｉｏｎ　！』
「あァ！？」
今度は何だ！？　とにかく、防御に魔力を追加して、強度を上げて……！！
ぞわぁっ……と、首筋の毛の一本一本が、悪寒で逆立った。
「や、べぇ……！！」
何かが、来る！
「うおおおおおおっ！？」
全魔法をキャンセル！　なのはを抱え上げ、思いっきり跳ぶ！！
――バッガアアアアアアアアアアアァァァン！！！！！
その場所を……俺の弱まった防御を紙のように突き破ったであろう、とんでもない威力の攻撃が吹き飛ばした！！

「ぐっ、ううっ……！！」
なのはを胸に抱えたまま、ごろごろと地面をバウンドする。
身体を起こし、視界を前方に向ける。
「ア、アアアア……！」
その攻撃は、俺たちどころか、その辺にいた数体の雑魚騎士を巻き添えにしていた。
「ちっくしょう！　お構い無しかよ！！」
再びなのはに治癒魔法を幾重にも施し、矢面に立つ。

粉塵が晴れ、ようやく敵の姿を見ることが出来た。
「……！」
敵は、ゲートボールのスティックのようなハンマーを持った、赤黒い鎧を着た騎士だった。雑魚とは違う、禍々しさの中に不思議な優美さを備えた鎧。
「どういうつもりだ！」
「……！」
返事は無い。ただ無言で、ハンマーを上段に構える。
その肩は、なにかに興奮しているかのように上下していて……ん、もしかして……？
「……怒ってる、のか？」
もしかして、なのはの砲撃で倒された（多分）仲間の仇を取りに？
「……！！」
図星。そして、返礼は……！

――ボボボボッ……！！

数十個の魔力弾……いや、鉄球！
「……レイジングハート、治療は止めるな」
『了解。ですが、おそらくあの攻撃は防御を貫通してきます』

「だよなぁ……」
初撃も多分、あれの掃射だったんだし。
一つしかタスクを割いていない防御なんて、無いも同然。
でも、一応考えはある。
「じゃーん」
背中から取り出したのは……あの雑魚騎士の一体が持っていた、釘バット。
「これで打ち返す！」
『馬鹿ですか、あなたは……』
レイジングハートが脱力したように呟く。
「というわけで、強化よろしく！」
『……はぁ。了解』
幸いにも、雑魚騎士はチビ騎士の攻撃であらかた吹っ飛んでどこか行っちゃったし、一対一だ。
「さぁ来い、チビ！」
「……！！」
実は気にしているらしく、殺気立ち……

――ボバババッ！！

鉄球を一斉に発射してきた！

「オラオラオラオラァッ！！」

――ガキンガキンガキンゴキンカキン！！

くうううううう、硬ってえええええ！！
手がびりびり痺れてきやがる！
それに、強化したバットが一発打ち返すごとに凹み、歪んでいく！
「だあああありゃあああああああああああ！！」

全部打ち返すくらいまでは、持ってくれよ……！

――ゴキンゴキンゴキン……カキィンッ！！

うち一発を、正確にチビ騎士の頭部へピッチャー返し！

――パガンッ！

「！！」

頭に血が上って、判断力が低下していたのか……額に直撃し、仰け反った。

同時、全ての鉄球が制御を失い、あらぬ方向へ飛散する。

――ピキッ……！！

チビ騎士の兜に亀裂が入った。

くそ……こんな状況じゃなければ、攻め込むには絶好の機会なのに……

「レイジングハート、そっちはどうだ？」

『脈拍は安定してきましたが、予断を許さない状況です』

「……タスク三つ、俺に割けるか？」

こうなったら、アレしかない。

「カウンター三連撃……決まれば、倒せる」

あのチビ騎士の鎧は、そんなに頑丈じゃない。

うまく『返』せれば、倒せるはずだ。

『……可能ですが、制御プログラムがまだ未完成です』

「どうせ、このままじゃ負ける」

負けるだけならまだしも……最悪、なのはが死ぬ。

「俺の身体なんてどうなってもいい。今、あいつらを退けるのが先だ」

それでこの結界を壊せればユーノを呼べるし、な。

『……可能な限りバックアップします。無茶も程ほどに』

「あいよ」

タスクは三つ。
ディバインバスターと、ブレイズキャノンと……魔力刃。
いつでも発動できるように、スタンバイしておく。
「……」
――ガキッ……
チビ騎士が、ハンマーを構える。
「……来い！」
半身に構え……右手を腰溜めに、左手を緩く突き出す。
「……！」

――ダンッ！！

地面が砕けるほどのスタートダッシュで、一気にハンマーを振り下ろしながら突っ込んできた！
でも……フェイトに比べたら、全然遅い！！
「はぁっ！！」
使えるだけの全魔力を、掌打に乗せて……！！

――バチイイイィィンッ！！

衝突！！
「……！！」
「こ、のおおおおおおっ！！」
スピードはフェイト以下でも……パワーは俺以上か！
拮抗した状態から、チビ騎士のハンマーがじりじりと迫ってきている。
「うオォあああああああああああ！！！」
砕けそうになる膝を叱咤し……拮抗を押し返す！
「……！　……！！」

「こ、のやろおおおおおおおおおおおお！！」
そろそろだ。もうそろそろ、チビ騎士は突進力を失う。そうすれば……
耐えて、堪えて……！
ふっ……と、突進が止まった！
「うおりゃあああああっ！！」
――ドゴオォォンッ！！
左手から、ブレイズキャノン！
右手から、ディバインバスター！
――ガギュウウウウンッ！！
「喰らいやがれえええええええええェェッ！！」
発射した二つの攻撃魔法と並走し……魔力刃を振り下ろす！！
チビ騎士は、完全に攻撃を終えた無防備を晒している！
（貰った！！）
確信は、手応えとして返ってくる……筈だった。
――――――――ガギュンッ、ガギュンッ！！
チビ騎士のハンマー……そのヘッド部分がスライドし、弾丸のような薬莢を排出したのと同時。
――ガオオオオンンッ！！
「……あ？」
ディバインバスターとブレイズキャノンを、あっさりと撃墜し…

…先端を鋭利なピッケル状に変形したハンマーが、

――ごぎゅっ……！！

「……が、あ、あ……！！」

俺の胴体に、深々と食い込んだ……

食い込んだだけでは止まらず、めきめきと骨が砕け、何かが潰れる音が、体内から聞こえた。

――どさっ

一瞬だった。

ほんの一瞬で、俺の最大技は破られて……俺は、負けた。

『秀人！？』

レイジングハートが俺を呼ぶ声が、妙に遠く聞こえる。

「げふっ……！」

喉の奥からこみ上げてきた、鉄臭い、液体だかよくわからん物を吐き出す。

――ザッ……

立ち上がれない俺達の周囲を、チビ騎士と……その辺に散らばっていた雑魚騎士が取り囲む。

「なのはに……ざ、わるな……！」

潰れた肺が、言葉を濁らせる。

ずるずると這いずり、なのはの身体の上に、覆いかぶさる。

少しでも、時間を稼ぐんだ……！

「……」

――ざくっ

「ぐっ……！」

背中に、刃物のようなものが食い込んだ。

「ア、アア……！」

俺が抵抗しないと見て……

――ざぐっ、ごきっ、ばきっ、がしっ、ぐちゃっ……！

「ぐっ……う、ううう……ああ！！」

全身を鈍器が殴打し、刃物が蹂躙し、つま先が傷の治りかけた腹を蹴り上げる。

傷の修復は行われているけど……流石に、数が多すぎる。

頭部を殴打されるたびに意識が飛びかけて……背中を切りつける刃物の鋭い痛みが、再び意識を繋ぎ止める。

「あ、あ……！！」

徐々に、意識が薄れてきた。あまり痛みも感じない。

――がぎゅんっ、

また、あの音だ。

チン……と、見せ付けるように目の前に薬莢が落ちる。

俺のしぶとさに業を煮やしたのか、チビ騎士が止めを刺すつもりらしい。

やべ……今回ばかりは、死ぬかも……

『秀人！　秀人ッ！！　気をしっかり持ちなさい！』

レイジングハートが、これまでに無く切羽詰った声を張り上げる。

『秀、』

――バキンッ！！

その声が、不自然に途切れる。

『……人、……逃、』

レイジングハートは、チビ騎士のハンマーに叩き壊されていた。

ころん……と、ヒビだらけになったコアが、目の前に転がってくる。

その赤い宝石に宿る光が消え……

――途切れかけていた意識が……燃え上がった。

「て、めェ……！！」

血反吐を吐き散らす内臓を無視し、

「許、さねェ……！！」

断ち切られた靭帯や筋繊維を強引に再生し……

「許さねェぞおおお

怒りのままに……いや、怒りそのものを、炎と化して。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

怒りの蒼炎が……世界を焼いていく！

第三十八話（後書き）

マジギレ秀人、第二弾。

うーん……原作からどんどん乖離していくな……

第三十九話（前書き）

珍しくいつもどおりのペースで投稿できました。
それでは、前回の続きからです。

第三十九話

――ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！

俺の血を熱源として、燃え盛る蒼炎。

俺のほぼ全身に刻まれた傷は、その炎に触れた箇所から、片っ端から修復されていく。

そして、レイジングハートが機能を停止し、治療が中断されたままになっているなのはの身体を、蒼炎が包み込む。

ボロボロになっていたバリアジャケットが燃え上がり、その魔力を治癒魔法へと変換される。

――ゴウッ！！

一歩、前へ。

蒼炎の動きもそれに追従し、移動する。

それだけで、俺を好き勝手に痛めつけていた雑魚騎士が、一歩後ずさった。

「……！！」

チビ騎士の号令を受けた雑魚騎士の集団が、俺に殺到する。

「……はアァッ！！」

――ゴバアアァッ！！

近寄る雑魚騎士を、吹け上がる蒼炎の熱波がなぎ払う！

「……、ア！」

バックステップで回避しようとする雑魚騎士の鎧を、蒼炎が僅かに撫でた。

そして、

――ボゥンッ！！

爆発的に、発火する！

「ア、アアアアアア！！」

「ギャアアアアッ！！」

蒼炎に炙られた雑魚騎士達が、のたうち、逃げ惑い……

「ア……あ、あ……」

一瞬のうちに鎧を失い、倒れ付す。

だが、もうそんなものは考慮に入らない。

単に……チビ騎士を破壊するのに邪魔だったから、どかしただけだ。

「……！」

先端をピッケルのように細くし、一点での破壊力を増したハンマーを振り回し……

――ガゴオオオンッ！！

その先端は、再び俺の身体に突き刺さった。

「……！？」

どろっ……と、ハンマーの先端が……高熱で溶ける。

――ブゴオオオッ！！

傷口からあふれ出た血液が炎上し、一瞬のうちに傷を塞ぎ……チビ騎士を吹き飛ばす！。

「……！」

――ギュガガガガッ！！

鉄球の一斉掃射。だがそれの大部分は、身体に届く前に蒼炎によって蒸発し……届いた数発もまた、ダメージにはなりえない。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！」

思考が怒り一色に染まり……この蒼炎で、いかに敵を焼き滅ぼすかだけが、めまぐるしく頭を駆け巡る。

――ギュルルルルッ……！！

手元に、蒼く燃える血液を凝縮し……！

「くたばり……やがれえええええええええエェェッッ！！！」

その炎を……全ての怒りのままに、叩き付けた！！

「……！！！」

チビ騎士は、迷い無く回避を選ぶ。

「……！！」

――がきゅん、がきゅんっ、がきゅんっ！！

三発の薬莢を排出。

攻撃力を爆発的に増大したハンマーで、

――バッキイイイイインッ！！

火炎弾の下を叩き、力をいなし……火炎弾を天空へ跳ね上げる。

「逃ィがすかアアアアアアアアアァッッ！！」

天空へ上昇を続ける火炎弾に手をかざし……操作！

――……ゴオオオ

背中を向け全速力で逃走していたチビ騎士が、その圧倒的な熱量に振り返り……硬直。

大気を切り裂く、巨大な両翼。

幾重にも重なる、長大な尾。

獲物を食い千切らんとする、鋭利な嘴。

全身に炎を纏う、伝説上の神獣。

――――――不死鳥。

『ギュエエエ

『ピギュエエエエアアアアアアアアアッ！！』

鷲？みにしたまま……

――ッドゴオオオオオオオオオオオオオオオンッ！！

大地に、叩き伏せた！

「……、！！！」

直径１０メートルはある巨大なクレーターが、大地に深々と刻まれた。

『フシュウウウウ……！！』

不死鳥に踏み潰された格好のまま、ぴくりとも動かなくなったチビ騎士の手から、ハンマーがずるっと滑り落ちる。

死んだか……どちらにせよ、戦闘の継続は不可能……

……いや、まだだ。

――ガギンッ……

蒼炎の檻で、チビ騎士を大地に張り付け……

『ギュエエエエエエエエエエエッ！！』

不死鳥を、再び上空へ解き放つ！！

「お前は……お前だけは！！」

なのはを魔導師生命どころか、本気で命を奪おうとした。

レイジングハートを全損にまで破壊した。

「ここで、終われエエエエエエエエエエッ！！」

その罪を……死をもって、償え！！
「焼き尽くせ……！！！！」
……叩き下ろす！！

「クリメイション……フェニイイイイイイイイィィックス！！」

『ギュエエエ

蒼炎の残り火がちろちろと燃え……自然に鎮火する。
同時、無理に身体を動かしていた反動が一気に襲い掛かり、その場に座り込んでしまった。
「ぜェッ、……！！」
目の前には、広大な更地が広がっていた。
サーチするだけの魔力は残っていないから分からないけど……
…とにかく、あの騎士の連中は、倒せた。
「……今のは、一体……？」
キレている最中は、無我夢中で気にしなかったけど……何だったんだ。あの蒼炎は。あの不死鳥は。
俺は、あんな形状に変われだなんて命じてはいないし……そもそも、俺は炎を操る魔法なんて、一度も習ったことは無い。
それに……
「クリメイション・フェニックス……？」
あの、圧倒的な破壊力を持った不死鳥の名前。
命名したわけじゃない。唐突に、頭の中に浮かんできた名称だった。

って、それよりも！！
「も、戻らなきゃ……！」
一応、治癒魔法は残してきたけど……ちゃんと効いているかどうか不安だ！！
レイジングハートだって、ちゃんと状態を確認してやらないと！
「ああもう、さっさと治れっつーの……！！」
そのぐらいしか取り柄の無い身体なんだから……！

いまいち動きが渋い身体を動かし、なのはを置いてきた場所へ戻る。
なのはは……
「……すぅ、すぅ」

良かった……寝てるだけだ。
問題は、
「レイジングハート……」
『……』
レイジングハートは、答えない。
魔力を注いで修復しようにも、結界を破壊しようにも、もう殆どすっからかんで全く足りない。
「……しゃーない」
右手の魔力結晶に、意識を集中させる。
「スターライト……も、無理か」
魔力を収束しようにも、レイジングハートがいなければまともに出来ない。
この辺は、魔導師共通の弱みか。
もういっそのこと、魔法そのものを継続的に身に纏えればいいんだけどなぁ……
出力の上げ下げだけすればよくて、タイムラグも無くなるし。

……って、
「お、おおう……なんじゃこりゃ」
あたりに目を配ると、死屍累々と……多分、雑魚騎士として使われていた人間が、その辺に転がっていた。
ボロボロの洋服……これは、アロハシャツ？　そんで、こっちは黒いスーツ……妙につま先が尖ったエナメルの靴。
「……ヤクザ？」
そういや、雑魚騎士達の武器も、トカレフだの匕首だの、それっぽい物が多かった。
その辺の事務所の奴らを拉致ったのだろうか。
「う、ううう……！！」
一人、作務衣を着ていた男がうめき声を上げる。
「おいコラ、起きろヤクザ」

襟を掴み、頬を二、三回張る。
「あ……？」
ようやく焦点を結んだ目が、見開かれる。
「俺、は……生きている、のか？」
「まーな。んで……どこまで覚えてる？」
「あ、ああ……」
ヤクザが話すところによると……
「子供が変な姿に変身して、仲間達を殺した？」
「信じられないだろうが、本当だ……この場にいる人数より、ずっと大勢が……」
「……そうか」
子供……か。なるほど。
「顔は覚えているか？」
大体の特徴さえ覚えていれば、アイツに頼んで、似顔絵を描いてもらえる。
「ああ、確か……」
いくつかの特徴を聞き終えたところで、精神力を使い切ったのか、再び意識を失った。
さてと。
「どうやって、結界から出るかなぁ……」
魔力は空。
周辺から集めようにも、スターライトは使えない。
外への連絡手段もない。
早いところ外に出て、なのはをちゃんと治療してやりたいんだが……
――パリンッ……
「……え？」
今、結界のどこかに穴が開かなかったか……？

もしかして……
「ユーノか！？」
慌てて、念話と同時に肉声も出してしまった。
「……ユーノ？」
返事が無いってことは……ユーノじゃないのか？
「……増援だったら最悪だぞ」
今のところ敵意は感じないけど……着々と、距離を詰めてきている。
あと、数十メートル。

――ザッ……

姿が見えてきた。
遮蔽物が無くなっているおかげで、身を隠すつもりは無いらしい。
青いスラックスに白いシャツを着て……変な仮面で顔を隠した、長身の男だ。
じろじろとぶしつけに俺の身体を上から下まで眺め……
「……蒐集は無理だな。完全に肉体と同化している」
「は？　何のことだ」
シュウシュウ……？
「まぁ、そっちの少女の分が手に入っただけ、よしとしよう」
「……？」
何のことだかさっぱりわからん。
「なぁ、アンタ」
ぶつくさ言ってるだけで襲い掛かっては来ないし、とりあえず敵ではないだろう。
「……」
くいっと首を曲げ、俺と眼が合った。
……いや、仮面だからわかんないけどさ。
「悪いんだけど、結界の外まで連れ出してくんねーかな？」

結界に入れたなら、出ることもできるはず……

「……」

「あ、おい！」

用事は済んだとばかりに踵を返してしまった。

敵ではないにせよ、友好的でも無いか……まあいいや。

「勝手にやらせてもらうぞ」

――バシュッ……

『ライン』を伸ばし、仮面男に接続する。

「……！？」

おー……って、なんじゃこりゃ！？

結界・捕縛術だけで３４！？

遠距離バインドに、これは……拘束結界？

それに、幻術魔法、変身魔法……

派手さは無いけど……速効性・汎用性・確実性は、俺が使うものに比べたら段違い……というか、別次元だ。

まるで、クロノの魔法が、更に磨きぬかれたような……お、あったあった。局所的結界破壊。

結界は残しておいて、後でユーノに頼んで修復してもらわないと……

ついでに、ちょこっと魔力を拝借して……

――ブオッ！！

「うおっ！？」

いきなり飛んできた回し蹴りを回避する。

「貴様……！！」

「怒るくらいなら、最初から手伝ってくれよ……」

「……ふん！」

ずかずかと大股で去っていった。

まずは……拝借した魔力で、結界の一部を破壊。

とりあえずはこれで、通信は外に通じる。
残った魔力をレイジングハートに注いで、修復を開始させた。
「……」
さすがに、ここまでぶっ壊されていたら、すぐには直らないか。
結界の外は……うわ……もう夜だ。
あー……携帯電話、道場に置いてきちゃった。
『ユーノ、俺だ』
念話でユーノを呼ぶ。
『秀人!?　今、どこにいるんだい!?　この結界、防御が硬くて全然破れなくて……』
「んーっと……」
位置情報を、探る。丁度、結界を挟んで反対側か。
『今、そっちに行くから……』

「いや、その必要は無い」

……妙に聞き覚えのある声が、割り込んできた。
「管理局嘱託魔導師・吾妻秀人。並びに、高町なのは」
厳つい法衣のようなバリアジャケット。手には、複雑な形状の杖
……S2U。

「アースラへの出頭を、要請する」

黒い髪・黒い瞳の……
「……クロノ？」
およそ一ヶ月ぶりの、再会だった。

第三十九話（後書き）

ちょっと無理があるのは自分でもわかっていますので、ツッコミは無用でお願いします、、、（汗）

第四十話（前書き）

３６話のラスト（美香との出会い）を大幅更新しています。
先にそちらをどうぞ。

第四十話

「ふわあああぁ……」

自分の口から、そんな間抜けな大あくびが出た。

いやぁ……だって、とにかくヒマでさぁ……

――――――……？

騎士団……？　ああ、アレ？　あんなもん、使い捨ての消耗品だからどうでもいい。

養分にしたクズの中からそこそこ使えそうな奴らを選んで、ヴォルケンリッター召喚の術式を弄くった術式で再利用してみたんだけど……どれもこれも、大した戦力にはならない。せいぜい、足止めと壁に使えるくらいだ。

そんな使えない奴らに、『闇の書』を持たせても無駄だし……

…作っちゃった分だけを消費し尽くしたら、また別の戦力増強の方法を考えよう。

……ずいぶん、帰りが遅いな。

滅茶苦茶でかい魔力反応が二つ見つかったから、手が空いていた『鉄槌』を向かわせたのが今日の夕方。もう日はすっかり落ちて、夜の時間になっている。

お、そうこうしているうちに午後九時。時間だ。

『鉄槌』の回収は後でいいや。

「ええっと、チョコレートと、マシュマロと……」

私が食べるために買ったおやつを、リュックサックに詰め込んでいく。

「まぁ、病院食よか数倍はマシだろ、多分」

あれ、あんまし味が無いからなぁ……二日で飽きる。

「別に、内臓の病気じゃないんだから……好きなもの食べさせてや

ってもいいじゃない……って、違う違う！！」
賞味期限が近くて、食べる前に腐らせないためだから勘違いするなよ！？

窓を開けて庭に出る。
「スレイプニル」
――ばさっ……
翼を展開し、飛ぶ。
「うーん……いい空気」
夏の気候でも、フライパンみたいなアスファルトから離れれば、それなりに涼しいのだということを最近知った。
……折角だし、あいつにも教えてやろうっと。
この二ヶ月で、大分基礎力も着いてきたし、いっつも同じメニューのルーチンワークじゃ、やる気も削げる。
いつものルートを辿り、総合病院までやってくる。もう既に面会時間は終了し、消灯されて真っ暗だ。
――コンコン。
カーテンが引かれた一室の窓を、軽くノックする。
すぐに窓が開き、おかっぱ頭の少女……美香が、嬉しそうに顔を覗かせた。

「姐（あね）さん、いらっしゃい！」

この呼び名は、美香が勝手に言い始めたものだ。
『お姉ちゃん』だと、美香の実姉と被るから……らしい。
どことなく、響き的に強そうだから、そこそこ気に入っていたりする。
「よう。……ほら、土産」
リュックサックを、どさっとベッドに下ろす。
目で促すと、美香はいそいそとリュックサックを開けた。

「わー、お菓子だ！　……食べていいの？」
「ああ。好きにしろ」
たかが菓子でそこまで喜べるなんて……子供は単純でいいな。
早速マシュマロの袋を開け、二、三個をいっぺんに頬張る。
「美味しいー！　……でも、姐さんは食べないの？」
「甘い菓子は苦手なんだよ」
なんか、口の中がべたべたする気がするし。
「じゃあ、何で買ったの？」
……このガキ。
「間違えただけだ。そんで、賞味期限も近かったから……」
「あと一ヶ月もあるのに？」
「……うるせぇ、黙って食え！！」
「むぐっ！？」
口の中に、板チョコを突っ込んでやった。
目を白黒させていた美香だったけど、次第に嬉しそうに緩んでいく。
「それ食ったら、始めるぞ」
「もぐもぐ……はーい！」
びしっ、と威勢よく挙手する。

……美香と初めて会ってから、大体二ヶ月。

私は、美香の師として、『授業』を行っていた。
「始める前に、復唱してみろ」
私が教えているのは、魔法と……このクソッタレな世界を生きていく、唯一の方法。
「はいっ！」
授業を始める前の、念押し。

「世界は、何があっても私たちを救ってはくれません。

私たちを助けられるのは、自身の力のみ。
力を身に着けることだけが、自らを救うことが出来る、唯一の方法です」

「よろしい」
さて、何を教えてやるかな……ああ、そうだ。
「今日は……」
言いかけて……
「美香、この魔法を覚える前に、約束しろ」
「……？　はい」
「この魔法を使っていいのは、夜だけ。もし使ったとしても、必ずその晩のうちに、部屋に戻ること」
「……戻る？　今日は、何の魔法を教えてくれるの？」
わくわくと、嬉しそうにしている美香。
思わず顔が綻びそうになるけど……今は授業中だから、ぎゅっと引き締める。
遊び半分の気持ちで魔法を使うなんてこと、あってはならないんだ。
「……約束できる？」
「はいっ！」
美香の身体は、その魔力に反して、小さくて弱い。
小規模の結界を展開しただけで、かなりの負担が強いられてしまう程だ。
もし、発動に失敗してしまったら……考えたくも無い。
だから、この二ヶ月。美香には、徹底した基礎訓練を行ってきた。
魔力運用と、初歩の初歩……それをいくつか。そろそろ、本格的に教えてやってもいい頃だろう。

「空の飛び方、教えてやるよ」

……

……

……

……

……

「ひゃーーー！！」

背中に小さな羽根……ミニサイズのスレイプニルを生やし、落下しないよう必死に羽ばたく美香。

「ほらほらー、落ちたら死ぬぞー」

ふよふよと浮遊しながら、適当にアドバイス。

術式はしっかりコントロールできているし、問題は無いだろう。

夜食のカップ麺にお湯を注ぎ、蓋をする。

三分持つかなー……

手元のストップウオッチを押し、計測開始。

一分……二分……

「ふにゅー……！！」

ヒヨコのような羽根が、明滅している。

……三分。

さて、食べるか。

「あ、姐さーーーん！！　も、もう……もう無理――！！」

ぷしゅん、と羽根が消えた。

「きゃあああああああ！！」

数百メートル下に広がる地面へと落下していく。

「……三分二十秒」

スレイプニルで加速して、キャッチ。
「まだまだ……だな」
おっかしいなぁ……もう少し、伸びてもいいはずなんだけど……
ぐいぐい、と、服を引っ張られた。
「何だ？」
「姐さん、今日はもういいよ。帰ろうよ……」
完全に、及び腰になっている。
……なるほど。この甘さが、成長を妨げているわけか。
そうと決まれば、話は簡単。

「姐さん……何で、地面に戻らないのでしょうか……？」
なぜか敬語。
「練習を続けるためよ、美香」
ばっさばっさとスレイプニルで上昇を続ける。
「姐さん……何で、さっきよりも高いところに向かっているのでしょうか……？」
ひくひくと、頬が引きつっている。
「お前をより高い場所に連れて行くためよ、美香」
眼下に広がる町並みが遠のき、人や自動車が豆粒のように小さくなる。
「姐さん……何で、さりげなく私の身体を、手放そうとしているのでしょうか……！？」
私は、にっこりと、聖母の気分で笑みを浮かべ……手を離した。

「お前をここから落とすためよ、美香」

ぽいっとな。
そーれ、行ってこーい。

「うえええええええええええん！！　姐さあああああぁぁぁ……

……」

美香が、豆粒の仲間入りをした。
フェードアウトしていく泣き声を無視して、ずるずるとカップ麺をすする。
「食べ終わったら迎えに行くからなー」
魔女への道は、険しいのだ。

「ぜぇぜぇ……！　姐さんの意地悪……！」
数分後、病院の屋上。
息も絶え絶えになった美香が、私を見上げながら恨み言を言った。
「ちゃんと飛べたじゃないか」
最後のトライで、最初の倍の六分間、飛行を続けていた。
「そりゃ、飛ばなきゃ怪我する……」
「そのくらいの覚悟でやらなきゃ、身にならないってよくわかっただろ？」
実際、私だって……闇の補助無しで飛べるようになるまで、あちこちに打ち身や擦り傷……酷いときには、骨折までしたんだ。
こうしてサポートしてやるだけ、ありがたいと思わなきゃ。
「むうぅ……！」
「美香、……美香？」
「……」
あらら、すっかりへそを曲げちゃったか……
「仕方ねぇなぁ……後でアイスおごってやるから、機嫌直せ」
「あいすっ！？」
うおビックリしたー。
「買ってくれるの！？」
現金だなぁ……さすが子供。
「ああ。……つっても、連れて行くのは無理だけどな」

車椅子で連れ出して……それが病院にバレたら、美香が怒られる。
「何がいい？　二つまでだからね」
「チョコレート味と、バニラ味！」
「あいよ。んじゃ、部屋で待ってろ」
「うんっ！」
美香を病室に戻らせ……

この辺にあるコンビニは……やっぱり、あそこだな。
「とうちゃーく……」
いつもの通り道に着地し、翼を消す。
てくてくと歩いて……いつものコンビニへ。

――ピンポーン……
自動ドアの開閉音を鳴らしながら、見知った店に足を踏み入れる。
「……らっしゃーせー」
今日も今日とて、あのやる気の無い金髪バイトがいる。
いつもの習慣で弁当売り場に行こうとして……直前で、クーラーケースに方向転換。
ハーゲンダッツ……は、やめておくか。子供に大事なのは、美味い不味いではなくて、いかに腹いっぱい食うか、それが一番大事なんだし。
一個百円くらいのカップアイスを四種類……チョコ、バニラ、抹茶、バナナを積み上げ、レジに持っていく。
いっそのこと、全部抹茶味にしてやろうか……という、子供っぽい悪戯心も浮かんだけど止めておいた。まーたヘソ曲げられちゃ、面倒だし。
「……くかー」
……金髪バイトは、レジに突っ伏して寝息を立てていた。
どんだけやる気無いんだよ……
「……チッ」

――ガンッ！！
レジの前を、思いっきり蹴飛ばした。
「んあ……！？」
のっそりと身体を起こし、目をこする。
「寝てんじゃねぇよ……レジの金盗まれたらどーすんだ」
それでこのコンビニが潰れたら、私の飯はどうなる。
「あー、よかった……オーナーじゃなくて……ふあああぁぁ……」
疲労の色濃い、大きな欠伸が出た。
たかがコンビニ……しかも、客足の少ない深夜。こんなバイトで、ここまで疲れるようなことは多分無いはずだ。
だとしたら……
「あんた……いくつバイトしてるの？」
掛け持ちくらいしか、考えられない。
「あー……工事現場と、引越しと、深夜コンビニ」
前半分は、短時間・バイトにしては高収入……そして、体力を必要とする仕事。
「呆れた……そんなに金が必要なの？」
「ああ。いくらあっても足んねー」
……即答かよ。
ま、いいんだけどね。レジ叩いてくれれば。
四つで五百円以内に収まり、つり銭をポケットに仕舞う。
「……つーか、お前まだガキなんだから夜遊びすんなよ」
「大きなお世話だ」
「あのなぁ……」
思えば、これだけ無礼な物言いをする子供に、律儀に忠告するなんて、見た目と違って割りといい奴？
「最近、行方不明事件が頻発してるらしいぜ？」
「知ってるよ」
……つーかその犯人、私だし。

「そんじゃねー」
「真っ直ぐ帰れよ」
「やなこった」
ぷらぷらと袋を揺らしつつ、コンビニを出た。

「美香、ただいま……美香？」
「すぅ……すぅ……」
時計は、午後十二時を指していた。待ち疲れて寝てしまっていても、おかしくはない。
「……美香」
可愛い弟子の、無邪気な寝顔。
「ん……？　んん……」
髪を手櫛で梳くと、僅かに身じろぎし……また寝息を立て始める。
毎日毎日、復唱させてはいるものの……この子の根っこは、変わらない。
それは多分に、家族の存在が大きいのだろう。
「お兄ちゃんに、お姉ちゃん……か」
もともと一人っ子で、今や天涯孤独の私には、眩しいほどに羨ましい。
「でも、結局は……いなくなっちゃうんだよ」
パパとママは、いつまでも私と一緒。
私がおばさんになっても、おばあちゃんになっても。
でも、そんなのはただの幻想で。
世の理不尽は、あっという間に幸せを掠め取っていく。
でも。だからこそ……
「お前は、私が守ってあげるから……」
私は。
私だけは。
絶対に、美香を置いていかない。

「んぅ……？」
「あ……起きちゃった？」
「んーん……ちょうど、起きようと思ってたとこ」
「アイス、食べる？」
温度操作をしていたから、まだ溶けていない。
「……食べるー」
寝ぼけていて尚、食欲に忠実な様子に苦笑し……アイスを手渡した。
ぺりぺりと蓋を開け、緑色のアイスを、スプーンで一口。
その瞬間……
「に、苦ぁい！」
美香の目が、一気に開いた。

「ひゃーっはっはっは！！　引っかかった引っかかったー！」

大・成・功！

「うー！　バニラか、チョコって頼んだのにー！」
ぶんっ、と投げられたアイスの容器をキャッチする。そのラベルには、『抹茶』の文字が燦然と輝いていた。
「姐さんの意地悪ー！」
枕を振り上げ、ぼすぼすと私の身体を叩いて怒る。
「あはっ、ごめん、ごめんってば！」
ああもう、なんて弄り甲斐のある子なんだろう。

結局、美香にはバナナアイスを進呈する……という条件で、許してもらった。
「三つも食べて……腹壊しても知らねーからな」
美香は、ぴたっと手を止めて、まじまじと私を眺める。
「……ねぇ、姐さん」

バニラのカップアイスを食べながら、美香が不思議そうな顔をして聞いてきた。
「何だ？」
何か、魔法のことでわからないことでもあるんだろうか。
「何で姐さん、そんな変な喋り方してるの？」
……はい？
「へ……変？　何が？」
「女の人っぽい喋り方したり、男の人っぽい喋り方になったりしてるよ？」
え、うそ……
「お、おかしくない、ヨ……？」
ちゃんと、パパと一緒に練習した標準語なんだ。変なわけが……
「えー、おかしいよー」
けらけらと笑われた。
「は、はは……おかしいんだ……そっかぁ……
…」
凹むわぁ……
「あ、あれ……？　姐さん？」
がつがつ。
一気に残りを食べつくして、涙を堪えるのだった。
「そういえばね、院長先生がいなくなっちゃったんだって」
ぴたりと、抹茶アイスを口に運ぶ手が、止まる。
「それで、新しい先生がよその病院から来る……って」
「へぇ……」
適当な相槌を打ちつつ、私は……
あのジジイを殺した夜のことを、思い出していた。

◆　◆　◆　◆

でっぷりと太った男だった。
頭頂部は薄く、顔全体がてらてらと脂ぎり、目はどんよりと濁っている。
男のいる部屋。
革張りのソファに、毛足の長い高価な絨毯。マホガニーのデスクに、壁際にずらっと並べられた古酒。
「……ぷぁあ……」
一本で万単位もする葉巻をくわえ、紫煙を燻らせる。
成金、という言葉がここまで似合う姿も、そういない。

――プルルルッ……
「……」
がちゃっ、と、アンティーク調に仕立てられた電話を耳に当てる。
「私だ」
尊大な態度が許されるのも、男の社会的地位が高い証拠なのだろう。
電話の内容は、要約すれば次の一言だった。

――わが社の新薬を、買ってもらいたい。

病院が、薬を買う。
傍から聞く分には、何もおかしくはない。
だが、その内情はこうだ。

ある会社が、新薬とは名ばかりの、効果の薄い薬品Ａを安価に作る。
それを、名のある大病院が買い上げ、完治寸前の患者に薬品Ａを

使用する。

もちろん、治療薬として最低限の効果はあるため害にはならず、当然のごとく完治し……カルテには、薬品Ａを投与した、という事実が記述される。

それにより、薬品にＡは、『薬品Ａを投与した患者が完治・全快した』という事実が付随する。

新薬Ａは、『○○の治療薬』という肩書きを得、飛ぶように売れ、製薬会社は利益を得るのである。

「ああ。だが……わかっているだろうね？」

もちろん、得をするのは製薬会社だけではない。

新薬は、保険適用外……つまり、全額を患者側が負担する。当然、病院の売り上げにも繋がるが、それ以外……病院以外にも、潤う場所がある。

その新薬Ａを試用するかどうかを決めるのは、最高責任者……院長なのだから。

製薬会社は、「ウチの新薬を宣伝してください」と、誠意を持って、お願いするのである。

誠意……つまりは、賄賂。

「２００？　……馬鹿を言っちゃいかん。５００だ。それより下は無い」

……この男が、町で三本指に入る大病院の院長だとは、初見では誰にもわかるまい。

「……ふん、まあいいだろう」

５００。つまり、５００万円が、この男の懐に入ることが確定した瞬間だった。

がちゃん、と電話を切り、どっかりとソファに身を預ける。

「チッ……貧乏人が」
５００万円。一般家庭の年収にも匹敵する額を、鼻で笑う。
棚に収められたヴィンテージワインの栓を抜き、グラスに開ける。

「……柳瀬くん、君にはまだまだ、治療を続けてもらうよ」
――あの患者とその家族は、実に扱いやすい。
二度と動かない足を、『動く可能性がある』とニンジンをぶら下げ、尻を引っぱたけば……いくらでも新薬を買っていく。疑問も持たず、目を輝かせ……感謝さえ浮かべながら。
そこから得た臨床データを高値で製薬会社に売れば、また利益に繋がる。
利益が、利益を産んでいくのだ。
「くははははっ……！！　これだから、医者はやめられんわ……！」
欲望にべたついた、醜い笑み。
……この男が、町で三本指に入る病院の院長だとは、初見では誰も気付くまい。
ワインを、再びグラスに注ぐ。

「……躊躇い無く殺せるクズで安心したよ」

「！？」
院長は、驚きにグラスを取り落とした。
ワインが絨毯に零れ、黒い染みが広がる。
「美香は、私のモノになったんだ」
その染みは、零れたワインの量とは釣り合わないほど、その面積を広げ……
「美香の足は、医学ではもう治せない……それはまぁ、仕方ない」

床一面を黒く染め上げ、その色合いをより濃くしていく。
「でも」
院長は、異常な光景にガタガタと震える。
「それを隠して、美香を縛り付けるようなブタ野郎は、許さない」
床一面の闇の中から、『甲冑』に身を包んだはやてが、姿を現した。
「死んでもらうよ」
ビキュンッ！！
院長がつい先ほどまで座っていたソファとデスクが、真っ二つに両断される。
「ひいいっ……！」
後ずさり、どんっ……と、棚に背中をぶつける。
目の前に現れた化け物は、絶対零度の殺意を撒き散らしながら、真っ直ぐに歩を進める。
「ま、待ってくれ……！！」
ざくざくと、辺りの物を切り刻みながら迫る闇に、命乞いを始めた。
「金をやろう！　一生遊んで暮らせるだけの、金！　い、いや、宝石でも、マンションでも、好きなだけ……！」
ぴたりと足を止める。
脂汗をだらだら垂らしながら、安堵の表情を浮かべる。
「……お前には、それしか無いんだな」
深い哀れみを浮かべた……まるで、養豚場の家畜でも見るかのような顔。
「……へぁ？」
それが、院長がこの世で見た、最後の光景だった。

……

「……」

はやての目の前で、引き千切られた五体がずぶずぶと闇に沈んでいく。

今日は、楽しむような気分では無いらしい。

「……はぁ」

やれやれ、とでも言いたげなため息を残し、ずぶずぶと自らも闇の内に沈んでいく。

残されたのは、主を失った豪奢な部屋だけだった。

◆　◆　◆　◆

「……さん、姐さん」

ゆさゆさと身体を揺さぶられ、回想から引き戻された。

「あ、ああ、悪い。何だ？」

聞いていなかった。

「新しい先生が来る、って話」

「ああ、その話か……んで、何て人なんだ？」

美香は、チョコアイスをパクつきながら、

「石田先生、って言うんだって！」

「えー……」

実に聞き覚えのある名前を、告げた。

第四十話（後書き）

美香を今後どう活かすか、思案中です。
ご意見ご感想、お待ちしております。

第四十一話（前書き）

お待たせしました、、、ギリギリ一週間です。

第四十一話

主が出払い、無人となった八神家。
その玄関口に、雲のような闇が蠢く。
……蒼炎の不死鳥に飲み込まれた瞬間に、闇の書の自動防御プログラムによって発動された、脱出用の転送魔法。

――どさっ

そこから排出されたのは、真紅の頭髪が目を引く、小さな人影。
露出した細い手足の輪郭から、それが少女であると判別できる。
「……、あ、！」
投げ出された衝撃で、少女は僅かに呻く。戦闘中でさえ、一言も発することが無かったというのに。
その身を包むのは、簡素な衣服と……既に原型を留めない、闇色の鎧。
蒼炎の破壊力は、鎧の耐久力を遥かに上回っていたらしく、飲み込まれたほんの一瞬でほぼ全損していた。
そのボロボロになった鎧が蠢き、しぶとく再生を試みる。が、
――ゴゥッ……！！
蒼炎の残滓が、その闇を完全に吹き散らした。
それによって完全に焼失してしまったのか、もう再生する気配は無い。
「う……？」
倒れたままの少女の瞼が、僅かに開く。寝ぼけているように胡乱だった瞳は、次第に焦点を結び……確かな理性の輝きを宿した。
「アタシ、は……？」

頭の片隅に、ヘドロのようにこびりついた記憶を閲覧する。

――目の前で命乞いをする、敵兵の生き残り。

戦の勝敗は、既に決していた。

僅か5人と侮った数百の敵兵は、目の前の士官を残し、無残な肉片に姿を変えた。

――自分の傍らには、一冊の本を携えた人影。

彼が、命令を下したのだ。『殲滅せよ』、と。

殺す必要なんて無かった。ただ、リンカーコアを奪ってしまえば、用は無い筈だった。

一人殺してしまう度に、抵抗した。だが、その度に……

――どろどろと、粘りつくような闇が身体を覆う。

こうして、闇の契約の強制力で、意思を剥奪されてしまう。

――腕が、自分の意思とは関係無く、得物を振り上げ……

これは、誇りを賭けた戦ではなく、飢えを満たすための狩猟。

自分達は、誇りある騎士ではなく、蒐集の道具。

――それこそが、闇の書。

「そうだ、アタシは……！」

がばっと、一気に起き上がり、自分の身体を見渡す。

己を拘束する鎧は、見当たらない。

見慣れない、自分の肉体が直に空気に触れていた。
「……うそ」
あの忌々しい鎧が、無くなっている。
鎧……闇の呪縛から逃れることが出来るなど、思いもしていなかった。
「逃げなきゃ……」
とはいえ、それも……再びあの闇に沈められてしまったら意味が無い。精神は、再び闇に封印され……
「奪われるのは、もう嫌だ……！」
人格、記憶、尊厳、絆……そして、名前。
その全てを、闇に……ひいては、歴代の主に奪われてきた。
闇の呪縛が解け、それを見咎める主がいない今こそが、最大の脱出の好機なのだ。
「……」
一瞬、今代の主の顔がちらつく。
憎悪に染まり淀んだ瞳。血に愉悦を感じる歪んだ笑み。
それだけを見れば、歴代の主と共通。
だが、慣れない酒に酔い潰れるなど、人間味のある一面もある。
それでも、今はまだ、本来の人格を保っていようとも……
「あいつだって、いずれは……」
僅か9歳の女の子。哀れに思う気持ちも、無くは無い。
「アタシたちのことを……」
次に浮かんだのは、三人の『仲間』のことだった。
顔と名前は、忘れて久しい。
どのような経緯で、闇の書に組み込まれてしまったのかも忘れた。
ただ、『仲間である』という曖昧な確信だけが、単独での逃亡を僅

かに躊躇わせた。
「……くっ！！」
しかし、闇への恐怖がそれらを振り払った。
――ばんっ！
ドアを開け放ち、方角も考えず……素足のまま、夜の道へ飛び出す。

――ただ遠くへ。

夜の闇、物陰、暗がり……まるでそこから、今にも自分を捕らえようとする手が伸びてくる錯覚を覚えてしまう。

――ただ遠くへ。

この世界に関する最低限の知識は、召喚の際に与えられている。
逃げれば。逃げてしまえば。
「どうにでも、なる！」

――ただ、遠く。闇の魔手が届かぬ所まで。

◆　◆　◆　◆

俺は現在、アースラのラボルームで待機している。
先に収容されたなのは……あっちは、蒼炎の効果なのか、問題ないレベルにまで持ち直した。当面の間は絶対安静だが、命に別状は無い。
でも。
「……レイジングハート」

目の前、何かの容器に入る相棒に声を掛けるも、返事は無い。
ただ沈黙し、これ以上壊れないよう、神経質なまでに保護されている。
それもそうだ。何せ、全機能の８割が破損したんだ。
人格ＡＩと、活動記録……記憶が残っていたのが不思議なくらいの損傷なんだから。
放っておいたら、勝手に自壊していってしまう。
「……」
ひび割れて……今にも砕け散りそうな状態。
「……すまない」
全部、俺の力不足が招いたことだ。
己の技量を見誤って……このザマだ。
今回は運がよかっただけで……

「……くそっ！！」

――ガンッ！！

苛立ちのまま、壁を殴る。
頑丈な壁は、僅かに軋むだけに終わる。

「何が、ＡＡＡランクだ！」

いい気になっていた。
『稀有な才能』だの、『百年に一人の逸材』だの持て囃され……その実、それが満更でもなかった馬鹿な自分をぶん殴ってやりたい。

――ガンッ！！　ガンッ！！

二度、三度……己の身を痛めつけるためだけに、拳を叩きつける。

「何が、なのはを守る、だ！」

皮膚が裂け出血し、筋繊維が千切れ、骨に亀裂が入り……だが、すぐに治る。

あの後、あの蒼炎の力が無かったら……なのはは、殺されていた。

そして、不死身の俺だけが生き残るという醜態を晒していたに違いない。

――ガゴンッ！！

「肝心なときに何も出来ない俺が、どのツラ下げて……！！」

堅牢と思い込んでいた防御は、紙くずのように破られた。

必殺と思い込んでいたカウンター技は、かすりもしなかった。

――ゴキンッ！！　バキッ！！

腕が疲労で垂れ下がるまで、何度も、何度も拳を振るう。

己の無力を……己の愚かしさを、少しでも、この身に刻み込むために。

「くっそがあああああああああああああああああああああ！！」

――――――……ゴゴンッッ！！

思いっきり額をブチ当てた壁が、とうとう完全に陥没した。

「はぁ、はぁ……！」
どろっとした血が額から流れ、顔を濡らす。
その傷も、即座に塞がる。
「くそ……」
脳震盪でも起こしたのか、立っていられなくなった。

「……俺、こんなに弱かったんだな……」
自分への怒りが過ぎ去り……途方も無い無力感が、全身を苛む。
「……桃子達に、何て言えばいいんだよ……！」
ぐしゃっと髪を掴んでも、答えは……いや、もう出ているのかもしれない。

「もっと俺に、力があれば……！！」

そう。俺に、もっと力があれば。
チビ騎士の武器……あの弾丸の出力に負けない力があれば。
カウンターを弾き返されないだけの力があれば。
なのはを、レイジングハートを守れたんだ。
「くそォッ……！！」

何十分かしただろうか。
壁に背を預けて座り込んでいた俺の耳に、ドアのエアロックが解除される音が届く。
「入るぞ」
ドアが開き、クロノが入ってきた。
「……よう」
一ヶ月ぶりだが、今は旧交を温めているような気分じゃない。
「……気は済んだか？」
半眼で、陥没した壁を見やり言う。
「……」

答えられず、黙り込んでしまう。
八つ当たりで艦内を破壊して……情け無いったらありゃしない。
「まぁいい。それより、艦長室に行くぞ」
「……ああ」
のっそりと、鉛のように重い身体を引きずり起こす。
そして、クロノの後を追った。

艦長室には、リンディさんとエイミィが待っていた。
「秀人君、久しぶりね」
「おひさー」
にっこりと笑うリンディさんと、ひらひらと手を振るエイミィ。
「……久しぶり、です」
そして、挨拶もそこそこに着席する。
「まず、秀人君。あなたを襲った集団についてです」
部屋の照明が落とされ、モニターが表示される。
そこに、古ぼけた映像記録が映る。
漆黒の鎧を身に纏う、四人の騎士。そして、一冊の本。

「S級指定ロストロギア……『闇の書』」

S級……つまり、A級のジュエルシードよりも、ランクが上。
「この騎士達は？」
俺達を襲った奴も、確かに映っている。あんなのが、あと三人もいるのか……
「この四人は、闇の書を守護する戦闘プログラム」
「プログラム……？　にしては、随分と……」
どう見ても、機械の思考じゃなかった。
「プログラムとは言っても、0と1で作られているわけじゃないわ。古代ベルカ……過去に存在した実在の人物を再現して、使役している」

なるほど……思考は生身の人間ってことか。
「これまでも、何度か確認していたのだけれど……」
「僕たちが到着するころには、とっくに姿をくらましていた」
ぶすっと、忌々しそうに口にした。

「あいつら、なのはからリンカーコアを抜きやがったけど……そう簡単に取り出したり出来る物なのか？」
第一、奪ってどうするって言うんだ。
「それが、闇の書の最大の特徴だ。リンカーコアを蒐集し、６６６の頁を埋める。その頁には、蒐集した魔導師が使える魔法が記され、それを使用できるようになる。
……一切の制限無く、万全のパフォーマンスで」
「……反則じゃねえか」
普通、魔法の習得には割かし時間が必要だ。
習得とは、『発動できる』というだけじゃない。ミス無く発動でき、コントロールの失敗が無くなって、初めて習得した、と言える。
それを、ただリンカーコアを奪うだけで……？
つまり、その闇の書の主は、なのはが使える魔法をそっくり丸ごとコピーしやがったってことか。
「だからこそ、ロストロギアに指定されている」
「……でも、それってＳ級に指定される程か？」
それだけ聞くなら、ただの魔法の記録メディアじゃないか。蒐集しなければ、ただの本。蒐集したとしても、それを使えるのはたった一人。
Ａ級のジュエルシードのほうが、よっぽど危険だ。
「もちろん、続きがある。
闇の書の別名は、『呪いの魔導書』。主となった人物の人格を侵食し、破壊衝動・殺戮衝動で支配する」
どんな聖職者であろうとも、と付け加える。
「そして、６６６の頁を埋めた闇の書は……破壊衝動のままに暴走

し、蓄えた膨大な魔力を炸裂させ、周囲一体を消し飛ばし……主もろとも、消滅する」

最後に表示された映像は、瓦礫さえ残らなかった死の荒野。地図の縮尺が正しければ

……東京都と同規模の都市。それが、丸ごと。

それでいて、これは被害が少なくて済んだ方らしい。じゃあ、被害が多かったら……と考えたら、空恐ろしい。

……いや、待てよ？

「待て待て。消滅するって……それじゃあ、何で現存するんだよ」

それも、ロストロギア指定されるほどの昔から。

「そこが、この闇の書の厄介な所だ。たとえ、発動前に撃破に成功したとしても……数年の後に、また新たな主の元へ向かう」

「本来、この闇の書はキミが言うとおり、偉大な魔法を後世へ伝えるための記録媒体だった。

その知識を得るに相応しい者かどうかを書が自身で判断し、守護騎士達が簒奪から守り、破損したとしても、自らのバックアップ機能で再生する」

なるほど……聞くだけなら、優れた品物だ。

「だが、何代目かは知らないが、闇の書を改変してしまったんだ」

「書の自意識……管制プログラムを封印し、守護騎士を戦闘プログラムへ変換し……再生機能は、終わらない悪夢の火種にされてしまった」

その結果は、聞かなくても分かる。

「主を得ては暴走を繰り返し、倒しても倒しても蘇る……呪いの魔道書に」

ああ……確かにそりゃＳ級だわ。

使い減りしない上に、自らの意思で行動するジュエルシードみたいなものじゃないか。
ったく、どうしてこう常識外れの輩ばっかり出てくるんだよ
「……守護騎士の一角を退けるキミも、大概非常識だがな」
俺だって、ワケわかんねぇよ……
「つーか、あの弾丸みたいなのは何なんだ？
使った途端、いきなり出力がハネ上がって……」
「弾丸……？」
ああ……アースラの局員達は、まだ交戦したこと無かったんだっけか。
「実は……」
俺は、チビ騎士との戦いの様子を……蒼炎で撃退した部分まで、詳しく説明した。
そして、クロノ達が驚愕の表情を浮かべる。
「カートリッジ・システム……！！」

「……すまん、説明してくれ」
正直、勝手に驚かれても理解できない。
「基本的に、リンカーコアは一定の魔力しか運用できない」
最大魔力量が１００なら、上限は１００。
その中から、５や１０をやりくりするのが、普通の魔法戦闘だ。
「だがそこに、事前に容器に貯めておいた魔力を『解凍』することで、出力の増加を図るのがこのシステムの特徴だ」
「便利じゃないか」
素直にそう思う。事前に、予備タンクを外部に用意しておけるなら……イザというとき、決め手になるかもしれない。
「けれど、普及していない。なぜだか分かるか？」
出力の一時的なブースト……ニトロか。
一時的に爆発的な出力を得られるが……

「後遺症が残る……で、合ってるか？」
本来なら、ガソリンの爆発する温度しか想定していないエンジンの素材は、規定外の熱で変質し……二度と元に戻らない。
「使えるなら、僕が真っ先に使っている」
魔力量が少ないクロノならではの、切実な感想だった。
「普通の人間より、遥かに頑健な身体を持つ守護騎士だからこそ、使えるシステムだ。
……危険極まりない、物騒なシロモノだよ」

……へぇ。
つまり、普通より遥かに頑丈な肉体があれば、いいわけだな？

「リンディさん、頼みがある」

いきなり話を振られたリンディさんは、何も言わずに俺を見つめる。
「確か、前回のプレシアの件での報酬は、まだ保留してあった筈だ」
俺は、嘱託魔導師……つまりは傭兵みたいなものだ。
管理局の提示する報酬で、特定の仕事をこなす。
俺達は、半ばなし崩しでその立場になったから頓着していなかったが、あの件での俺達への報酬は、日本円にすれば一軒家がポンと一括で買えるくらいの金額になるらしい。
主犯の確保・説得に始まり、傀儡兵の無力化、動力炉の封印、ジュエルシードの封印と、自分で言うのもアレだが八面六臂の仕事ぶりだった。
現実感の無い金額を提示され、あの時は尻込みしていたが……今こそ、必要な時だ。

「俺の、専用デバイスを用意して欲しい。条件は……」

普通のデバイスじゃ駄目だ。俺の魔力の出力に耐えられて、尚且つ、魔力を高速運用できるだけの処理能力を持った……レイジングハート並みのデバイスが最低条件。そして……

「……おい、まさか」「ちょ、ちょっと……秀人君、本気？」

クロノとエイミィが、顔を引きつらせる。

信じられない、という思いと、コイツならやり兼ねない、という確信が、ごっちゃになったような表情だ。

「カートリッジシステムを、搭載できること」

第四十一話（後書き）

というわけで、とうとう秀人が専用デバイスを手にします。
名前も、機能も、しっかりと設定できたかなー、と思うので、お楽しみに。

ご意見ご感想、お待ちしております。

第四十二話（前書き）

今年のコミケ、開催されるかどうか心配ですね、、、
劇場版第二作の情報が入ればいいのですが。

第四十二話

瞼に差し込む、人工的な光。
眠る邪魔になるそれを鬱陶しく思いながら、つらつらと記憶を探る。

母さん達と食事をして……お茶が無くなったから、秀人さんと買いに行って……
「あー……買って無いや」
ポケットに入れたままの千円札を探るが、何故かポケットが無い。というより、着ていた服じゃなくなっている。
「……んー？」
何か、大事なことを忘れているような……
お茶を買いに行って、それで、それで……

「あああああっ！！」

思い出した！！
がばっと跳ね起きる。そして、
「あ、いたたた……！！」
胸の痛みで、ベッドにうずくまる。
「って、ここは……？」
きょろきょろと周囲を確認する。真っ白いベッドシーツに、仕切りのカーテン。雰囲気としては、学校の保健室に近い。いや、ここは……
「……アースラ？」
「おや、目が覚めたのかな？」
カーテンが開き、見覚えのある顔が覗いた。
「あ……お久しぶりです、オペル医務官」

プレシア事件でも世話になった、オペル医務官だった。やっぱり、アースラに運び込まれたらしい。

「調子はどうだい？」

ゆっくりなら、身体を動かしても痛みは走らない。ただ、胸の奥にぽっかりと穴が空いたような喪失感があって……試しに、ダメ元で魔力を探ってみるかな。

リンカーコア、起動……っ！？

「うッ……！！」

再び、刃物で切り刻むような痛みが全身に広がった。

「……最低、最悪です」

……やっぱり、ダメだった。

「その痛みの原因は、わかっているね？

リンカーコアの強引な摘出……それもあるが、」

「私自身の砲撃魔法、ですよね」

……キレていたとはいえ、さすがにやり過ぎた。

「あの……秀人さんと、レイジングハートは？」

倒れてしまってからの記憶が無い。こうしてアースラに運び込まれているということは、敵を撃退したんだろうけど……嫌な予感がする。

念話も使えないし、不便なものだ。

「……それに関しては、後にクロノ執務官から説明がある。それまで、安静にしていなさい」

「はい……」

隙を見て、こっそり探しに行こうっと。

「ああ、そうそう……ちょっと手を出してくれるかな？」

「？　……はい」

言われるままに、手を出す。

――がちゃんっ

「……はい？」

ええと……何コレ、腕輪？

「ちょっとした計測器みたいなものだから、心配しなくていいよ」
何故か申し訳なさそうに苦笑し、ファイルを纏めて席を立った。

時計が一分経ち、少しの間なら、戻ってこないと確認する。スリッパをつっかけ、ベッドを降りる。
秀人さんはどこかなー……
「……ん、あれ？」
自動ドアが開かない。小癪にも、施錠されたらしい。
「あーあ、困った困った……」
なーんてね。ドア横に、非常用レバーが隠してあるってちゃんと知ってるんだから。
がきょんっ、とレバーを倒す。これでエアロックが解除されて、手動で開閉できるようになる。
「楽勝楽勝―」
と、ドアの敷居を跨いだ途端……
――――ビーッ！！　ビーッ！！
「うわっ！？」
けたたましいブザーが腕輪から鳴った。
『警告します。要監視者には、そこから先への出入りが許可されていません』
まさか、この腕輪って……！
『警告します。要監視者のあなたには……』
監視用の、手枷だ！
隣の部屋に詰めていた大勢の局員がわらわらと……！

「確保ーーーーーーー！！」「全力で安静にさせろおおおおおお！！」「また嘱託がやらかしたぞ！　俺達の余暇が……！！」「この爆弾娘！　大人しく寝てろ！」「明日の定時上がりが懸かってるんだ！　捕まえ……じゃなくて、保護しろおおおおお！！」

思考ダダ漏れで、ゾンビのように群がってくる。
っていうか、誰が爆弾娘よ！？
「残業代出るならいいじゃない！」
――ビキッ……
「あ、あれ……？」
地雷を踏んだっぽい感覚が……

「「「「「「「「……その金を使う時間が欲しいんだーーーーーーーー！！」」」」」」」」

ぴったりハモった！
「来るなー！」
もう何のために逃げているのかも、すっかり忘れて逃亡する。
が、スリッパ履き＋痛みでダッシュが効かず、もたついているうちに追いつかれてしまった。
――ぎゅるるるるっ！
「むー！　むー！」
あっという間に簀巻きにされ、打ち上げられた初鰹のように担ぎ上げられる。
「丁重かつ、厳重に扱え！　隙を見せたら噛み付いてくるぞ！」
わたしは動物じゃないー！
「むももももー！！」
その抗議さえ封じられ、わっせわっせと病室に強制送還。

っていうか、『定時に上がれるぞ』なんてエサをぶら下げて尻をひっぱたくような真似をするのは、多分……！
――げしっ！
「……ぶはっ！！」
身体を起こした勢いのまま、私をバインドする一人に蹴りを見舞う。しゅるっ、と、口元を縛るバインドが消えて、言葉が自由にな

った。
「ひ、一人やられたぞ！！」「だから、油断するなと……！」
――すううぅっ……！
思いっきり胸を反らし……肺の隅から隅まで酸素を吸入し……！
「クロノオオオオオオォォォォ！！　ハゲろおおおおおおおおおおお！！」
アースラ全体に響き渡るような大声で、クロノに呪いを掛けてやった。
「なんということを……！」「ただでさえ、ストレスを溜め込みやすいクロノ執務官に向かって……」「むごい……」
「ハゲろ！　十代後半で生え際の後退に悩め！　２０代前半でバーコード状にハゲろ！　三十代で落ち武者にムグググググ！」
再び……というか、より厳重に口元を二重に拘束された。
「「「「「「「「「」」」」」」」」」
ぼふんっ、と医務室のベッドに投げ込まれる。
ばしゅん、と、今度こそ完全に施錠されてしまった。
「むー……」
さっきは気付かなかったが、部屋の隅に置かれた籠の中には、私の服が畳まれた状態で入っていた。洋服の上に、私の携帯電話が鎮座している。
何気なく取り、電源を入れ……
――ぶるるるるっ！
「……うわぁ」
電源を入れた途端、大量のメールが着信し、留守番電話が数十件

表示された。
いちいち全部見るのは時間が掛かりそうだから……電話帳から、高町家の電話番号を呼び出す。
――プルがちゃっ
早っ。
『もしもし、なのは!?』
「あー……うん、そーです」
『心配したんだよ!!』
姉さん……すっごい涙声だ。
明日は月曜日で、普通に翠屋の営業日なのに、寝ずに待っていてくれたんだ。
罪悪感がひしひしと……
「ごめん……いろいろ、トラブルがあって……」
なおさら、本当のことを言うわけには行かない。
「でも、大丈夫。秀人さんも無事だから」
多分、ユーノくんも今頃アースラに召集されている頃じゃないかな。
「ごめんね。せっかくの日に……そういうわけだから、今日はもうそっちには戻れそうに無いや」
『そっか……でも、無事ならそれでいいんだ』
ほーっ、と、安堵の息をつく姉さん。

「うん……うん……それじゃ、また」
その後、母さんと兄さんにかわってもらい、同じような説明をして、電話を切った。
電話を切った時点で、午前二時。こりゃ、明日は学校行けないなぁ……
「あーあ……」
携帯電話を籠に放り、ベッドに倒れこむ。
数時間寝ていたとはいえ、深夜にまで起きているほど、不規則な

生活は送っていない。
シーツを被り、目を閉じる。
私の身体はまだ休息を欲していたらしく、あっという間に眠りに落ちていった。

◆　◆　◆　◆

小部屋を借りて、ユーノと向かい合う。

「秀人、それ……本気？」

アースラに到着したばかりのユーノは、そりゃあもう凄かった。
結界に気付かずにいたことをかなり悔やんでいて……えらい勢いで号泣して。
あんな巧妙な結界、普通は気付けないし……第一、あれは自分で何とかできなかった俺の責任だと言っても、いやいや、僕の責任だ……とユーノも譲らなくて、結局クロノが場を収めてくれるまで、そんな押し問答が続けられていた。
そして落ち着いた今、俺は、自分のデバイスを持つことを明かしていた。
「もちろん、本気だ」
なぜ真っ先にユーノに教えるのかと言うと……

「レイジングハートとの契約の解除、どうすればいい？」

俺のアカウントの削除のためだ。
「レイジングハートは、そんなこと望まないと思うよ……？　それに、まだまだ容量には余裕があるんだし……何も、契約を解除しなくても」
確かに、レイジングハートの容量は大きい。二機分の思考ＡＩを入

れても、ありったけの術式を入れても、まだ余るくらいに。でも……
「処理速度は、一人のマスターしか想定していない」

そもそも、以前フェイトに指摘されたが……効率が悪いんだ。
「この前、気付いたんだ。レイジングハートのレスポンスが、少しずつ……でも、確実に悪化してる」
「……」
ユーノが、押し黙る。俺の言わんとしていることに、思い至ったようだ。

「限界なんだよ。デバイスの共有は、もう……」

それが、少しの誤差でも。その誤差が、生死を分けることになる。実戦ではよくあることだ。俺なら別にいい。でも、もしなのはだったら……そんなこと、それこそ、レイジングハートは望まない筈だ。そもそも、共有するっていうのは俺達が未熟で、半人前だったから可能だった事だ。
だけど、既になのはは一人前の魔導師と言っても差し支えない。するだけ無駄……それどころか、害にしかならない。
それでもこの一ヶ月、俺のアカウントを残しておいたのは、襲撃が無かったからこその平和ボケと……レイジングハートの我が侭だ。
「……契約の解除には、デバイス側からの認証が絶対に必要なんだ。ストレージなら、そんなに難しくは無い。でも、レイジングハートはインテリジェントデバイスだから」
……どっちにせよ、レイジングハートとは話をつけないとな。
「……明日の朝、なのはも連れて行く」
「そうだね。なのはも立ち会ったほうがいいだろうし」
小部屋を出て、仮眠室に向かう。
「はぁ……」
その道中で、ため息が出てしまう。

恋人に別れを告げる前って、こんな気分なのかねぇ……彼女なんかいたこと無いから、わかんねーけど。

「怒るだろうなぁ……念話の周波数をチューニングして、ハウリング攻撃されるかも……いや、マルチタスクを強引に起動させられて、頭痛地獄か……？」

どう転んでも、いい展開にはならないだろう。

でもまぁ、別れ際のビンタくらいは、覚悟しておこう。

◆　◆　◆　◆

『そう……闇の書が現れたの……』

クロノは、執務官としての権限を利用し、裁判を控えて拘留中のプレシアと面会を行っていた。

モニターに映るプレシアは、すっかり憑き物が落ち、柔和な雰囲気を漂わせていた。

のど元に通された、呼吸器系へ直結するチューブは痛々しいが、この一ヶ月の集中治療のおかげで、即座に生命に関わるような状態は脱した。

「拘留中で、刑も確定していないところを済まない。だが、どうしても貴女の協力が必要不可欠なんだ」

とうとう確認された、魔力変換資質『結合』を持つ魔導師、吾妻秀人。

その、特異すぎる魔力に対応した専用デバイス兼、初のミッドチルダ式カートリッジシステム搭載試験機。

プレシア程の科学者の力を、使わない手は無かった。

もちろん、プレシアには拒否権があるのだが、そんな選択肢は初めから除外されている。

『構わないどころか、願ったり叶ったりよ。

初めての技術提供が、秀人のデバイス作成だなんて……それも、兼ねてから提唱されていた、ミッドチルダ式カートリッジシステム。

元科学者として、これ以上になく魅力的な研究だわ』

プレシアの、ひいてはテスタロッサ一家にとっての、大恩人。その恩に、報いないことなどありえなかった。

『機材と、秀人のバイタルデータを用意してもらえるかしら。すぐにでも始めさせてもらうわ』

「早速、手配しよう」

手元のキーを操作し、機材とデータの手配をする。

これで、準備は整った。

「こちらでも、メカニックマイスターが研究を始めている。そのデータも、纏まり次第そちらに送る」

『ええ。……ねぇ、クロノ執務官？』

「何か、足りないものでも？」

『いえ、その……』

先ほどまでのキレのいい態度から一変、妙に腰が引けている、弱気な態度を見せる。

『……フェイトは、元気かしら？』

別の場所で裁判を待つ、娘の心配だった。負い目がある反面、やはり気になるらしい。

クロノは、キーを叩く手を止める。

「ああ。それはもう……」

遠い目をして、この一ヶ月の苦労を思い出す。

思い出す。

思い出す……

「手に余るくらいだ」

その並々ならぬ苦労を感じ取ったのか、プレシアは項垂れた。

『ごめんなさいね……どんな様子？』

「最近は、幾分大人しくなっているんだが……」

今現在のフェイトの様子を思い出し……途端に眉根を寄せる。

「……アレは、いい傾向なのだろうか」

『……本当に、手間を掛けて申し訳ないわ』

と、そこで面会時間終了のチャイムが鳴った。
「……では、頼んだぞ。プレシア・テスタロッサ」
『ええ、クロノ執務官』
ぷつんっ、とモニターが消える。
「秀人のデバイス、か……」
S2Uを懐から取り出し、物思いに耽る。
「秀人の魔力量からすれば、当然のことなんだろうな」
ぐっと、知らず知らずのうちに、歯を食いしばっていた。
あれだけの魔力量と資質を持つのなら、一般に流通しているモデルでは、到底スペックが追いつかない。専用機を得るというのは、至極当然の流れだ。
専用機を得て、その魔力を使いこなせるようになれば……秀人の力は、飛躍的に上昇するだろう。
「……僕は、守護騎士に勝てるだろうか」
それに比べて、自分は……
――――キンッ
S2Uを起動。
「僕は……」
一応は、これも自分の専用機だ。自分の少ない魔力量を十二分に活用し、迅速かつ正確な運用を可能にする……自分にとって、長年を共にしてきた相棒。
だが、それも……敵の守護騎士達の圧倒的な白兵戦能力、カートリッジシステムによる爆発力……それらを相手に、どこまでやれるのか……
「僕に、もっと魔力があればな……」
父に関しては、データが不十分なために何とも判断し難いが……母は。
衰えぬ膨大な魔力と、超大規模の魔法の展開を可能にする、正真正銘の怪物だ。

だが、自分にはその一割程度の魔力しか無い。
二人の師匠に鍛え上げられ、最大魔力量に依存しない戦い方を習得したものの……

「秀人。僕は……いつまで、君の隣で戦える……？」

それは、クロノが執務官になってから初めて漏らす、弱音であった。

◆　◆　◆　◆

翌朝、私のいる医務室に、秀人さん、ユーノくん、クロノ、エイミィがやってきた。
「悪いな、朝っぱらから大勢で」
「いいよ。丁度、起きたところだし」
ベッドからおりて、スリッパを突っかける。
「……あれ？　レイジングハートは、一緒じゃないの？」
てっきり、秀人さんが持ってるんだと思ってたけど……
「……」
途端、秀人さんが険しい表情になった。
「……まずは、来てくれ」
「？　……うん」
ユーノくんも、何だか所在なく落ち着かない。
「……じゃ、行こうか」
「うん」
秀人さんと手を繋ぎ、廊下を歩き出す。
「……？」
でも、なんだろう。いつもの秀人さんに比べて、何か、違和感がある。

「……ここだ」
連れて行かれた先は、ラボルーム。プレシア事件のときにも、レイジングハートのメンテナンスをしてもらったりした所だ。
ドアを開けて、中に入る。
「レイジングハート」
入ってすぐ、レイジングハートがいた。
『……』
「どうしたの？」
が、気配が感じられない。
「厳しい戦闘の所為で破損して……休眠させてるんだ。今、起こしてもらうから」
秀人さんが目配せし、クロノがレイジングハートに繋がった機械を操作する。
そして……

『……ここは、アースラ……ですか』

途切れ途切れ、時々ノイズ交じりの声で、レイジングハートが話し始めた。
『……！　秀人、秀人!?』
って、うわぁ!?　ど、どうしたの!?
「れ、レイジングハート、落ち着いて……！」
びかびかと点滅し、異様なまでに興奮したレイジングハートを、なんとか落ち着かせる。
「私も、秀人さんも、ちゃんと無事だよ……だから、落ち着いて」
『……申し訳ありませんでした、マスター』
驚いた……こんなに慌てたのなんて、初めて見たかも……
「レイジングハート……」
秀人さんが、相変わらず険しい表情のまま話し始める。
『秀人……よかった。無事だったのですね』

「ねぇ、レイジングハート……あの後、どうなったの？」
『……それ、は』
もごもごと、言いづらそうに言葉を濁す。
「いいよ、話しても」
だが、秀人さんの了承を得て、あの後の状況を説明してくれた。
――敵の大将格が現れたこと。
――秀人さんの必殺技が、通じなかったこと。
――レイジングハートが、全損寸前まで破壊されたこと。
――なんとか、命からがら危機を脱したこと。
「……そんな」
……私が自爆した後、秀人さんは相当に危ない状態だったらしい。
「私が、あんな無茶をしたから……」
「違う。俺の力不足だ」
秀人さんが表情を変えないで、ばっさりと言う。
そうか……感じていた違和感の正体が、ようやくわかった。
秀人さん、今朝から一度も笑っていないんだ。
「レイジングハート、大事な話がある」
秀人さんが、改めて話を切り出す。
その言葉の響きからして、かなり重要な話。
『……今後の、敵への対策ですね』
レイジングハートは、話をはぐらかそうとしている。私には分からないけど……何かを察したのだろうか。
「違う」
『では、複合技のパターン変更でしょうか？』

「違う。話を、聞いてくれ」
『あ……ああ、一番大事なことを忘れていました。技全体の、魔力運用の最適化ですね。そうすれば、今度は敵に有効打を与えることが出来る筈です』
レイジングハートが、のべつく間無しにしゃべり続ける。その言葉の先を、言わせまいと。聞くまいとして……でも、秀人さんは、それを無視して、言った。
「契約を、解消しよう」
『……』
一瞬のうちに、沈黙する。
「……」
秀人さんは、もう何も言わない。
ユーノくんも、辛そうに俯いている。
『……嫌です』
「……その我侭で、なのはの身を危険に晒すことになっても……か？」
薄々、私も感じていた。
……術式の展開に、意思とのタイムラグが発生している。特に、私と秀人さんが、別々の術式を同時発動した際、それが顕著になる。
私でも気付くことに、レイジングハートが気付かなかった筈が無い。
『……嫌です』
レイジングハートが、そう繰り返す。
「……我侭を、言うな」
秀人さんの言葉にも。
『……嫌です』
ユーノくんの言葉にも。
「レイ、」

『絶対に、嫌です！！』

びりびりと、部屋中に反響するような大声を出した。

『私は、そんなに頼りになりませんか！？』

「違う、そうじゃない」

『私にはヒデトの資質を見極め、伸ばしていく義務があり、それが私たちの契約の筈です！』

「……俺の資質は判明した。あとは、俺一人でも伸ばしていける」

『魔法の発動補助は、どうするのですか！？　人一倍、術式の制御が下手糞な癖に！！　カウンター技だって、私がいなければ自殺行為にしかならないのですよ！？』

暴言に近い言葉で、必死に言いすがる。でも、秀人さんは淡々と、それに返す。

「……俺の専用デバイスが、近いうちに製造される。術式の運用は、ソイツに任せるつもりだ」

『……！！』

……確かに、それは必要かもしれないけど……

「秀人さん……本当に、マスターやめちゃうの？」

レイジングハートは、私達の出会いの切っ掛けで……そのマスターであるということは、私達の大事な繋がりだった筈なのに……

「秀人。もう一度聞かせて。

……本当に、いいの？」

ユーノくんの念押しに、秀人さんは僅かに黙り……言った。

「……ああ。なのはを、危険に晒すわけないはいかない」

一瞬の油断が、命取り。それは、よく分かるけど……

「俺の分のアカウントを削除すれば、タイムラグは無くなる。何の問題も無い」

『問題ない、ですって……！？』

その一言に、もう一度レイジングハートが猛る。
より激しく、光が明滅し……

――翼を、形作った。

「……な」
クロノの驚愕をよそに、レイジングハートが自立的に飛翔し始めた。
ひゅん、ひゅん、と……助走をつけるように旋回し……

『この……浮気者！！』

――カコーン！

「ぐおっ……！！」
秀人さんの額に、クリティカルヒット。
「秀人……」
「うわぁ……」
超痛そう……
『馬鹿者！　大馬鹿者！』
二発、三発……秀人さんの頭に、体当たりを敢行する。
「い、いてっ……！！　いててっ！！」
気が済むまで秀人さんに暴行を加え……ぽすっ、と、秀人さんの頭に着地した。
『……何故、わかってくれないのですか』
光の羽根が『へにゃっ』としなり、人間臭く感情を表している。
『……認めましょう。確かに、もう共有は限界でした。マスターの力を発揮するには、私がマスターの専用機になるしか、ありませんでした』
そっか、やっぱり……レイジングハートも、気付いてたんだ。

『ですが……理屈では、割り切れないのです。私は、マスターのデバイスであるのと同時に、あなたのデバイスでも、ありたかったのです』

「レイジングハート……」

相棒の、可愛い我侭。

『……了解、しました。秀人のアカウントを、削除します……』

なんとかしてあげることは、できないだろうか。

「……まぁ、待て」

レイジングハートの奇想天外な行動に呑まれっぱなしだったクロノが、それを止める。

「秀人、君は肝心なことを説明していない」

え……？

「説明する前に、レイジングハートが……」

「言い訳をするな」

「理不尽だ……」

相変わらずの二人だった。

「エイミィ、説明を」

「はいはーい」

軽い調子で返事をするエイミィ。

最初から、エイミィが説明していれば良かったのに……と思ったけど、秀人さんの口から言わなければ、レイジングハートは絶対に納得なんかしなかっただろうし、仕方ないのかな。

「秀人君のデバイスは、インテリジェントデバイスになる予定なの」

ぴこん、と羽根が反応する。

やっぱり、辛いんだろうな。自分以外の誰かが、秀人さんに寄り添うのが。

「でも、今から思考ＡＩを1から構築していたら、時間がかかりすぎる」

……確かに、魔法の運用システム構築なんて、気が遠くなるような作業が必要だろう。
「だから、レイジングハートのデータを流用しようと思うんだ」
「え……それって、」
私に向かい、ぱちりとウインクを決めるエイミィ。
「言わば、レイジングハートの姉妹機になるわけだ」

『姉妹機……ですか』
「定期的にレイジングハートとデータのリンクを行い、システムの調整やデバッグを行う」
お、おおお……これって、かなりの名案なのでは。
「私と秀人さんは気兼ね無く魔法を使えるようになって、レイジングハートは、姉妹機を通じて秀人さんとの繋がりを保てる……ってこと？」
「イグザクトリィ！！」
びしっ！　とサムズアップ。
「すごいよエイミィ！　見直した！」
「えー？　えへへ、そう？」
「うん！　クロノの補佐官がこんな軽い人なのは何でだろうって、いつも不思議だったんだけど、これで納得だよ！」
「……持ち上げてから、しっかり落とすんだねー」
……あれ？　何で沈んでるの？　褒めてあげたのに。
「なのは……言葉というのは、時として思わぬ威力を発揮するから、気をつけよう？」
「？　……うん、わかった」
何故かユーノくんに窘められてしまった。

「ね、レイジングハート。そうしようよ」
『……条件が、一つあります』

「何だ？　言ってみ」
『私の姉妹機の命名は、私に任せてください』
自分の写し身であり、大事な人を守る盾。その名前を、自分で付けたいのだと言う。
「デバイスの完成には、まだ時間が掛かる。何せ、ようやく設計が始まったばかりだからな」
「……いつごろ？」
「高町なのは。君のリンカーコアが、再生し終える頃になるだろう。……オペル医務官の見立てでは、あと四ヶ月といったところだな。それまで、じっくりと考えておくといい」
四ヶ月、かぁ……
「その間にまた襲撃があったら、どうしよう？」
正直、秀人さん一人じゃあ、大変だ。
「闇の書の守護騎士達が蒐集を行えるのは、一人につき一回。一度蒐集された魔導師の元に現れたという記述は無いから、安心していい」
なるほど。
「でも……アースラのみんなが戦っているときに……」
じろり、と、クロノが私を睨む。
「では、魔力を失った君に、何が出来る？」
「う……」
キツい一言が、突き刺さる。
私には、戦う以外に脳が無い。デスクワークもできなければ、機材を活用することもできない。
大人しくしているのが、一番いい。
「なぁ、俺は？」
秀人さんが控えめに挙手し、聞く。
「君のリンカーコアは、通常の魔導師のものと比べて特異だ。高町なのはを襲ったのと同じやり方では、摘出は不可能だろう」
それじゃあ、ひとまずは襲撃される心配は無いってこと？

「闇の書の主が、それを可能にするだけの力を手に入れるのが先か、秀人のデバイスが完成するのが先か……どちらにせよ、通常通りの生活を送っていてくれればいい」

四ヶ月……猶予があるような、無いような。

「……護衛も付けるから、心配はいらない」

……何故か、微妙な顔をしながらそう言った。

……まぁ、気にしなくていいや。

「かっこいい名前、付けてあげようね」

『当然です。私の、妹になるのですから』

……秀人さんのデバイス完成まで、あと四ヶ月。

これが、後に『闇の書事件』と呼ばれる物語の、プロローグだった。

第四十二話（後書き）

ようやく、二期の話が動き始めます。
実は、書いてあったプロットの大部分を没にしたので、手探り状態での発進です。
どうぞ、最後までお付き合いください。

ご意見ご感想、お待ちしております。

第四十三話（前書き）

遅れましたすみませんｏｒｔ

第四十三話

「からっぽのほし～、じだいをゼロからはじめよう～♪」

ここは、とある一室。

広さは八畳ほど。窓は無く、扉には、厳重な対衝撃・対熱・対魔法処理が施されている。

俗に言う拘置所なのだが……この一室の住人は、そんな状況などお構い無しに、うきうきと調子っ外れな歌などを歌っていた。

くるくると、無駄に洗練された無駄の無い無駄なターンをしながら、部屋の一角へ移動していく。

「でんせつは～、ぬりかえる～もの～♪」

清楚なワンピースを可憐に翻しながら、調子っ外れの歌は続く。

「いま～、あくせるを～、ときはなて～♪」

ニコニコと、子供の無邪気さを百倍濃縮したような笑顔を浮かべながら。

「くうが～あつくよーみがーえれー、くうが～、ほこりのえなじ～♪」

……よほど、気に入ったらしい。

「くうが～、つよくあーるたーめにー♪」

ぱこん、とその箱を開ける。

目に見える面には、奇妙な覆面を被った……俗に、『ヒーロー』と呼ばれる格好のものが、印刷されていた。

八畳間に置かれた唯一の娯楽……テレビと、ＤＶＤデッキ。

その脇には、大量のＤＶＤが積み上げられていた。

アニメであったり、特撮であったり、タイトルはとにかく多いが、唯一の共通点は……その全てが、男児向けである、ということだった。

「ちょうへんしん、かめんらいだーくうが～♪」

歌詞を端折りつつ、トレイにディスクをそっと置き、読み込みを開始させた。

しゅいいいいいいん、かりかりかり……と、使い込まれたＤＶＤプレイヤーがディスクを読み込み、タイトルを映し出す。

「……」

わくわくしながら、本編再生のボタンを押した。

物語も佳境。

番組もそろそろ終盤に向けてのスパートに入っており、強力な敵との、バイクチェイスが映し出されていた。

「おおおぉぉ……！」

目は星を浮かべたようにきらきらと輝き、両手は興奮でぎゅっと握り締められている。

甲高いエキゾーストを奏でながら、追い抜き、追い越し……時には前輪を浮かせるアクロバティックなアクションに、少女はすっかりと心奪われていた。

「ふあぁ……かっこいい……」

敵を倒し、さぁ次回予告を見ようとしていたところに、無粋な雑音が割り込んだ。

――ビーッ……

来客を報せるブザーだ。

「……誰だよ、まったくもう」

仕方なく、一時停止をして応対する。

「はーい」

『僕だ。入るぞ』

がしゅん、と重苦しい音を立て、ドアが開く。
「なーんだ、クロノか」
「いきなり、ご挨拶だな……フェイト」
そして、どちらからでも無く、透明な衝立を挟んで椅子に座った。
「アルフと、おかーさんはどうしてる？」
これは、クロノが来る度に聞いている。
「アルフの腹部の傷は、完全に治癒した。最近は、走り回りたくて落ち着かない様子だな。プレシアの呼吸器系の疾患も、何とか治療が間に合ったよ」
そもそも、あそこまで重篤になるまで症状を放置していたことが不自然なことなのだ。
「……会える？」
「ああ、アルフに関して言えば、すぐに会えるだろう」
上目遣いで聞くフェイトに、クロノは丁寧に受け答えする。
ある程度付き合ってみればわかることなのだが、クロノは少し言葉が厳しく無愛想ではあるが、冷血というわけではない。当たり前の気遣いくらいなら、出来る少年だった。
「事情聴取に協力的で、素行にも問題は見られない。君との面会も、じきに設けられるだろう」
「やった！」
ぱっと嬉しそうに笑い……
「……おかーさんは？」
心配そうに、そう聞いた。

途端、クロノの表情が濁る。
「……プレシアに関しては、正直難しい。アルフと違って、大規模事件の主犯だからな。技術協力による司法取引を続ければ、いずれは……だが、まだ断言は出来ない」
主犯であり、次元犯罪者であるプレシアとの接触は、執務官以上の階級にある者にしか認められていない。

それ以外の者には、音声通信どころか、アナログな手紙での交流、執務官を通じての伝言さえ禁じられている。次元犯罪者とは、そこまでしなければならないほどの重罪人なのだ。

「……そっか」

目に見えて落ち込むフェイト。

「だが、いい報せもある」

「え……？」

「実は、……」

クロノが説明を続けるにつれ、きょとんとしていたフェイトの表情が、徐々に輝いていく。

「マジで！？　いいの！？」

「ああ」

クロノは、珍しく笑みを浮かべ、それをフェイトに向けた。

「その許可申請も、すでに提出してある。まぁ、問題なく受理されるだろう」

「ひゃっほう！！」

ぐっとガッツポーズを取った。

「……まぁ、とにかく楽しみにして……」

――――ビーッ！！

と、部屋のブザーが、先ほどより強めに鳴った。

『クロノ執務官、緊急事態です。すぐにアースラへ帰還するよう、リンディ・ハラオウン提督より連絡がありました』

「了解だ」

思考を切り替え、席を立つ。

「すまない、フェイト。少し早めに切り上げる」

◆　◆　◆　◆

俺は現在、時空管理局、その地球支部のような場所に連れて来ら

れていた。
　アースラの連中と同じような制服を着た局員達からじろじろと注目を浴びつつ、エイミィに教えられた通りのルートを歩く。
　そのエイミィ本人はと言うと、今日俺が対面する、マリエルとかいう人物を呼びに先に行ってしまった。
「うわー……超気まずいんだけど……」
　さすがに、Tシャツにジーパンという格好は浮きすぎているけど……それだけでは無いらしい。ひそひそと、悪意は感じないものの噂話をしているのが、何組かいた。
「……」
　何の気無しに、そちらを見る。すると……
「……ひっ！」
　明らかに怯えて、そそくさと足早に立ち去っていってしまう。
　うーん……何でだろう。俺、そんなに目つきも態度も悪くないと思うんだけど……
「おお、ここだな」
　そうこうしている間に、到着した。扉の前に設置されたブザーを押す。
　ドアが開き、先に来ていたらしいエイミィが顔を出した。
「あ、秀人君。ごめんね、一人で来させて」
「めっちゃ注目された……」
「あー……」
『やっぱりか』とでも言いたげな表情で苦笑する。何か理由でもあるのだろうか。
「後で説明するよ。さ、入って」
　部屋の中は、思っていたよりも整頓されていた。用途がわからない機材がいくつかあるものの、椅子やテーブルなど、普通に生活している痕跡が見受けられる。
「んで、どういう人なんだ？　マリエルさんって」

メカニックマイスター……とにかくすごい技術者、ということだけは聞いているものの、その性格や嗜好は全く聞いていない。
まぁ、部屋を見た感じ、そんなヤバい人じゃなさそうだけど。
「……説明は、難しいかな？　とにかく、会えば分かるよ。……嫌でも」
「？　そうか」
「それじゃ、行こうか」
そして、おもむろに席を立った。
「ここじゃないのか？」
てっきり、ここがその人の部屋だとばっかり……
「ここは、ただの休憩室だよ。マリエルが、二人以上人間が入れるくらいに部屋を片付けるから、って」
……うん、めちゃ不安だ。

歩くこと数分。どんどん人通りが無くなり、薄暗く、かび臭くなっていく。
「到着ーー」
……ここ？
この、どっからどう見ても物置というか、ゴミ屋敷的な場所が？
「マリー、入るよ」
その扉を、エイミィは躊躇無く開け放つ。

「……」
まず見えたのは、薄汚れた白衣。薬品でも溢したのだろうか、変な色に変色し、ところどころに穴が空いている。
それが、もぞもぞと動いている。
「……」
もそもそと、聞き取れないほどの小さな声で何かをつぶやきながら、手元のメモに何かを書き込んだり、かちゃかちゃと黄ばんだキーボードを打鍵していたり……あからさまに、マッドサイエンティ

ストだった。
「すまんエイミィ。用事を思い出した」
くるっとUターン。
さーて、帰って飯食って寝るかー。
「待って待ってちょっと待って！」
エイミィが、俺のベルトを掴んで必死に引き止める。
「マリー！　マリーってば！」
そして、残った左手で白衣の背中をべしべし叩いた。
「……んー？　ああ、エイミィか……」
綺麗な中性的な声を出しつつ、のっそりと白衣の背中が振り返った。
「……ソレが、例の坊や？」
厚ぼったく、顔の大部分を隠すような眼鏡……その奥で、瞳が怪しく輝いている。
「うん、そうそう！　……ほら秀人君、挨拶挨拶！」
「……いらないよ。調査済みだから」
積み上げられていた山から、一冊のファイルを器用に抜き出した。
「……読もうか？」
調査済み……つまり、俺の過去のこともしっかり記入されているらしい。
「……勘弁してくれ」
「そう」
ぽいっ……と、片隅に置かれていた箱にファイルを丸ごと投げ捨てる。
――ジュウッ……！
僅かに焦げ臭い匂いをさせて、ファイルは完全に焼失した。シュレッダーみたいなものだったらしい。
「いいのか？」
「覚えたから」
ぷいっと、また背中を向けてしまう。

「……専用デバイスの開発。バイタルデータが必要だからちょっと来い」
横柄に自分の隣を指差す。
「ご、ごめんね、秀人君……変な子だけど、根はいい子だし、腕も確かだから……」
「……らしいな」
じゃなかったら、わざわざ俺のプロフィールを読み上げるかどうかなんて確認しないだろうし、捨てもしないはずだ。
マリエルの隣に行く。
「……腕出せ」
言われるままに、腕を差し出す。
「ん」
意外と柔らかな手で、俺の腕を引き寄せ……

ぶすっ。

注射器を、思いっきりブッ刺した。
「痛ってえええええええ！！」
せめて一声掛けろ！
「……よし」
針を刺した箇所が再生する前に、注射器を引き抜いた。
「あー……痛かった」
「……次、これ握って」
お構い無しに、変な筒を渡される。
「はいはい……」

その後も、健康診断っぽい検査やら、意味不明な検査をいくつか繰り返し……
「……おしまい」
どこか満足げなマリエルの声と共に、終わった。

「……デザインができたら呼ぶから、また来い」
この短い時間で、分かったようなことを言うのも変かもしれないけど……、気付いた。
マリエルは、クロノとほぼ同種の人間だ。
言葉は横柄。態度は無愛想。でも、根はいい奴。
道理で、エイミィと仲がいいわけだ。
「あ……忘れてた」
がたん、とマリエルが慌てた様子で立ち上がり、ぱたぱたと部屋の隅にあったシャッターへと駆けていく。
途中、くるっと立ち上がり……
「……何してるの？　来なよ」
……クロノと違うところは、『相手は必ず自分の話を理解している』と思い込んでしまう癖がることだな、うん。

がらがら……と、シャッターを開ける。
「え……？」
そして、あるはずの無いソレが、俺を出迎えた。
「……お前、プレシアの庭園に捨てていっただろ」
何種類かの機械油と、ガソリンの匂い。
「ガソリンエンジン……前々から興味があったから、勝手に回収させてもらった」
既に型遅れの、古臭い車体。
「……なかなか、興味深い研究材料だった」
度重なる酷使によりやつれた、漆黒のフルカウル。
イグニッションに刺さったままのキーには、見覚えのあるキーホルダー。
間違いない。

「……俺のバイク」

虚数空間に消えたと思っていたけど……拾っていてくれたのか。
「もう調べつくしたから、返す」
「……さんきゅー。マリー」
親しみを込めて、エイミィと同じ愛称で呼ぶ。
「ん」
拒否は、されなかった。
ふいっと踵を返し席に戻り、かちゃかちゃかちゃかちゃ……と、猛烈な勢いで打鍵していく。
「……こうなったら、三日は動かないんだよね。帰ろうか？」
「ああ。……マリー」
どうせ聞いてはいないだろうが、それでも言っておこう。
「バイク、ありがとな。それと……俺のデバイス、よろしく頼む」
「……ん」
ひらひらと、『さっさと帰れ』とばかりに手を振る。
苦笑しつつ、ガレージからバイクを引っ張り出した。

……さーて、帰るとしますか。
「……」
ヤバい。
来た時の数十倍、注目されてる。
「……ぷくくくっ」
「笑うな」
俺は……バイクをがらごろ押しながら、支部の廊下を歩くという前代未聞の行動を取っていた。
「……しょうがないだろ。トランスポートまで、道はここしか無いんだから」
「ふふ、でも、すっごい目立ってるし……！『……王』に、また一つ伝説が増えちゃった」
ん？　今、なんつった？　笑い声で、聞き取れなかった。
「エイミィ、今なんて……？」

――――ビーッ、ビーッ！！

響き渡る警報。アースラと同じく、これは……

「「緊急事態！？」」

『第九十七管理外世界において、守護騎士を観測！　現地担当局員、直ちに出撃！　繰り返します！　第九十七管理外世界において……！』

一気に緊迫した空気に包まれ、持ち場へと走り出す周囲の局員達。

「エイミィ、急ぐぞ！」

「え？」

バイクに跨り、キーを捻る。そして……

「せいやっ！」

「え？」

エイミィの襟首を掴んで一本釣りして、タンデムシートに乗っける。

転送装置まで、一気に！

――ヴァオォンッ！！！

セルを回した瞬間に、力強い息吹を吐き出す。

アクセルを開けて、開けて、開けて……！

「いっけえええええええええええええええ！！」

――ガオオオオオオオオォォオン！！

「うにゃあああああああああああああああ！？」

エイミィを振り落とさんばかりの勢いで、疾走を開始する！

「秀人君！　廊下！　屋内！！」

「知ってる！」

滑りやすい床をタイヤがグリップし、一気に走り抜けていく。

待ってろよ守護騎士！　今度こそ、リベンジだあああああああああ！！

第四十三話（後書き）

次回は……！　次回こそ、早めの投稿を……！

第四十四話（前書き）

ある意味クロノ回です。
いやー、プロットが無いと大変です。

第四十四話

――ビーッ！　ビーッ！！

「これは……！？」

一ヶ月ぶりに感じる、緊迫した空気。

周囲でくつろいでいた局員達が、一斉に駆け出していく。

「緊急警報！？」

まさか……まさか！

「ああ、くそっ。こんな時に……！」

彼らの後を追う形で、私もその場から駆け出した。

「リンディさん！」

ブリッジの扉を開け、入る。

リンディさんは、すっかり戦闘モードになった表情で、私を見据えた。

「なのはさん。あなたには、医務室での安静を命じていたはずです」

開口一番、そう切り出した。

「……」

ぎりっ……と、一瞬だけカッとなり、歯を食いしばる。

なんとか理性で爆発を防ぎ……心を落ち着けた。

「即刻、ブリッジから出て行きなさい。ここは、戦えない者がいる場所ではありません」

厳しい……時空管理局の責任を、認識した目。

リンディさんだって、何も私を邪魔者扱いしているわけじゃない。

私の体調と……これ以上、非日常へと関わらせまいとする、優しさからの対応だろう。

でも、だからこそ……

「お断りします」

――それを、真正面から見返す。突っぱねる。

「回復し、戦線に復帰した時のことを考えてください。守護騎士達の戦闘を見ておくことは、後の戦闘を有利に運ぶことに繋がる筈です」

「戦線に復帰って……本気なの？」

「はい」

……非日常、上等。

最初から最後まで……しっかりと関わり抜くつもりで、ここにいるんだから。

「……それは、秀人君に止められてでも、曲げないつもり？」

……確かに、秀人さんなら渋るだろう。過保護なあの人のことだ。自分ひとりで、勝手に背負い込んで片をつけようとするに違いない。

でも、私がやると言えば……

「秀人さんなら、止めません」

最後には納得して、一緒に戦ってくれる。

「……わかりました。許可しましょう」

リンディさんは、そう言って許可を出した。

「ありがとうございます」

さて……現地の様子はどうなんだろうか。

前回の戦闘では、何もできないまま終わっちゃったから……今回は、しっかりと目に焼き付けておこう。

「映像、出ます！」

オペレーターの一人が声を張り上げる。

――ブンッ……

ブリッジ内に巨大なモニターが表示され、現地の様子が映し出された。

クロノが率いる、アースラ武装隊。

彼らに円状に囲まれ……全く怯む気配さえ見せない、二人の人物。

一人は、片刃剣を佩いた紫色の鎧を着込んだ……多分、女性。

もう一人は、群青色の鎧越しにもわかる屈強な肉体をした、男性。

二人は背中を合わせ、包囲の輪を観察している。

「……あれが、守護騎士」

画面越しにも、びりびりと威圧感を感じる。

私が相手にしていた雑魚騎士なんて、比較するのもおこがましい程だ。

「あれが……！」

思わず、握る手に力が加わる。

秀人さんが引き分けたのとは、違う個体らしいけど……それでもあいつらは、憎い仇だ。

「……くそっ」

こんな時に、見ていることしかできないなんて……！

でも、見ていることしか出来ないなら……思う存分、目に焼き付けてやる。

何か、掴むことができるはずだ。

『時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。君たちには、傷害および、殺人未遂の容疑が掛けられている。武器を捨てて、投降すれば……』

その、言葉の途中に……

『ぐあっ……！』

群青の守護騎士が、かなりの速度で局員の一人に接近し、拳を振るった。

ただの拳。魔法陣の展開も無かったはずのソレは、局員が咄嗟に張った防御を易々と貫き、沈めた。

『攻撃、開始！』
クロノの号令の元、大量の射撃魔法が守護騎士たちに襲い掛かる。
――バッ！！
青騎士が、両腕を広げる。
展開するのは……三角形の魔法陣。
「何、あの術式……」
魔法文字も、私達が使うものとは全く違う。
『……』
そして、動こうとしていなかった紫騎士が剣を抜く。
『……！』
それを、クロノに振るう！
『くっ！！』
――ガギイイインッ！！
クロノは、プロテクションを展開して……え、受け止めた？
「何で……？」
どう考えたって、あそこは回避する場面だ。
続いて、青騎士も三角形の魔法陣を展開し……

――ズバババババババッ！！

杭状の魔力弾を、大量に射出した。
確かに、凄い弾幕だけど……速度は、私のアクセルシューター以上、フェイトのフォトンランサー以下……くらいかな。
クロノなら、余裕で……
『……！』
あ、あれ……？
どうして、また防御魔法を展開するの……？
『おおおおおっ！』
そして、そのまま弾幕に向かって、真正面から突っ込んでいった！
『ク、クロノ執務官！？』

回避を選んだ局員が、愕然としている。
「、馬鹿！」
わざわざ、敵の弾幕に突っ込んでいくなんて……！
私や、秀人さんくらいの魔力があれば無理じゃないけど……クロノの魔力じゃ、自殺行為にしかならない！
――バキンッ、バゴッ……！！
クロノのバリアジャケットを、容赦なく削っていく。
――ビシュッ！
防御を突き抜けた一発が、クロノの額を掠める。危ない……あと少しで、目を潰されていた。
『はああっ！！』
失明のリスクを払ってまで詰めた距離。
「馬鹿、あの馬鹿……！　何してるのよ……！」
あんな、接近戦の鬼みたいな敵に、ダメージを負ってまで接近するなんて……！
『おおおおっ！』
決死の突貫も、ブレイクインパルスも……
『……』
――バキイイイインッ！！
青騎士の防御に、呆気なく吹き散らされる。
『……！』
青騎士が、防御を解除して拳を振るう。
近距離バインドをするには、絶好の好機。けど……
『っ、おおおおっ！』
クロノは、魔力で強化した自分の拳を撃ち合わせた。
『っく！』
だが、青騎士の方が威力で勝り、クロノは拳から出血する。
『……』
――ブォンッ！！

紫騎士の剣。
『あああああっ！！』
それを、武器としての強度に欠けるＳ２Ｕで、わざわざ受け止めた。

「どうしちゃったの、クロノ……？」
クロノは、冷静な戦闘が出来ていない。
あれだけ口を酸っぱくして、私達の戦い方に口出ししていたクロノが……まるで、当の私達のような戦い方をしている。
得意のバインドも、誘導射撃魔法もまともに使わず……不得意な体術と、ダメージ無視の突貫戦法。
「クロノ……！」
ダメだ、このままじゃ……！
守護騎士達の攻撃は、緻密に計算されたロボットのように正確で、隙が無い。
更に……
『ア……』
『オオオ……』
『アアアアア……』
わらわらと……雑魚騎士まで沸いてきた。
かなりの数だ。私が潰した時の、数倍の数は確認できる。
『な、何だこいつら……！』
『くそっ、どけ！！　クロノ執務官が……！』
……局員達は雑魚騎士の数に押され、クロノの救援に向かえない。
指揮官が冷静さを欠いている現状、戦列は意味を成していない…
…ただの烏合の衆に成り下がっている。
「まずいわね……」
「……このままじゃ」
全滅。
そんな、不吉な言葉がよぎり……いてもたっても、いられなくな

った。
――ガンッ！
椅子の背を蹴飛ばす。
「な、何ですかぁ……！？」
座っていた、エイミィの代理を務めるオペレーターに命令する。
「通信繋いで！」
「は、はぁ……？」
ぽかん、とボケた返事を返すオペレーターの胸倉を掴み上げ、至近距離で睨みつける！
「早くしろォ！」
「ヒィッ……！　は、はいいいっ！！」
……よほど凄い顔をしていたらしい。恐怖に顔を引きつらせながら、命令に従った。
「つ、繋がりましたぁッ……！！」
涙目で報告してきた。
「ご苦労！」
「ひいっ！」
インカムをむしり取る！
今の私に出来るのは……この程度！
「なのはさん、あなた何を……」
リンディさんを無視して、思いっきり息を吸い込み……！
「クロノオオオオオオオオオッ！！」
大声で、現場に怒声を送る！
◆　◆　◆　◆

『クロノオオオオオオオオオオッ！！』

唐突な声に、クロノは、今しがた打ち込もうとしていたＳ２Ｕを取り落としかけた。

「な、何だ！？　君か、なのは！？」

慌てて後退し、魔力弾をやり過ごす。

『何やってるの！？　そんな、らしくない戦い方して！』

「……！」

クロノはその言葉に、ぐっと歯を食いしばった。

『クロノの戦い方は、そんなのじゃないでしょ！？　さっきから、何を……！？』

そんなの。

彼女が言う、『そんなの』とは……

――力には力。敵に真正面から挑んでいく戦い方。

――魔力の少ない自分には、致命的に合わない戦い方。

――吾妻秀人、高町なのはのような、魔力に恵まれた人間にしか出来ない戦い方。

「うるさい！」

クロノは思わず、そう叫んでいた。

『な……！』

通信の向こうで、なのはが息を呑む。

「……口出しを、するな！」

（僕はやれる！　少ない魔力でも、平均以下の体格でも……！）

それは、不安。

ＡＡＡ＋認定を受けてはいるものの、運用技術によるものが大き

いクロノにとって……絶対的な魔力の少なさというのは、後ろ暗いものがあった。

（彼らと、共に戦える！）

周囲にいる仲間は、誰も彼も、才能に溢れ、努力が成果として結実し、今も尚成長を続ける、真の一流。今、自分に怒声を送るなのはと……幾度と無く共闘した秀人は、その最もたるものだった。

――自分は、彼らと肩を並べるに値するのだろうか？

それが、クロノが抱く不安の正体だった。

自分には、高町なのはのような、圧倒的威力の砲撃魔法は放てない。

自分には、吾妻秀人の身体のような、強力な資質は備わっていない。

自分には、フェイト・テスタロッサのような、見失いそうになるほどの機動力は無い。

自分には。

自分には。

――自分には、何があるというのだろうか。

それは、劣等感、と言い換えてもいいかもしれない。

（僕は、やれる……！　なのは、秀人と同じように……力で、敵を打ち倒せる！）

だから、このような暴挙に走った。

周囲に……そして、自らに認めさせるために。

「戦闘は、問題なく続行できている！　君は、引っ込んでいろ！」

『ちゃんと目の前を見て！　クロノの目の前で、何が起こっているのか、ちゃんと見て！！』

なのはの、必死の説得。

だがそれも、頭に血が上ったクロノには届かない。

「目の前……？　そんなの、守護騎士が二体だ！　それ以外に、何が……！」

ビキッ……と、通信に奇妙なノイズが走った。それが、なのはがインカムを握り潰し掛けた音だとは、クロノに気付く由は無かったが……彼女の怒りが頂点に達したということだけは、理解できた。

『クロノ……あなたの敵は、守護騎士だけ……？』

静かな……氷のように、静かな声。

『あなたの仲間は、今どうなっているの……？』

「あ……」

それが、文字通り、クロノに冷や水をぶっ掛けた。

「……！」

クロノは、今になってようやく、自身の置かれた状況を振り返った。

見ることさえ忘れていた、オペレーターからの現状報告を、目の前に表示させる。

――敵勢力、増大。いずれも、C～Bランク。

――武装隊、三割が戦闘不能。

「僕は……！」

自分の馬鹿さ加減に、ようやく思い至った。

そしてそのツケが、今頃、このタイミングで回ってきた。

――バキィンッ……！！
「……！　し、しまった！」
両腕を拘束する、青白いバインド。
見れば、青騎士が魔法陣を展開していた。
そんな初歩的な見落としをするほど、我を失っていた。
「……！」
そして、紫騎士が迫る。
――解除は、間に合わない。
「……」
そう悟った瞬間、クロノの内心は、驚くほどに冷静……いや、諦めで満ちていた。
（……駄目だった）
圧倒的な諦観の念が、クロノの全身から抵抗する気力を奪い去る。
（僕は、秀人のようには戦えなかった）
自分の力は、ここ止まりだった。
秀人と肩を並べて戦うなど……土台、無理な話だったのだ……と。
（執務官……魔導師としても、僕はこの程度だった）
オペーレーターからの情報を見逃し、増援にも気付かず、ただ不利な状況だけを、作り出してしまった。
自分の無意味な意地で、指揮すべき、守るべき仲間を危険に晒してしまった。
ゆっくりと、スローモーションのように映る景色の中、凶悪なまでに鋭い刃が、真っ直ぐに振り上げられていた。
あの剣を頭に受ければ、死ぬだろう。
「……ははっ」

その事実とは裏腹に、自虐的な笑みが零れた。

（……受け入れよう）

この愚か者を断罪してくれるのなら、何でもいいと。

目を閉じようとさえ、考えていた。

『結界前方に、転送ポート開きます！　これは……地球支部からの……』

オペレーターのそんな報告も、もはや耳を素通りする。

――……オオオオオォォ……！！

「……？　これは……」

特徴的な、何度も耳にした音。

「まさか……！」

――オオオオオオオオオオオオオオオォォォン！！

内燃機関の、爆発音！

「うおりゃあああああああああああああああっ！！！！！」

――ドガッ、ガギャッ……！

黒塗りの二輪に跨り、凄まじい速度で突っ込んでくる！！

「ア……！！」「アギャッ……！！」

局員達に迫る雑魚騎士たちを、猛烈な勢いで跳ね飛ばしながら！

鎧袖一触という言葉を具現化したように、一直線に障害物を跳ね除けるその姿。

窮地に立たされ、生傷を増やし続けていた局員達の表情が一変。

「うおおお！　増援だ！」

「しかも、よりにもよってお前かよ！」
「執務官を頼んだぞ！」
驚きと、喜びが入り混じった声援を受けつつ、秀人のバイクが疾走する。

『秀人さん！？』
アースラから、なのはが驚く声が聞こえた。
「……！」
紫騎士が驚き、身を引こうとするより早く……

――ズガシャアンッ！！

「……！！」
真正面から、微塵も減速せずに衝突した！
バイクの外装の欠片を撒き散らしながら、紫騎士が投石器で放られたように吹き飛ぶ！
がりがりと、鎧と地面が火花を散らす。体勢を立て直そうとするところに、更に……

――ベギッ、ゴギャッ……！！

追撃の、轢殺攻撃！
「……！　……、！！」
更に激しく転がり、
――ドゴォンッ……！！
電柱に背中から激突し、海老反りになり止まった。
右腕にありえない関節が追加されて尚、剣を手放さないその戦意は敬意に値するが……
「ふんッ！！」
急制動によるジャックナイフで後輪を浮かし……

――ドズンッ！！

操縦者含め、３００ｋｇ近い重量のほぼ全てを乗せた後輪で、紫騎士の兜を踏み潰した。

「……！」

ビクンッ！　と痙攣し……動かなくなる。

兜が大きく罅割れ、手足が変な軌道を描き……見た目は轢殺死体そのものだった。

「え、えげつねぇ……！」

「うえ……！」

「……かわいそう」

局員が言った通り……もはや、哀れにさえ思えるほどだった。

「……」

まとわり付く闇が、紫騎士の傷を修復し始める。

一体きりとなった青騎士は、それを一顧だにせず構えを取った。

「……、今だ、掛かれ！！」

それを攻め時と見た局員達が、一気呵成に攻撃に転じる。

「……」

戦闘音をよそにバイクを降りた秀人が、険しい顔でクロノに歩み寄ってくる。

「……」

クロノはそれを、死んだ魚のような目でぼうっと見ていた。

「クロノ……」

労わるように、両肩に手が乗せられる。そして……

「歯ァ食いしばれッッ！！」

――ゴギィンッ！！

……渾身のヘッドバットが、クロノの前頭部に直撃した。

「くあああぁッ……！！」

頭を押さえ悶絶するクロノ。

「な、何をする！」

若干、目に光が戻ったクロノが秀人を睨みつける。

「目、覚めたかよ」

「……！　ああ、不本意ながらな！」

少なくとも、活力は戻ったらしい。

だがすぐに、肩を落としてしまう。

「……僕には、無理だった。君のように戦うのは」

「……は？」

呆気に取られる秀人を無視し、続ける。

「君たちのように、才能が無い僕には……」

ぐずぐすと、拭えぬ劣等感が口をつく。

秀人は、ぽりぽりと頭を掻き、うーん、と悩ましく唸り、言う。

「そんなことで、悩んでたのか」

かっと頭に血が上る。

「ああ、そうさ！　君にとっては、そんなことだろう！　魔力の大小、才能の有無なんてことは！」

クロノは、自分の言葉に反吐が出る思いだった。

醜い劣等感を言葉にして、妬む相手に八つ当たりするなど……人間として、恥ずべき行為だ。

だが、止められない。

「魔力の大小、才能の有無が、本当に力の全てなのか？」

「……全てではないにせよ、かなりの要素だろう！」

聞き分けの無い弟を諭す兄のように、諭す。

「お前、前に言ってたよな。少ない魔力、乏しい才能を努力で補って、ＡＡＡ＋認定を受けたって」

「あ、ああ……」
劣等感が疼き口ごもるクロノに、秀人が言った。
「魔力量っていうハンデがあって、才能が乏しいってことも分かって……でも、お前は努力を怠らなかった。諦めなかった。
それは、何のためだ？」

「……」
クロノは、あの夜のことを思い出す。
あの夜……父が殉職した日の夜。
常に笑顔を絶やさない母が、誇りある時空管理局の提督が、背中を丸めて泣いていた。
いつも自分を背負ってくれる大きな背中が、妙に小さく見えて。
その涙を止めたいと……止められるだけの力が欲しいと、確かに願った。
その涙を止めたいと……止められるだけの力が欲しいと、確かに願った。

それが、クロノ・ハラオウンという魔導師の原点。

今の生き方を決めた、始まりの夜。

「でも、まだ僕は……弱いままだ」
「……なぁ、クロノ」
そこまで聞いた秀人が、半笑いで言う。

「お前、結構バカだろ？」

本気の本気で、バカを見るような目だった。
「な……何だと！？」
怒るクロノに、秀人はやれやれ、と首を横に振る。

「母親の悲しむ顔が見たくないなんて理由で、才能が無い分野に飛び込んで……それで、執務官にまでなっちまうんだもんなぁ……苔の一念、岩をも通す、と言うか……」

でも、と前置きし、言った。

「努力だけで執務官にまでなれたなら……それは、立派な『才能』じゃないか」

はっと、雷に打たれたように我に帰り、秀人と目を合わせる。

「実際、俺となのはは、何度かお前に模擬戦で負けてるんだぜ？」

それもまた、事実だった。

二人の能力検定試験の際、秀人とは引き分け。なのはに至っては、絡め手に引っかかりノックアウトされていた。

「お前に才能が無いなんて言われたら、俺らは立つ瀬がねーよ」

からからと快活に笑い、ぽん、と軽く、しかし力強く、クロノの肩に手を置く。

「胸を張れ、クロノ！

お前は強い！

俺が、なのはが……アースラの皆が、保証してやる！」

クロノは、ぽつんと立ち尽くし、秀人の言葉を反芻する。

――お前は強い！

「そんな、ただの気休めが……」

だがクロノは、自分の中から、劣等感が拭われていくのを確かに感じ取っていた。

「気休め、が……！」
ぽたぽたと、地面に水滴が落ちる。
「っく、う、ううう……！！」
自分は、なんと些細な事で悩んでいたのだろうか。
秀人は何も言わず、ただクロノを見つめる。
――お前は強い！
その、たった一言が、無責任な一言が……今までの実った努力も、実らなかった努力も……『力が欲しい』という想いの全てを、肯定してくれた。
自分が力を求めたのは、何の為か。
誰かに認めてもらうためか？
地位を築くためか？
いいや、違った筈だ。
「僕は……」
誰かの涙を止めたくて……その『誰か』の対象が、徐々に広がって……彼らを、この手で守りたかったのだ。
それを守れるならば……自分の魔力や才能なんて、些細なことではないか。
それらはあくまで手段の一つであり……目標では、無いのだから。
――胸を張れ！
「ふん……」
ぐいっと、目元を袖で乱暴に拭う。
僅かに充血した目。

だが、吹っ切れたような猛々しい笑顔と……

「わざわざ、言われるまでも無い！！」

取り戻した男の顔が、そこにあった。

「ハッ……上等！」

秀人もまた、笑みを浮かべる。

「……！！」

ようやく修復を完了した紫騎士が立ち上がり、

――ガギュンッ！！

……峰に備え付けられた、カートリッジシステムが火を噴く。

途端、膨れ上がる破壊力と殺気。

「！！」

一気に至近距離。振り下ろされる刃。

秀人とクロノは、同時に振り向き……

『Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ　！　／　Ｄｉｖｉｎｅ　Ｓｍａｓｈｅｒ　！』

「「　はあああああああああああああああっ！！　」」

――――ズッガアアアアアアアアアアン！！

紫騎士を、遥か遠方まで吹き飛ばした！

「行くぞ、クロノ！」

「ああ、秀人！」

二人の魔導師は肩を並べ……敵の懐へ、飛び込んでいった。

第四十四話（後書き）

最近、あまりラノベとか読めません、、、時間が欲しいです。一週間くらい。

第四十五話（前書き）

ＮＳＲのセンターシールが抜けた、、、とうとうこの時が、、、（泣）

第四十五話

――嫌な予感がした。

「……！？」

いや、予感なんて、漠然としたものじゃない。

はっきりと……嫌な感触が、私の体をぬるりと撫でた。

「姐さん？　どうしたの？」

私の膝の上に頭を乗せ、ごろごろと寝そべっていた美香が顔を上げる。

「ごめん、ちょっと待って……」

これは……守護騎士からのフィードバック？

今日、狩りに向かわせたのは、『鉄槌』と、『湖』だったっけ。

「ん……！」

意識を集中し、二人の視界情報を覗き見る。

『湖』は、無事だ。超至近距離からの攻撃を喰らい、完全にノックアウトされている。

闇の中に回収……完了。

じゃあ、『鉄槌』は……？

「……嘘」

……反応が、無い。

「嘘……嘘よ」

守護騎士と私は、強固な契約の鎖で結ばれている。

『湖』のように、たとえ戦闘不能になっても、ある程度の操作は可能だ。

だけど、『鉄槌』からの反応が、これっぽっちも無い。それは、つまり……戦闘不能以上の要因で、私とのリンクが断ち切られたということだ。

闇の呪縛は、一般的な解呪の魔法如きでは軋みもしない。
だけど、一番簡単な方法がある。それは……
「……っ！」
「うきゃっ……！　あ、姐さん！？　どうしたの！？」
美香をベッドに投げ、窓の外へ飛び出した。
そう、それは……

――守護騎士が、殺されるということ。

「無い……そんなこと、絶対に無い！！」
スレイプニルにありったけの魔力を注ぎ込み、空を翔る。
私の魔力を分け与えた、私の分身が……そんな簡単に、やられるもんか！

そして、しばらく飛んで……結界があった地点へ、到着した。
周辺に、戦闘痕は無い……って、当然か。結界の中で戦ったんだ。
「……よし」
……うん、まだ残ってる。
「結界、修復」
――……。
了解。その声と共に、周囲に薄い帳が下りる。
そして現れたのは、ボロボロに荒廃した住宅街だった。
「……」
ざくざくと砂利を踏みしめ、最後に『鉄槌』の反応があった地点に向かう。
確か、最後に見た光景は……
「何だったのよ、あのでっかいトリは……」
青く燃え盛る、巨大な怪鳥。
あんな巨大な魔力の塊、私でも作り出して、操作できるかどうか……
それに、使用者の男の意思とは違う、独自の意思を持ち合わせて

いるようにも見えた。
――……、……。
「わかってるよ」
考察は後回し、だよね。

そして、その地点に到着した。
「……いない」
何も無かった。
抉り取られ、高熱でガラス状に溶かされていて、道路も、家も……
……『鉄槌』の反応も、何も。
「……いない」
ずしゃっ……と、砂利に膝をついた。
現実的に考えて……その可能性は大いにあったけど……本心では、認めたくなかった。
でも……もう、認めるしかない。

「『鉄槌』、死んじゃったんだ……」

完膚なきまでに敗北し。
再生も不可能なレベルにまで、消滅してしまったんだ。

言葉にした瞬間、
「う……！」
ぼろぼろと、自分でも戸惑う程の涙が、両目から溢れてきた。
「ううぅ……！！」
ぎゅうっと目を閉じ、歯を食いしばっても、止まらなかった。
わけがわからない。
私にとっての守護騎士は、ただの道具。
最強の殲滅魔法を完成させるための、ただの駒。
それだけのはずだったのに。

「――――――――――――――――！！」

……言葉にならない絶叫が、響き渡った。

「……」

散々泣き喚いて……泣き疲れて眠って……いつの間にか、日が変わっていた。

「……」

直接地面に寝転び、ぼうっと薄紫の空を見上げる。

……自分でも、驚いた。

まだ私に、誰かの死を悲しむだけの良心が残っていたなんて。

「認めるしかない、か……」

私にとっての守護騎士は、道具で、駒で……大事な、〇〇、だったのだろう

歪んだ感情だということは、自分でもわかる。

当の本人達の意思を無視した、勝手な思い込みに過ぎない。

もしも守護騎士達に感情が残っていたら、『はぁ？』と呆れ返るに違いない。

でも、知ったことじゃない。私がそうと決めたのなら、そうだ。

「はあああぁ……」

津波の前兆のように、すーーーっと心が穏やかになっていく。そして……

「……があああああああああああああああああッ！！！」

――バゴオォォンッ……！！

爆ぜる程の魔力と……極大の憎悪と殺意が、全身を支配した。

「あンの……クソガキがあああああああああああああ！！！」

最後に映っていた、若い男。顔は覚えた。

アイツだ。アイツが『鉄槌』を殺した！

――バサァッ……

スレイプニルが、半ば無意識に羽ばたく。

憎い仇を、探し当てろと。

五体を引き裂いて、地獄の釜に放り込めと。

「……ブチッ殺してやるッ！！　細胞単位までバラバラにして……酸で永遠に溶かし続けてやるッ！！」

……言われるまでもない。

あの男だけは……、この手で直々に！！

◆　◆　◆　◆

「ふんぬっ！！」

――ガキイインッ！！

紫騎士の片刃剣と、俺の魔力刃が衝突し、甲高い音を立てる。

「ぬぐぐぐぐっ……！！」

膂力は、ほぼ互角。

『Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ　！』

――ガオンッ！！

すかさず、クロノのカットが入った。
「……っし！！」
――パァンッ！！
足元にインパクトを発動し、跳ぶ！
「……！」
なぜか、紫騎士もそれに合わせて後退した。
こりゃ、またあの攻撃が来る！
「避けろ！」
「言われなくても！！」
――ズバババババッ！！
杭状魔力弾の掃射を、バック転で回避する！
今度は、クロノも回避を選んだ。

だが、逃げた先には……！！
「アアア……！！」
雑魚騎士の集団！
「ああもう、邪魔くせぇ！！」
インパクトウォール！！
――ゴバババババッ！！
纏めて薙ぎ払って一掃……！
「……！」
――ブオンッ！！
「うおおっ！！」
頭スレスレを、片刃剣が切り裂いた！
ちゅいんっ、と髪の毛が一房、宙に舞う。
「この歳でハゲたらどうしてくれんだオラァ！」
インパクト！！
――ドパァンッ！！
紫騎士の体勢を崩し、
「おりゃああっ！！」

――ガスッ！！
飛び蹴りで蹴り飛ばす！！
「……！」
青騎士の突貫！
「はァッ！！」
――バチィンッ！！
左掌に魔力を収束し、横っ面をひっぱたく！
『Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｓｎｉｐｅ　！』
――ズドドドッ！！

「クロノ！　今、どんな感じだ！？」
間合いを取り、現状を確認する。
「……局員側の損害は、三割に収まっている。敵の雑兵は、数は多いがそれほど脅威ではない」
三割……微妙な数字だ。それでも、損害がさっきから増えていないということは、この指揮官が機能し始めたということだろう。
「引き続き雑兵は武装隊に任せて、僕たちは守護騎士を……」
「ああ、了……」
解。そう言い終わる、直前のことだった。

「……死にさらせえええええええええええええええええええええええええッ！！」

結界を突破し進入した何者かが、一直線に俺に向かって突っ込んできた！
尋常な速度じゃない。まるで、隕石が降ってきたんじゃないかと思うほどの、豪速！
「うおおおおっ！？」

防御魔法……間に合わない！　両腕を体の前で交差して、衝撃に備える！

――――ごぎゅっ……！！

「ぐあぁっ……！」

交差させた腕が、纏めてヘシ折れ……いや、砕けた。完全に感覚が消失し、防御する能力が失われる。

「ぐっ……がっ……！！」

勢いのまま、景色が凄まじい勢いでスクロールしていく。

そして、相対速度が無くなったことで、ようやく俺は侵入者の全容を見ることが出来た。

漆黒の翼。漆黒の装束。そして……白銀に輝く長髪。

「誰だ、てめぇッ……！！」

俺の問いに、侵入者の女は……にィ、と、邪悪に笑った。

再び、女は拳を振り上げ……って、マズい！　両腕、使えね……！

「はあああああっ！！」

防御、間に合えッ！！

――バキイイインンッ……！！

……防御も何も、あったもんじゃない。

殴り飛ばされた挙句、ビルを三つも四つもぶち抜き、地面に背中から叩きつけられた。

「……いっ……てぇ」

主に、地面で摩り下ろされた背中がずきずき痛む。

「ドラゴンボールじゃあるまいし……」

軽口が出せる程度には、重症では無いらしい。

「チッ……これで死なないとか……どんな身体してんのよ」

未だ膨大な魔力を秘めたままの手をぷらぷらとスナップさせ、しかめっつらを作る。
「まぁいいわ……これで死なれちゃ、面白みが無いし」
傲然と言い放ち、歯をむき出して獰猛に笑う。

「アンタに殺られた『鉄槌』の痛み……一億倍にして返してやるッ！！」

「ナイトメア……！」
その黒装束から、何の前兆も無しに、ディバインバスター並の砲撃が迸る！
「うおおおおっ！！」
死ぬ気で体を動かし、インパクトで自分の身体を弾き飛ばす！
――ズゴオオオンッ！！！
着弾地点を、容赦なく消し飛ばした。
一切のタイムラグ無しで、あれだけの威力を……なんて滅茶苦茶な……！

飛行魔法を行使。上空の女に肉薄し、拳を……！

――バスッ……！

俺の拳は、女が軽く差し出した掌に、あっさりと受け止められた。
何だ、今の感触……！？
ただのパンチじゃない。インパクトとバレットを付与した、破壊力の塊だぞ！？その纏わせた魔法が、あっさりと散らされた！
それに……
「くっ……！」
何て握力！抜け出せない！
「……」

俺の抵抗を嘲笑うかのように、急激に温度が上昇していく！

「はい、右手もーらい」

そしてそんな、軽い調子の言葉を合図に、

――ボンッ……！

「……！」

……右手が、爆ぜた。

五指が炭化し、ボロッ……と落ちる。

「があ……！」

痛みで飛びそうになる意識を、根性でつなぎ止める。

……何せ、右手首が吹っ飛ぶのは二回目だからな。

「秀人！」

クロノが、誘導弾をいくつも放ちながら追いついてきた。

槍のように構えたＳ２Ｕに、ブレイクインパルスを纏わせながら……！

「駄目だ、来るな！！」

そのまま突っ込んだら、コイツの思うツボだ！

――バスバスバス……！！

やはりと言うべきか。

誘導弾は、女の体表に触れた瞬間に四散してしまった。

「離れろと……！」

Ｓ２Ｕを、女に繰り出す！

――バシュンッ……！

やはり、四散。

Ｓ２Ｕを繰り出すも弾かれ、あのノーモーション砲撃が放たれる！

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ！』

――バチィィインッ！！

俺とクロノ、二枚重ねの防御魔法が軋み、たわみ……

――バキンッ……！

砕けた。

二人揃って地面にたたき付けられる。

「ひゃはははは……どうした？本気出せよ」

上空から俺達を見下ろす女が、余裕の嘲笑を浮かべ、言う。

本気？

「そんなもん、さっきから思う存分出しとるわ！」

女は、つまらなさそうに鼻を鳴らした。

「焔の鳥」

……あ。

「……忘れたとは言わせないよ。あんたが、私の『鉄槌』を殺したんだ……！」

あの不死鳥のことは、クロノにも話していない。知っているのは、俺と、あのチビ騎士くらい……

「お前、まさか……！？」

俺の問い掛けに、女は再び残忍な笑いを浮かべた。
ざっ。
ざっ。
その両脇に、紫騎士と青騎士が侍る。
「……私が、守護騎士を束ねる主にして、闇の書の主……」
恭しい一礼と共に、名乗りを上げる。
「『闇統べる王』」

第四十五話（後書き）

今現在、プロットと本文が同時進行するという意味不明の事態に陥っております。
なので、少しばかり矛盾点が出てしまうかもしれませんが、ご容赦ください。

第四十六話（前書き）

金曜日の新人研修会に遅刻してしまったわ！

上司が「今日は直帰でいいけど、月曜日に事情聞かせてね♪」ですって！

うふふふふ、もうどうにでもな～れ♪

ハハッ、ワロス、、、ワロス、、、ｏｒｔ

第四十六話

私は、モニターに映る人物に目を奪われていた。

くすんだように光沢の無い銀髪。

退廃した雰囲気の漂う、左右非対称の黒い装束。

色彩が抜け落ちたような全身像の中……毒々しい、血のような紅い瞳と、同色のアクセント。

「あいつが……」

闇の書の、主。

何て、禍々しい魔力……

「……リアルタイム映像を、無限書庫のユーノ司書の元へ」

「了解」

知らず知らず、冷や汗をかいていた。

「なのはさん、」

プレシアのように、気が振れているわけじゃない。

ごく自然に、呼吸をするように……殺気を振りまいているんだ。

モニターから、あの紅い瞳から、目が離せない。

身体の感覚がおかしくなり、五感のうち視覚だけが鋭敏に研ぎ澄まされ、瞬きもせず、じっと、じっと……

「なのはさんっ！」

……ッ！？

「あ……」

私、今……？

夢から覚めたように、身体の感覚が戻ってきた。

「呑まれたらダメよ」

「は、はい……」

しまった……無意識のうちに、引き込まれそうになっていた。

――ぱんっ！

自分の頬を張り、痛みで気合を入れる。

……ちゃんと、しっかりと見るんだ。動きのクセや、特徴……弱点を。あの膨大な魔力を持つ敵を切り崩すには、真正面から無策に挑むのは馬鹿のすることだ。

ただ……その弱点があるのかどうかは、疑わしい。

一見、バリアジャケットに見える装束。

だけど、さっき秀人さんにノーモーション砲撃を放った際、あの黒い装束から滲み出すように、魔法文字がちょろっと見えた。

つまりあれは、魔法そのものが服の形をしているのだろう。それも、文字で真っ黒に染まるほどの、膨大な術式の塊。

私が真似をしたら、一分も持たずにガス欠を起こす。

規格外の魔力と、それを完璧に御する能力。

以前クロノのやつが、私たちのことを『化け物』呼ばわりしたことがあったけど……あいつは、正真正銘の怪物だ。

「秀人さん……」

……疑っているわけじゃない。でも、心配で、心配で……思わず、口をついてしまった。

でも、私には心配する資格は無い。あんな馬鹿な真似さえしなければ……今頃、秀人さんと一緒に戦えていたんだから……

「ちくしょう……」

魔力を失った今の私は、ただの無力な子供に過ぎない。

モニター越しの戦場が、いやに遠かった。

……力が欲しい。

心の底から、そう思った。

◆◆◆◆

「……で、その王様が何の用だ？」
軽口を叩いて、探りを入れる。
「……」
ギロリと、殺気を湛えた瞳で睨み返された。
がつん、と、網膜を通じて脳を揺さぶられる。
「くっ……！」
……唇を噛んで、それに耐えた。
横を見れば、クロノもまた、Ｓ２Ｕを握る手が強張っている。
「敵討ち、って、言わなかった……？」
そういえば、テッツイがどうのこうの、言っていたような気が……
テッツイ……鉄鎚？
鎚って、ハンマー……あ！
チビ騎士のことか！
「思い出したみたいね」
「……ああ」
居心地が悪い。敵だったとはいえ、あの状況では間違いなく……
「……返り討ちにしてやったぜ？」
あえて、軽口で返してみた。
――ギュドンッ！！
「うおっ！！」
一抱えほどもある魔力弾が、飛び退った俺達の足元に着弾した！
いちいち威力にビビッてる暇は無い！
とにかく、攻撃だ！
足元をインパクトで弾き飛ばし、『王』に肉薄！！
――ガキイイインッ！！
青騎士の張ったシールドがソレを阻む。
「……リアクティブ・アーマー！！」
――バゴオオォンッ！！

バリアごと、青騎士を吹っ飛ばす！
「……」
紫騎士は無感動に、剣を俺の首に振り下ろしてきた。
――パンッ！！
前面にインパクトを発生させ、回避。
「死ねッ！！」
同時、『王』のノーモーション砲撃。
クロノがバインドで俺の腕を絡め取り、射線上から引きずり上げた。
「フランメ・シュラークッ！！」
ゴウッ！！　と、黒い炎を纏った拳が迫る。
「インパクトッ！！」
それを、同じくインパクトを纏った拳で迎撃。
じりじりと拮抗し……にやぁ、と『王』が笑う。
「ひゃはっ……死ねェッ！！」
その黒い装束から、紅い短剣が無数に出現した！
ヤバい、この至近距離じゃ……！
咄嗟にインパクトを解除し、身体を丸める！
――ドドドドッ！！
……！
一発、二発、三発……！！
致命傷を避けつつ、魔力で補強したジャケットで受ける。
さすがは管理局の訓練服だ。もともと、頑丈な繊維を格子状に編みこんでいるおかげで、軽量かつ強靭。少し魔力を通しただけで、かなりの防御力になってくれた。
「ってぇぇ……！」
……それでも、衝撃までは殺せなかった。ついでに何本か、腕に刺さったままだ。
「……そういや、初めてかもな。敵が連携して襲ってくるのは」
「確かにそうだな」

いつもいつも、単独か、烏合の衆かの両極端しか無かった。
「くひひひひっ……！　楽しい楽しい……こんなに遊んでも壊れない玩具、初めてだ！！」
嗜虐的な笑みを浮かべ、ぎゅっぱぎゅっぱと両手を開いたり閉じたりと、抑えきれない喜悦が漏れ出している。
「……言ってろ」
タイプ的には、『王』はオールラウンダー。ほぼ全距離に対応できる万能型。
「……」
紫騎士は近接特化型。遠距離攻撃もできるのだろうが、使おうとしている様子は無い。
「……、」
青騎士は防御・拘束の支援をメインに、肉弾戦が主な戦い方。要は、アルフとユーノを足して二で割ったような奴。
攻撃・防御を紫騎士・青騎士で分担し、どうしても出来てしまう隙を『王』が埋める。
単純だが、隙の無い布陣。
さすがに、三対二じゃ分が悪い。
「さぁ、次はどうするのかな……！？」
『王』の瞳が妖しく輝くのと同時、
――ゾゾゾゾゾッ……！！
……どういう理屈かは知らんが、奴の周囲にあった平面の影が、Z軸を与えられたかのように立体的に浮かび上がり、刃を象った。
「な、何だありゃ……！？」
魔法……と呼ぶには、あまりにも異質な力だ。
「……恐らくは、魔法なのだろう。あんな怪奇な術式、見たことも聞いたことも無いがな」
「……せめて、ユーノがいてくれたらなぁ」
何か、的確なアドバイスなり対処なり、対策を立ててくれただろうに。

さぁ……互いに、様子見は終わった。
いよいよ、第二ラウンドだ。

――……ガキュンッ。
……紫騎士の剣。その峰に据え付けられた、カートリッジが消費される。
――ゴウッ！！
そして、爆発的に増大する魔力！
「……！　来たぞ」
俺を屠った、チビ騎士のハンマー。あれと同じ原理なら、これまでとは比べ物にならない程の威力が、あの剣に宿ったことになる。
剣の腹を叩いて、剣筋を逸らす……普通の剣には有効な戦法も、通じないと思ったほうがいいな、これは。
「……青騎士の方は、デバイスの類は所持していないようだな。おそらく、攻撃の要は紫騎士で、『王』と青騎士はあくまで後衛なのだろう」
「どう叩く？」
ここは、クロノの指示に従おう。
「……正直、数の差もあって厳しいな。君の『結合』で、僕とリンカーコアを同期させても、確実な勝利は無い。だから今、艦長とエイミィが増援を要請している。それが到着すれば……」
「おお、数の差は埋まるな！！」
――ブオッ……！！
紫騎士の剣が、俺達がいた空間を激しくなぎ払った。
「「せーの！！」」
振りぬいた姿勢のままでいる紫騎士に、ブレイズキャノンをお見舞いする！
「……」
――ガドォンッ！！

「あーもう！　またアイツかよ！！」
青騎士のシールド。とにかく頑丈で、始末に終えない！
『Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｓｎｉｐｅ　！』
一面のみのシールド。それを迂回し誘導弾を放つ。
「はいはい、おつかれー」
……その攻撃は、『王』の装束に吸収されてしまった。
「これじゃ、うかつに魔法で攻撃できねぇ！　直接攻撃で……！」
「……紫騎士相手に、それは無謀だ！」
近づけば紫騎士の剣。離れれば青騎士と『王』の攻撃魔法。こちらからの魔法攻撃は無力化され、数の差もある。
「やってられっか！！」
俺は早々に、正面衝突を放棄した。
「回避に専念！！」
「あいよー！」
とにかく、避けて避けてく時間を稼ぐ！！
――――。
「で……その増援っての、いつ来るんだ！？」
――ガギッ！　ゴギッ、ガギィンッ！！
絶え間無く続く攻撃を迎撃・回避し続ける。
「おかしい……！　そろそろ来てもいい筈なんだが！！」
『王』のばら撒く、滅茶苦茶な数の魔力弾を回避しつつ念話を繋ぎ、どこかと通話を始めた。
「そちらに何か異常があったのか！？　こちらも長くは……は！？　何だって！？」
聞き返し……
「……ふー……」
額に青筋を浮かべながら、大きく大きく深呼吸し……

「馬鹿言ってないで、さっさと来いッ！！！！」

クロノにしては珍しく、声を荒げて叫んだ。

「……ったく！　面倒な……！」

律儀に敵の攻撃を迎撃しながら、毒づく。

「おい、クロノ……？　何かあったのか？」

クロノは、呆れ半分、怒り半分といった感じで説明した。

「……『とことんピンチになったところに、颯爽と登場するのがカッコイイ』らしい」

「……大丈夫か？」

「……」

返事は無かった。

「はーっはっはっは！！」

と……緊迫した戦場の空気をぶち壊す、高笑いが響き渡った。

「天が呼ぶ！　地が呼ぶ！　人が呼ぶ！」

そして、どこかで……一昔前の特撮番組で聞いた口上を、ノリノリで名乗り上げる。

「悪を倒せと、ボクを呼ぶ！！」

ああ……この、思わず脱力するほどに阿呆っぽい声は、間違いない。

がばっ、とビルの給水塔の天辺に仁王立ちする影が一つ。

「聞け、悪人ども！　ボクの名は……！！」

そして、ノリノリ最高潮。口上を格好良く締め括ろうとした瞬間、『王』が腕を振るい、

――どかーん。

「ぎゃーーーー!?」

……無防備に高い場所に立ち、腕まで組んでいた人影の足元を吹き飛ばした。

命中こそしなかったものの、足場を崩された所為で数メートル下まで落下した。

「あいててて……おいこらぁぁ！」

よじよじ、と再び給水塔の残骸の上に立ち、『王』をビシィッ！！と指差す。

「名乗りの最中と、変身中は攻撃しちゃいけないって暗黙のルールを知らないのか!!」

うがー、と髪を逆立たせて怒る、その姿……

「……フェイト!?」

……だった。

完全な不意打ちに近い攻撃を喰らっておいて、命中の直前に飛び退るなんて素早い反応、出来る奴は限られている。

でも、アレは……

「……クロノ、『増援』ってまさか……アレか?」

「……ああ、アレだ」

クロノは、苦虫を噛み潰したような声で、肯定した。

「……どうしてああなった」

「……艦長に聞いてくれ」

「……は？」

『王』も、ぽかんと放心している。そりゃそうだ。

すたっ、と俺の隣に着地したのは……おお、お前も久しぶりだな。

「アルフ」

「……や。久しぶり」

とっても気まずそうに、目をそらした。

……相変わらず、フリーダムな主に振り回されっぱなしのようだった。

「ボク、参上！！」

びしぃッ！！　と、無駄に洗練された無駄の無い無駄な動きで、ポーズを決めた。

――――ヒュウウゥゥッ……

……悲壮感を含んだ風が、戦場に吹き抜けていった。

◆　◆　◆　◆

「……フェイト」

私は、ふらふらとモニターに歩み寄った。

綺麗に整った顔立ちに……底抜けにバカっぽい、自信満々の表情。

「フェイトだ」

三ヶ月ぶりに見る……友達の顔だった。

『ひでとー！　ひっさしぶりー！』

スピーカーを通じて、フェイトとアルフの声が聞こえてくる。

「でも、何で……？　しばらくは、会えないんじゃ……」
数年単位は、覚悟してたのに。
「司法取引と言ってね。プレシアが技術を供与することで、刑期を減らすように……フェイトさんとアルフさんは、あなた達の護衛をすることで、刑期の短縮をする、ということになったのよ」
そっか……フェイトはフェイトなりに、ちゃんと考えてたんだ。
「ところで、」
――ビキィッ……！！
ブリッジ内の空気が、戦闘とは別の意味で凍りついた。
「リンディさん。エイミィ」
「え、ええ……」「何……でしょう、か？」
あれ……何でそんなに怯えてるのかな？
「私、頼んだよね？　フェイトのこと、お願いしますって……？」
私はただ、ちょっとだけ……ほんのちょっとだけ、聞きたいことがあるだけなんだけどなぁ……？
「誰が、フェイトに無駄な属性（特撮オタ）を増やせと言いましたか……？」
さぁ……元凶は、一体誰かな……？
リンディさんとエイミィはだらだらと冷や汗を流し、
「え、エイミィ！　どういうこと!?」
「ウエ!?　デッキとテレビ、部屋に用意したの艦長じゃないですか!!」
「作品をチョイスしたのはエイミィよね!」

「しょーがないじゃないっすか！！　ディズニーとジブリの隣に並んでて、間違えて注文しちゃったんですから！　それにオッケー出したのは……！」
「エイミィも反対しなかったじゃ……！！」

「わかりましたから、黙ってください」
醜く責任転嫁をする二人の元凶を、黙らせる。
あの二人が加勢に加われば、こちらから細々と指示を出す必要は無いだろうし……

「……双方向通信を、切ってもらえる？」

ちょっと、秀人さんには聞かれたくないかなぁ……って。

エイミィが戻ってきたことで、席を交代したオペレーターの女性に優しく微笑みかけた。
「い、いえ、でも……！」
「切ってもらえる？」
「は、はいいいいっ！！」
……気弱なオペレーターは涙目で、パネルを操作した。さぁ、これで心配する必要は無くなった。

「二人とも……お話を、しましょう？」
「……」「……」
引きつった顔をする二人。そして、数分後……

「「……あーーーーーーーーーーーー！！？」」

断末魔の悲鳴が二つ、アースラに響いた。

◆　◆　◆　◆

「……ふん、何かと思えば」
四人になった俺達を見て、『王』が吐き捨てるように言う。
「塵芥が一つ二つ増えたところで、」
バサッ……！！
「何が変わるものか……！！」
羽ばたく翼。その両翼に、膨大な魔力が集まり、今にも射出されそうに……

「そうでもないよ？」

――――――。あ？
俺の隣にいたはずのフェイト……が、対角線上、『王』の背後数メートルにいた。
「なっ……ぐあッ！！」
驚いて振り返った『王』。そのバリアジャケットの右肩が、思い出したかのように弾けた。
フェイトの手にするバルディッシュ。その刃に、闇色の残滓がこびりついていた。
――斬った、のだろう。
俺はおろか、クロノも、守護騎士さえ気付かない程の速度で。
「それでさぁ……」
ダルそうにバルディッシュをひゅんひゅん手元で弄び、
「なのはをいじめたの、おまえ？」

――バギュッ……！！

……今度は、辛うじて見えた。
バルディッシュの横っ面で、『王』の顔面をすれ違い様にブッ叩いた。
「ブッ……！」
鼻血こそ流さないものの、顔面を押さえる『王』。
「……！」「……」
ようやく反応を見せた守護騎士達が、主を害するフェイトに照準を合わせる。
――ギュイイイッ！！
青騎士の、全方位から捕獲するバインドが、
――ゴゥッ！！
紫騎士の、膨大な破壊力を宿した剣が、それぞれフェイトに迫る。
足の遅い魔導師だったら、バインドに捕まった挙句、バッサリと切り捨てられてしまうに違いない。だが……
「おまえ？　それとも、おまえ？」

――ガギンッ！！　バギンッ！！

全方位から迫るバインドはフェイトを捉えることはできず、剣は空振りし……共に、両肩の鎧を失う結果になった。
「ねー、ひでと？」
あくまで平然と……だがしかし、確かに怒りを含んだ声で、俺の名を呼ぶ。
「……守護騎士のうち、一人だ。今ここにはいない」
「ふぅん……まぁいいや。全員連帯責任。痛みをもって償ってもらおうっと」
『Ｓｉｚｅ　ｆｏｒｍ』

――バシュンッ！！

バルディッシュが、鎌に変形。バチバチと帯電するソレは、フェイトの怒りを写したように、激しい。
「フェイト、アルフはクロノと協力して守護騎士を押さえておいてくれ」
まだまだブランクもあって、思うようには動けないだろう。雑魚騎士を武装局員が、守護騎士をクロノ達が抑えておいてくれれば……

「『王』は、俺が叩きのめす」

あのガキを、ボッコボコにしてやれる。
「ああ、任せた」
クロノはあっさりと承諾。フェイトとアルフもまた、守護騎士に狙いを定めたようだ。

第四十六話（後書き）

長いので二分割です。
後編へ続く。

第四十七話（前書き）

というわけで後編です。
一気に話を進めます。

第四十七話

「クソガキがあぁッ……！！」

顔面に痛打を食らった『王』が、憎しみに満ちた声を出す。

「ハッ……こんなもん、痛覚を遮断すればいいんだよッ！！」

……便利なもんだ。

「……ひでと、あんまりやりすぎないでね。ボクの分が、なくなっちゃうから」

「……」

フェイトは、紫騎士と真正面からにらみ合う。

「鈍った身体には、丁度いい運動かもねぇ……」

アルフは、指をポキポキ鳴らしながら青騎士を見据える。

「勝てよ」

「互いにな」

――ぱんっ。

クロノとハイタッチを交わし、それぞれのターゲットへ向かう。

「今生の別れは済んだ？」

「火葬土葬水葬鳥葬、好きなの選ばせてやるよ」

「オトモダチが一緒じゃなきゃ、何も出来ないんじゃなかったっけ？」

「守護騎士がいなけりゃ、戦力は半減だな」

互いに浮遊しながら、挑発の応酬。

「ハッ……！」

『王』は嘲笑……そして、憎しみを浮かべる。

「私を舐めるなよ……！！　守護騎士がいようと、いまいと……！」

――バサァッ！！
漆黒の翼が、はためく。
「お前は、私に触れることも出来ないんだからなッ！！」
――ギュオォンッッ……！！！
「うおぉっ！？」
慌てて回避。
「はっえぇ……！！」
目にも留まらぬ速度……フェイトが瞬発力でそれを作り出しているのだとすれば、『王』のそれは最高速度。
すれ違い様に俺の急所を狙ってくる『王』に、カウンターで攻撃を加えようとするが、悉く回避され、逆に裂傷を負ってしまう。
――ババババッ！！
翼で空気を捕え、器用に旋回しながら、俺の周囲を多角的に飛び回る。
くっそ、ダメだ、このままじゃ……！　速度が違いすぎる！
――ヴォンッ！　ヴオオオオオオオオオオオオオオン……
……！！
地上へ戻り、停めてあったバイクに跨りエンジンを始動。タイムラグを置かず、速攻で走り出し、一気にフルスロットル！
「制空権って知ってるー！？」
上空から、魔力弾の豪雨が降り注ぐ！
「地べたを這いずり回る虫けら……一息に、踏み潰してやるよっ！！」
スピードメーターが２００ｋｍ近くを指しているのにも関わらず、『王』は悠々と俺を追い抜き、攻撃魔法の雨を降らせる。
下から攻撃されることは無くなったけど……！！

「ひゃははっ……そんなドン亀じゃ、私には追いつけない！！」
……悔しいが、その通りだった。『王』の最高速度は、俺のバイクを大きく上回っていた。
「それに……！」
――ドンッ！！　ドドドドドドッ！！
砲撃、誘導弾があちこちから迫る。
「くっ！！」
ハンドルを操作し、回避！
「旋回が、遅いッ！！」
――ゴウッ！！
強化魔法を纏った蹴りが飛んでくる。
「くっそ！」
それに、バイクに跨ったまま蹴りを合わせ相殺。
その勢いに押し負け、タイヤが一瞬、路面を離れてしまう。
慌てて接地させ、アクセルを開けるものの、『王』の速度にはまだ追いつけない。
（くそっ……もっとパワーがあれば……！！）

『おいアガツマ。聞こえているか』

……っと。
「な、何だ……？」
いきなり通信に割り込みがかかり、挙動が一瞬乱れた。
『おい。聞こえているなら返事をしろ』
中性的な声。それに、このぶっきらぼうで無愛想な口調は……
「マリー、お前か？」
『それ以外に誰がいる』
……ああ、マリーだ。間違いない。
「悪いけど今忙しい、……ッとォ！？」
――ギャギャギャッ！！

リアブレーキを踏み込みロックさせ、テールスライドで敵の砲撃を回避。
『戦闘中か？　なら、都合が良い』
「何がだよ！」
戦闘音にかき消されないように、大声で応対する。
『おまえのバイクな、バラしたついでに色々と……まぁ、説明は順次で良いか』
「あ！？　何だって！？」
今何か、サラッととんでもないことを言わなかったか！？
『とにかく、キーをもう一つ、右に回してみろ』
「戦闘中にエンジン止めてどーすんだよ！　アホか！」
今は、とにかくエンジンを全開に回さなきゃ間に合わないってのに！
『アホはお前だ。この私が、その程度のことに気が回らないと思ったか』
いや、でも……ううん……
「……！　ああもう、知らんぞ！」
どうせこのままじゃ、追いつけないんだ。なら少しだけ、マリーを信じてやろうじゃねぇか！
――……カキンッ。
……回した。マリーが言ったとおり、エンジンが止まることは無い。だが……
――カキンッ、カキキッ……ギキンッ！！
「お、おいマリー……！？　なんか、明らかにヤバそうな音が……！」
エンジンの内部どころか、バイクの全体から、軋むような悲鳴が

……！

それでいて、全く走行に異常をきたしていないことが、また俺の不安感を加速させる。

『おまえの過去の戦闘記録を見るに、そろそろ、そのバイクのパワー・強度では追いつかないだろ？』

……まぁ正直、元が普段乗り用の、何の変哲も無い６００ｃｃのバイクだからな。

実は、初っ端に紫騎士に突撃した時点で、フレームがガタガタになっている。

『そこで、デバイス技術の応用だ。普段の状態は、スタンバイモード。魔力は一切食わず、通常のモーターサイクルと何ら変わりは無い。だが、起動させれば……』

――バキョンッ！！

「カ、カウルがあああああ！？」

パージされて、ポイ捨てられたあああああああああああっ！？

――ガキョン、グキグキ……！！

「フレームがあああああ！？」

丸見えになった内部機構が、何か動いてるうううううっ！？

『フレームや構成素材は、とあるデバイスの構成素材と同じ、高硬度軽量魔導合金に変換され、新たなエンジンのパワーに耐えられる構造に組み替えられ』

――ジュウウウウウッ……！！

周辺の魔力が収束・物質化され、新たな物質へと構築されていく。

以前の外装が、丸みを帯びたラインだとすると……新たな外装は、直線。徹底的に空気抵抗を抑え、突き抜けんとする鋭いライン。

ハンドルの切れ角は極端に小さくなり、挙動の操作の大半は、体重移動で行う形に移行する。

『わたしスペシャル、ＣαＨβＸ－Ｍａｇｉｃａ（魔力）ハイブリット・Ｖ（ガソリン）型８気筒エンジン搭載・両輪駆動二輪型陸戦用特殊戦闘装備……』

……『スレイプニル』に変形を果たす』

――ガ……ギンッ！！

変形を終えたバイク。

――ヴァオンッ、ヴァオンッ……

枷から解き放たれる寸前の猛獣のように、エンジンが低く唸り、解放の瞬間を今か今かと待ちわびている。

なんか……開けるのが怖くなってきたんだが。

「最大出力は……？」

念のために聞いておこう。ちなみに、ホンダのレース用マシンＲＣ２１１Ｖの最大出力は、オーバー２４０ＰＳ（馬力）。市販車の出力が最大でも２００ＰＳというのだから、その出力は押して知るべき、である。

だが、バカに技術を与えると、ロクな真似をしないというのがこの世の常であり……

「最大出力は……７５３ｐｓ！」

「お前やっぱ正真正銘のアホだろおおおおおおおおおおおおおお！！？」

超自慢げに、無表情でサムズアップをしている姿が何故か脳裏に浮かんだ。

『王』が旋回し、数多の攻撃魔法と共に突っ込んできた！

ええい、もういいや！　開けちまえええええええっ！！

――――――――ヴァガアアアアアアアアアアアアアアアンッ！！！

雷鳴のようなエキゾーストを絶叫し……景色が消えた！！

咄嗟に展開した体表の魔力に、もはや質量さえ伴った風が叩きつけられていく！

「ぬぐあああああああああああああ！！！」

暴れだしそうになる前輪を、上から魔力を噴射することで路面に押さえつける！！

――バゴッ、バゴッ……！！

断続的に聞こえてくる破砕音は、進行方向にあった民家やら何やら、障害物をシールドがなぎ払い、突き抜ける音。

どちらにせよ……地上にいては、『王』に一撃を加えることはできない。

なら、どうする……？

「使ってみるか……魔力資質ってやつを！！」

これまでの俺の戦い方は、ただ魔力を振り回しているだけだった。

大した知能の無い暴走体や傀儡兵、雑魚騎士にはそこそこ戦えた。

だけど、この守護騎士どもには通じない。チビ騎士にやられた時のように、あっさりと破られてしまう。

……今こそ俺の魔法を、一つ上のステージに、進める！

「……」

スロットルを操作し、『王』の攻撃を回避しながら意識を集中する。

これから行うのは、スターライトの応用だ。

（周囲の魔力を集めて……）

――ギュウウウウウッ……！！

右手の魔力結晶に、魔力が集まってくる。『王』が馬鹿みたいに

魔法をばら撒いて、一帯の魔力濃度が異常な濃さになっていたこともあり、ひどくスムーズだ。

「ひゃはははっ！　涙ぐましいねぇ……！　残飯をかき集めて、威力の足しにしようって！？」

「ふんっ……」

逆にそれを、嘲笑で否定してやった。

集めた魔力を、右手を通じてバイクに伝播させる。

カウルからフレーム、フレームからタイヤ、タイヤから地面へ……

……

「大ハズレだ、バーカ！！」

『結合』、させる！！

ふわっ……と、バイクのフロントが空を向く。

ウイリーじゃない。ただ単純に……目の前に『道』が出来ただけだ。

空へと繋がる、魔力の道が！！

「ウイング……！！　ローーーーーーーーーード！！」

駆け上がれえええええええええええっ！！

――――ギャオオオオオオオオオオオンッ！！！！！

傾斜２０度を越えるスロープを、お構い無しに『スレイプニル』が駆け上がる！

目の前だけにウイングロードを展開していたんじゃ間に合わない！

！

先へ、先へ……！！

――……ギュウウウウン！！

「なっ……！？」

圧倒的な速度で俺をリードしていた『王』が、驚愕と共に振り返り……あっという間に、視界の後方へ消えていった。

「ぐ……おおおお！！」

リアブレーキと魔力放出と気合と根性で１８０度転回！！

真正面から、『王』に向けてスロットルを開ける！

――ガアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！

テレポートでもしたように、あっという間に距離が縮まる。『王』ご自慢の速度が、そのまま回避不能の状況へと追い詰めた。

「くっそおおおおおおおおっ！！」

――ビュインッ！！

決死の思いで左手をハンドルから放し、魔力刃を展開。

狙いは……！

「その翼！　貰ったぁぁ！！」

――斬ッ！！

「――、あ」

ばさっ……と、羽根を撒き散らしながら地上へ堕ちていく、『王』の両翼。

信じられない……そんな表情で、呆然とソレを見つめる『王』。

そして……

「……あああああああああああああっ！！」

数秒後、コントロールを失った『王』が地上の重力に捕まり、墜落していった。

――ガキンッ……

バイクを通常形態に戻し、ウイングロードで地上へ……『王』の墜落地点へ降下する。

「ぜー……ぜー……！！」

なんてバイクだ……マリーの奴滅茶苦茶しやがって……！

『ふむ。最高時速毎時５３０ｋｍか……出力を抑えてしまえば、こんなもんか』

今、なんつった……？

「ふ、ふざけんな……こんなバケモン、これ以上パワー増やしてどうする!?　最大値いくつなんだよ!?」

『９１３ｐｓが理論最大値だが？　すぐに作業に取り掛かってもいい』

「……遠慮しとく」

マリーに冗談は通じない。

会って一日で、それを痛感した。

『王』は……ああ、いたいた。民家に墜落したらしい。運のいい奴め。

「よう、王様……ご機嫌麗しゅう？」

ウイングロードの上から、見下しながら言ってやった。

「……てめえええええええっ！！」

プライドを打ち砕かれた『王』は、そこいらのチンピラのように、力任せに拳を振るってきた。

「……」

ぱしんっ、と左手で軌道を逸らし……

――ドゴッ！！

「ぐっ……！」

ボディブロー一閃。

「おりゃあっ！！」
続けて、腹部を思いっきり蹴り飛ばし、叩き落す！！
――ドガンッ！！
再び地面に背を叩きつける。
（……やっぱりな）
ウイングロードを解除し、バイクから降りた。
「がぁッ……！　このォっ！！」
やけくそに放たれた、残心も何も考えないハイキック。
スウェーバックで回避し、軸足を払う。宙に踊り、全くの無防備になった背中に、膝を叩き込む。
「あああああああああああああ！！」
――ズバババババババッ！！
装束から全方位に向けて、砲撃魔法・射撃魔法がバラ撒かれる。
俺に当たりそうな弾だけを撃墜。
「何で、何で、何で……！！　練習したのに！　いっぱいいいっぱい、たくさんたくさん殺したのにいいいいいいいいっ！！」
がむしゃらに振るわれた、ただ威力が大きいだけの拳を、魔力を収束させた左掌で受け止める。
「……確かに、一撃一撃の威力なら、俺はお前には勝てないさ」
――ビュンッ！！
駄々っ子のように暴れ、残った右手で捌く。
――ボバッ！！
爆炎が迸る……寸前に、腕を上に跳ね上げる。爆炎は、空しく空を焼いた。
「お前の攻撃は、ロクに俺に命中しない。何でだろうな？」
「知るかあああああああああっ！！」
――ギュッ……パスッ……
攻撃魔法を発動しようとした瞬間に、ストラグルバインドを発動する。
「ぐっ……は、放せ！！」

装束が明滅し、片っ端から無効化されていく。
「発動タイミングも、攻撃範囲も考えない。ただデカい魔力を、威力にだけ重点を置いた術式に乗せて、闇雲にばら撒くだけ」
確かに、初見では驚いた。狼狽して、対処に遅れたけど……メッキが剥げればこんなもんだ。
「下手なんだよ、お前は。戦い方が」

傲然と、言ってやった。
「抵抗しないサンドバッグを殴って、いい気になってたか？」
――ドズッ、ドズッ、ドズッ！！！
三度、腹部に膝蹴りを叩き込む。
「はッ、あぁッ……！！　な、何で……？」
がくがくと膝が震え、顔色が青白くなっていく。
「……痛みは無くても、呼吸をして、酸素を供給することができなければ、肉体は機能を低下させる」
……こいつは、油断と慢心の塊だ。

自分には強大な魔力がある。だから負けない。

自分は痛みを感じない。だからいくら攻撃を喰らっても平気。

自分には守護騎士がいる。だから力を磨かなくても大丈夫。

……下手に初期能力値が高かったからこそ、それが仇になった。
もしこれで、俺と同じように絶え間ない鍛錬を重ねていたら……きっと、俺は勝てなかったに違いない。
「……終わりだ」
左手の魔力刃にストラグルバインドを。右拳に封印魔法を、それぞれ纏わせる。

――ザンッ！！
漆黒の装束を切り裂き、無防備な地肌を露出させる。
「あああああ！！放せってんだよおおおおおおおお！！」
影を刃に変える。だがそれは、さっきまでの鋭さも大きさも無く、脆弱なシロモノだった。俺の身体を貫くことには成功するが、致命傷にはなり得ない。
魔力刃を一閃。ぱりん……と、刃は儚く砕け散った。
「……ひっ！？」
いよいよ身を守る術が無くなった『王』に、拳を振り下ろす！！
「シーリング・インパクトッ！！」
――ゴゴンッ……！！
とても肉体を殴ったとは思えない感触。だが確かに、俺の右拳は……それに付随する封印魔法は、『王』のリンカーコアを確かに捕えた。
「あああああ……！！」
力の源泉を塞がれ、苦しむ『王』……いや、そこにいるのは既に、ただの無力な女に過ぎなかった。
「嘘だ……こんなの、嘘だ……！！」
見る見るうちに萎んでいく、凶悪な魔力。
「私が、『闇統べる王』である私が、負けるなんて……そんなこと、あるわけがッ……」
――ザッ。
と、足音。
「……魔力の供給が途切れたからだろうな。守護騎士達は、溶けるように消えた」

バリアジャケットに無数の切り傷が刻まれたクロノ。
「あいててて……けっこー強かったな～……アルフ、だいじょぶ？」
髪留めが吹っ飛び、ボサボサ髪になったフェイト。
「折れちゃいないよ。フェイトこそ……」
打ち身で青あざを作ったアルフ。
それぞれ三者三様に、満身創痍だった。
中でも、一番傷が多いんじゃないかと思うクロノは、それをおくびにも出さず、苦しむ『王』の目の前で足を止め、言った。

「闇の書の主。殺人・民間人襲撃・時空法違反・公務執行妨害の罪により、あなたを逮捕する」

……何はともあれ、これで解決か……？
いや、待てよ……？　何か、忘れているような……？　何かを忘れている。何か、何か……――！！　そうだ！！
「……なのはっ！！」
『は、はい……！？』
「リンカーコアは、どんな様子だ！？」
『え……？　相変わらず、反応あんまり無いけど……』
そうだ……『王』を倒したなら、なのはのリンカーコアが再生するはずだ！
それで、再生してないってことは……！
「まだだ！！」
まだ一人、守護騎士が……！結界魔法の使い手が、残っている！！　残った魔力で維持しているんだ！　もう一撃、封印を……！！
――……キュゴンッ！！
「うあっ！！」
そして……突如として発生した加速感に、身体を真横に吹き飛ばされた。
「秀人！　……ぐあっ！！」

クロノも不意打ちで蹴り飛ばしたのは……

あの日、結界をあっさりと破って進入してきた仮面の男だった。

「……てめぇ！！　邪魔するな！！」

拳を振り上げ、振り下ろす！

「邪魔をしているのは、そちらの方だ」

――パシッ……

それは、あっさりと受け止められてしまった。

ぎちぎちと拮抗。

「何すんだよっ！」「この野郎！」

フェイトがバルディッシュを振るい、アルフが射撃を放つ。

それを、流れるような動きで回避し、間合いから脱出した。

「……守護騎士は四人。鉄槌の騎士は欠員。剣の騎士、盾の守護獣は敗北……さて、残りは何人かな？」

「……！！」

そいつは、まさか……！

「湖の騎士。高町なのはのリンカーコアを奪った」

あの時も、今も、ここにはいない。まさか……！

「……こいつが保険にしていたのだろう。『湖』は現在、結界の外で待機している」

「！　エイミィ！」

『了解！』

早速、サーチを任せる。だが、奴ら守護騎士には気配というものが戦闘中以外はほとんど無い。本気で隠れられたら、アースラのレーダーでも見つけられるかどうか……！

「そうそう、『湖』は、直接的な戦闘力こそ低いが、ある技能があってな」

「おりゃあああああっ！！」

フェイトとアルフの射撃魔法を難なく回避しながら、言った。

「闇の書に記された魔法と蓄えられた魔力を、ある程度まで使用する権限があるんだよ」

――――ガッゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッッ!!

「!!　な、何だ……!?」

超巨大な雷が、強装結界の一箇所にピンポイントで降り注ぎ……車の強化ガラスをエマージェンシーハンマーで叩いたように、砕き破った!!

「……、状況を報告!!」

一番先に復帰したクロノが、アースラに要請する。

『……強装結界、術者の半数が戦闘不能!!　維持は、できて数分!!　どうしよう……逃げられちゃう!!』

くっそ……!　最悪だ!!

クロノたち三人も守護騎士との戦闘で消耗している今、まともに戦えるのは俺だけだ。

こんな状態じゃ、クロノと俺のリンカーコアを『結合』させても大した意味はない。

だが仮面の男は、俺に対しては一切の戦意を見せず、『王』の身体を無造作に抱え上げた。

「……彼女は今日、敗北を知った」

そして、俺達はその意図を知る。

「自身の弱点も痛感したことだろう」

「まさか、お前……」

「下らぬプライドを捨てた彼女は、真に強くなる。……お前達のおかげでな」

仮面の向こうで、はっきりと……嘲笑を浮かべた。
「……ッ！！」
俺とクロノが駆け寄った瞬間、透明な檻のようなものが俺達を包み込んだ。
「クリスタルケージ……こんな高等魔法を、一瞬で！？」
技巧に優れるクロノがかなり驚いていることから、それがいかにデタラメな技量なのか、よくわかった。でも、こんなもん！！
「だぁりゃあああああああああああああっ！！」
――――バギィンッ！！
正拳突きで、叩き壊す！！
「こんなガラス一枚……！！　って、うおおっ！！」
――ぎゅるるるるるっ……！！
破壊をトリガーに、更に別の拘束魔法が仕掛けられてやがった！！
「くっそおおお！！　卑怯だぞてめぇ！！」
「そうだそうだー！　正々堂々たたかえー！」
見れば、隣ではフェイトとアルフが同じように転がされていた。
「……とはいえ、リンカーコアの封印とは厄介だな。下手に手を加えれば、リンカーコアそのものが破損してしまう」
無視すんな！！
「……お前ほど偏った能力も珍しいな」
魔力操作と、強化魔法……それから、リンカーコア結合。その三つにだけ突き抜けた三角形が、俺の能力グラフだ。
「……生憎、取り柄が少なくてな」
暴走体相手に、死ぬような思いで磨いてきた封印魔法だ。そう簡単に破られてたまるかっての。
「……短く見積もって、三ヶ月といったところか」
三ヶ月。……俺の封印魔法が、効力を失うまでの期間だ。長いやら、短いやら……でもとにかく、向こう三ヶ月は、敵の襲撃は無い。
それだけが、不幸中の幸いだろう。
「では……」

「待てッ！！」
去っていこうとする仮面の男を、呼び止める。
「お前は、誰だ！？　何の目的があって、闇の書に手を貸している！？」
ぴたりと足を止めた仮面の男は、少しだけ考えたようなそぶりを見せる。
「……我が名は『追跡者（チェイサー）』。闇の書の完成を目指す者」
追跡、者……？
意味を問いただすより先に、転移魔法で『王』ごと逃げられてしまった。
「くっそ！　なんだよアイツ！！」
同時にバインドが消滅し、身体の自由が戻ってくる。
『強装結界、解除……通常の隔離結界へ移行しました』
オペレーターの悔しげな声。試合に勝って……勝負に負けた。そんなとこだろう。
くいくい、と服の裾を引っ張られる。フェイトだった。
「ひでと、戻ろ？」
……そうだな。ここにいたって、仕方ない。
「そうだな。なのはといろいろ、話もしたいだろ」
「うんっ！！」
ボサボサになってしまった髪を整えながら、快活に笑う。
「アルフ、どうしたの？」
フェイトの問いに、挙動不審に辺りを伺っていたアルフがびくっとなった。
「え？　ああ、いや……ユーノはどこだろう、って……」
もじもじと、消え入りそうな声量で言った。
「……諸々の説明は、アースラに戻って、休息を取ってからにしよ

う」
　クロノが場を収め、全員でぞろぞろと転送ポートに向けて歩いていく。
（三ヶ月……か）
言うなれば、嵐の前の静けさ。
　最短で三ヶ月。それで、俺が施したリンカーコアへの封印は解ける。追跡者が言ったとおり、『王』は、更なる強敵となって俺達の前に再び立ちふさがることだろう。
　だけど、恐れることは無い。
「うゅ？」
「ん？」
　歩きながら、フェイトとアルフの肩に手を置く。
「頼りにしてるぞ」
　最初、ぽかんとしていた二人は……
「うんっ！」
「おうっ！」
　サムズアップと共に、頷いた。
――俺には、こんなにも大勢の仲間がいるのだから。
闇の書。
王。
守護騎士。
追跡者。
それぞれの思惑を胸に、このバッドエンド確定の物語は序章を終えた。

第四十七話（後書き）

ここから、日常編が少しの間だけ続きます。
エンディングの案はいくつか出来ていますので、どうぞ最後までお付き合いください。

第四十八話（前書き）

クビは免れました。

、、、話は変わりますけど。

普段、授業中はおしゃべりにケータイに居眠りに好き勝手する奴が、行事になった途端「ちゃんとやれよ！」とか言ってくるのって間違っていませんか？

第四十八話

パパの転勤が決まった。

単身赴任ではなく、ママも私も、生まれ育った関西地方から、関東地方のそこそこ大きい街へお引越し。

よくわからないけど……パパは相当に仕事が出来る人であったらしく、東京では支社長の待遇だそうだ。

この先十年以上は住むことになるということで、思い切って家を買った。ローンではなく、豪儀にキャッシュ一括で。

豪邸……というほどではないが、写真を見る限り、家族で住むには十分に快適そうな、一軒家だった。

当然、今の３ＬＤＫのマンションよりも部屋は増える。

物置にでも使うのかと思っていたら、「そろそろ下の子を……」とか、子供の前で言わないで欲しいようなことを言っていた。ほんと、勘弁して欲しい。

いくら小学校低学年でも、ちゃんとわかってるんだよ？

まぁ、それはさておき……実際に引っ越すまで、大体一ヶ月くらい。

おかげで私も、関西弁の訛りを矯正するのに一苦労、二苦労……ちょっと大変だった。

けど、いつも帰りが遅いパパと、練習という名目でお喋りできるのがたまらなく楽しかった。

一ヶ月が過ぎた。

学校の友達とお別れするのはちょっと寂しかったけど、悔いなくお別れできたと思う。

がらんと広くなった家で、クリスマス・イブと引越し祝いを兼ねたごちそうを食べて、翌日の朝、出発した。

生まれて初めて乗る飛行機に興奮する私を見て、パパとママが苦

笑する。

そしてそれが、最後に見た両親の笑顔だった。

最初に感じたのは、衝撃だった。

ぐらぐら、なんて易しいものじゃない。まるで、巨大なミキサーに放り込まれたように平衡感覚が無くなり、今足をつけているのが床なのか天井なのかすら、わからないほどの揺れだった。

何もわからないまま泣き叫び、両親にしがみつき……そして、暗転。

あまりの衝撃に、失神していたおかげで気づかなかったけど……多分、墜落したんだろう。

次に感じたのは、熱だった。

「……あ、」

意識を取り戻した私が見た物は、ほんの数分前まで『飛行機』と呼ばれていたスクラップの山と、燃え盛る炎。

そして……あちらこちらに散らばる、赤黒いもの。

それは、太かったり細かったり、大きかったり小さかったり、真っ直ぐだったり曲がっていたりと様々な形があった。

だけど、その色は……生々しい赤と、煤けた黒の二色のみ。

腐った果実のように黒い表皮が弾け、中から赤が覗いていた。

「……！　あ、ああ……！」

目のピントが合い、焦点を結んだ先……その赤黒いものの全容が、目に飛び込んできた。

ソレは、歪んだヒトの形をしていた。あるべき場所にあるべき部

位が無い。けれどソレは、紛れも無く、人だった。

……俗に、『死体』と呼ばれる物体だった。

「ひィっ！！」

悲鳴を上げる。だが、逃げられなかった。

別段、酷い状態にはなっていない。足も多分繋がっているし、大した出血も無い。

「う、ん……！」

うつぶせのまま、何とかして後ろを見る。

熱で変形し、ドロドロに溶け固まった金属。黒焦げになった、何らかの残骸。

下半身の上に、そんなものが固まった数百キロはあろうかという大量の瓦礫が積もっていた。腰から下がどうなっているのか、自分でもよくわからない。

シートの残骸がクッションとなっていなければ、下半身をすり潰されていたに違いない。その点、私は幸運であり……不運だった。

「パパ……ママ……？　どこにいるの……？」

きょろきょろとあたりを見回し……私の前方、数メートルに投げ出された両親の姿があった。私と同様、瓦礫に埋もれ、自分ひとりでは動けそうにない。だが人一人いれば、なんとか動かせそうな大きさだ。

「……う」

その手が、僅かに動く。

まだ、生きている……！

「どいて！　どいてよ！」

瓦礫から抜け出そうと足掻くが、数百キロもの重量を動かすには遠く及ばず……ただ、見ていることしか出来なかった。

そして……激しい炎は、すぐ目の前にまで迫ってきていた。

「逃げ、て……げほっ、げほっ……！」
熱に焼かれ、からからに乾いた喉で叫ぶ。だが、両親は動けない。なにせ、高度数千メートルから落下したのだ。今このとき、存命しているだけでも十分な奇跡だった。
当然、無傷なはずは無いだろう。身体の内部は、ぐちゃぐちゃになっているに違いない。

「……や、て、……まえは、……子、だ……」

「は……て……、あな……は……、……あわせに」

両親の、おそらくは最後の言葉。
それが、聞こえない。轟音にかき消され……両親の言葉が、届かない。
そして、いよいよ炎が、両親の身体を舐め始めた。
「いやぁ……！　いやあああぁぁぁ……！！」
泣いても、叫んでも……炎は、その歩みを止めない。
両親の肉体を、末端から物言わぬ消し炭にしようと、侵攻してくる。

「「……はやて、……うび、……めで……う」」

聞かないといけない。なのに、言葉は届かない。いくら耳を澄ましても、周囲の音が邪魔になって、届かない。
「あ、あああ……！　あああああああああああああああああ！！」
叫んでも、暴れても……私は、その場から一歩も動けない。
そして、無力な私の目の前で……両親は、炎の向こうへ消えた。

その日は、十二月二十五日。

――世間は、クリスマスだった。

◆　◆　◆　◆

「パパ……ママ……」

……自分の声で、目が覚めた。

目を開けると、そこは見慣れた住処。埃っぽい淀んだ空気と、カーテンで囲まれた、薄暗い空間。

背中の感触から察するに、ソファに転がされているらしい。

「……あれ？」

……なんで私、こんな場所に？

――ズキッ……！！

「うぐっ……！！」

腹部に走る鈍痛。

「う、うう……！！」

身体を丸めて痛みを耐える。

その痛みが、敗北の記憶を呼び覚ます。

「畜生……！」

あの『鉄槌』の仇に、返り討ちにされて……

「……」

恐る恐る足に力を込めてみると、幸いなことに動いた。

けど……自分を満たしていた、無敵の全能感がキレイさっぱり消

え失せている。
「……はぁ！！」
気合を入れ、胸の奥……リンカーコアに意識を集中する。
――ゴウッ……！！
魔力……一応は、出せるか……精々、美香と同程度だけど。
でも……
自分の影に、闇に、呼びかける。
「おい。……おいってば」
――……。
反応が、無い。
「……ふむ」
つまり、こういうことだ。

あの男の魔法。あれには、私の力を戒める効果があった。それは、確かに私に命中し、効果を発動した。
だけど、それによって封じられたのは、私自身の力ではなく、闇の書の力だけだった。

「運がいいやら、悪いやら……」
確かに、負けた。言い訳のしようが無いほどの、完敗。惨敗だった。
けど、妙にさっぱりした……というか、冷静に事態を飲み込めた。
「私、まだまだ弱かったんだなぁ……」
慢心……それに尽きるだろう。

「その通りだ」

――――！？
「だ、誰！？」
「……力を得たものは、それに溺れる。過去に、己の無力を悔やん

だ者なら、特にその傾向は強い」
そいつは、私の寝そべっていたソファーの真後ろの壁に、腕を組んでもたれかかっていた。
「……降って沸いた、巨大な力。ゲーム感覚で試しこそすれど、本気で磨く事は無く……井の中の蛙に終わる」
「誰だ……って、聞いてるだろ！！　答えろ！！」
そいつは、変な仮面を被った男だった。
表情は読めず、声色も平坦。
体格から判断するに、多分男だけど……それすらも怪しい。
とにもかくにも、胡散臭い奴だ。
その胡散臭い奴は、私が聞いているのか、それすら興味なさ気にべらべらとしゃべり続ける。
「それ故に……力を得たとしても、結果的に……無力であることに変わりは無い」
「！！！」
無力。
「お前に……！」
無力。その一言が、私の逆鱗に触れた。闇を操れない……そんな不安感を一瞬で消し飛ばす。闇の書の補助は無い。だから、
「お前にッ……！！」
――リンカーコア励起。魔力精製。術式構築。術式名称……
今の自分にできる最大限の技術を駆使して、
「何がわかるッ！！」
――『ナイトメア』！！

叩き潰す！！

――ッドオオォォンッ！！

発射された砲撃は、室内を余波で滅茶苦茶に破壊し、不審者に突き進む。

だが……

「……ヌルい」

――バチイイイィンッ！！

仮面の男が展開したシールドに弾かれ、弾道を天井へ逸らされてしまった。

そんなに硬いシールドでは無かった。だが、進行方向の斜めに展開されたシールドは、砲撃のベクトルを逸らし、最小限の動きのみで、無傷を勝ち取った。

「くそったれ……！」

二発目は……出さない。

私の中の冷静な部分が、撃っても無駄だと、冷酷に判断する。

「何で、どいつもこいつも……！」

私の力を、簡単に対処しやがるんだ……！

「……娘」

仮面の男が、またあの平坦な口調で、私のことを呼んだ。

「……力が欲しいか？」

……答えるまでもない、質問だった。

いや、きっとこいつは、私がなんと答えるかも承知の上で、それを聞いている。

「だったら何よ……」

「答えろ。力が欲しいか？」

……曖昧な返事は、聞き入れるつもりは無いらしい。

「答えろ。

……力が欲しいか？

守護騎士の仇を取れるだけの力が。

憎い仇を殺戮するだけの力が。

今度こそ、何者にも屈せず、何者をも這い蹲らせるだけの力が」

だから……答えるまでも無いんだっての。

「欲しいよ」

力が欲しい……けどそれは。

「でも、お前には頼らない」

……私の復讐は、私自身でのみ完結させる。

「……では、どうするというのだ？」

……はい？

「お前は、どのようにして……一人で力を得るというのだ？」

……。

「また、その辺の適当な奴でも使って練習する……」

「……」

仮面の男は無言だけど、明らかに呆れたような気配を見せた。

「な、何！　文句ある！？」

「……何の進歩も無い」

「うっせー！」

何なんだ、コイツ！！

「お前が真に力を欲するというのなら……協力してやろうと言っているのだ」

……胡散臭い。とにもかくにも、胡散臭い。

まずは、コイツの素顔を見ないことには……

「……本当に？」

声色を変え、恐る恐る……弱弱しく聞き返す。

「……本当に、協力してくれるの？」

意図して泣き顔を作り、『孤独で哀れな少女』を演出。

「私の味方になってくれるの……？」

「……技術の供与は惜しまない」

堅苦しい言葉……でも、僅かに柔らかい雰囲気を感じた。

……嘘を嘘と見抜かせないコツは、幾分かの真実を織り交ぜること。

だからまぁ……心細いというのは、守護騎士を失った今の私の本音だ。

「……あ、！」

――ガタッ！

ソファから下りようとして、転げ落ちる。

……もちろん、フリだ。

「……」

仮面の男が、すっと手を差し出す。

「ありがとう……」

ぐっとその手を掴み……

――ギュルルッ……！！

「！？」

そのまま、私の手ごと、拘束魔法で縛り上げる！

「ひっかかってくれて、本当にありがとう……！」

「貴様……！」

さすがに、反応が早い。すぐさま魔法に亀裂が入り、砕かれそうになっている。だが、それよりも早く発動させる！

「……ストラグルバインド！」

……『鉄槌』が最後に蒐集したガキが持っていた、術式の一つ。
効果は、対象に付与された全ての魔法効果のキャンセル。
一見、とても便利そうな魔法だけど……実のところ、使いどころは殆ど無い。
例えば、魔法で強化された武器での攻撃を受けるとする。その強化魔法をストラグルバインドで打ち消したとしても、単純な武器での一撃がまだ残っていて、結局はそれも防がなければならない。つまり、二度手間を食うよりは、最初からストラグルバインドの分の魔力も費やして、防御魔法で防いだほうが速いのだ。
それ故に、この魔法は極端に習得者が少なく、マイナーな魔法となっていたのだろう。

――ボシュンッ……！！

仮面の男の姿は、魔力の塵となって掻き消える。
「やっぱり……」
あれは、本当の姿じゃなかったんだ。

さーて、そのツラ拝んでやろうっと。
目の前に人影は見当たらない。逃げられたんだろうか？
――ぐにゅっ
……その考えは、あっけないほど早く否定された。
つま先にめり込む、生温い感触。見下ろした先にあったのは……

「……猫？」

灰色っぽい毛並みの、上品そうな猫。それが、リビングのフロー

リングにぐでーっと伸びていた。
「……まさか、コイツが？」
首根っこを掴んで、目の前まで持ってくる。
どこからどう見ても、猫だ。こいつが、あの仮面の男の正体……？
「ん、んん～……？」
にわかには信じがたいが、割と大き目の魔力を持っている。正確には、『大きい魔力の支流』とでも言うべきか。大本になる何者かの魔力を分け与えられているらしい。
システム的には、守護騎士に近いか。
「……残念だったね」
うまいこと私に取り入って、利用するつもりだったんだろうけど……私は、他人に利用されるのが大きらいなんだ。
パパの財産を狙って、病室にまで押しかけてきた顔も知らない親戚に、私を出汁に視聴率を稼ごうとするマスコミ。
そんな輩ばかりを見てきたおかげで、すぐにわかったよ。
こういうのを、『ミイラ取りがミイラになる』って言うんだっけ？
でも、どうしよう……こいつが目を覚ましたら、絶対に逆襲される……
それどころか、正体を知られたからには……とか言って、マジで殺られるかも……
「……参ったなぁ」
守護騎士がいれば……闇の力があれば……
「ん？」
私を補助する守護騎士の不在。
私を補助すると言った目の前の猫（敵対予定）。
……コイツ洗脳して、私の奴隷にできないかな？
魔法の指南役と、守護騎士の代用品を一挙に手に入れられる。
「……やってみるか」

物は試しだ。
「ん……っと」
猫と、大本（主人）を繋ぐ魔力のラインに、自身の魔力を接続する。
途中にあったプロテクトと思しき障壁は、強引に破壊して。
これで、準備は整った。
「……」
どきどきする。そういえば、こうやって魔力を細かくコントロールするのは、初めてだ。
攻撃魔法や防御魔法なら、目分量に気分量で大雑把に魔力を注げば問題なかったんだけど……これは、ほんのミスが命取りになる。
魔力の総量を変えず、中身だけをそっくりそのまますり替える。
要は、人工心肺の魔力版だ。
「……ん、このっ！！」
私の魔力を注ぎ込みつつ、主人からの魔力の流れを徐々に遮断していく。
魔力の流れは細かくて、緩急があって……流れる水以上に、複雑だ。
「えいっ、このやろっ……！」
掴もうとすればするだけ暴れる魔力流を調節し、時にせき止め、時に解放し……私の魔力の比率を、徐々に高めていく。

汗をだらだら流して苦戦すること……体感時間で数十分。
「……いぃよっしゃあ！！」
……猫に繋がる魔力のラインは、私の物を一本残すのみとなっていた。
「なーんだ、うまいじゃん、私！！」
少し時間は掛かるけど……我ながら、かなりうまくいった。

魔力流への干渉を阻むプロテクト……これは、数が多ければ多いほど防御率もアップする。だがそれは、折角の魔力流に堰を作ってしまうのと同じだ。

だから私は、その『堰』を、『水門』に置き換えた。

普段は、全くプロテクトの意味を成さない。水門で言えば、上がりっぱなしの状態。

そして、今回のように……私との魔力流へ干渉するような真似を受けた際に、『水門』が下がり、『堰』となる。

簡単に言えば、ＰＳ装甲（フェイズシフト）と、ＴＦ装甲（トランスフェイズ）の違い。

……パパのパソコンに入っていたアニメが役に立つとは。

完全に私の魔力に染まった影響なのか、灰色っぽかった猫の体毛は、漆黒へと変じていた。

「あはっ……いいね。『魔女の手下』っぽくて」

どうせなら、黒ローブに三角帽子、ついでに箒でも用意してやろうか。美香には大ウケするだろうな。

「……にゃあ」

あ、起きた。

「お前は、誰だ？」

確認……そして、最後の仕上げのため、そう聞く。

「……私は、リーゼ……」

ぼうっとした様子で名乗った。

リーゼ……それが、こいつの名前か。

「リーゼ。お前の役目は何だ？」

「……闇統べる王、八神はやて。あなたに尽くすことです」

「ふふ……！」

やった……完璧だ。

「リーゼ。お前に、命令を与える」
「はい、我が主。何なりと」
……無表情なのが、少し気に食わないけど。ちょっと、呪縛が強すぎたかな？
まぁいいや。
「私に、戦い方を教えろ」
「はい、我が主。私の持てる全てを、献上致します」
今の私は、ただの無力な魔導師に過ぎない。
魔力は有限、特殊能力は封印。……まして、身体能力なんて小学生そのものだ。これだけのハンデを負ったのだから、これまでの戦い方なんて、出来るわけがない。
「……訓練に関して、一切の加減を禁ずる」
「外傷を負われた場合は、如何にいたしますか？」
ただの骨折だけでも、動きは確実に鈍る。切り傷を負えば、血だって流れるだろう。
「……訓練の継続に支障が出ない程度に治療。完全な治療は、一日の訓練を終えてからとする」
……自分の中の甘えを、消し去るために。痛みは糧に。
敗北の底から、這い上がってやる。
「首を洗って、待ってろよ……！！」
そして、今度こそリベンジだ！！

第四十八話（後書き）

次は……次は……誰の話にしようかな。
順当に秀人一家か、もしくは……とりあえず、お楽しみに。

第四十九話（前書き）

仕事が面倒で大変です。
フリーター時代は、気楽でよかったなぁ。

第四十九話

アースラの転送ポート。
――とんとん。
戦闘は終わって、そろそろ、戻ってくる頃だ。
――とんとん。
秀人さんと、アルフと……フェイト。
「なのはちゃん……もうちょっと、落ち着いたら……？」
――とん。
無意識のうちに行っていた貧乏ゆすりを止める。
エイミィを見上げる。
「……だって、何ヶ月も会ってないんだよ」
連絡だって出来なかった。
忘れてるなんて、絶対に無いと思うけど……どういう顔で会えばいいのか、分からない。
――ヴゥン……！
転送ポートが輝く。そして……
――バシュッ！！
光が収まり、前線メンバーがわらわらと戻ってきた。
けが人も多く、待機していた医療班がストレッチャーに彼らを乗せ、医務室へ走っていく。邪魔にならないよう、壁際に立って彼らを見送り……自力で歩けるメンバーの中に、ぴょぴょこ動く金髪を見つけた。
「あ」
「あ」
向こうも、私を見つけた。
「……」
「……」

私は、どう声をかけたものか思い悩んでいて……フェイトは多分、認識した光景に、思考が追いついていない。
口を半開きにして、ほけーーー……っとしている。その間抜け面といったら、もう……
「ぷっ……」
ああ……なんというか、笑えてくる。
「あ、ああ～～～！！　今、ボクのこと笑っただろ！？」
目を吊り上げ、ずかずかと歩いてきた。
「ごめんごめん……」
目の前にやってきたフェイトは、まぁ何と言うか……ボロボロだった。
バリアジャケットは解除しているから、服は小綺麗なワンピース。でも、髪はボサボサで、身体は土ぼこりでザラザラ。擦り傷や青あざも多い。
「大丈夫？」
「うん、へいきー」
にへら、と締まりの無い笑顔を浮かべる。
「おお、いたいた」
「ダメだよ、フェイト……ちゃんと手当てしないと」
と、人混みの中から秀人さん、アルフ、それにクロノが出てきた。
「……」
クロノは、ちょっとバツが悪そう。
「ごめんね？　怒鳴っちゃって……」
ちゃんと謝っておこうっと。
「いや……ありがとう」
あら、珍しい。クロノが素直だ。
「うひひひひ……」
と、エイミィがとても頭の悪そうな笑いと共に、クロノへ意地の悪い視線を送る。
「クロノくん、泣いちゃったんだもんね～？」

「ぐっ……！」
気まずそうに、恥ずかしそうに俯く。
「ふふふ、もう、クロノくんったら……」「エイミィ」
調子に乗って、更に何かを言おうとするエイミィを、秀人さんが遮った。
「は、はいっ！！」
条件反射のように直立不動となり、背筋をピンと伸ばすエイミィ。
「……あんまり、俺のダチをいじめてくれるな」
「はっ！　失礼いたしました！」
……よっぽど、怖かったんだろうなぁ。
横ではクロノが、「『ダチ』とはどういう意味だ……？」と首を傾げていた。
教えてあげてもいいんだけど……面白そうだから、黙っていよう。
「……ま、いいや。艦長への報告もあるし、戻ろう」
「はーい！」
と、私の目の前にいたはずのフェイトが素早く秀人さんに駆け寄り……あろうことか、腕にしがみついた。
「な……何してるのよおぉぉぉ！？」
慌てて、フェイトを秀人さんから引き剥がす。
全く、油断も隙も無い……！！
でもフェイトは、不満タラタラな顔で、しぶとく秀人さんの腕にしがみつく。
「いいじゃん別に少しくらい！！」
「ダメったらダメ！」
「少しくらいボクに貸してくれたっていいじゃん！」
するっと私の手から逃れ、ひょいっとジャンプし……秀人さんの右肩に、横座りした！
「こ、こらぁぁぁ！！」
頭を両腕で抱え込んで、なんて羨まし……じゃなくて！！
「秀人さん、怒っていいんだよ！？」

そう言ったのに、秀人さんは何故か私を宥める。フェイトを、背負ったまま！！

「まぁまぁ……全然重くないし、いいって」

「でも……！」

「久しぶりに会ったんだし、このくらい許してやってもいいんじゃないか？」

むぐぐ……まぁ、秀人さんがそう言うなら、ちょっとくらいなら……

話の流れから、自分の勝利を感じ取ったらしいフェイトは、

「べー！」

勝ち誇った表情で、ぺろ、と舌を出した。

「こ、こら……！」

秀人さんが慌てて止めさせたけど……手遅れだった。

――ぷちんっ……

堪忍袋の尾が、ブチ切れた。

「こ、の……！」

カーーーッ……と、自分でも分かるくらい、頭に血が上っていくのを感じる。

「返せーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！」

そんな、目的語が抜け落ちた叫びを上げ、フェイトに飛び掛かる！

「か・え・せーーーーー！！　秀人さんは、私のなんだからあぁぁ……！」

秀人さんの左肩に跨り、フェイトをぐいぐいと押す！

「わたすもんかー……！　ひでとは、ボクのもんだー！」

フェイトも落とされてたまるか、と押し返してきた！

「ふぇ、フェイト……」

「……ど、どうしようか？」
おろおろするエイミィとアルフ。
「……知らん。先に行ってる」
諦めた様子で、さっさと部屋を出て行くクロノ。
「うにゃー！」
「このぉー！」
負けて……たまるかあああああああああああ！！
◆◆◆◆
「……うう」
酷い目に遭った……まだ両肩がギシギシいってる気がする……
「……というわけで、しばらく襲撃は無いものと思われます」
クロノの報告を横に聞きながら、両肩をほぐす。
「ごめんなさい……」
なのはが、俺の左手を握りながら謝った。
じとーーーーっと、俺の右手を握るフェイトをやぶ睨みする。
「……ふぁあああ……」
フェイトは我関せずと、大あくびを隠しもしない。
「闇の書の主に関しては、秀人の方が詳しく説明できるでしょう」
「お願いできるかしら、秀人さん？」
……っと。俺か。
まず、説明から始めるか。
「封印魔法が届いたのは、奴のリンカーコアのみ。闇の書は、残念ながら取り逃がしてしまいました」
詰めが甘く、逃げられてしまったのは痛恨のミスだった。全く…

…俺も、まだまだだな。
でもまぁ、当面の危機は無いだろう。
「闇の書は、言ってしまえば魔力の増幅装置です。俺と同程度……まぁ、仮に１００として、それを１００倍の１００００に増幅するのが闇の書」
資質があれば、極めて危険な災厄を齎すシロモノだが……
「元になる数……つまり、奴自身の魔力が１になってしまえば、１００倍にしたところで、それは１００。ただ大きいだけで、それ単体では脅威にはなりえません」
大きな魔力があっても、それを御する能力がほぼゼロだった奴は、何も出来ずに大人しくしているだろう。少なくとも、襲撃してくるような馬鹿ではないはずだ。
「……なるほどね」
「猶予期間は、なのはを参考にすればいいでしょう」
なのはは流石に聡明で、俺の言おうとすることをあっさりと理解していた。
「蒐集も、ある意味封印の一種。蒐集の影響が私から抜ける頃には、奴も同じく、封印魔法を破る」
そういうこと。
「現場での報告は以上です」
あとは、リンディさんの判断だ。
「……闇の書の細かい機能については、ユーノさんが現在、調査に当たっています。上がってきた報告の中には確かに、魔力の増幅という項目もありました。なので、秀人さんの報告は、十分論理が通ります」
なかなか、好感触だ。
「ですが、一点だけ。闇の書の主の魔力についてです」
はぁ……ダメか。
「増幅装置……とおっしゃいましたね。それはつまり、なのはさんと比べ、魔力の回復にも差が出る、ということでは？」

あちゃー……すっかり見落としてた。
「猶予期間については、あまり楽観はできませんね」
「……はい、そうです」
「同じ人物に一度だけ、という蒐集の制約があるにせよ、今のなのはさんは、魔法で自分の身を守ることが出来ません」
……だよなぁ。アイツ、復讐する気満々だったし、俺ではなく、弱体化したなのはを真っ先に襲うだろうし……
悩んでいたら、リンディさんがパンッ、と手を叩いた。
「護衛を付けましょう」
……護衛？
「なのはさんと同レベルの戦闘能力を持ち、常になのはさんと行動することが出来る、専属の『護衛』を」
……いやいやいや。
「いるわけ無いじゃないですか、そんな都合のいい人」
俺の変わりに、なのはが答えた。
「私並に強くて、あまり管理局の縛りを受けず、自己判断で行動できる人なんて……」
なのは並に強い……それは、クロノも当てはまる。けど、クロノは管理局の中でも比較的高い地位にいる。なのはにかかりっきりで護衛なんて、不可能だろう。
「それが、いるのよ……秀人君」
あれ……？
リンディさんが、気さくモードになった。
「さぁて、誰かしら？」
リンディさんの視線は、俺……ではなく、俺の右隣を向いていた。
……おいおい、まさか。
「……フェイトとアルフ、ですか？」
「ええ、その通り」

「いいんですか？　その……前回の事件の裁判だって、まだ……」
そう。フェイトはまだ、前回の事件の重要参考人のままなのだ。
容疑者、と言ってもいい。それが、護衛という名目で自由に出歩いて、後々フェイトの不利にならないんだろうか……？
「その辺りは、もう済んでいるから安心して」
今回のことがあろうが無かろうが、護衛……というか、フェイトとなのはをくっつけるつもりでいたらしい。
……色々と、根回ししたんだろうなぁ。黒いぜ、提督。
「それとも、嫌？」
「まさか！　大歓迎ですよ！」
即答で返す。
言い方は悪いが……手回しが済んでいるのなら、何の問題も無い。
「ははっ……やったな！　なのは！」
あれだけ会いたがっていた、大事な友達だ。
久々の再会どころか、これからはずっと一緒だなんて……嬉しいとか、そういうレベルじゃないだろうな。
「よかったわ。ねぇ、なのはさん、フェイトさん……なのはさん、フェイトさん？」
「なのは……？　おい、どうした？」
見れば、二人は時間が停止したように顔を見合わせて固まっていた。
一体どうした……と、思った矢先のことだった。

「……ウえええええええええええええエエエエぇぇエッ！？」

なのはが、素っ頓狂な声をあげた。
……いや、驚きすぎだろ。

「いいいぃやっほおおおおおおおおおぉ！！！　やったあああああああ！！」

フェイトが歓声をあげ、なのはに抱きつく。

「わあああああっ！？」

「フェイト、危ないってば！」

いきなり抱きつかれ、転びかけた二人をアルフが支えた。

「なのはー！　よろしくねー！」

百パーセントの、明るい笑顔。それにほだされて、なのはも笑顔になった。

「あ、あははははは……うん、よろしくね、フェイト」

少し照れている。

「ボク、ハンバーグとオムライスがいいな！」

「え、作れってこと……？　そっちの『よろしく』だったの！？」

「どっちも！」

「……もう、しょうがないなぁ」

そう言いながらも、満更ではなさそうだった。

そんな坩堝を遠目に眺めながら、我が家を思い出す。

「……あ、やべ」

今更ながら、別の壁が生まれた。

「部屋……どうしよう」

今現在の、俺達三人で住んでいるアパートは、元々は単身向けの物件だった。

なのは、ユーノと同居するにあたって、大家さんの了承は得たものの……更に二人増えたら、定員オーバーだ。

「護衛中は任務として扱いますから、皆さんにはお給料も出ますよ」

金銭的には問題なし、と。
んじゃ、まぁ……引越しでもするか。
「でもしばらくは、あの狭いＩｋか……」
準備期間を含めて、最低でも一月は、あの一室で暮らすことになりそうだ。
あの八畳一間に、五人……すし詰め・イモ洗いという言葉が、これほどまでに似合う状況もそう無いだろう。
風呂もトイレも流し台も常に満員。そろそろ本格的に夏だから、体温で更に暑苦しくて、動くたびに互いの身体がぶつかってしまう。
部屋の中は、なのはの本、ユーノの資料、俺のバイク用品、フェイトの玩具、アルフの雑貨で、足の踏み場も無くなって……
「……くくっ」
大変だといいうことが分かりきっているのに、つい笑ってしまう。
五人で暮らして、騒いで、じゃれ合って……そんな生活、楽しいに決まっているじゃないか。
「……秀人さん」
裾が引かれた。
フェイトと手を繋いだなのはが、にこにこと無邪気に笑いながら、言った。

「楽しみだね」

……ああ、そうだな。楽しみだ。
さて……なのは、フェイト、アルフ……残り一人は、どこ行った？
戻ろうとしていたクロノを捕まえた。
「ユーノはいつ頃戻って来る？」
何日も前から、姿を見ていない。
『ちょっと、調べ物をして来る』と言い残して、それっきりだ。
「先ほど、件のフェレットもどきから連絡があった。まだ少し調べ

たいことがあるから、先に帰っていて欲しい……とのこと、」
あいつ、目の前のことに集中しすぎて突っ走るからなぁ……やれやれ、仕方ない。

「駄目！　連れて帰る！」

……無理やりにでも連れ帰って、休ませよう。そう言おうとした瞬間、殆ど同じことを考えていたらしいなのはが、がーっと吼えた。

「みんなで帰って、みんなで晩御飯！　ご飯抜きなんて許しません！」

ふぅ……と、クロノがため息をつく。
「……だろうと思って、通行許可を人数分確保しておいた」
段々、いい意味で力が抜けてきたな。頑固な堅物も、いろいろと俺達に影響されているらしい。
「で、ユーノはどこにいるんだ？」
「無限書庫……まぁ、書庫とは名ばかりの、膨大な未整理データの山だ」
その中から、闇の書および、古代ベルカの知識を発掘しているらしい。
発掘……？　そんな、大げさな……
俺達は、実際に案内されるまで半笑いだった。

そして、転送ポートからその場所まで案内され……言葉を失った。

――山。

比喩表現でもなんでもなく、正真正銘、それは『山』だった。

それも、ギッチリと本を納めた書架が、四方八方どころか、果てが見えないほど上下に連なっている。

「……す、っげぇ」

試しに、近場にあった本棚に接近してみる。無重力のようだが、進みたい方向へ意識を向ければ、すんなりと移動できた。

「無限書庫には、あらゆる世界の出来事が、『本』という形になって絶え間なく更新されている。どこの誰が、何のために、いつ創ったのか、まったくの不明。そのあまりに膨大なデータ量は、活用するには難しくて、長年放置されていた」

クロノの説明を聞き、納得。

……確かに、ろくな検索装置も無い以上、自分の手でデータの山を掘り返すしかない。

そんな時間があったら、他のデータベースを使った方が早い。

……既存のデータならば。

ここにある膨大な知識の中にはきっと、闇の書に関するものがある。

ユーノはそう信じて、この場所に足を運んだのだろう。

「うわー！　何コレ何コレ！　たのしー！！」

飛行魔法ともまた違う感覚に、歓声を上げるフェイト。

「う……落ち着かないなぁ……」

逆に、アルフは居心地が悪そうだった。

「あんまり遠くに行くなよー？」

……まぁ、俺達以外に人はいないみたいだし、遊ばせておいても問題無いな。

「あいつは……ああ、結構遠くまで行ったんだな」

クロノがユーノの位置を探査し、僅かに驚く。
……この数日、こもりっきりで調査をしていたんだろう。あいつはどうにも学者肌というか、熱中すると時間の観念を忘れてしまう悪い癖がある。
「全員で行くことは無いだろう。僕が呼んでくるから、君たちはこの辺りにいてくれ。本は、自由に閲覧してくれて構わない」
と言って、クロノだけがすーーっと移動していった。
……途中、
「どれどれ……？」
おお……本そのものも、大判の図鑑くらいのサイズがある。
一冊を抜き出し、頁をめくる。
「……駄目だ、読めん」
「こっちも……」
ミッド文字もあまり読めないというのに、この本は更に複雑な文字がびっしりと埋めつくしていた。
隣の本を抜き、同じように捲る。最初に抜いた本とは、更に違う言語だった。
何冊も捲ってみたが、言語もバラバラ。たまに言語が同じように見えても、文体がバラバラで、結局違う言語だったり……『内容が分からない』ということだけが、共通だ。
「あ！」
と、俺と同じように、本を物色していたなのはが、驚いたように声を上げる。
「これ、日本語だよ！」
「え！？」
驚いて、その本を覗き込む。
「……ＪＳＳ・旅客機墜落事件概要？」
それは、一昨年のクリスマスに、世間を騒がせた事件の名前だっ

た。
……なんで、こんな物がここに。
「これ、一昨年のクリスマスに起こった事件だよね？」
変な気分……切迫感、とでも言えるだろうか。
何かに突き動かされるように、二人して食い入るようにその本の頁を捲っていく。
図鑑並みの厚みは伊達ではなく、途中、難解な表現や、意味不明な文字の羅列があったりと、読みづらかった。
だがそれでも、事件の概要、被害者の総数、……そして、原因が、極めて克明に、まるで、その時その場所で見てきたかのように記されていた。
「……あの事故、結局は原因が不明だったんだよね？」
「ああ。……でも、実際は違ったみたいだ」
読み進めていくと、原因の箇所に辿り着いた。
それによると、原因は……
「大規模な魔力噴出による、駆動系の破損……？」
おいおい……マジかよ。
「魔力噴出って……」
なのはが、強張った表情で呟いた。
魔力噴出。
それは、術式に乗せた魔法ではなく、ダイレクトに魔力そのものがあふれ出てしまう……言ってしまえば、暴走状態のことを指す。
何らかの影響で、誰かの魔力が制御不能の状態に陥り、結果……旅客機を墜落させた。
その魔力の持ち主は、きっと……
「生存者、一名」

ニュースでは、7歳の子供だった、としか報道されていない。男児なのか女児なのかも不明だが、ほぼ間違いなく、この子だろう。生きていれば、なのはと同い年。

次のページで、名前が分かるはず……そう思い、ページを捲る。

「あれ……？」

次のページは、白紙だった。なんでこんな唐突に……

「ちょっと待って」

なのはが、白紙のページと、前のページとの隙間を開く。そこには、ほんの僅かに、ぎざぎざした……明らかに、意図的にページが破り取られた痕跡があった。

何で、この頁だけが……首をかしげる俺達の元に、クロノの念話が入った。

『秀人、今から戻る』

「ああ、わかった」

動揺は、声に出なかったと信じたい。

……それじゃあ、本を戻そう。

「……」

いや、待った。

この事件は、魔法絡みの事件だ。しかも、何やらキナ臭い。頁が破られているということはつまり、少なくとも、誰かにとっては、見られては困る資料なのだろう。

今回の闇の書事件と無関係かもしれないけど……念のためだ。

本を、目印を付けて書架の裏に隠す。今度来た時に回収しよう。

「なのは」

呼ばれたなのははは、こくんと頷いた。

「うん、秘密だよね？」

「ああ、頼む」

短いやり取りをして……俺達は、クロノ達が戻ってくるのを待った。

さっきの本……何故あれが妙に気になったのか、その理由は、最後までわからなかった。

第四十九話（後書き）

すみません。こんな、分かりやすい伏線しか張れなかったんです、、、

展開は、仕事中の脳内妄想で補っております（笑）

第五十話（前書き）

祝・五十話達成。

っていうか、更新してもいないのに、おととといのアクセスが１５００００ｐｖって、、、！？

Σ（゜Д゜；≡；゜д゜）？

第五十話

「ふあぁああ……」
あーーーー……眠い。
「……もう朝、か」
「……そうだね」
「……うん」
自宅へ向かう道。空はすっかりと白み、早朝の空気を漂わせていた。
戦闘直後は、その高揚感で眠気を感じないけど……事後処理をしているうちに、ドカンと眠気がやってくる。
でも、久しぶりだなぁ、この感覚。
微妙に湿気た空気の中を、疲れた身体を引きずって歩く、この感覚。
ちょっと違うのは、背中にのしかかる微妙な重さと温かさ。それと、両隣を歩く足音。
「すー……すー……」
「くー……くー……」
足音に混ざるように、二つの寝息が聞こえてくる。俺の背中……それと、隣を歩くアルフの背中から。
「秀人、代わろうか？」
「いーよ。お前だって疲れてるだろ」
ユーノも、何だか足取りが怪しい。それとなく進路を修正してやっているが、右へフラフラ、左へフラフラ……正直、危なっかしくて見ていられない。
ジョギングをする人、犬の散歩をする人、新聞配達のカブ。
徐々に街が朝に向けて動き出す中、俺達はようやく、俺の家に到着した。

転送ポートから、ほんの数百メートル。だけど、体感ではもっと長く感じた。それだけ疲れていたんだろう、きっと。

ポケットから鍵を取り出し、開錠。

まず、なのはとフェイトをベッドに寝かせて……押入れから、予備の布団を出して……

――どさっ。

そのまま、布団に倒れこんだ。

――どさっ。ばたんっ。

多分、アルフとユーノも同じように……ま、いいや。

「おやすみ……なさーい……」

今は、ゆっくりと寝て……ぐぅ。

◆　◆　◆　◆

「はあぁぁぁ……」

マリエルは、深い深いため息をつき、椅子に座ったまま大きく身体を逸らす。

「リンディさんも無茶振りするよ……」

机の上に足を投げ出す。その際に発生した風で、積み上げられていた紙の山の数枚がヒラヒラと落ちる。

それを、空中で器用にキャッチし、自身のアイデアに目を通す。

「……やっぱ、こうなっちまうんだよなぁ」

指先で紙片を弄び、ぐしゃっと丸め、放った。既に丸められた紙で一杯になっていたゴミ箱は、それをぽすんと弾く。

「ま、これで行くっきゃないよね」

パネルを操作し、３Ｄの図形を立体的に出現させる。

その立体は、かなり無骨な形状をしていた。立方体を乱雑に積み上げたような形状に、思い出したように曲線が加わり……かと思えば、また直線になる。

洗練されていない……それどころか、内部機構すら煮詰まっていな

い、未完成の試作品……更に、その草案。未完成の未完成。
とはいえ、全くノウハウの無かった技術を組み込み、必要な機能を開発、一応の成果に仕上げたのは、メカニックマイスターたる彼女の技量の高さを示していた。

――ピピピッ、ピピピッ。

と、コンピューターの動作する音のみがあった部屋に、通信を報せる電子音が無味乾燥に響く。
「……ったく、少しは休ませろっての」
鬱陶しそうに、その通信を受ける。
目の前に、囚人服の上に白衣を羽織るという、なんとも奇抜かつミスマッチな格好をした女性が映し出される。
「お……珍しいじゃないか。許可が下りたのか？　……プレシア」
プレシアを目にしたマリエルは、ほんの僅かだが……挑戦的に口角を吊り上げた。
皮肉とも取れる挨拶をスルーし、切り出す。
「バルディッシュの構成素材のサンプル、助かったよ」
振り返った先に鎮座していたのは、秀人のバイク……最近、『スレイプニル』という愛称を得た。その構成素材の多くは、バルディッシュの刃の素材と、ほぼ同質のものが使用されていた。
初陣を経た後に回収した。
どの箇所に、どの程度の負荷が加わったのかを解析する予定だ。
『それは何より……で、そちらは進んでいて？』
「……あんまり。めぼしい成果は上がっていない」
この、恐らくは管理局が保有する中ではトップクラスに優秀な技術者をして悩ませているのは、他でもない。
極めて特殊な魔力資質を持つ、秀人の専用デバイスの開発である。

「既存のデバイス設計じゃ、どう小細工したところで強度が足りない。カートリッジシステムの出力に、耐えられないんだ」
かといって、十分な強度を持たせたら、巨大かつ鈍重になってしまう。
『そこへ更に、リンカーコア結合の負荷も想定すると……』
ぽん、と再び3Dモデルを出現させる。
「これが、小型化の限界」
『確かに、これでは駄目ね』
秀人は、膂力にこそ目を見張るものがあるものの、体格的には平均的な男性である。
これをそのまま装着するとなれば、上半身の動きが制約されてしまう。
それでは本末転倒だ。
一般的な杖型にしてしまえば、いざとなれば棍棒代わりに使えるか……という考えもあったのだが、マリエルの美学に反したこともあり、没になった。
「そもそも、秀人の希望じゃないからな」
秀人が求めたのは、手持ちの武装ではなく……
『『甲冑』、だったかしら？』
「そ。正確には、『腕の一本や二本が無くなろうと、問題なく魔法の発動補助をしてくれる形状』。腕が無くなる時点で、問題大アリだっての……あのバカ」
『確かにあの子、遠距離は得意じゃないみたいよね』
秀人が使える魔法は、近接戦闘系の魔法に偏っている。一応、射撃や砲撃も可能なのだが、命中率は低く、ゼロ距離から叩き込むようにして使うのが常だ。
『と思って、新たな素材を鍛造してみたわ』
研究者時代は、動力炉の開発に携わっていたプレシアだ。軽量かつ堅牢な素材の開発は、お手の物だろう。

「助かるよ。これで小型化が進む」
転送されたデータを、嬉しそうに眺めるマリエル。
プレシアもまた、マリエルの草案を受け取り、目を通す。
『システムは？』
人格ＡＩはプログラム、カートリッジシステムはドライブ、それらの式は出来ているのだが、肝心のもの……それを走らせる大元になるＯＳが、未定となっていた。
プレシアの疑問に、マリエルはあっさりと答える。
「ベルカ式」
……プレシアは、息を呑むと同時に、納得した。
『……ああ、確かに』
秀人の戦い方は、汎用性と範囲攻撃に重きを置いたミッドチルダの魔導師のものではなく……近接戦闘による一撃の破壊力・突破力に重きを置いた、ベルカの騎士のものだった。
ならば、ベルカ式を選択したのは当然といえる。
「……と、言いたいところだけど」
感心した様子のプレシアに、マリエルは肩をすくめ、おどけた調子で言う。
「全然、データが足りていなくてね。聖王教会の石頭どもには、困ったもんだ。
無限書庫の中から必要なデータが全て見つかるのは、まだずっと先だろうから、取り急ぎ、見つかったデータを活用する」
そう、時間が無いのだ。
三ヶ月から四ヶ月……それは、世間一般からすれば、十分な期間に思えるだろう。
だが、今だ研究段階のカートリッジシステムを搭載するという暴挙に加え、秀人の魔力資質による負荷に耐え、更には武器としての強度まで求められるのだ。

本来なら、数年のスパンで取り組むべき大仕事。
「ベルカの術式を、ミッドの術式でエミュレートする、擬似ベルカ式。
……まぁ、『擬似』じゃあ聞こえが悪いから、『近代ベルカ式』とでも呼ぼう」
『近代、ベルカ式……』
ゆっくりと呟くプレシア。
『……教会が、黙っていないでしょうね』
もし、それが実用化されたとしたら……資質が無くとも、ベルカ式の魔法が使えるようになる。
聖王教会……厳正な宗教集団である彼らの中には、ベルカ式に適正があるということを、一種のステータスのように感じている輩も少なくない。
その希少価値を無くしてしまう研究が明るみに出れば……どのような目に遭うか、想像に難くない。
「『データを取りたいのに、あなた達が騎士も資料も貸してくれないから、自分で自己流で作っちゃいましたー』……って、ことで」
違法性は無いのだから、問題は無い。
あくまで、そう言い張るつもりのようだ。
「ま、コイツはデータ収集のための試作機だからね。一般の局員に出回るのは、まだ当分先の話さ。十分にデータを集めて、危険がないように改良して、それから公に発表する」
『秀人は実験台、ということ……？』
プレシアの声に、僅かに険が混じる。
カートリッジシステムだけなら、何とかなる自信があった。だがそれは、ミッドチルダ式による運用を前提としていたわけで……未知のＯＳとの相性は、全くの不明。
影響はゼロかもしれない、もしくは、誤作動で命を削るかもしれない。
それを、秀人で試そうと言うのだ。実験台以外の、どのような言

葉が当てはまろうか。
「でも、そのくらいの理由が無けりゃ、嘱託局員一人のために専用デバイスを建造したりはできないんだよ」
秀人に専用デバイスを……という話をリンディが打診した際、上層部からは猛烈に反対された。
『階級すら無い嘱託魔導師のために、管理局の資金を費やすとは何事か』、と。
だが、カートリッジシステム搭載型デバイスのデータ収集のための実験機、という話になった途端、掌を返したようにあっさりと承諾された。
未完成のカートリッジシステム。もし実用化に漕ぎつければ、管理局の戦力は飛躍的に上昇する。だが、現状では不安定で、場合によっては使用者の命を脅かす機能でもある。
公募したところで、協力者など現れるはずも無い。
だが、秀人は自ら進んで志願していて、異様な耐久力もあり、何より。
「秀人は、嘱託魔導師だから」
いざとなれば……使い捨てることが、できるわけで……
「……我が組織ながら、悪辣だよねぇ」
じっとその話を聞いていたプレシアが、重い口を開く。
『気が変わったわ、マリエル。先ほどの素材は、提供を取り止める』
「……そうかい」
ふぅ、と息をつく。
これで、振り出しか……そう考えたマリエルだったが、続くプレシアの言葉を聞き、放心することになった。
『より強靭で、秀人に負担を強いない素材を改めて開発する』

「……は、」
ぽかん、と放心していたマリエル。
「は、はははははははははははは！！　そ、そうか、そうかぁ……！　そりゃいいや！！　ははっ！！」
珍しく爆笑し、童女のように手足をバタつかせる。
「あははははは……！！　はははははっ……！！　……んで？」
それが、ピタリと止まる。

「どの程度の強度を想定している？　言っておくけど、強度の問題さえクリアすれば何の問題も無くなるわけだが」
冗談でもなんでもなく、マリエルはプレシアに詰め寄る。撤回は許さない、と。
やるといった以上、しっかりやれるんだろうな……と。
その、挑戦とも取れるマリエルの言葉に、プレシアは傲然と答える。

『好きに設計しなさいな、若造。
どんな形状・どんなシステムを組み込もうが……非常識な強度を保証してやるわ』

「上等ォ……！」
にやぁっ……と、獰猛な笑みでそれに応じた。
「やってやろうじゃん！！」
机の上にあった、強度の問題で妥協していた案を全て叩き捨て、それまでのデータを躊躇い無く全消去する。
そして、猛然とキーを叩き始めた。
プレシアの姿も、既に無い。彼女もまた、自信の研究に没頭する

のだろう。

データ量がテラバイトに達するまで、そう時間は掛からなかった。

◆　◆　◆　◆

「……ん」

僅かに覚醒した意識。

まだ身体は付いてこなくて、思考だけが緩やかに回転を始めた。

ええと……フェイトと暮らせることになってくユーノくんを迎えに行って……帰り道、秀人さんに背負われて……ああ、そうだった。

それで、寝ちゃったんだ。

「んー……！」

眩しさを我慢して、目を開ける。すると……

「すぅ……すぅ……」

目の前で……文字通り、ほぼゼロ距離で眠るフェイトの顔が目に入ってきた。

朝日を浴びて輝く金髪。白磁の肌。長い睫。

「……おぉ」

不覚にも、ドキッとした。忘れがちになるけど、フェイトって美少女なんだ……って、いかんいかん。早く起きなきゃ。

ベッドから身を起こすと、床で雑魚寝する三人……秀人さん、ユーノくん、アルフ、が眼に飛び込んできた。

もう……私が床でも良かったのに。

皆を起こさないように、足音を殺しつつ抜き足差し足、台所に向かう。

ちらっと時計を見上げる。午前十一時。完全に寝坊だ。

「……ま、いいか」
今日は、自主休校ってことで。
「別に、会いたい友達もいないし……」
――。
苦い思い出が、僅かに蘇る。
結局あの子とは、友達になれず終いだったなぁ……
全部、終わったことだ。今更、悔やんだところでどうにもならない。

さてと……五人分の昼食でも、作りますか。
冷蔵庫の中を確認。
「あ……足りない」
食材は、三人分が限界だ。どうやっても、五人分には足りそうに無い。
「……買いに行くか」
寝癖を整え、家計用の共用の財布をポーチに入れる。服は、このままでいいや。
（行ってきます）
心の中で言い、ゆっくりと部屋を出た。

すたすたと住宅街を歩き、スーパーを目指す。
片道十分……いつもだったら、レイジングハートと話でもしながら歩くんだけど、今日はそれが無い。十分がこんなに長いなんて知らなかったなー……

スーパーで買い物を済ませ、店を出る。
五人分にもなれば、やはりずっしりと重い。
フローターを使って運ぼうとして……クロノの忠告を思い出した。
『君は日常生活の中で、結構な割合で魔法を使用しているな』
そりゃあ、便利だもの。魔法陣や魔力光を発生させないレベルな

ら、何の問題も無い筈だった。
『当面の間、そういった用途での魔法の使用を控えるように。魔力を察知され、追跡される可能性がある』
……はいはい。頑張って手で運びますよー、っと。
ビニール袋を担いで、えっちらおっちら。
荷物が多いときは、秀人さんとバイクで来たり、魔法で飛んだりしていたから、忘れがちになる。
「自分のバイク、欲しいなぁ」
まぁ、あと七年は我慢しないと無理なんだけど。年齢的にも、背丈的にも。

「あ……た、高町！！」

……と、つらつらと考え事をしながら歩いていたら、誰かに呼び止められた。
声で、何となく誰かは分かった。

「……八代さん」

件の、八代望その人だった。
ランドセルを背負ったまま。学校帰りに、こっちに来たらしい。
「あ、あのさ……」
「学校はどうしたの？　まだ、お昼休みの時間じゃない」
「半日授業だったから……これ、今日のプリント」
私と彼女は、友達じゃない。
だから……言葉に親しみなんて、込めるべきじゃないんだ。
「ありがとう。用は済んだ？」
意図的に無表情の仮面を被り、突き放す。
「何で今日、学校休んでたの……？」
「あなたには関係ない」

「……！」

言葉の棘に突き刺され、びくっと強張る。

傷ついた表情。握り締められる手。それを見て、胸が痛まないと言えば、嘘になる。でも、仕方ないんだ。

……以前、八代さんはジュエルシードに憑かれ、とても危険な目に遭った。

その原因こそジュエルシードだけど、暴走の切っ掛けは……私だった。迂闊に仲良くなって、下手に八代さんの気持ちに触れてしまって……

だから、今度こそ。今度こそ、私は失敗しない。絶対に、クラスメイトを魔法関係のイザコザには、巻き込まない。そう決めたんだ。

もし、魔法に関することに少しでも触れたら……例え、これ以上に嫌われても、突き放すと。

「……ごめん、でも、本当に何でもないから」

顔を伏せ、踵を返す。

「待って……」

呼び止める声を無視して、歩き出す。

もうこれ以上、彼女と関わってはいけない。私は、彼女にとって……疫病神みたいなものなんだから。

「待って！！」

意外と強い力で手を引かれ、引き止められた。

「放して」

少しだけ険を強めた言葉を突きつける。

でも、私の手を握る手は、緩まない。

怒っているわけでも、泣いている訳でもない。ただ、悲しさだけを浮かべ、私の目を見つめる。

「……もう、やめようよ」

「――。え？」

――一瞬、耳を疑った。
「絶交とか、そういうの……もう嫌なんだ」
それは、静かな言葉だった。
「学校で知らんぷりしたり、避けたり……そういうの、全部やめようよ！」
でも、その言葉は……確かに、私の無表情の仮面を剥がしていく。
「え……あ、あの……」
しどろもどろに、身を引く。でも、しっかりと掴まれた手が、私を引き止める。
「前みたいに……あの日の、前みたいに……」
いつしか私は、逃げようとするのを止めていた。

「……友達に、戻ろうよ」

……やっぱり、駄目だ。
私は、非情になり切れない甘ちゃんで……どうしようもない、寂しがり屋だ。
だから、こんな風に真っ直ぐに言われたら……何も、言えなくなってしまう。
「高町は、私のこと……そんなに嫌い？」
「そ、」
そんなこと、無い。
「私は……ッ！？」
大事な事を伝えようとして……いきなり、押し黙ってしまった。
……今、何かが……引っかかった。
身体に染み付いた、一種の第六感。

――魔力察知能力に。

ほんの微量だけど、これは……魔力だ。

発生源は……向こうの、雑木林？

「八代さん、ごめん。本当に、ごめんなさい……でも、お願い。ちゃんと、返事するから、今日は……」

ほんの微弱な魔力は、徐々に小さくなっていく。

もしかしたら、何かが起きているのかもしれない。ここで八代さんと一緒にいたら、以前の二の舞になってしまう。

「……ごめんッ！　明日、ちゃんと返事するから！！」

手を、やさしく振り解く。

「高町！　ちょっと……！」

ごめん、ともう一度呟きながら、荷物を放り、走り出した。

雑木林の中は、昼間だというのに薄暗く、圧迫感を感じさせた。

「……」

ごくりと、怯んで生唾を飲んだ。

「ええい……行くぞ！！」

魔力が弱くなったとはいえ、成人男性一人を叩き伏せるくらいの力は残っている。

自らを鼓舞し、土の地面に歩を進める。

僅かな魔力を頼りに、雑木林の中を探索していく。

――ガサッ

「！」

今、何かが動く音がした。

茂みの影から、紅い何かがちらちらと見え隠れしている。

「……」

警戒しながら近寄り……その正体を知った。
「女の子……？」
簡素なワンピース……それ以外に、何も身に着けていない。明らかに訳ありな風体の、紅い頭髪が目を引く少女だった。赤毛を通り越して、完全に紅色の頭髪は、この世界の人間ではないということを明確に示していた。多分何かに巻き込まれて、ユーノくんみたいに、ここに漂着したんだ。
「ちょっと、どうしたの！？　大丈夫！？」
背中に手を添え、上体を起こす。
……顔色が悪い。それに、妙に冷たい。呼吸は……ある！
『秀人さん、秀人さん！！』
緊急コール。
『な……何だ、どうした！？』
飛び起きたらしい秀人さんが、すぐに応じた。
手短に状況を説明して、位置情報を送信。
『わかった、すぐ行く！』
あとは……この子を！

「高町！」

――――――は！？
「八代さん、どうして……！？」
何で……！？　ちゃんと、置いてきた筈なのに！！
「あんな逃げ方したら、『何かあります』って隠してるのバレバレよ！　その子、けがでもしてるの！？」
ズボンが汚れるのも構わず、膝を地面につき、倒れた少女の状態を確認する。
「目立った外傷は無し。脈はあるけど……体温が低い」
妙に慣れた手つきで、てきぱきと各部をチェックしていく。
ハッと気付き、八代さんの肩を掴む。

「駄目……！　八代さんは、『こっち』に関わったら……！」
……また、何かに巻き込まれてしまう！

「今は、そんな事情は後回し！」

でも、八代さんは逆に私を叱り付けた。
「近くに病院……は、無いか。……高町、ケータイ持ってる？」
「あ、ご、ごめんなさい……家に」
財布以外、持ってくるのを忘れてしまった。
「で、でも、人呼んだから……！」

――……ダンッ！！
「なのはッ！！」
飛行してショートカットしてきたのだろう。秀人さんが、唐突に目の前に着地した。
「うぉあッ！？　そ、空から人が……！？」
……しまった、見られた！
「高町……今、その人……？」
ああ、どうしよう、どうしよう……

「……ああ、もういいや！　両方とも来い！」

秀人さんは秀人さんで焦っていたらしい。
紅髪の少女と、私と……何故か八代さんを抱えて……えええええええっ！？
「行くぞ！」

――飛行魔法を、行使した！！

途端、すっ飛んで行く風景！

「え、えええええええええええええええっ！？」

八代さんは、混乱の極みだ。

「ごめん、後でちゃんと、説明するからあああああああああ……！！」

「意味わかんないいいい

第五十話（後書き）

折角だから、のぞみんを巻き込んでみました（笑）
段々、構想が練れてきたぞー！

第五十一話（前書き）

ウボァー残業多すぎてラノベが読めない、、、
でも、そらのおとしもの12まで読みました。

あ、あと。
pv850000、ユニークが64000を超えました。ありがとうございます！

第五十一話

数分間の空の旅は、あっという間に終着した。

ばんっ！　と秀人さんがドアを開ける。

「ユーノ！　アルフ！　ちょっと手ェ貸せ！！」

保護した女の子を小脇に抱え、室内に飛び込んだ。

ユーノくんとアルフは、治療魔法を使うことができる。とりあえず、アースラ医療班に連絡するまでの応急処置はできるだろう。

さて、こっちは……

「八代さん、大丈夫？」

「ぜー、ぜー……！！　全然、大丈夫じゃないわよ……！　お、おえ……！」

全力で飛ばしたとはいえ、たったの数分……本気の空戦訓練に比べたら朝飯前……じゃなくて、昼飯前だ。

……でも、風を切り裂いて飛ぶ感覚を知らない八代さんは、疲労困憊だった。

「……ちゃ、ちゃんと、説明……ゲホッ！！　しなさいよ……！？」

「あ……」

そうだなぁ……ノリで連れて来ちゃったけど、面倒くさい。

いっそのこと、抱えたまま空戦機動に持ち込んで、意識をブラックアウトさせてしまう手もあるよね……って、駄目だ。飛ぶだけの魔力が無い。

「高町っ！　黙ってないで……」

説明するか、すっとぼけるかの二択。

「やだ」

後者に決定。
「んがっ……！　さっき、説明するって言ったじゃない！　こんな……」
さっきは情にほだされて、あやうく口を滑らせるところだった。
「気が変わったの。お願いだから、もう帰ってよ……」
……何で、わかってくれないんだろう。
「私は、」
ひくっ……と、のどが詰まるような錯覚を覚える。
……これから言おうとしているのは、八代さんの気持ちを、踏み躙る言葉。こんな私を、『友達』と言ってくれた彼女の気持ちを傷つける、最低の行為。
でも……でも……八代さんの身の安全には、代えられない。
私一人が嫌われる程度の代償で、彼女が平穏無事に暮らせるなら……安いものだ。
「私は、あなたみたいな人……！」
ばくばくと、罪悪感に早鐘を打つ心臓を押さえつけ、決定的な一言を……！！
「なのは、どこ行ってたんだよー！？」
さっき秀人さんが駆け込んだドアが、内側から、どばん！　と開いた。
「起きたのに隣にいないから、ボク……」
と、その目が私の隣にいた八代さんに向き……
「……ひうッ！！」

――ばんっ！！
……ドアの向こうに、引っ込んだ。
「……え、ええと……？　ごめん、よく聞こえなかったんだけど……」
「……なんでもない」
コレは……フェイトに助けられた、と考えてもいいのだろうか。
……冷静に考えたら、事情も話さず納得しろ、というのも理不尽かもしれない。
「八代さん」
口調を正し、告げる。
「あなたには、ちゃんと事情を説明する。信じて……とは言えないけど、最後まで、ちゃんと聞いてくれる……？」
八代さんは、私の本気を悟ったのか、重々しく頷いた。
「……わかった」
そして、私は彼女を家に招き入れた。
「お邪魔します」
八代さんは躊躇無く、私達の家に足を踏み入れる。これで、八畳一間に合計七人……パンク寸前だ。
診察を受ける少女を見ていた秀人さんが、私達を振り返った。
「おお、さっきの子。悪かったな、つい勢いで……」
困ったときの癖……頭を掻いて、ぺこりと軽く頭を下げた。
「あ、いえ……」
八代さんも、毒気を抜かれたように軽く応じた。
その、秀人さんの背中から。
じーーーーーーーーーーーーーーーっ……と、顔半分だけを出して、八代さんを伺う赤い瞳があった。言わずもがな、フェイトだ。
「あなた、さっきの……この家に住んでるの？」
八代さんが声をかける。すると、ぱっと秀人さんの背中に隠れてしまう。

「え……？」
困惑し、言葉が途切れる。
また、フェイトが顔を出して、じーーーーーーーーーっと八代さんを観察し出す。
「あー……気にしないでやってくれ」
秀人さんが、フェイトの頭をぼすぼすと乱暴に撫でる。
「あの、あの子は……？」
「さっきからアルフとユーノが……っていうかフェイト、ちょっと離れてくれ。歩きにくいっつーの」
「……やだ」
「ったく……人見知りは良くないぞ？」
コバンザメのようにくっつくフェイトに苦笑しながら、八代さんを招く。
例の女の子は、ベッドの上に寝かされていた。
アルフが体の状態を調べ、ユーノくんが細かな外傷を塞いでいく。
「どんな状態だ？」
ユーノくんとアルフは、なんとも言えない顔で振り向き……
「「……はぁ」」
と、ため息をついた。
「お、おい……？　何だ？　ちゃんと説明してくれよ」
二人で顔を見合わせ、ユーノくんが頷いた。そして、病状を告げる。

「……空腹による貧血」

「……はい？」
秀人さんも私も八代さんも、きっと同じような表情を浮かべていたことだろう。
「単に、ハラが減ってただけ……？」
「は、ははは……何それ……」

べしゃっ、と思わずへたり込んでしまった。
全く、人騒がせな……でも、大事にならなくてよかった。
そうと決まれば……

「……よっし！　ご飯作ろうか！」

遠回りしちゃったけど、結局必要なのは食事だ。
「高町、これ……」
と、八代さんが手に持っていたビニール袋を差し出してきた。あー……そういえば、置きっ放しにしてきちゃったんだ。それを、わざわざ拾ってきてくれていたらしい。
「ありがと」
多めに買っておいたから、冷蔵庫の中身も総動員すればたっぷり作れそうだ。
包丁とまな板を準備して、野菜を水洗いして、準備完了。
「なのは、手伝うよ」
と、コバンザメを引っぺがしてきた秀人さんが、腕まくりをして台所にやってきた。
「フェイトは？」
「置いてきた」
くいっと指差した先では……
「……」
漫画を広げ顔を隠し、コミュニケーションを完全拒否したフェイトと。
「私、八代望っていうの。高町のクラスメイトで……」
懸命にコミュニケーションを図る八代さん。
「……」
フェイトは、頑なに目を合わせようとしない。
まぁ、育ってきた環境が環境で、まともに他人と接したことが無いから、仕方ないのかも……。

「ごめん八代さん、その子、人見知りが激しくて……フェイト、返事くらいしてあげなさい！」
「……うぅぅ」
助けを求めるように、アルフを見つめる。が、アルフはユーノくんと共に、少女の看病に掛かりきりで、救援は望めない。
「……これ読んでるから無理」
結局また、漫画本を取り出してしまう。
「あ、それ……仮面ライダーＳＰＩＲＩＴＳ？」
ぴくん、とフェイトが反応した。
「……うん」
おお……フェイトが返事をした。
「私の幼馴染がそういう漫画たくさん持ってて、よく読むんだけど……」
「……何巻？」
漫画本で顔を隠したまま、ぼそっと聞いた。
「え？」
「何巻、が、好き……？」
顔を隠しているのは変わりないが、目はしっかりと八代さんを見つめていた。

……大丈夫、かな。
「……はぁ」
でも、何だか寂しい気もする……。
「大丈夫」
ぽん、と秀人さんの手が、私の頭を軽く撫でた。
「……」
無言で、人差し指を口の前に立てる。

「へぇ……あなた、高町の友達なんだ」
「うん。なのはは、ボクの初めてのともだち」

「どういう理由で知り合ったの？」
「おかーさんに言われて探し物してたら、なのはも同じもの探してて」
「へぇ……それで？」
「ぶっとばしたら、ぶっとばされた」
「……」
「……でも、今は一番の友達なんだ」

「……」
……一番。
「フェイトに、なのは以外に友達が出来たって、なのはが一番だよ」
「……うん！」
照れくさくもあるけど……それ以上に、嬉しい。
「……よし！」
包丁を手に、食材を刻む。
フライパンに油を敷き、鍋と共に火を掛ける。
秀人さんのサポートが追いつかないくらいのスピードで、料理を仕上げていく。
うん……今日は記念日だ！　思いっきり豪華な昼食を、用意しよう！

そして、一時間後。
「できたぞー。机の上片付けろー」
台所を、シンクまで一杯にするほど大量の料理が埋め尽くしていた。
「ごはんだっ！！」
フェイトが、ぱっと顔を輝かせる。
隣では、八代さんがびっくりした様子でそれを見ていた。
「あ……」
我に返ったフェイトが、恥じ入るように俯いた。

「ユーノ、アルフ、その子はどうだ？」
「うん、血糖値も安定したから、そろそろ目を覚ますはずだよ」
「やれやれ……ごめんよフェイト、お待たせ」
集中していた二人が、やや疲れた様子で立ち上がった。
「初めまして。僕はユーノ・スクライア。この家の同居人をやってるよ」
「アタシはアルフ。フェイトと遊んでくれてありがとうね……ええと、ヤシロ？」
「はい、八代望です。初めまして」

自己紹介も済んだところで、食事の時間だ。
予備の座卓も引っ張り出して、料理を並べていく。
「う、う……？」
食事の匂いに釣られて、例の子がようやく目を覚ました。
髪の毛の紅色に反して、瞳は綺麗なブルー。
「おはよう。ご飯、食べるよね？」
「……んー」
フラフラとした足取りで、ちゃぶ台の脇にちょこんと座る。
頭が半分くらい寝ている状態でも、しっかりとフォークを掴んでいる。
よし、それじゃあ……

「「「「「「「「「「」」」」」」」」

作りたての料理が、次々に各人の胃に消えて行く。
「うわ……うまー！　何コレ何コレ！　拘置所のご飯よりずっとおいしい！！」
「こ、拘置所！？」

一番喜んでいるのは、やはりフェイトだ。フォークでハンバーグを、スパゲッティを、次々に口に詰め込む。ハンバーグが食べたいって言ってたの、覚えておいてよかった。

「これ……高町が作ったの？」

「うん。……そういえば、八代さんも料理するんだっけ？」

以前、葉山君にお弁当を作っていた気がする。

「……負けたわ。でも、どうしてこんなに上手なの？」

「訳あって、二年くらい自分で家事やってたから」

「……そっか」

それ以上は、聞いてこなかった。

見れば、例の子の持つフォークは、ちゃぶ台や皿の端っこをかつん、かつん、と突っつくだけで、全く料理を口に出来ていない。

「しゃーねーな、もう……」

秀人さんが、少女の手から取ったフォークでハンバーグを切り分け、女の子の口元に持って行く。女の子は、ふんふんと匂いを嗅ぐや否や、ぱくっと食いついた。

「……はぐっ」

もぐもぐ、ごくん。

二口目、三口目と続け……

「……んぁ？」

ここにきて、ようやく完全に目が覚めたらしい。

吊り目気味のブルーの瞳が、秀人さんの顔を間近で捉えた。

「よっ。おはよう」

爽やかに挨拶する秀人さん。フォークを返却して、自分の食事に戻る。

その秀人さんの顔を、じーっと、じーーーーーーーっと、無言無表情で見つめ、そして……

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああっ！！！！？」

「うおおぉぉッ！？」

思わず秀人さんが仰け反るほどの悲鳴を上げた！

――どんどん！！

――がんっ！

――どすんっ！

……左右と上の階から、苛立たしく壁や床を叩く音が聞こえた。

これだから、集合住宅は困る。

「お、おま、おまえはッ！！」

女の子は、フォーク片手にワナワナと震え、秀人さんを睨みつけた。

「……悪い、何かしたっけ？」

「ざけんなっ！　忘れたとは言わせねぇぞっ！！」

が、ガラ悪ッ！！

「いや……マジで身に覚えが無いんだが……」

困惑する秀人さんに、今にも飛び掛って行きそうな剣幕。

アルフとユーノくんが、僅かに身構える。

「え？　え？」

緊迫した空気に、八代さんが戸惑ったように左右を見渡す。

「……！」

女の子が、フォークを逆手に構え……

――ぐぎゅ～……

……腹から、盛大なコーラスが鳴った。

「「「「「「「「「……」」」」」」」」」

暴れだしたら拘束しようと身構えていたユーノくんとアルフ。状況についていけず、固まっていた八代さん。フライドチキンに手を伸ばしていたフェイト。全員が、どう反応すればいいやらわからず、固まった。

「な、何だよ!?　何が言いたいんだよ!?　……腹が減ってて悪いかチクショー!!」

何も言っていないのに、勝手に逆ギレして涙目になっていた。

確かに、これは恥ずかしい。

「あー、おなかへってるとイライラするんだよねー。　……たべる？」

フェイトが、フライドポテトを載せた皿を差し出した。

少女は同じようにフェイトを睨むが、

「おいしいよ？」

にへら、という言葉がぴったりの、締まりの無い笑みを見せられ……

「……食べる」

すっかり、気勢を削がれてしまった。

どすん、と乱暴に腰を下ろし、ガツガツと料理を平らげていく。

やはり、空腹には勝てないか。

どういう理由かは分からないけど、とにかくこの子は、秀人さんに並々ならぬ敵意を抱いているらしい。それがどうしてなのか、ちゃんと聞き出さないと。

「あ、ちょっと待て！　そのソーセージ、ボクがマークしてたんだ

ぞ！」
「ふん、知るか！　取られるのが嫌だったら、口の中に入れておけ！」
「このっ……！　そりゃ」
「ぬあぁ！！　てめぇ！　その肉はアタシが……！」
「もぐもぐもぐ……へへーん、口の中に入れちゃったもんねー！」
「このやろー！」

……食後にね。

「「「「「「「「ごちそうさまでした！」」」」」」」」
「……でした」
六人＋αの挨拶に、ふて腐れたような小声が追従する。
さーて、洗い物するかー……じゃなくて！
「高町……説明」
何やら怖い顔で、とんとん、とちゃぶ台を叩く八代さん。
「……洗い物、やっておくから」
ユーノくんが、入れ替わるように台所に入って行った。

「……でもさ、何でウチに来る気になったの？」
学校に行けば、教室で会えるのに。
「さっちゃん先生が、『高町さん、多分一週間くらい学校サボるから』って」
「……」
……厄介なことに、着々と成長しているらしかった。
「それで、『いい機会だから』って、プリント持たされたの」
大きなお世話……本当に。

「ねぇ、教えて……？　何で高町は、私と絶交したの」
でも、約束は約束だ。
「秀人さん……」
「ああ。あの高台でいいな？」
「うん」
ここじゃなくて……いつも、魔法の練習に使っている、あの高台で話そう。
「あの……もしかして、また……？」
「うん。飛んでいく」
ひくっ、と顔が引きつった。
「どうする？　やめる？　それでもいいけど」
「……上等！　ドンと来なさい！」
開き直った人間は、意外と動じないものだ。

本日二回目となる飛行に、八代さんは悲鳴一つ上げずに耐え切った。
……唇が紫色だけど。
秀人さんは、軽く人払いの結界を展開して、歩いていってしまった。
私の好きなように……そういうことだろう。
「あのね……――」

――そして、話せる限りのことを話した。

――ユーノくん、秀人さんとの出会い。

――魔法の力。

――ジュエルシードの力と、それがもたらした結果。

「あの地震……私が……？」
無言で頷き、肯定。
「……もう、あんな危険な目に遭わせるわけにはいかない」
だから遠ざけたのだと、告げた。
魔法の力は、災厄を呼び寄せてしまうものだと。
「……じゃないわよ」
俯いていた八代さんが、ぼそりと呟いた。
「……そういうことだから。もう私に、」
関わらないで。
そう言おうとした瞬間、伸びてきた手が、私の胸倉を思いっきり掴み、引き寄せた。
「ふざけんじゃないわよ！！」
「……え？」
目をぱちくりさせて、目の前いっぱいに広がる八代さんの顔を見つめる。
「魔法だとか、災厄だとか言って……！　私の気持ちなんて、欠片も考えてないじゃない！」
「……違う！」
聞き捨てのならない言葉に、私の頭に血が上った。
「ちゃんとあなたのことを、考えた結果だ！！」
八代さんの胸倉を掴む。
「あなたには、もう傷ついて欲しくないから……だから……！」
「それが、考えてないって言ってんのよ！」
もう、完全に頭に血が上って、冷静な言葉が出てこない。
がくがくと互いを揺さぶり、思いの丈をぶつけあう。
「私にさえ関わらなかったら、あなたはジュエルシードに取り込ま

れずに済んだんだ！」
「だからって、どうして絶交になるのよ！　もう、終わったことじゃない！」
「私の近くにいたら、また巻き込まれるかもしれないからだよ！！」
「そんな確証の無い考えで、私を避けてたっていうの……！？」
「そうだよ！　なのに、何でまた私に近づいてきたのよ！　クラスで孤立していた私に対するお情け！？　馬鹿にしないで！！」
どんっ、と八代さんを突き飛ばす。
尻餅をついた八代さんは、すぐに立ち上がり……私に掴みかかってきた。
「私は……お情けとか、関係無しに！！」
ぐるんっ、と視界がひっくり返る。
地面に背中がぶつかり、一瞬だけ息が詰まる。
見上げた先……空を背景に、八代さんの顔がアップで映った。
「高町と、友達になりたかったの！！」
……一瞬、思考が固まった。
「……最初は、いつも無愛想で、お高くとまってる嫌な奴だと思ってた。
付き合い悪いし、サボり魔だし、根暗だし……でも、気付いたら目で追ってた。『いつも、何の本読んでるんだろう』『どんな性格の人なのかな』……『お話、したいなぁ』って。
授業参観の日、初めて自分から話しかけて……内心、すごくドキドキしてたんだよ？」
……思えば、意識して築いていた壁を乗り越えて、声を掛けてきてくれたのは……八代さんが初めてだった。不躾で無神経だったけど……確かに、私の心に触れた。
「一緒に、肝試ししたよね。夜に学校に忍び込んで……本物のお化けが出ちゃって、大変だった」

ジュエルシードの捜索の際、運悪く二人が巻き込まれてしまった。
でも、翌日にはけろっとした顔で、『おはよう』って言ってくれたっけ。
「健太のサッカーの試合、応援しに行ったよね。高町、柄にも無く熱心に応援して」
「でも……その帰りに」
「……うん、少しだけど、覚えてる」
あの日。葉山君の気持ちを知ってしまった……いや、前から薄々感づいていたんだろうけど、目の前で聞いてしまった八代さんは、ジュエルシードを発動してしまった。
「あの時は、高町を許せないって気持ちが一杯になって……人をたくさん巻き込んじゃった」
「……」
「確かに、高町の言うこともわかるよ。二度も、ジュエルシードっていう危険物の騒動に巻き込まれたんだから」
でも、と前置きして、私の手を引っ張って立ち上がらせ、言った。
「絶交したまま途切れるなんて……そんなの、絶対に哀しいよ」
ぱきん、と、頑なに我を押し込めていた堰に、罅が入った。
「さっき、私の気持ちのことしか話さなかったけど……高町は、どうなの？」
「どう……って？」
ひび割れは、堰をあっという間に侵食し、結界寸前にまで追い込む。
「……私のこと、嫌い？」
こんなにも一生懸命に、気持ちを伝えてくれている。
それが、照れくさくて……胸の奥がぽかぽかして……嬉しい。
「……そんなこと、無い」

――堰は、完全に決壊した。
鉄砲水のように、押し込めていた感情があふれ出してくる。
「わ、私は、八代さんと仲良くなりたい。
いつかまた絶交することになるかもしれない、けど、喧嘩別れするかもしれない、けど……私は、」
緊張で、言葉にどもりが出てしまう。

「あなたの、友達になりたい」

――それが、私の本心だった。
「つまらないことで、喧嘩になるかもしれない」
「何度でも、仲直りすればいい！」
「学校を休んで、会えない日が続くかもしれない」
「だったら、私から会いに行く！」
一陣の風のように、私の不安を悉く吹き飛ばす。

「それでも望は、私の友達でいてくれる……？」

望は、一瞬だけ驚いたような顔をして……いっそう強く、手を握った。

「あったり前でしょ、なのは！」

……深かった溝が、すれ違っていた気持ちが……ようやく、結びついた。

第五十一話（後書き）

やっぱり、「友情とはぶつかりあうことで生まれる」というのは間違いじゃないと思うんですよ。

喧嘩の一つでもしないと、すぐに音信不通になったりしますからね。

第五十二話（前書き）

今回はカオス回です。

第五十二話

……目を閉じて、意識を集中する。
胸の奥。心臓の隣辺り。
そこに、リンカーコアがあるものと仮定してイメージすると、より正確な魔力運用が出来ると……リーゼのアドバイスだ。
「すー……はー……」
一気に大魔力を搾り出すのではなく、緩やかに、全身の回路を使って、魔力の純度を上げて行く。
「十分です。では、次の工程へ」
高めた魔力を、手元に集中させていく。
――ボウッ……
球状の魔力が、薄らぼんやりと実体化を始める。
脳裏にイメージするのは、守護騎士の一体……『剣の騎士』。
そして、手にしていた……
「召喚」
守護騎士システム……その中から、武装のみを選択。不定形だった魔力が、結実する。

「焔の魔剣」

――――バキィンッ！！
そして、手に感じる、確かな重み。
「初めてにしては、上々の出来です。主」
目を開ける。
「……当然でしょ」
右手には、無骨な片刃の剣が握られていた。

――シュッ……！！

リーゼの手に、ほぼ同じ刃渡りの片刃剣が出現する。

要した時間は、数秒も無いだろう。

確かに私は、細かな魔力運用が苦手だ。

短所を無視して、長所を徹底的に伸ばすという方法もある……という話を聞いたが、それでは駄目だ。

あの忌々しいライダー野郎……あいつも、魔法こそチャチかったけど、魔力の運用技術は相当のものだった。それこそ、このリーゼに匹敵するほど。

だとしたら、短所を克服しないことには勝てない。

全てのパラメーターを、バランス良く向上させていくというのが、私のプランだった。

だからこうして、訓練を重ねているわけだが……

「チッ……まだ、あんたと同じようには出来ないか」

リーゼは、感情の無い顔をふるふる、と左右に振った。

「私のこれは、ただの魔力刃です。主のそれは、一部とはいえ守護騎士を使役する、召喚魔法。求められる技量の土台が違いすぎます」

「そーなんだけどさぁ……」

思い起こすのは、『鉄槌』の死に際。

目の前に襲い来る、巨大な猛禽。

「アイツの、あの不死鳥。

あれも召喚魔法なんでしょ？」

だから、私も召喚魔法で対抗……と思ったんだけど。

「はい、そうです。かなり……いえ。正直、ありえない規模の」

淡々と……それでいて、僅かな畏怖を感じさせる。

「そんなに難しいの？」

ただのデカい炎の鳥だったら、簡単に出来る。

ただ攻撃魔法に炎の属性を追加して、形を整えればいいだけ。

多分、私にもわかりやすいように言葉を噛み砕き……話しだした。
「魔法とは、要は弾丸です。一定のエネルギーで射出された後は、そのエネルギーを消費するのみ。いずれは消えます」
……そんなもん、いちいち確認しなくても分かっている。
それをわざわざ口にするということは……これから口にする事への反例のためだろう。

「ですが、あれは……召喚されたモノが、独自にエネルギーを発生させ、自らを維持していました。つまり、」

「術者から独立して、エネルギーを永続的に維持し続けられる。簡単に言えば、『生きた魔法』ってトコ？」
先回りして、さくっと回答。
「その通りです」
「でもさ、それって使い魔と何が違うの？」
自意識を持って、自己を維持する魔法生命体。それは、使い魔と同じじゃない？
「私を含む『使い魔』という存在は、存在の基盤となった依代が、必ず存在します。
その依代に、マスターのリンカーコアの一部を移植・共有することで、魔法生命体となります」
ぴょこぴょこ、とリーゼの猫尻尾が揺れる。
リーゼの依代は、元マスターの飼い猫だったっけ。
「ですが、あの不死鳥が発動する際に用いたのは、リンカーコアの断片のみでした」
あの、撒き散らされた血液は違うんだろうか。
「あれは、単なる構成素材です。依代ではありません」
う、うぅん……？
私は、足りない頭をなんとか回転させる。
「……依代っていうのは、魔法を発動させるための核になるもの…

…構成素材は、出来上がった魔法の、外殻になるもの……？」
「ほぼ正解です」
と、リーゼは言った。
「自身の魔力のみで、自意識を持った存在を創り出す……？」
それは、生命を創造することに等しい。
もし、そうだとしたら……

「無機物に生命を宿すことも、

果ては、死者を蘇生することも可能でしょう。

神域を侵す……まさに、真性の『魔法』です」

なによそれ……反則じゃない。
「ですが、彼はまだ、意識的に召喚を行えているわけではないようです」
「え？」
どういうこと？
映像記録は、『鉄槌』が殺された時点で途切れている。そこから先は推測しかできないんだけど……
「私は、全てを観察していましたから」
「……ああ、そうだった」
このリーゼは、私が従えるまで、影でいろいろ暗躍していたんだったっけ。なら、守護騎士や敵をマークしていたのも頷ける。
「あの不死鳥は、『鉄槌』を撃破した後、リンカーコアの断片へと還元され、術者の体内へ還っていきました。彼はそのような指示を出していませんでしたから、恐らく、あの不死鳥自身の判断でしょう」
んー……えーと……
「つまりあの不死鳥は、『呼び出された』っていうより、『自ら出

てきた』……？」
　リーゼは、こくんと頷いた。
うわぁ……ありえないにも程がある。
「それ、おかしくない？　リンカーコアが、勝手に一部を切り離して出てくるなんて」
　まるで、リンカーコアそのものに意思があるみたいじゃないか。
「申し訳ありません。ここから先は、私の推測になるのですが……」

「彼のリンカーコアは、先天的・後天的……何らかの要因で、変異してしまったのでしょう。休眠状態になることも無く、常に体内で大量の魔力が循環していました」
　体内での、魔力の循環。
　奇しくもそれは、さっき私が行った、魔力の純度を上げる工程そのものだった。
　それを年がら年中、行っている……？
「恐らくは、外的な衝撃で肉体が著しく損傷してしまったのでしょう。
　意識を失った肉体の危機……それに生存本能が、リンカーコアの起動という形で反応し、損傷を修復し、回復させたものかと」
　……一般人のリンカーコアの大きさだったなら、それは肉体の機能を正常に戻す程度で済んだ。本当に、ただそれだけだったなら、それはごくありふれた感動話として埋没したことだろう。
　けれど、あいつのリンカーコアは多分、そんじょそこらの魔導師なんか比較にならないほど大きく、強大だった。そして、それまで一度も起動させておらず、加減が利かなかったということもあり、結果……
「どんな怪我でも、宿主の無意識のうちに修復してしまうことが定着した」
　正解、というふうに、リーゼが首肯する。
「そして、それを繰り返すうちに、リンカーコアに自我が芽生えた」

宿主の危機に際して、外敵に能動的な攻撃を加えるほどに。
「じゃあ、アイツを蒐集するのは無理か」
「そのほうが無難でしょう」
下手したら、闇の書の中で大暴れして、大爆発するかもしれないし。

「まぁ、まずは地力を鍛えるとしますか」
まずは、アイツと対等に渡り合えるようにならなくちゃ。
ぶんっ、と剣を振る。
「うおっとととと……！　お、重っ……！」
刃の重量に負けて、身体が大きく流されてしまった。
「腕の力だけで振るうから、流されるのです。
下半身で地面を掴み、上半身全体で……」

――――ヒュンッ！！

快音と共に、リーゼの剣が宙を凪ぐ。
「このように。
まずは、コレを切れるようになりましょうか」
――ごすんっ。
リーゼの目の前に、魔法で組んだであろう物質が出現する。
触ってみた感じ、鉄に近いだろうか。
何だ、こんなもん……この剣なら、余裕で切断できるに決まってる。何せ、『剣』が自動車を切断するトコ、見てたもんね。
思いっきり剣を振りかぶり……
「うおりゃー！」

――ゴキィンッ

「いっ……！」
電気が走ったような衝撃が、腕全体に伝わった。
剣は、刀身の半分ほどを物質にめり込ませ、そこで停止していた。
「……ったあああああああああああああい！？」
思わず、剣を取り落としてしまった。
「力任せに叩きつけたら、どんな名剣でも意味がありません」
魔剣を拾い上げるリーゼ。
――カンッ……！
そして、バターを切るように、あっさりと物質を切断する。
「この剣は、勢いと重量で叩き斬る西洋の剣・速さと鋭さで切断する東洋の剣、双方の利点を併せ持っています。使いこなせれば、接近戦で大きな力になるでしょう」
剣を受け取り、もう一度、仮想物質の前に立つ。
これをぶった斬れば、とりあえずは合格か……

何度か素振りをして、その都度リーゼに構えを矯正してもらった。
ひとまず、基礎の基礎……くらいは、形になったと思う。
よーし、もう一度……！
「お待ちください」
勇んで剣を手にした私を、リーゼが引き止める。
「ただ斬るだけでは、何も身につきません」
「ぐ……そ、そうだった」
あのライダー野郎の、憎たらしいまでに的確な言葉を思い出した。
『サンドバッグを殴って、いい気になってたか？』……だったな、確か。
「そもそも、敵は立ち止まってはくれません。止まった的を相手に、いかに好感触を得ようと、実戦では無意味なのです」
ずず……と、仮想物質が浮かび上がる。
でっかい板状の物質は、バレーボール大の球状に形を変える。
「そして、常に一対一とは限りません」

二つ、三つ、四つ……お手玉のように、空中を踊る。
魔法で物質化させた、仮想物質。
それも……非殺傷設定にしていない。ぶつかれば、半端無い怪我を負うだろう。
思わず浮いてしまった冷や汗を拭い、魔剣を握る手に力を入れる。
「……始めて」
そして……
「それでは、主……どうかご無事で」

――ギュオオオンッ！！！

一斉に、襲い掛かってきた！！
「うあああああああああああああああっ！！」
目の前に迫ってきた鉄球に、大上段から魔剣を振り下ろす。
――ギギンッ！！
「う……くうっ！！」
切断には至らず、目の前数十センチで拮抗。
「横！」
リーゼの声。でも、もう間に合わない……！

――べきっ……

「……げふっ！」
……肺の中の酸素を、血反吐と共に吐き出した。
「あ、あ……！！」
ずきずきと、体験したことの無い痛みが、全身を支配する。
――これが、痛みか。
痛い。苦しい。辛い。
今すぐにでも、痛覚を遮断したい。
でも……これから戦う奴らは、皆これを覚悟しているんだ。痛み

を知らない半端な覚悟じゃ、勝てっこない。
「……あああああっ！！」
膝を叱咤し、立ち上がる。
「主！」
再び、リーゼの声。だがそれは、私の身を案じるものではなく、注意を怠った私を叱責するものだ。
「実戦でしたら死んでいます！」
「わ、かってる……！」
リーゼは私に、痛み止めの魔法だけを施す。完全には消さず、ギリギリ動けるレベルに留める。
「起きなさい！　もう一度です！」
再び、四つの鉄球が飛来する！
「こん……ちくしょおおおっ！！」
一発目を、剣で弾く！
二発目は、横！
――ビュオッ……！！
跳躍し、回避！
一発を捌けば終わり、じゃない。よけた弾も、すぐに軌道修正をして再来する。
斬ろうにも……
――ガリィィンッ！！
球の曲面が、刃を滑らせてしまい、かすり傷程度にしかならない。
「くっそおおおおおっ！！」
――ボグッ……！
「うぐァっ……！」
強烈な衝撃と、焼けるような痛み。失われる、左肩の感覚。
左肩を砕かれた。
そして、動作が鈍ったところに、残る三発が殺到！
「くゥッ……！！」
魔剣をかざし、受け止める！

――バギンッ！！
「……あ」
魔剣が砕けた、次の瞬間。
鉄球は私の視界を埋め尽くし……
……暗転。

◆　◆　◆　◆

ここではない、どこかの景色。
それを、俯瞰するように……それでいて、一人称で体験しているような、奇妙な視点で眺めていた。
「うっ……うあああぁ……！」
――一人の少年が、泣いていた。
少年の姿は、異様だった。
四肢を強靭なゴム質の器具で拘束され、さらにその身体を、ベッドに四方から縛り付けられていた。さながら、芋虫のように。
拘束具の一部が、丁度腕の形に隆起する。
……自動車のタイヤよりも、遥かに強靭なゴムが。
――ビキィッ……！
それに遮られた、鈍い、嫌な音が聞こえた。生木をへし折るような、怖気を催す音が。
「ヒぐっ……！！」
少年の身体が、びくんと跳ねた。
この何度と無く続く痛みに、少年は涙を流していたのだろうか。
「い、痛い……痛いいいいいいい！」
癇癪を起こし、拘束具の中で身体を暴れさせる。

拘束具の一部に、亀裂が入り……

――バツンッ！！

……とうとう、破断した。

――ガシャンッ！

弾け飛んだ拘束具の先端が、既に何も飾られなくなった花瓶を砕く。

ばたばたばた……と、明確に苛立ちを感じさせる足音が、病室に近づいてくる。

そして……

「……何を、しているのっ！！」

ガタンッ！と力任せにドアを開き、女性が現れた。

シミと、皺だらけの洋服。

かつては整えられていたであろう髪の毛は、ボサボサの枝毛だらけ。

頬はげっそりとこけ、濁った瞳だけが顔の中心でギラギラと輝いていた。

「お母さん、痛い……！」

少年の言葉からするに、この恐ろしい女性は、母親らしい。

だが、彼女の顔に、痛みに苦しむ息子を慈しむ気配は微塵も無く、床に落ちた拘束具の一部をギラリと睨みつけ、拾った。

「あああああもう！　また器具を壊して！！　弁償するのが、一体誰だと思ってるのよ！！」

がりがりと頭を掻き、拘束具を壁にバシンと叩きつける。

「何度も、何度も、何度も！！　何回言えばっ！！」

母親が手を振り上げる。

「吾妻さん！」
そこに、音を聞きつけてきた看護婦が割って入った。
「息子さんに、何をしようとしているんですか！」
両腕を掴み、少年から引き剥がす。
「放しなさいよおおおおっ！！」
完全にヒステリーを起こした母親が、看護婦の腕の中で暴れる。
やがて、男性の看護師や医師によって、完全に取り押さえられた。
「吾妻さん、落ち着いてください」
壮年の男性医師が、穏やかな表情を母親に向ける。
その背後で、『研修医』のプレートを胸につけた若い女医が、怯えるように立ちすくんでいた。
「ああ、そうでしょうねぇ！　器具が壊れたら、また新しい器具が必要になるものねぇ！？　あんた達医者は、病院は、何も困らないでしょう！」
「吾妻さん、これが無ければ、あなたの息子さんは……」
医師は、やるせない顔で言葉を詰まらせた。
……これで拘束していなければ、恐らくあの少年は、自らの腕力で、命を落とすことになりかねない。
だがそれでも、少年の規格外の筋力の前には対症療法にもならず、こうして幾度と無く破壊されていた。
「そう言って、また新しいものを売りつけるつもりなんでしょう！？」
「……」
肯定も否定もせず、沈黙する医師。
「あなたたち、もしかしてわざとコイツの病気を治さないで放置してるんじゃないの！？　……ああ、そうよ！　そうに決まっているわ！　この詐欺師！！」
再び、暴れだした母親を看護師らが取り押さえる。
医師は、傍らの女医に短く指示を出した。
「鎮静剤を」

「は、はいっ……！」
研修医は、緊張に震える手で注射器に薬品を充填する。
そしてそれを、母親の肘関節あたりの血管に注入した。
徐々に、身体を弛緩させていく母親。
「あんな、子供……産まな……ければ……」
諦観と、絶望に満ちた恨み言を残し、母親は意識を失った。
「……ひとまず、他の病室に運んで下さい」
「はい」
看護師らは母親を背負い、退室していく。
「……吾妻君。すまないね」
医師は、部屋の片隅にスペアしてあった予備の拘束具を、少年に装着し直す。
そして、その医師も、女医を伴って退室していった。

再び無音となった部屋に、少年のすすり泣く声が寂しく反響した。
「いらない……」
みきみきみき……と、再びあの音の前兆が聞こえ出す。

「こんな『力』……いらないよぉ！！」

また、生木をへし折るような音がして、視界にスパークが散った。

◆　◆　◆　◆

意識が、緩やかに現実に帰還する。
「……主、起きられましたか」
心配そうに、治療魔法を私に施すリーゼと目が合った。
そっか……顔面に鉄球を喰らって、ノックダウンされたのか。
それで、あんな変な夢を見てしまったのだろう。夢にしては、妙にリアル……まるで、本当に誰かの記憶を、追体験しているようだ

った。
「……うん」
身体は……まだ、起きられない。暖かく柔らかな枕に、再び頭を預ける。
ふと、自分の枕になっているものが何なのか、気付いた。
「膝枕？」
「はい。お嫌でしたか？」
いや……全然。というか、むしろ……
「これ、イイかも……」
なんとも言えない安心感がある。
「申し訳ありませんでした」
リーゼが、心底申し訳なさそうに謝罪した。
「その……訓練に、熱が入りすぎてしまいました……」
猫耳が、ぺたんと伏せられる。
「いや、あれでいい」
まだ顔面に鈍痛が残っている。だけど、もしあれが、仮想物質の鉄球じゃなかったら？
答えは簡単。死だ。
「『一切の手加減無用』……ちゃんと、約束どおりだよ」
今後も、この方式の訓練を続けよう。
「主。あなたは少し、目先の敵に気を取られすぎです。全方位を警戒しなければ……」
リーゼから、さっきの訓練でのダメ出しを喰らう。
「うん……」
それにしても、リーゼってば肌スベスベ……
「この数ヶ月は、徹底した実戦訓練をあひゃうっ！？」
さわさわ～、っと、太ももに手を這わせる。リーゼは、聞いた事が無い珍妙な悲鳴を上げ、飛び上がった。
「あ、あの……あまり撫で回さないでもらえると……あっ……助かります」

「えー聞こえなーい」
撫で回して、指でなぞって……
――ぺろん
「ひぃうっ……！　主、悪ふざけはお止め下さい！」
肌を舐められ、身じろぎするリーゼ。
膝を抜けば、私の頭が地面に落ちるとわかっているためか、それをしないで耐え続ける。

と、私はソレに気付いた。
ぷるぷると、柔らかそうに揺れる二つのブツ。
次の瞬間、私の頭はたった一つの欲望に支配された。

――――揉みたい。

……と。
その欲望のままに、太ももへ気を向けている隙を突いて……！

もにゅっ！

「……！　みきゃあああああああ！！」

――ゴッキイィン！！

リーゼの拳骨が、先の鉄球並みの威力を持って落とされた。
「げふっ……！！」
痛みと共に、またしても絶たれる意識。

でも、何となく本望だったりして……

第五十二話（後書き）

、、、すみません、ツッコミ無用でお願いします。

第五十三話（前書き）

昨日は土曜日なのに出勤ウボァー……
代休は火曜日……せめて来週月曜日にして、三連休にするくらいしてくれよ……と、無茶な願い事をしてみる今日この頃。

でも、就職できただけありがたいと思わなくちゃ。

第五十三話

なのはと望を置いて、家に戻ってきた俺を出迎えたのは、緊迫感だった。

それを発しているのは……というか、他に誰がいようか。

「……！　てめぇ……」

拾ってきた、紅髪だ。

普通にしていれば可愛いつり目も、今や単に刺々しいプレッシャーを放つだけ。

「よっ。ただいま」

まぁ、相手は子供だし……理由を聞き出すまでは、余計な刺激を与えないようにするか。

――パンッ！！

「お」

意外なほどに熟練した身のこなしで、俺の顔面を殴ろうしてきた。

ただ、それがあまりにも真正面からの攻撃だったのと、事前に警戒していたということもあって、平手で受けることができた。

「よいしょっと」

――ドンッ！

背中から、床に投げ落とす。

「うあっ！？」

そのまま関節を固め、怪我をしないように軽く押さえつけた。

「ストップだ」

「……」

真っ先に懐のバルディッシュに手を伸ばそうとしていたフェイトを、空いた手で制する。

ユーノとアルフも、それに倣って手出しをしなかった。

「……くそっ！」
組み敷かれた紅髪が、汚く毒づいた。
「無茶するなよ。また倒れるぞ」
もう俺が倒しちゃったけど……などと、冗談を交えて呟いてみる。
「上等だテメェ！　二分でブッ潰してやる！！」
が、ぎゃいぎゃい騒ぐだけで、実行には移せそうになかった。
今はこうして制圧できたとしても、魔力が回復してしまったら、それも難しいだろう。
「……ねぇ、」
……フェイトが、紅髪の目の前にしゃがみ、視線を合わせた。
「あのね、ひでとには、キミをいじめようとか、そういうつもりは無いんだよ。もちろん、ボクだってね？」
穏やかな言葉。
一言一言を言い含めるような……それでいて、氷のような意思を込めた口調。
フェイトがこうして、流暢に言葉を出せる相手は、二種類だ。
まずは、俺やアルフのような、心を許した相手。
そして二つ目は……フェイトが、『敵』と認識した相手だ。
さっきの行動で、この紅髪は後者に認識されてしまったらしい。
「でも、キミが何の理由も無く、ひでとを傷つけるっていうなら……」
つぅ……と、フェイトの手が、紅髪の首筋をなぞり……
――――ころすよ？
……と、極めて真剣な口調と表情で、告げた。
俺は……
「こら！」
ごっちん！　と、割と本気で拳骨を落とした。
「いったぁ！？」

途端、フェイトの纏っていた冷酷な気配が霧散した。
「女の子がそんな汚い言葉を使うな！」
「だって……！　だってこの子が……！」
涙目で、あせあせと弁明する。
全く……本当はちゃんと分かってるくせに、気持ちが暴走して口走ってしまうんだから。
「すまん、気を悪くしないでやってくれ。口はちょっと悪いけど、根は良い子だから」
空いた手で、フェイトの頭を下げさせる。
「ぎゅっ……！　ひ、ひでとぉ……！」
「ちゃんと謝りなさい」
フェイトは、頭を押し潰されながら、同じく目の前に這い蹲る紅髪を恨めしそうににらみつけた。
「放してぇ……！　そいつ、ころせないいぃ……！！」
「まだ言うか」
むぎゅぅううううううううううううっ……！
「めり込むめり込む！　っていうかもう額がタタミに埋まりかけてるってばー！」
ぴーぴー泣き言を言うフェイト。
「秀人……あんまりフェイトを怒らないでやってくれよぅ……かわいそうだよ……」
俺の手を、アルフがちょこんと摘まんで懇願してきた。
「こういう時にしっかり言っておかないと、定着しちまうだろ。お前はフェイトを甘やかしすぎだ」
聞けば、保護した当初は虫歯だらけだったらしいじゃないか。自分で歯磨きもさせないだなんて、過保護が過ぎる。
まぁその後、延々と続いた虫歯治療で泣きを見たのか、今ではしっかりと歯磨きをするようになったそうだ。
言えば分かる子なんだから、言ってあげるのが本当のやさしさ……だと思うぞ、俺は。

「ご、ごめんなさいいいいいっ！！」
フェイトはようやく謝った。
ぴょんっ、と飛びのき、アルフの背中に隠れる。

俺は、すっかりおとなしくなった紅髪を解放した。
（ユーノ、手出し無用で頼む。あと……）
（ああ、クロノに中継しておくよ）
さすがにユーノは察しが良い。
魔力を持った、異世界からの漂流者。一応は俺も管理局員の端くれだけど、こういうイレギュラーはクロノの仕事だ。
この場に更に人が増えたら、逆に言い辛くなってしまうだろうから、通信で状況を報せることにする。
（秀人。もどき。僕だ）
（とうとうフェレットでさえなくなったな！？）
ユーノが素でツッコみを返した。
（……では、聴取に関しては秀人に一任しよう）
（スルーすんな！！）
（おいユーノ、大事な話してるんだから騒がないでくれよ）
（え、これ僕が悪いの……？　なにそれ理不尽……）
「……」
紅髪は、ただ黙って俺たち……じゃなくて、俺の顔を睨み続けている。
「……」
だんまりを決め込んだまま、一言も発しない。
いきなり情報を晒したりはしないか。なら、まずは……

「お前、俺の記憶にも残らないほど弱かったんじゃないのか？」

とりあえず、何でも良いから揺さぶりをかけてみよう。
「あァ！？」

ちゃりっ……！
効果は、劇的だった。
紅髪は、ワンピースのポケットから十字架……みたいな、変わったアクセサリーを取り出した。
っていうか、ソレ、まさか……！
「……起動！」
『Ａｎ……ｆａｎ……ｇ……』
濁った電子音声と共に、十字架（？）が赤く輝く！
「！」
やっぱり、デバイス！

身構える俺たち。だが……？
「……あ？」
魔力光は、すぐに電池切れを起こしてしまったかのように弱弱しくなり……消えた。
「あ……！？　き、起動！　起動！」
『……』
……駄目っぽかった。
多分、起動に必要な分の魔力が足りていないんだろう。
「起動しろってんだろこのポンコツうううううううう！！」
癇癪を起こして、ぶんぶんと十字架っぽいデバイスのチェーン振り回す紅髪。
「そりゃー」
その手から、フェイトがデバイスを掠め取った。
「あっ……！　返せテメェ！」
「やーだよー」
ひょいひょい、と持ち前の素早さで回避する。
「返せー！」
「ひでと、パス」
「おう」

放り投げられたデバイスをキャッチ。
「うがー！　返しやがれー！！」
「はいはい、ちょっと待ってろ」
突っかかってくる紅髪の頭を掴み、押し留めながらデバイスを観察する。
十字架かと思っていたけど、実際にはちょっと違うみたいだ。
なんというか……剣玉みたいな……まぁいい。試しに、起動してみるか。
何でかは知らんが、プロテクトが外れているみたいだ。
セットアップ……じゃなくて。

「起動」

で、合ってるよな？
――ギンッ！！
正解だったみたいだ。待機状態だったデバイスが発光して、戦闘形態に変形する。
「……え？」
手に感じる、ずっしりとした重み。
その形状は……長い柄と、先端に装着された……ハンマーヘッド。
（ちょ……秀人、それ！）
（えー……）
見覚え……どころじゃない。
その機能も、破壊力も……この身をもって体験している。
それを持っているということは、この少女は……
「おい……おいおいおい……マジかよ」
思わず、目の前にいる少女を凝視する。
フェイトの肩までしかないような、小さな身体。
確かに、あいつもこのくらいの背丈だった。
「お前……あの時の……」

それに、コイツの髪。着込んでいた鎧と、殆ど同じ色。
オマケとばかりに、俺に恨みを持っているとすれば……
「……ふん、やっと思い出しやがったか」
目の前で傲然と腕を組む……ただし、相変わらず頭を俺に掴まれたままでいる……この少女は。
「チビ騎士？」
「誰がチビだっ！！」
ぷすん、と。
残りカスみたいな魔力が、溶けて消えた。

◆　◆　◆　◆

望と手を繋ぎながら、家路に着く。
反対方向なのだから、途中で分かれてもいいんだけど……何となく、望を家まで送って行くことにした。
「……そっか、お父さんが」
「うん。だから、母さん達がちょっと忙しくなっちゃって」
道中、色々な話をした。
不幸自慢は大きらいだけど、望にはサクっと話せた。
アリサ、すずかにも話せたし……私の性格みたいなものだろうか？
とはいっても、変な負担を強いないように、極力軽く。
「ちょっと脳波が弱いだけで、身体は健康そのもの……なんだって」
別に、私が自分で確かめたわけじゃない。
あくまで、母さん達からの受け売りだ。
「え……お見舞いとかは？」
「……そういえば、あんまり行ってないかも」
……一時期。ほんの一時期だけど、私は父さんに恨みを抱いてい

たことがあった。
――父さんさえ、倒れなかったら。
一過性のものだったけど、そのあまりにも自分勝手な考えが後ろめたくて……足が遠のいてしまっていた。
最後にお見舞いに行ったのは、いつだったか。
「行かなきゃ駄目だよ」
望が、真剣な表情で言った。
「意識が無くったって……全部じゃないかもしれないけど、言葉は聞こえてることだって、あるんだよ」
……
「なのに、何も言ってあげなかったら……お父さん、きっと寂しいよ」
「そう……なのかな？」
そんなの、フィクションの世界だけだと思うんだけど……
「私のお父さん、医者だからたまに話してくれるけど……実際に、昏睡から回復した患者さんが、覚えてたっていう例もあるんだから」
「え……望のお父さん、お医者さんなんだ」
「うん。最近、勤め先の病院で何かあったらしくて、忙しそうだけど……って、それはいいから」
ちっ……うまく話が逸れたと思ったのに。
「ちゃんと、お見舞いに行くこと。わかった？」
「うん……そうする」
父親の顔くらい見に行かなくちゃ、だよね。
「ありがと、望」
――すっ……
と、もうすっかり慣れたことだけど、私達の真横に、音も無く黒

塗りの自動車が停車した。
窓が開き、派手な金髪がひょいっと身を乗り出した。
「ハーイ、なのは。奇遇ね」
「アリサ。一週間ぶり」
そこで、アリサと望は、互いの存在に気がついた。
「初めまして、八代望です」
「ご丁寧にどうも。私はアリサ・バニングス」
予想外の邂逅……でも、なかなか友好的だ。
対人コミュニケーション能力が高い人って、得だよね……うらやましい。
「……ところで、なのはとはどういう関係？」
アリサがそう切り出して、望は若干、声を硬くして答えた。
「……『友達』、ですけど？」
「奇遇ね。私も、なのはの『友達』よ」
バチィッ……！　と、何故か火花が散ったように見えた。
何だろう、あれ。
「……ああ、あなたが。さっき、なのはから聞きましたよ」
「へぇ……何て？」
「前の学校の、元クラスメイトさんですよね？」
ビキッ……と、アリサの額にうっすらと青筋が浮いた。
「なのは、言ってたわよ？　『今の学校に、友達らしい友達はいない』って。何ヶ月か前に。
……現クラスメイトのあなたはいつ、なのはと友達になったのかしら？」
「ついさっきですけど、何か？」
にこり、とアリサが微笑む。
「ああ、それじゃあこれから、どんどん知らない一面が見えてきて面白いわよ？
……私は、とっくに知ってるけどね」
望もまた、にっこりと綺麗な笑顔で返した。

「付き合い始めて数ヶ月って……ちょうど倦怠期が始まる頃ですよね？」

バチバチバチッ……！

仮想の火花が、一層激しくなった。

「ついさっき……って、言ってたわよね。どんな切っ掛けがあったのかしら？

ちなみに私は、交際を申し込んだら、快く受け入れてくれたけど」

ふん、と、望が鼻で笑うような変な声を出した。

「さっき、言ってくれたんですよ。『望と友達になりたい』……って。自分から」

……ぶるっ。

あれ？　何だか、寒い……もう夏なのに。

「うふふふふふふふ」

「あはははははははははは」

何でだろう。半袖じゃなくて、七部袖にしておけばよかったかなぁ。

「うふふふふふふふふふふふ」

「あはははははははははは」

二人は妙に平坦な笑い声で、愉快そうに笑っていた。

うーん、よく分からないけど。

「二人とも、仲良くなれてよかったね」

二人は、仲良くずっこけた。

「「あのねぇ！！」」

わ。息ぴったり。

「「……」」

二人は、気まずそうに顔を逸らした。

アリサが、それを取り繕うように明るい声で、私に言う。

「なのは、今から私の家に来ない？　新作のＲＰＧが入ったんだけ

ど……お茶とお菓子でも食べながら、遊ぼうよ」
　タイトルは、ゲームに疎い私でも知っているような、大作ＲＰＧだった。
「あ、そのゲーム私も持ってる。なのは、私んち来ない？　今日、お父さんもお母さんもいないから」
　右からアリサが、左から望が、互いを押し合いながら、迫ってきた。
「なのは、お菓子好きよね？　ウチのメイドも、あんたに会いたいって言ってたし」
「なのは、あんまり広い家じゃ落ち着かないし、人が多くて疲れるでしょ？　私の部屋で、二人水入らずで遊ぼうよ」
　んー……よくわからないけど。
「ゲームはアリサの家でみんなで遊んで、セーブデータを望のメモリーカードに残せば良いんじゃないかな？」
　そうすれば、また集まった時に遊べる。なかなかの名案だ。
　でも、二人はお気に召さなかったようだ。
　顔を見合わせ、ふうぅ～……と、長いため息をつく。

「「……鈍感」」

　正直、心外だった。

第五十三話（後書き）

なのはは、ある意味秀人以上の主人公です。
主にハーレム的な意味で。

第五十四話（前書き）

ＹＡＭＡＨＡ・ポッケが修理完了。
たった３馬力の可愛いヤツです。

第五十四話

「……にしても、よく生きてたな、お前」
周囲一帯ごと焦土と化したと思ったんだが……
「ざっけんな！　マジで死に掛けたんだぞ！」
ころころと、よく表情の動く奴だ。本当に、プログラムなのかどうか疑いたくなる。
「それはお互い様。俺だって、お前に殺されかけたんだからな」
あの、魔法かどうかも怪しい不死鳥が発動されなければ、とっくに殺されていた。
「おかげで、相棒は今も入院中だ」
レイジングハートの修理は難航しているらしく、いっそフレームを新品に換装する、という案も出てきている。
「はっ……だから何だって言うんだよ」
ふてぶてしい。
完全に、没交渉だ。
それじゃあ、仕方ない……
「交渉役を、呼ぶからな」
あまり、脅迫じみた手は使いたくなかったが……。
「ふん、呼びたいだけ呼べば良い。あたしは、絶対に口を割らないからな！」
自信満々。
「……いいんだな？」
ずい……っと、顔を近づけて凄む。
「なにが……だよ」
意地でも引かず、ぎろっと睨み返された。
「もう一度、聞く。　いいんだな？」
「呼びたきゃ呼べっつってんだろ！」

「よしわかった」
冥福を祈るような気持ちで、メールを送った。
にらみ合うこと、十分。
フェイトがあくびをしてアルフに窘められ、ユーノは緊張したまま。
そして。
――ガタガタガタガタガタ……バキッバキッ！！
ドアが、不穏な音を立てて、軋みだした。
って、おいおいまさか……
「な何だ誰だ敵襲か！？」
チビ騎士は懐に手をやり……ハッ、と、デバイスが俺の手にあることを思い出した。
ドアはいよいよ持って、耐久力を使い果たし……
――どかーん！　と、吹っ飛んだ。
「守護騎士の現物サンプルはどこだあああああああああああああああああ！！」
ドアを蹴破り、白衣姿の小柄な人影が踏み込んできた。
吹き飛んだドアがくるくると回転し、本棚に命中。中身を盛大にぶちまけた。
「……よう、マリー。早かったな」
「どこだぁ……！？　サンプルはどこだぁぁ……！？」
ぎょろぎょろと部屋の中をサーチする、その狂気じみた迫力に、
俺たちは……そいつを呼び出した俺ですら、完全に硬直していた。
……っていうか、メール出してからまだ十分も経ってないぞ……
マリー。

さては、リンディさんかクロノを脅したな。
『おいクロノ、生きてるか』

『……ま、りー……！　きん、しかんざい、は、やめろ、と、いった……だろう……』

ぷつんっ……と、念話（＋クロノの命）が途切れた。
……注射一本でＫＯかよ。
『アイツも苦労が絶えないな……周囲が変人ばっかりで。なぁユーノ』
『……その筆頭が言うなよ』
ん？　姿が見えないが、どこ行った……？
「……きゅー」
いた。
ちゃぶ台の下へ、フェレットの姿で潜んでいた。

ピキーン、と、マリーがチビ騎士をロックオン。
「見ィつけたあああァァ……！！」
「……ひィッ！」
守護騎士の見る影も無く狼狽し、内股で後ずさる。
その華奢な腕を、マリーが猛禽のような所作で捕獲する。
「さぁ来い！　ひん剥いて、隅から隅までじっくりねっとり分析してやる！
ふふふふ……まさかの生きた標本！　与えたもうたモルモット、髪の毛一本まで美味しくしゃぶらせてもらおうか……！」
本気で舌なめずりまでするその姿、まさに捕食者。
または変質者。
「ひでと……なに、コレ」
「コレとか言うんじゃありません」
ひっし……と俺にしがみつくフェイトに至っては、人扱いしてい

ない。
　アルフが、耳をぺたんと伏せながら、フェイトの頭を撫でる。
「よしよし、大丈夫だよフェイト。
アレは、こっちから手を出さなければ害は少ないから……」
　崇り神……まぁ、あながち間違ってもいない。

　抵抗も空しく、ずり、ずり、と出口まで引きずられて行く守護騎士。
　目に恐怖で涙が浮かび、助けを求めて左右に揺れる。
「た、すけて……！」
　よほど、マリーが恐ろしいらしい。
……それでいいのか守護騎士。
「なのはとレイジングハートに謝るって約束するなら、助けてやってもいいぞ」
　仕方ないから、助け舟だ。
　俺が殺されかけた程度のことは、多目に見てやろう。
……なのはと、レイジングハートの分は、後でしっかりと侘びを入れさせるけどな。

「あ、あたしは悪くねー！　誰が謝るか！」
　よし、もう止めない。
「マリー、持ってけ」
「研究研究解剖研究……！」
「かい……！？」
　さりげなく含まれた猟奇的な単語に、臨界が近づく。
「さぁ……！　一緒に来てもらおうか……！」
　そしてとうとう……

「いやあああああああああああああっ！！　ごめんなさいいいいいいいいいいいいっ！！」

……結果。泣き喚くチビ騎士から、四人がかりでなんとかマリーを引き剥がす頃には、皆ぐったりとしていた。

「どうだ、渾身の演技だっただろう」

マリーが、額の汗を拭うような仕草をして、相変わらずの無表情でそんなことをのたまった。

「「「「「……」」」」」

四人が、異口同音にこう感じた。

『百パー本気だっただろ』、と。

「ぐすっ……」

チビ騎士は、返してやったデバイスをがっちり握り、部屋の隅に座り込んでいる。

倍増した警戒心は、マリー一人に向けられていた。

……結果として、俺たちへの警戒を解くことには成功したわけだが。

「ただいまー……って、何これぇ!?　ドアが!!」

ばたばたばた、と、なのはが風通しの良くなった部屋に駆け込んできた。

「秀人さん秀人さん秀人さん！　ドアが……あれ？」

そして、部屋の中心に居座るマリーに気付いた。

「……どなた？」

「マリエル・アテンザ」

実に簡潔な回答だった。

「いや、そうじゃなくて」

「レイジングハートの修理を担当している」

「え!?　あ、これは失礼を……」

相棒の主治医、と聞き、態度を軟化させる。

「そして、ドアを破壊したのは私だ」
「さらっとカミングアウトしないで下さい！」
「ついでに、本棚も中身ごと壊した」
「帰れ！」
飛び掛ろうとするのはを、ユーノが羽交い絞めにして止めた。
「止めないでユーノくん！　こいつのメガネ、ばっきばきに砕いてやらないと気が済まない！」
「まぁとにかく、」
マリーは悪びれもせず、部屋に居座った。
「ソイツを連れて行く、というのは本当だ」
「……！！」
ビクッ！　と、チビ騎士が背後で強張るのをはっきりと感じつつ、マリーに言い募る。
「拘束の後に事情聴取、で済む話じゃないんだろ？」
「ああ」

まぁ隠すことも無いか、と、マリーは話してくれた。
「正直に言えば、守護騎士を構成する真性古代ベルカ（エンシェント）の術式と、アームドデバイスのデータが欲しい」
カートリッジシステム搭載デバイスはともかく、術式……？
そんなもの、一体何に使うっていうんだ？
「おまえ、本気か？」
マリーが、怪訝そうに俺を見る。

「お前の専用デバイスは、ベルカ式対応だと言っただろう？」

「聞いてねーよ！！」

初耳だぞ、そんなこと！
「……そうだったか？　まぁ、とにかく必要なんだ」

「でも、なんでベルカ式？　ミッド式じゃだめなのか？」
「駄目というわけではない。単に、ミッド式の魔法というのは、どうしても遠距離がメインになりがちで、近接先頭の術式は少ない」
確かに、そうかもしれない。インパクトは、そろそろ威力的に厳しい。ブレイズセイバーと、フラッシュムーブ、ソリッド……そのくらい。あとは、砲撃魔法を至近距離でぶっ放すくらいだ。
「そいつの構成術式の中には、失われた古代ベルカの魔法や、カートリッジシステムについての記述があるはずだ。それを解析し、使用可能にすれば、守護騎士とも互角に渡り合えるようになる」
それは、なかなかに魅力的な提案だった。
カートリッジシステムは自分で言い出したことだが、ベルカ式の魔法は考えたこともなかった。
「遠隔・広範囲に特化したミッド式と、近接・単騎に特化したベルカ式。どう考えたって、おまえはベルカ式の方が馴染む」
だが、話を聞いていたなのはは、難色を示した。
「そんな、敵と同じ力なんて……」
抵抗が無いわけじゃない。それでも、これから先、強力な敵を相手にすることを考えたら、使えるものは何でも使っていかなければならない。
……今度こそ、なのはを……レイジングハートを、守るためにも。
「なのは」
意外にも、それを諫めたのはフェイトだった。
「力は、どこまでいってもただの『力』で、それを活かすか、ころすかは、使う人の気持ち次第なんだよ」
それは、以前俺がフェイトに伝えた言葉だった。
ちゃんと覚えててくれたのか。
「ひでとは、力の使い方を間違えるようなひと？」
「……違う、けど」
「なら、いいんじゃないかな？」

「……」
じっと、考え込むなのは。
理屈では分かっていても、感情は割り切れないらしい。
「それにさー！」
ぱっ、と、フェイトが口調がいきなり軽くした。
「『敵と同質の力で戦う』って、ライダーみたいでちょーカッコいいじゃん！」
「ぷっ……！」
なのはも、思わず吹いてしまっていた。
「そうだよね……ありがと、フェイト」
よしよし、とフェイトの頭を撫でる。
「ごめん、秀人さん」
「いや、気にしないでいい」
壁際のチビ騎士に、歩み寄る。
チビ騎士は、一瞬ビクッと強張ったものの、襲い掛かっては来なかった。
「……何だよ」
「聞いての通りだ。お前の身柄は、時空管理局が預かる」
「……ああ、もう好きにしろよ」
既に、諦めているらしい。
でも、このまま引き渡したとしたら……待っているのは、尋問だけだ。
「……その前に、一つ聞かせろ。リンカーコアの蒐集、あれは、やりたくてやっていた事か？」
それが、聞きたかった。
俺は最初、守護騎士達は、自ら進んで蒐集を行っているのだと思

っていた。
だけど、こうして接して、言葉を交わしてみて……疑念を感じた。
確かに、蒐集を行っているのはこいつらだ。それは間違いない。
けど……それを、主が無理矢理やらせているのだとしたら、話は別だ。
「どうなんだ？」
「……アタシは、闇の書の守護騎士だ。
主の願いを叶えるのが、アタシ達の存在意義。
殺せと言われたら……女子供でも、殺してきた」
「……」
「でも」
持ち上がった視線が、俺とぶつかる。
「アタシ達は、殺したくて殺したことなんて、一度も無い」
そこには、確かな意思と……誇りがあった。
「そうじゃなきゃ……誰が……」
俯き、肩を震わせる。
その姿は、冷酷な敵でも、残忍な殺人者でも無く……ただの、哀れな子供だった。
「よし……わかった！」
ぱんっ、と膝を叩き、立ち上がる。
「なんか、すっごいデジャブを感じるよ……」
「うん……もう馴れたけど」
なのはとユーノが、顔を見合わせて生暖かい笑みを浮かべていた。
「？　ねーねー、なんの話？」
「フェイト、いいから……」
アルフにやんわりと止められるフェイト。

「……リンディさんから聞いていた通り、か……」
成り行きを傍観するマリエル。

が、反対は無い。
俺は、チビ騎士の脇に手をいれ、『高い高い』をするように、抱え上げた。
呆気に取られるチビ騎士に……言った。

「お前、ウチに来ないか？」

第五十四話（後書き）

うあぁ、、、内容が薄すぎる（汗）

精進あるのみです、、、

第五十五話（前書き）

アームドデバイスって、基本無口ですからキャラ作りが難しいです、、、

第五十五話

鉄鎚の騎士は、困惑していた。
「ウチに来いって……本気(マジ)か？」
「ああ、マジだ。お前さえ良ければ……だけどな」
今、自分を抱き上げているのは……
「アタシはお前を、殺そうとしたんだぞ」
そう。操られていたとはいえ、自分が死の寸前にまで追い込んだ、一般人の少年だ。
恨まれて当然……いや、確かに恨まれてはいる。だが、それにしては軽すぎる。
「ああ……俺はいいよ、別に」
何だろう、この少年は。自分の命というものを、あまりに無造作に扱っている。

「どうせ、放っておけば治るし」

不貞腐れているわけでも、自暴自棄になっているわけでもない。
ただ単に、自分というものに、少しも頓着していない。
「また、そういうこと言う……！」
傍らで、栗毛の少女が眉を吊り上げ、少年を睨んでいた。
「……ひでと、」
金髪の少女が、悲しげに少年を見つめる。
「で、どうする？」
意図的にそれを聞き流し、鉄鎚の騎士に聞いてくる。
「待て」
成り行きを傍観していたマリーが、口を挟む。
「それは、お前の一存で決定できることではない」

少年は、そこまで高い立場にいるわけでは無い様だった。
「何より、私はそいつのデータを持って帰りたいんだ」
……珍しい研究素材を逃がしたくない、という一心だろうが。
面倒くさそうにマリーを見やり、ため息をつく。
「わかった。データがあればいいんだな」
くるっと鉄鎚の騎士を振り返ったのと同時、少年の魔力が発動した。
足元に、ミッド式魔法陣が展開。
身体の周囲の魔力が、一本のラインとなり、そして……
「ちょっとくすぐったいぞ」
「え……？」

――バシュッ！

「うあっ！？」
鉄鎚の騎士の身体に、突き刺さった。
「……！！」
目を瞑り、やってくるであろう痛みを覚悟し……
「……？」
が、痛みは無い。むしろ……
「魔力が……回復した？」
干からびていたリンカーコアに、魔力が補充されていた。
「ほう……これが、例の」
白衣の女は、それはそれで興味深そうに観察していた。
「マリー、それこっちに渡せ。あと、お前のストレージも」
少年が、白衣の女に言った。
「……チッ」
舌打ちを一つ、懐へ仕舞おうとしていたハンマー状のデバイスと、カード状の機器を差し出す。
「油断も隙もねーな、お前は……」

両手にデバイスを持ち、それにもラインを繋げる。
魔力のラインが、鉄鎚の騎士と二機のデバイスを、少年を中継するようにして繋がる。
そして次の瞬間、見えない手で、身体をまさぐられているような感覚が走った。
「ひゃんッ！？」
鉄鎚の騎士は、意外と可愛らしい悲鳴を上げた。
「ちょっと我慢な」
「ちょっとって……ひゃうっ！　ど、どれくらい……！？」
「んーっと」
腕を組み、焦らすようにゆっくりと、時間を算出する。
「五分くらい、いってみようか？」
「ふ、ふざけんな……ひゃあぁっ！？」

そして、きっかり五分後。

ぷつん……とラインが途切れるのと同時、奇妙な感触は消え去った。
「はひー……はひー……！」
息も絶え絶えにぐったりとする。
「よーし、これで許してやろう」
……いっそ、一発殴ってくれたほうがマシに思える制裁だった。

「マリー、これでいいな」
差し出されたのは、カード状の機器のみ。
「……確かに」
口惜しそうに、ハンマー型デバイスに目を遣りながら、返された機器を操作する。
「おい、何だったんだ、今の……？」
何故か魔力が回復して……全身がむずがゆくなった、

「お前のデバイスとリンカーコアのプログラムを、丸ごとコピーしてマリーのデバイスに記録した」
「……はぁ！？」
さらっと告げられた衝撃の真実に、素っ頓狂な声を上げる。
「でもやっぱり、ベルカ式ってのは難しいな。何が何やら、さっぱりわからなかったから、丸ごとコピーする羽目になっちまった」
「いやいやいや、そうじゃなくて！」
少年に詰め寄り、がっくんがっくんと前後に揺さぶる。
「何でお前が、『蒐集行使』を使えるんだよ！？」
「えぇ……？」
今度は、少年が呆ける番だった。
「蒐集って、何が？」
「すっとぼけんな！　今、お前が使ったアレだよ、アレ！」
「リンカーコア結合のことか？」
「そう、多分それ！」
「いや、今のは単に、リンカーコアを接続して、情報を片っ端からコピーしただけだぞ」
「全然『だけ』じゃねーよ！」
守護騎士の身体は、プログラム……つまり、文字列の情報で出来ている。
それを片っ端からコピーした……ということは、全身を隈なく探られたのと同義で……あのむずがゆさも頷ける。

「あー……確かに、ちょっと似てるかもね」
栗毛の少女が、こくこくと頷いた。
「カットペーストか、コピーペーストかの違いくらいかな」
中性的な少年が、それを補足。
「闇の書の蒐集能力っていうのは、元は秀人がやったのと同じように、術式などをコピーするだけの安全な機能だったらしいよ」
「……ああ、そうだよ」

闇の書の生き証人である彼女は、ごく僅かながら、それを覚えていた。
「アタシたち守護騎士も最初は、その知識を狙う輩から、主を、知識を守るための存在だった」
それが、何代目かの悪意ある主により、改悪され……
「……今じゃ、自分の名前も思い出せないけどな」
ははっ……と、自虐的な笑みを浮かべる。
と、少年が口を開いた。

「ヴィータ」

全員の注目が、少年に集まる。
「文字列の中に、それだけ読める文字があった。多分、お前の名前なんじゃないか？」
「……アタシの、名前？」
確かめるように、「ヴィータ……」と、小さく呟く。
「そう、だ……」
バラバラだった記憶のピースが、その名前を基点として、かちかちと次々に繋ぎ合わされていく。

「アタシは、鉄鎚の騎士……ヴィータ」

――――ガシュン！
「うお」
少年の手の中で、ハンマー型デバイスが突然暴れだした。
そのまま手を離れ……鉄鎚の騎士、改め、ヴィータの手の中に納まる。
「そして、そのデバイスの名は……」

「思い出したよ」
僅かな微笑みを浮かべ、相棒の名を呼ぶ。
「起きろ、グラーフアイゼン」

◆　◆　◆　◆

チビ騎士……改め、ヴィータとグラーフアイゼンが、紅い魔力を輝かせた。
「よかったな……ヴィータ」
俺のほうを向いたヴィータは、やや気恥ずかしそうに唇を尖らせた。
「ふん。うっせーバーカ……」
きんっ……と、グラーフアイゼンが金属音を鳴らす。
『……貴公、名は』
まだ少し寝起きのような声で、そう尋ねた。
「秀人。吾妻秀人だ」
『よくぞ、我が使い手を救ってくれた。貴公には、いくら感謝しても足りぬ』
礼儀正しいを通り越して、堅苦しいなこいつ。
「それで、どうする？　ウチに来るか？」
わき道に逸れてしまったが、まずは返事を聞かないと。
「条件は、何だ？」
「いや、別に条件とかは……」
何も、従属させようとかそういうつもりじゃないし。
「違う」

が、否定された。
「アンタは、敵であるアタシのために、力を尽くしてくれた。
アタシはベルカの騎士として、その恩に報いなければならない」
ちょっとばかし寝かせて、飯を食わせて、魔力を回復させて、名前を教えてあげただけなんだけどな……
「……それが、アタシの誇りだ」
……ほんっと、主もデバイスも、堅苦しいことだ。
「わかったよ、ヴィータ。条件は二つ」
本人が望むなら、いいよな。
「一つ。定期的にマリーの所に通い、データ提供をすること」
さっきの一回だけでは、必要最低限のものしか得られなかった。
俺の専用デバイス製造のためにも、細かなデータが必ず必要になるだろうから、それを戴くとしよう。
「ここまでは、いいか？」
「ああ」
ヴィータは、一切のタイムラグを置かずに頷いた。
「二つ目」
まぁこれは、条件というか、家事の分担に近いかもしれんが……
「お前を、我が家の『お買い物係』に任命する！」
――――――――時が、数秒間停止した。
「……はぁ!?　おか……!?」
「うむ。お買い物係だ」
なたしても、ヴィータは慌てふためいた。
「あ、アホかお前は！　そこはほら、もっと……重要な条件を出すところだろう!?」
「あ、それいいかも」
なのはが、ぽんと手を打った。

「私そろそろ学校に復帰するし、夕食の買い物、してくれるならかなり助かる」
今までは、俺かなのは、もしくはユーノが時間を見つけては買いに行っていた。
けど、俺は仕事で帰りが遅れることがあったり、なのはは学校帰りに友達と遊びたいだろうし、ユーノは何やら研究に没頭していることがある。
誰かが、決まった日時に行ってきてくれるなら、なのはの負担も少なくなる筈だ。
「お買い物……おかいもの……アタシが……？」
悩ましげにぶつぶつ考え込むヴィータ。
「頼めるか？」
「……えぇい、お買い物係でも何でもやってやるよコンチクショー！」
……やけっぱちだった。

さて……事後承諾になるけど、話を通すとしようか。
『クロノ。おーい、クロノ。生きてるか』
「誰が、死ぬか……！」
返事は、玄関からあった。
ぜーぜー言いながらも、しっかり二本足で立っていた。
「マリー！　勝手な行動をするなと、言っておいたはずだろう！」
「ふん。ワタシはお前の部下ではない」
守護騎士を独自に確保しようとしていたことを、今更ながら怒られていた。
「まぁ座れよ。説明すっから」
ちゃぶ台が用を成さなくなったので撤去し、ぐるっと適当に陣取る。

「ってわけで、こいつウチで引き取ろうと思うんだけど」

「……はぁ」
何かを諦めたようなため息をつく。
「……それが、どういうことかわかっているのか？」
「ああ。闇の書の主は、守護騎士の一体を取り戻しに来るだろうな」
これだけの力。生きていると分かれば、四分の一とはいえ、そう簡単に諦めたりはしないだろう。
「逆に言えば、常に俺たちに闇の書を引き付けておくことが出来る」
一般人への被害は、少なくすることが出来る。

「第一、」
ぐるっと、部屋に揃った面子を見渡す。
俺、なのは、フェイトはＡＡＡランク相当。ユーノ、アルフはＡランク相当。
合計５人の高ランク魔導師が揃っている。
更に、ヴィータを戦力に数えることが出来れば、体制は万全だ。
「管理局は、これ以上のメンバーを、この事件のためだけに用意できるのか？」
確かに、管理局にも俺たち以上の実力者はゴロゴロいるに違いない。が、人材不足が常態化している管理局で、この事件のためだけに、トップメンバーを贅沢に投入することなんてできないだろう。

「……君は、高町なのはを危険に晒すことを良しとしなかったのでは？」
「フェイトとアルフが護衛についてる。心配する理由が無いな」
ぱぁっ……と、フェイトの目が輝いた。
「アルフ、アルフ！　聞いた！？」
「うん、よかったねフェイト」
「いやっほー！」
どーん、とアルフにタックル。
ごろごろと床を転がり、俺の膝の上に着地した。

「……」

黙りこみ、考え込んでしまうクロノ。

多分、アースラからの対応の遅れが心配なんだろう。

「お前もこっちに拠点持ったらどうだ？」

「なに……？」

「前線基地みたいな感じで。そうすれば、現地に常駐できる上に、守護騎士の監視も、闇の書への対処もスピーディにできるんじゃないか？」

「ふむ……確かに、名案だな。よし、それで行こう。艦長やエイミィにも、話を通しておく」

と、話を聞いていたマリーが「早速、準備に取り掛かる」とだけ言い残し、開け放しのドアへすたすたと歩いていく。途中、足を踏まれたフェイトが「ぎゃーす！」と悲鳴を上げたが、お構い無しだった。

「何だ、アイツ……？」

「……マリーの突飛な行動に、理由を求めるだけ無駄だ」

ふぅ、と、仕事に疲れたサラリーマンみたいなため息をつく。

まぁとにかく。

「よろしくな、ヴィータ」

何やら、奇妙な縁だが……

「ようこそ、我が家へ」

今日からは、家族の一員ってことで。

第五十五話（後書き）

とにかく、強引にでも話を進めます！

次回は久しぶりのはやて編です。

第五十六話（前書き）

ついに、、、ついにこの日が、、、！
ＰＶが、１０００００００を突破しました！
はじめのうちは、５０００００００も行けば御の字だろうと思っていました。
皆様、どうもありがとうございます！！

第五十六話

私は、何度目か数えるのもバカバカしく、リーゼの膝枕で傷の治療を受けていた。

「ううぅ……痛い……超痛い……」

今日も今日とて、実戦訓練。

魔剣を振るい続け、鉄球をよけ続け、斬り続け……最後の最後には、またしても顔面レシーブだった。

「はぁ……当たり前ですよ、主。すぐに熱くなって、考え無しに突貫するから……もっと状況を冷静に判断してからですね……」

くどくどと小言を言ってくる。

おっかしいなぁ。

もっと従順な人格を設定したつもりなんだけど……

「そんなことでは、一生掛かっても彼らには勝てませんよ」

むかっ。

「うっせーこの野郎！」

――むにゅっ。

柔らかい胸を、鷲？みにしてやった。

「にゃあああああああああああああああっ！！」

リーゼが飛び退り、同時、頭が地面に落ちて「ごん」と音を立てた。

「あ、あ、主！　私の胸を揉むのはお止め下さいと、何度も……！」

「ふん、そんなモンぶら下げてるお前が悪いんだよ……」

おー、痛い……でも、もう起きられる。よっこいしょっと。

「……はぁ」

リーゼが、諦めたようにため息をついた。

「確かに、そういった弱点はあるものの……技量としては、なかなかの上達振りです」

ちらっと目を遣った先には、スイカのように真っ二つになった鉄球の残骸が、いくつか転がっていた。
「あなたには、優れた剣の才が有るようです」
「ふーん……」
剣道なんて、習ったこと無かったからよく分からないけど……才能が有るのは、いいことだ。
――ぴぴぴっ。
と、今日だけは傍らに置いていた目覚まし時計が鳴った。
おっと、時間時間……
「主？」
首をかしげるリーゼ。あ、そういえば……言ったことなかったっけ。
「どこへ行かれるのですか？」
「美香に会いに行く。お前も付いてきて」
「美香……？」
面倒だから、歩きながら説明しようっと。

……

「なるほど……」
道中、リーゼはあごに手を当て、何か考えていた。
ちなみに、リーゼの容姿は色々な意味で目立つから、服を量販店で買って行った。
別にパクってもよかったんだけど、リーゼの「あなたは『王』であって、夜盗では無いはずです」の一声によって却下された。
耳をハンチング帽、尻尾をカーゴパンツに仕舞いこみ、伊達眼鏡を掛けた姿は、まぁ割と街中に溶け込んでいるようにも思える。Tシャツが猫柄の染め抜きなのは、ちょっとしたシャレだ。
「つまりその方は、主と師弟の契約を結んだのですね？」
「うん。とはいっても、魔法的な儀式は何も無かったけど」

いわば、義兄弟の盃……みたいな？
「……」
リーゼはまたしても、何かを考えこんでいる。

美香のやつ、元気にしてるかな。
久しぶりに……しかも、夜じゃなくて昼に会いに行ったら……
…多分、すっごい驚くだろうな。それに、リーゼのことも……
「ふふ……」
目を真ん丸くして、ほけーっと驚く姿が目に浮かぶ。

「主は、彼女をとても好いているのですね」

と、リーゼが突然、そんなことを言い出した。
「……はァ！？」
突拍子も無い発言に、思わず声が裏返ってしまった。
「ち、ちがうし！」
否定しても、リーゼはただ微笑むだけだった。
「主のそんな優しげな顔、初めて見ました」
「だから、誰が、誰を好いているって！？　テキトーなこと言うな！」
何人かが、くすくすと笑いをかみ殺しながら通り過ぎて行く。
「あーもう！　さっさと行くよ！！」
「はい、主」
リーゼの手を引き、ぐいぐいと通りを進んで行く。

商店街を抜け、住宅街を抜け……段々と、人気が無くなっていく。
草が生えっぱなしになっている、なだらかな丘を登り……
「へー、こんな建物だったんだ」
到着したのは、妙な存在感のある、白い建物。
ここが、美香が入院している病院。

何食わぬ顔で、自動ドアをくぐる。若干弱めの冷房が、私達を出迎えた。

ぱたぱたと、ナース服や白衣を着た人が忙しそうに走っている姿を見ると、やはりここは病院なんだなー、と、当たり前の感想を持ってしまう。

腐ったミカン的な院長はサクッと殺しておいたから、多少は雰囲気が明るい。

「すみません、見舞いに来たんですけど」

「はい、どなたでしょう？」

「えーっと……柳瀬美香って子の」

「え……？」

と、その名前を聞いた看護婦の顔が、明らかに引きつった。

「……失礼ですが、柳瀬さんとの続柄は？」

最近の病院は、セキュリティが厳しいらしい。

「あー……友人です」

「……少々、お待ちください」

あ、信じてないなコイツ。

「……」

意識を集中して……魔力発動。

「主」「わかってるってば」

うるさいリーゼを制し、魔法による暗示を行使する。

後遺症は残らない。あくまで、この場を凌ぐための……

「『私は、柳瀬美香の友人です。部屋の番号を教えてください』」

言霊をかけられた看護婦は、とろんとした目になる。

「……はい、柳瀬美香さんは、５０３号室です」

よっしゃ。

「どーも。行くよ、リーゼ」

効果が切れる前に、スタコラサッサだ。

――チン……

エレベーターが五階で止まる。

と、廊下に足を踏み入れた途端……

「もう、放っておいてよ！！」

実に聞き覚えのある声が、えらい剣幕で張り上げられていた。

あーあ、タイミング悪い時に来ちゃったかなぁ……

病室のドアの横に立ち、聞き耳を立てる。

「美香……お願いだから、話を聞いて……」

「うるさい！　帰って！！」

そして、がちゃん、と何かが割れる音。

「……また、来るからね」

とぼとぼ、という表現がぴったりと合う様子で、一人の女性が病室から出てきた。

気配を消しているから、私達には気付いていない。

コイツが美香の姉貴か……って、えええ!?

「司書のお姉さん……？」

「え？」

やべっ……！　気付かれた！

「あなた……八神さん？」

美香の姉は、私がよく足を運ぶ図書館の司書……美穂さんだった。

……

待合室のベンチに、三人で腰を下ろす。

「まさか、八神さんがいるなんて、思いもしなかったわ」

「お互い様ですよ」

姉と、兄がいるとは聞いていたけど……まさかこの人とは。
「……でも、いつ美香と知り合ったの？　あの子、ずっと入院してるのに」
夜に窓から忍び込んで……駄目だ言えない。
「私も一時期、足が不自由だったからその縁で」
「ああ、そうだったわね」
車椅子で図書館に通っていたからか、すんなりと信じてもらえた。

「そちらは？」
すっと、リーゼを示す。
「リーゼ……親戚です」
「初めまして。リーゼと言います」
私の家族構成なんて知らないだろうから、これでいい。
「それで……今日は、美香のお見舞いに来てくれたの？」
「はい」
「……今日は、無理かもしれないわ」
「あー……」
やたらと癇癪おこしてたけっけ。
「……はぁ」
ずーん……と、やっぱりダウナーな雰囲気。
「入院生活が長くて、鬱憤が溜まるのも分かるんだけど……最近、特に不機嫌で」
……げ。
まさか……私か？　私が最近、顔を見せないからなのか？
だとしたら、美穂さんはとばっちりだ。
「ちょっと、顔だけでも見ていきます」
心配そうにする美穂さんを残し、美香の病室へ向かう。

リーゼを部屋の外に待機させ、病室のドアを開ける。
「帰れって言ったでしょ！」

ぶんっ！　と、いきなり文庫本が顔面めがけて投げつけられた。
それをキャッチして、ベッドの上に放り返す。
「せっかく来てやったっていうのに、随分な言い草だね」
「……え？」
そこで、私の顔に気付いたのか、美香が呆ける。
「……姐、さん？」

「久しぶり、美香。元気してた？」
ベッドの脇まで行って、ぽんぽん、と頭を撫でる。
じわー……っと、美香の目が潤んでいく。そして。
「姐さんの……バカー！！」
「おおおっ……？」
どん、と思いっきり抱きつかれた。
「ううううぅ～……！！」
ぐいぐいと、遠慮の無い全力で抱きしめられて、正直言えば、ちょっと苦しい。
でも、しばらく放置してしまった罪滅ぼしだ。好きなだけ、甘えさせてやろう。

そして、十分くらいの後、ようやく美香が離れた。
「……ごめんね、美香。ちょっと、忙しくて」
魔法を教えてやる、そういう約束だったのに……ゴタゴタと忙しくて、おざなりにしていた。
「でもね、美香。せっかく見舞いに来てくれた姉ちゃんに、あんまりひどいこと言うもんじゃないよ」
本当に、見舞いに来てくれる人がいるってことが、どれだけ幸せかわかってるのかな？
「でも……」
「でも、じゃない。後でちゃんと、謝っておきなさい」
「……はぁい」

「お、うまそうじゃんコレ」
小さなテーブルの上に置いてあったフルーツの盛り合わせの中から、桃を取り出してかじりつく。
「姐さん……」
呆れるような視線から逃げ、もしゃもしゃと果物を頬張る。
そのとき、廊下から数人の騒がしい足音が聞こえてきた。
うるさいなぁ……病院なんだから、少しは遠慮しろっつうの。
「あ……このフロアは、四部屋しか無くて、二つしか使ってないよ」
うっわ……贅沢。
私が言いそうになっていた言葉を、美香が肯定した。
「私は別に、大部屋でも良いって言ってるのに、お兄ちゃんとお姉ちゃんは……」
ぶつぶつ、と愚痴る。
個室の病室がいくらするかは知らないけど、かなり高額なはずだ。
美香に余計なストレスを与えないよう、かなり無理しているに違いない。
「やさしいお姉ちゃんだね」
「……でも、私のために変な我慢とか、しないでほしい」
「喧嘩の原因はそれ？」
「うん。お姉ちゃん、『欲しいものは無い？』って、いつもそればっかり」
……うーん、難しいなぁ。
どっちの気持ちも、よく分かるんだけど……

――……、……！？

と、隣室が、またにわかに騒がしくなり始めた。
（……うっさいなぁ、もう！）
さっきから、人が考え事してるのにがやがやと……いい加減、我慢

の限界だ。
怒鳴り込んでやろう。
「美香、ちょっと待ってて……」
「ちょっと！　静かにしてよ！！」
病室の中にいた大勢が、ビクッと振り向いて……

第五十六話（後書き）

続きは、近日投稿！
三連休だぜひゃっほう！

第五十七話（前書き）

そろそろ、オーズも最終回ですね、、、、、

プリキュアを見ていて、キュアビートの変身・必殺技バンクが可愛すぎてテンションだだ上がりです！

第五十七話

――――また、いつもの夢か……？

意識はハッキリしているのに、身体が無くなったように、見ていることしか出来ない、もどかしい状況。

『……うるさい』

……いや、違う。いつもの夢じゃない。

俯瞰するのは、いつもとは別の病室だ。ベッドシーツを頭から被り、外界をシャットダウンしようとしているのは、声からして小さな女の子だろう。

――ドンドンドン！！

鍵を掛けた病室。そのドアが、激しくノックされる。

『××さん！　××さん！』

ここが病院だと配慮している雰囲気は欠片もない。

『事故の状況を説明してください！　××さん！』

下賤な好奇心を満たさんとする、下衆の所業だった。

『唯一の生存者であるあなたには、それを語る義務があるんですよ！』

ただ一方的に自分の要求を叩きつける、不快極まりない声だった。

『うるさい……うるさいうるさいうるさい！！』

少女は、泣いていた。

『たすけて……！』

か細い声。

――ドンドンドン！！

それは、ドアを叩く音に容易く掻き消され、誰にも届かない。

『誰か、たすけてよぉ……！！』

――ドンドンドンドンドンドンドン『思い出せ思い出せ思い出せ』ドンドンドンドンドンドンドン『思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ』ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドン！！

いつしか、壊れたテープレコーダーのように、延々とそれをリピートする。

いつドアを破られるかも分からない。

その恐怖に怯え、シーツを被り、がたがたと震える。

『パパ……ママ……！！』

シーツの中で呼ぶのは、両親。

だが、両親はいつまで経っても現れない。

――――『思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ』ドン！！

『あああッッ！！！！！』

――悪夢。

見ているだけで、吐き気を催すほどの、悪夢だった。

この少女が誰なのかは知らない。実在するのかも……もしかしたら、ただの俺の妄想なのかもしれない。けど、それでも……

「や、めろ……！！」

意識だけの自分。

何も手出しが出来ない自分。
夢でもなんでも……それが腹立たしくて。
「やめろ……！！」
気体のような身体に力を込めて、拳を握り……！

――そこで、唐突に目が覚めた。

「……くっそ」
跳ね起きる。
五体の感覚。寝起きでぼやける視界を擦り、乱暴に眠気の残滓を振り払う。
「ん……」
隣で、なのはが寝ている。ユーノとアルフが動物形態になり、丸まっている。
フェイトがタオルケットを蹴飛ばし、クロノを足蹴にして寝ている。
……俺の家だ。
「……」
「……ヴィータ？」
ヴィータだけは、起きていた。
壁に背を預け、じっと宙を見据えている。
「……」
ずっと起きていた……わけでは、無さそうだ。
特徴的な紅髪に、寝癖が混じっている。
「……なんだ、早起きだな」
ヴィータは軽口には応じず、俺と目を合わせた。
「なぁ、秀人。お前……」
……何だ？
何かを言いかけて、思いとどまったように、口を閉ざしてしまった。

「……なんでもない」
もしかしたらこいつも、悪夢を見たのかもしれない。
「そっか。んじゃ、起きようぜ。もう朝だ」
悪夢を見て目が覚めるなんて、ガキっぽいにも程がある。
さて、もう起きるとしよう。
窓の外からは、太陽が顔を覗かせていた。

「ヴィータ、クロノ。それじゃ、留守番を頼んだぞ」
俺、なのは、ユーノ、フェイト、アルフの五人は、玄関先から部屋の中に声を掛けた。
「ああ、行ってくるといい」
部屋の中には、クロノと、
「……いってらっしゃい」
まだ少しぎこちない、ヴィータが見送ってくれる。

今日は、ヴィータを我が家に迎えた翌日。
ついでに、なのはが桃子たちと過ごす日でもある。
この後ヴィータは、クロノの護衛のもと、マリーのラボへと向かう予定になっている。
……一人で向かわせるのは、色々とデンジャラスだからな。
猫に鰹節というか……飢えた肉食獣の巣穴に、ウサギを放り込むようなもんだ。
「クロノ……今度は一撃死するなよ……？」
「……うるさい」
隙を突かれ、薬物注射でＫＯという無様な敗北を喫したクロノは、弱弱しく目をそらした。
「大体、お前がマリーにあんなメール送るからこうなったんだろうが！」
おう……よっぽど恥ずかしかったのか、クロノの口調が崩れてい

る。
「いやぁ……スマンかった」
まさか、クロノを制圧してまで飛んでくるとは思わなかったんだ。
「だいたい、お前はだな……！」
うへ、小言が始まった。
「行ってきまーす！」
なのはの手を引き、ダッシュした。
「あ、おいコラ待て！　まだ話は……！」

とりあえず徒歩だ。
転移魔法を使いたいところだけど、口うるさい執務官がすぐそこにいるからな。
「クロノってば、やっぱり口うるさいなー」
頭の後ろで手を組み、てくてくと歩くフェイトが愚痴る。
「もっと女の子らしくしろー、とか、スカートであぐらをかくなー、とか、ピーマンのこすなー、とか……まったく、キミはボクの兄貴かっつうの！」
思い出してはぷりぷりと怒り、歩調が荒くなる。
「三日に一回はきてたよー。ね、アルフ」
「いや、あたしのほうは週に一回くらいだったけど」
「え、なんでー！？　ずるい！」
……あいつがそんな足しげく面会に行っていたことのほうが驚きだわ。
そういえば、クロノは一人っ子だとか言ってたな。つい年下に世話を焼いてしまう性分なんだろうか。兄弟がいない分、他人の世話を焼くとか……無いな。
年下というか、むしろ……
「フェイトだからなぁ」
「フェイトだから」
「フェイトだもんねぇ」

「フェイトだし」
俺、なのは、アルフ、ユーノの異口同音な感想に、フェイトが叫ぶ。
「りふじんだー！？」

「フェイト、ピーマン食べられないの？」
なのはがふと思いついたように、何気なく聞いた。
「う……だって苦いんだもん……」
「他には？」
「えーっと……にんじん、なす、きゃべつ、れたす、とまと、かぼちゃ……」
「野菜、殆ど全部駄目じゃない……」
超お子様の味覚だった。
「じゃあ、好きな食べ物は？」
「甘いもの！
……けどリンディさんが『また虫歯になるから』って、あんまり食べさせてくれない」
「そうなんだ……」
ちらっと、なのはと目が合う。
念話で、以心伝心。
――今夜、野菜尽くしで。
――ＯＫ。
野菜嫌い、なんとかしよう。

今日はまず、全員で食事をして……その後、なのはの父親の見舞いへ行く予定だ。
望に言われたから、久しぶりに様子を見に行くことにしたらしい。
「……病院、か」
つい口をつき、出てしまった。
今朝の夢は、一体何だったんだろう。

似たような夢は、何度も見た。けど、それは俺自身の体験であって、あんな異常なものではなかった。
あの女の子も、多分知らない子だ。
それに、あの目の覚め方……俺があの子を助けようとしたら、急に現実に引き戻された。夢なんてそんなものかもしれないが、少しタイミングが不自然だった。
うーん……考えても考えても、答えが出ない。
歩きながら考えていたら、ぐいっと手を引かれた。
「みゆき、げんきにしてるかな？」
「ああ、多分……というか、アイツが元気じゃなかった事なんて無いだろう」
「あはははは！　みゆきのやつ、いっつも走ってるしな～！」
けらけらと、面白そうに笑う。
どうせなら、ということで、フェイトがいることは高町家の面々には秘密にしている。
主に、美由紀へのサプライズだ。
妙にウマが合うらしい二人は、年の差を感じさせないほど仲が良い。フェイトの精神年齢は、そんなに高くないと思うから多分、美由紀の精神年齢が……
「秀人さん、姉さんにそれ言ったら駄目だからね」
……おおう。バレバレだったか。
「もう、すぐ悪ノリするんだから……」
「悪い悪い……」
わざとらしくぷいっとそっぽを向くなのはに、これまたわざとらしくヘコヘコ謝る俺。
そんな心地よいじゃれ合いを続けながら、桃子達が待つ高町家へ向かった。

インターホンを押し、玄関を開ける。
「あ、来た来た！　いらっしゃーい！」

ばたばたばた……と、美由紀がフローリングをスリッパで疾走してきた。
「ぶフッ……！！」
まさに、フェイトが言っていた通りだ。
「さぁさぁ、上がって上がって！」
「あー、ちょっと待った。……おーい、」
ドアの影に隠れていたフェイトを、ちょいちょい、と手招き。
「？」
首を傾げる美由紀。
「みゆきー！　ひさしぶりー！」
びしっとポーズで決めたフェイトに、美由紀は……
「……」
完全に、フリーズしていた。
「……え、あれ？　どしたの、みゆき？　ジェノサイダーがフリーズベントくらったみたいな顔になってるよ？」
一般人に分かりづらい例えをするな。
っていうか、どんな顔だ。
「みゆき？　おーい……」
「……フェ、」
ふぇ？
「フェイトだあああああああああああああああああああああああっ！！」
どごーん！　と、全体重を乗せたタックルで飛び掛っていった。
「ぎゃー！」
咄嗟にバック転で、タックルを回避。
ずざざざ……！　と、庭の芝をスライディングする。
「……うわぁ」
痛そう……
「……フェイトッ！！」
すぐさま復活。ずれた眼鏡を直し、

「フェイトーーーーーーーーーーーー！」
再び、タックルを敢行。
「うわあああああああ！！」
どしーん、と、今度こそ命中した。
「フェイトフェイトフェイトー！　戻ってきてたなら何で連絡よこさないんだよこいつめー！」
力いっぱいハグし、くるくると回転する。
「ごめーん！　あやまるから、あやまるからー！！」
「ゆるさーん！！」
楽しそうだ。
「美由紀―？　どうしたのー……って、あらあら」
奥から様子を見に来た桃子が、その様子を見て苦笑した。
「母さん、こんにちは」
「お帰りなさい、なのは」
毎晩メールか電話で話をしているから、よそよそしさは皆無だ。
かくいう俺も、ちょくちょく近況を報告していたりする。
「悪いな、桃子。あと二人分、追加よろしく」
「はいはい、任せてくださいな」
さーて。
「おい、美由紀、フェイト。先に食べちまうぞ」
「「はーい！」」
体中に草の切れ端をくっつけた二人が、元気よく返事をした。

「よう、元気そうだな恭也」
「秀人も変わり無いようで何よりだ」
「少し日に焼けたか？」
少し、褐色が混じっている。
「ああ、鍛錬を再開し始めたんだ」
……ほほう。
「俺とフェイトに負けたのが、そんなにショックだったか。そうか

そうか」
「……まぁ、そういうことが理由にならなくも無い」
素直じゃないなぁ……ま、それでも負ける気はしないけど。
「今度、また組み手しようぜ」
「ああ、望むところだ」
襲撃が無い間は、恭也を相手に実戦訓練をしてもいいかもしれない。
「ちょっと、秀人、恭也……料理を運ぶの、手伝って欲しいんだけど……」
両手で器用に大皿三枚を持ったユーノが、恨みがましく言ってきた。
「おお、悪い悪い……」「手伝おう」
こういうことは、男衆の仕事と相場が決まっている。

そして、三人で料理を並べ終え……ついでに、急遽必要になった追加分の料理を手伝ったりしながら、時間が過ぎて……
「準備できたよー！」
「「「「はーい！」」」」
食事の時間になった。

メインは、野菜の天麩羅。細麺のパスタや冷製トマトスープなどと、夏らしいさっぱりした料理が食卓を埋めていた。
「「「「「「「「「「いただきまーす！」」」」」」」」」」
めいめいに箸を伸ばし、天麩羅を、白身魚のフライを、パスタを小皿に取り分け、口にする。
「おお……この天麩羅、衣に味がある」
「あ、ほんとだ。……母さん、どうやったの？」
「食べ終わったら、レシピを教えてあげるわ。今度からは、なのはも作れるわよ」

「恭ちゃん恭ちゃん、ケチャップ取って」
「自分で取れ。……というか、何に付ける気だ」
「え？　パスタ」
「却下だ味音痴め。というか、お前も妹を見習え。嫁の貰い手が無くなるぞ」
「う、うっさいわぼけー！　自分こそ、忍ちゃんとギクシャクしてるくせに！！」
「ぐっ……大きなお世話だ！」

「ユーノ、この箸っていうの、使いづらいよ……口で直接食べていい？」
「駄目。使い方、教えてあげるから。ほら、人差し指と中指を……」
「うあー……指が攣りそうだ……そうだ、ユーノが食べさせてくれよ」
「え！？」
「その魚がいいな。あーん」
「いや、その……」
「（あーん）」
「フォークじゃ、駄目かな……？」
「（あーん）」
「……はい、あーん」
「あぐあぐ……うん、うまいじゃないか」

全員、概ね好評のようだった。
「ううう……やさいがいっぱい……」
約一名を除いて。
「あら、フェイトは野菜が苦手なの？」
「うん……だって、苦いし、エグいし……」
桃子はにっこりと、優しいようでいて……実は厳しい笑みを浮か

べた。
箸でかぼちゃの天麩羅を持ち、フェイトの口元に持って行く。
「はい、あーん……一口で良いから、食べてみて」
「かぼちゃって、なんかデロっとしてる……」
「一口食べて、駄目だったら無理しないでいいから」
「……はーい」
……やんわりと諭され、しぶしぶ口にした。
口に入れるときは、ぎゅっと目を瞑り……
「もぐもぐ……あれ？　デロっとしてない」
不思議そうに、一つ食べきった。
「煮物にすると粘りが出ちゃうから、それが苦手だったのね。どう？」
「きらいじゃない……というか、おいしいかも」
「じゃあ、次はナスをいってみましょうか？」
「うえ……汁がえぐいんだよ……」
「かぼちゃは食べられたでしょう？　なら、きっとナスも食べられるわよ」
「……わかった、食べてみる」
さすが、このへんは三児の母の面目躍如。
俺だったら、無理矢理にでも食べさせていたかもしれないところを、自分から食べるようにうまく誘導した。
「フェイトが野菜食べてる……」
アルフが、信じられない、といった様子でそれを見ていた。
フェイトが、野菜をぱくぱくと食べる。
「食べられたじゃない。偉いわフェイト」
頭を撫でられたフェイトは、一瞬何かを考え、桃子の服の裾を引いた。
「……ねー、ももこ」
「なぁに？」
「料理って、ボクにもできるかな？」

……そうきたか。

「……」

なのはも、じっと耳を澄ましている。

「それはもちろん、練習すれば出来るけど……どうしたの？　なのは達に、作ってあげるの？」

「うん、それもあるけど」

次にフェイトが口にした言葉は、沈黙をもたらした。

「おかーさんに、作ってあげたい」

……プレシア。

彼女は、今もまだ獄中にいる。直接に言葉を交わすことが出来るのは、管理局の中でもかなり上の地位にいる者に限られていて……料理を覚えたとしても、作ってやれるかどうかは……

「……フェイト」

多少の事情を知っている桃子は、フェイトを抱き寄せた。

「わ……なに？」

「今度……なのはも一緒に、翠屋へいらっしゃい。時間を見て、教えてあげる」

「え？　母さん、私は別に……」

料理の腕に不自由が無いなのはは、遠慮しようとしていた。

「なのは、行って来いよ」

週に一回の家族の時間。それを増やすチャンスを、わざわざ見逃す手は無い。

「……まぁ、秀人さんがそう言うなら」

しぶしぶ言っているような振りをして、微妙に口角が上がっている。

どんなに大人びていたとしても、なのははまだ9才の女の子だ。

母親との時間が嬉しいのは、当然のことだろう。

「……早く、プレシアさんに会えるといいわね」
「……うん」
それからしばらく、桃子はフェイトを胸に抱いていた。
「……ああもう、湿っぽいのは無し！　な―し！」
ぶんぶん、と、大きく腕を振り、『湿っぽい空気』とやらをリセットする美由紀。
桃子の腕から離れたフェイト。その目は、微妙に赤くなっていた。
「へへへ……ごめんごめん！　なんでもなーい！」
明るく振舞い、残った料理を平らげていった。

「それじゃ、食事も終わったし……そろそろ行くか」
食べ終わった料理の皿を、流し台で手分けして洗った。
次は……病院へ、なのはの父親の見舞いだ。
「そういや、病院までどうやって行くんだ？」
「車で行きましょう。８人乗りだから、ギリギリ乗れるわ」
「おっけ。なのは、荷物持ったか？」
「うん……」
気の無い返事。どうやら、緊張して堅くなっているらしい。

車庫から出てきたワゴン車に乗り込む。
俺となのは、フェイトの三人は、真ん中のシートに並んで腰掛けた。
「でっけー車だな……」
「それはもう、うちの業務車両も兼ねてるから」
ハイエース・スーパーロングを、慣れた手つきで操りながら、桃子が答えた。
俺も、１８になったら取らないとな～……運転免許。あと、だいたい五ヶ月。
「……」

五ヵ月後に、免許だとか何とか、言っていられる状況であれば万々歳なんだけど。

いつも、魔法の練習に使っていた高台とは、町を挟んで反対側。開発の手も殆ど入っていない、自然豊かと言えば聞こえは良いが、要は雑草が生えっぱなしの空き地が延々と続く、寂れた地域。

その真ん中に、ヘリポートまでを備えた巨大な病院がデーンと居を構えているのは、滑稽でもある。

「はい、到着」

ぞろぞろと、八人で車から降り、病院のロビーへ向かった。

「はい……あら、高町さん」

受付にいた看護師とは、顔見知りらしい。

「夫の見舞いに参りました」

「はい、それでは……」

渡されたのは、病室の鍵。５０１と、刻印されている。

エレベーターで5階まで移動し、５０１を目指す。間取り図を見た感じ、どうやらこのフロアは四部屋で贅沢にスペースを使っているようだ。

途中、通りがかった５０２のドアの前に、今時の若者っぽい格好をしたねーちゃんが直立不動で立っていたので、全員で会釈をしながら歩いた。

ベッドでは、人工呼吸器や、何に使うのかも分からないような管を通した男性が眠るように瞼を閉じていた。

「うわー……きょうやにそっくりだな、このひと」

「そりゃ、父親だからな」

「？　ちちおやだと、似るの？　ボク、おかーさんとあんまり見た目似てないけど」

「多分、フェイトは父親に似てるんじゃないか？」

「ふーん……」
あまり普通じゃない産まれ方をしたフェイトには、理解し辛い内容だったらしい。

「じゃあ、ボクとひでとのあいだに子供ができたら、どっちに似るの？」

「ブッ……！　ゲホッ、ゲホッ……！」
いきなり、何を言い出すんだこいつは……！
「フェイト、変なこと言わないで！」
なのはが、顔を羞恥で赤くして怒鳴った。
「え、ええ！？　ボク、なにかへんなこと言った？」
やっぱり、わかっていなかったらしい。
「言った！　そんな、秀人さんとの……子供だなんて……！」
ちらっ。
目が合った。
「……！！　と、とにかく！」
あ、逸らした。
「そういう話、禁止！　禁止――――！！！！」
「なのは、ちょっと声大きいって……！」
このフロアには、少なくともう一組、見舞い客が……
――ぱたぱたぱた……！！
ほーら、やっぱり……
スリッパを鳴らして、５０１に足音が近づいてきていた。
しゃーない、とにかく、謝らないと。

――ばんっ！

「ちょっと！　静かにしてよ！！」
扉が開いて、さっきのねーちゃんが……あ？
「私の妹分が入院してるって言うのに……非常識……だと……
……」
さーー……っと、見る見るうちに血の気が引いて行く。
その子は、散切りの髪をした……なのはと同い年くらいの、
小さな女の子だった。

第五十七話（後書き）

今日もポッケでウイリー訓練、、、結構楽しいです。

次回か次々回で、大幅に物語を進行させます。

第五十八話（前書き）

コミケが近いですね。
劇場版第二作までには、Ａｓ編は完結させたいです。

第五十八話

ドアを開け放った先……待ち受けていた面子に、その驚愕に、動きを固められてしまった。

「すまん……少し、はしゃぎすぎた」

目の前で頭を下げるのは、憎たらしい仇の代表格……不死身の怪力野郎。

私の顔をブッたたいてくれたアホっぽい金髪赤眼や、ジェノザウラーみたいにビームをぶっ放す砲撃バカ。嫌らしい魔法でちくちく手間を取らせたガキに、犬女。砲撃バカの血縁者らしい奴らも、顔を揃えていた。

「……」

私の素顔は、幸いにもこいつらにはバレていない。

速攻でリンカーコアを起動させ、ブラッディダガーでもゼロ距離でブチ込んでやれば……今の弱体化した私でも、一人くらいは仕留められる。

――殺るか？　ここで……

狙うなら、リンカーコアを抜き、弱体化した砲撃バカだ。

『おやめください、主』

……リーゼか。ずっと念話を通じて、こちらの様子を伺っていたらしい。

『一人仕留めたとしても、残りの人数に押しつぶされてしまいます』

……そう、だね。

何も、いまこの場でドンパチしてたら、美香に危険が及んでしまう。

だから、今は。

『リーゼ。一人残らず、顔を記録しろ』

『了解』
一人でも多く、敵の姿を記録して……独りになったところを、個別に狩ってやる。
「……？」
怪力野郎が、怪訝な顔をする。
ここで怪しまれたらアウトだ。アクシデントとはいえ、私の顔も、相手方にばれてしまっている。なるべく自然を装って……
『主。全員の顔を記録しました』
よし。
「……それだけ。もう騒ぐんじゃないよ」
撤退だ。

去り際にもう一度振り返り……
「……」
怪力野郎の顔を、目に焼き付けた。
――ぱたん
扉を閉める。
「高町……ね」
多くは無いけど、珍しくも無い苗字だった。
「主」
ネームプレートを見上げていたら、廊下の向こうからリーゼが歩いてきた。
「いったん戻るよ」
「はい」
行動は、夜からだ。

病室に戻ったんだけど……
「……」「……」
美香が窓の外に目を遣って、頑なに口を閉ざしている。
美穂さんはどう声を掛けるべきか、おろおろと狼狽していた。

……はぁ、言ったそばからこれか。
「美香」
「私、悪くないもん」
「美香」
「……」
むすっと、より頑なに口を閉ざす。
「そう、話してくれないんだ。じゃ、バイバイ」
さくっと踵を返し、出口へすたすたと歩を進める。
「えっ……」
後ろで、美香が振り返る気配がしたけど……聞き分けの無い子供のことなんて、知ったことじゃない。
「……」
引き止めるような視線を無視して、いよいよドアに手を掛けた時
……
「ごめんなさい！　謝るから帰らないでー！！」
「……」
ベッドに歩いていき、
――ゴンッ！
「いぃったぁ……！！」
お仕置きの拳骨を、美香の頭にお見舞いした。
「ごめんなさい……」
涙目になる美香。
「謝る相手が違うだろ」
「うぅ……」
そして、バツが悪そうな顔で、美穂さんの方を向いた。
「……お姉ちゃん、ごめんなさい」
「……いいのよ。私も少し、言葉がきつかったわ」
……はぁ、全く、手がかかる。
「ほら、これでも食べな」
ぽいっと、ポケットの中からチョコ菓子を取り出して、美香に放

る。
「ありがとー！」
「ちゃんと歯磨きするのよ？」
「はぁーい」
その後、リーゼを紹介したり、雑談に興じたり、差し入れ代わりの漫画をまわし読みしている間に、夕方になってしまった。
そろそろお暇することにしよう。
もう少しいてもよかったんだけど……
「すぅ……」
美香、寝ちゃったし。

美穂さんが玄関まで見送りに来てくれた。
「今日は、いろいろとありがとうね。八神さん」
「別に……大したことはしてませんよ」
単に、遊びに来ただけだし。
「それにしても、美香があんなに素直に話を聞くなんて……少し、妬けてしまうわ」
ふぅ……と、疲れたため息をつく。
でも、それは……
「逆じゃないかな？」
「え？」
「私は、美香のオトモダチ……突き詰めれば、ただの他人。
他人には良いところだけを見せようとするし、無理してでも笑顔を作る。
……誰だって、友達には嫌われたく無いからね」
友達がいたことの無い私に断言は出来ないけど、推測はできる。
「でも、美穂さんは『お姉ちゃん』でしょ？　好きだから……本当に嫌われることは無いってわかってるから、つい我侭を言っちゃうんだよ」
好きな人には、つい我侭を言って、甘えたくなってしまう。

私も両親に対してしたことがあるから、よくわかる。
「だから、本当の意味で信頼されて、慕われているのは美穂さん。これは間違いないから安心してよ」
「……八神さん」
「『はやて』でいいよ」
「はやてちゃん、本当に、ありがとうね……」
「……」
そして、美穂さんは病院の中へ戻っていった。
「……」
美穂さんの、去り際の笑顔が頭から離れない。
他意の無い、純粋な感謝を表す笑顔。

……世界を滅ぼす。
それが、私の最終的な目的。それに対して、躊躇いは無い。
美香は私の身内だから、生かす。
でも……美穂さんは？　美香のお兄さんは？
なんだろう。胸が、モヤモヤする。
「……ねぇ、リーゼ」
「はい、主。何でしょうか」
「……」
「主？」
でも、そのモヤモヤを言葉にすることができなくて、黙り込む。
「……なんでもない」
……私は、どうしたいんだろう。

深夜。
「……」
私とリーゼは、また病院の中にいた。
病院とは言っても、病室ではなく、総合受付のカウンターの中だ。
理由は簡単。あの、高町とかいう男の住所を調べるため。

ぶぅん……と、パソコンが立ち上がる。
魔法は必要最小限……監視カメラと警報システムに、リーゼが細工を施すのみ。
物理的に何かが無くなるわけでも、データが破損するわけでもない。ただ見て、もとに戻すだけ。これなら、誰にも気付かれない。
「んーっと……」
パソコンには疎い私だけど、フォルダからデータを閲覧する程度のことは可能だ。

こういう個人情報には、普通、パスワードが設定されているのが普通なんだけど……担当の職員がボンクラだったのか、面倒くさがっていたのか、自動でログインできた。
馬鹿は、身内以外に多ければ多いほど良い。

『入院患者』という、そのままなフォルダ名のフォルダを開く。
「あった」
あっさりと見つかった。
「それほど、離れていないな……」
住所をメモに取り、パソコンの電源を落とす。
魔法は便利だけど……こうした、アナログなやりかたを忘れさせられてしまうのが、欠点といえば欠点だ。
個人情報はゲットしたことだし……帰るか。

さーて、帰ってから戦闘訓練だ。

……

「ほい、ほいっと……！」
スウェーで鉄球を回避し、すれ違い様に刃を入れる。
――カキンッ……！！

力でねじ込むのではなく、刃を、滑り込ませるように……斬る！！
「せいやッ！！」
――キンッ！！
うん……この魔剣の扱いにも、大分慣れてきた。
今現在、私の魔力は、リーゼの言うランクにするとA。闇の書によるブースト抜きの常態がＡＡＡだから、まずまずの回復だ。
最初のうちは避けるだけで精一杯だったこの訓練も、仕上げの段階に入っている。
「はい、ラスト！」
――キ、キィンッ！！
最後の鉄球が、上下左右に斬り裂かれた。
「見事です」
「ふん……ざっとこんなもんよ」
かしん……と、魔剣を鞘に収める。
「では、訓練を次のステップへ移しましょう」
「次って……？」
「……主、御手を」
「？　……はい」
言われるままに、手を差し出す。それをリーゼが握り……
――ヴゥンッ……！！
展開する魔法陣。記述された術式は……転移！？
「え、え！？　ちょっと、リーゼ！？」
「お達者で」
文句を言うよりも早く、光が私を包み込み……
――バシュンッ！！

「う、わあああああああああああああ！！？」
……ここではないどこかへ、転送された。

光の渦を抜けて、一瞬の停滞。そして。砂利の地面が、目の前に迫ってきていた。
「うおっとォ！？」
――ザンッ！！
……なんとか、足から着地に成功した。
「……なんだ、ここ」
見渡す限り、草原と荒野を半々にしたような、静かな風景が続いている。上空に浮かんだ二つの月が、その静けさに拍車を掛けていた。
時折吹く風が、草をさらさらと鳴らし……
――ガサッ
いや、違う。風じゃない！
「……」
魔剣を鞘から抜き放ち、正眼に構える。

――ガサガサガサッ……！！

二、三、四……まだ増える。
集中しろ。狙うのは……出足だ！

「グアアアアアッ！！」

「はぁッ！！」
身体を回転させ、背後に一閃！！
――ザンッ！！
「ギャフッ……！」

どうっ……と、目の前に墜落する。その姿は……
「犬……いや、狼？」
とにかく、イヌ科の肉食獣に酷似した姿だった。
「グルル……」「フウウウウ……」「グルゥ……」「ガルルルル……！」
草の影から、虎視眈々と、私を狙う。
そうか……訓練の次のステップは……！
「「ガアアアアアアアアアッ！！！」」
敵との、実戦！
「ぜあああッ！！」
――ザンッ、ザシュッ……！！
生きた肉を切り裂く、久々の感触。
だけど、殆ど自前の筋力だけでその行為を行うのは初めてだ。
鉄球と違って、繊維が複雑に絡み合った肉はゴムのように柔軟で、刃を通しづらいことこの上ない。
「ガウッ！！」
飛び掛ってきた二頭。うち一匹は、首を切断したが、もう一体はしとめ損ねた。
右前足を失いながらも、私の二の腕に喰らいついてきた！
――グチュッ……！
強化した握力で、その頭を握り潰す。
「ガアアアアッ！！」
「っ……！」
ったく、リーゼの奴……！
「アアアアッ……ガヘッ……！」

――ボキッ……！
頚椎をヘシ折り、絶命させる。
まぁ……いっか。これはこれで、いい訓練だ！
――ズシン……！
と、岩場の影から、ひときわ大きな……体高3メートルに届こうかという程の、巨大な狼のような四足獣が姿を表した。
「グォルルルル……！！」
いよいよ、親玉のお出ましか！
「グガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッ！！！」
「あはははっ……！！」
ああ、楽しい。ゾクゾクする！
「オオオオオオオオオオオオッ！！」
巨大な体躯からは想像もできないほどの俊敏さで、跳ぶ！
「うォあああああああああああああああッ！！！！！」
魔剣に漆黒の魔力を纏わせ、突貫！！
――ッガギイイイインッ！！
魔剣と、巨大な乱杭歯が激突し、苛烈な戦闘音を響かせる！！
ぎり、ぎり、と。
巨体の質量が、徐々に私の魔剣を押し返して行く。
「ガウ……ガルルルルル……ッ！！」
魔剣が軋みをあげる。ああ、良い。素晴らしい。
コイツ相手になら、解禁してもいいだろう！
「くひっ……！　ひゃはははは……！！」

さぁ……お披露目と行こうか！！

「ロードカートリッジ！！」

魔剣の峰に据え付けられたスリットが開き、

――――ガキュンッ……！！

内蔵されていた機能を、解放した。

内部のカートリッジに充填されていた私の魔力が、魔剣の威力を倍増する！！

――ゴオオオッ……！！

魔力は黒炎となり、魔剣に絡みつき……！

――バギィィンッ！！

「ウゴアアアアアアアッ！！」

野獣の乱杭歯を、下顎と纏めて根こそぎ破壊した！

「オッ……ゴホッ……！！」

戦闘力を失った野獣が、背を向けて逃走を図る。

逃がすものか！

「死ねえエエエエエエエエエエッ！！」

斬撃波を発射し、敵の群れと、野獣の四足を切断する。

これで……とどめだ！

カートリッジに残った全魔力を乗せた、渾身の一撃！

「紫電……一閃ッ！！！」

――――……ガゴオオオオオオオオオオオオオオオオンッ

！！！！！

攻撃の余波で、草原が炎上する。
生き残った敵は、いない。
「ははははははっ！　どうだ、リーゼ！！」
リーゼからの返事は無い。
つまり、まだ終わっていない。
「……とりあえず、」
ぐるりと見渡す。
草原と、荒野の世界。さっきみたいな獣達が、弱肉強食の掟に従う世界。

「ここの頂点に、なってみるか」

本当、練習には丁度良い。

私は魔剣と、空になったカートリッジを手に、荒野を歩き始めた。

第五十八話（後書き）

次回、なのはに転機が訪れます。

第五十九話（前書き）

車検が近い、、、憂鬱です。

第五十九話

七月末日。
私は、屋上の給水タンクの日陰に腰掛け、ぼうっと空を眺めていた。
「あー……本日も、晴天なりー……終業式、いまだ終わらずー……」
ふわぁ……と、大きな欠伸が出た。

そう。今日は、一学期の終業式だった。
だった、というのは、私は絶賛サボタージュ中だからだ。ロクに換気もされていない体育館で、無駄に長い校長の話を聞いていられるほど、私は気が長くない。

屋上の鍵は、ちょこっと魔法を応用した念動力でシリンダーを回転させて開けた。
しっかりと施錠もしたから、バレる心配は殆ど無い。
「あーあ……」
やはり、レイジングハートがいないと寂しい。
……修理、いつ終わるのかなぁ。

少し顔を出して覗くと、体育館の渡り廊下から、ぞろぞろと生徒たちが溢れ出てきていた。
ようやく終わったらしい。さーて、教室に戻るか。

・・・・・・

「……高町さん」「はい」
教卓まで歩き、じっとりと恨みがましい目つきで私を見る富山先生から、成績表を受けとった。

「なーのはっ。成績どーだった？」
望が、ひらひらと成績表を片手にやってきた。
「望は？」
「あー……算数と理科が2で、3が殆ど。4は家庭科だけで、5は無し」
良いのか悪いのか、分かりづらい成績だった。
さて、私はどうかなーっと。
「あ、オール2だ」
なんだか、ちょっと得した気分。
「へぇ、オール2かー……って、えええぇぇっ！？」
望が素っ頓狂な奇声を発した。
「な……何、いきなり？」
びっくりしたなぁ、もう。
「オール2って……え、うっそ、マジで！？」
「うん。ほら」
机の上に置いた成績表を、二人で覗き込む。
「うわ……マジだ！　マジでオール2だ！」
学科の点数面はAなのに、意欲・関心・態度がF……まぁ、こんなものか。
「……な、なぁ」
あ、葉山君だ。
「あん？　何よ健太」
ぎろっ……と、葉山君を思いっきり邪魔物扱いする望。
「その……よかったら、夏休みの宿題、一緒にやらねー？」
「え？」
夏休みの宿題？
「……そんなのあったっけ？」
正直、覚えてない。
「なのは……あんたねぇ」

呆れた視線を向けられた。
貰ったプリントを確認すると、休み中の課題一覧が記載されていた。
「ちゃんとやってきてくださいね！」
檀上の先生が、主に私にむけて言った。
「提出率が悪いと、私が長谷川先生に怒られます！だからお願い！ちゃんとやってきて！」
「ははは……さっちゃん先生、相変わらずだよね」
「そうだね……」
「まぁ、心配はしてないけど。なのはなら半日あれば終わっちゃうでしょ？」
「多分ね」
読書感想文なら空で書けるし、他も同じく。
「そ、そうか……」
葉山君は少ししょんぼりして、席に戻った。
ちょっと、悪かったかな？
望に目で尋ねると、気楽な笑いが返ってきた。
「いーのいーの。ったくあのアホ、性懲りも無く……」

「はぁ……」
「ハヤマ、どんまい！」「よくやった！」「俺達に希望が無いってことが、よく分かった！」「ナイス人柱！」「ナイス玉砕！」
「う、うっせーよ！？ほっとけ！」
それを友達らしき男子たちが、口々に慰める。
――キーンコーンカーンコーン……
お、時間だ。
「はい、それじゃあ皆さん。有意義な夏休みを過ごしてくださいね。解散！」

さよーならー！

大合唱が、響き渡った。
「なのは、このあと暇？」
……うーん。暇と言えば暇なんだけど。
明日、フェイトについて、リンディさんの上官に会う以外、何も予定が無いし。
「うん、付き合うよ」
「やった！実は、前から気になってたお店があったんだ」
「へぇ……」
「前に行ったら閉まってて、店の前に置いてあった割引チケット貰ったんだよ」
ぴらっ、と、鞄からそのチラシ兼チケットを取り出した。
「この、碧屋って店！」

……マジかよ。

「いらっしゃいま……せ……？」
眼鏡に三つ編みの店員……姉さんが、私たちを出迎えた。
「ま、窓際の御席へ、ドウゾ……？」
なかなか混乱しているらしく、接客がぎこちない。
でも、私も、あまり人のことを言えたほどでもない。
「ドウモ……」
一昔前のロボットのように、ガチガチの動作で席に移動する。
「わー……やっぱり、雰囲気がいい店だね」
隣で呑気にはしゃぐ望が少し憎らしい。

……久しぶりに来たな、この店も。
記憶の彼方に消えかけた風景だけど、どこか懐かしい。

姉さんが厨房に引っ込み、わたわたと身振り手振りで何かを伝えていた。
「ご注文は？」
数分後、オーダーを取りに来たのは兄さんだった。
さすがに、姉さんよりは落ち着いている。
「……ミックスサンドと、デザートにシフォンケーキを」
「かしこまりました」
一礼し、去っていく。
肉親に恭しい態度を見せられ、照れ臭いやら、恥ずかしいやら……とにかく、調子が狂う。

「ごゆっくりどうぞ」
サンドイッチは、すぐに出てきた。
「ね、ね！今の店員さん、かっこよくない！？」
……世間一般の評価というのは、あまり当てにならないものだ。
「はぁ……健太も、せめてあれの半分、いや、三分の一でも落ち着きがあればなぁ……」
サンドイッチをつまみながら、望がぼやく。
「でもさ……落ち着きのある葉山君なんて、葉山君じゃないよ」
彼はもっと……こう、アホじゃないと。
「あははは……言えてるかも！」
爆笑する。

「お待たせしました」
と、話をしているところに、デザートのシフォンケーキが来た。
「あ、ども……ゴフッ！」
びっくりして、噎せてしまった。

「ちょ、大丈夫!?」
「ゲフッ……な、何で……!?」
テーブルの脇に立っていたのは、ウエイトレスではなく、パティシエが着ていそうな服を着た（事実パティシエが着ている）店員……というか。
母さんだった。
「……え？　……え!?」
望が、私と、母さんの顔を見比べる。
あまり自覚は無いけど、私達って似てるらしいから。
……はぁ、もう。
「母さん、何してるの……」
「あら、せっかく娘が友達を連れて来たのよ。挨拶くらい、いいじゃない……ねぇ？」
母さんが望と目を合わせた。
「は、初めまして。なのはの友達で、八代望って言います」
「初めまして。高町桃子です。なのはと仲良くしてあげてね」
「あ……ハイ！」
「この子、目つきと態度と言葉遣いは悪いけど、根は優しい子だから……」
「はい、それは知ってるから大丈夫です！」
「私達のせいなんだけど、人付き合いが苦手で、なかなか友達も出来ないみたいで……」
「もう！いいから仕事に戻ってよ！」
恥ずかしいなぁ、もう！
「はぁい。それじゃあ、楽しんでいってね」
そう言って、厨房に戻った。

「ったく、もう……！」
ケーキを一口、大きめに切り分けて口に運ぶ。
兄さんと姉さんは、明らかに父さんに似ている。
さっきの二人との血縁に気付かれなかったのも、そういうことだろう。
「やっぱり、美人な人だったねー。さすが、なのはのお母さんだ」
……え？

「『さすが』って、何が？」

「え……？　だから、なのははお母さん似だから、可愛いんだね……って」
変なこと言うなぁ、望は。
「私、別に可愛くなんか無いよ？」
可愛いっていうのは、フェイトとか、望の方がしっくり来る。
「……、、、」
がしっ……と、両肩を掴まれる。
「……？」
「嫌味かコラー！！」
がっくんがっくんと、前後に揺さぶられた。
「あああああ……？」
店内にいた他の客の目が、一斉に集まる。
「あんたが可愛く無いなら、私はブスか！？見るに堪えない醜女かー！？」
「あうあうあう……」
何で怒ってるのか、よく分からない……

「はぁはぁはぁ……」
店員に注意される頃には、望はすっかりバテていた。
追加注文したアイスティーを飲み、一息ついた望は、今度は言い

聞かせるように話し出した。

「少しは、自信持ちなさいよ。謙虚と、卑屈は違うんだからね」

「……」

自信……か。

「……考えとく」

多分、無理だけど。

店を出た所のすぐ近くに、大型の貨物車が路上駐車していた。

……秀人さんも、お仕事してるのかな。

「なのは、どーしたの？置いて行っちゃうぞ」

「うん、」

――ミチッ……

……今の音、何？。

きょろきょろと辺りを見渡すが、発生源は分からない。

気のせいならいいんだけど……何だろう。

――プチッ……！

やっぱり、気のせいじゃない！

――バツンッッ！！

次の瞬間、私の目に飛び込んできたのは……

「、の」

貨物車の荷紐が中途から千切れ、

――ガランガランガランッ！！！

全周が一抱えはありそうな鉄骨が、望に雪崩れ落ちようとしている光景だった。

「……望ッッ！！！」

刹那の……そして、極限の集中。
それは、一つの感覚を励起させる。
フェイトとの戦闘で、何度も感じたソレ。
……辺り一帯が、モノクロ写真のように色彩を失うのと同時。

――時間が、凍結する。

身体をすくませた望。
呆気に取られる通行人。
その全てが、止まって見える。

――……。

テラス席から、兄さんが飛び出して来る。
、まずい……徐々に、時間が動き出しつつある。
集中が途切れたのでは無く単純に……身体が、耐久の限界を迎え始めている。
「――あ、！」
あと、少し……！

「……アあああああッ！！」
届けえええぇぇぇッ！

――――ガシャアアァァァンッ……！

なりふり構わずに、望に飛びついて……地面に転がった。
「ぜー……ぜー……！」
望は……！？
「……あれ？」
きょとん……と、私の腕の中にいた。
「よかった……！」
ぎゅうっと、望を抱きしめる。
「なのは、頭、、！？」
どろっ……と、汗とは違う、錆臭く、生温い何かが、額を伝い、視界を朱く染め……
「あ……」

ブツンッ……と、意識が強制シャットダウンされた。

警察が通報を受けて駆け付け、事後処理にあたっている。
桃子達は営業時間を切り上げ、なのはが担ぎ込まれた病院に急行していた。
「……なのは」
望は、辛そうに俯いている。
事実、辛いに違いない。
「……大丈夫よ、望ちゃん」
その肩を抱く桃子は、気丈に振る舞っていた。

転がる時に額を割ったものの、傷跡は残らないそうだ。
意識を失ったのも、単にショックによるもの、と診断された。

……いの一番に駆け付けた秀人ら……特にフェイトは、それを聞いた瞬間に、崩れ落ちた。
護衛とは言え、フェイトは保護を受ける少女に過ぎない。
今日、なのはと共にいなかったのも、明日の下準備のためであった。
それでも泣いて、泣き疲れて、ソファで眠ってしまった。

恭也と美由紀は、心配する傍ら、なのはが見せた現象について、話し合っていた。
「……美由紀、見たか」
「うん。さっきのって……」
二人は、畏怖を込めて、その名を口にした。

――神速。

と。
美由紀はおろか、恭也ですら、使いこなすことが難しいそれを、なのはが使った。
わずか9歳の、女の子が。
しかも、肉体が限界を迎えただけで、『神速』が破綻したわけでは、無かったのだ。
練度で言えば、恭也をも凌ぎ、全盛期の父親にも匹敵するだろう。
「……『あれ』を、使えるかもしれないな」
恭也と美由紀は、そのまま黙り込んだ。

「……秀人は？」

ユーノの一声に、全員がハッとする。

いない。

つい先程までそこにいた秀人が、忽然と姿を消していた。

第五十九話（後書き）

Ｆｏｒｃｅのなのはさんが、どんどん機動兵器と化している件について

第六十話（前書き）

フリーター時代に払い忘れていた年金の督促状が、、、総額２５万円。

、、、どうせ、自分が６０になっても貰えないなら、払う意味は無いですよね。

無駄金になるのが目に見えてます。

上司は「払っておけ」と言っていますが、、、どうしようかなぁ。

第六十話

時間は、数時間前に遡る。

秀人は、会社の事務所にいた。

デスクに腰掛け、型遅れのノートパソコンで、在庫表をチェックし、発注書を作成していた。

「……ふあぁ」

と、応接間とは名ばかりの、仕切で区切られたブースから、大きな欠伸が聞こえてきた。

「……あーあ、まだ昼前か」

ふて寝していたらしい。むくりと起こした身体は、ニメートルにも迫る巨体だ。横幅もあるが、その殆どが筋肉。黒く日に焼けた肌が、いかにも肉体労働者らしい。

彼は、秀人が勤める建設会社の現場監督兼……アルバイトを含めても、両手の指で事足りる小規模な会社の、社長だ。

従業員達からは、親しみを込めて『カントク』と呼ばれている。

「クソ……あの野郎」

その彼が、明らかに不機嫌だった。

それもそのはず。

今日は本来なら、新たに建てられる施設の基礎工事を行っているはずだった。

その割と大きめの案件を、他社に奪われてしまったのだ。

どうということは無い。

……それが、合法的に行われたのなら、の話だが。

今回、その案件を掻っ攫っていった建設会社は、業界では名を馳せる悪徳業者……というか、ヤク

ザだった。
コストダウンを唄った粗悪な材料。手抜き工事。作業は下請に丸投げ。安全管理も何も無い。

そんな連中が奪った仕事とは……病院の、新しい病棟を建てる仕事。

「タチの悪いジョークだぜ……」
ふて腐れ、煙草に火を点ける。

秀人が、見るに見兼ねて発言する。
「カントク、俺、半日で上がりましょうか？
ノート貸してくれれば、明日までに上げておきますけど」
仕事が無いなら、いるだけ人件費の無駄だ。
「いや、ヒデはいろ。……おい、ヨシ！」
代わりにカントクが呼んだのは、中卒でアルバイトの美彦だった。
「うぃーッス。何スか、カントク？」
金髪から色が抜けて黄色髪になった、軽そうな若者だ。
「帰れ」
しっしっ……と、邪険に手を払う。
「いきなり何スか！？」
納得出来るわけも無く、食い下がる。
「仕事が無ぇのにいてもしょうがねぇだろ」
「そりゃまぁ、そうッスけど……」
「んじゃおめぇ、パソコンできっか？」
「うっ……！ハイテクは、苦手ッス……」
「フォーク、動かせっか？」
「……無免ッス」
「顧客応対、できっか？」
「……さいなら」
消沈して作業着を着替える美彦に、カントクが声をかける。

「ま、詫びにメシ奢ってやるから許せ」
がばっ、と、一変して喜色満面になる美彦。
「マジっスか!?ひゃっほー!」
いいタイミングで、美彦の腹がグゥ……と鳴る。
「美彦、お前、朝飯食ってきたか?」
現場ならともかく、待機で、そんなに腹が減る筈が無い。
秀人の問いに、美彦はからからと笑った。
「節約ッスよ、節約」
朝食代の数百円すら惜しんで、どうしたいと言うのだろうか。
「深夜にコンビニの廃棄弁当、食い溜めてるから大丈夫ッス!」
「いや大丈夫じゃねーし……」
まぁ、秀人は秀人で、そういう経験がある以上、あまり強くは言えない。

「おーい、メシ食ってくらぁ!」
カントクが残りの社員に声を掛け、秀人と美彦を伴って事務所を出て行った。

食べに行く、とは言っても、洒落たレストランなどは眼中に無い。
育ち盛り食べ盛りの男子が二名、仕事柄大食漢の男性が選ぶのは、専ら……
「カントクカントク、肉食いたいッス肉!!」
「焼肉……なら、バイキングだな。ヒデはどうだ?」
「あ、ハイ。問題無いです。つーか大歓迎です」
高カロリー高タンパクの、炭水化物だった。

……席に着き、いきなり大量の肉をゴッソリ持って行った三人に、店員がぎょっとした。
ガツガツと掻き込むように食べる美彦。
もりもりと詰め込むように食べるカントク。

ぱくぱくと流し込むように食べる秀人。
流石、肉体労働者だった。

腹がある程度ふくれ、雑談が始まった。
「でも、そのナントカ商会って、そんなに酷い奴らなんスか？」
と、美彦が軽い調子で聞く。
「鉄骨縛るのに、手間が掛かるからってハーネスの本数を減らすような奴らだ」
……ぴたり、と。秀人の箸が止まる。
「……事故は？」
「あぁ、現場ではバンバン起きてるだろうよ。コトを荒立てたくないから、救急車も呼ばねぇらしいけどな」
ふん、と、忌ま忌ましそうに烏龍茶を煽る。
「……そうですか」
ため息をつき、また肉に箸を伸ばす。
「ちょ、それだけッスかヒデさん！？」
ガタンッ、と、椅子を蹴立てて立ち上がる美彦。
その目は、若い正義感に燃えていた。
「悪徳業者に、一杯喰わせてやろうとか……！」
「……あのなぁ、美彦」
言い聞かせるように、カントクが言う。
「一杯……どうやって喰わせるんだ？」
「えっ……えーっと、それは」
途端、ごにょごにょと口ごもる美彦。
「仮に、手段があったとして、やってどうなる？
俺達が、業界から追われて刑務所入ってオシマイだ」
「ううぅ……納得できないッス」
秀人も、憤りを感じないかと聞かれれば、答えはノーだ。
だが、納得するしか無いのだ。

それが、たとえグレーゾーンだろうが、合法であれば、納得するしか無いのだ。

――Ｐｒｒｒｒ……

と、秀人のポケットから、携帯電話の着信音が響いた。
目で了解を取り、電話を取り出す。
相手は、
「……桃子？」
まだ、翠屋は営業時間真っ只中の筈。
怪訝な顔で、通話ボタンを押す。
「桃子、どうした？」
『な、なのは、なのはが……！！』
「おい、落ち着け。なのはが、どうしたって？」
動揺し、まともな会話が成り立たない。
がさごそ、と、電話口の向こうで音がする。
『秀人、俺だ』
「恭也か。……一体、何があったんだ？　なのはがどうとか……」
『落ち着いて、聞いてくれ』
ただならぬ雰囲気に、秀人の表情が張り詰めていく。

――――話を聞き終えた瞬間、走り出していた。

『今日、なのはが友達を連れて、翠屋に来たんだ』

カントクや美彦を振り返りもせず、店を飛び出し、職場まで。キーを取り出し、バイクに跨がる。

『その、帰り道で……近くのトラックから、荷物が雪崩落ちて』

キュボッ！　と、エンジンを点火し、フル加速で走り出した。
『なのはが、友達を庇って飛び出したんだ』
大通りを、路地を、最短距離で駆け抜ける。
『それで、なのはが頭に怪我を……』
ギャギギギッ！！と、タイヤ痕を残す程のフルブレーキを掛ける。
入口を、受付を、全力疾走し……
――バンッ！
「なのはッ！！」
病室に飛び込む。
ベッドの中では、なのはが寝息を立てていた。
……近付いて、息を呑む。
なのはの頭には、額を隠すように、包帯が巻かれていた。
「ひでと……」
フェイトが、ふらふらと秀人に寄っていく。
「ごめんなさい……ボク、なのはの『ごえい』なのに……！
なのはのそばを、はなれちゃった……」
秀人にしがみつき、しくしくと涙を流した。
「……相手は？」
それを宥めながら、恐らく一番冷静であろう恭也に聞く。
「カタギリ商会、という連中だ」
「……なに？」
唖然とする秀人に、恭也は押し殺した口調で続ける。
「治療費と、慰謝料の額だけを告げて、それっきりだ」
「……」

そこに、白衣を着た壮年の男性がやってきた。
「あ、お父さん……」
望の父親。そして、この診療所の医師でもある、八代信義だった。
「高町さん、お待たせしました」
カルテを置き、なのはの容態について説明を始めた。
「まず、命に別状はありません。失神しているのは、極度の疲労によるものです。じきに目を覚ますでしょう」
まずは、一安心だった。
「……ふぅ」
ぱたん、と、フェイトが倒れ込み、秀人が支えた。
「あの、先生……怪我の方は……？」
桃子が聞く。
「幸いにも、切断面が綺麗でした。適切に処置すれば、縫う必要も無いでしょう。傷痕も残りません」

「……」
秀人は無言で、医師の話に耳を傾ける。
「……」
いや、聞いてなどいなかった。
……もう、それ以外を考える余裕が無くなったのだろう。

無言のまま、病室を後にした。
敷地から出て、すたすたと歩き続ける。

「……は、」
かたかたと、噛み合わぬ歯が鳴る。
「はは……」
口角を吊り上げ、狂ったように笑い出した。

「くははははははっ……、あぁ、そうだよ」
哄笑から一変。
虚ろな無表情で、歩き出す。
「……美彦、お前は正しかったよ」
したり顔で納得していた数時間前の自分を、ぶちのめしてやりたかった。
「……」
そう。
災害というものは、誰にでも起こりうることだ。
「関係が無いなんて、有り得ない……」
ふらふらと、夢遊病患者のように……しかし、方角は一直線に。
すぅっ……と、俯いていた顔を上げる。
その顔は……

「落し前、付けてもらうぞ……！」

恐ろしいまでに、凄惨な笑みを浮かべていた。

――ドンッ！！

飛行魔法を、行使。
一直線に、敵の下へ――

あるビルの、最上階。
「……えぇ、そのように計らって下さい」
仕立ての良い高級スーツに、高価な腕時計。
装飾品の一つ一つから、この男性が、所謂『成功者』であることを物語っていた。
「そうです。積荷が落下してしまったのは、不運な事故。委託業者

の怠慢が招いたこと……」

……但し、ろくでもない類の。

こうして下請を生贄に、損失を免れる。

いつもの手口だった。

「被害者の方には、十分な保障をするように。では」

がちゃん、と電話を切る。

「ふぅ……まったく。たかが事故くらいで手を煩わせないで欲しいものですね」

テーブルでポーカーに興じていた、筋者らしき巨漢達が男に話し掛けた。

「カタギリさん、どうかしたッスかー？」

「いえいえ、ただの現場事故ですよ」

ただの……で済ませるあたり、罪悪感など微塵も感じていないのだろう。

「あーあ、カタギリさんが下請クンせっつくから……」

「イジメはよくないですよー？」

男……カタギリは、にこやかな笑みを貼付けたまま、それを鼻で笑う。

「いえいえ、私は単に、ぼやいただけですよ。『資材の積み込みが、遅いようですね』と……それを、下請さんが耳聡く聞き付けたに過ぎません」

「ははは、違いねぇや！」「そうそう、下請さんの自業自得！」「次はどこに『依頼』しますぅー？」

「ぎゃはははは！」

げらげらと、室内に下卑た笑いが満ちる。

「そうですねぇ……では、本来この案件を落札したはずだった所にでも……」

……ゲスな話に夢中なカタギリ達は、気付かない。

窓の外。

一つの影が、迫っていることに。

人通りの無い裏路地に面しているとはいえ、地上十階。
その影は、一切の減速無し……どころか、むしろ加速し……！！

――ガゴシャアァッ！！

コンクリートの壁と、強化ガラスをたやすく破壊突破し、室内に突撃してきた。
「な……何ですか一体！？」
デスクの残骸の中から、カタギリが這い出す。
彼が、そして、室内の男達が見たものは……

「……覚悟は、出来ているだろうなあァ……！？」

――地獄の鬼をも喰らい尽くす、悪鬼羅刹の威容だった。

第六十話（後書き）

スーパーお仕置きタイム、はっじまーるよー♪

そしてフォーゼがダサすぎて泣けた、、、

第六十一話（前書き）

ツーリングに行こうと思っていたら、峠のど真ん中で立ち往生、、、
スプロケットが脱落していました。
わずか５０ｋｍで終わりを迎えた初ツーリングでした、、、

第六十一話

しぃん……と、沈黙する室内。
カタギリ達は、理解を越えた状況に、ただ立ち尽くすだけだった。
「……何者だ、テメェ」
取り巻き兼ボディガードの男達が、拳銃を秀人に向ける。
「脅しじゃねぇ。分かる……ぅごッ！？」
――ゴズッ！
「……」
正に、問答無用。頭蓋骨が陥没寸前にまで衝撃を受け、意識を失う。
「……」
向けられるのは、圧倒的な……暴力的な、敵意。

「うおぉ！」
――殺られる。
本能的に察した男達は、躊躇い無く発砲した。
――パンパンパンッ！
乾いた銃声が響く。
それが、ワンサイドゲーム開始の、ゴングだった。

――チュインッ！！
着弾地点に、既に秀人はいなかった。
――ドボォッ！
ソバットを叩き込まれ、内臓に損傷を受け、
――ガンッ！
脳天に肘打ちを喰らい昏倒する。
「うおおぉっ！」
――ヒュンッ！

大振りのナイフが、秀人の皮膚を僅かに削ぎ落とす。
「ははははは……最近、俺達のシマを荒らしてるヤツがいるって話、ありゃお前だったのか！」
「……？」
内心、首を傾げる秀人だったが……どうでもいい話だった。
「おらあああぁっ！」
真っ直ぐに突き出されるナイフ。
――ベキンッ！！
秀人の右フックが、ナイフ諸とも、顔面にめり込んだ。
「……」
ひとまず、この部屋にいたゴロツキはいなくなったが……肝心のカタギリは、階段から一目散に逃げ去ってしまっていた。
この辺の危険察知能力は、さすがドブネズミといったところだろうか。
「……3階か」
が、秀人がそれを見逃す筈が無かった。
追跡魔法を辿り、現在地を割り出す。
どうやら、地下の駐車場を目指しているらしい。
階段から下りる事も考えたが、ぞろぞろと気配が増えてきた。相手にはならないだろうが、足止めをくらってしまう。
「なら……」
――キュイイィ……！
拳に魔力を集中させる。秀人の十八番、インパクト。それを……
「ブチ……抜けろッ！」
床に目掛けて、振り下ろした！

――ゴバァンッ！！

ビルが激震し、天井が崩落する。

「うわあああぁっ！？」

「な、なんだあああぁ！？」

ガラガラと降り注ぐ瓦礫が、敵を混乱に陥れ、戦意を奪う。

一つ下のフロアに降り立つや否や、既にチャージ済みの左拳のインパクトを……再び床に、叩き付けた。

「もう一丁……うぉらあああぁぁぁっ！！」

――バゴンッ！！

二撃。

――バゴォンッ！！

三撃。

――バゴオオォンッ！！

まさに、災厄だった。

ビルが、見る見る内に廃墟へと代わっていく。

――バゴォンッ！

そして、最後の床を突破した。

今まさに発車しようとしていた下品なベンツの前に、秀人が降り立つ。

――ギュギギギッ！

恐慌に駆られたカタギリがアクセルをベタ踏みし、後輪をスピンさせながら急発進する。

「……」

ひょいっ、と避け……すれ違い様に、バンパーを鷲掴みにした。

持ち前の怪力でリアを持ち上げられ、後輪が空しく空回りをする。

運転席のカタギリは、数刻前の余裕などとうに無くし、血走った目で、アクセルを踏み続けていた。

「……ふん」

ゴロンッ！　と、ベンツを上下にひっくり返す。

「ヒィ……ヒイィ……！」

ずりずりと、高級スーツを土だらけにして、カタギリがベンツから這い出してきた。

――ズシンッ！！

「ヒッ……！」

その目の前に、秀人が立ち塞がった。

恐る恐る顔を上げ……初めて、秀人の顔を見た。まだ、あどけなさを残すほどの、年若い少年。それを、カタギリは好機と見たのか……

「な、なぁ……？　条件は、何だよ？」

懐柔に、掛かった。

「か、金か？　金なら、すぐに用意して……」

――ザッ。

一歩、前へ。

「何だったら、オヤジに口利きして、幹部に取り立ててやっても……！」

――ザッ。

懐柔を歯牙にも掛けず、カタギリへの間合いを詰めていく。

「い、依頼主の倍……いや、三倍の報酬も出すから！　た、頼む……

…！」

――ザッ。

「あ、あ……」

ここに来て、カタギリはようやく悟った。

「……」

……振り上げられる、右拳。

――この男の目的は、金や依頼では無く……

……拳が、空色の光を纏う。

「いや、だ……！

何でもする！

何でもくれてやるから！た、たすけて……！」

……懇願は、かけらも聞き入れられず。

「断る」

――最初から、自分の命が狙いだった。

……断頭台のような拳が、振り下ろされた。

「うわあああああああああぁぁぁぁぁぁ！！」

断末魔の絶叫を上げ、カタギリは、失禁しながら意識を失った。

――バゴンッ！

それは、カタギリの頭蓋が砕かれた音……ではなく。

頭の数センチ横の床に、秀人の拳がめり込んだ音だった。

「……お前の命なんて、背負う価値も無い」

そうして、踵を返した秀人の目の前に、

「……クロノ」
法衣型バリアジャケットに身を固めた、『執務官』が立っていた。
が、秀人にそれ程、驚いた様子は無い。
「時空管理局嘱託魔導師・吾妻秀人。民間人への、魔法を用いた暴行。建造物の破壊。守秘義務違犯の現行犯で……」
――ガキンッ。
無骨な手枷が、秀人に嵌められる。
「君を、逮捕する」
「……了解。クロノ執務官」
秀人は、特に抵抗せず、それを受け入れた。
「……さて、」
アースラ、艦長室。
そこに、秀人は手枷を嵌めたまま立っていた。
目の前にいるリンディとクロノは、厳しい表情だ。
「吾妻秀人。自分が行った行動について、釈明はありますか？」
「無いです」
即答だった。
「……」
言いたいことは言い終わった、と言わんばかりに、無言になる。
「……」
「……」

「……」
「……処罰は、追って通達します。
それまで、営倉入りを命じます」
「はい」
呼び出された武装隊に両脇を固められ、秀人は退室していった。

「あああぁ、もう……！」
机に突っ伏し、リンディが頭を抱える。
「……何で、こんな時に限って……！」
今、管理局は闇の書事件を追っている。
その重要な手がかりに、『犯罪組織の集団失踪』
……闇の書の主である、八神はやてによる『練習』である。
故に今回の出来事は、下手をしたら秀人の立場を危ういものにしてしまう危険があった。
ただでさえ、秀人を自身の陣営に引き込みたい輩が増えてきているのだ。

「被害者にもあまり同情は出来ないけど……はあぁ……」
被害者……つまり、カタギリ達が、なのはに怪我を負わせた元凶だということは調査済みだ。
「……気持ちは、分かります」
クロノにしては、随分と物分かりのいい台詞をはく。
「でも、なのはさん達に、なんて説明すればいいのかしら」
「……有りのまま、伝えるしか無いでしょうね」

リンディは、しばし黙考し……
「明日は、秀人君にも同席してもらいましょう」
明日フェイトは、リンディの上司二人と、軽い面接を行う。
一人は、秀人と同じく、地球出身の、とても穏やかな紳士だが……
もう一人は、陸士から少将にまで上り詰めた、生粋の叩き上げ。

「彼は一度、ビシッと怒られる必要があるわね」
必ずや、秀人に良い影響があるはずだと、リンディは信じた。
「少将、『あの話』にはかなり怒ってるみたいだし」
管理局において、秀人・なのは・ユーノの三人は、かなり話題になる人物である。
二十にも満たない若輩ながら、各能力（秀人の格闘・なのはの砲撃・ユーノの結界）はＡＡＡ以上と、
目を見張るものがある。

初の魔法戦闘で、暴走したロストロギアを鎮圧した。

模擬戦ではあるが、執務官を撃破した。

砲撃魔法で強装結界が壊れた。

武装隊二十人掛かりで維持する強装結界を、一人で、かつ長時間維持し続けた。

次元震を押さえ込んだ。

最近、無限書庫を開拓し始めた。

……これだけなら、まぁわかる。が、問題はその先だった。

独断先行は当たり前。

武装隊を舎弟にした。

執務官にタメ口を利いて許されている。

最凶のマッドサイエンティストと大魔導師に、愛機を製造させている。

施設内をバイクで爆走。　闇の書の主をタイマンで退けた。

……等など。

この噂を聞いた新兵の間に、『実力さえあれば、好き勝手が許される』という風潮が生まれてしまっていた。元凶と言うには、いささか理不尽だが。

「では、高町なのは含め、説明は私が」

「頼んだわ、クロノ執務官」

なのは達の元に向かうクロノ。その足取りは、当然のように重い。

医院の受付へ名を告げ、病室へ向かった。

「失礼する」

病室の中には、見知った面々がいた。

「あ……クロノ」

なのはは目を覚まし、身体を起こしていた。

気まずそうに、見舞いの者達に囲まれている。

その額には、痛々しくガーゼが当てられ、包帯が巻かれていた。

「傷の具合はどうだ？」

「もう……みんなそればっか。かすり傷だってば」

いくら朴念仁のクロノとはいえ……女の顔に傷が付くということの意味が分からない程、愚かではない。

「秀人のこと、なんだが……」

そこへ追い撃ちをかけたい訳では無かったが、説明を始めた。

「……ふぅ」
一通りの話を聞き終えたなのはが、ベッドに倒れ込んだ。
「ヤクザを襲撃って……はぁ、もう……」
怒る気も失せた様子だ。
「秀人がやらなかったら、俺がやっていたがな」
恭也が、しれっと言った。
「秀人さん、どうなっちゃうの？」
「今、艦長が手を尽くしているが……減刑するので手一杯だろうな」
「そんな……」
辛そうな表情をするなのは。ポーカーフェイスを維持しつつも、内心ではクロノも辛かった。
「週に……いや、四日に一度は、必ず面会できるように取り計らう。だから、その、なんだ……」
もごもごと口ごもり、ようやく口にできたのは、ありきたりな一言だった。
「元気を出せ」
「……」
「……」
クロノ・ハラオウンという人物を良く知るなのはとユーノは、ぽかん、とした様子でそれを聞いていた。
「……何だ。僕が励ましの言葉を掛けるのが、そんなに意外か」
不本意そうにそう聞く。
「うん」
「すっごく、意外」
「……まぁ、それはそれとして」
流した。
「フェイト」

「え、ボク？」
「明日の面接だが、秀人も参加することになった。そのつもりで」
「フェイトッ！」
がしっ、と、異様な素早さでフェイトを捕獲。
「うわ！　な、何……もがもが！？」
シーツを被り、周囲をシャットダウン。
（フェイト！　明日、秀人さんの様子をちゃんと見てきて！）
（い、いいけど……）
ずいっと目の前に迫るなのはに、フェイトは赤面する。
（それと、伝言！

『本当にかすり傷だから、心配しないで。あまり無茶ばかりすると、今度は私が怒るから覚悟しておいて』

……いい！？）
（な、ながいよ～！？）
（覚えて！　今！）
（うえぇん！）

「……何してんのよ、二人して」
もこもこと動くシーツに、望が呆れた声を出す。

そして、どたばたと足音が近付いてきて……
「なのは！」
「なのはちゃん！」
「高町！」
アリサ、すずか、健太の三人が、押しかけ……

「静かにしなさい！」

看護婦に怒られ、解散の流れとなった。

第六十一話（後書き）

さぁ、部品代を数えろ、、、（泣）

第六十二話（前書き）

夏季オートバイ教室へ行ってきました。
最後の一時間は、ビギナーの特権を行使し、二輪用コースを独占。
思う存分、バイクを走らせて満足です。

第六十二話

翌日。
「秀人」
営倉の硬いベッドで寝ていた秀人が、目を覚ました。
「艦長がお呼びだ」
「りょーかい」
その手には、相変わらず無骨な手枷が嵌められたままだ。
虜囚の身である証。
が、秀人は不自由な手で器用に顔を洗い、寝癖を整えた。
「……」
「……」
無言で廊下を歩く二人。　クルー達は、何とも言えなさそうな顔で、二人を一瞥していく。
「……気にするな、とは言わないぞ。むしろ気にしろ」
「わかってるよ」
秀人は、やれやれとでも言いたげに、首を振った。
転送ポートから、地球支部へ移動する。
秀人……正確には、その腕の手枷を見て、通りすがった局員達が目を剥く。

「まだ少し、時間があるな……」
時間に神経質なクロノが、それを余らせるようなことは有り得ない。
つまり、口実だ。
「レイジングハートの改修も、仕上げの段階に入っている。折角だし、会っていくか？」
「……」
秀人は、しばし悩む。

クロノは、当然オーケーすると思っていたが……
「……いい。やめとく」
バツが悪そうに、ぼそぼそと断った。
「？　何故だ？」
「多分……いや、絶対に怒るし……」
……今回の大暴走。
危なっかしい秀人を気にかける余り、小言が多くなる傾向があるレイジングハートのことだ。
烈火の如く、秀人を叱り付けるに決まっている。
しかも最近では、自立飛行まで身につけ、ダイレクトアタックまで可能としているのだから……
「……アレ、マジで痛いんだよ」
「なるほど」
うむ、と、尤もらしく頷き……
「では、会いに行こう」
「どうしてそうなる！？行かないっつってんだろ！？」
逃走を図る秀人。が。
――ビンッ！
「なんじゃこりゃー！？」
秀人の手枷は、クロノのＳ２Ｕから伸びたワイヤーと接続されていた。
「成る程、成る程……秀人を諫める適役は、レイジングハートだったのか。
艦長が言っても、僕が言っても、高町なのはが言っても、効果が無いわけだ……」
ニマー……と、Ｓっ気たっぷりな笑みを見せるクロノ。
「さぁ行くぞ。言っておくが、拒否権は無い！」
「い、嫌だ！」
――メキメキメキメキ！！
「行かないからな！絶対に、行かないからな！」

壁に指をめり込ませ、必死の抵抗を見せる秀人。
……腕力の無駄遣いである。
「くっ……！　この、筋肉ゴリラめ……！」
なにげに、クロノも酷かった。

「そうか……そんなに嫌か」
一瞬だけほっとする秀人だったが……
「では……向こうから、来てもらうとしよう」
「クロノくーん。連れて来たけどー……」
ひょこひょこと、エイミィがガラスのような素材で出来た容器を抱えて、やってきた。
「てめ……ッ！？」
ぞわあぁ～……と、秀人の直感が、危機を訴える。
ぱきぃん！！と、容器から『中身』が飛び出してきた。

『秀人オオォ！　そこに直れェェェッ！』

「ぎゃあああああぁッ！！　般若が来たあああああぁッ！！」
足をもつれさせながら、曲がり角の向こうへ逃走する。
『逃がすかあああぁッ！』
レイジングハートはフィンを展開し、ピンボールのようにそれを追う。そして……
「ぎゃあああああ、」

――ゴキーン！

……何やら、質量を無視した鈍い打撃音が響いた。
「あああぁぁ……」

フェードアウトしていく悲鳴。
そして、バタッ……と、倒れる音がした。
クロノがそちらへ向かうと、頭にでっかいタンコブを乗せた秀人が倒れていた。
しゅるしゅる、と、例の治癒により消えるタンコブ。
「さて、そろそろ時間だな」
クロノは秀人を肩に担ぎ、面会を行う部屋へ向かった。

クロノとエイミィは、フェイトを迎えに行き、今現在、この部屋にいるのは二人だけだった。
『秀人』
「……何だよ」
むすっとした表情で、頭上に視線を向ける。
会議室のソファにもたれ掛かる秀人の額に、レイジングハートが器用に鎮座していた。
『マスターの件……あなたが怒るのも、無理はありません。というか、あれで怒らなかったら、秀人ではありませんから』
「……じゃあ、何で怒った」
『……私が言わなければ、あなたは二度も三度も無茶を繰り返します』
「……」
当たっているだけに、言い返せない。
『無茶をする前に、その筋肉で出来ているような頭で、思い出してください。
あなたが無茶をすることで、マスターがどれだけ心細い思いをするのか……私だって、マスターの半分くらいは、心配しているのですよ?』
そして、片翼でべしべしと頭をはたいた。
「……わかったよ」
レイジングハートを、手の平に載せる。

「……傷はもういいのか？」
見たところ、目立った亀裂や欠損は見当たらなくなっている。
『およそ八割……といった具合です。あとは、全体的な耐久力を強化するだけです』
「そっか」
素っ気なく言ってはいるが、心底から安堵していた。
『それと、マリエル技官から朗報が』
「何だ？」
『あなたの専用機が、ロールアウト間近です』
「マジか！？」
『はい。あとは、ＡＩを組み込むだけと。
守護騎士から得られたデータが、非常に有用だったらしいです』
「あぁ、ヴィータのやつ、最近ずっと出ずっぱりだったよな……」
彼女は彼女なりに、秀人への恩を返している最中なのだろう。
レイジングハートが何故か難色を示した。
『ただ、ＡＩが……なんといいますか、中々のお転婆娘でして』
ＡＩの教育を任されていたレイジングハートが、珍しく弱音を吐いた。

『……育て方を、間違えたかもしれません』

育児に悩む、母親のようだった。
「……　何か心配になってきた」
朗報のはずだったのだが……
『あぁ、いえ……機体性能は、折り紙付きですよ？
正直、これまで存在した全てのデバイスの常識を覆し、凌駕する……現代のロストロギアです』
「……いいのかなぁ、俺がそんな良いもの貰っちゃって」
今更、そんなことを言い出す。

――パシュッ

と、ドアが開く。

「あ、ひでと！」

一番乗りしたフェイトが、飛び込んできた。

いつものラフな私服ではなく、レースの付いたブラウスに、黒いスカート、

同色のベストに赤いネクタイという、パリッとした正装だ。

「おー、似合う似合う！可愛いなぁ」

ひょいっと、脇に手を入れて抱き上げる。

「わーい！　……って、そうだ。でんごん、でんごん」

ギリギリで忘れずにいたフェイトが、うんうんと唸りながら、なのはからの『伝言』を伝える。

「『かすり傷だから、心配しないで。無茶したら、今度は私が怒るからね』……だってさ」

「……怒ってたか？」

「うん。もどってきたら、『おはなし』するって」

「……はぁ。そうか、ありがとうな」

お話＝お説教。

憂鬱になりながらも、覚悟を決めるのだった。

「お待たせ。準備はいいかしら？」

「あぁ、はい。大丈夫です」

「おっけーだよ」

リンディ。

「その様子だと、反省したようだな」

「ふん……反省はしたけど、後悔はしてないぞ」

クロノ。

「あはは……えぇと、秀人、くん……？」

「後で覚えておけ」
「ひいぃ……！？わざとじゃないのに……！」
エイミィと続き、それぞれ席についた。
そして、待つこと数分。
――パシュッ……
ドアを開け、二人の人物が入室してきた。
リンディの将官服と似た……恐らくは、それ以上の身分の者が着る制服を着た、総白髪の男性。
「やぁ、リンディ君。しばらくぶりだね」
「グレアム総司令も、ご壮健なようで何よりですわ」
ギル・グレアム艦隊総司令。
アースラ含む、次元航行艦隊を統べる……通称『空』の、実質トップ。
リンディの資質を見抜き、育て上げた師である。
そして、もう一人はと言うと……
「ふん……手早く済ませろ。私は暇では無い」
無愛想に鼻を鳴らし、グレアムの隣にどっかりと腰を下ろした。
こちらはまた、グレアムとは意匠が異なる将官服を着ている。
「わざわざご足労頂き、ありがとうございます。
……レジアス少将」
レジアス・ゲイズ少将。　またの肩書を、首都防衛司令補佐。
数多の次元世界を股に架ける巨大組織・時空管理局。
そのお膝元……通称『陸』の、次期トップとの呼び声も高い武闘派である。

面識の無い秀人や、常識の無いフェイトなどは、「このオッサン、誰？」という状態なのだが……

「……」

「……」

クロノとエイミィは、完全に凍りついていた。

仕方の無いことかもしれない。管理局の実質ツートップが、唐突に目の前に現れたのだ。

「さて、まずはこちら、フェイト・テスタロッサについてです。クロノ執務官」

「え……あ、ハッ！」

気を取り直し、慌ててエイミィから資料を受け取る。

「ご報告した通り、彼女はジュエルシード事件の重要参考人です」

フェイトは、ほけー……っと、虚空を見ている。

「責任能力の有無。

意思の所在について、共犯というよりは、むしろ被害者であることは明白であり……」

その後も続く報告に、二人は黙って耳を傾けていた。

なのはの護衛、という話になったところで、レジアスの眉が僅かにひそめられた。

だが、まだ口は出さず、最後まで報告を耳に入れた。

「……フェイト・テスタロッサについては、以上です」

「ふむ……フェイト君、と言うのかね」

まず口を開いたねは、グレアムだった。

「うん。おじさんは？」

「おじ……ははは、物怖じしない子だね」

「こ、こら……！」

顔面蒼白になるクロノ。　が、グレアムは気にした様子も無く、

穏やかに笑う。
「構わないよ、クロノ執務官」
そして、フェイトと目線を合わせた。
「きみは、友達や家族は大事かい？」
「うん、宝物だよ！」
「なら、その気持ちを裏切らないように……嘘にしないようにしたまえ。それを約束してくれるなら、
私は、きみの地球での生活について、口を挟んだりはしないよ」
上々。そう思った一同だったが……

「ふん、護衛だと？　正規局員に任せておけばいいものを、でしゃばりおって……」

レジアスの否定的な言葉に、場が凍った。
「そもそも、九歳の子供に何が出来る。」
「それは……それ、は……」
事実として、護衛対象であるなのはが負傷してしまったことが負い目になり、黙り込んでしまった。
「まずは、クラナガンあたりの更正施設に入り、社会への復帰を目指すべきではないのか？」
「……」
正論であるがゆえに、リンディ達も口を挟めない。
「子供の遊びで務まるほど、管理局の責務は……」

「おい、オッサン」

――秀人を除いて。
「今、なんつった？

『子供の遊び』、だと？ろくにフェイトの気持ちも考えないで、決め付けるんじゃねぇよ」

バチッ……と、秀人とレジアスの間に、火花が散った。

「……貴様が、吾妻秀人か」

忌ま忌ましそうに、秀人を睨む。

「少しばかり腕が立つからと言って、図に乗っているようだな」

例の問題のことだろう。

「嘱託魔導師とはいえ、貴様は民間人だ。

下手に関わろうとせず、自身の生活を守っていればいいものを……」

「その『自身の生活』の中に、たまたま魔法って要素が入ってるんだよ。

だいたい、あんなヘナチョコ古本女に手を焼いているような管理局員に、身の安全を任せられるか」

「目先の対処しか頭に無いような愚か者には、大局を見ることなどできんようだな」

「目先にも対処できないノロマよかマシだ」

「貴様……！」

「レジアス、そのくらいにしないか」

ヒートアップしかけた二人を、グレアムが止めた。

……クロノなどは、顔面蒼白で意識が飛びかけていた。

冗談抜きに、十円ハゲが出来そうだった。

「まぁ、よかろう。

……フェイト・テスタロッサ」

「は、はい……」

フェイトは、すっかり怯えて緊張していた。

「ひとまずは、現地での生活を許可してやろう」

「え……いいの！？」

「投げ出したくなったら、そこの青二才を通して連絡するがいい。

すぐさまミッドチルダに引き戻してやる」

「あ、青二才……」
リンディが、少しショックを受けていた。

「……吾妻秀人」
「何だよ、レジアスのオッサン」
「たとえ力があろうとも……子供が戦場に出ることは、間違っている」
「……」
「それを、ゆめゆめ忘れるな」
「……ふん。知るか」
レジアスと秀人は、終始険悪なまま、接触を終えた。

リンディは二人の見送りに。
クロノ、エイミィは、心労からぐったりともたれ掛かっていた。
「ねーねー、ひでと」
くいくい、と、フェイトが秀人の袖を引く。
「あの、ふとっちょの方のおじさんさぁ」
「あぁ、レジアスのオッサン？　あの人なぁ……」

顔を見合わせた二人は、うん、と頷き……

「怖いけど、いい人だよね」
「口は悪いけど、間違った事は言ってないよな」

意外なことに、異口同音に、その人柄を肯定した。
「……はぁ」
そこに、リンディが戻ってきた。
「秀人くううぅん……！」

……怨霊と見紛うほど、恐ろしい声だった。

「今度という今度は……堪忍袋の尾が切れました！」

……ここまで怒るリンディを見たのは、初めてだった。

「嘱託魔導師・吾妻秀人！」

「……はい」

「あなたへの罰則を、言い渡します……！」

ごくりと唾を飲み込む秀人。

「無人世界での、単身生存演習！　場所は……」

……なにやら、『生存』などという生臭い言葉が出てきた。

「生存、演習……！？」

「く、クロノくん、大丈夫？真っ青だよ？」

「は、ははは……いや、いくら何でも、まさか……」

引き攣った笑いを漏らすクロノ。どうやら、トラウマがあるらしい。

「第４８管理世界！！」

クロノが、白目を剥いて失神した。

第六十二話（後書き）

ここから、新展開です。

第六十三話（前書き）

さて、コミケですね。かくいう私も、三日目に一般参加してきます。

第六十三話

「……」

秀人は、海鳴市の路上を、一人で歩いていた。

例の訓練という名の懲罰の下準備のために、一時的に釈放されたのだ。

下準備とは、他でも無い……

「有給休暇……申請、通るかなぁ……」

社会人の憂鬱である。

「はぁ……」

足取りは重く……しかし、すぐに会社に到着してしまった。

（……どう考えたって、無理だ）

常識的な社会に属している（つもりの）ごく常識的な（つもりの）一般人である（つもりの）秀人には、自分の仕事をほうり出し、一月近い休暇を取るような非常識さは持ち合わせていなかった。

「よっし、バックレようっと！！」

そうと決まれば、足取りは軽くなる。

トントントンッ、と階段を駆け上がり、ガチャッとドアを潜る。

「おはよーございまーす！」

元気に挨拶。今日も、気持ち良く始業できる……

「あら、遅かったわね秀人君」

（そう考えていた時期が、俺にもありました……）

「間違えました」

――がちゃん。

ドアを閉め……再び開ける。

「おう、ヒデ！待ってたぞ座れ座れ！」

……そう言うカントクの目の前。

出された茶をすする、妙齢の美女。

馴染みではあるが、場違いな……リンディ・ハラオウンだった。

「……何やってるんスかアンタはあああああぁぁぁぁぁぁぁ！！？」

……事務所に、秀人の切ない叫びがこだました。

「いっやー、まさか、ヒデの奴にこんな美人の知り合いがいたとは……」

「あら、お上手ですこと」

つい先日、自分がふて寝していた応接間で、リンディをもてなすカントク。

「……」

その、鼻の下を伸ばしっ放しにするカントクの隣に、ムスッとしたしかめっ面で腰掛ける秀人。

「それでは……」

「えぇ、えぇ。コイツでよければ、いくらでも使ってやって下さい」

ぼん、と秀人の頭に手を置く。

それをやんわりと払いのけ、

「カントク、本気ですか？

……俺一人で、僻地に出張なんて」

そう。リンディが取った手段とは……秀人が社会人であるということを、正攻法で最大限に利用することだった。

「あァん？　ウチが今厳しいって、話したろうが」

例の仕事が流れてしまい、財政的にはスレスレなのだ。

たった一人の従業員をレンタルするだけで、流れた仕事の倍額が出るのだ。経営者としても、断る理由が無い。

「お前の知り合いなら信用できるし、特別手当も出て万々歳だろ」

「え……えぇと、俺、家族が……」

「たったの二ヶ月よ」

「なのはが……」

「面会の時間は取るわ」

だらだらと、暑さとは別の理由で、汗が吹き出して来る。

知らぬ間に、退路が一つ一つ潰されている。

（管理局は万年人材不足だけどね……？）

にやぁ……と、浮かべるは女狐の笑み。

（予算だけは、潤沢にあるのよ……？）

（き……汚ったねえぇぇぇ～！！）

そして秀人は、第４８管理世界へ放り込まれることが確定してしまった。

「……」

諦め、無言で荷物を纏める秀人。
「……」
不自然なまでに秀人に背を向け、荷造りを手伝うなのは。
「秀人さん」
「お……おう、どうした？」
「下着と、雑貨はリュックに入れておくから」
「……頼む」
ちくちくと、突き刺さるようなプレッシャーが、なのはから発せられていた。
「秀人さん」
リュックサックに、下着とTシャツを入れる。
「おう」
タオルを綺麗に折りたたみ、リュックに入れる。
「二ヶ月、かかるんだよね」
「……おう」
歯ブラシとコップを、入れる。
「夏休み、終わっちゃうね」
「……」
髭剃りと櫛を、入れる。
「夏休み、終わっちゃうね」
「……すんません」
「うぅん、気にしてないから」
「……」
かちゃん……と、リュックの金具を閉じる音が、いやに大きく聞こえた。
「気にしてないから」
「……」
……秀人の胃が、ピンチだった。

「……なぁ、フェイト」
「……なに、ヴィータ」
部屋の片隅に、被害が及ばないように待避していた二人が、こしょこしょと小声で話していた。
ユーノとアルフは、無限書庫の探索に……と、既にいなくなってしまった。
「アイツ、なにやったんだ？」
「あー……えぇと……わるものをやっつけた、らしいんだけど」
「……それが、何で辺境世界に放逐されることになったんだよ」
「しらないよ……ボクにきかないで」
「つかえねー奴……」
「なんだと！？」
がたっと立ち上がる。
「フェイト、ヴィータ」
それを、恐ろしく平坦な声が瞬間冷却した。
ぱたん……
箪笥の戸が、閉じる。
「悪いんだけど、少し静かにしててくれるかな？」
「「はい」」
再び、置物に戻る二人。
「えっと……それじゃあ……」
荷物を抱え、玄関に。
靴を履き替え……
――どすん。
「おわっ」
バランスを崩しかけた。

後ろを見てみると、なのはが、秀人の背負うリュックサックを掴んでいた。
「どうした……？」
「……ちゃやだ」
「え……？」
ばっ、と顔を上げる。
「行っちゃ嫌だ！」
ぷるぷると、目いっぱいに涙を溜め……縋るように、秀人を見上げていた。
「えと……何日かに一度は、面会オーケーらしいから、それで……」
「毎日がいい」
「な、」
「毎日会えなきゃ嫌！」
……まるで、というか、まるっきり、駄々っ子だった。
「……ごめんな」
申し訳なさそうに、玄関の扉に手をかける秀人。
――ギュリリリリッ！
その手に、桜色のチェーン……バインドが絡み付いた。
「なのは……」
「ううぅ～～～！」
両手で、チェーンをしっかりと握りしめる。
とうとう、ぽろぽろと涙が零れてしまった。
「なのは」
それを見たフェイトが、なのはに近付く。
「だめだよ、それ以上は。ひでと、こまってるよ」

「困ればいいんだ……秀人さんなんて、困っちゃえばいいんだ！」
「なのは！」
――バキンッ！
フェイトが、バインドを砕いた。
「うきゃっ……」
反動で尻餅をつくなのは。
ずいっ、と顔を近づけ、フェイトが凄む。
「これ以上わがまま言ったら、おこるからね」
「……だって、」
「なのは！」
「うぅ～～！！」

「二人とも、少し落ち着けよ……」
秀人が仲裁する。
「はぁい……」
フェイトは渋々頷くが……
「……」
なのはは、何も言わなかった。
「……じゃ、行ってくる」
なのはの頭を撫でる。
それを跳ね退けるような真似はしなかったが……
「……」
むすー……っと、膨れっ面のままだった。

秀人は、そのまま地球支部へと向かった。
「時間ギリギリだな」

「わりぃ」
クロノが先導し、転送ポートへ。
「では、もう一度確認するぞ」

――基本は自給自足。現地の動植物を狩猟する。
――定期的に執務官が査察に入るが、期間中は基本ノータッチ。

主に、この二つ。
……正直、罰ゲーム以外の何物でも無い。
かく言うクロノも、同様の訓練で死にかけて以来、トラウマになっていた。
「植物を採る時は、よく吟味することだ。一見無害そうに見えて、とんでもない毒性を持っていたりする」
「……具体的には？」
「周囲の色彩が反転して、ありもしない花畑が見えた」
「……」
食料の安全性すら保証されないらしい。
「動物を狩猟する際、それがどのような生態の生物なのか、よく観察しておけ。一頭を仕留めたら、数十頭の群れに追われるということもありえる。他にも、翼竜に啄まれたり、角獣に刺されたり……」
「あーもう！　不安になるからやめろっつーの！！」

すたすたと、覚悟を決めて転送ポートに入る。
「んじゃ、行ってくる」
「死ぬなよ」

そして、転送ポートが輝き……

――バシュッ！

秀人が、その中に消えた。

一方その頃。

「……、」

なのはは、膝を抱えて、壁とにらめっこをしていた。

秀人が出て行った、その翌日。

「なのはー」

「……なに」

「おなかすいた」

時計を見れば、そろそろ正午だった。

「……ちょっと待ってて」

不機嫌でも、家事を怠る気はないらしい。

冷蔵庫から三人分、肉や野菜を取り出した。

もぐもぐと、いつもの半分の面子で昼食を食べる。

ふと、フェイトが思い出したかのように言った。

「そういえば、きょうやとみゆきに呼ばれてなかったっけ？」

「あ……」

なのはにしては珍しい、うっかりだった。

幸いにも、約束の時間は夕方だ。

「そうだった……」

「ボクとヴィータも行っていいよね？」

「んー……」

かちかち、とメールを打ち、確認。

「うん、来ていいって」

「いや、アタシは……」

渋るヴィータ。

なにげに、彼女も人見知りの気があった。
「駄目。
一応、保護観察の身なんだから」
「……わかった」

そして、夕方。
バスを乗り継ぎ、高町家にやってきた。
「あぁ、来たのか」
出迎えたのは、恭也だった。
「早速で悪いが、なのは、道場へ来てくれ」
「……？うん、わかった」
「ボクはー？」
「母さんが、家の方でケーキを用意して待ってるぞ。
えぇと……ヴィータだったか。君も、家の中で待っていてくれ」
「ももこのケーキ！
……ほら、いくよヴィータ！」
「わかったから、引っ張るんじゃねーよ……」

道場に入る。
静謐な空気に、無意識のうちに身が引き締まる。
恭也が座った対面に、綺麗に正座する。
「なのは。この前……友達を助けた時、どんな状態だった？」
「どんな、って……」
その時の体験を、思い出す。
「時間が止まって、自分だけが、その中を動ける……みたいな」
「それは、あの時が初めてか？」
「うぅん。フェイトとの戦闘でも、たまに……」
「……」
「そういえば……あの時、兄さんも動いてたよね？」
恭也は、考え込んでしまった。言うべきか、言わざるべきか。

――御神流。

「もしかして、兄さんは自由に『あの状態』になれるの？」

「……ああ」

恭也は、話すことにした。

既に、少なからず命のやり取りをする世界に足を踏み入れているなら……むしろ、教えておいた方が助けになる。

「……本来なら、基礎の技から習得していった、その先にある奥義なんだが」

「兄さんが使う、剣術のこと？」

「あぁ。感覚を掴んでいるのなら、あとは、基礎を積むだけでコントロールできるようになる……かもしれない」

基礎を積む。

つまりは、剣術を学ぶ、ということ。

「私が、剣術を……」

「なのは次第だ。

修業の間、俺は、なのはを肉親とは思わない。

……それでも、やるか？」

どこかで、聞いたような話だ。

『強くなりたい』という意志に対して、友人が問いたこと。

あの時の答を……もう一度。

「やる」

確かに、告げる。

「……わかった」

恭也は立ち上がり、神棚に手を入れた。

かたん……と、板が外れ、奥に空間が現れる。

そしてそこから、全長８０センチ程の、古びた木箱を取り出し、戻ってくる。
それを、なのはの目の前に置いた。
「……」
なのはは、吸い寄せられるように木箱に見入る。
和紙の札で封印されたその箱からは……得体の知れない、呪力のようなものが漂っていた。
「……この封印は、父さんも、俺も、解くことができなかった」
ぐっ、と恭也が力を込めても、開く気配は無かった。
箱を封印する札。あまりにも達筆……日本語なのか、それどころか、言語なのかすら怪しい一文が、添えられていた。だが……
（……読める？）
何故か、そこに書かれている意味が、読み方が、直接頭に伝わってきた。
「これを開けることが出来たなら……御神流の全てを、お前に伝える」
要は、入門試験だ。
「……『我、ここに……其の名を似って、汝を封印す』」
「……」
あっさりと読んでみせたなのはに、驚くことも無く見守る恭也。
「『其は、海にして空。其は、対にして一』」
書かれた文字が、桜色に発光している。
恐らくは、この箱の中身……その所有者の魔導師が施した、封印なのだろう。

全体的に、魔力を持たない人間が大多数を占める地球において、これほど有効な封印は無い。

「『汝が名は……』

そして……その名を、告げる。

「『二刀一対

――――――――――回天・桜花　』」

――バチッ……！

と、札が焼失した。

「……」

箱を開けると、そこには……

「……刀」

長さにして、約６０センチほどの小太刀が二振り、納められていた。

「その箱は、父さんが生家から持ち出した物で……御神流の創始者の刀らしい」

目で促され、持ち上げてみる。

「……」

鍛造された鋼の、ずっしりした重み。

「それが、『人を斬る』ということの重さだ」

「……」

鞘から抜く。

長い間封印されていたというのに、刃は曇り一つ無く、鏡のよう

だ。

「明日から、稽古をつけてやる」

「……よろしく、お願いします」

鞘に納め、道場を後にした。

「……秀人さん」

今頃別の場所にいるであろう秀人に向けて、口にする。

もう、不貞腐れているのは終わりだ。

「私、頑張るから」

かしゃん、と、二刀の鞘が、それを激励するように鳴った。

第六十三話（後書き）

いや、、、なのはがチャンバラやったら、面白いんじゃないかと、、、

第六十四話（前書き）

職場にGが出た。職場ごと焼き払いたい。

第六十四話

秀人が異世界に放り出されて、数秒後。

「うおおおぉ！？」

秀人は、落下していた。

着地地点は、遥か下方。

雲が掴める程の高空に、投げ出されてしまったらしい。

『秀人か？』

と、あわてふためく秀人とは対照的に、マリーはいつもの調子だ。

「マリーか！

おい、どーなってんだコレ！？　座標指定やったのはドコのどいつだ！？」

矢継ぎ早に質問する秀人。

『……今、こっちでも大騒ぎだ。お前の反応が、ロストしている』

「……」

その一言で、沈黙する。

「……これも、訓練のうちか？」

『いや……直前に、ハッキングを受けている形跡がある。これに乗じて……な……、た……』

この通信すら、ジャミングされているらしい。

「おい！？」

『……』

ぷつん、と、とうとう完全に通信は途切れた。

……なんとも、不吉である。

「どこのどいつだ畜生！！……、って、やべぇ！！」

気付けば、大地が近付いてきていた。
「くそっ……このッ！どーなってやがる！」
……どういうわけか、この世界では魔力が練りにくい。
飛行魔法は、どう考えても間に合わない！
「こうなったら……！」
魔力を魔法陣ではなく……直接、体内を循環させる。
地面まで、あと５０メートル、４０メートル、３０、２０……！
「うおりゃあああああああああぁぁ！！」
炸裂効果だけを強化した、ブレイズキャノンを発射。
それは、威力が減衰する前に、地面にぶつかり……
――ゴバアアァッッッ……、！！
爆風を、撒き散らした。
「ぐぇフッ……！」
急降下から、突然真下から爆風に跳ね上げられ、そのＧに呻く。
だが、おかげで何とか、地面に激突することだけは避けられた。
残り１０メートルは、自由落下で降り立った。
――ドシャッ！！
「くうぅ……！いってえぇぇ……！」
足の痺れが治まり、周囲を見渡す。
「……マジで異世界だな」
空には、月のような衛星が二つ、並んでいた。
「どーすんだ、俺……」
想定されていた世界では無い以上、発見されるまで、どれだけかかるやらわからない。

その間に、闇の書の主が活動を再開すれば……
「……はぁ。考えててもしゃーないか」
秀人は、とりあえず歩き回ってみることにした。

気温は２０度前後で、湿度もそれほど高くない。
針葉樹の森林と、乾いた地面。
先も感じた通り、魔力が結合しにくい点を除けば、快適な気候だ。
「……」
がさり……と、森林の葉が、不自然に揺れた。
足を止める。
――ザザザザザッ……！
「……いきなりか」
そして……
『ホキャアアアァ！』
猿のような、体長２メートル程の獣が、飛び出してきた！
「ッしゃあ！！」
――ドボォッ！
狙い定めたような中段蹴りが、猿の鳩尾に減り込んだ。
『ゲッ……！』
白目を剥いて昏倒する猿。
だが、秀人は退却を始めていた。
『『『『『『『『『キャアアアアアアアアアアァ！』』』』』』』』』
「うおおぉ！冗談じゃねえぇぇぇ！！」
猿は、集団で迫り来るのだから！

走り、跳び……小規模にインパクトを発動し、追い付く個体には拳をくれてやり、
ひたすら走りつづける。
そして……

「って、崖!?」
道が、途切れた。
『フシュルルル……!』
血気盛った猿達は、円陣を組んで秀人の退路を絶つ。
「面倒だけど」
一体ずつ、無力化していくか……と、思ったその時。
――ダッ!
猿達が、いきなり森に走り込んで行った。
「……!」
そして、上空から近付いて来る、段違いの殺意!
『ギャアアアアアアアアアッ!!!』
全長50メートルを優に越える、有翼の爬虫類……ドラゴンが、迫ってきていた。
「いきなり突飛すぎんだろおぉ!!!」
『ゴハアアアアッ……!!』
――ゴオオォォッ!
吐き出される、火炎のブレス。
「あっちいいぃぃぃ!!……って、うわあああ~……!?」
それに煽られ……秀人は、崖から足を踏み外した。
――ドボオォォン!!
「……ぶあぁっ!」
崖下の川の中から、秀人が顔を出す。
「あー、川で助かった……」
『キシャアアァッ!!』
「助かってねえええぇ!?」
――ドゴォン!!
水面から襲い掛かってきた、魚とも蛇とも判別し難い生物に、バ

レットをぶつけ……

『ブオオォ！』

「そりゃあぁぁ！！」

陸に上がった所を待ち構えていた猪を、川に蹴り落とし……

『ギキャアアァ！！』

「また出たあああぁぁ！」

ドラゴンの火炎から身をかわし……

「はひー……」

ほうほうの体で、巨木の根本に開いた穴に身を隠す。

「ぜー……ぜー……！　ったく、グルメ界かここは！

暴走体並みの獣が、ゴロゴロしてやがる……！」

「……ん？」

と、奇妙……というか、場違いな物を見つけた。

草の繊維を寄り合わせた紐に、竹のような板が、いくつも繋がれている。

明らかに、人工物だ。

しかも、そんなに古くないどころか、まだ繊維が緑がかっている。

「俺の他に、誰かいるのか……？」

秀人は、何の気無しに、それに手を触れ……

「ゆ……行方不明！？」

「ぶフォッ！！」

「ぎゃー！」

……上から、なのは、フェイト、ヴィータである。

なのはがクロノと通信中にいきなり立ち上がり、肘がフェイトの湯呑みをカチ上げ，
気管に麦茶をダイレクトでぶち込み、噎せた拍子に吹き出された麦茶がヴィータの顔を直撃した。
「テメェ喧嘩売ってんのか！」
「げふっげふっ……し、仕方ないだろー！？」
「クロノ！説明……いや、今すぐウチに来て説明しなさい！」
「だいたいお前は、考え無しに行動し過ぎなんだよ！動く前に周囲を確認しろ！」
「ヴィータの動きがトロいんだよ、この鈍重騎士！」
「ど、どん……！？　……よーし、ちょっと表出ろコラ。速さだけが取り柄の羽虫に、思い知らせてやらぁ！」
「羽虫だとぅ！？」
「あぁ、もう……！」

じゃきっ……と、なのはの手が、腰に穿かれた回天・桜花に伸びる。
そして……
「二人とも、うるさいっ！」

――ゴ、ゴンッ！

「ぎゃあッ！！」
「ぎゃふッ！！」
二人の脳天目掛け、鞘打ちの二連撃が決まった。

「大事な話してるんだから、喧嘩はあとにしなさい！」

「「はい……」」
最近……あの二刀を手にして以来、折檻がますます過激になって

きた。
何と言うか……
「えぇと……オニに、」
フェイトは、クロノから（嫌々）教わった、地球の諺を思い出す。
「……かなぶん？」
惜しい。
「金棒だろ」
「そう、それ！」
あっはっは……と笑う二人の背後に、まさしく鬼の気配。
「だれが……鬼だって？」
「あ、あはははは……？」
愛想笑いでごまかす。
「ヴィータ、外でくんれんしよーぜ！」
「お……おう。行くか！」
ざざざざっ！と、左右になのはを撹乱し……
「「行ってきまーす！」」
玄関から、走り出して行った。
「もう……夕ごはんまでには帰るんだよー！」
少しは、落ち着いたらしい。
「で……どういうこと？」
「……あぁ、今説明する」
返事は、玄関の向こうからだった。
――――
ちゃぶ台を挟んで、クロノと対話する。

「じゃあ、丸っきり想定外の場所に、飛ばされちゃったってこと？」
「……あぁ。だが、直前まで、マリーと通信が通じていた。
少なくとも、人間が生存できる環境では、あるみたいだ」
「……」
「本当に、済まない……」
ちゃぶ台に額を擦りつけるほど、頭を下げる。
「いいよ、許す」
が、なのははあっさりした様子だ。
「別に、クロノの責任ってわけじゃないし。それに、ね……」
コンコン、と、二刀の鞘をノックする。
「……ちょっと、やらなくちゃいけないことも、あるし」

訓練の際、秀人は必ず寸止めにして、怪我が無いように心掛けていた。
だが今回は、今までと違い、身体を鍛える訓練。しかも、指導するのは恭也。
当然、怪我もするだろう。
「今なら、あんまり心配かけないで済むから」
そうか……と呟く。
「既に、捜索隊を出している。見つかり次第、こっちに送り返すから……」
「うん、よろしく」
そして、席を立つクロノだったが……
「あ、そうだ。夕飯、食べていきなよ」
なのはに、そう呼び止められた。
「……なに？」
「秀人さん、いきなり行っちゃったでしょ？
だから、材料が余って困ってるんだ」
賞味期限が～、と、やたら所帯じみた事を言われ……
「分かった。相伴に預かろう」

『あー……ユーノくん、アルフ？』
早速、念話を繋ぐ。
数秒後……
『……なのは、かい？』
一気に五十も老けたような声が、帰ってきた。
『……だいじょぶ？なんか、死にそうだよ』
『無限書庫って……数秒毎にデータベースが更新されるから、マジ無限……闇の書関連の資料、集める
だけで、二日過ぎちゃったよ……ははは』
ちゃんとした検索システム構築しなきゃ……と言う。
『そんなに根詰めても、効率上がらないよ？　一旦、アルフ連れて帰ってきなよ』
ところで、アルフの反応が全く無いのだが……
『アルフなら、さっき『落ちた』。しばらく起きないかも……あ……また、更新された……探さなきゃ、捜さなきゃ……』
亡霊のように繰り返すユーノに、なのはが焦る。
『帰ってきなさい！今すぐ！』
かくして……秀人の替わりにクロノが入るという、いつもと違う変則メンバーでの夕食となった。
――カランカランカラン！！
「うおっ！？」
秀人が触れた途端、絵馬モドキがけたたましい音を鳴らした。
そして……明らかに秀人を標的にしているであろう殺意の塊が、

減速することなく迫ってきている。
「……上等！」
流石に、腹も据わった。
拳を撃ち合わせ、ファイティングポーズを取る。
そして……

「ヒャッハー！夕食ゲットォ、お、おぉぉ……？」

「うおりゃあぁぁ……あ、、？あ……？」

ぱちくりと目を見開く二人。

襲撃者は見るからに幼い少女である。
セミロング……というか、切らなかったから伸びた、という風情の不精な髪型。
整ってはいるものの、全体に纏う退廃的な空気が、全てを台なしにしている。
何より、手にした片刃の剣。
ぽたぽたと、真新しい血を滴らせ……
（……うわぁ）
ドン引きだった。

何故、こんな場所に子供が……と訝しむ秀人。
それと同じく、襲撃者……

八神はやてもまた、戸惑っていた。
何故？
（どうしてここに、こいつがいる……！？）

「なぁ、君……」
口を開く秀人。
はやては、剣を握る手に力を込め……

――ズズゥン……！！

巨木が、めきめきと倒れた。
「くそっ、見つかったか！」
はやてが、この世界での最終標的に設定している、大火竜。
そいつが、はやての根城であるこの場所を、秀人を足跡に突き止めてしまったらしい。
「くそったれが！」
秀人を放置し、一目散に逃げ去っていく。
とりあえず、あの大火竜の狙いは秀人だ。
余裕で逃げられる。そのはずだったが……

「おい、ちょっと待て！聞きたいことがいくつもある！」

驚くほどの健脚で、はやてに追いついてきた。
「おいコラ……！」

『グルルルル……！』

果たして、危惧の通り。
大火竜は、はやてもついでに捕捉した。
「なについてきてンだよテメェ！　竜の歯クソにでもなってろ！」
「無茶言うな！あんなモン、こんな環境で相手にできるか！」
「じゃあ何で着いてきたんだよ！バラけりゃ、どっちかは逃げられたのに！」
「それは！　……あれ、何でだろう？　……何となく？」

首を傾げる秀人。

「、」

ぷつん、と、はやての我慢の限界を突破した。

「ざっけんなテメェェェ！」

「悪かったあぁぁぁ！」

『グルアアアアアアアア！！』

「「ぎゃあああああぁぁぁぁぁぁ！」」

――ドッゴオォォォン！

二人仲良く、巨大な火炎弾に吹き飛ばされた。

……波瀾万丈な、サバイバル生活が幕を開けた。

第六十四話（後書き）

さぁ、リアルモンハン生活の始まりだ。

、、、浮気じゃないよ？

第六十五話（前書き）

ハルハル所有のＺＸ９Ｒ、ずっとＥ型だと思ってパーツ集めて、いざノーマルに戻そうと思ったら、、、Ｃ型でパーツが全て無駄に、、、ＯＲＺってレベルじゃねーぞ、、、

第六十五話

『グルルルル……！』

大火竜は、秀人たちを吹き飛ばしたはいいものの、見失ってしまったらしい。

荒野の上空をぐるぐると旋回し、ふいっと去って行った。

――ゴソッ……

と、地面が隆起し……

「……行ったか？」

「……さぁね」

頭から土だらけになった二人が、這い出してきた。

「……」

とにかく、抜き足差し足忍び足。

魔力もゼロにし、竜の巨体が入り込めないような、峡谷に退避した。

「まだついて来る気かよ」

「つれないこと言うなって」

「チッ……」

はやても、さすがに二度も大火竜をおびき寄せる愚行は犯さない。

『ギュアア！』

途中、岩場から飛び出して来る亀のような猛獣は……

「……うぜぇ死ね」

『ガ、ガガガ……！』

魔剣を脳天に突き刺し、絶命する。

「おい……！」

反射的に、殺生を咎める秀人。
が、はやては淡々とした表情と口調で、言った。
「馬鹿かお前は。ここは日本じゃ無いんだ。スーパー行けば食べ物が買えるわけでも、
蛇口捻りゃ飲料水が出てくるわけでも無い」
「あ……そういや、そうだった。すまん」
突飛な事態に忘れかけていたが……これは、サバイバルだった。
「……食えるの、それ？」
「骨と甲羅以外は。結構イケるよ……よいしょっと」
ずるずると、最小限の身体強化魔法のみを使い、獲物を引きずっていく。
「……」
何となく着いて行った先は、またしても、同様の絵馬モドキが仕掛けられた洞窟だった。
「……」

おもむろに魔剣を取り出し、巨大亀の甲羅の継ぎ目に捩込み……
「よっ……と！」
――バカンッ！
甲羅の一角を、テコの原理で割り開く。
「えらく硬い剣だな……」
呆れながら、そう呟く。
「おい、お前」
「あ、ああ……何だ？」
「手伝え。捌いてる間に腐っちまう」
「……」
一瞬、躊躇する秀人だったが、腐らせるくらいなら、食べてやったほうが供養になる……
と、手伝いはじめた。
ベリベリと甲羅を剥ぎ取り、内臓と肉とを分ける。

そして、運び込める大きさになった食料を、洞窟に運び込んだ。
中は、思いの外涼しい……というか、寒いくらいだった。
肉を、岩塩を砕いた塩の山に放り込む。
「肉は保存が利くから後回しで」
てきぱきと指示を出すはやて。
――く～……
その腹が、可愛らしく鳴った。
「……飯にするか」
「……うん」
はやては、僅かに赤面し、頷いた。

がつがつと、割と品の無い食べ方で、煮込んだモツにかぶりつく。
「んじゃあ、お前……はやても、この世界に飛ばされてきたのか」
「まーね……じゅるるっ」
零れそうになった肉汁を、これまた下品に音を立てて啜る。
「……」

焦りも極限になれば、一回転して平静になるらしい。
はやては堂々と、素顔と本名を晒し、事情を説明した。

『不慮の事態で、魔法の訓練中、この世界に飛ばされた』

と。
ある意味、嘘は言っていない。
「今日で丁度、二週間くらいかなぁ……？」
「二週間……」
初日にして、逃げ回ることしかできなかった秀人には、信じ難い事実だった。
「意外と何とかなる物だよ……ペッ」
……べちゃっ、と、足元に苦みがあったらしき一部を吐き捨てる。

「……」

ぴくぴくと、何かを言いたそうに秀人のこめかみがヒクつくのに、はやては気付かなかった。

「ってなわけで、どーせ長居するなら、目標でも作ろうか……ってことで、あの大火竜を狙ってるんだよ。……げっぷ。もう食べられないや」

そして、食べ残したモツの残りを、無造作に鍋の中に投げ込み……

「……っだあああああぁぁぁ！　もう我慢できん！」

秀人の我慢が、限界を迎えた。

「な……何？」

「何だ、お前のその行儀の悪さは！？」

「……はい？」

「食べ物に対する敬意は無いのか！？」

きょとん……としていたはやてだったが、次第に苛立ちが出始めた。

「私が獲物をどう扱おうが、あんたには関係無いじゃん！」

「お前、言ったよな？『食べるために狩った』……って。狩ったなら、全部食え！それが、狩られた命に対する礼儀だ！」

「う、ぐぐぐ……！」

……ここで『はい、そうですか』と言える程の素直さがあるのなら、闇の書の主などやってはいないわけで。

「うるっせえぇぇぇ！！」

結局、ブチ切れて飛び掛かって行った。

ごろごれごろ……と床を転がり、取っ組み合いに発展した。

「むぎゃー！！」

噛み付き、引っ掻き……

「いててて！！やめんか！」

バチーン！という快音響かせ、はやての尻を叩く。
「みぎゃあああぁぁ！！
やめろこのロリペド野郎おぉ！」
ぶぅん、と振り上げた足が、秀人の顎を正確に蹴り抜いた。
「げぐっ……！おらあああぁぁっ！！」
ばちーん！
「ひぎゃあああぁぁ！
尻はやめろっつってんだろおぉぉ！！」

……魔剣を使わないだけ、まだマシかもしれない。

「ぜー、ぜー……！」
「はぁ、はぁ……！」

二人は消耗し尽くし、地面に転がっていた。
なんと無意味な闘争だろうか。
「食い物、粗末に、すんな……！」
尚も言う秀人に、はやては……
「……あーもう！わかったわよ！食えばいいんでしょ！食えば！」

鍋に残ったモツ煮込みを、ヤケクソのように掻き込んだ。

「げっぷ……ど、どうだ……」
青ざめた顔で、勝ち誇った顔を見せる。
「いや……うん、えぇと……一人で全部食え、って言いたかったわけじゃ、無いんだけど……
「……は？」
「粗末にしなければ、残りは俺が食ったんだけど……」
「……」
ばたーん……と、全ての力を使い果たし、はやては倒れた。

（やっぱり私、こいつ嫌い……）

「っだあああぁ！」

――ガシィッ！

なのはが振り下ろした木刀は、恭也の竹刀に受け止められた。

「こ、の……！」

「腕力に頼り切りになるな！」

対して、恭也の竹刀はぴくりともしない。

――カァンッ！

「あっ！？」

竹刀が回転、木刀が巻き取られ、跳ね上げられてしまう。

反射的に、木刀を目で追うなのは。

――バシンッ！

その額に、竹刀がヒットした。

「あうっ……！」

「何のための二本の得物だ。手から離れた時点で、捨てたものだと思え」

「はい……」

ひりひりする額をさすり、聴き入るなのは。

「もう一本！」

「はいっ！」

木刀を拾い、再び恭也へ挑みかかった。

「今日はここまで」

「……あ、りがとう、ございい、ました……」

へろへろになりながらも、しっかりと礼をする。

「ううぅ……オデコが痛い……」
「よしよし、よく頑張ったぞ」
練習後、美由紀がなのはを膝枕し、額に氷枕を乗せた。
「でもさー、いいの？ユーノに頼めば、パパッと魔法で……」
「それは駄目」
「え……」
「怪我がすぐ治るなんて気持ちで修業してたら、絶対に強くなれない」
「……」
「だから、駄目」
「……そっかー」
特に何も言わず、なのはの髪を撫でる。
「全く、こんな可愛い我が妹に……恭ちゃん！」
「……修業に怪我はつきものだ」
恭也は、バツが悪そうな顔で、反対側に座っていた。
「そりゃ、足くじいたりはするだろうけどさ！
アレなら寸止めできたでしょ、恭ちゃんなら！」
「姉さん、いいから……」

「……痛むか？」
今更のように、なのはを心配する。
「超痛い。秀人さんに言いつけてやる」
「やめてくれ……」
ゲンナリする恭也。
「だめ。絶対言ってやる……」
くすくす、と、楽しげに笑う。

思えば、三兄妹だけで過ごすなど、いつ以来だろうか。
さらさらと、夏の夜の生暖かい風が、草を鳴らす。

「な～んか、いいねぇ。こういうの」
仲良し三兄妹みたいでさ……と、少し茶化して言う美由紀。
恭也となのはは、顔を見合わせて笑い……
「おーい！ももこがスイカきるってさー！」
フェイトの元気いっぱいな声が、その時間を終わらせた。
「……ところで、スイカってなにー！？　ボク、たべたことなーい！」
歩いてくればいいものを、縁側から大声を張り上げる。
大声を出すことが、楽しいらしい。
「流石に、近所迷惑だな」
「そうだね、いこっか」
「ひゃっほー！スイカだー！」
美由紀が、目を輝かせて飛んで行った。
「……姉さん」
「フェイトと仲が良いわけだ」
二人も苦笑しつつ、ヴィータや桃子が待つリビングへ歩いて行った。

第六十五話（後書き）

あれ、、、あんま話進んでない、、、（汗）

第六十六話（前書き）

ああ、、、今日でオーズが終わってしまう。
フォーゼはダサすぎて、最低視聴率を記録しそうな悪寒が、、、

第六十六話

秀人がサバイバルを始めて、一週間が過ぎた。

『グガアアァァア！』

はやての手助けもあったおかげか、一番の心配事だった、飲料水や寝床の問題はクリアした。

『ギャギャギャ！キキー！』

最初はあたふた、はやての後を着いていくのも手一杯だった秀人だが、今では、すっかり……

『ギュイィィィ！』
『ギャアアアア！』
『キキイィィィ！』
『グガアアァァア！』

「うおおおぉ！！ヤバいヤバい流石に死ぬコレは死ぬうぅぅ！」

すっかり、獲物として野獣たちに匂いを覚えられていた。

ダダダダッ！と荒野を疾走し、数えるのも馬鹿らしくなるくらい大量の野獣たちを引き連れる。

と、すこし前方に、薄い煙が立ち上る。

念話が使えない世界での、アナログ極まりない合図手段……狼煙だ。

「あそこかっ！」

そこを目指して、一気にスパートを掛ける。
そこは、対岸が低いため、地平線からは分かりづらい谷だった。
後方に引き連れた獣たちは、頭に血が上って、そもそも気付いていないが。

「はやてえぇぇぇっ！！」

大声で合図し、急旋回。
昂ぶる獣たちの股の間をスライディングでくぐり抜けた。

最前列にいた獣は、唐突に目標を見失い、多々良を踏む。
『ギュエフッ……！』
その背に、後続の獣達が、勢いのままに玉突き事故を起こした。

――ボゴォッ！！

と、崖の手前の大地が、不自然に隆起する。
結果それが、姿勢を崩したところにトドメとなり……

『『『『『ギャアアアァァァ！！』』』』』

野獣の群れは、谷底へ転落していった。

「ぜぇ、ぜぇ……」
片や、魔力結合を阻害される環境で、体力魔力を絞り尽くした秀人。
「やぁやぁ、ご苦労さん」
片や、十分な時間を確保し、簡単な物質操作の魔法を一回使ったのみのはやて。

……『保存食大量ゲット』という結果を得るために支払った労力が、違いすぎである。

「おら、いつまでも寝てんな。さっさとずらからないと、また竜が来るぞ」

「少しは、休ませろ……！」

ぜーはー言いながら、谷底まで歩いて下る。

谷底で獣を解体し、隠れ家の洞窟へ運び込んだ。

野菜の採れないこの世界では、ビタミンが不足しがちだ。

だから、とれたてで、鮮度が落ちないうちに、生で食べておくのが習慣になっていた。

ただ、ビタミン豊富とはいっても……

「「不味ッ……！！」」

ロクに火を通していないおかげで、味は散々だ。

「つか、寄生虫とか大丈夫なのかコレ……あぐっ」

「言わないでよ。食べられなくなっちゃう……はぐっ」

固い繊維を無理矢理噛み千切り、腹に詰め込む。

この数週間、口にするのは肉ばかり。

焼肉、塩漬肉、干し肉、燻製肉、生食……

「「あーあ、（なのは／リーゼ）の料理が食べたい」」

二人して、そんな気持ちを抱いていた。

「げぷっ……」

５キロも食べないで、二人は満腹になった。
「んじゃ、残りは……」
「いつもと同じ、塩漬と燻製」
「あいよー」

肉や内臓を加工すれば、後は自由時間（？）だ。
……娯楽も何も無い、非常にストイックな環境で、やることなんて限られている。
まずは、寝る。
そして……

「……１１２、１１３、１１４、１１５」

筋トレである。
薄暗い洞窟の中で、黙々と腹筋を鍛える秀人。
その横では……
「ご、ごじゅう、ろく……ごじゅう、なな……」
はやてが、ひーひー言いながら腕立て伏せをしていた。
リーゼとの修業とも違う、地道な運動にはまだ不慣れのようだった。
「１２０、１２１、１２２、１２３……はやて、無理するなよ。子供のうちから筋肉付けすぎると、身長伸びなくなるぞ……１２４、１２５、１２６……」
「ろく、じゅう……！はぁ、はぁ……うっさい……集中できないでしょ……！」
「あぁ、悪い。……１４０、１４１、１４２、１４３、１４４、１４５、１４６、１４７、１４８……あー、駄目だ。ちっとも鍛えた気にならん」

もともと、桁外れな筋力を誇る秀人だ。
通常のトレーニングなど、今更、食後の運動程度にしか意味が無い。
「やっぱり、身体よりこっちかな」
見様見真似の座禅を組み、意識を精神の内部に向ける。
「すぅー……はぁー……」

――リンカーコア、起動。

薄らと、秀人の身体に、空色の魔力光が膜のように纏わり付く。
やはり、平常に比べると、その輝きは曖昧で、弱い。
「……」
すぐにギアを繋ぐのではなく……アイドリング状態のまま、体内に留める。
このまま外部へ出力しても、すぐに散ってしまう。
体内を循環させ、純度と密度を上げていく。
意識するのは、あるキーワード。
（俺の、魔力資質……『結合』）

この世界は、常時ＡＭＦが展開しているような環境だ。
だが本来なら、秀人の魔力資質の前には、意味を成さない筈。
いつかの日、ＡＭＦ環境下で、３００万という桁外れの数値を記録した時のように。

今、秀人は満足に魔法が使えていない。
それはつまり、魔力資質を引き出せていないということだ。

あの力を完全に引き出すことができれば、飛躍的な戦力向上ができる。

「……！」

手を突き出し、魔法を行使する。
近接攻撃魔法・ブレイド。
普段なら、特に意識せずとも発動できる、ごく初歩の魔法。
「ぅくっ……！」
それが、まともに行使できない。
魔力刃の基となる魔力のフレームが、構築できない。

いつも、どれだけ杜撰に魔法を行使していたのかを痛感する。

……秀人、なのは。
二人に共通するのは、高い魔力、優れた才能……そして、それに見合わぬ魔導師歴の浅さだ。

なにせ、初めてリンカーコアを起動させたのが、命懸けの実戦。
その後も、訓練より実戦の中で才能を開花させるような、言ってしまえば異常な環境が続いた。

直感で、手探りで、魔法の腕を磨いてきた。

そして支払わされたツケが……レイジングハートの大破。

……それを、繰り返さないためにも。
「ぐぐ……！」
徹底的に、鍛え上げる。

「……はァッ！」

そして、気が遠くなるほど……実際には、もっと短いだろうが…

…とにかく、なんとかフレームの構築には成功した。
あとは、それをとにかく維持するのだが……

「うあ！？」

――パキィン……！

フレームは、呆気なく砕け散った。
「くそっ……」
悔しげに舌打ちする。
だが、すぐに……

「……もう一回！！」

また、一から始めた。

「……」
それを、無言で眺めるはやて。
（……なんでこいつ、こんなに頑張ってるの？）
あんなやり方、効率が悪い。
疲労と、成果の釣り合いが取れていない。

なのに、それを止めることなく愚直に、反復している。

それを維持できる……いや、こんな世界に飛ばされて、自分を鍛えようなどと思える意思は、いったいどこから生じているのだろうか。
（私は、こいつらを殺して、『鉄槌』の敵を取って……）
はやてを支えているのは、負のモチベーション。

復讐という、わかりやすいものだ。
最初、秀人もまた、自分への復讐のために鍛えているのかと思った。
だが、秀人の態度からは、それが感じられない。
ならば、何故……？

「……」
考えて、考えて……気付けば、秀人はぐったりと気絶し、無防備に寝転がっていた。

「……チャンスか、これ？」
疲労困憊。
しかも、全く警戒していない。
またと無いチャンス。
――シュッ……
鞘から、魔剣を引き抜く。
――カキン……
秘蔵のカートリッジを、装填。
まだ、秀人には明かしていない。

今なら、殺せる。

もともと、秀人と一週間暮らしていたのは、成り行きと、気まぐれだ。
そして今、チャンスがやってきたことで、気まぐれは終わった。

魔剣を、振り上げ……
「……」
振り……下ろさない。

「……」

すとん、と腰を下ろし、秀人の顔を覗き込む。

「お前は、どうして……」

『鉄槌』の視界を、通じて見た光景。

ボロボロになって、それなのに……もう一人いた、白い衣服の少女を、身体を盾に守っていた。

「……守るための、力？」

一応の解答に、たどり着いた。

そして、そのあまりの価値観の違いに愕然とした。

「ば……馬鹿じゃないの？　力は、敵を排除するための……」

だが事実、秀人は『そう』してきた。

その力は、その怒りは……誰かのために。

「……自分より大切なものなんて、あるわけ無い！」

苛立ちの末に激昂し、魔剣を秀人の頭、数センチのところに突き立てる。

「他人のための力なんて、まやかしだ！」

認めるわけには、いかなかった。

「どっちが、真に強くなるのか……！」

誰かのために強くなる秀人。

自分のために強くなるはやて。

どちらが、より強いのか。

「見極めてやる！」

……不意打ちではなく、真っ正面からの打倒を、誓った。

第六十六話（後書き）

最近、この小説の行方が分からなくなってきました。
ＳｔＳ編のエンディングは、既に文章に起こしてありますが、、、
途中経過が、、、

第六十七話（前書き）

あああああ！　オーズが終わってしまったあああああああ！！
良い最終回だったよおおおお！！
でも震災で１話減ったのと、１０００回記念で２話を使い潰した影響で伏線回収しきれてねえええええ！！

フォーゼに期待！

もういいからネタライダー街道を突き進んでくれ！

第六十七話

いつもの高台に、訓練用の結界が展開していた。
術者はアルフ。久々に、ユーノの手伝いに時間を貰い、フェイトに付き合っていた。

中では、バリアジャケットに身を包んだフェイトと、短パンにジャケットを合わせたような戦闘服のヴィータが、激しく打ち合っていた。
「そりゃー！」
「うぉらあぁっ！」

――バギィンッ……！

「ふにゅうぅぅ……！」
「ぐうぅぅ……！」
鍔ぜり合いの体勢から、互いに牽制の魔法を放つ。

――ドガガガガガッ！

射撃魔法がぶつかり合い、また間合いが開く。
「ハーケン……セイバー！！」
ギュルギュルと回転しながら追尾する、ハーケンセイバー。
「……はッ！」
ヴィータは、気合い一発。

――パキィィン！

グラーフアイゼンの一撃で、ハーケンを破壊してしまった。

『Ｐｈｏｔｏｍ　Ｌａｎｃｅｒ』
「ファイア！」
間合いを詰めさせまいと、射撃魔法を放つ。
――ガギギギッ……！！
シールドで弾くが、それだけ距離を離される。
「くらえっ！」
『ｉｍｐａｃｔ！』
秀人を真似るように、衝撃波を放つ準備をするフェイト。
「……」
対してヴィータは、野球ボール大の鉄球を二つ、出現させる。
「あはッ……！こんな距離で、ボクの魔法を破れるもんか！　はァッ！」
――ゴパァン！！
発射される衝撃波。
回避か、迎撃か。だがヴィータが取った選択肢は、ありえない三つ目……正面突破だった。
「ハッ！！」
――ガギィンッ！
グラーフアイゼンに打ち出された一発目の鉄球は、フェイトの衝撃波とぶつかり……掻き消されたり
はしないものの、減退を余儀無くされる。
後は衝撃波との波状攻撃で、ヴィータをノックアウトするだけ……
……そう考えていたフェイトの思惑は

、呆気なく砕かれる。
「らあぁっ！！」

――ガッキィィィン！！

ヴィータは、二発目の鉄球を……一発目の鉄球目掛け、打ち出した。

――ガチィンッ！！

寸分違わず、一発目の鉄球に衝突。
ビリヤードのように、推進力を中継し、一発目が勢いを取り戻す。
結果……

――バキンッ！

鉄球は、フェイトの衝撃波を突破した。
「えっ！？うわわわわっ……！？」
まさか、こんな手で突破されるとは思っていなかったのだろう。
姿勢を崩し、決定的な隙を晒してしまう。

「どりゃあぁっ！」
「ぎゃあああぁっ！」

――そして、勝敗は決した。

「ううぅ……ちくしょー！」
「あぁ、動かないでよフェイト。バンソーコーが貼れない」
「負けたぁ……」
うー……と、不満そうにむくれる。

「自信あったのに……」
そんなフェイトに、ヴィータがアドバイスをする。
「アタシらの技術は、防御の上からブチ抜くことに長けてるからな。ああいうシチュエーションは、恰好の獲物だ」
ヴィータの戦法は、古代ベルカの騎士の、引いては、守護騎士の戦い方だ。
「防御したから安心……ってわけじゃないんだよ。防御したなら、それが破られた時、どうやって立て直すか。そこまで考えないと、戦場では生き残れない」
「……むらさきのやつ、そんなたたかいしなかったぞ」

「そりゃ、意思を剥奪された操り人形じゃ、技術なんて活かしようが無いだろ」

その言葉に、フェイトがさー……っと青ざめる。
「あ、あいつ……あれがほんきじゃなかったの？」
アルフと二人掛かりで、相当に苦戦したのだ。
しかも、結局勝負は……闇の書の一時封印による消滅という預かり試合というオチ。
ヴィータは、人差し指をフェイトに突き付け、言い放った。

「ベルカの騎士、ナメんなよ」

「ぐぬぬ……きょうは、ちょうしがわるかっただけだもん……ね、バルディッシュ……？」
と、相棒に目を向けたフェイト。次の瞬間……

「あーーーーーーー！？」

素っ頓狂な悲鳴を上げた。
何故なら。バルディッシュの、黒いボディ。
それを真っ二つに縦断するように、大きな亀裂が入っていたのだ。
「ば、バルディッシュー！？」
『修復できます。問題ありません』
「そういうもんだいじゃないー！」
あたふたと魔力を注ぎ、応急処置をする。
「なんで、こんないきなり……！」
「あー……おめぇ、気付いてなかったのか？」
慌てふためくフェイトに、ヴィータが、頬をぽりぽりと掻きながら、衝撃的なことを言った。
「アタシのグラーフアイゼンとそいつじゃあ、そもそも強度が違いすぎたんだ。
打ち合う度に、ちょくちょく割れてたぞ」
「んなっ……！ほんと、バルディッシュ！？」
『……Ｙｅｓ，ｓｉｒ』
「なんで、もっとはやくいわないんだよ！もおおぉぉ！！」
『修復すれば済みます。ご心配には及びません』
相変わらずクールに返す相棒に、フェイトが怒った。
「ばか！
いまはなんとかなってても、いつか……なおせないくらいにブッ壊れちゃうだろ！」
クロノに緊急コールを躊躇い無くかける。
『クロノだ。どうしたフェイト、珍しいな』
「実は……」
そして、事情を説明した。
「……ってわけなんだ。なんとかしてよ」
『……まぁ、そういうことなら、』

「うんうん！」
『マリーに頼むか』
「ばいばい」
ぶちっ、と通信をちょん切る。
すぐさまクロノからのコールが掛かり、嫌々渋々、それを受ける。
『あのなぁ！』
「やだ。あいつきらい！」
……相当に、怖かったらしい。
「あいつだけはやだ！」
フェイトの相棒、バルディッシュは、育ての親であるリニスの特製だ。
複雑な変型機能、高度な演算能力、人格ＡＩ……と、採算を度外視した高性能機。
だが、だからこそ、メンテナンスも複雑かつ面倒極まりなく……
『設計図が紛失したワンオフ品を弄れる技術者なんて、僕はマリーくらいしか知らん』
マリーは変態だが、腕は確かだ。
「ううぅ……」
だが、背に腹は代えられない。
相棒の傷を癒すことが第一だ。
「フェイト、あたしも着いていくから……」
アルフが宥めて……
「……うん」
フェイトは、小さく頷いた。
『それと、ヴィータ。君には、マリーから直々に召集がきている』
「……」
フェイトを下した、ベルカの騎士が脂汗をかいていた。
「あー、そのー……なんだ。アタシはちょっと腹痛があるから、今回は……」
どこで覚えてきたのか、仮病まで使ってバックレを決め込もうと

している。
「うわぁ……」「見苦しい……」
主従コンビも、ジト目にならざるを得ない。
「うっせー！
アタシにだって、苦手なモンくらいあるんだー！」
キレて叫ぶヴィータ。
「……」「……」
……なぜか、フェイトがアルフの背に隠れる。
アルフも、何か緊張した面持ちで、ヴィータを……いや、その背後を見ている。
「あん？……なんだおめーら。変な顔して……」

「……腹痛とは、興味深い」
「はヒィッ……！？」
金縛りにあったかのように、瞬時に凍りつく。
どこまでも沈んでいくかのような、ダウナーボイス。
「……プログラムなのに、腹痛。生理現象。……興味深い」

幽鬼の如き、ほの暗く、しかし確かな存在感。
「あ、あ、あ……！」
ぎち、ぎち、ぎち……と、硬直した身体を後ろに向けようとするヴィータ。

「……迎えに来たよ」

――白衣の悪魔が、そこにいた。

「うぎゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
……ヴィータは、情けない悲鳴を上げ、魔法まで使って逃亡を図る。

「あ……」
ぽつりと寂しげに、声とも吐息ともつかないものを呟く。
「逃げちゃった……」

『おいマリー……！』
通信の向こうで、クロノが頭を抱える。
『何で、そこにいるっ！？』
「モルモ……じゃなくて、ヴィータが呼んだのに、来ないから……」
（今、すごく自然にモルモットって言いかけたなこいつ……）
（やっぱこわいよコイツ……）

『許可は取ったのか！？』
許可、とは、転送ポートの使用許可のことだろう。
が……
「……取ってない」
『……』
クロノは、完全にフリーズした。
「でも、だいじょぶ……もーまんたい……」
『ンなわけあるかァッ！！』
……壊れた。
「いや、ホント……ワタシ、地球在住だし……」
マリーは現在、地球支部に駐留している。
確かに、異世界を跨ぐわけでは無いのだが。
『地球支部から海鳴市まで、何十キロあると思っている！？

電車、バス……果てはタクシーにも乗れない社会不適合者が、どうやって!?』

「ん……」

すっ……と、後ろ手に持っていたソレを、胸の辺りに持ってくる。

「あ、それ……!」

それは、黒地にオレンジのフレアパターンが栄える、やや派手な……

「ひでとのめっとじゃん!」

オートバイ用の、ヘルメットだった。

「あの馬鹿、ワタシのラボに預けっぱなしでいなくなったから、邪魔で邪魔で……

だから、返すついでに乗ってきた」

『……乗ったのか、アレに』

「うん」

身長が１５０ちょっとしか無く、筋力も絶望的なマリーが。

「……楽しかった」

意外と、多芸なのかもしれない。

いや、それより……

「よく、つかまらなかったね……」

妙に感心したフェイト。

「捕まる……誰に?

ワタシ、信号はちゃんと守ったよ?」

『……』

いちいち突っ込んでいては、頭の血管が持たない。クロノは、傍聴に徹した。

「青は、『進め』」

正解。
「黄は、『急いで進め』」
……可能であれば停止、が正しい。
「赤は、『注意して進め』」
……アウトー！
「ほんとに、ほんとーーーーに、つかまらなかった？」
むしろ心配そうに聞くフェイトに、マリーは、かくっと首を傾げ……
「捕まらなかったけど……変な奴らに、なんか追い回されたような気がする……
白くて黒い、四輪と二輪……」
パトカーと白バイである。
ナンバーは、修理の際に取り外し、そのまま付け忘れてしまったらしい。
不幸中の幸だ。
――ぱたっ……
と、通信口から、枯れ枝が落ちるような、はかない音が響いた。
『きゃー！クロノくーん！？』
そばに控えていたエイミィの叫びもセットで。
「それで」
「ぴぃっ！？」
ぐわっ……と、いきなり超至近距離に顔を寄せられ、飛びすさる。
アルフにも、反応できなかった。

「ワタシに、なにか用……？」
「え、えと……」
すっ、とバルディッシュを見せる。
「ヒビが、たくさんはいってて……だから、なおしてほしいな、って」
「む……」
ぴく、とマリーの頬が反応する。
「これ……バルデイッシュ？」
知っているかのような、そんな口ぶりだった。
「こわれたらいやだから……」
「いいよ」
「え？」
見れば、マリーの顔からは、ダウナーな雰囲気は消え去っていた。
「一日だけ頂戴」
バルディッシュをつかみ取り、手元にコンソールを出す。
「エイミィ、支部までの転送許可を。すぐに取り掛かる」
『あぁ、うん……』
「では、また」
――パシュッ……！！

……いかなり現れて、突風のように去って行った。
「……なんか、ちがうひとみたい」
ヴィータの身柄を確保しに、アパートに突撃してきた時とは、別人のようだった。
その疑問に答えたのは、向こうのエイミィだった。
『マリーは、人格にすっごいムラがあって……気分の静動の切替が激しいの』
「……ふーん」
あまり分かっていなさそうだった。

「……バルディッシュ、無事に帰って来られるかなぁ……？」
「……魔改造されてなきゃいいけど」

……不安が尽きない二人だった。

さて、すっかり忘れ去られたヴィータはと言うと……

「うわあぁぁぁぁぁん……！」

自分の影に怯えるように、まだ逃げていた。

……ヴィータ、哀れ。

第六十七話（後書き）

いやあ、、、ハルハルが書くと、ありとあらゆるキャラが崩壊しますね。
ごめんなさい。

第六十八話（前書き）

フォーゼ、ダサ格好良いじゃないですか！！
ヒロイン可愛いし、意外と化けるかもしれません。

そしてゴーカイジャーは神回でしたね！

第六十八話

ラボに戻ったマリエルは早速、監獄のプレシアと通信を繋いだ。
『あら、何かしら……って、それは』
すぐに、マリエルが手にするバルディッシュに気付いた。
『バルディッシュ……？』
『お久しぶりです』
数ヶ月ぶりの再会だった。
「……」
無言でスキャナーに設置し、内部の詳細な情報を表示させる。
すると、出るわ出るわ……エラーメッセージの嵐。
「……これはひどい」
『本当……管理局の技術部は、ボンクラの集まりなのかしら』
かつての使い魔の作。
それが、ここまで粗末な扱いを受けていることに、怒りすら覚える。
それは、マリエルも同様らしく……
「直すよ」
『了解だわ』

がちゃがちゃと、資材の山を掻き分け始めた。
『……ねぇ、マリエル』
がちゃがちゃ、がさごそ。
「……なに？」
『こんなこと言うのも変かもしれないけど……少しは整頓なさい』
「一見、乱雑な部屋。
それでいて……実は、きわめて機能的な配置」
『……』

片付けられない人間の、常套句だった。
『なら、この前の中間報告……試作型カートリッジユニットはどこ？』
「……この山の、一番下」
指差したのは……分解された、もしくは組み立て途中のまま放置されたパーツ……要は、ゴミの山だった。
『……片付けなさい』
ぴくぴくと、こめかみを引き攣らせながら言う。
「……や。面倒臭い」
ぷいっ、とモニターから顔を逸らす。
――ブチッ……
とうとう、プレシアがキレた。
『片付けなさいッ！』
平然とした様子のマリエルだったが、怒鳴られるのは嫌だったのか……
「なんだよもー……」
ぶちぶち言いながらも、ジャンクパーツを仕分け始めた。
『ふぅ……』
だらしない友人と付き合うのも、苦労するものだ。
ジャンクパーツの山と格闘する小柄な身体を眺めつつ、ぼーっとする。
『プレシア・テスタロッサ』
と、珍しいことに、バルディッシュの方から話し掛けた。
『あら、何……？』
向こうで準備を進めるプレシアも、少し面食らったようだ。

『我が主は、常にあなたのことを案じていました』

『……そう』

罪を清算し終えるまで、母親面はしない。

そう決めているからなのか、表立ったリアクションは見せない。

『……そちらの調子は、どう？』

『毎日を、友人と楽しく過ごしています。最近では、料理にも挑戦されて……』

『まぁ……でも、怪我が……』

『それも含めて、教わっています。初めて触れる事柄に、よく取り組んでいますよ』

『保護観察で、不自由な思いはしていない？』

『ハラオウン執務官の尽力で、その点は問題ありません』

とはいっても、やはり気になって仕方が無いのだろう。

矢継ぎ早に、質問を繰り返していた。

――プレシア・テスタロッサ。

その本性は生粋の、『親バカ』なのであった。

「……修理」

ぼそっ、とした声に中断されるまで。

「……始める」

流石に、始めれば早い。ジャンクパーツの山は、綺麗に整頓されていた。

『そ、そうね……』

恥じ入るように、表情を取り繕う。

『それに合わせ、いくつか要望があります』

「……言ってみ？」

『構成素材を、より強度の高いものに交換・補強を』
「……そのつもり」
『当然ね』
構成素材は、秀人の機体にも採用した新型の魔導合金に変更する予定だ。
ヴィータのグラーフアイゼンから得られた技術を基にした素材で、強度はもちろん、
軽量かつ、粘りのある素材となった。強化には、うってつけだろう。
『それから、もう一つ』
……むしろ、こちらが本題だ。

『私に、カートリッジシステムを搭載して頂きたい』

今日もまた瞑想し、魔法構築の基礎を反復していた。
さて、俺達が先日、多くの獲物を仕留めたのはなにも、無目的な乱獲がしたかったわけじゃない。
「……」
こうして、時間の全てを、魔法の基礎練習にあてるためだ。
「……ハッ！」

――ビシュンッ！！

手に、魔力刃を発動。
そして、分解されそうになるソレを、とにかく維持できるようコントロール。
「……」

5分が経過した。
初めのうち、一分も持たなかった惨状に比べたら、小さいながらも大きな一歩……
「ていやー☆」
――パリイィン！
「俺の一歩がああああああぁぁぁぁ！！？」
上手くいってたのに！
「はやてぇぇぇ！」
「ひゃーっはっはっは！」
愛剣を片手に腹を抱えてバカ笑いをするはやて。
「邪魔すんなっつったろ！！」
「ひゃはははは！ちょっと叩いた位で割れる脆い魔力刃なのがいけないんじゃん！」
「ぐっ……！」
確かに、そうだけど！
「ほれほれ、二刀流～♪」
剣を鞘に収めて、見せびらかすように、左右の手にそれぞれ魔力刃を完璧に構成して見せる。
「ぐぐぐ……！」
畜生……才能の壁が憎い！
「……最初に使った魔力『だけ』で構成するんじゃなくて、分解さ

れた箇所に新しく魔力を注いで維
持してみな」
……アドバイスは、してくれるんだな。
「……」
確かに、これはこれで維持がしやすい。
もう一度、集中して……
「こちょこちょこちょ」
「ぶほぁっ！」
――パキィン！
集中を断ち切られ、またしても砕け散った。
「ったく、お前は……！」
アドバイスしたと思ったら邪魔しやがって……
「ほらほら、集中集中♪」
はぁ……
思わず、ため息が出てしまう。
「なのはなら、こんな真似はしないのに……」
まして、練習の邪魔をするなんて有り得ない。

「……おい」

バカ笑いから一転して……不快そうに、眉間に皺を寄せて、俺を
睨んでいる。
……何だ？
何か、こいつの地雷でも踏んだか？

「私に、誰かを投影してんじゃねぇよ」

「……すまん」
よく分からないけど……

「マジむかつく……死ねッ！！」

――ビュンッ！！

「うわっ！？」

あっぶね……

「……決めた。殺そう」

剣を握る手に、ぎちぎちと力が篭っている。

やべ……マジでキレてる！

「ま……待て。落ち着け。話し合おう！」

「問答無用だァッ！」

振り下ろされる先は……躊躇い無く、俺の額！

――ガシンッ！

魔力で補強した掌で、なんとかギリギリ受け止める。

「はァ……！」

その頬は、酔ったように紅潮していて……とても、言葉で正気には戻せそうにない。

「えぇい、許せ！

俺は今のところ死ぬわけにはいかん！」

――ガスッ！

両手が塞がった状態から、中段蹴りではやてを蹴り飛ばす。

……もちろん、女の子を足蹴にするのに抵抗はあるけど、命が懸かっているなら話は別だ。

――ザンッ……！

はやては自分から後ろに跳び、蹴りの威力を軽減した。

……中途半端な射撃は、隙を作るだけ。

となると、残るのは接近戦だが、ほぼ無手の状態じゃ不利だ。

魔力刃は……駄目だ。まだ、実戦には耐えられない。

「……！」
腕に魔力を集中。
とりあえずは、これで！
――ガシュッ……！
「い……ってェ！」
おいおい……強化魔法を突き抜けたぞ！？
力尽くじゃ、こうはいかない。
やっぱり、剣のセンスが半端無いなコイツ……！
……っていうか、なんでいきなりガチバトルになってんだ！？
――ガギギンッ！！
「何が、そんなに気に食わなかったんだよ！？」
「知るか！　とにかく、ムカついたからブッ殺す！」
め……目茶苦茶だ、こいつの思考回路！
「ミドリムシの方がまだ思慮深いわ！この単細胞！」
「い……言ったなあああぁぁ！？」
……実は気にしてたのか？
「言ったから何だバーカバーカ！」
半ばヤケになって、幼稚な罵声を浴びせる。
「生皮剥いでやるこの脳筋！」
「やってみろバーカ！　……ごめん嘘ですやっぱりやめてぇぇぇぇ！」

くそ……せめて、インパクトが使えれば……！
使えないことも無いだろうが、対人制圧用の威力調節版は、まだこの環境下では使いこなせない。
大威力では、はやてに重傷を負わせかねないし……

（――そうだ！）
確か、恭也の奴が前に……！
「……！」
思い出せ……あの時の、恭也の動きを！
「らあぁぁぁっ！」
「フンッ！」
――ごりっ……！
肉をえぐる、不快な感触と痛み。
だけど……
「つかまえ……たっ！」
「！？」
密着している今なら……使えるはずだ。
足腰で地面を捉え……捻りを加えて……接触面に、伝達！
零距離で……！

「破ァッ！」

――パァンッ……！

「ぐっ……！？」
この技の利点は……一切の魔力を必要としないこと。
つまり、初見の魔法戦では必ず決まる。
たしか、『徹』……とかいう技だ。

「！」

剣を握る手から、僅かに力が抜けた。
「おおっ！」
腕に食い込んだままの剣を、掠め取る！
「あっ……！？」
意識が逸れたところで……
「寝てろ！」
首筋に、『徹』を叩き込む！

「かはっ……！」

どうっ……と気絶し、倒れ込むはやて。
「……あぶねー奴」
付き合い始めて一週間。そろそろ、地が見えてきたってことか。
「……はぁ」
うまくやっていけるかどうか、激しく不安だ。

第六十八話（後書き）

夏も終わりですねえ、、、

第六十九話（前書き）

年上の従兄弟が結婚しました。

リア充爆発しろ。

第六十九話

……夢を見ている。
起きた時には忘れているかもしれないけど、今、『これは夢だ』と自覚できる、いわゆる明晰夢。

見下ろしているのは、閑静……というか、民家や施設が少ない、寒々しい路地だった。
舗装もおざなりなその路地を、二人の人間が歩いていた。
『……』
一人は、重い疲労に表情を塗り潰された女性。
まだ３０代にも見えるが、白髪が多く、肌に張りが無い。
『……』
もう一人は、その女性に手を引かれる、小学校低学年くらいの男の子だった。

……あ！

思い出した！
この子、前にも夢で見た、あの子だ！
確か、前は病院のベッドで呻いていたはず。
今、こうして歩いているということは、無事に退院したんだろうか。
けど、妙に重苦しい空気を纏っている。
母親の方は、息子と手を繋ぐ……というより、重い荷物を牽引しているような、
義務感だけのような感じだ。
……まぁ、前の『夢』でも、かなりヒステリックな感じだったし、もしかしたら、もともと大して子供に愛情を持っていないのかも。

先に沈黙を破ったのは、男の子だった。
『……お母さん、どこに行くの？』
不安と共に、母親に聞く。
『……あなたが知る必要は無いわ』
投げやりで、ぶっきらぼうで……面倒臭そうな声。
とても、母親が息子に使う声じゃない。
『う、うん……ごめんなさい、お母さん』
可哀相に、しょげてしまった。
……子供を何だと思ってやがるこのババァ。
夢じゃなかったらブッ殺してるぞ。
……でも、夢だから手出しはできない。
こうして、親子を見続けるしかできない。
くそ……歯痒いな。

そして、妙に高く、不自然に隙間が無い、灰色の塀が現れた。
……そして、無言で塀の横を歩くこと何分か。親子は、大きな鉄扉の前で、足を止めた。
……ただの鉄扉。錆びているわけでも、まがまがしく尖っているわけでもない。
なのに、何でだろう。
その鉄扉が、魔窟への門に感じられるのは。

母親は躊躇せず、扉の横のインターホン
『……××です』

……？
不自然なノイズが走って、名前の箇所だけが聞き取れなかった。

――カシャカシャカシャ……

鉄扉は、電動式のスライドドアだった。
その向こうから、仕立ての良いスーツを着た壮年の男性が歩いてきて、親子を出迎えた。
『やぁ、これはこれは……お待ちしておりました』
にこやかな笑顔だけど……これは、欲を覆う仮面だ。
パパの財産を狙ってきた、自称『親戚』のクズどもと同じ、醜い顔。
『……』
何かに怯え、母親の袖を引く男の子。
だけど母親は、顔をしかめて、その手を振り払い……告げた。
『あなたは、今日からここで暮らすの』
『……！？』
男の子が、驚愕に目を見開いた。
『だから、ここでお別れよ』
『や、やだよ……！なんで……！』
『……もう、疲れたのよ』
対して母親は、何の感慨も抱いた様子も無く、踵を返した。
『お、お母さ……！？』
ぐいっ……と、男の子の腕を、胡散臭い男が掴んだ。
『やぁ、初めまして。わたしは、ここの園長だ。これからは、ここを自分の家と思ってくれ』
言葉こそ柔らかいが、とても子供の手を引く力加減じゃない。
何より、さっきのやり取りを見ながら、笑顔がピクリともしていない。
ずりずりと、門に引きずられていく。
『お母さん……』
呟く一言。
助けを求めるように、手を伸ばし……

『……っ』
……なぜかその手を握り締め、下ろしてしまった。
『さぁ、行こうか！』
園長を名乗る男に手を引かれ……母親は、一度も振り返らず、去って行った。
『……』
全てを……自分が、母親に捨てられたことを悟ったのだろう。
子供っぽかった顔から、一切の表情が欠落した。

――……

そこで、いきなり場面が変わった。
身体の感覚が無いことだけは、変わらないけど……

場所は、窓が少ない白い大部屋だった。
『……ふん』
園長は、先ほどまでの笑顔はどこへやら。
本性が浮き出たような歪んだ表情で、男の子を突き飛ばした。
『……』
男の子は、されるがまま。
人形のように床に転がり……思い出したかのように、のろのろと起き上がった。
『鈍臭ぇなぁ。……おい、てめぇらの新しいオトモダチだ。仲良くしてやれ……しっかりと、な』
そして、園長が出て行くや否や……

『へへへへへ……』
この中では、一番体格の良い、年長のガキがのしのしと寄ってきた。
多分、腕力に物を言わせ、他の子の食事を横取りしているんだろ

う。

こいつだけが、繕った跡が無い綺麗な服を着ているのも、多分……

『おい新入り。持ってるモンよこせ』

この服も、奪い取ったのだろう。

『……無いよ』

少年には、手荷物など何も無かった。

『あ？使えねーな、このチビ！』

どんっ、と乱暴に胸を押され、べしゃっと尻餅をつく。

――くすくす……

昏く、陰鬱な笑いが耳朶を打つ。

……こんな環境にいれば、性根が腐っても仕方ないか。

『ああ、そっか』

白々しく、嫌味ったらしく、事実を突き付ける。

『お前も、親に見捨てられたんだっけな！

クソみたいな、ゴミ親にさぁ！』

取り巻きが、室内の傍観者が、げらげらと笑った。

こうして、新入りを徹底的にいびり倒し服従させるのが常套手段。

この子も、たやすく屈する……筈だった。

『……違う』

ごぅ……と、虚無だった男の子の瞳に、活力が漲った。

『あ？』

予想と違う反応に、ガキ共がぽかんとする。

『お父さんと、お母さんは……ゴミなんかじゃない！』

思わぬ反抗に、顔がヤカンのように真っ赤になっていく。

『て……めぇ！』

『……！』

男の子に、デブを筆頭にガキ連中が群がっていく。
リンチされてしまうんだろう。
せめて、一発はくれてやれ……と、祈った矢先だった。

――ゴギャッ……！

……と、鈍い音が鳴った。
――ビタンッ！
『ぉグッ……！』
デブの巨体が、轢き殺されたカエルのように、壁にへばり付いた。
ずるぅ……っと、血の帯を引いて崩れ落ちるデブ。
『ひゅー……』
その顔は白目を剥き……顎が、グロく割れていた。

……ど、どんな腕力よ？
『……お母さんは、悪くない……！』
ぎろっ……と、凄まじい眼光を放つ。
彼は、臆病な羊などでは無かった。
それを見誤ったガキ共に、退路は無い。
『ひっ……！』
リーダーを失った取り巻き達が、たじろぐ。
『ぼくが、悪いんだ。ぼくが、ぼくが……！』

――ギチギチギチ……！

ゴム紐を幾重にも結束させるような音が、固められた拳から聞こえる。

『……ぼくがぁあああああああ！！』

感情を爆発させ、獣のように叫んで……！

――グシャッ……！！

クソガキの顔面が弾けた……のではなく、その横、数センチ。
コンクリだか何だか知らないけど、壁。
その壁に、腕が突き刺さる音だった。
……何となく、察しがついた。
『こんな力、いらない』という、この前の言葉。
この子が捨てられたのって、多分……

『うがぁアアアアアッ！』

思考を遮る咆哮。

――ゴズン、ゴズン！！

がむしゃらに、力任せに拳を振り下ろす。
壁を、近くにあったテーブルを、本棚を……目につく物を、片っ端から打ち砕き、引き裂き……
破壊していく。
その度に、ガキ共の顔面が恐怖で引き攣っていくのは、どこか痛快だった。
『はァー……！はァー……！』
ひとしきり部屋を破壊し続け……ぎろっ、と部屋を睨み回す。

『また、お父さんと、お母さんを悪く言ってみろ……！』

彼を突き刺すのは、歓待でも、拒絶でもない。
……怪物を見るかのような、恐怖の視線だった。

『……今度は本気で、お前たちをぶん殴ってやる！』

……そうだ、それでいい。

思うようにならないのなら……その『力』を、思う存分、振るってしまえばいい。

そうすれば、居心地の良い居場所を、自分で作ることができる。

私からすれば、そうするのが当たり前。

なのに、何で……？

『……』

何で、そんなに泣き出しそうな顔をしているの……？

……そこで、私の意識は浮上した。

目を覚まして、まず目に飛び込んできたのは、

「あーもう、勘弁しろよお前……いきなりキレやがって……」

心配そうに覗き込む、吾妻秀人の顔だった。

「うっさい……いたた、このロリペド野郎、思いっきりやりやがって」

「なんかすげぇ不名誉なレッテル貼られた！」

「後でペナルティだからね」

「理不尽だ……」

今気付いたけど、延髄のところに、濡れタオルが置かれていた。

「……あんた、強いね」

剣を持っていた私を、まさか素手でノックアウトするなんて。

「それしか取り柄が無いし」

……確かに。

「あんた、インファイトしかできないもんね……」

射撃・砲撃魔法が役に立たないこの世界では、それが更に顕著になっていた。

「まぁ……けど、それに関しては、負ける気はしないかな。誰が相手でも」

事実、『鉄槌』とも、カートリッジが無ければ殆ど互角だった。

技術は荒いけど……天性の才能ってやつに違いない。

格闘……というよりは、殆ど喧嘩だけど。

「決めた。お前へのペナルティ」

「な、何だ……？」

及び腰になる秀人に、王の判決を言い渡す。

「私に、喧嘩のやり方、教えてよ」

……その才能、そっくりそのまま、奪ってやる。

秀人は、拍子抜けしたように笑みを浮かべた。

「あぁ、いいぜ。俺でよければ、いくらでも」

すっ、と、右手を差し出してきた。

「契約成立ね」

その手を、握り返す。

初めて握る秀人の手は、大きくて、ゴツゴツと硬くて……暖かくて。

――パパの手と、少し似ていた。

第六十九話（後書き）

ＶｉｖｉｄとＦＯＲＣＥ４巻は、通常版を待つことにしました。

第七十話（前書き）

最近、寝オチすることが多くなりました。
、、、疲れてるのかな？

第七十話

「せやぁっ！」

はやてが、俺の腹部めがけて突きを繰り出す。

強化魔法の恩恵で、そこらのボクサー崩れより、よっぽど鋭い。

「……」

……けど、馬鹿正直すぎる。

二の腕の側面で突きをいなし、掴み……アームロックを狙う。

「……！」

はやてが、関節技を察知して素早く身を引く。

二度も固められれば、流石に感づかれるか。

「はぁっ！」

関節技に気を配るあまり、過剰に腕が縮こまり……思いっきり、俺の制圧範囲に踏み込んでいる。

――ガンッ！！

足踏みをして、威嚇。

「っ！？　やああぁっ！」

すっかり騙されたはやては、ろくすっぽ狙いも定まっていない攻撃を繰り出してきた。

――すっ……

慌てず、一歩だけ擦り足で後ろに下がる。

「あっ……！？」

気付いた時にはもう遅い。

――ボフッ！

軽く掌低を当て、迎撃。
「ぎゃんっ……！！」
いかに強化されていようと、それは子供の体格。三十キロも無いような身体が、地面を転がる。
立ち上がろうとしたところに、

――ガヅンッ！！

鼻先数センチに、足を振り下ろした。
「勝負あり、だな」
実戦だったら、頭を地面とサンドイッチして砕いていた。
「くそったれ……」
はやては、忌ま忌ましそうに、負けを認めた。

あの日から、更に一週間。
俺達は、ひたすら組み手に励んでいた。

「……」
ぶすっ、と頬を膨らませ、いじけるはやて。
「まぁ、そう腐るな。なかなかセンスあるって、お前」
「あァ！？
強化魔法まで使って、結局負けた私に対する嫌味か！」
ルールとして、俺は一切の魔法、『徹』のような技術は使っていない。
それに加えて、俺からは決して打ち込まず、カウンター技だけで戦っている。

でも、それは……
「できるだけ体格のハンデを埋めるためだろ」

「ムカつく……！余裕こきやがって！」
それでも、はやてはいたくプライドを傷付けられたらしく、機嫌が直らない。

「……もう一回」
「え？　いやいや、少し休めよ。今日はもう動きっぱなし……」

「うるさい！もう一回勝負しろー！！」

顎を狙った右のアッパーカット。
「うわっ、と、と……！？」
それに左フック、右ストレートと続く。

重さは無いが、鋭く速い。
どうやら、関節を取られないように……瞬発力をメインに据えたらしい。
やっぱり、センスあるわこいつ。
体格のハンデを補うことを、ほぼ直感で覚えるなんて。

（……ワクワクするじゃないか）
思わず、笑みが浮かんでしまう。

「こっちからも行くぞ！」
そろそろ俺の方からも、打ち込んでみるか！
「お……おうよ！」
僅かに頬をひくつかせながらも、果敢に応じる。
「うおおおぉぉっ！！」
「たぁあああああっ！！」

――ガァンッ！！

俺の生身の掌打と、ありったけの魔法で強化されたはやての拳が、激しく衝突した！

……

その後も、何本か勝負し……とりあえずは負けずに済んだものの、かなり際どい場面もあった。

魔法は抜きとはいえ、さすがに年長者の意地がある。

「はー……いい練習になった。なぁ？」

タオルで汗を拭き取り、向こうを振り返る。

「さわやかに、笑ってんじゃ、ねえ……！」

……あちゃ。

相手が子供だってこと、忘れてた。

「水汲んでくるから、そのまま休んでろ」

『ギャオォォン……！！』

おー、今日も呑気に飛んでるわ。

あの巨体じゃ、流石にこの渓谷にまでは入って来られないだろう。

「……にしても、アレを倒す、ねぇ」

俺は別にどうでもいいんだけど、はやてはどうしてもアイツを倒したいらしい。

初めて会った日、竜から逃げ切った後に聞いた。

『お前、何でこの世界にいるんだ？』

と。

対する答えは、簡潔だった。

『修行』

……よくもまぁ、剣一本で生き残ってきたものだ。
というか、剣一本でこんな世界に弟子を放り出すとか……アイツの師匠どんだけ鬼だよ。
「よっこらせっ、と」
水を桶に汲み、ねぐらに戻る。

「くぅ……くぅ……」
……寝てるし。
しかも、剣を側に放ったまま。
「……」
……あの剣、前から気になってたんだけど……少しだけなら、いい、よな……？
恐る恐る、剣に手を伸ばす。
「……ふぁ？」
はやてが、もぞりと身体をよじった。
「……！」
マズい、起きたか……！？
「……くぅ、くぅ」
「……ふぅ」
どうやら、ただの寝相だったらしい。
――ガシャッ。
とうとう、剣に手が触れた。
持ち上げて、目の前に掲げる。
装飾の類は無く、あくまで、質実剛健な『武器』として造られているようだ。
柄の径は、やや細い。
これは、はやての手に合わせているのだろう。
すらっ……と、鞘から抜く。
無骨、という言葉がぴったりの、片刃の刀身が現れる。
「……？」

刀身の峰の部分に、何か……スライドするギミックがある。
「……ん」
内部を、軽くスキャンしてみた。
この内部構造……
「……似てる」
ヴィータのグラーフアイゼンに、そっくりだ。
じゃあ、これってもしかして……古代ベルカの、アームドデバイス？

「んん……ん……」
うめき声にハッとする。
はやてが、何かを捜し求めるように手元を探っていた。
うわ、危ね……！

慌てて、剣を鞘に納めて、はやてに握らせる。
「ん……」
抱きまくらのように剣を胸に抱き、再び寝息を立てはじめた。

にしても、ベルカのアームドデバイスか。
それを与えた、こいつの師匠って一体……

「まぁ、今度聞いてみるか」

今は、まず鍛えなきゃ。
「……」
リンカーコアを起動。
体内で精製した魔力を……手に、魔力刃として出力。
――パチッ、パチッ……！
当然のように、端から分解されていく。
魔力を補充していけば、維持は簡単だけど……それだけじゃ進歩

が無い。
――パシュン……
魔力刃を、魔力に還元する。

通常の魔法が分解されてしまうなら……通常より、密度を高めればいい。
まぁ、かねてから考えていた、『結合』の応用……その一つ、『圧縮』だ。
「……」
――ヴゥン……
手の上に魔力スフィアを展開し……それを、硬く、小さく、押し固めていく。
「……っ、くそ」

――パシュッ……

が、失敗した。
最初は球体だった魔力スフィアは、押し固める過程で歪に変形し……
泡が弾けるように、消えてしまった。
変に歪ませたら、どこかが決壊してしまうらしい。
それじゃ駄目だ。
もっと均等に、形状はそのままに、大きさだけを縮めるようにしないと。
……ふと、何かがひっかかった。

（……形状はそのまま、押し固める……？）

なんか、どっかで聞いたことのある現象だけど……何だったっけ？
「おっと、いかん。集中、集中」

練習とはいえ、使える魔力は限られている。
集中して練習しないと。

……でも本当、何て言うだったっけ？

……

秀人が行方知れずになって、もうじき一月になる。
八月の末日。
今日も茹だるような暑さの中、道場で、恭也を相手に木刀を振るっていた。
「……せいっ！」
恭也の、適度に手加減した一撃がなのはに迫る。
手加減しているとはいえ、達人レベルの一撃だ。
なのはも、最初のうちは避けられずに当てられるか、転がされていたが……
「……」
緊張するわけでも無く、半歩後退し、皮一枚、触れる寸前で回避する。
「！！」
驚愕する恭也。
その隙を見逃すなのはではなく……
「やぁっ！」
渾身の一撃を、恭也の胴に叩き込んだ。
――ガキンッ！！
それは、左の木刀で防御されてしまったが……

なのはは、恭也に初めて、『防御』という選択肢に追い込んだ。

「……今日はここまで」

「ありがとうございました！」

最近では、ぶっ倒れることも無くなり、持久力のアップを実感できる。

バケツと雑巾を用意し、道場を掃除する。

「……なぁ、なのは」

と、恭也がなのはを呼び止めた。

「ん、なぁに？」

「最後の……どうやって避けた？」

「え？　どうっ、て……普通に、見てから避けただけだよ」

「……見えたのか？」

訝しげに聞く恭也に、なのははサラッと、とんでもない事を言った。

「うん。目が慣れたから」

確かに、手加減はした。だがそれは、威力を弱めたというだけで……

速度は、微塵も衰えていないのだから。

「な、慣れ……？」

「うん。最初のうちは、軌跡が見えるくらいだったんだけど、もうすっかり。

……よし、お掃除終了！」

唖然と立ちすくむ恭也を尻目に、道具をさくさくと片付け、母屋に帰って行った。

「……」

――ヒュッ、ヒュッ！
何故か無言で、一人木刀を振る恭也。
（ま、負けられん……！）
兄の面子にかけて、末の妹に負けるわけにはいかないのだった。

そして、母屋で集まり、桃子らと談笑していた時だった。

――ピリリリッ。

なのはの携帯電話が、着信を告げた。
「ごめん、ちょっと待ってて」
席を立ち、廊下に出て相手を確かめる。
「……リンディさん？」
『突然ごめんなさいね、なのはさん』
「いえ……それで、ご用件は？」

『レイジングハートの修理が、完了したわ』

「本当ですか！？」
一ヶ月半。長かったけど……ようやく終わったんだ！
「すぐ行きます！」
『あ、それから、バルディッシュの修理も完了したからフェイトも連れてきてもらえる？』
「はい。……で、場所は？」
アースラでは無く、もっと本格的な設備が整っている場所にあるらしい。
『地球支部……なんだけど、なのはさんは行ったこと無いわよね？』
「はい」
『それじゃあ、案内役をよこすわ』
「エイミィですか？」

『いえ……あの子は今、秀人くんの捜索に加わってるから……』
「あぁ……」
そういえば、と思い出す。
「進展は？」
『ごめんなさい、まだ……』
「そうですか……あぁ、失礼。
で、私はアースラに行けばいいんですか？」
『えぇ。転送ポートは……』
「家の中庭に開いて下さい。フェイトも連れて、すぐ行きます」
ぱたん、と携帯電話を閉じ、リビングに戻る。
「ごめん母さん。急用だから、フェイトも一緒に出かける」
「あら……そうなの？ケーキ、出来上がる所だったんだけど」
「ごめん、また今度……フェイト、行くよ」
「まって、なのは！ボクはケーキたべてから……」
「駄目。ほら、行くよ！」
「うわーん！ももこのケーキー！」

「安心しろ、フェイト」

「ヴィータ……もしかして、とっておいてくれるの？」
「あぁ」
ヴィータは、優しく笑い……

「お前の分も、アタシが食べてやる」

「このやろー！！」
「はいはい、もう行くからね」
「ケーキ！ケーキー！」
じたばたもがくフェイトの首根っこを掴み、中庭まで引きずって行った。

アースラまで来れば、流石に諦めがついたらしい。
「もう……きゅうようってなんだよ？」
私に手を引かれながら、ぶつくさと言っている。
「レイジングハートとバルディッシュ、直ったって」
「まじでっ！？」
「女の子が『まじ』とか言わないの。
……そう。だから、呼び出されたんだよ」
「ひゃっほー！バルディッシュに会えるー！」
喜色満面で、私の手を振り回す。

……で、案内役って誰だろう。
「あ……あの……」
と、オドオドした声の女性局員が、話し掛けてきた。
背は、姉さんと同じくらいかな？
……思い出すのに時間が掛かったけど、思い出した。
「あなたが案内役？」
「は、はい……！わたくし、フィアット二曹が、拝命いたしました……！」
この人、エイミィの代役でオペレーターやってた人だ。
「……それでは、ご案内致します……！」

……それにしても、何でこんなに怯えているんだろう。
「……ねぇ、フィアット」
本人に聞いてみよう……と思ったのだけど。

「ひぃっ！？」

あ、ムカつく。

「フェイト、ちょっと待っててくれる？」
「？　うん、いいよー」
さてと。丁度、そこに人気の無い談話室が……

「フィアット、お話があります。こちらに来て下さい」
「えっ、えっ……？あの、案内……？」
「すぐ済みます。来なさい」
「ひいぃぃぃ……！」
ずりずりと……って、今日の私、引きずってばっかり。

「はい。甘くしておいたよ」
使い捨てのコップにコーヒーを注ぎミルク砂糖を入れて、手渡す。
「あ、ありがとう、です……」
びくびく、おどおどして……嫌になっちゃう。
「ねぇ……フィアット」
真横に座り、物理的に距離を縮める。
逃げようとしたフィアットの肩をガッチリと握り、逃亡を阻止。
もう、お話くらいさせてよ。
「ひぃ……なんで、ありましょうか……」
「私、あなたに何かしたっけ？」
正直、本当に覚えが無い。
フィアットは、がばっと面を上げ、涙目で叫んだ。
「け、蹴飛ばしたじゃないですかぁ！」
「え、えぇ……？」
したっけ、そんなこと？
「わ、わたしの椅子、がぁんっ、て、がぁんっ、てぇ！
そのあと、胸倉掴んで脅したじゃないですかぁ！」
うん。嘘じゃなさそうだ。

……あ。アレか、もしかして。

『通信繋いで！』
『は、はぁ……』
『早くしろォッ！』
『は、はいイィィィ！』

トチ狂ったクロノに怒った時の、アレか。
「いやぁ、ほら……状況が状況だったし？」
「ひどいですよぅ！」
「……ってなわけで、誤解は解けたのでした」
「勝手に纏めないで下さいぃ！そんなんだから、あちこちで……ハッ！？」
ん……？
「あちこちで……何だって？」
「あわわわわ……！」
「逃げるなッ！言えッ！」
「ひぁあああ！言えないですぅぅぅ！」
フィアットをソファに組み敷き、尋問していたら……

「なーのはー。まってるのあきちゃった……ん？」

……冷静に、考えてみた。
今の私は、か細い女性局員を、人気の無い談話室に拉致し、ソファに組み敷いている。
下手をすれば、性犯罪者そのものの姿である。
「？なにしてるのー？」

でも良かった。
フェイトが無知で……

「おい、駄目じゃないか。休憩時間以外、談話室は入室禁止になって……」

が、話し声を聞いてきたクルーが、手に持っていたファイルを、ばさっと床に落とした。

「……二曹を、手籠めに……！？」

ちがーうー！！？

「なん……だと？」

「イヤッハー！録画だあぁぁぁ！」

「『背徳の愛！美人局員と少女！』タイトルは、これで決まりね！」

「……あぁ、うん」

――しゅらぁん……

二刀を、鞘から引き抜いて……

「いい加減にしろおぉぉぉ！」

……結局、誤解を解くのに一時間も架かってしまった。

……なぁにやってんだろ、私。

第七十一話（前書き）

来週日曜日、、、楽しいはずの三連休。その日曜日が、仕事で、、、
（泣）
ツーリング行きたかった、、、

第七十一話

アースラの連中は、しっかりシメておいた。

「す……すみませんでした」

へこへこと、妙に腰の低い態度で、フィアットが私達を先導する。

「っていうかさぁ、」

頭の後ろで手を組み、ぷらぷらと気楽に歩くフェイトが、口を開いた。

「なんでそんなに、なのはがこわいの？」

一瞬、きょとんとしたフィアットは、あたふたと弁明を始めた。

「え、えぇと……やはり、苦手意識と言いますか……」

「うん。でも、それだけじゃないよね？」

フェイトって、基本的にはお馬鹿さんだけど……たまに、妙に鋭いんだよね。

「そうなの、フィアット？」

「ううぅ……は、はいぃ……」

……さて、どういう話だ？

「噂に、なっているんです。吾妻秀人さん、高町なのはさん……あなた達、お二人は……」

「……噂？」

口ぶりからすると、あまりいい噂じゃないんだろうな。

「つまり、その噂を聞いて、私のこと怖がってたわけ？」

「は、はい」

なるほど。

下手に戦闘中の私を知っていたことが、噂の裏付けになってしまったわけか。
「それに、その腰の……」
ん？腰の……って。
「刀のこと？」
かんかん、と鞘を叩く。
「ひぃ……！」
びくっ、となって後退った。
「何よ……別に抜いてないでしょ」
「なのはー……かたなもちあるいてるひとって、たしかにかなりこわいよー」
……そう、なのかな？
「別に、必要なとき以外は使わないのに……」
フィアットが挙手し、聞いてきた。
「必要な時、とは……？」
うーん、そうだなぁ……
「まず、敵に襲われたとき」
当然だよね？
二人は、うんうん、と頷く。
それから……

「悪い子にお仕置きする時、とか」

当然だよね？

「いやいやいや、ねーよ！」
「思いっきり悪用じゃないですかぁ！」
え、ええぇ……？何で総ツッコミ喰らうの……？

「やっぱり、あの噂は本当だったんだ……！」

じりじりと距離を取り、逃げの体勢に入る。
「だから、噂って何なのよ!?」
「きゃあぁぁぁ!!」
あ、逃げた!逃がすかぁ!
――じゃきっ!
鞘から二刀を抜いて……!
「ちょ、なのは!?」
「待てえぇぇ!!」
思いっきり、ブン投げる!

――ガゴンッ、ガスンッ!!

投擲された二刀は、フィアットの制服の、袖と裾を壁にガッチリと縫い止めた。
「ひいぃ……!?おかあさぁん……!!」
「さぁ……洗いざらい、吐いてもらおうか?」
そんでもって、噂とやらを広めた元凶を突き止めて……!

「……何してんの?」

と、平坦ながら少し不機嫌な声が、行進を阻んだ。
振り返ると、いつ見ても変わらない白衣の姿。
「あ、まりー」
「マリーさん?」
引きこもりに見えて、意外にもアグレッシブで行動力溢れるこの人のことだ。
多分、痺れを切らして迎えに来たんだろう。
「……遅い」
「す、すみません」

「見せびらかしたかったのに……」

「……」

「……」

……反応に困るような台詞は、言わないで欲しい。

「……そ、それじゃあ、行きましょうか？」

「うんうん！バルディッシュにも、はやくあいたいし！」

壁に突き刺さっている回天桜花を抜き、かちん、と鞘に納める。

「ああぁ、おろしたての制服が……！」

「あー……」

フィアットの制服に、穴が空いていた。

「おかあさんに怒られる……」

ずーん、と落ち込んでしまった。

……いやー、ごめんごめん。

「貸して。繕って返すから」

「え、いや、あの……」

有無を言わさず上着を剥ぎ取った。

「じゃ、案内ありがと。制服はクロノにでも渡しておくね」

「じゃーねー」

手を振りフィアットと別れ、すたすた歩きだしたマリーの後を追った。

直後、後ろがにわかに騒がしくなる。

「フィアット貴様、何だその服装は！！服務規定を忘れたか！」

「ひいぃ！違うんです三佐どの！！これには訳が……」

聞かなかったことにしよう。

……ドンマイ！

さて、直に対面するのは実に久しぶりだ。
「元気にしてるかな？」
多分、秀人さんが行方不明になったことも、知ってるだろうけど……
「あんまり」
「……そっか。やっぱり、そうだよね」
レイジングハート、落ち込んでるだろうなぁ。
「違う……会えば分かる」
「……？」
ロック解除されたドアを開け、ラボに入る。
すぐ目の前に、円柱状の容器に入った、レイジングハートが……
『……しくしくしく』
って、レイジングハートおぉぉぉ！？
「ちょ、何で泣いてるの！？」
そんなに寂しかったの！？
『マスターまで、浮気を……！』
「浮気……」
って、まさか、回天桜花のこと！？
「ち、ちがうよ！？これは……！」
『私というものがありながら……！』
「違うんだってばー！！」
……一度くらいは、見舞いに来るべきだったかもしれない。
『……そういうことでしたら、納得です』
フェイトはバルディッシュを抱えて、そそくさと退散した。

「……ところで、レイジングハート？」
『何でしょうか？』
……最初この部屋に入って来た時、机の上にはデバイスが入った容器があった。
一つ目はレイジングハート。二つ目はバルディッシュ。そして……
「……この、砕けた『三つ目』の容器は……？」
もう一つ、デバイスが入っていたんだろうけど。
『……』
「あぁ、それか」
むっつりと黙り込むレイジングハートとは逆に、マリーさんはあっさりした様子で、言った。
「秀人のデバイス……が、入っていた」
……『いた』？
「ごめん、よく意味が分からないんだけど」
マリーは、とても軽く、とんでもないことを言い放った。
「逃げちゃった」
「え？」
え？
えええええぇぇぇえええええぇぇぇえええええぇぇぇえええええぇぇぇえええええ！？

……

「……」

手元に魔力スフィアを浮かせ、何やら瞑想する秀人。

――ゴキッ……

その魔力スフィアが、ごく僅かに収縮する。

「……！」

――ゴキキッ……！

また更に収縮し……内部に、魔力を凝縮していく。

「く、うぅぅ……！」

滝のような汗を流し、分解が追いつかないよう、全霊で圧力を更に高める。

「……っ！」

そして、手中の結界が限界を迎える寸前……

――……ギンッ！！

一際強い光と共に、分解がぴたりと止まった。

「……よし」

残ったのは……力強い輝きを放つ魔力スフィア。

恐る恐る、圧力を弱める。

……だが、分解は始まらなかった。

「いよっしゃあああぁぁ！」

喜びのままに、両手を上げて歓声を上げる。

「うっさい、なぁ、もう……！」

皮で作ったお手製のサンドバッグをリズミカルに叩きながら、はやてが顔をしかめた。

「成功はいいけど……実戦で、呑気にそうしていられる時間なんて無いでしょ」
「今はまだ……な。けど、感覚は掴んだから」
あとは反復あるのみ……と、また魔力を練りはじめる。
「ふん……終わったら、組み手するからね」
「いや、今日は反復に使うから……」
「……チッ」
汚く舌打ちをして、またサンドバッグを殴打する。
だが、やはり地味な基礎トレーニングは気が乗らないのか、一時間もしないうちに、秀人にちょっかいをかけはじめた。
「ねぇ、組み手……」
「んー……」
「組み手しようよー！」
「明日なー……」
集中している秀人は、つれない態度。
むかむかむか、いらいらいら……と、堪え性の無い地の部分が首をもたげてきた。
「何だよ、バーカ！」
手元に転がっていた、拳大の石ころを掴み、秀人に向けて投擲した。
「ちょ、おま……！」
慌てたせいで、密度を保つための結界に穴が空き……
その中にスポンッ、と、見事にホールインワンを決めた。

……とてつもない圧力の中に、唐突に異物を放り込む。
それが、どのような結果を引き起こすのか、はやてにも、秀人にも、分かっていなかった。

石ころは、瞬時に圧縮され赤熱。内部の熱エネルギーは逃げ場にたどり着くことも無く、自身の分子構造を破壊し、気化。結果……

――超高温の『プラズマ』が、発生した。

――……ドゴオオォォォオオオオォォォォォォォォォォォン！！

空全体を揺るがすような爆音を轟かせ、秀人とはやてが身を潜める渓谷が……崩落した。

『……グル』
その爆音は、岩山の頂で羽根を休める大火竜の耳にも、当然のように届き……

『ガルァアアアア！！』

巨大な翼が空気を叩き……巨体は、渓谷の跡地へと猛スピードで向かって行った。

第七十一話（後書き）

テーマは、『霊知の太陽信仰Ｎｕｃｌｅａｒ　Ｆｕｓｉｏｎ』で。

縮退は、あんまり理屈が分からなかったｏｒｔ

これだから文系脳は、、、

第七十二話（前書き）

ペースが遅くて申し訳ありません。

第七十二話

「う、ううぅ……？」

なんとか、防御が間に合った。

はやては、土砂の中からのそのそと立ち上がり、頭にこびりついた砂を払う。

「……くっ」

その最中、不自然に体勢を崩し、膝を突いた。

熱波や爆風は防げたとはいえ、洞窟内という狭所で増幅された爆音は、はやての鼓膜を破壊し、

三半器官に甚大なダメージを与えていた。

「……」

ふらふらと覚束ない足取りで、周囲を歩く。

「や、べぇ……！」

今まで、はやて達の身を隠していた渓谷は、原型を留めない程に崩れてしまっていた。

「……私達のいた洞窟が、渓谷全体のウィークポイントだった……ってこと？

ったく、どんだけツイてないのよ……！」

私『達』。そう、自分のほかにもう一人……

「秀人……！？」

自分は防げたが……爆心地にいた秀人は、どうなったのだろうか。

「……うげッ！？」

見覚えのあるスニーカーが、土砂から突き出していた。

「……」

ためしに、軽く引っ張ってみる。

ぐい、ぐい……と、確かに手応えが返ってきた。

……どうやら、足だけがもげて転がっているわけでは無さそうだ。
両手でその足を掴み……
「よっこい……しょっ！！」

――ズボッ！！

……と、どこかの童話のカブの如く、秀人を引っこ抜いた。
「……」
秀人は、辛うじて息をしていたが……
「……黒焼き？」
と、思わずボケてしまうほど、見事な黒焦げだった。
「うわぁ……生きてるかな、コレ。とにかく、治さないと……って、あれ？」
そこで、はやては首を傾げた。

……先程まで、炭化したような真っ黒だった秀人の皮膚が、パリパリと剥がれ落ちていく。
「……！？」
その下から見えたのは、血色の良い、やや濃い肌色。
……新しい、皮膚だった。
「……治癒魔法？でも、意識も無いのに……」

更に、異常なことが起こった。
「……！！」
はやての耳が、『風が吹く音』を、確かに捉えた。
つい先刻、破れたばかりの鼓膜に。
「治っ……た？　嘘……？」
信じられない、と。
だが、確かな事実として、傷は治癒している。
「……どういうこと？」

治ったにせよ、理由も無いのでは気味が悪いだけだ。

「……死ぬかと思った……死なないけど」

秀人が、目を覚ました。

やはりというか、何と言うか……傷は、既に治癒していた。

意識無意識の関係無い、秀人の特異体質。

「今のは、おまえの力？」

「……あー、いや、単なる、治癒魔法」

「ホラ吹いてんじゃねぇ」

「……いや、まじで」

ほぼ知られた……にも関わらず、頑なに体質のタブーを隠す。

いつもなら、それで良かった。

どうせ、それ以外では説明が着かないのだから。

だが……次にはやてが口走った言葉に、すべての動きを止めた。

「大体、もしそうだとして……何で、私の傷まで治る」

「……なに？」

……険しい顔。

はやては、初めて見る秀人の顔に動揺した。

「え……」

その、豹変とも言える如実な変化に、腰が引けてしまった。

だが秀人は、はやての両肩を握り、ぐいっと身体を近付ける。

「ち、近いっての……！」

「どういうことだ？

お前の傷が、治ったって……お前の方こそ、何か魔法でも使ったんじゃないのか？」

「いや……気付いたら、治ってたけど……」

「……」
口に手を当て、ふらふらと後ずさる。
「嘘だ」
「ありえない」
「そんな馬鹿な」
……口からこぼれるのは全て、事実からの逃避であり、同時に……
その真実を肯定する言葉だった。
「おい……何だか知らないけど、とにかく落ち着けっての」
はやてもまた、混乱していた。
何が起ころうと、妙に肝が据わっている秀人がこんなに取り乱すなど……
この一ヶ月の間、殆ど無かったのだから。

『ギャオォォオオン！！』

「「！！」」

その、原始的な恐怖を呼び起こす咆哮に、目を覚ました。
「チッ……！話は後で、ちゃんと聞くからな！」
「……わかったよ。で、どうする、また安全地帯探して逃げるか？」
「……」
一瞬の思考。
――彼我の戦力差。
――ＡＭＦ環境下での経験値。

――地対空戦闘。

様々な要素を加味し、判断した結果。

「……叩く！」

いよいよ、この世界における最終目標へ、手を出すことに決めた。

地平線の向こう、小さな黒点だったソレは、あっという間に、全体像を見せた。

「うわ……やっぱデカいな。　で……勝てそうか？」

不敵な笑みで、はやてを挑発する。

「勝つ！」

勝てる、では無く、勝つ。

それがはやての決意であり、判断だった。

「はやてが指示を出せ。俺は、それに従う」

秀人は、はやての作戦に乗ることにしたようだ。

『ゴフゥ……！』

大火竜の口元から、口内に蓄えたブレスが僅かに溢れる。

「ブレスを回避！その後、接近戦を仕掛ける！

「了解！」

はやては魔剣を構え、秀人は魔力スフィアを出現させ、圧縮を開始する。

そして……

『ゴハァアアァァァアアッ！』

地上目掛けて、ブレスが発射された！

――キュゴォオオオン！

ブレスは、辺りに目茶苦茶に破壊を撒き散らし、粉塵を巻き上げる。

――ボッ！！

粉塵の中から二つ、飛び出してくる影があった。

「「うぉりゃあああああっ！！」」

当然、はやてと、秀人である。

瓦礫を足場に、大火竜の前後から、攻撃を仕掛ける。

『ガァッ！』

大火竜が羽ばたく。

――ビュオォオッ！！

それによって、突風が発生。

「うわっ！？」

「きゃあっ！」

煽られ、再び地面へと逆戻りしてしまった。

「何だよアレ！近付けないじゃん！」

「私に聞くな！こんなの、想定外よ！」

「……勝つって言ったじゃねぇかこのヘッポコ指揮官！」

「へ、へっぽこ言うなぁ！」

『ゴァアアアァァァ！』

そしてまた、ブレスが発射される。

――ドゴォオン！！

「あークソ！ブレスを避けて近付くにしても、あの風が……」

「少しの間だけでも、あいつを地上に落とせれば……！おりゃあっ！」

「あっ、馬鹿！」

再びジャンプし、大火竜に剣を突き立てようとする。

が、当然、そんな考え無しの攻撃が通じるはずもなく……？

『ガァッ！』

――バヒュウゥゥゥッ！

「きゃあぁっ！」

やはり、突風に飛ばされた。

錐揉み回転してしまい、体勢を立て直すことが困難になる。

「っ、とォ！」

秀人もまた、空中に身を躍らせ、はやてをキャッチした。

――ゴォオオオ！！

隙を見逃さず、猛烈な火炎を吐き出す大火竜。

不自由な空中で、小規模なインパクトで射線上から逃れ、我が身を盾に、はやてを庇う。

「……くそっ！」

だが、やはり小規模。

待避は十分でなく……秀人の背中を、火炎が蹂躙した。

「うがぁあああぁっ！」

神経を焼く激痛に悶え、地面に墜落する。

「うぐ……！」
流石に、延髄にまでダメージが及ぶとなると、回復には時間が掛かる。
「おい、しっかりしろ！」
はやてがその腕から抜け出し、秀人の肩を支える。
体格差もあって、引きずるような形だ。
『ガアアァッ！！』
攻撃が来ないと分かった途端、大火竜は急降下。
地表を、大火竜の爪がえぐり取る。
「……っ！」
躊躇い無く、瓦礫の山を転げ降りる。
「いッ、てぇ……！」
そのまま、秀人を背負って駆け出す。
「おい、俺は、いいから……！」
揺られながら回復しつつ、秀人が言った。
ほんの数十秒。
回復を待つ間、大火竜を引き付けておけばいい。
「俺を囮にして、アイツを攻撃……！」
……なのは辺りが聞けば、大激怒するような台詞。
「ふっざけんなッ！！」
当然、はやても怒った。
「おまえは、アイツに勝つための、私の手駒だ！
まだ、使い捨てるタイミングじゃないんだよ！
そういう台詞は、手足と目ン玉と歯ァ全部無くなってから言いやがれ！！」

なかなか、外道な理由だった。
「……鬼畜め」
苦笑いし、
「……んじゃあ、悪いけどこのまま逃げ続けろ。もう少し……すりゃ……完、治……」
かくん、と秀人が脱力する。

（やべ、死んだ!?）

……死んでない。
「くぅ……くぅ……」
秀人は回復するため、意識をシャットダウン。
戦闘中に睡眠を取るという、荒業を敢行した。
「えぇい、首に息が当たってこそばゆい……！」
身体強化魔法を使っているとはいえ、男性一人というのは重い。
「重いのよ、この野郎……！ハラワタぶちまけて、軽量化してやろうか、、！」
憎まれ口を叩きながらも、律儀に秀人を背負い直す。

――ドゴォン！ドゴォン！
「ひィッ！！」
ブレスを避け、跳ぶ。
「きゃあぁっ！」
爪を避け、転がる。
「はひー、はひー……！！」
逃げても逃げても、上空を飛ぶ大火竜との距離は開かない。
「不公平よ！あいつばっか、重力を無視しやがって！！　万有引力どこ行った!?」

「……おい、今なんつった?」

「あ、生きてたんだ」
……
「いま、不公平って……その後、」
「あいつばっか重力を無視して、万有引力　……」
「それだ！」
がばっ、と、はやての背から飛び降りる。
「え……おい……ウェルダン状態だった背中はどうした？」
「寝たから治った！」
「……ＲＰＧじゃねぇんだぞ」
「まぁいいから。とにかく……！」
そして、はやては秀人の案を聞き、検討し、時に補足し……
「……よし、それで行くわよ！！」
作戦が、決定した。
はやてと秀人は、一定の距離を、つかず離れず駆け出す。
ブレスでは、どちらか片方しか攻撃できない。
『グァアッ！！』
火炎のブレスを、自らの突風で拡散させ、広範囲へと撒き散らす。
やはりこの大火竜、相当な知能を持ち合わせている。
とはいえ、威力は弱まる。
秀人とはやては、バリアジャケットの防御力のみで、炎に耐え、
走りつづける。
『ゴアアァァァッ！』
同様の攻撃を、二度、三度と繰り返し、二人にダメージを蓄積さ
せていく。

だが、二人に焦りは見えない。
むしろ……勝利を確信した、笑みさえ浮かべている。
「……もう少し！」
「……あと少し！」

そして、何度目かの熱波。それに揺さぶられ……

――ゴガガガガガガガガガガン！！

崩れかけていた渓谷が、完全に崩壊した。
瓦礫は山になり……新たな、足場を作り出す。

だが、制空権という優位は崩れない。
大火竜は、上空を旋回し、粉塵が止むのを待つ。
晴れればまた、ブレスを上からぶつけるのみ。

『グァッ！？』

……と、唐突に、見えないワイヤーで引っ張られたように、大火竜の身体が、ガクンと空中でバランスを崩す。

「無駄だ……もう、浮かぶことはできねぇよ」
ふわり、と、秀人の身体が軽々と浮かぶ。
まるで、重力から解き放たれたように。

「この惑星の重力とお前の身体を、『結合』させてやったんだからなぁ！！」

……超高密度の魔力による、魔法の行使。
それは、単純な攻撃とも防御とも、補助とも違う……全く新しい

ジャンルを、開拓した。

――重力操作。

普遍的に存在する、ある種の『概念』を操る……まさに、『魔法』の力だった。。

『グォオオオ！』

悪あがき。

長い首を、今や自身を上空から見下す秀人に向け、最大威力のブレスを放とうとする。

――ボッ！

と、粉塵の向こうから、飛来するものが一つ。

「使用権限、一時譲渡！

……秀人、やれえええぇぇぇ！」

はやての号令と共に……秀人の手に、投擲された魔剣が握られる。

「おおおおおおぉぉっ！」

『グガァアアアアアッ！』

――ギュゴォオオッ！！

迫り来る、灼熱の炎。

秀人のリンカーコアは、大火竜を縛り付けるので手一杯。

持続時間は、残り一分も無いだろう。

残り一分で、大火竜にトドメを刺す。

秀人自身のキャパシティは、既に満杯。

――ならば、

「ロード、カートリッジ！！」

――ガキィンッッ！！

外部の魔力を、使うまで！

「だぁあああああああああああっ！」

一振りで、灼熱の炎を切り払う。

そして……魔剣に炎の残滓を残したまま、第二撃！

「はぁあああっ！！」

――斬ッ！！

秀人の一撃は、大火竜の両翼を、根本から切断した！

『グ……ギァアアア！』

いよいよ、増幅された重力のままに落下する大火竜。

墜落死させるには高度が足りない。

だから……

「はやて！今だあああああああっ！」

大火竜の背中から、飛び降りて退避する。

「！」

粉塵の中からはやてが突撃する。
バリアジャケットを残し、全ての魔力が、一点……右拳に、一局集中している！

「ブッ潰れろおぉぉぉぉぉ！」

――ドズゥンッ！！

落下速度をも破壊力として加算した……全身全霊の一撃が、大火竜の胴体を、真芯から捉えた！！

『グォ……ガァァ……』

立ち込めていた粉塵が晴れる。
その向こうに浮かぶシルエットは……
『ガァ……！』
大火竜……？
いや、違う。
――ズズゥ……ン……
大火竜は崩れ落ち、

「はぁ……」

右腕を振り抜き、残心のを取る……はやての姿があった。

秀人は、はやてに歩みより、右腕を高く上げる。
はやても、無言のまま右手を上げ……

――パァンッ！！

軽やかな、ハイタッチを交わした。

「いよっしゃあああぁぁ！！」

はやては、がばーっ！と両手を振り上げ、全身で喜びを表現する。

それを、端から秀人が見ていることに気が付いたはやては……

「な……何ニヤニヤしてんだよテメェ！」

げしっ、と、赤面したまま秀人に蹴りを入れた。

「いって！　……でも、よく頑張った」

「ふん。本当なら、私一人でやるべきだったんだろうけど……」

かしかしと、ごまかすように頭を掻き……

「ま、三割はおまえの手柄にしといてやるよ」

どこまでも不遜に、秀人に感謝した。

「厳しいなぁ……あ、そうだ。返しておく」

手に持ったままだった魔剣を返却する。

「そういやおまえ、何で、カートリッジのこと……」

（ギクッ）

――寝ている隙に、こっそりいじってました。

等と、言えるはずも無く……

「さ、さぁて、獲物、さっさとバラそうかなっ！？」

下手くそなごまかしを、始めた。

「……後で、じっくり聞かせてもらうからな」

今は、その体力が惜しい。

と、秀人とはやてが、大火竜に近付いた時だった。

……大火竜の身体が、淡く、黒色の光を発する。
これは……
「「……魔力光？」」
その魔力光は、大火竜の身体を包み込み、徐々に小さくなっていく。
そして光は……人型に収束し、収まった。
「……嘘」
はやては驚愕のあまり、感情をせき止められる。
「おい、どういうことだ……！？」
秀人も、困惑している。
何故なら。
その人型は、漆黒の頭髪に、目立つ猫耳、尻尾を持つ……
――はやての使い魔、リーゼだったのだから。

第七十二話（後書き）

次回から新展開です。

第七十三話（前書き）

ツーリングで行った相模湖が、えらく濁ってました。
台風って怖いですね。

近所では、駐車場に置いてあったホーネット２５０が横倒しになっていて、、、所有者の方、ご愁傷様です。

第七十三話

じわ……と、リーゼの下の岩場に、赤黒い液体が染み出す。
「……！　リーゼ！！」
はやてが、その身体を助け起こす。
「なんで……なんで……！リーゼ！」
言葉らしい言葉にならない。
その色は、見慣れたものだ。
だがそれが、近しい者が流すものとなると、意味合いが違ってくる。

「う……」
リーゼが、意識を取り戻す。
「あ、るじ……」
「！　リーゼ、気が付いたの！？」

リーゼは、こんな状態になって尚、冷静な言葉を紡いだ。
「主が、最後に使われたのは……古代ベルカ拳技、奥義……『シュヴァルツェ・ヴィルクング』、
……お、お見事な、一撃、でした……」
「そんなこと、聞いてない！なんで、リーゼが竜に……！」

「『修練の門』……結界魔法に、対象を閉じ込め……試練を与え成長を促す、古代ベルカの、禁呪です
……ゲホッ！」
びちゃっ、と、咳と共に血を吐き出す。
「発動対象は……魔力ラインが、繋がっている者に限り……己を、理性無き暴竜と化し、

最終試練とすることで、発動……」
それ故の、禁呪。
「おまえ、そんなこと一言も……！」
泣きそうな目で、リーゼを問い詰める。
「ご命令、でしたから……『修業に、一切の手心を加えるな』、と」
「……私の、せい？」
いいえ、と、リーゼは首を横に振る。
「あなたが、強くなられること……それが、私の望み、私の使命……」
「馬鹿……この大馬鹿！！」
「ご心配、なさらず……私の命が尽きれば、じきに、この世界から出られます……」
……大火竜として、その命を担保に維持してきた結界は……死を以て、解除される。
ＡＭＦの影響も、消えるだろう。
「……やだ、やだよ、そんなの……！」
「……」
とうとう、リーゼが意識を失った。
「はやて、代われ」
秀人もイマイチ理由は分からなかったが、とにかく……目の前のリーゼが死にかけている、
ということは、確かなようだった。
「治癒魔法、試したんだけど……うまくいかなくて……」
泣きベソをかき、ぐしぐしと目を擦る。
「どうしよう……リーゼが、死んじゃうよぉ……！」

秀人はリーゼを抱え、傷を確認する。
（背中に裂傷……それに、肋骨、内臓がいくつかやられてる）
背中は秀人の斬撃、内臓は、はやての拳による傷だろう。
出血は派手だが、背中の傷は大して深くない。

むしろ、問題は内臓の方だった。
「……まだ、使えなさそうだな」
圧縮魔力スフィアを使えば、使えなくも無いだろうが……ユーノには遠く及ばない。
「……よし、やるか」
「え……？　でも、おまえだって、魔力殆ど……」
「裏技」
……例の、リンカーコア結合。
あれを使えば……あるいは。
「……一時的に、俺の身体と、こいつの身体を、リンクさせてみる」
「え……でも、そんなこと」
「俺には、出来るんだよ」
いつもは、リンカーコアの結合のみだが、秀人には確証があった。

……先程の、はやての治癒。

あれはどう見ても、秀人のソレとしか思えない。
恐らく、『どこか』で……この世界で出会う前後、関係無しに……魔力のラインがリンクしてしまったのだろう。
それが、はやてにも小さいながら、自己修復をもたらした……
それが、秀人の見立てである。

魔力残量、一割以下。
失敗は許されない。
「……」
一割の魔力をかき集め、圧縮を開始。
失敗すれば、リーゼを救う手立ては無くなる。
「……」
はやては固唾を呑んで見守る。
リーゼの手を、しっかりと握りしめながら。

「……この人が、お前の師匠？」
秀人はもっと、こう……フンドシ一丁の、ガチムチな老人を想像していた。
まさか、ネコミミ尻尾が似合う、可憐な女性とは予想と違った。
「うん……」
ぐすっ、と、また鼻を啜りながら、頷いた。
「……可愛いでしょ」
「……あぁ、うん」
聞かなかったことにした。
とにかく、よほど大事な存在だということだけはわかった。

「……よし」
魔力残量が少ないことが幸した。
圧縮は滞り無く完了し、次の工程に移る。
――キィンッ！
魔法陣を展開。
そのまま、ラインをリーゼに伸ばす。
「接続、成功……！」
同時、秀人の中に、見聞きした覚えの無い術式が流れ込んで来る。
それは以前、ヴィータの魔力を解析した時のものと、酷似していた。

――古代ベルカの魔法。

中には、ミッド式の魔法もあったが、大部分はベルカのものだった。
（さて……ここからが、正念場か）
ここまでは、いつもと同じ。

いつもなら、魔力のラインに意識を向けるところを、今回は、対

象の肉体に。
だが……
「……う」
リンカーコアと肉体では、勝手が全く違っていた。
それ以上の接続は、遅々として進まない。
駄目なのか……秀人が思った、その時だった。

――――ドクン

……と、心臓の最奥が、脈動した。
「……今のは？」
接続を維持しながら、その音に耳を傾ける。
「……」

――――ドクン

その脈動の正体は……
「……俺の、リンカーコア？」
秀人の治癒能力を司る、大きな要素。
それが、秀人の意志を離れ、跳ね回っている。
「お、おわっ……何だ！？」
意識した瞬間、さらに激しく……

――まるで、自らを使えと……にぶい主に、訴えているかのように。

「抑え……らんねぇ！！」
一か八か。
「うぉおおおぉおおおおぉおおおおっ！！」

秀人はその衝動を……思うままに解放した。

――……ゴォオオオオッ！！

そしてソレは……まるで、殻を破る雛鳥のように……顕元した。

『――キュァアアアァァァアアアアッッ！！』

――蒼炎の不死鳥（フェニックス）。

「……！」

それを目にした瞬間、はやての脳裏に、『鉄槌』の最後が想起された。

――ジャキッ！

衝動的に切り掛かりそうになる寸前、なんとか意志の力でフルブレーキをかける。

まだ、リーゼに危害が及ぶとは決まっていない。

動向を、固唾を呑んで見守る。

「うおッ……！？　こ、コイツは……！！」

秀人は秀人で、驚いていた。

サイズこそ翼長２メートル程度と、鉄槌の騎士を滅した時より小さいが、

内に秘める力の『質』は、全く同一のものだった。

『フシュルルル……！』

不死鳥は、秀人の目の前に滞空する。

「えぇっと……？」
戸惑い、首を傾げていたら……
『ピギィッ！！』
――ゴスッ！
「痛ッたぁ！？」
嘴が、秀人の頭頂部を突っついた。
自分のリンカーコアにドツかれる……という、極めて意味不明の事態が起こっていた。
「何しやがる！」
怒る秀人だったが……
『ピギー！』
むしろ、怒っているのは不死鳥の方だった。
「あァ……？」
徐々にだが、何を言わんとしているのかが、伝わってきた。
「『とっとと目的を言え、ぼけなす』……？
って、誰がボケナスだ、この焼き鳥！」
『ピギー！？』
――ごすっ、がすがすがすっ！！
啄むような連続攻撃。
「痛ッ、痛ッたぁ！？
……分かった！分かったから止めろ！」
『フシュウゥ……！』
……

「あー……そいつの傷を治したいんだ。手伝ってもらえるか？」
『ピィッ！』
ばさっ、と、『任せろ』と言わんばかりに両翼を広げ……その鼻先を、リーゼに向けた。
――キィイイイ……！
すると、どうしたことだろう。
先程まで行き詰まっていた肉体への接続が、呆気ないほど完了してしまった。
そして、治癒が始まった。
「……」
無言になり手をかざし……
『ピュイィィ……』
不死鳥は、翼をリーゼに被せる。
……流石に、秀人ほどの速度ではないが、あれほどの重傷……いや、致命傷が、
確実に塞がりつつあった。
「……うん、大丈夫……助かるよ」
「……よ」
はやては、べしゃっ、と、膝が砕けたように座り込み……
「よかったぁ……！！」
安堵から、泣き笑いのような表情を浮かべた。
（なーんだ、この子……）
接続を続けつつ、心の中で呟く。
（ちゃんと、誰かのために泣けるんだ）

破綻者ではなかった。

その事実が、何故か無性に、嬉しかった。

……

「あぅ……？」

程なくして、リーゼが目を覚ました。

「リーゼ！！」

はやてが、その傍に駆け寄る。

「……はァー、疲れた」

どっかりと座り込む秀人。

『ピギー……』

全くだぜ……とでも言いそうな調子で、トコトコと秀人の所まで歩いていった。

「……お疲れ」

すっ、と手を出す。

その上に乗った不死鳥は、まるで雀のようなサイズにまで縮んでいた。

『ピィ……』

フッ……と、再び秀人の内に還元される。

「うーん……マジで、何なんだろう、コレ」

こんな土壇場でまさか、あの不死鳥を呼び出す術を、身につけられるとは思っていなかった。

「はぁ……」

が、秀人はどこか、憂鬱そうだった。

「……」

ふるふる、と頭を振り、思考を切り替える。

「……何故？」

「あいつが、助けてくれたんだよ」

「……」

くるっ、と秀人の方を向く。

「……あなたは？」

「吾妻秀人。通りすがりの、魔導師だ」

「……あぁ、そうでした。主の、協力者、ですね」

「手駒よ」

「……さて、それで、なんだが」

秀人のスルー能力も、向上したらしい。

「何よ」

「何でしょうか」

「……どうやって、ここから出る？」

「「　あ　」」

……この世界を覆っている、ＡＭＦ結界。

それは、リーゼの展開した『修練の門』によるものだ。

理性を失い竜と化したリーゼを打倒……殺害することで、結界を解除。

元の世界に、強制送還される。

……対象者が術者を越える力を得、術者を殺すか……対象者を、竜が食い殺すか。

そのどちらかしか、解除されない。

だが、今は……中途半端な状態で、『修練の門』が解けかけ、術

者が生存している。
　明らかな致命傷から、完全に回復することなど、想定されていなかったのだろう。
　秀人というジョーカーがいたからこそ、このような事態が引き起こされた。
「『修練の門』を越えられる程、強力な転移魔法は、持ち合わせていません……」
「……私も、攻撃魔法くらいしか知らない」
「……同じく」
　三人が三人、帰る手段を持ち合わせていなかった。

「……救助信号は？」
「転移のような、大きな力ならともかく……信号のような微弱なものは、遮断されてしまいます」
「……収束砲撃で、結界を破壊する……ってのは？」
「我々の全魔力、大気中の魔素、全てを収束しても、破壊には届きません」
　更に、魔力が希薄であることが追い撃ちだった。
「……どうするよ」
「……いっそ、この世界で暮らしますか？」
　食うに困ることはありませんし……と、しれっ、と言い放つ。
　冷静に見えるが、単にテンパッて思考停止しているだけのようだ。

「……秀人」

　と、それまで黙っていたはやてが、口を開いた。
「おまえ、洞窟が崩れた時のこと、覚えてる？」
「……ああ」
　覚えてるも何も、ほんの数時間前のことだ。
「あの時、どんな状況だった？」

「俺が、圧縮魔法の練習をしてて……」
「私がそこに、石を投げ込んで……」
こく、と秀人が頷く。
「圧縮……そして、爆発？」
リーゼが、何かに気付いたらしい。
「……」
「……」
顔を見合わせ……

「「核融合」」

……それが、先刻の大爆発の正体。
「あぁ、それだ！」
ぽん、と手を打つ秀人。

「……って、核融合！？」

ノリツッコミで、あたふたと慌てていた。
「知らないでやってたのかよ……」
はぁ……とため息。
「まぁとにかく、あのエネルギーに指向性を与えて、『砲撃魔法』に転化させちゃえば……」
「ふむ……破壊は、可能でしょうね」
着々と準備に向けた話し合いを続ける二人の横では、

「核融合かー……ははははは」
秀人が、現実逃避していた。
「ていっ！」

――ゴンッ！
「ギャッ！」
秀人の頭に、峰打ちをして現実に引き戻す。

「……でもさ、ただ押し潰すだけで、核融合なんて起きる？」
プレス工場なんて、毎日ビックバンが起きてるわ……と、極めてもっともな疑問を口にした。
「勿論、ただ潰せば良い、というわけではありません。
全面を均等に、一ミリのズレも無く……分子の逃げ場を、無くす必要があります。
……ですが、そんな真似、いかに魔導師であっても不可能です」

魔法とて、『可能』と『不可能』の境界は、しっかりと存在している。
だが、これ（核融合）は……
明らかに、その境界を越え、『不可能』の領域へ踏み込んでしまっている。

「「いやいやいや、でも実際……」」
ピッタリとハモり、手を振る動作まで同じタイミングだった。
「とにかく！」
秀人に蹴りを入れつつ……
「実際、そいつはそれをやっちゃったのよ！」
「……不可解です」

普通の魔導師には出来ない。
ならば、秀人と、『普通の魔導師』との違いとは……
「……あー、俺の、魔力資質だと思う」
もう、隠していても仕方ない。
そう考えて、情報を提供することにした。

「プレシアが言うには、『結合』、とか言うらしい」
「……なるほど。それならば、合点がいきます」
普通の圧縮では、分子同士が結合するほどの密度は作り出せない。
だが、秀人なら……分子同士を、魔力資質により、無理矢理『結合』させることができる。
だからこそ、可能だったのだ。
「つまり、その破壊力をもって、物理的に結界を破壊してしまおう……ということですね？」
「そ。これなら、魔力は殆どいらないでしょ？」
破壊力に指向性を与えて打ち出すというのが、砲撃魔法。
その破壊力というものが、魔力だろうと、反応プラズマだろうと、変わりは無い……かもしれない。

ひとまず一晩休憩し、体力魔力を回復させた後、脱出を決行することにした。

その夜……
「……リーゼ、起きてるよね」
同じ毛皮に包まる、はやてとリーゼ。
秀人が寝落ちした後、はやては切り出した。
「はい、主」
「あのさ……私たちの契約……」
「はい」
契約とは、リーゼが、はやてを鍛えるという内容のことだ。
「アレ、一文だけ追加しとくね。覚えておいて」
そして、リーゼの血色の瞳を見据え……

「『自身の生命を、可能な限り、維持すること』」

……かみ砕いて言えば、『勝手に死ぬな』。

……ということだ。

――ぎゅうぅっ……！

リーゼの身体を、力いっぱい抱きしめる。

身長差から、しがみつくような形だ。

「主……？」

「……おまえまで、私を置いていったら許さない」

「……」

「許さないからね……！」

その肩が、震えていた。リーゼは、はやての背中に腕を回す。

「……了解しました、主」

……秀人は背を向けながら、そのやりとりを聞いていた。

（『おまえまで』……か）

確かに、それらしい雰囲気はあった。

年齢に見合わない、厭世観。

それは、かつての自分……その日暮らしで、ただ余生を消費していた頃の自分と、似通っていて、

（お父さん、お母さん……俺は……いつになったら……）

そのまま、眠りに落ちて行った。

翌朝。

「そっちの準備はいいか？」

天気は快晴。

「いいよー」

「問題ありません」
三人は、脱出の用意を終えていた。
秀人の目の前には、直径１０メートルはあろうかという巨大な岩石。
それを、丸ごとエネルギーに換えてしまおうという算段である。
「んじゃ……始めるぞ！」
――ギィンッ！！
岩石の表面が、秀人の魔力……空色に発光する。
「ぬぐぐ……！！」
流石に、今回は的が大きい。
小石のように、すぐ圧縮……とはいかない。
だが、それでも……
――ゴリッ……
僅かながら、圧縮が始まった。
「ふんぬうぅぅ……！」
――ゴリッ、ゴギッ……！
潰れていく。
押し潰されていく。
やがて、巨大だった岩石は、バレーボール大にまで圧縮され……
――ゴウン、ゴウン……！
ただ巨大なエネルギーが、岩石の周りを取り巻いていた。

「ここらが、限界だ……！
はやて、リーゼ！！」
「よっし……やるよ、リーゼ！」
「了解しました、主」

――キィンッ！

二人の足元に、古代ベルカ式魔法陣が展開。
濃淡二色の闇色の魔力が、『筒』の形状を成していく。
その『筒』の内部に、エネルギーを移し替えていく。
『筒』を維持するのは、一番器用なリーゼが担当。
「充填率、２４％、３８％、５６、６４、７２、８２、９６、９７、９８、９９……　１００％です、主！」
「よっし！」
そして……引き金を引くのは、はやての役だ。

魔剣を引き抜き……
「ロードカートリッジ！！

……行くよ！」

破裂寸前のエネルギーに、とどめの一撃！

「紫電……一閃！！」

――――――

――――バギィイイインッッッ！！

その一撃は、『修練の門』を、一撃の下に破壊し……閉塞されていた世界に、風穴を開けた。

「……今だァッ！！」

秀人の号令の下、リーゼは秀人、はやての二人を抱え、転移魔法を発動。

「行きますッ！」

その風穴から三人は、ついにこの世界から、脱出を果たした。

――ビーッ、ビーッ！

とある小型戦艇のコンソールが、けたたましく鳴った。

それに気付いた乗組員達は、すぐさまデータを参照する。

「この反応……まさか！」

すぐさま、上官へと通信を繋ぐ。

「クロノ執務官！

漂流中の嘱託魔導師を……発見しました！」

第七十三話（後書き）

そろそろ年末、ということで、話を進めて行きたいと思います。

第七十四話（前書き）

バイクを立ちゴケさせてしまったときの絶望感は異常。

第七十四話

「……」

それは、年若い少女だった。

外見年齢は、１５に届くかどうか。

青色がかった、黒というよりは藍色に近い、不思議な色合いの髪の毛。白い肌。

そして、好奇心に輝く、紫の瞳。

それだけなら、ただの美しい異国の少女、という風貌だが、服装がこれまた異様だった。

明らかに室内用のサンダルをつっかけ、ほつれたジャージを身につけ……その上に、薄汚れた白衣を

羽織っていた。

「……ふぅん、」

道を行く誰もが、そのちぐはぐな姿に振り返る。

「……へぇ、」

少女に、頓着した様子は無い。

手元に開いた本に視線を落とし、道のド真ん中を闊歩していた。

難解な哲学書のように読み進める、その本の表題は……

『今日から始める、３０ｄａｙｓ拳法トレーニング』

……と、あった。

読み捨てる類の、中身の無い本。

「……ふむふむ」

それを、大まじめに読み込みながら、ぱたぱたとサンダルを鳴らしている。

「……うん。アイは、またひとつ賢くなった」

読み終えた。

どうやらこの少女は、『アイ』という名前らしい。

それを白衣のポケットに突っ込み、また何かを取り出す。

「やっぱり、おそとは勉強になる」

今度の本は、『2ストロークエンジン・チューニングマニュアル』。

「データだけじゃ得られないものが、ダイレクトに感じられる。

『ひゃくぶんはいっけんにしかず』は、真理だった」

そんな動作を繰り返しながら、歩いていく。

「あれは……？」

と、ふらふら歩いているうちに、大通りを外れていた。

目の前には、開けたグラウンドと、サッカーに励む少年達。

「……アイは、かれらが何をしているのか、分からない。だから、アイはかれらに聞きに行く」

土手を越え、グラウンドの前までやってきた。

そして、そのままフィールドに足を踏み入れようと……

「待った待った！ちょっと待ったー！！」

傍らのベンチに座っていた、活動的な雰囲気の少女が慌てて止めた。

「おねーさん、試合してるんだから入っちゃ駄目だよ！」

「……？　アイは、かれらに聞きたいことがあるだけ」

「だーかーら、試合中なんですってば！」

首を傾げるアイを、ずるずるベンチにまで引っ張っていく。

「阻止された……」

ベンチに座り、平坦な表情で、少女を観察し始めた。

「答えられることだったら、私が答えますから……」
かくん、と首を傾げ、第一の質問。
「あなたはだれ？」
あまりに澄んだ瞳。
その色合いを不思議に思いつつ、自己紹介をする。
「私は、八代望って言います」
「あいしー。のぞみ、覚えた」
拙いなんちゃって英語で、返事をした。
「おねーさん、外国のひと？」
「ガイコクって、なに？」
「え？　えーっと……」
虚を突かれたが、なんとか分かりやすい言葉を捻り出した。
「日本の出身じゃあ無い……ですよね？」
「いぐざくとりー。アイは……」
……と、言いかけたところで、言葉が止まった。
「やめる。はなしたら、姉様におこられる」
「お姉さんがいるんですか？」
望は、出来るならその人物に連絡を取ってみようと考えた。
もしかしたら、迷子になった観光客という可能性も……

「あのいしあたま。いつかたおす」

……無さそうだった。
「おーい、望……って、誰だその人？」
そこへ、試合を終えた少年達がぞろぞろやってきた。
得点板には、一点差で逃げきったことが印されていた。
「おつかれ。……なんか、外国の人みたい」
「うぉっ、ガイジン！？」

にわかに騒がしくなる。
アイは健太の持つサッカーボールを、じぃっ、と見つめていた。
「なんか、サッカーに興味があるんだってさ」
「へぇ……」
試合は終わり、グラウンドは自由に使える状態になっていた。
「……ねーちゃん、一緒にやる？」
アイは、迷わず頷いた。

……

むくっ、と、なのはは目覚まし時計よりも先に起き出した。
『おはようございます、マスター』
「おはよ……あと二日、か」
カレンダーを見ると、日付は八月二十九日。
夏休みが終わるまで、残り僅かだった。
「くかー……」
タオルケットを蹴飛ばし、パジャマが腹までめくれ上がっているフェイトに、それを足蹴にして眠る
ヴィータ。
ユーノとアルフは、またしても缶詰だ。
「……ランニング、行こうっと」
『お付き合いします』
レイジングハートを首にかけ、支度を整えて家を出た。

早朝の土手を、マイペースに走る。
『ですが、驚きました』
胸元で揺れるレイジングハートが、話し出す。
『まさか、マスターが剣術を修めるとは』
「うん、いろいろあってさ……黙っててごめんね？」
『いえ、構いません。戦闘の幅が拡がるのは、歓迎すべきことです』
「うん。とりあえずの目標は、ヴィータとフェイトに、剣術オンリーで勝つこと」
元々、砲撃魔導師として力を伸ばしていたなのはと、近接型オールラウンダーのフェイト、白兵戦のスペシャリストであるヴィータでは、大きく差がついている。
「レイジングハート、私の魔力はどう？」
『現在、全快時の２８％です』
全快時の、約三割。
砲撃も射撃も、一応は使えるまでに回復したが、射程も威力も心許ない。
今までと同じ戦い方は出来ない。
だからといって、俄か仕込みの剣術では、逆に不利になる。
それゆえに、剣の腕だけでも、彼女らと対等にならなくてはならない。
「……まぁ、地道に基礎トレーニングだね」
『はい、マスター』
それにしても、と前置きし、深く深く、ため息をついた。
「秀人さん、遅いなぁ……」
既に、失踪から一ヶ月が過ぎていた。
『……』
同じような思いで、沈黙するレイジングハート。

「あーあ、夏休みくらい、一緒に過ごしたかったなぁ……」

――……ピリリリリッ

と、ポケットに突っ込んでいた携帯電話が鳴った。

待受画面には……クロノからの着信が告げられていた。

「……なんだろ？」

足を止め、土手に腰掛けつつ、携帯電話を耳に当てた。

「よっ、クロノ。どうかした？」

『高町なのは！

見つかった！見つかったんだ！』

クロノにしては珍しく、慌てふためいた、ハイテンションな口調でまくし立てる。

「……何が？」

『秀人だよ！

……ははっ、あの馬鹿、やっぱり無事だったんだ！』

……なのはは、電話を切ることも忘れて、自宅に向かって猛然とダッシュした。

第七十四話（後書き）

短いですから、次回は速めの投稿を、、、

第七十五話（前書き）

今日から三日間、宿泊訓練という名の７２時間ぶっ続け勤務が幕を明ける、、、

ハルハルの更新は、これからだ！

第七十五話

結界を破壊し、脱出を果たした三人。

転移した先は、はやての自宅……だったのだが。

「……おい、リーゼ」

「……何でしょうか、主」

思い入れの無い我が家があるはずの空間には……

「私ん家、どこいった？」

……綺麗さっぱり、何も無かった。

いや、正確には……かつて家だった瓦礫の山が、散乱していた。

「……申し訳ありません。転移の余波を、抑え切れませんでした」

限界ギリギリの転移魔法。

それは、三人を転移させるだけが手一杯だったらしい。

「……ま、いっか」

はやては、あっけらかんとした口調で言った。

「別に、大した思い入れがある家じゃなかったし」

両親と過ごしたわけでも無い。

ロクに家具も無い、ただの寝る場所。

それが無くなったくらい、別に大して困らない。

「さて、秀人……秀人？」

と、そこで、連れの一人から反応が無い事に、ようやく気がついた。

「……」

振り向いた先、秀人は……倒れていた。

「ちょ……秀人！？」

慌てて駆け寄り、がくがくと揺さぶる。

が、秀人は血の気の失せた顔色で、ぐったりと弛緩していた。
「……恐らく、オーバーヒートでしょう」
柱に背を預けながら、リーゼが言う。
ＡＭＦ状況下で、体力、魔力を限界まで擦り減らし……
全力の圧縮魔法で、その限界を越えてしまったのだろう、と。
「……失礼」
リーゼが、その手首を取る。
「……脈拍は、低いですが安定しています。
しばらく眠れば、回復するでしょう」
「そっか、よかった……ん？」
と、そこで、自分の言動に疑問を抱いた。
（……何で私、安心してるんだ？）
なし崩しで、一月半を共に過ごしたとはいえ、秀人は敵だったはず。
サバイバルを終えた今となっては、もう、戦力兼労働力として、生かしておく理由は無い。
強くなるのは、『誰かのため』か、『自分のため』か……そのどちらも、見極
められていないが……『鉄槌』の仇討ちが出来るなら、後回しでも構わない。
だが何故か……殺意が沸いて来ない。
「……？
リーゼ、もし、私がソイツを殺せ……って言ったら、どうする？」
混乱し、リーゼに回答を求めた。
「主がそれを望むなら。……ですが、主。あなたは、それを本当に望んでいま
すか？」
逆に聞き返され、秀人の顔を見る。

……が、やはり殺意も、敵意も沸いて来ない。

「……わかんない」

本当に、わけがわからなかった。

「わかんない……」

途方に暮れ、家の残骸に座り込んでしまった。

「……！」

と、リーゼが警戒も露に飛び起きる。

「……魔導師、複数です。まっすぐこちらへ向かっています」

「……！」

はやては、魔剣を取り立ち上がる。

「チッ……狙いは、私たちか」

「……？いえ、違うようです」

そして、はやてが魔剣を下ろしたのと同時……

「秀人！！」

……見覚えのある、小柄な少年が現れた。

「……君達は？」

その目が、はやてと、リーゼを捉える。

ごまかすことも出来たが……秀人が口を割ってしまえばおしまいだ。

「こいつと、同じ世界にいた魔導師だけど？」

「次元漂流者……？」

どうせ嘘が見抜かれるなら、最初から、本当の事を話してしまえばいい。

「クロノ執務官。嘱託魔導師を、先にアースラへ……」

「了解した」

そして、担架に載せられようとして……

途端、何故か、先ほどまで全く湧かなかった敵意が、燃え盛った。

「勝手に、どこに連れていく気だッ！！」

再び魔剣を振りかぶり、担架を持つ局員に切り掛かった。

飛びのく局員。そして、砕ける担架。

はやては、秀人を背に隠し、叫ぶ。

「近づくんじゃねぇ！　ブチ殺すぞッ！」

局員達はデバイスを構え、はやての脇にはリーゼが控える。

一触即発、だった。

クロノは、局員たちを手で制し、デバイスを下ろさせる。

「……誤解しないで貰いたい。僕達は、彼を保護しに来たんだ」

「……」

はやては、無言で敵意を発し続ける。

クロノは、ふっと苦笑いを浮かべる。

「……そいつ、また何か無茶をしたんだろう？」

その声には、偽りではない親しみが込められていた。

「阿呆みたいに頑丈な奴だが、さすがに野ざらしにしておくのは気が引ける。

だから、連れて戻りたいんだ」

「……」

僅かに、警戒が緩む。

「どうしても信用してもらえないなら、君達も来てくれて構わない」

「……チッ、分かったよ」

渋々と、魔剣を鞘に収めた。

「さて……君達の名前を、教えてもらえないだろうか？」

ふて腐れた様子で、それに答える。

「……八神はやて」

「使い魔の、リーゼです」

クロノが、訝しげにまじまじとリーゼの顔を眺める。

「リーゼ……？」

「何か？」

それに、平然とした様子で答える。

「いや、失礼した。知人の名前と、似ていたもので」

「お気になさらず。それでは、ご案内頂けますでしょうか」

そして、秀人を背負う。

「あぁ、近くに、転送ポートを用意してある。そこまで来てくれ」

「主、歩けますか？」

「ったりまえでしょ」

埃を払い、立ち上がり……クロノの後を、歩いていった。

……

「うぁー……」

秀人は、アースラの医務室で目を覚ました。

「……あぁ、よく寝た」

隣のベッドに寝そべったはやてが、同じタイミングで起き出してきた。

「「ふぁあ……」」

欠伸をするタイミングまで、同じである。

「……帰ってきたー、って気がするよ」

しょっちゅう医務室に放り込まれてきたのだから、当然といえば当然だ。
「ハッ……私にとっちゃ、見知らぬ天井だっての」
「……」
その膝を枕にして、猫の本性に立ち返ったリーゼが、深い眠りに落ちていた。
いくら傷が治ったとはいえ、やはり消耗が激しかったのだろう。
「……ご苦労様」
その毛並みを、手櫛で整えてやる。
自覚があるのか無いのかは不明だが、その顔は、秀人が見たことが無い程に優
しく……慈愛に満ちていた。
「今日、何月何日だ……？」
「さぁ……でも、空気は生温かったから、まだ夏なんじゃない？」
「……」
「なに、何か用でもあるの？」
「いや、なのは達、どうしてるかなー……って」
なのは。それは、秀人が度々口にする名前で……その名前を口にする際、
秀人は決まって、優しい笑みを浮かべていた。
「……チッ」
ひゅんっ。
はやてが、ベッドサイドに置かれたコップを、秀人に投げる。
――カコンッ！
「いって！……何すんだよ！？」
当然、抗議する秀人。
「何でもねーよバーカバーカ！」
が、帰ってくるのは理不尽な罵倒のみ。
これには、さすがの秀人も怒った。

「バカとはなんだこの単細胞！」
――ひゅんっ！
コップを投げ返す。
「うぁっ……！あぶねーだろバカ！」
――ひゅんっ！
投げ返す。
「単細胞！」
投げ返す。
「バーカ！」
投げ返す。投げ返す。投げ返す。

……唐突に、アホくさくなった。

「「……はぁ」」
こんなことで、無駄に体力を消耗するのは、あまりに馬鹿馬鹿しく……
「……休もうぜ。折角、ベッドで寝られるんだ」
「チッ……」
そして、もそもそと潜り込む。
無言になる二人。

――どたどた……

と、廊下を走る音が近づいてきて……

「秀人さんっ！」「ひでとー！」「秀人っ！」「秀人！」

なのはが先陣を切り、フェイト、ユーノ、アルフが、
医務室に駆け込んできた。
「心配したんだよ心配したんだよ本当に心配したんだよ！？」『え

ぇもう本当
ですよこの馬鹿いっそ鎖でマスターと縛り付けてやりましょうかこ
の馬鹿この
大馬鹿！』「かえってくるのがおそいんだよこのー！」「あぁもう
何と言うか
このトラブルメーカーめどこほっつき歩いてた！！」「お前がいな
いせいでフ
エイトがぐずって大変だったんだぞ！」
喧々囂々、マシンガントークと共に、もみくちゃにされていた。
彼らはやはり、美香のいる病院で見た面々と、ほぼ同じ。
「う、うぅ……？」
はやての膝で眠るリーゼが、騒音に顔をしかめる。
きゅっ、とリーゼの猫耳を伏せ……
「……るっせえぇぇぇぇぇ！！」
いつかの日と同じように、大声を張り上げた。
「……」
きぃん……と、耳鳴りを残す程の大声だった。
「うるせぇんだよテメェらは！
リーゼが起きちまうだろうがこのカス共！

声帯丸ごとえぐり出されてぇのかゴルァ！」

律儀にリーゼの耳を塞ぎながら、呆気に取られた面々に、悪口雑言をたたき付けていく。

可愛い顔をしておいて、言葉の汚さは際立っていた。

「あなた……前、病院にいた……？」

それに、真っ先に気付いたのは、なのはだった。

「だったら何だこの栗毛。モンブランにして捨てるぞ」

「あ、あのねぇ！」」

身体特徴をストレートに侮辱され、怒った。

「うるさかったのは謝るけど、言い方ってものがあるでしょ！」

至極まっとうな意見。それを、はやては牙を剥くように嘲笑った。

「ハッ……ンなもん知らねぇよタコ。口を塞ぎ続けて窒息して死ねッ！」

「な……なんだとこのおぉぉ……！」

……どうやらこの二人、相性が最悪らしい。

「おい、やめろって……なのは」

「ん？」

はやては、首を傾げた。

（こいつ、今なんつった？）

なのは。

それは、秀人が度々口にしていて……大事にしていることが、明らかにわかる

響きで……それが見た目、自分と大して変わらない年の、女の子……？

「おい」
「あ？何だよ、はやて」
「なのは……、って、こいつ？」
「？　……そうだけど」
どうどう、となのはを抑えながら話す
「秀人さん……なんか、そいつと仲良いんだね……？」
……嫉妬丸出しの、そいつ呼ばわりである。
「そりゃそうよ……だって、」
しかし、はやては、ニィ……と、凄まじく意地の悪い顔で笑い……
「一ヶ月、ずぅっ……、と、二人で暮らしてたんだから」
……
……
――なのは達が凍結し……秀人が青ざめながら脱走を図り……いち早く我に帰
ったレイジングハートに足を払われ……
――ずでんっ！
床に、勢いよくダイブした。
……ゆっくりと、時間が動き出す。
「レイジングハート……」
ずぶずぶと沈み込むような声で、なのはが呟く。
『はい……マスター』
神妙に答える、その愛機。
ふいっ、と上がるその顔は……

「……やっちゃえ☆」

超、笑顔だった。

……

「いひひひひひっ！！ひゃーっはっはっはっはっ！！」

折檻を受ける秀人を見ながら、はやてが腹を抱えて爆笑していた。

「……お楽しみのところ、申し訳ないが」

クロノがやってきた。

「秀人、艦長がお呼びだ。歩けるな？」

「ああ。

……なんか頭ズキズキすっけど」

『さっさと治しなさい』

「……はい」

そして、なのは、はやて達を残し、医務室を出た。

二人並んで、アースラの廊下を歩く。

「……ん？」

肩を並べて歩いていたら、秀人が何かに気付いた。

「クロノお前、背伸びた？」

「……なに？」

思わず振り返る。

確かに……以前は秀人の肩の位置にあった頭が、少し上になっていた。

「そうか？」

「お前もまだ１４だし……まだまだ伸びるぞ」

「……かもな」

ふと、秀人を見て……
「お前はどうなんだ？」
何気ない会話。
だが、秀人の顔が、僅かに曇った。
「……さぁ、どうだろうな」
「……」
恐らく、自身の体のことだろう。

――ぱんっ。

クロノが、秀人の肩を叩き、言った。

「ふん、いつか追い抜いてやる。
……だから、そのままでいろ」

「……ああ」
少し、気が軽くなった。

話しているうちに、艦長室までやってきた。
「艦長、連れて来ました」
『入りなさい』
ドアが開き……およそ一ヶ月ぶりの再会となった。
「……」
厳しい顔で、秀人を出迎えるリンディ。
「あー……ども、お久しぶりッス、リンディさん」
「……秀人くん、」
すたすたと、秀人の眼前までやって来て……

「申し訳ありませんでしたッ！」

深々と、頭を下げた。
「え、ちょ……」
たじろぐ秀人に構わず、謝罪を続ける。
「こちらの不手際で、極高危険度の世界へ誤転送し、発見まで一月もの時間を
要してしまったこと、アースラ艦長として、いち管理局員として…
…真に、申
し訳」
「あー、ストップストップ！」
秀人が、それを遮る。
「リンディさん、気にしすぎだって。そりゃあ、最初は死ぬかと思ったけど…
…自分の弱点とか、苦手分野をじっくり鍛えられたし……仲間もいたし」
仲間、とは、はやてのことだろう。
「なんつーか、不謹慎かもしれないけど……楽しかったですよ」
「……」
面を上げるリンディ。
「……ですが、過失は過失です。私の力の及ぶ範囲で、謝罪をさせて下さい」
「え……だから、謝罪とか、そういうのいいですから！」
「いえっ！何か、謝罪を……！」
……押し問答とはこのことである。

「ふう……艦長、秀人。いいですか」
クロノが、そこに割って入った。
「秀人には、休暇を取らせるのはいかがでしょうか。期間は、そうですね……
本日、現地の日付で、八月三十日から、明日までの二日間は」
それは、狙いすましたかのように、なのはの夏休みの最終日だった。
「艦長のお力でしたら、本日から休暇を与えるのもたやすい筈です。……いかがでしょう？」
「……十分可能です。秀人さん、いかがですか？」
「えぇと……じゃあ、それで」
問題解決。
次の瞬間……
「「やったあああああ！！」」
扉の向こうから、なのは、フェイトを先頭に、一家の面々が雪崩込んできた。
「秀人さん、早く行こうっ？」
秀人の手を引く。
「……よし！」
秀人は、なのは、フェイトの手を逆に引き……駆け出した。
「そうと決まれば……遊ぶぞー！！」

二日間の、夏休みが始まった。

第七十五話（後書き）

宿から携帯電話で更新できればいいんですが、、、

第七十六話（前書き）

ぼんぼり祭り、東京からバイクで行ってきたー！

帰り道、東部湯の丸ＳＡでＺＲ２５０がエンジンオイル噴出してエンジン終了（泣）

第七十六話

秀人が退室していって、少しして。
「……ふん」
「お邪魔します」
はやてとリーゼの二人が、艦長室に呼び出されていた。
「お二人とも、体調の方はいかがかしら？」
にこやかに話しかけるリンディ。
それに対して……
「シャワーを浴びる間もなく呼び付けられて、良いも悪いも無いわよクソッタレが……」
不機嫌丸出しで、がさがさの髪の毛をがりがり掻く。
「主、言葉遣いが汚いですよ」
それを嗜めるリーゼだったが、
「ふんっ」
ぷいっ、とそっぽを向かれてしまっていた。
「では、手短に済ませます。八神はやてさん、リーゼさん」
だが、そこはやはり軍人か。動じる事無く、話しを進める。
「まず、貴女達についてです。あなたは、どのような経緯で、魔法の技術を入手したのですか？」

魔法とは言っても、それが現地の文化に基づいた……例えば、神道、密教、仏門、などであれば、
特に追及する理由は無い。
それはあくまで、現地の文化なのだから。
ならば、『時空管理局』がそうする理由は……

「私たちの世界の魔法を、何故、現地人のあなたたちが保有しているのでしょうか？」

自身らの技術の流出が、認められた場合だ。

「お答え頂けますか？」

「……」

はやては一瞬だけ、『口ごもるフリ』をして……事前にリーゼと打ち合わせ済みの事を、話しはじめた。

「……私の家の前に、変な猫が転がってたんだ」

あくまで、平静に。

「……」

リンディの放つ、無言の圧力を受け流す。

「んで、手当てしてやったら……何でかは知らないけど、この姿になってさぁ」

「……成る程。では、リーゼさん」

「はい」

はやての脇に控えたリーゼに、話が振られる。

「なぜ、彼女に魔法を供与したのですか？　……謝礼、ということでしょうか？

もしくは、何らかの意図が？」

「いえ」

ふるふる、と頭を振る。

「……覚えていないのです。

何故、私が倒れていたのか……

この『リーゼ』という名も、主はやてにより授かったものですから」

嘘を嘘と見抜かれないコツは、幾らかの真実を織り交ぜること、らしい。

「ただ、『魔導を伝えよ』と、頭の片隅に残っていたので……」

はやては、それを特に否定せず欠伸していた。
「……そうですか」
リンディも、少し勘繰りながらも、一応は納得したようだ。
が、きゅっと眉を上げ、厳しい顔を作った。
「ですが、いくらなんでもやり過ぎです。こんな小さな子を、あんな危険区域に放置するなど……」

「おい、オバさん」

そこで、はやてが不躾に話を遮った。
「憶測でベチャクチャ喋るんじゃねぇよ。
魔法の修業も、全部私がリーゼに命じたんだ」
きん……と、脅すように魔剣の鯉口を切る。
「死んでしまったら、どうするのですか？」
リンディの案ずるような言葉に、はやては鼻を鳴らした。

「別に？

死んだなら、私は所詮、その程度ってことでしょ」

本気、とリンディは判断した。
「つーわけで、私の魔法の出所は不明。
……もう戻っていい？眠いんだけど」
「……ええ、ありがとうございます」
まだ、どこか腑に落ちない様子のリンディを残し、艦長室を後にした。

「行くよ、リーゼ」
リーゼの手を握り、すたすたと通路を歩く。
「はい、主……ですが、どこへ……？」

「あー……」
……家が吹き飛んだことを、今頃思い出した。
「どうすっかなぁ……適当に、そのへんでアパートでも借りるか」
借りる……の辺りに、まだ人間味が感じられる。

ばたばた、と、向こうの通路を走り抜けていく集団があった。
「うおりゃあああ！」
「いやっほー！」
「あわわわわ……！」
疲れなど何のその、二人の少女を肩に乗せ、猛烈な健脚で走る秀人。
そして、その後を追う、中性的な少年と、野性的な女性。
彼等は秀人を中心にするように、楽しげに、笑顔だった。
「チッ……」
面白くない。
……一ヶ月、苦楽を共にしてきて、親近感を抱かない方がおかしい。

だというのに、秀人には待っていてくれる仲間がいた。

……言ってしまえば、子供じみた独占欲だ。
「……ちぇっ」
足を止め、恨めしげな目で、秀人を見送った。

リーゼが、はやての手を引く。
「主、空腹ではありませんか？」
「……うん、お腹すいた」
本人は気づいていないかもしれないが、消沈しているようだ。
さっきまでとは逆に、リーゼに手を引かれ、俯きながら歩く。
「……うどんとか、あっさりしたやつがいい」

「はい、主」
「……甘い油揚げ、入れていい？」
「一枚までなら」
……健康管理には、厳しいようだ。

「おーい、はやて！」

「……え？」
振り向いた先、秀人が、はやての名を呼びながら駆け寄ってきた。
「え……なんで、」
行った筈では？
混乱するはやてに、秀人が言う。
「いや、あのさ……俺達、今から遊びに行くんだけど……
一緒に来ないか？」

「……えっと」
はやては、今度は本気で思い悩んで……
「……リーゼ、どうしよう？」
結局、リーゼに聞いた。
「主が、望まれるままに」

「……」
なのはは、少し警戒気味に。
「へー……あいつボクよりちっこいのに、つよいんだ」
フェイトは、興味深そうにじろじろと見ていた。
ユーノとアルフも、特に拒否しない。

つまりあとは、はやての返事次第なのだが……
「……ううぅ」

物怖じしていた。
戦闘や修業には積極的だが、人付き合いには消極的だったらしい。
そして……
「……リーゼと、一緒でいいなら」
一応の、オーケーを出した。
「もちろん。リーゼもいいよな？」
「それを主が望むなら」
二人増えて、七人の大所帯となった一行は、がやがやと（主にフェイトが）転送ポートから降り立って行った。
……
ところ変わって、地球支部。
その奥まった一角。
『重要参考人留置室』に、クロノは来ていた。
その部屋の中は、ごくオーソドックスな病室だ。
そのベッドの住人に、クロノが話しかける。
「カツラギ・テツヤ。気分はどうだ？」
カツラギと呼ばれた、がっちりした体型の壮年の男は、首を僅かに動かした。
「……悪くは無い。相変わらず、身体は動かないがな」
この男はかつて、秀人の蒼炎に焼かれた……『雑魚騎士』の一人だ。
一度は、『王』の襲撃を受け、闇の書に取り込まれていたが、こ

うして、自我を取り戻していた。
「申し訳ないが、始めさせてもらう」
他にも生存者がいた中、何故、このカツラギだけが幾度も聴取を受けているのかと言うと……
「まずは、その少女の身体的特徴を……」
そう。
『王』の素顔と、変身後の姿、その両方を、目撃していたからだ。

クロノの聴取により、似顔絵が作成されていく。
そして、一枚の人物イラストが出来上がった瞬間……

「これは……！」

クロノは、バタン！とドアをブチ開け、秀人の元に飛び出して行った。。
「ダメだ、秀人……！お前の隣にいる、そいつは！」
今なら、間に合う。
全力で駆けるクロノ。
だが……

「……どこへ行く気だ？」

……その目の前に、一人の男が立ち塞がった。
「なっ……！？」
その男は、いきなり現れた。
この、内部への直接転送が不可能な、管理局内に。
何かの制服のような、無機質な洋服。
そして……

顔面を覆う、珍妙なデザインの覆面。
「貴様、何者だ……！？」
デバイスを構えるクロノ。だが……
「遅い」
――ガシィッ！
「ぐぁっ……！？」
……いくら焦っていたとはいえ、執務官。
それを、一瞬で間合いを詰め、頭部を鷲掴みにしていた。
「この距離なら、殴った方が早い。鉄則だぞ、クロノ」
「なに……！？」
名前を呼ばれ、驚くクロノ。
「……！　君は！」
ぴん、と、ある人物を思い出す。
――近距離戦闘。
――通信妨害
――変身偽装。
そして――
「お前が知るには、まだ早い」
――催眠暗示。

「う……ぐぁあああああっ！？」

頭の中を、直接手で掻き回されるような違和感。

頭の中に組み上がっていったパズルが、ばらばらに分解されていく。

「なぜ、だ……！」

段々と朦朧としていく意識の中、クロノは、仮面の男……『追跡者』の真の名を、呼んだ。

「……何故だ！アリア！ロッテ！」

ぷつん……と、クロノの意識が、闇に沈んだ。

第七十七話（前書き）

ＺＲＸ１１００が気になって仕方がない、、、９Ｒ売っぱらって買おうかな

第七十七話

「……」

床に倒れ伏すクロノを見下ろす、『追跡者』。

「……」

――パァッ……

その姿が、光りに包まれ、カタチを変える。

長身だった身体は、二十センチ近く縮み、肩幅もいくらか狭まる。

変身魔法。

偽装を主な目的とする、今ではマイナーな技術である。

大柄な男性だった追跡者は、灰色の頭髪に、猫耳、猫尻尾を備えた……

――二人の、女性の姿を形作った。

姿形、装束、顔立ちまでうりふたつだが、片やストレートのセミロング、片やウェーブヘアと、見分けるのは容易い。

「……ロッテ、急ごう」

「……うん、アリア」

二人は、クロノの手足を持ち上げ、忍び足で移動を開始した。

「……ねぇ、ロッテ」

ぽつり、と、ウェーブヘアの猫耳……アリアが、口を開いた。

「……なに？」
「本当に、これで良かったのかな？」
それは、疑問。
「……お父様の、ご命令よ」
対して、ロッテはそう返した。
だが、ロッテもまた俯き、顔を逸らしている。
「……本当に、これで……」
アリアは、ポケットから数枚の紙切れを取り出す。
それは、乱暴に破り取ったかのように、端が荒れている……本の、ページ。
そこには、現地の言語と、一人の少女の顔写真が写っていた。
「こんな、小さな子を……どうして」
「アリア」
ロッテが、その先を窘める。
「……わかってる」
アリアは、それをポケットに仕舞い直す。
「……わかっているでしょう？
お父様の、御命令よ。きっと何か、お考えがあるのよ」
「……うん」
二人は、そこから去って行った。

「……？」
数分後、クロノは目を覚ました。
「……仮眠室？
おかしいな……さっきまで」
クロノの記憶は、つい先程……重要参考人への聴取を終えたところで、ぱったりと途切れていた。
「……そうだ」
参考人からの聴取の後……モンタージュを作成して、そして……

「……結局、まともな成果にはならなかったんだった」
手がかりにもならない……ただの似顔絵が残って、疲れを取るために、仮眠室に『自分の足で』やってきた。クロノの頭の中では、『そういうこと』になっていた。
「……く、」
重い頭を持ち上げ、身体を起こす。
現在の時刻から、今後のスケジュールを確認。
「あと少しで、秀人の面談か」
幸いなことに、空き時間の範囲内で眠っていたらしい。
さて、秀人は今、どこで何をしているのか……

……

からん、とベルを鳴らし、秀人が翠屋に入った。
「……秀人くん？」
ウエイトレスの格好をした美由紀が、ぽけーっ……とした顔で、それを出迎えた。
「よう美由紀、久しぶり」
それに対する秀人の態度は、実に軽かった。

「おおおお、お母さん！お母さーん！」
なのはは、まだ高町家には連絡していなかったらしい。
あわてふためいて、厨房へ呼び掛ける。
その様子に、周囲の客がぎょっとして振り返った。
「もう、なぁに美由紀。お客様の前、です……よ……？」
美由紀と同じく、固まる桃子。
「えっと……なのは、は？」
「家で出かける準備してるよ。待ってようと思ったんだけど、『顔

見せてきたら？』って……」
「ふ……ふうん」
「……」
「何だよ、変な顔して」
「え？……いやぁ」
二人の視線は、秀人……ではなく。

「……」
その背後に、付かず離れず、一定の距離をオプションのように寄り添う……はやてに注がれていた。

「「……その子、誰？」」

当然の疑問を口にしたその瞬間……
「……！」
ギロッ……と、殺気立った鋭い目で、睨みつけられた。
「あ、あれ、怒らせちゃった……？」
「……」
無言で殺気ビームを照射するはやてに、ドン引きして後ずさる美由紀。
「……リーゼ」
ぼそっ……と、聞き取りづらく何かを言う。
「はい、主。なんでしょうか」
と、今まで、興味深くショーケースを覗き込んでいた帽子の女性が、とことこやってきた。
「……帰る」
今度は、リーゼの背後に隠れるはやて。
「主……」
やれやれ、といった様子で、ため息をつく。
が、やはりそこは、主人の意向を優先するのか、ぺこっと頭を下

げ、店のドアノブに手を掛けた。
「待って」
それを、桃子が制止する。
「……何だよ」
苛立ちと共に、吐き捨てるはやて。
「折角来たんだから、ケーキの一つでもいかが？」
「そうだな。折角だ」
それに、秀人が乗っかった。
「どーせお前、コンビニのケーキくらいしか食ったこと無いだろ？」
図星だった。
両親が健在だった頃は、誕生日にはちゃんとしたケーキを食べていたのだが……
「……るっせぇ！」
Uターンし、秀人のところまで戻ってきて……げしっ、と足蹴にした。
「いってぇ！」
「三食コンビニ弁当で悪かったな畜生！」
「悪かった悪かった……ほら、座ろうぜ」
ぎゃーぎゃー騒いでいるのも迷惑だと、秀人がはやての手を引き、窓際の席に座った。
「モンブランとサバランとレアチーズケーキ。それと、アイスレモンティーを人数分」
「はい、かしこまりました」
下がっていく美由紀。
「……チッ」
頬杖を付き、テラス席に視線を流すはやて。
不機嫌……は、最早デフォルトだ。

「お待たせしました」
そこに、美由紀がケーキを運んできた。
「んー……おぉ」
何の気無しに目を向け……一瞬、輝いた。
(結構……いや、かなり、)
「美味そうだろ?」
秀人はそれを見透かし、けらけらと笑った。
「主、どれがよろしいですか?」
「全、」「全部、というのは無しですよ」
「うぐっ……今日くらい、」
「カロリーオーバーです。血糖値が、やや高めでしたからね」
リーゼは、その点で甘やかすことはしないようだ。
「じゃ、モンブラン……」
「どうぞ」
目の前に出されたモンブランを一口、フォークで切り出し、口に運ぶ。
「!」
見開かれる目。
やはり、ランキング一位は伊達ではない。
「あはは……美味いか?」
自分はサバランを食べながら聞く。、
「ええ。たまになら、甘味も悪くないですね」
上品にレアチーズケーキを食べながら、リーゼが返答する。
今風の服装とのギャップが、非常に激しい。

「……」
モンブランを食べながらも、秀人とリーゼが食べるケーキが、気になって仕方ないらしい。
「主、どうぞ」
リーゼが、はやての口元に切り分けたレアチーズケーキを持って

いく。
『いいの？』と目で聞くはやてに、頷くリーゼ。
喜色を滲ませ、リーゼのレアチーズケーキを口にした。
「いかがですか、主」
「……おいしい」
実に楽しそうである。
……この姿だけを見て、巷を騒がせる連続失踪事件の犯人だとは、誰も思うまい。
「……」
「……？」
そこで、リーゼが秀人に、謎の目配せをする。
ケーキを見て……秀人のフォークを、ちらちらと……
「……マジかよ」
意図を察した秀人が、思わず呟いた。
……ここからは、アイコンタクトの内容である。

――無理無理、絶対無理だって！怒られる！

――いえ、問題ありません。主は単純な方ですから、ケーキさえ食べられれば、過程は気にしません。

――お前、結構酷いな……

――さぁ、主に『あーん』と。さぁ。さぁ。

――いや、無理！恥ずかしいし……

――我が主には、それをする価値が無いと？
愚弄するつもりですかそうですか……許せませんね。

――なんでそうなる！？

結局、リーゼの威圧に負け……

「あぁもう、わかったよ……」

サバランを一口、フォークに乗せ……

「はやて」

「あぁン……？」

極めて態度悪く、秀人に振り返るはやてに……

「はい、あーん♪」

半ばヤケが入った満面の笑みで、差し出した。

――シャグッ！！

……明らかにおかしな効果音と共に、フォークにかじりついた。

「……」

秀人は、先端が消失し、持ち手の部分だけになったフォークを引き戻し……半笑いしていた。

「……鉄分たっぷりだな」

はやては、もごもごと口を動かし……

「……ペッ！！」

口元から、フォークの三股の先端が射出した。

――スコーン！！

……三股の先端が、秀人の眉間に、クリティカルヒットした。

「……ぎゃぁあああああああああああああああああああああああああああっ！！」

もんどりうって椅子から転げ落ちる秀人。

「おおお、お客様ー！？」

「何じゃこりゃあああああ！！」

「抜くから大人しくして！……そいやっ！」

「うおおおぉ抜けたぁ！……抜けたけど血がああああ！？俺のトマトジュースがあああああ！？」

騒然となる店内。

一方、はやてはと言うと、秀人のサバランの残りをちゃっかりと胃に納めて、

「……ご馳走様♪」

とびっきりの笑顔で、そう締めたのだった。

第七十七話（後書き）

次回こそ、話を進展させます。

第七十八話（前書き）

バイク、まだ直ってないのにフルエキ買っちゃった、、、直さねば！

第七十八話

「全く、お前は……！」
秀人は、額を摩りながら、家路を歩く。
「あっはっは……あー、面白かった！」
対してはやては、ケラケラ笑いながら、その隣を歩いていた。

「んで……どこ行くの？」
なのは達の準備が出来次第、遊びに行くという話だった。
「んー……とりあえず、なのはが行きたい所に行こうかなって」

――またか。

はやては内心、辟易としながら、秀人をじっとりと眺める。
「なのは、なのはって……あんた、主体性無さ過ぎじゃね？」
……かくいうはやても、二言目にはリーゼに意見を求めるのだが、棚に上げていた。
「え……そうか？」
驚き、聞き返す。
はぁ～……とため息をつく。
「もし、あんたの愛しのなのはちゃんが、『秀人さんの行きたい所に～……』
とか考えてたらどーするワケ？」
「うっ……」
その可能性も、大いに有り得る。
そして秀人は、ぼそぼそと、バツが悪そうに呟いた。
「……どうやって遊んだら良いのか、分からないんだよ」

「……は？」
今度は、はやてが聞き返す番だった。
「……」
それ以上は語らず、無言になってしまった。

秀人の休日といえば、なのはと本を読んだり、フェイトと仮面ライダーのＤＶＤを見たり、
ヴィータの買い出しを手伝ったり、模擬戦で身体を動かしたり……
良く言えばインドア、悪く言えば出無精な過ごし方しか、していなかった。
「……夏休みだから、どっか遠出すればいいんだろうけど……大人数でしたことって無いし」
なのはを温泉に連れていったことはあったが……
「仕事以外で集団行動したこと無いんだよ、俺……」
「寂しい奴……」
はやてが、哀れむような上から目線で、秀人の心をえぐった。

「うっ……うるさいわ！！」
ムキになって言い返す。
どうにも秀人は、はやてが相手だと子供っぽい部分が垣間見えてしまう。
「お前だって似たようなもん……いや、俺よりひどいわ！
このヒッキー！」

「はぁうっ……！？」
痛いところを突かれた。
はやてははやてで、一日中を家で無目的に過ごし、魔法に覚醒した後は、
ひたすら訓練に明け暮れていた。

更に言えば、極度のコミュニケーション障害。
自宅とコンビニ（たまに図書館）の往復が限度……リーゼを従えてからは、
その外出さえ億劫になっていた、根っからのヒッキーである。
「うぐぐ……」
唇を噛み締め、悔しそうに黙り込むはやてに、秀人が勝ち誇って言った。

「ハッ、幼卒ニートめ！」

幼（稚園）卒。
小卒を下回る、凄まじいレッテルである。
「ンだとゴルァ！　あんただって年齢的に中卒だろ！」
「高卒資格は持っとるわい！」
目を逸らし、付け加えた。
「……通ったことねーけど」
「駄目じゃんかよ！通えよ！」
「いや、それお前が言うなし……」
「わ、私は……！」
そこで、秀人は真顔になった。

「通っておけよ。
『世の中には、通いたくても通えない子供だっている』……みたいな偽善じゃなくてさ。
無駄に思えるような時間も、後になれば、貴重な思い出になるんだから」

……不利な流れになってきた。このままでは、なし崩しに復学させられてしまう。
やだやだやだ学校とか超やだ面倒臭い……と、拒否感全開だった。

「リーゼ、学校なんか通わなくて良いでしょ？」
やはり、リーゼに助けを求めた。
「そんな時間があるなら、剣か、魔法か、格闘の訓練を……」
「私は、秀人に賛成です」
「……え？」
意外にも、リーゼが裏切った。
「主は以前、美香に言っていましたね？
『さっさと治して、学校に行って美穂さんを安心させてやれ』……と」
「言ったケド……」
「言った本人が不登校では、示しがつかないでしょう」
「……そうかも、しれないけど……」
「師として、姉貴分として、もっと自覚を持って……」
リーゼが、説教モードに入った。
「けど……」
「「けど？」」
秀人とリーゼが、ぴったりとハモった。
「……面倒臭い」
……この期に及んで、この有様である。
「「ふうぅ～～～～……」」
二人に、盛大なため息をつかれた。
呆れた目線も、もれなくセットで。
「あぁもう！分かったわよ！」
――げしっ！
「いてっ！何で俺！？」

秀人を蹴飛ばし……腕を組み踏ん反り返った。
「復学でも何でもしてやるわよ！」
……言い切った。

「あ、来た来た。秀人さーん！」
と、ようやく秀人のアパートに到着した。
なのは、フェイト、アルフ、ユーノ。
いつもの面子が、揃っていた。
……ヴィータは、マリエルに呼び出されて不在である。
運が良いのか、悪いのか……

「お待たせ。……んで、どこ行きたい？」
「うん、実は……」
――すぅっ……
見慣れた黒塗りの車が、相変わらず不気味なまでに静かに、アパートの前に横付けした。
「折角だから、アリサとすずかと望にも、声掛けてみたんだ」
「あーよかった」
「え？」
話の流れが読めず、キョトンとする。
「いや、こっちの話」
がちゃっ、とドアを開け、馴染みの四人が降り立った。
「なのは、久しぶりね！」
「秀人さん、こんにちは」
大体いつも一緒の、アリサとすずか。
「いやー、ガイシャって乗り心地良いんだね。驚いちゃった」
なのはにとって……実は、初のクラスメイトの友達、望。

そして……

「こ……こんちわ」

なのはには微妙に気まずい気持ちを抱く……健太だった。

「あ、葉山君も来たんだ」

なのはは知ってか知らずか、普通に挨拶をした。

「うん、部屋でダラダラしてたから引きずってきた」

「……迷惑だったか？」

「んーん、全然」

恐る恐る聞く健太に、軽く笑って否定した。

「……」

フェイトはさりげなく一歩下がり、初対面のアリサ達から距離を置いていて……さらにその影で、コソコソとその場から離れようとするはやての姿があった。

「どこへ行くおつもりですか、主？」

「わっ、バカ、しーっ！」

リーゼに呼び止められ、その口を慌てて閉ざす。

が、バッチリと見つかってしまったらしく……

――がしっ

「今更、帰るなんて言わないよな？」

笑顔の秀人に、捕獲されてしまった

「ナイスだリーゼ」

ぐっ、とサムズアップする秀人。

「は、はなせえぇぇ！！知らない人には、着いて行ったらダメなんだからー！！」

じたばた往生際悪く暴れるが、素の力が秀人に及ぶ筈も無く、そ

の場に縫い止められていた。
「安心しろ。俺の知り合い、つまり『知り合いの知り合い』だからセーフだ」
「思いっきりアウトじゃんかよ！
はなせえぇぇ！私は帰る！帰ってダラダラのんびり時間を潰すんだからあぁぁぁぁ！」

……その自宅が、瓦礫の山になっていることも忘れてしまっているようだ。
「主、正直言って、あなたは社交性に欠けます。いずれ人の上に立つ者として……」
「いやー！！知らない奴とは、関わらないって決めてるんだからあぁぁ！！」
ふぅ……と、本日二度目のため息をつく。

「押し込んでしまいなさい」
「了解」「ノエル」「どうぞこちらへ。ファリン、お相手して差し上げなさい」「はい、おねーさま」

すずかの指示でメイドがドアを開け、秀人がそこに詰め込み、車内にいたもう一人のメイドが、
はやてを引きずり込んだ。

「いやあぁ　　――バタンッ、ガチャッ。

ドアを、しっかりと閉めた。
「……よし、行くわよ」
アリサの指示の元、素早く乗車していった。
「なぁ、望……」
「何、健太？」

「……この人たち、なんか変じゃね？」
「……かも」
どこかおかしい……と、頭を捻る二人の肩を、この中では数少ない常識人であるユーノがポンポン、と叩いた。
「……君達も、いずれ馴れるさ」
フッ……と、半笑いを浮かべる……さらにその肩を、涙目のアルフがそっと支えていた。

秀人、フェイト、リーゼを残し、全員が車内に収まった。
「あ……そうだ」
アリサが窓を開け、ポン、と秀人に何かを手渡した。
「ちょっとばかし、人数オーバーなのよ。乗れるのはあと一人だから秀人、」
「ん？」
「どっちか連れて、バイクで着いてきて」
……渡されたのは、ポータブルナビと、その台座だった。
「……オッケー。そんな気してた」
幸いにも、バイクは手元にある。残る問題は、リーゼとフェイト、どちらが乗るか、なのだが……

「はいはい！ボクがのるよ！」
当然、キラキラと目を輝かせて立候補した。
秀人の運転するバイクに乗れて、緊張からも解放される、一石二鳥のチャンスだった。
一方リーゼは、顎に手を当てて考え込む。
「ふむ、妥当でしょう……ですが主には、他者との交流を持って頂きたいところ。
私が車内にいては、主のためになりません」
「……でも、バイクは二人乗りだぞ。どうするつもりだ？」

「あぁ、心配無用です」

――ざわっ……と、リーゼの身体から、魔力の気配が立ち上る。

「ちょ……！」

……少なくとも、アリサ、すずか、二人のメイド、健太の五人は、魔法には無関係な一般人だ。

もしもバレたら、相当面倒なこと……

具体的には、堅物執務官のお説教タイムが待ち受けていることは、想像に難くない。

「健太、向こうにフォーゼドライバーが！！」

「何ィッ！？」

……単純な健太の注意を望が逸らし、なのはが素早くパワーウインドウを閉じた。

「出してください」

「え、でも、まだ一人……」

「大丈夫だから、早く」

「……わかったわ」

バレる寸前で、車はするすると発進した。

……同時、リーゼは変身を終えていた。

「……あぁ、もしや、彼らは魔法と無関係で？」

「……後になって考えるなよ」

胃が縮み上がるほど焦った秀人。

「失礼、勘違いしていました」

クールに見えて、意外とボケていた。

「わー……キミ、つかいまだったんだ？」

二人が見下ろすそこには……艶やかな毛並みの、黒猫が鎮座して

いた。
「はい。主はやての使い魔で、名をリーゼと言います。お見知り置きを」
「うん、よろしくー！」
……相手が猫だとわかった途端、楽に話しはじめた。
「……お前の人見知りも、なんとかしないとなぁ」
「ん、なんかいった？」
「いや、後で話すよ。メットとキー持ってくる」
秀人は家に入り、自分のと、いつもはなのはが使ってるヘルメット、バイクの鍵。
そして、リュックサックを手に裏手へ回った。
「……」
その合間に、かちかちとメールを打つ。
「……ご検討を願います、っと。これでよし」

「まだー？」
表の方から、フェイトが呼んだ。
「はいはい、今行くよ」
秀人は、携帯電話をポケットに仕舞った。

フェイトのヘルメットを調整してやり、リュックサックを背負わせる。
このリュックサックに、リーゼを入れていくようだ。

「八部屋あるというのに、秀人の部屋以外、表札が出ているのは三部屋だけ、ですね」
リーゼが、アパートを観察しながら言った。
「あぁ、それ一つは大家さん。
家賃収入で遊んで暮らせるはずなのに、何故かこのアパートに住んでるんだよ」

「……残り二つは？」
「職業不明の信吉じいさんと、美人なのに貞子ヘアの朧ねーちゃん」
「他は空き部屋、と？」
「らしいよ？」
「……」
リーゼは、猫の姿のまま考えている。

「ほら、行くぞ」
「あ……」
リーゼをリュックサックに入れ、自身もバイクに跨がる。

――キュルッ……バォッ！！

セル一発だった。
「……何か調子良いな？」
一月放置してた割には、バッテリーもガソリンも満タンだ。
「あれ？距離が伸びてる……」
「あー、それね……」
フェイトが、思い出して教えてくれた。
「アルフがのりまわしてたよ」
「……そうか」
無免許運転……と、突っ込みたい気持ちをぐっと飲み込み、ナビの示す目的地へ、
バイクを発進させた。

第七十八話（後書き）

アクセルワールドをサンライズがアニメ化、、、だと、、、？
リボルテックでシルバー・クロウかクロム・ディザスターを出してくれ。

第七十九話（前書き）

遅れた上に話が進んで無いｏｒｔ

次回で、少しは進展させます。

第七十九話

「……」
恐ろしく静かな高級車の車内、はやては、緊張でガチガチに固まっていた。
「……」
固まるだけならまだしも、やたらと険しい……
眉根を寄せ犬歯を覗かせ、ぎりっと足元を睨みつける表情を見せていた。
「……」
微妙に緊迫する車内。
当の本人は、ただ固まっているだけなのだが。

「ねぇ、はやてちゃん」

いきなり唐突に、すずかがはやての名を呼んだ。
「ぁえっ!?」
教えた覚えも無いのに呼ばれ、動揺して変な声が出てしまった。
「さっき、秀人さんが呼んでたから……間違ってた?」
「……違わない」
ぼそっと、とりあえず返事は返ってくる。
すずかを皮切りに、次々に質問される。
「年は?」
「9歳……」
「学校は?」
「海鳴第一小学校……だったかな」
何せ、一度も登校したことが無い。クラスもどこだったか……

やいのやいの賑やかになっていく車内。

「ねぇ、ユーノくん、アルフ」
「ん、何？」
「何だい？」
「……あいつのこと、どう思う？」
およそ一月、秀人と共にあった少女。
人がいるはずが無い辺境世界に……しかも、ピンポイントで、秀人の近くに。
……偶然にしては、出来過ぎている。
現在進行中の、闇の書事件。
それとの関連はまだ不明だが、とにかく、疑って掛かった方が賢明だ。
「……なんかむかつくし」
……それに、少なからず嫉妬も混じっているらしい。
なのはは聞き役に徹することに……
「なのはちゃんとはやてちゃんって、何となく似てるよね」
完璧なタイミングで、すずかが爆弾を投下した。
「「はァッ！！？」」
当然、それをスルーできる訳は無く、なのはも強制的に会話に参加するハメになった。
「「似てないっ！」」
図らずも、ハモった。
ぎろっ、と、およそ小学三年生がするには険悪すぎる目つきで、二人が睨み合う。

「「真似するなぁっ！」」

……そっくりである。

「ったく、秀人の知り合いってこんなのしかいないわけ！？」

「『こんなの』とは何よ！」

「「むぐぐぐぐ……」」

額を突き合わせ、威嚇し合う。

……確かに、色々と似通った部分もあるかもしれない。

「……あれ……？」

と、何かを思い出したように、

「……お前、どっかで会ったこと無かったっけ？」

ぽろっ、と、はやてを見て、そんなことを口走った。

「「え？」」

車内の視線が、健太に集中する。

「会ったって……いつ？」

怪訝な顔で聞く望。

「三ヶ月くらい前……んー……いや、やっぱ人違い、かな？

もっと髪長かったし……車椅子、乗ってたし」

……確かに、会っている。

ジュエルシード事件の終わり、海鳴公園で。

はやてからすれば、すれ違う程度。

だが健太からすれば、訳もわからず罵声を浴びせられたという理不尽かつ強烈な経験だった。

「葉山君……よく覚えてたね」

本気で感心して、健太を褒める。

「え？そうかな……へへ」

……裏返せば、『葉山君は物覚えが悪い』ということの裏返しなのだが。

「……知るか」
ぷいっ、と窓の外を見る。
「愛想の無い奴ねー……」
アリサが、やれやれと首を振った。
気にせず、健太ははやてに話し掛けていく。
「じゃあ、足治ったのか。よかったじゃん」
「……」
「俺も前、足首ポキッと逝っちゃってさー……」
「……」
「歩き回れないと退屈なんだよなー」
はやては、視線も寄越さず黙り込んでいるのだが、健太は気にせず話しつづける。
「ゲームしかすること無くてさぁ。
どうせなら、腕が折れれば良かったのに。そしたら、サッカーだけは出来たじゃん……って、駄目だ、今度はゲームが出来なくなる！」

「宿題やれっ！」

スパーン！と、望が平手で健太にツッコミを入れた。
「……ぷっ」
それまで仏頂面だったはやてが……笑った。
「くっくくく……！お前ら……あ、アホだわ……くくくっ！
くすくすと、堪えきれず笑いを漏らす。
「あ、やっと笑った」
すずかに指摘され、ハッと真顔に戻った。
「……」
恥じらい、またしてもそっぽを向こうとする。
「……ていや」
なのはが、その両頬を挟み込み阻止。

……凄まじくマヌケな顔になった。

「「「「「「ぶはっ！」」」」」」

車内全員が一斉に吹き出し、大爆笑する。

「て、てめぇ……！」

恥をかかされ、怒りとも羞恥とも分からない赤面でなのはを睨みつける。

「くくく……」

にやにやと不敵に笑い、それを受け流すなのは。

「あはははは！はやて、変な顔ー！」

「可愛い顔が台無し！」

人目がある手前、物理的に反撃することも出来ない。

「うぐぐ……！覚えてろテメェ……！」

憎々しく睨みつけるが、なのははどこ吹く風。

「はやて、」

抵抗感が取り払われたらしく、一気に輪の中に取り込まれて行った。

「……」

あまり話さず、シートに身を預けるなのはに、ユーノが話しかける。

「なのは」

「なに？」

「あれ、狙った？」

あれ……とは、はやてのことか。

さっきまでの仏頂面は鳴りを潜め、ちゃんと返事をし、時に笑い、怒り、突っ込み……

まるで、年相応の少女のようだ。

きっかけは、望と健太かもしれない。だが、それを上手く持って行ったのは、なのはだ。

「……秀人さんも、そうして欲しいって思ってるだろうから」

秀人達が、わざわざこっちの車に押し込んだ意図は、ちゃんと理解しているらしい。

「……そっか」

「え!?じゃあじゃあ、一ヶ月くらい、秀人と二人っきりで!?」

「……まぁね。組み手したり、筋トレしたり……」

「食事はどうしてた?」

「……適当に調達して、交代交代で用意」

「寝るときは?」

「……同じ部屋」

「「「きゃー!!」」」

黄色い歓声。

ユーノとアルフは、戦々恐々だった。

「な……なのは、あくまで、非常事態だから……」

「そ、そうだよ……別に、後ろめたいことはしてないんだしさ……」

ぴきぴきと、なのはの額に青筋が浮いた。

「……やめとけばよかったかな」

今度は、なのはがブスッと黙り込んでしまった。

第八十話（前書き）

富士山五合目行ってきました！
１２５ｃｃだからスバルラインが２００円！いえー！

でも帰り道の道志峠でコーナーに刺さりかけた、、、何であんなに街灯が少ないの、、、

第八十話

「それで、向かっている目的地なんだけど……」

和やかな空気を見計らって、すずかが切り出した。

「うちのグループの、テストコースなの」

「「テストコース？」」

そんなところに、小学生が何をしに行くというのだろうか。

怪訝な顔をする面々に、意味深に笑いかけた。

「夏休みなんだし、思いっきり運動しようね」

「……？？」

……謎のまま、車は現地へと向かって行った。

「お待たせ」

移動すること、およそ一時間。

高級車と、秀人のバイクは、『私有地』と書かれた看板がそそり立つ前で止まった。

「ふー、着いた着いた。……ほらフェイト、顔上げて」

「んー……」

バイクを降りた秀人が、フェイトのヘルメットの顎紐を解いてやった。

「……っぷは。　あー、たのしかった！」

にぱっ、と明け透けに笑う。

「でもなんか、あたまがきつかったよ」

わしゃわしゃ、と自分の髪の毛を掻き回す。
「……なのはの分と合わせて、新調するかなぁ」
……ちなみに、ジュニア用ヘルメットはそれなりに高価だったりする。

「リーゼ、」
そそくさと集団から逃げてきたはやてが、秀人の目の前にやってきた。
「……リーゼは？」
『ここです。主』
フェイトのリュックから顔を出す。
オープンチャンネルの……魔力がある者になら聞こえる設定で、はやてを呼んだ。
『大丈夫だった？　酔ってない？』
『問題ありません』
アリサ、すずか、望、健太……魔力の素養が無い筈の四人には、聞こえない筈。
だというのに。

「……おい今、その猫……喋らなかったか？」
「う、うん……喋った、よね？」

健太と望には、しっかりと聞こえていた。
「……」「……」
半笑いで、顔を見合わせる秀人となのは。
「……何が？」
「何も聞こえなかったけど……」
アリサとすずかには、聞こえていない。
なら、考えるまでも無く、理由はただ一つ。

「……」
無言で、健太の傍まで歩いていく秀人。
「な……何ですか？」
「いや……幻聴が聴こえる程、疲れてるのかなー、って」
少しビビる健太の背後に立ち、両肩を揉むフリをして、魔力の気配を探る。
「ちょ……なのは？」
「ごめん、大事なことだから」
なのはも、望の背中に触れて……

すると、案の定。
「……マジであるよ」
「……こっちも」
最低でもＢ＋ランク。
望に至っては、Ａに届こうかというレベルの、高い魔力を秘めていた。
……考えてみれば、ジュエルシード暴走体の中で、最も手強かったのは、シリアル１０……望だった。
あれは、ジュエルシードの力に、望の魔力が上乗せされた影響もあったのだろう。

望は魔法の存在を知ってはいるが……なのはは可能な限り、非日常とは関わらせないと決めていた。
幸にも、二人のリンカーコアはまだ殆ど眠ったままだ。
……これが目覚めれば、流石に放置、とは行かないだろうが。

「さ、行きましょう」
「あぁ、わかった」
すずかに続き、うやむやの内に、話を終わらせた。

案内されたのは、想像を超えるスケールの『テストコース』、だった。

「……」

とにかく、広い。

しかも、広いだけではない。

整然と舗装されたサーキットコース。

ホームストレート、ヘアピンカーブ、シケインと……今すぐＧＰが開催出来そうなくらい、豪華な設備が整っていた。

その向こうには、サーキットコースとは真逆の、土の地面が剥き出しのダート。

更に急斜面のヒルクライム・ダウンヒルコース。

オフロード走行……というよりは、重機の試験も行っているのだろう。

オマケとばかりに、船舶のスケールモデルを航行させるであろう、市民プールの何倍でもありそうな人口湖など……

「す、」

一番最初に我に返ったのは、秀人だった。

「すっげぇ！！」

目を輝かせ、きょろきょろと見回している。

「走っていいの？」

「えぇ、どうぞ」

喜ぶ秀人だったが……はた、と気付いた。

「俺以外は……？」

いくらなんでも、秀人だけが楽しいのでは不公平だ。

「ご心配なさらず」

裏手から、メイドの一人が運転するトラックがやってきた。

荷台には、ジュニアサイズのマウンテンバイク等が満載されている。
「おぉ……」
「プロテクターもヘルメットもありますから、ちゃんと全員で楽しめますよ」
確かに、自転車ならそれなりに安心だ。だが……
「「……じてんしゃ」」
引き攣った表情で後ずさる、なのは（基本インドア嗜好）と、はやて（真正ヒッキー）がいた。
「うわー、サス付きＭＴＢなんて初めてだよ俺！」
「砂利道……走れるの？」
「ふふん、私は走れるわよ？」
「……や、やれるもん！」
「頑張ろうね」
……子供チームは、浮かれ気分ではしゃいでいた。
「……ボクはどうしようか？」
「え？フェイト、自転車は嫌かい？」
「うーん……いやじゃないんだけど、」
ごにょごにょ、と口ごもり、意を決したように、すずかに話し掛けた。
「あの、ボク……キミに、あやまらないといけないことがあるんだ」
ジュエルシード事件の最中、フェイトは、暴走体となったすずかの飼い猫を、手酷く痛め付けた。
まずは、、ケジメを付けてから。
そういうことらしい。

「……うん、わかった。こっち来て」
フェイトの手を引き、レストルームに向かっていく。
「フェイト、あたしも一緒に……」「アルフはこっち」「あああああ……」
過保護な使い魔を、ユーノが引きずっていく。
「ひどいよユーノ……フェイトが心配じゃないの？」
「フェイトが自分でやるって言ったんだから、任せよう」
「むうぅ……」
不満そうだった。

「なのは……、はやても、どうしたの？」
「……いや、」
「……なんでも、」

「あ、もしかして……あー……」
望が言い当てようとして、気を使って言うのをやめた。が……

「え？二人とも乗れないのか？」

……無神経な健太が、ズバッと言い当ててしまった。

「健太！」

――ごすっ！！

「ぎゃあっ！」
望の鉄拳制裁が、健太の頭を捉えた。
「この馬鹿！あんた、デリカシーってもんが無いの！？」
「知らねぇよ！何だよデリバリーって！？」

ぎゃあぎゃあと夫婦漫才を始める二人はさておき……
「え……二人とも？」
「……」
「……」
無言の肯定。
「……しゃーないか。えーと……」
多数の自転車を物色し……
「あったあった。んじゃ……」
２０インチの小径ホイールを履いた、他より一回り小さな自転車……ＢＭＸバイクを三台、取り出した。
「練習するか！」

……レストルーム内。
ソファに向かい合うように座った二人。
「それで……話って？」
「あの、ね……？　キミ、ねこ、かってるでしょ？」
「うん、それなりに」
微笑を崩さず、続きを促す。
「はいいろのこねこ……いるでしょ」
「うん、いるよ」
ふー、と、フェイトが一息つき……
「……おおけが、したよね」
切り出した。
「それやったの……ボク、なんだ」
「……」
ぎゅっと、両手を膝の上で固く握り……それでも、一番苦手であ

るはずの視線だけは真っ直ぐに、
すずかを見つめて。

「ごめんなさい……！」

深々と、頭を下げた。

「……」

家庭環境のせいにも出来た。母のせいにすることもできた。
けれども、やったことは事実で、それは間違いなく、フェイトの意思で行った行為だ。

「……」

頭を下げたまま、じっと返事を待つ。

「……」

かたん、と、すずかが立ち上がり、ソファの脚が鳴る音が、やけに大きく響いた。

そのまま、足音と共に、レストルームから出て行ってしまった。

「あぅ……だめだったよ……バルディッシュ……」

がっくりとしょげる。

『……もう一度です』

「……え？」

『許しを得られるまで……謝罪を続けましょう』

「……うん、わかった！」

すずかの後を追い、ドアノブに手を掛け……

――どばんっ！

「ぶへぇっ！！」

いきなり開いたドアに、顔面を強打された。
「え？……え！？」
開いたドアの向こうに、出て行った筈のすずかが唖然と立っていた。
「ご、ごめんなさい！大丈夫！？」
うずくまるフェイトを助け起こす。

「いだい……ちょーいだいぃ……！」
涙目で顔を上げた。
「ひぃっ！」
おののくのも仕方ない。
「……？」
何やら鉄錆臭い液体……鼻血が、鼻から伝っていた。
「きゃー！ティッシュティッシュ！」
まとめたティッシュを、フェイトの顔面に押し付けるように止血。
「むがー！！」
「暴れないで！」
フェイトを押さえ込み、ティッシュを押し付け続けた。

「ふぅ、ふぅ……」
「はぁ、はぁ……」
止血するだけだというのに、なぜこうも消耗しなければならないのだろうか。
「……うぁー」
フェイトの鼻には……美少女にはあるまじきことに、丸めたティッシュが詰め込まれていた。
「……」
「……」
何とも言えない空気が流れ……
「ニャー」

すずかの持ち込んできたケージから、そんな鳴き声が聞こえてきた。
「……おいで、マルス」
手招きされ、一匹の猫がケージから出てきた。
その猫は、見覚えのある灰色で……
「あ……」
びくりと怖じけづく。
「……この子だよ」

「……」
そっと猫を持ち上げ、フェイトの方を向かせた。
「……ニャー」
てこてこ……と、フェイトの足元まで歩いてきた。
「……」
ゆっくりと、鼻先に手を伸ばす。
……敵と見なされれば、噛まれるか、引っ掻かれるか。

――ぺろっ

「あ、」
が、猫は、フェイトの指先を舐め、じゃれついてきた。
「……ふふ、『許す』って言ってるよ」
「……いいの？こんなんで」
「いいの。マルスがいいって言ってるんだから」
……釈然としないが、飼い主が言うのだから、許されたということでいいのだろう。
「……ごめんね、まるす。それに、キミも……」

「す・ず・か」

「え？」
「私の名前。『キミ』、じゃなくて、すずか、って呼んでほしいな」
「……なして？」
首を傾げるフェイトに、すずかはにっこりと笑う。
「それはね……」

「おーい、すずか、まだー？」
痺れを切らしたアリサが、様子を見に来た。
「彼女は、アリサって言うの」
「……あ、あの……ありさ？」
呼ばれて振り返り……
「あン？何……って、ぶはーっ！！」
思いっきり、吹き出した。
「……（がーん）」
コミュニケーションの出鼻をくじかれた。
「フェイト、あんた……なにその鼻！
あっはははは！！」
いきなり笑われ、ぷるぷると震える。

「……わらうなー！！」

「ごめ、むり……あはははっ……！」
「くすくすく……か、可愛いよ……？」
フォローにもならないフォローを入れるすずかだったが、無責任にこちらも、
目尻に涙を浮かべて笑っていた。
「うぅうう～……！」
取りたいが、取ったらまた鼻血が流れ出てしまう。
歯噛みし、地団駄を踏み……吠えた。

「ありさ、すずか！　わらうなっていってるだろー！」

ごく自然に名前を呼べたのだが……そのことに本人が気付くのは、しばらく後になってからだった。

第八十話（後書き）

そしてバイク壊れた！
ガソリン漏れｏｒｔ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8371o/

魔法少女リリカルなのは ties

2011年11月6日00時21分発行